



寄贈

鳥取県米子市

一般国道9号改築予定地内遺跡調査報告書

東宗像遺跡



1985

財団法人 鳥取県教育文化財団
建設省倉吉工事事務所

序 文

この調査は、一般国道9号の改築（米子バイパス）に伴い、米子市東宗像古墳群の一部について発掘調査が必要となり、建設省の委託を受けて昭和58年4月から同59年6月にかけて実施したものである。

調査の結果、古墳10基をはじめ、横穴大・小合わせて19基、弥生中期から古墳期にかけての住居跡など多数の遺構が検出されたが、山の斜面部に構築された住居跡は特色あるものといえよう。

調査地域はごく限られた範囲であったが、予期以上の調査結果であり、今後この地方の歴史の解明や埋蔵文化財に対する理解を深めるのに役立てていただければ幸いである。

改築工事との関係から、例年なく寒さの厳しかった冬期間も調査を続け、調査にあたられた皆さんには大変御苦労をおかけしましたが、お蔭をもって予定どおり終了することができたことを感謝するとともに、御指導、御協力をいただいた関係各位に対し厚くお礼申し上げる次第である。

昭和60年3月

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 西尾邑治



序

一般国道9号は、京都市を起点とし、山陰の主要な都市を経て、下関市に至る西日本の重要な幹線道路で、建設省が管理しています。鳥取県内では、2市、12町、3箇村を通じる県内の大動脈として、大きな役割を果しています。

建設省倉吉工事事務所は、鳥取県内的一般国道9号のうち、東伯郡泊村から米子市（鳥取・島根県境）までを管理しており、各種の道路整備事業を実施しています。その一つに、米子市内の交通処理対策を主目的とした改築事業として、米子バイパスの建設工事があります。

米子バイパスは、西伯郡淀江町今津の一般国道9号から分岐し、米子市街地の南部を西進し、同市陰田地内的一般国道9号に接続する延長14.8km、幅員25mの道路を建設しようとするもので将来は島根県側の安来バイパス、松江東バイパスに接続する大規模なバイパス計画の一部でもあります。

この米子バイパスの事業は、昭和47年度から着手し、現在までに米子市浦津から同市陰田までの延長5.8kmの用地買収をほぼ完了しており、引き続き他の区間の用地買収を進めています。

近年の交通量の増大に伴い、米子市街地の現一般国道9号の交通混雑は著しいものがあり、米子バイパスの早期完成は、多方面から強く望まれています。当所としては、これらの要請に応えるため、当面、米子市宗像の一般国道181号から同市陰田地内までの延長3.3kmを、暫定2車線で昭和60年度に供用開始すべく、昭和54年度から改築工事に着手しています。

米子市宗像地区内に存する「東宗像遺跡」は、この米子バイパスが、止むを得ず通過することになった局所の埋蔵文化財包蔵地です。「東宗像遺跡」の取扱いについては、鳥取県教育委員会及び米子市教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づき、文化庁長官へ通知した結果、事前に発掘調査を行うことになりました。

発掘調査は、鳥取県教育委員会の指導のもとに鳥取県教育文化財団に委託して施行することになり、昭和58年度から昭和59年度までの2年間にわたる調査が実施されました。

本書は、この発掘調査の結果に学術的な考察を加え、「記録」として保存するためにまとめていただいたものです。この貴重な「記録」が文化財に対する認識と理解のため、及び教育並びに学術のために広く活用されることを期待するとともに、建設省の道路事業が、文化財の保護に深い関心をもっていることを御理解願いたいと考えます。

おわりに、事前の協議及び調査、報告書の編集にあたり、御協力いただきました鳥取県教育委員会及び、直接調査を実施していただきました鳥取県教育文化財団の関係各位の御尽力に対し、深甚の謝意を表します。

昭和60年3月

建設省中国地方建設局

倉吉工事事務所長

飯田 宏典

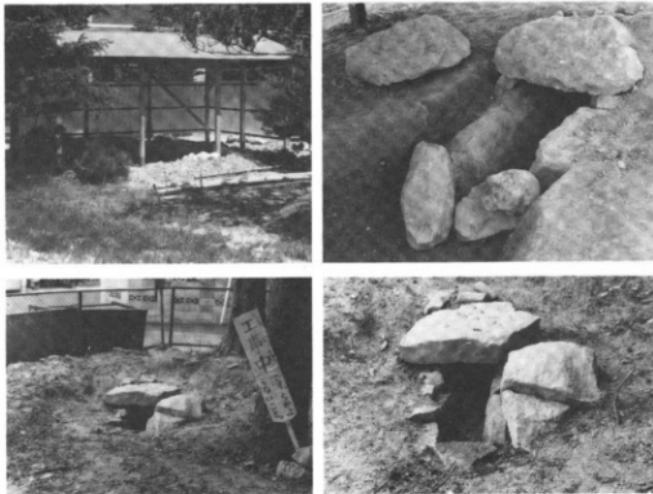
例　　言

1. 本報告書は、建設省中国地方建設局の委託を受けて、鳥取県教育文化財団が行なった、「一般国道9号米子バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」の東宗像地区の発掘調査記録である。東宗像遺跡は、鳥取県米子市長砂町1091～1094、1091～1番地、同宗像字安越谷177番地に所在する。
2. 本報告書で示す標高は、建設省国土地理院一等水準点(№2251、9.8177m)を起点とした標高値で、方位は磁北を示す。
3. 井上貴央氏(鳥取大学医学部講師)から多忙のところ原稿をいただいた。謝意を表したい。
4. 発掘調査ならびに本報告書作成にあたっては、つぎの方々に多くの御教示を得た。
安藤信策、池田栄史、小田富士雄、蒲原宏行、小原貴樹、佐古和枝、佐々木謙、杉谷愛章、田中義昭、寺西建一、永見英、原俊一、町田章、水野正好、柳沢一男、山陰考古学研究所、米子文化財保護の会、
5. 本報告書編集は、園、中原、山折の3名による討議に基づいて行なった。
6. 本報告本文については、目次に氏名を記して、その責任の所在を明らかにした。
挿図、付図のうち、遺構実測は調査員、補助員が分担し、製図は主として左藤博が行なった。
遺物の実測、製図は、鳥取県埋蔵文化財センターの協力を得て調査員、補助員が行なった。
使用した遺構写真は発掘担当調査員が、遺物写真のほとんどは園が撮影したが、遺物写真撮影において、和田強氏・米子市教育委員会・鳥取県埋蔵文化財センターの協力を得た。
7. 本報告書中の地図は、米子境港都市計画図及び、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図“米子”を複製し使用したものである。(承認番号)昭59中復、第366号
8. 本報告書にかかる遺物、スライド等の資料は、現在鳥取県埋蔵文化財センター(鳥取県岩美郡国府町)に保管し、将来的に米子市教育委員会に移管する予定である。
9. 本遺跡5号墳石棺及び23号墳石棺の移築保存の際、鳥取県立米子高等学校・小谷悦夫教諭、米子市立義方小学校・権代雅志教諭の御尽力を得た。また、笹尾千恵子氏、太田正康氏、速水信也氏、内藤克成氏に調査協力を得た。

本報告書は、調査員の力量不足はもとより、15ヶ月の現場作業終了後、4ヶ月という短期間でのまとめということで、発掘調査で明らかになった事実の記載に重点をおいた編集となった。小結、まとめ等で過誤も多くあるかと思われるが、これは全て担当調査員にその責がある。

凡　　例

1. 本報告書中における当遺跡の遺構番号は、現地作業に際して用いたものを改訂して収録した。このため、本報告書以前に調査内容等を紹介した現地説明会資料等の呼称と多数異なる箇所がある。それらの全ては本報告書を正式報告書として訂正していただきたい。
2. 本報告書における遺物の記述は、各章あるいは各遺構の末尾に観察表を用いた。
3. 本報告書における遺物の実測図は、下記のとおりの縮尺で掲載したが、一部これと異なるものがある。
縄文・弥生・土師・須恵器… $\frac{1}{10}$ 、埴輪… $\frac{1}{10}$ 、石器… $\frac{1}{10}$ 及び $\frac{1}{10}$ 、鉄器… $\frac{1}{10}$ 及び $\frac{1}{10}$
4. 本報告書の土器実測図においてその断面は、須恵器は黒塗り、その他は白抜きとした。
5. 本報告書中の略記号は、Po：土器、F：鉄製品、C：銅製品、J：玉、S：石及び石製品、P：ピットで示した。なおピットの計数は、P（長径×短径×深さ）で示した。単位はcmである。
6. 観察表の法量記載は、次のとおりである。①口径、②器高、③底径、④最大径、⑤凸帶高。なお須恵器蓋坏の記載時は①受部径一口径、②器高一受部高、とした。単位はcmで示した。
7. 遺物実測図において破片断面と拓影の場合、断面図の左側に拓影をおき「—」の左側に外面、右側に内面を配した。拓影が片側の場合、「—」の位置で内・外面を指示した。



挿図1 移築された石棺（上：米子高校、下：義方小学校）

東宗像遺跡目次

序

例 言

凡 例

第1章 調査の経緯	(圖)
第1節 調査に至るまで 1
第2節 調査の経過 2
第3節 調査の体制 5
第2章 東宗像遺跡の環境	(中原)
第1節 地理的環境 6
第2節 歴史的環境 7
第3章 集落跡の調査	(山折)
第1節 調査の概要 11
第2節 壓穴住居跡 12
第3節 段状遺構 37
第4節 掘立柱建物跡 62
第5節 土壇 68
第6節 溝状遺構、道路状遺構 81
第7節 その他の遺構 88
第8節 小結 93
第4章 古墳の調査	(中原)
第1節 調査の概要 104
第2節 古墳 105
1. 1号墳 105
2. 2号墳 106
3. 3号墳 112
4. 4号墳 115
5. 5号墳 117
6. 6号墳 128
7. 7号墳 134
8. 8号墳 138
9. 9号墳 139
10. 23号墳 140
11. 24号墳 141
12. 25号墳 142

13. 26号墳	144	
第3節 古墳以外の埋葬施設	145	
第4節 小結	158	
第5章 横穴の調査		(図)	
第1節 調査の概要	168	
第2節 東斜面の横穴群	169	
第3節 西斜面南側の横穴群	181	
第4節 西斜面1号道路状遺構に伴う横穴群	213	
第5節 小結	223	
第6章 水田部の試掘調査		(図)	
	228	
第7章 遺構出土の遺物		(図・中原)	
第1節 土器	230	
第2節 石器・金属器	234	
第8章 まとめ		239
第9章 特論		241
東宗像遺跡出土の人骨（井上貴央）			

図 版 目 次

- 図版 1 遺跡全景(1)航空写真
図版 2 遺跡全景(2)・(3)・(4)
図版 3 調査前風景、作業風景、西斜面集落跡
図版 4 第1号竪穴住居跡（完掘状況・磨製石剣出土状況・遺物出土状況）
図版 5 第2号竪穴住居跡（完掘状況）、第3号竪穴住居跡（完掘状況）、第4号竪穴住居跡（完掘状況）
図版 6 第5号竪穴住居跡及び第2号溝状遺構（完掘状況）、第6号竪穴住居跡（完掘状況・遺物出土状況）
図版 7 第7号竪穴住居跡（完掘状況）、第8・第9号竪穴住居跡（完掘状況）、第9号竪穴住居跡（完掘状況）
図版 8 第10号竪穴住居跡（完掘状況）、第11号竪穴住居跡（完掘状況）、第12号竪穴住居跡（完掘状況）
図版 9 第1号段状遺構（完掘状況）、第2号段状遺構（完掘状況・遺物出土状況）
図版10 第3号段状遺構（北側・南側・土層断面）、分胴形土製品出土状況
図版11 第4号段状遺構（完掘状況）、第4・第5・第6号段状遺構（完掘状況）、第6号段状遺構遺物出土状況
図版12 第7号段状遺構（完掘状況）、第8号段状遺構（完掘状況・遺物出土状況）
図版13 第9号段状遺構（完掘状況）、第10号段状遺構（完掘状況）、第11・第12・第13号段状遺構（完掘状況）
図版14 第14号段状遺構（完掘状況）、第15号段状遺構（完掘状況）、第17号段状遺構（完掘状況）
図版15 第1号掘立柱建物跡（完掘状況）、第2号掘立柱建物跡（完掘状況・遺物出土状況）
図版16 第3号掘立柱建物跡（完掘状況）、第4号掘立柱建物跡（完掘状況）、第5号掘立柱建物跡（完掘状況）
図版17 第1号土壤、第2号土壤、第3号土壤、第4号土壤、第5号土壤、第6号土壤（完掘状況）
図版18 第7号土壤、第8号土壤、第9号土壤、第10号土壤、第11号土壤、第12号土壤（完掘状況）
図版19 第13号土壤（完掘状況）、第14号土壤（完掘状況・遺物出土状況）
図版20 第15号土壤、第16号土壤、第17号土壤、第18号土壤、第19・第20号土壤（完掘状況）
図版21 第2号溝状遺構（遺物出土状況）、第3号溝状遺構（完掘状況）、第4号溝状遺構（完掘状況）
図版22 第2号道路状遺構（完掘状況・階段）、第1号道路状遺構（階段）、第3号道路状遺構（集石部）
図版23 土壘状遺構（検出状況・土層断面）、ピット群②
図版24 第1号竪穴住居跡出土遺物
図版25 第3号、第4号、第5号、第6号竪穴住居跡出土遺物
図版26 第7号、第8号、第9号竪穴住居跡出土遺物
図版27 第10号、第12号竪穴住居跡、第1号、第2号、第3号段状遺構出土遺物
図版28 第4号、第5号、第6号段状遺構出土遺物
図版29 第7号、第8号、第9号、第10号、第14号段状遺構出土遺物
図版30 第14号、第17号段状遺構、第2号掘立柱建物跡、第13号土壤出土遺物
図版31 第14号土壤、第1号、第2号溝状遺構出土遺物
図版32 第2号溝状遺構、土壘状遺構出土遺物
図版33 東宗像1号・8号墳（埴丘・主体部石材露出状況）
図版34 米子平野遼望、東宗像9号墳（埴丘・主体部石室露出状況）
図版35 東宗像2号墳（前方部調査区・埴丘・前方部埋葬施設他）
図版36 東宗像2号墳（前方部第1埋葬・第2埋葬・土層断面）
図版37 東宗像3号墳（埴丘・周溝遺物出土状況）
図版38 東宗像3号墳（主体部）

- 図版39 東宗像4号墳（埴丘・主体部）
- 図版40 東宗像5号墳（埴丘・周溝遺物出土状況・主体部）
- 図版41 東宗像5号墳（埴丘土層断面（追葬状況）・主体部前庭土層断面・周溝遺物出土状況）
- 図版42 東宗像5号墳（主体部石棺検出状況・蓋石除去状況・石材除去掘り方）
- 図版43 東宗像5号墳（主体部閉塞状況）
- 図版44 東宗像5号墳（主体部閉塞状況・蓋石除去）
- 図版45 東宗像5号墳（主体部閉塞部鉄器出土状況・石棺内遺物出土状況）
- 図版46 東宗像6号墳（埴丘・主体部掘り方検出状況・主体部完掘）
- 図版47 東宗像6号墳（主体部天井石除去作業・天井石検出状況・埴丘遺物出土状況）
- 図版48 東宗像6号墳（石室検出状況）
- 図版49 東宗像6号墳（石室横口部・奥壁）
- 図版50 東宗像6号墳（横口部閉塞状況・土層断面）
- 図版51 東宗像6号墳（石室側壁）
- 図版52 東宗像7号墳（埴丘・主体部・墓道）
- 図版53 東宗像7号墳（主体部）
- 図版54 東宗像7号墳（側壁・横口部・奥壁）
- 図版55 東宗像23号墳（埴丘・主体部・周溝内遺物出土状況）
- 図版56 東宗像23号墳（主体部）
- 図版57 東宗像24号墳（埴丘・主体部）
- 図版58 東宗像24号墳（主体部）
- 図版59 東宗像25号墳（埴丘・主体部）
- 図版60 東宗像26号墳（埴丘・主体部）
- 図版61 第1号石蓋土壤墓
- 図版62 第2号石蓋土壤墓
- 図版63 第3号石蓋土壤墓、第1号木棺墓（遺物出土状況）
- 図版64 第2号木棺墓（側溝・遺物出土状況）
- 図版65 第3号木棺墓、第1号箱式石棺墓
- 図版66 第1号土器棺墓、第1号土壤墓
- 図版67 東宗像2号墳出土遺物・須恵器・埴輪・鉄器
- 図版68 東宗像3号墳出土遺物・須恵器・埴輪
- 図版69 東宗像4号墳出土遺物・須恵器・東宗像5号墳出土遺物（1）、須恵器
- 図版70 東宗像5号墳出土遺物（2）、鉄器・砥石・須恵器
- 図版71 東宗像5号墳出土遺物（3）、円筒埴輪1
- 図版72 東宗像5号墳出土遺物（4）、円筒埴輪2
- 図版73 東宗像5号墳出土遺物（5）、円筒埴輪・調整・ヘラ記号
- 図版74 東宗像6号墳・7号墳・23号墳出土遺物・須恵器・土師器・埴輪・鉄器
- 図版75 第1号石蓋土壤墓出土遺物・弥生土器・第1号木棺墓出土遺物（1）、須恵器・土師器・鉄器
- 図版76 第1号木棺墓出土遺物（2）、須恵器・土師器
- 図版77 第2号・第3号木棺墓・第1号土壤墓・第1号土器棺墓・第3号道路状遺構集石部出土遺物
- 図版78 東1号横穴（完掘状況・前庭遺物出土状況・羨門）
- 図版79 東1号横穴（玄室天井・玄室内遺物出土状況）
- 図版80 東斜面の横穴群・東2号横穴（完掘状況・前庭遺物出土状況）

- 図版81 東3号横穴（完掘状況・玄室内遺物出土状況）、東4号横穴（完掘状況）
- 図版82 東5号横穴（完掘状況）・調査風景
- 図版83 西斜面の横穴群、西1号横穴（前庭遺物出土状況・土層断面）
- 図版84 西1号横穴（完掘状況・羨門下割石・羨道）
- 図版85 西1号横穴（玄室内須恵器床検出状況・遺物出土状況）
- 図版86 西2号横穴（羨門及び西3号横穴・前庭土層断面）、西3号横穴（完掘状況）
- 図版87 西2号横穴（前庭遺物出土状況・羨道遺物出土状況）
- 図版88 西2号横穴（玄室内遺物出土状況）
- 図版89 西2号横穴（玄室天井・玄室内遺物出土状況・有縁屍床検出状況）
- 図版90 西4号横穴（完掘状況・羨道及び前庭排水溝・前庭土層断面）
- 図版91 西4号横穴（玄室内遺物出土状況）
- 図版92 西5号横穴（羨門及び玄室・前庭遺物出土状況）
- 図版93 西5号横穴（玄室内遺物出土状況）
- 図版94 西5号・6号横穴（検出状況）、西6号横穴（完掘状況）、西5号横穴（土層断面）
- 図版95 西7号・8号・9号横穴（検出状況・完掘状況）、西7号横穴（羨門）
- 図版96 西7号横穴（玄室・遺物出土状況）、西8号・9号横穴（完掘状況）
- 図版97 西10号横穴（蓋石検出状況・完掘状況・玄室内遺物出土状況）
- 図版98 西11号・12号横穴（完掘状況）、西11号横穴（玄室内遺物出土状況）、西12号横穴（玄室内遺物出土状況）
- 図版99 西13号・14号横穴（蓋石検出状況）、西13号横穴（蓋石検出状況・完掘状況）
- 図版100 西14号横穴（蓋石検出状況・完掘状況・玄室内遺物出土状況）
- 図版101 東1号・2号・3号横穴出土遺物・須恵器・鉄器
- 図版102 西1号横穴玄室内出土遺物・須恵器・鉄器
- 図版103 西2号横穴玄室内出土遺物・須恵器・石・鉄器・小玉
- 図版104 西2号横穴羨道・前庭出土遺物・須恵器・瓦石
- 図版105 西4号横穴出土遺物・須恵器・耳環・鉄器・玉類
- 図版106 西5号横穴玄室内出土遺物・須恵器・耳環・小玉・鉄器
- 図版107 西5号横穴前庭出土遺物・須恵器・西6号横穴出土遺物・土師器
- 図版108 西7号・8号・10号横穴出土遺物・須恵器・土師器
- 図版109 西11号・12号・14号横穴出土遺物・須恵器・水田部出土遺物・繩文・弥生土器
- 図版110 水田部（発掘状況・土層断面遺物出土状況）
- 図版111 遺構外出土遺物、土器
- 図版112 遺構外出土遺物、石器・金属器

付 図 目 次

- 付図 1 東宗像遺跡遺構配置図
- 付図 2 東宗像古墳群地形測量図
- 付図 3 東宗像2号墳墳丘実測図

挿 図 目 次

挿図 1	移築された石棺（上：米子高校、下：義方小学校）	
挿図 2	試掘トレンチ位置図	1
挿図 3	調査坑設定図	2
挿図 4	東宗像遺跡調査区域図	4
挿図 5	東宗像遺跡の位置	6
挿図 6	周辺遺跡分布図	8
挿図 7	集落跡関係遺構配置図	11
挿図 8	第1号竪穴住居跡ピット深度図	12
挿図 9	第1号竪穴住居跡実測図	13
挿図10	第1号竪穴住居跡出土石製品実測図	14
挿図11	第1号竪穴住居跡出土サヌカイト製扁平片刃石斧他実測図	14
挿図12	第1号竪穴住居跡出土土器実測図	15
挿図13	第1号竪穴住居跡出土磨製石剣実測図	16
挿図14	第1号竪穴住居跡出土丸石実測図①	17
挿図15	第1号竪穴住居跡出土丸石実測図②	18
挿図16	第2号竪穴住居跡ピット深度図	19
挿図17	第2号竪穴住居跡実測図	19
挿図18	第3号竪穴住居跡ピット深度図	20
挿図19	第3号竪穴住居跡出土石実測図	20
挿図20	第3号竪穴住居跡出土土器実測図	20
挿図21	第3号竪穴住居跡実測図	21
挿図22	第4号竪穴住居跡ピット深度図	22
挿図23	第4号竪穴住居跡実測図	22
挿図24	第4号竪穴住居跡出土土器実測図	23
挿図25	第4号竪穴住居跡出土磨石実測図	23
挿図26	第5号竪穴住居跡ピット深度図	23
挿図27	第5号竪穴住居跡出土砥石実測図	23
挿図28	第5号竪穴住居跡及び第2号溝状遺構実測図	24
挿図29	第6号竪穴住居跡ピット深度図	24
挿図30	第6号竪穴住居跡実測図	25
挿図31	第6号竪穴住居跡断面図	26
挿図32	第6号竪穴住居跡出土紡錘車実測図	26
挿図33	第6号竪穴住居跡出土不明石製品実測図	26
挿図34	第6号竪穴住居跡出土土器実測図	27
挿図35	第6号竪穴住居跡出土砥石実測図	27
挿図36	第7号竪穴住居跡ピット深度図	28
挿図37	第7号竪穴住居跡出土土器実測図	28
挿図38	第7号竪穴住居跡出土黒曜石剣片実測図	28

挿図39	第7号竪穴住居跡実測図	29
挿図40	第8号竪穴住居跡ピット深度図	30
挿図41	第8号竪穴住居跡出土土器実測図	30
挿図42	第8号竪穴住居跡出土石斧実測図	30
挿図43	第9号竪穴住居跡ピット深度図	31
挿図44	第9号竪穴住居跡出土土器実測図	31
挿図45	第8・第9号竪穴住居跡実測図	32
挿図46	第10号竪穴住居跡ピット深度図	33
挿図47	第10号竪穴住居跡出土土器実測図	33
挿図48	第10号竪穴住居跡実測図	33
挿図49	第11号竪穴住居跡ピット深度図	34
挿図50	第11号竪穴住居跡実測図	34
挿図51	第12号竪穴住居跡ピット深度図	35
挿図52	第12号竪穴住居跡出土土器実測図	35
挿図53	第12号竪穴住居跡出土不明石及び磨石実測図	35
挿図54	第12号竪穴住居跡実測図	36
挿図55	第1号段状遺構ピット深度図	37
挿図56	第1号段状遺構出土土器実測図	37
挿図57	第1号段状遺構実測図	38
挿図58	第2号段状遺構ピット深度図	38
挿図59	第2号段状遺構出土土器実測図	39
挿図60	第2号段状遺構実測図	40
挿図61	第3号段状遺構ピット深度図	40
挿図62	第3号段状遺構実測図及び出土土器実測図	41
挿図63	第4号段状遺構ピット深度図	42
挿図64	第4号段状遺構実測図	42
挿図65	第4号段状遺構出土土器実測図	43
挿図66	第5号・第6号段状遺構ピット深度図	44
挿図67	第5号段状遺構出土土器実測図	44
挿図68	第6号段状遺構出土土器実測図①	45
挿図69	第6号段状遺構出土土器実測図②	46
挿図70	第6号段状遺構出土石実測図	46
挿図71	第4・第5・第6号段状遺構実測図	47
挿図72	第4・第5・第6号段状遺構断面図①	47
挿図73	第4・第5・第6号段状遺構断面図②	48
挿図74	第7号段状遺構ピット深度図	49
挿図75	第7号段状遺構実測図	49
挿図76	第7号段状遺構出土土器実測図	50
挿図77	第7号段状遺構出土磨石実測図	50
挿図78	第8号段状遺構ピット深度図	50
挿図79	第8号段状遺構出土遺物実測図	51
挿図80	第8号段状遺構実測図	52

挿図81	第9号段状遺構ピット深度図	53
挿図82	第9号段状遺構実測図	53
挿図83	第9号段状遺構出土土器実測図	54
挿図84	第10・第11・第12・第13号段状遺構ピット深度図	54
挿図85	第10・第11・第12・第13号段状遺構実測図	55
挿図86	第10号段状遺構出土磨石実測図	56
挿図87	第14号段状遺構出土サヌカイト製石器及び黒曜石剝片実測図	56
挿図88	第14号段状遺構出土黒曜石剝片実測図	57
挿図89	第14号段状遺構ピット深度図	57
挿図90	第14号段状遺構実測図	57
挿図91	第14号段状遺構出土土器実測図	58
挿図92	第14号段状遺構出土石斧及び磨石実測図	59
挿図93	第15号段状遺構ピット深度図	59
挿図94	第15号段状遺構実測図	60
挿図95	第16号段状遺構ピット深度図	60
挿図96	第17号段状遺構ピット深度図	60
挿図97	第16号段状遺構及び第5号溝状遺構実測図	61
挿図98	第17号段状遺構実測図	61
挿図99	第17号段状遺構出土黒曜石剝片実測図	61
挿図100	第1号掘立柱建物跡ピット深度図	62
挿図101	第1号掘立柱建物跡ピット内出土石実測図	62
挿図102	第1号掘立柱建物跡実測図	63
挿図103	第2号掘立柱建物跡ピット深度図	64
挿図104	第2号掘立柱建物跡実測図	64
挿図105	第2号掘立柱建物跡出土土器実測図	65
挿図106	第3号掘立柱建物跡実測図	66
挿図107	第4号掘立柱建物跡実測図	67
挿図108	第5号掘立柱建物跡実測図	68
挿図109	第1号土壤実測図	69
挿図110	第2号土壤実測図	69
挿図111	第3号土壤実測図	70
挿図112	第4号土壤実測図	71
挿図113	第5号土壤実測図	71
挿図114	第6号土壤実測図	72
挿図115	第7号土壤実測図	72
挿図116	第8号土壤実測図	73
挿図117	第9号土壤実測図	73
挿図118	第10号土壤内及び付近出土土器実測図	74
挿図119	第10号土壤実測図	74
挿図120	第11号土壤実測図	74
挿図121	第11号土壤出土土器実測図	75
挿図122	第12号土壤実測図	75

挿図123	第13号土壤実測図	75
挿図124	第13号土壤出土土器実測図	76
挿図125	第14号土壤遺物出土状況図	折込
挿図126	第14号土壤実測図	折込
挿図127	第14号土壤出土土器実測図	77
挿図128	第14号土壤出土石斧実測図	77
挿図129	第15号土壤実測図	78
挿図130	第16号土壤実測図	78
挿図131	第17号土壤実測図	79
挿図132	第18号土壤実測図	80
挿図133	第19・第20号土壤実測図	81
挿図134	第1号溝状遺構ピット深度図	81
挿図135	第1号溝状遺構実測図	82
挿図136	第1号溝状遺構出土土器実測図	82
挿図137	第2号溝状遺構出土土器実測図	83
挿図138	第3号溝状遺構実測図	83
挿図139	第3号溝状遺構ピット深度図	84
挿図140	第4号溝状遺構土層断面図	84
挿図141	第5号溝状遺構ピット深度図	84
挿図142	第1号道路状遺構実測図	85
挿図143	第2号道路状遺構ピット深度図	86
挿図144	第2号道路状遺構実測図	折込
挿図145	第3号道路状遺構集石部実測図	86
挿図146	第3号道路状遺構出土土器実測図	87
挿図147	第3号道路状遺構実測図	87
挿図148	土壙状遺構実測図	88
挿図149	土壙状遺構出土土器実測図	89
挿図150	土壙状遺構出土鉄器実測図	90
挿図151	ピット群①実測図	90
挿図152	ピット群②実測図	91
挿図153	遺構配置図①（弥生時代）	95
挿図154	遺構配置図②（古墳時代）	95
挿図155	遺構配置図③（奈良時代及びそれ以後）	96
挿図156	東宗像古墳群（調査区）遺構配置図	104
挿図157	東宗像1号墳墳丘実測図	105
挿図158	東宗像2号墳掘割り土層断面図	106
挿図159	東宗像2号墳前方部（調査区）遺構及び遺物出土位置図	107
挿図160	東宗像2号墳第1埋葬遺構及び土層断面図	108
挿図161	東宗像2号墳第2埋葬遺構及び土層断面図	108
挿図162	東宗像2号墳出土遺物実測図（1）須恵器・土師器・鉄器	109
挿図163	東宗像2号墳出土遺物実測図（2）埴輪	110
挿図164	東宗像2号墳出土遺物実測図（3）埴輪	111

挿図165	東宗像 3号墳墳丘実測図	112
挿図166	東宗像 3号墳墳丘土層断面図	折込
挿図167	東宗像 3号墳主体部実測図	113
挿図168	東宗像 3号墳出土遺物実測図（1）鉄器	113
挿図169	東宗像 3号墳出土遺物実測図（2）須恵器・埴輪	114
挿図170	東宗像 4号墳調査風景	115
挿図171	東宗像 4号墳主体部実測図	116
挿図172	東宗像 4号墳出土遺物実測図	116
挿図173	東宗像 4号墳墳丘実測図及び土層断面図	折込
挿図174	東宗像 5号墳墳丘実測図	117
挿図175	東宗像 5号墳周溝遺物出土状況図	118
挿図176	東宗像 5号墳墳丘及び周溝遺物出土位置図	118
挿図177	東宗像 5号墳墳丘土層断面図	折込
挿図178	東宗像 5号墳主体部実測図	119
挿図179	東宗像 5号墳主体部検出状況及び土層断面図	120
挿図180	東宗像 5号墳主体部横口部出土遺物実測図 鉄器	120
挿図181	東宗像 5号墳主体部横口部閉塞状況図	121
挿図182	東宗像 5号墳主体部（館内）遺物出土状況図	122
挿図183	東宗像 5号墳主体部（館内）遺物実測図 砥石・鉄器	122
挿図184	東宗像 5号墳主体部閉塞状況	122
挿図185	東宗像 5号墳主体部掘り方実測図	123
挿図186	東宗像 5号墳出土土器実測図（1）主体部横口部・須恵器	123
挿図187	円筒埴輪凸帯設定手法	124
挿図188	東宗像 5号墳出土土器実測図（2）周溝・須恵器・土師器	124
挿図189	東宗像 5号墳出土土器実測図（3）埴輪	125
挿図190	東宗像 5号墳出土土器実測図（4）埴輪	126
挿図191	東宗像 5号墳出土土器実測図（5）埴輪	127
挿図192	東宗像 6号墳墳丘実測図	128
挿図193	東宗像 6号墳墳丘土層断面図	折込
挿図194	東宗像 6号墳主体部実測図	129
挿図195	東宗像 6号墳主体部検出状況及び土層断面図	130
挿図196	東宗像 6号墳主体部平面図	131
挿図197	東宗像 6号墳主体部掘り方実測図	132
挿図198	東宗像 6号墳出土鉄器実測図	132
挿図199	東宗像 6号墳周溝遺物出土状況図	133
挿図200	東宗像 6号墳出土土器実測図 須恵器・土師器・埴輪	133
挿図201	東宗像 7号墳墳丘実測図	134
挿図202	東宗像 7号墳墳丘土層断面図	折込
挿図203	東宗像 7号墳主体部実測図	135
挿図204	東宗像 7号墳主体部検出状況及び土層断面図	136
挿図205	東宗像 7号墳出土遺物実測図 須恵器・鉄器	137
挿図206	東宗像 7号墳主体部掘り方実測図	137

挿図207	東宗像8号墳墳丘実測図	138
挿図208	東宗像9号墳墳丘実測図	139
挿図209	東宗像23号墳主体部実測図	140
挿図210	東宗像23号墳墳丘実測図及び土層断面図	折込
挿図211	東宗像23号墳主体部検出状況及び土層断面図	折込
挿図212	東宗像23号墳主体部掘り方実測図	折込
挿図213	東宗像23号墳出土遺物実測図	141
挿図214	東宗像24号墳主体部実測図	141
挿図215	東宗像24号墳墳丘実測図及び土層断面図	折込
挿図216	東宗像24号墳主体部検出状況及び土層断面図	折込
挿図217	東宗像24号墳主体部掘り方実測図	折込
挿図218	東宗像25号墳墳丘実測図及び土層断面図	折込
挿図219	東宗像25号墳主体部検出状況及び土層断面図	折込
挿図220	東宗像25号墳主体部掘り方実測図	折込
挿図221	東宗像25号墳主体部実測図	143
挿図222	東宗像26号墳主体部実測図	144
挿図223	東宗像26号墳墳丘実測図及び土層断面図	折込
挿図224	東宗像26号墳主体部検出状況及び土層断面図	折込
挿図225	東宗像26号墳主体部掘り方実測図	折込
挿図226	第1号石蓋土壤墓構配置図	145
挿図227	第1号石蓋土壤墓出土遺物実測図 弥生土器	145
挿図228	第1号石蓋土壤墓実測図	146
挿図229	第2号石蓋土壤墓実測図	147
挿図230	第3号石蓋土壤墓実測図	148
挿図231	第1号木棺墓遺物出土位置図	148
挿図232	第1号木棺墓遺物出土状況図	149
挿図233	第1号木棺墓実測図	149
挿図234	第1号木棺墓出土遺物実測図（1）須恵器・土師器・鉄器	150
挿図235	第1号木棺墓出土遺物実測図（2）須恵器・土師器	151
挿図236	第2号木棺墓構配置図	152
挿図237	第2号木棺墓実測図	153
挿図238	第2号木棺墓出土遺物実測図 須恵器・鉄器・砥石	154
挿図239	第3号木棺墓出土遺物実測図 須恵器	154
挿図240	第3号木棺墓実測図	155
挿図241	第1号箱式石棺墓検出状況及び土層断面図	155
挿図242	第1号箱式石棺墓実測図	156
挿図243	第1号土壤墓及び出土遺物実測図	156
挿図244	第1号土器棺墓実測図	157
挿図245	第1号土器棺墓弥生土器実測図	157
挿図246	東宗像古墳群古墳分布図	158
挿図247	北部九州の堅穴系横口式石室・福岡県宗像市A-3号墳石室実測図	159
挿図248	鳥取県内・堅穴系横口式石室実測図（1）	160

挿図249	鳥取県内・豎穴系横口式石室実測図（2）	161
挿図250	佐賀県唐津市迫頭古墳群・横口構造をもつ箱式石棺・土塙墓実測図	162
挿図251	東宗像遺跡横穴配置図	168
挿図252	横穴各部の名称	168
挿図253	東斜面の横穴群	169
挿図254	東宗像遺跡地形横断面図	169
挿図255	東1号横穴実測図	170
挿図256	東1号横穴遺物出土状況図	171
挿図257	東1号横穴出土遺物実測図 須恵器・鉄器	172
挿図258	東2号横穴実測図	175
挿図259	東2号横穴出土遺物実測図 須恵器	176
挿図260	東3号横穴実測図	177
挿図261	東3号横穴出土遺物実測図 須恵器	178
挿図262	東4号横穴実測図	179
挿図263	東5号横穴実測図	180
挿図264	西斜面南側の横穴群	181
挿図265	東宗像遺跡地形横断面図	181
挿図266	西1号横穴実測図	折込
挿図267	西1号横穴遺物出土状況図	183
挿図268	西1号横穴出土遺物実測図 須恵器	184
挿図269	西1号横穴出土遺物実測図 鉄器	186
挿図270	西2号横穴実測図	折込
挿図271	西2号横穴遺物出土状況図	189
挿図272	西2号横穴出土遺物実測図 須恵器	190
挿図273	西2号横穴出土遺物実測図 須恵器	191
挿図274	西2号横穴出土遺物実測図 小玉	192
挿図275	西2号横穴出土遺物実測図 石器・鉄器	193
挿図276	西3号横穴実測図	196
挿図277	西4号横穴実測図	折込
挿図278	西4号横穴遺物出土状況図	197
挿図279	西4号横穴出土遺物実測図 鉄器・須恵器	198
挿図280	西4号横穴出土遺物実測図 玉類	200
挿図281	西5号横穴出土遺物実測図 玉類	202
挿図282	西5号横穴実測図	折込
挿図283	西5号横穴遺物出土状況図	203
挿図284	西5号横穴出土遺物実測図 須恵器	204
挿図285	西5号横穴出土遺物実測図 須恵器・鉄器	205
挿図286	西5号横穴出土遺物実測図 鉄器	206
挿図287	西6号横穴実測図・出土遺物実測図	208
挿図288	西7号横穴実測図	折込
挿図289	西7号横穴遺物出土状況図	209
挿図290	西7号横穴出土遺物実測図 須恵器	209

挿図291	西8号・9号横穴実測図	210
挿図292	西8号・9号横穴実測図	211
挿図293	西8号横穴出土遺物実測図 須恵器・土師器	212
挿図294	西斜面1号道路状遺構に伴う横穴群	213
挿図295	西10号横穴実測図	214
挿図296	西10号横穴出土遺物実測図 須恵器	215
挿図297	西11号横穴実測図	216
挿図298	西11号横穴出土遺物実測図 須恵器	217
挿図299	西12号横穴実測図	218
挿図300	西12号横穴出土遺物実測図 須恵器	219
挿図301	西13号横穴実測図	220
挿図302	西14号横穴出土遺物実測図 須恵器	221
挿図303	西14号横穴実測図	222
挿図304	水田部出土遺物実測図 繩文・弥生土器	228
挿図305	水田部遺物出土状況及び土層断面図	229
挿図306	遺構外出土遺物実測図 繩文・弥生土器	230
挿図307	遺構外出土遺物実測図 弥生・土師器	231
挿図308	遺構外出土遺物実測図 須恵器	232
挿図309	遺構外出土遺物実測図 墳輪	233
挿図310	遺構外出土遺物実測図 石籠	234
挿図311	遺構外出土遺物実測図 石籠他	235
挿図312	遺構外出土遺物実測図 石斧他	236
挿図313	遺構外出土遺物実測図 金属器	237
挿図314	特論図1・2・3	245
挿図315	特論図4・5・6・7	246

挿 表 目 次

挿表1	米子市の年間平均気温と降水量	7
挿表2	ピット群計数表	92
挿表3	集落跡出土遺物観察表①	96
挿表4	集落跡出土遺物観察表②	97
挿表5	集落跡出土遺物観察表③	98
挿表6	集落跡出土遺物観察表④	99
挿表7	集落跡出土遺物観察表⑤	100
挿表8	集落跡出土遺物観察表⑥	101
挿表9	集落跡出土遺物観察表⑦	102
挿表10	集落跡出土遺物観察表⑧	103
挿表11	鳥取県内の竪穴系横口式石室調査例一覧表	159
挿表12	東宗像遺跡古墳出土須恵器・土師器観察表①・②	163・164
挿表13	東宗像遺跡古墳出土埴輪観察表①・②・③	165・166・167

挿表14	東宗像遺跡古墳及び古墳以外の埋葬施設出土鉄器・延石観察表	167
挿表15	東1号横穴出土遺物観察表	174
挿表16	東2号横穴出土遺物観察表	176
挿表17	東3号横穴出土遺物観察表	178
挿表18	西1号横穴出土遺物観察表	187
挿表19	西2号横穴出土遺物観察表①	193
挿表20	西2号横穴出土遺物観察表②	194
挿表21	西2号横穴出土小玉計数表	195
挿表22	西4号横穴出土遺物観察表	201
挿表23	西5号横穴出土遺物観察表①	205
挿表24	西5号横穴出土遺物観察表②	206
挿表25	西5号横穴出土遺物観察表③	207
挿表26	西7号横穴出土遺物観察表	209
挿表27	西8号横穴出土遺物観察表	212
挿表28	西10号横穴出土遺物観察表	215
挿表29	西11号横穴出土遺物観察表	217
挿表30	西12号横穴出土遺物観察表	219
挿表31	西14号横穴出土遺物観察表	221
挿表32	横穴構造一覧表	224
挿表33	横穴出土遺物一覧表	225
挿表34	横穴の先後関係表	226
挿表35	水田部出土遺物観察表	228
挿表36	遺構外出土遺物観察表①	233
挿表37	遺構外出土遺物観察表②	237
挿表38	遺構外出土遺物観察表③	238

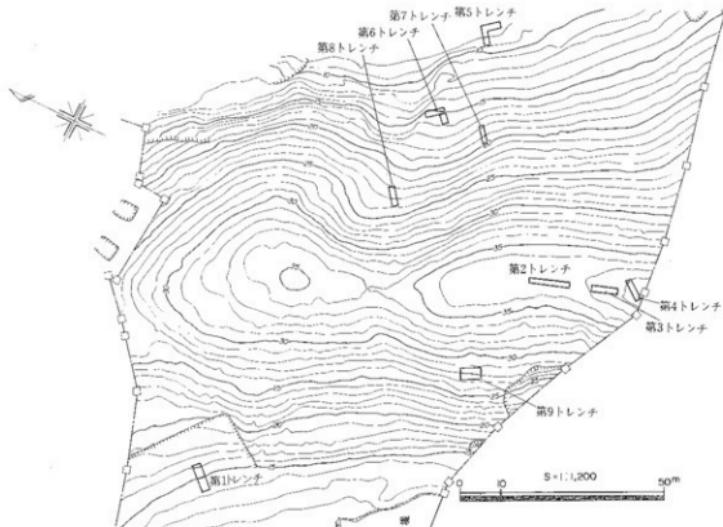
第1章 調査の経緯

第1節 調査に至るまでの経緯

米子バイバ 米子バイパス建設は、一般国道9号改築工事の一環として昭和47年度に着手され今日に至っている。

ス このバイパスの建設計画線上には「陰田遺跡」「東宗像古墳群」が知られており、建設省は鳥取県及び米子市の文化財担当部局と協議し、事前の発掘調査を行うこととした。このため、委託を受けた米子市教育委員会は、鳥取県教育文化財団の協力を得て「陰田遺跡調査団」を組織し、昭和55年度より陰田遺跡の事前発掘調査を行なった。多大の成果をあげたこの調査は丘陵斜面部調査の必要性を示唆し、既知の東宗像古墳群の他に周辺斜面部にも各種遺構、遺物の遺存する可能性を示した。

試掘調査 このため、陰田遺跡調査団は、米子市宗像地内の東宗像古墳群周辺の斜面部を中心に遺跡範囲確認のための試掘調査を昭和57年11月1日より行なった。9本のトレンチ（挿図2）による試掘調査で西側斜面より住居跡・横穴などの遺構が検出された。東宗像遺跡の発見である。同調査団は、昭和58年度に東宗像遺跡を事前発掘調査する計画で建設省と協議を進めた。しかし、相次ぐ陰田遺跡の新発見等、種々の事由によりこれを断念、変わって鳥取県教育文化財団が宗像埋蔵文化財調査事務所を設け、この遺跡を事前発掘調査することになった。



挿図2 試掘トレント位置図

第2節 調査の経過

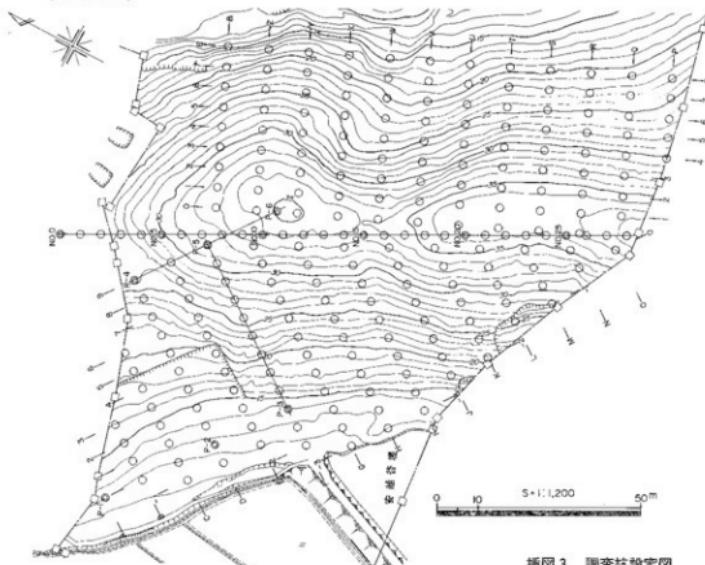
発掘調査は、昭和58年4月に60年供用開始予定暫定2車線分約7100m²に着手し、同年10月の計画変更追加分約3000m²を加えたバイパス計画予定地内の現地発掘調査が完了したのは、昭和59年6月15日で実質14.5ヶ月の期間を要した。

調査の方法 東宗像遺跡の発掘調査は、当初調査予定の暫定2車線分の道路幅と米子市が試掘調査を実施した地域とが若干異なっていたため、調査予定地域の東側斜面線辺部（標高13m程度）に遺構範囲確認のためのトレーニングを設定し調査を開始した。

挿図3のように6本の基本杭（P1～P6）をトレーニング配置のため設定した。このトレーニング調査の結果、斜面西側下辺部で竪穴住居等の遺構を確認したため、これを全面調査することとし、先のP1杭とP3杭を結ぶ線を基準とし水平距離南北方向10m、東西方向5mメッシュでそれぞれ地区杭を設定した。西側斜面基準線は磁北より48°西の方向である。基本杭P1を0-Aとし、南北方向はAからOのアルファベット、直交する東西方向を数字で示し、東へ5m行くに従って、1、2、3と数字を増加させ、逆に西へ5m行くに従って、-1、-2と数字を減少させた。

斜面東側下辺部のトレーニングでは、遺構、遺物等が検出されなかっただため、上記のような地区設定は行なっていなかった。しかし、斜面中腹におけるトレーニング調査の結果、横穴の存在が明らかになつたので東側斜面部についても次の地区設定を行なつた。基本杭P6と、建設省の境界杭を結ぶ線を基準とし、西側斜面も同様に水平距離南北方向10m、東西方向5mメッシュで地区杭を設定した。東側斜面基準線は磁北より22°西の方向である。基本杭P6を北方向に5mのばした地点を0-Zとし、東側斜面基準線の方向である南北方向は、先に西側で付したアルファベットの残りRからZ、直交する東西方向は数字で示し、東へ5m行くに従って1、2、3と数字を増加させた。

次に、丘陵頂部の古墳については、調査地区業者測量時の任意の点No1より建設省境界杭を結ぶ線を基準とし、No1より5m南へ行くに従って、No2、No3と数字を増加させた基本杭を使用して調査を行なつた。この地区設定は、遺構の位置確認と図面作成に用い、出土遺物は基本的に遺構ごとに取り上げた。



挿図3 調査杭設定図

58年度の発 本遺跡の調査は、当初暫定2車線分の道路建設予定幅を単年度で調査する計画で開始された。

掘調査 伐採及び発掘前地形測量は、業者委託とし、これと併行して予想される集落跡や横穴などの遺跡の広がりを確認するため、トレンチ調査を4月5日より開始した。その結果西側斜面の各トレンチより竪穴住居跡状の落ち込み、ピットなどや弥生土器、土師器、須恵器等の遺物が検出された。このため西側斜面は、全面発掘することとし、東側斜面については、縁辺部のトレンチで遣構、遺物を検出しなかったことから集落遺構の広がりが無いことが明らかになったため、米子市の行なった分布調査の結果をもとに、横穴が存在する可能性の高い標高25m以上の地区を全面発掘することにした。

全面発掘調査は、排土の関係上標高の低い所より順次調査を行い、検出された遣構は、発掘調査終了時まで排土等から保護されるように配慮した。

西側斜面で竪穴住居、段状遣構などが調査される一方、東側斜面で8月18日横穴を確認、調査を開始した。

東西両斜面の調査が終りに近づいた9月下旬、道路建設計画の変更により調査区域が当初予定の倍になるという決定が建設省倉吉工事事務所と鳥取県埋蔵文化財センターとの協議でなされ、本遺跡の調査計画も変更を余儀なくされた。このため、当初単年度計画であった本遺跡発掘調査は、次年度も行なわれることとなった。この計画変更により調査は、当初の調査予定地域外へ盛っていた排土除去という作業が必要になり、調査予定に大きな齟齬をきたした。

10月中旬、調査地域西側水田部の機脚工事部分の試掘を10m四方のトレンチを設定して行なった。内部より加茂川の氾濫等によるものと思われる二次的移動を受けた縁文土器類、須恵器等の検出を見たが、遣構は検出できず11月5日同部分の調査を終了した。

記録的な積雪の中、10月1日より1名（長岡）、12月1日より2名（高口、賀須井）、計3名の調査員増員を受けて、山頂の古墳群の一部と西側斜面の横穴群を除き、本年度発掘予定地域の調査をほぼ終了した。

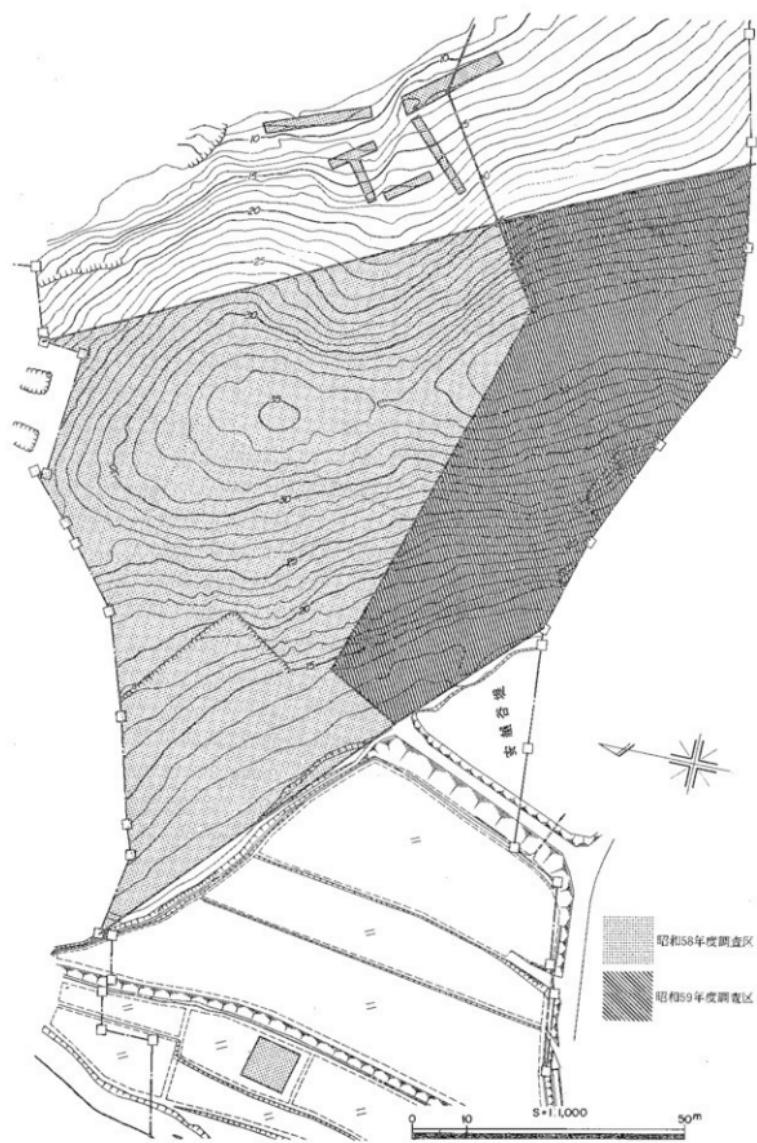
59年度の発 59年度調査は、前年度からの継続部分である山頂部の古墳、それに西側斜面の横穴の調査を前年度
掘調査 調査開始当初と同じ調査員3名（園、中原、山折）で実施した。本年度調査では、当初より航空写真撮影を予定しており、古墳の埋葬施設及び横穴の検出が完了した時点で航空写真撮影を行なった。

6月15日、古墳、横穴の他、山頂部古墳築造以前の落し穴土壙等の調査を終え、調査対象地区的発掘作業を完了した。

なお、本遺跡調査対象地区は、同年7月より開始された道路建設工事により消滅したが、5号墳石棺が鳥取県立米子高等学校へ、23号墳石棺が米子市立義方小学校へ移築保存されている。

東宗像遺跡の発掘調査は、延べ15ヶ月の期間を要し、発掘調査面積は約10000m²、その間に従事した作業員は、延べ9,300人で、発掘した遣構は総数で101に及ぶ。

整理作業 なお、本遺跡にかかる遺物整理作業は、調査開始当初より宗像埋蔵文化財調査事務所（現地プレハブ）と、鳥取県埋蔵文化財センター（鉄器処理を含む）の2ヶ所で発掘調査と併行して行なった。また、発掘作業終了後、現地プレハブにて遺物・遣構図面の整理・整図、写真撮影、本文執筆等の報告書作成作業を行なった。



掲図4 東宗像遺跡調査区域図

第3節 調査の体制

本遺跡調査の体制は、次の通りである。

・調査指導

○鳥取県教育委員会文化課

○鳥取県埋蔵文化財センター

・鳥取県教育文化財課 宗像埋蔵文化財調査事務所

所長 前田克己

事務担当係員 杉田千津子

調査員 関 俊朗

中原 齊

山折雅美

長岡充展 (1983年10月1日より1984年3月31日まで)

賀須井 智 (1983年12月1日より1984年3月31日まで西部埋蔵文化財調査事務所と兼任)

高口勝人 (同上)

調査補助員 左藤 博

岩崎浩志

末吉洋子

西田直史

なお、2年間の発掘調査中に次の方々が参加協力された。

作業員 吾郷琴江、飯塚富吉、生田広義、稻田愛子、井上佳代、上田文枝、内田栄治、内田千澄世、浦木紀公子、江原草子、太田房枝、岡田正己、梶原弘、加藤美須津、齊鹿まきえ、齐木菊江、齐木隆子、齐木良逸、佐藤崎衛、佐藤富子、角田芳雄、高橋近雄、田中美智子、谷本悦子、田村静江、田村助三、田村照代、田村信子、田村正子、田村米子、坪倉早智子、徳中しげの、徳中静枝、仲田茂子、西村武夫、野口亨、野坂綾子、野坂真、野坂好夫、栗本幸子、栗本高子、長谷川千歳、橋谷潔、畠繁秋、幡原藤子、梶口友枝、福田崎枝、藤川真樹、真先孝子、松浦節子、松浦晴子、松岡和子、松本栄子、三村正吉、三村常代、宗政久和子、山川友子、山崎巧枝、山本愛子、八幡美和子、吉本須賀子、渡辺明恵、渡辺百美恵、渡辺義行

アルバイト 加藤伸二、加納真人、小早川政二、西郷克典、佐々木誠、下高瑞哉、岡早苗、田枝正之、田口哲明、只津俊行、田辺康司、中津尾健、長田達也、野口雅人、瀬田直美、逸見昭弘、逸見和弘、三島聰夫、村上美之、森藤清、矢田博紀、渡瀬壮一郎

第2章 東宗像遺跡の環境

第1節 地理的環境

東宗像遺跡は鳥取県米子市の南郊に位置する宗像、長砂地区に所在する。

鳥取県

鳥取県は北は日本海に面し、南にはなだらかな中国山地をひかえた東西100kmに及ぶ細長い県であり、面積3492.65km²、人口61.3万人を数える。県内の75%は山林であり、生活領域は海岸に開けた沖積平野と山間の谷間に展開している。旧国名でいえば東が因幡國、西が伯耆國であるが地形的には伯耆國は西と東に分けられ、因伯を合わせて東、中、西部の三地域に分けられる。それぞれの地域には大河川流域に形成された沖積平野が開けており、因幡は千代川下流の鳥取市、東伯耆は天神川中流域の倉吉市、西伯耆は日野川下流域の米子市を中心として発展している。米子市の北側弓ヶ浜半島先端部には、日本海側随一の漁港、境港をもつ境港市があり、漁業を中心に発達している。鳥取県はこの4市を中心にして6郡、35町村で構成される。

米子市

米子市は鳥取県の西端に位置し、県境を介して島根県安来市、能義郡伯太町と接しており、周辺は北に境港市、東に西伯郡淀江町、東南に岸本町、南を会見町、西伯町に囲まれている。米子市は標高1711mで中国山地最高峰を誇る大山の西麓にひろがる米子平野にあり、美保湾に長く伸びた弓ヶ浜半島の付け根に位置する面積98km²、人口13万人の商業都市である。

米子周辺の地形

米子周辺の地形をみると、東に大山山麓、南に越敷山丘陵が連なり、それぞれの山塊は、日野川、法勝寺川をはじめとする河川により分断され、河川流域沿いには谷奥平野が山奥まで続いている。美保湾に向って広がる米子平野は、中国山地奥深く日野郡日南町新屋（標高900m）を源に、中国山地や大山西麓の水を集めて北流し、日本海にそぞぐ流路総延長83.8kmの日野川によって、岸本町付近を扇頂とする扇状地性の沖積低地として形成された平野である。この日野川の流出土砂は北西の季節風による堆積で「出雲国風土記」で夜見島とよばれた島（現境港市周辺）と米子平野をつなぎ弓ヶ浜半島を作りあげている。これにより外海と遮断された中海が形成され、わずかに境水道において海水の出入がある。中海は近年干拓事業が進み、最近宍道湖と共に社会問題にまでなっている淡水化計画が推進されつつあり、面積の縮少、水質の汚濁がみられる中で、地理的な様相さえ変えつつある。日野川流域沿いには自然堤防が発達し、右岸には河岸段丘もみられる。この地域は箕輪屋平野と呼ばれる水田地帯としてひらけ、各地に農村集落が点在している。法勝寺平野は、鎌倉山辺りに源を発して法勝寺の丘陵山地沿いに北流し、米子市戸上付近で日野川と合流する法勝寺川により、沖積低地として形成された沖積平野である。広義には米子平野に含まれる。この地域は、四方を越敷山丘陵山地に囲まれ、法勝寺川の河口は日野川本流にふさがれており、米子市街地と区切られている。この地域の集落は、丘陵地および台地の縁辺付近にあり、平野にひろがる水田地帯を取りまくように立地している。米子市街地のある米子平野と法勝寺平野は、標高130mの高山山塊によって区切られている。高山山塊は西側の県境からドウト山、行者山、高山、戸上山と標高60~160m前後の山陵が連なっており、その低い部分を国

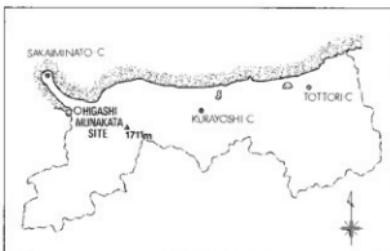


図5 東宗像遺跡の位置

東宗像遺跡 道180、181号が越している。東宗像遺跡は、高山西塊の最高地点である高山と国道181号、新加茂川をはさんで聳える標高70mの通称妙見山から北へのびる支尾根に所在している。高山山塊と、北に岬状にのびる長砂から東山の山麓に抱かれたような形で、前面には米子平野でも奥まった水田地帯が拡がる。東宗像遺跡は、これらの平野を見下ろす絶好の位置にあるといえよう。また古代の汀線は、現在よりかなり後退していた時期もあったと考えられ海上交通の拠点的な位置を占めていたことも考えられる。

気候 鳥取県の気候は所謂「裏日本型」に属するが、平野部は梅雨、台風期の他冬期にも降水量が多い。特に冬期は東部ほど、梅雨期は西部ほど降水量が多い。年平均気温は沿岸部では15.1°Cを示し、山間盆地部に比べれば0.8°C高い。雨量は年間1546mm~2286mmである。

気温 (C°)

米子測候所調 (『鳥取県気象累年報』による)

月 区分	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	全年
最高平均	7.3	7.5	11.4	17.2	21.6	25.1	29.1	30.4	26.1	20.7	16.0	10.6	18.6
最低平均	0.3	-0.1	2.0	6.1	11.1	16.7	22.0	22.4	17.9	11.0	6.4	2.8	9.9
平均	3.7	3.5	6.6	11.5	16.1	20.5	25.0	25.8	21.5	15.5	11.0	6.5	13.9

降水量 (mm)

月 区分	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	全年
降水日数 (8.1m以上)	25.8	21.4	18.4	13.8	12.6	17.6	15.8	7.8	16.2	15.0	16.8	22.0	203.2
平均(mm)	148.4	155.3	122.8	104.0	116.1	175.7	212.6	117.1	281.0	168.9	115.7	143.3	1860.9

挿表1. 米子市の年間平均気温と降水量

降霜

米子測候所調 (『鳥取県の農作業気象ごよみ』による)

初霜 11月13日 晩霜 4月23日

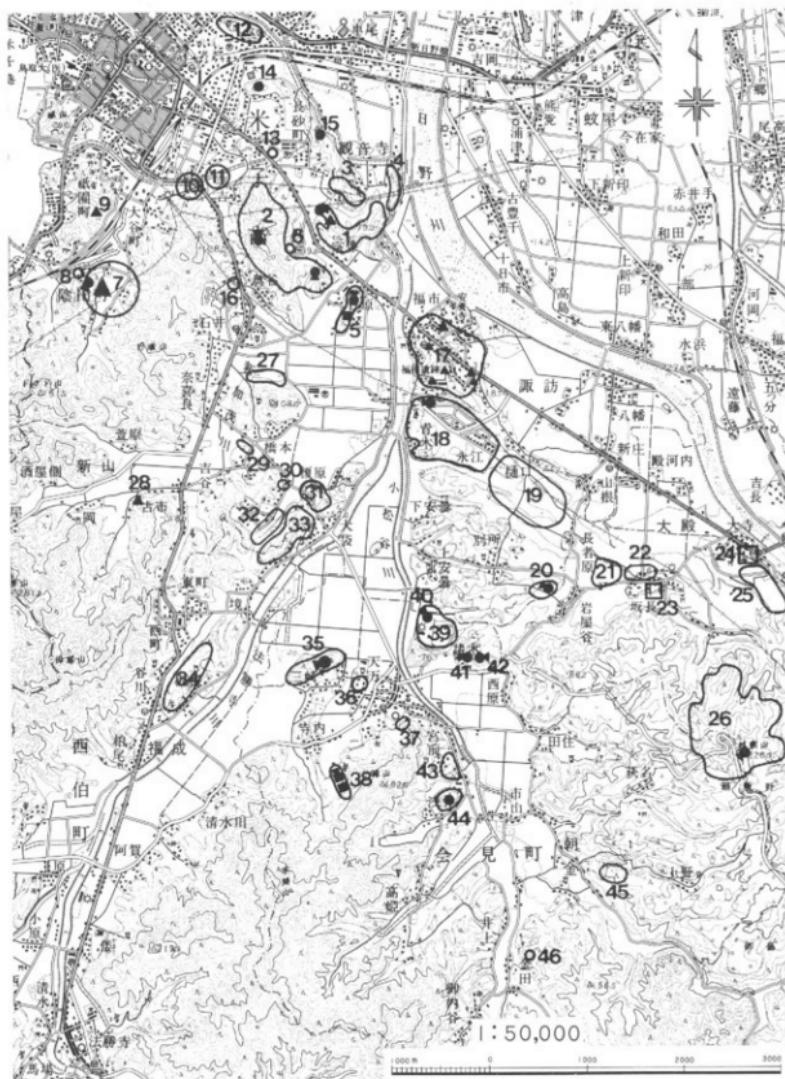
降雪

最大積雪深 80cm

初雪 12月5日 晩雪 3月21日 根雪日数 39日 雪始 12月15日 融雪 3月16日

第2節 歴史的環境

旧石器時代 米子市周辺に限らず鳥取県内では確実に旧石器時代とされる遺跡は発見されていない。遺物としては、有舌尖頭器が、岸本町貝田原、大山町坊領、莊田、会見町諸木で採集されており、米子市奈喜良遺跡(27)でも出土している。日野郡溝口町長山では細石刃(マイクロ・ブレイド)かとみられる製品も発見されている。大山山麓一帯では有舌尖頭器より古いとされる柳葉状尖頭器や黒曜石製舟底形石核、握槌等も発見されており、旧石器時代に遡る可能性が強い。



挿図6 周辺遺跡分布図

縄文時代 縄文時代草創期は先述したように有舌尖頭器、柳葉状尖頭器の存在や、隆起線文系土器ではないか
草創期 とされる土器片が大山山麓で採集されており、旧石器時代～縄文時代草創期の遺跡が調査される日も早
期 近いと考えられる。縄文時代も早期になると底押型土器を出土する遺跡が多く確認できる。大山山麓の台地上に点在しており、岸本町久古遺跡、須村遺跡、番原遺跡、大山町塚田遺跡、溝口町長山遺跡、井戸草里遺跡、日南町折渡遺跡などがあるが、最近米子市上福万遺跡A区では縄文時代の押型
前期 文土器等を伴う集石遺構や土壙が多数検出されている。前期になると台地上から遺跡が低湿地へ移動しており、貝殻条痕文土器、爪形文土器が目久美遺跡(10)等から出土している。最近九州の轟式土器の影響を受けたと考えられる押引き沈線文土器が陰田第9遺跡(7)から、また曾畠式土器に近いものが淀江町鰐ヶ口遺跡から発見されている。陰田第1遺跡、目久美遺跡ではドングリ貯蔵用ピットも発見されている。これら海辺の遺跡からは幅平な河原石の両端を欠いた石錘が多量に出土しており、
中・後期 海辺で漁撈を営む縄文人の姿を彷彿とさせる。中期の様相は明確でないが、後期になると低湿地の遺跡が継続して営まれるのに加えて、丘陵上に落し穴と考えられる底面にピットをもつ土壙が青木遺跡
晩期 (18)で250ヶ所以上発見されている。東宗像遺跡でも同種の土壙が数基発見された。晩期になると遺跡の数は再び減少する傾向がみられるようである。

弥生時代 大陸から北九州に伝わった稻作文化は、短期間に東進し、この地域でも海岸からそう遠くない
前 期 ところに小規模ながら高い技術をもった水田経営を始めている。前期の遺跡としては、目久美遺跡(10)が低湿地水田と徹底的に営む集落を形成している。口陰田遺跡(8)、勝田町遺跡(12)、長砂遺跡(13)が同様な低湿地の集落と考えられる。同じ時期諸木遺跡(39)では台地上に直径80mを越えるV字状環濠が掘られており、環濠集落と考えられ、谷奥まで弥生農耕文化が浸透していったことがみ
中 期 とめられる。これらの集落を拠点に中期になると遺跡数は急激に増加し、台地上、河岸段丘上に尾高遺跡、石州府遺跡、福市遺跡(17)、青木遺跡(18)、諫訪遺跡(19)、奈喜良遺跡(27)、越敷ケ丘遺跡(26)、天万遺跡(27)、宮前遺跡(43)、浅井土居敷遺跡(44)が當まる。また、前期末に諸木遺跡でみられた環濠は会見町の宮尾遺跡(36)にみられる。また、低湿地の遺跡も継続して営まれるが、特に目久美遺跡(10)、池ノ内遺跡(11)では水田が検出され、弥生時代農耕集落の様相を明らかにし
後 期 ている。後期になると中期から継続する遺跡の他に新しい集落を形成する遺跡が多い。特に後期後半には、ごく短期間丘陵上に立地する低丘陵上集落の姿を陰田遺跡群(7)の第1遺跡、天坂・久幸弥生集落からうかがうことができる。自然環境の変化と集落内の人口増加等内の発展の結果として成立し、短期間に解消したものであろう。他に奥谷遺跡(16)、大寺原遺跡(25)等で竪穴住居跡が確認されている。

古墳時代 西伯耆地方では、弥生時代における集団墓から隔絶した存在の所謂、墳丘墓は発見されていないが、
前 期 四隅突出形方形墓を含めて同期の墳丘墓がいずれ調査されるものと考えられる。前期古墳としては日原6号墳(5)が1辺20mの方墳で台状墓的な様相が強く、古墳時代前期墳丘多葬例として注目される。会見町普段寺1号墳(38)は全長21mの前方後方墳と考えられ、舶載三角縁唐草文帯二神二獸鏡、碧玉管玉、鉄剣を出土しており、鏡は島根県安来市大成古墳出土鏡と同型鏡である。墳丘くびれ部付近からは壺棺が発見されている。2号墳は方墳であり、熊本県宇土市城ノ越古墳出土の鏡と同型の
中 期 三角縁四神四獸鏡を出土している。中期の古墳としては、西伯耆最大規模を誇る全長110mの前方後円墳三崎殿山古墳があり、この地域を支配した大首長の奥津城と考えられる。高山山塊最高地点に立地する高山古墳一宗像41号墳(2)が全長32mの前方後円墳で、地山の岩盤を割り抜いた特異な埋葬施設を備えている。近年調査された例としては、陰田41号墳(7)が少女を埋葬した箱式石棺を主体部としていたことで注目される。他に仿製斜縁八神鏡を出土した水道山古墳(15)、画文帯神獸鏡を出土
後 期 した浅井11号墳(44)も中期様相をもつ古墳である。古墳時代後期になると小規模な古墳が激増し、後期群集墳が形成される。前方後円墳としては別所1号墳(20)が破壊された横穴式石室を主体部と

しており、鰐付円筒埴輪に顔をつけたような人物埴輪が出土している。他には、美豆良を結った男性埴輪を出土した後塔山古墳（41）、後円部に横穴式石室を二基もつ宗像1号墳（2）がある。6世紀代の小規模な群集墳としては木棺と横穴式石室を内部主体とする陰田古墳群（7）、横穴式石室を主体とする宗像古墳群（2）、横穴式石室と箱式石棺を主体とした東宗像古墳群（1）がある。他に大規模な古墳群としては、境古墳群（33）、福成古墳群（34）、青木古墳群（18）、越敷ヶ丘古墳群（26）等をあげることができる。一方、この地域は横穴墓の隆盛する出雲地方の影響を受け、6世紀後葉に横穴墓の築造が始まる。この時期の横穴墓としては新山・岡横穴墓（28）が知られていたが、近年陰田遺跡群において小横穴を含めて50基の横穴墓群が発見された。陰田遺跡群の近くには口陰田地内にも横穴墓群（9）が確認されており、横穴墓の集中してみられる地域である。今回、調査された東宗像横穴群に加えて、福市遺跡（17）内でも17基が確認されており、墓制としての横穴墓は6世紀後半～7世紀における後期群集墳の中のかなりな数を占めるようである。古墳時代の集落は弥生時代から続いて、青木遺跡（18）、福市遺跡（17）、奈良良遺跡（27）等で営まれており、大谷遺跡（31）でも古墳時代前期の住居跡が発見されている。後期の集落は青木・福市遺跡から諱訪遺跡群（19）へと広がり、長者原台地一帯に分布している。他には東宗像遺跡（1）、吉谷遺跡（29）、のように丘陵緩斜面に位置する例もある。

- 歴史時代** 歴史時代になると各遺跡で前代から継続して住居跡が営まれる他に、白鳳期の寺院址として大寺庵飛鳥・寺（24）が造立される。大寺庵寺は発掘調査によりほぼ伽藍配置が明らかになっている貴重な寺院址である。伽藍は講堂を西側に、金堂を南側に並置して東を正面にした珍しいもので、変形の法起寺式伽藍配置である。塔心礎は三重孔をもち、山陰で唯一のものであり、金堂屋根に覆えられたと考えられる石製鰐尾が重要文化財に指定されている。大寺庵寺の屋根瓦は会見町金田瓦窯跡（46）で焼かれたものであり、金田瓦窯跡は窯窓の完存する例としても重要な遺跡である。以上にあげた遺跡の分布する地域は令制伯耆国の大寺庵寺（24）や坂中庵寺（23）が存在する地域が想定されていたが、岸本町長者屋敷遺跡（21）の調査で、大きな建物跡が数棟確認され、南北90m、東西100mの範囲の建物群を囲む溝も発見された。長者屋敷は豪族紀成盛の館址の伝平安期 詳を残す地であるが、会見郡衙である可能性も強い。平安時代になると、宗像地内の式内社宗形神社が延喜式に記載されている。和名抄によれば、この地域は会見郡会見郷にあたる。同じ頃、巨勢郷には平安初期に坂中庵寺（23）が建立されており、塔心礎が残されている。宗形神社を維持した勢力と共に、これら寺院を建立した豪族たちが郡衙における郡司層であったと考えられる。
- 中・近世** 中・近世の城館址も数多い。城下町米子の中心であった米子城は五層の天守閣（中村時代）と四層の副天守閣（吉川時代）を備えた本格的な近世城郭であり、隣接する飯山は中世からの砦址でもある。他に戸上城、石井要害、橋本宝石城などがある。西伯町では法勝寺城、会見町の天万要害、日野川右岸では小波城、河間城などがあるが、数年前調査された尾高城は尼子・毛利の戦いの歴史を留める居館・要塞としての姿が明らかになり、中世城館址の縮張りと中世武士層の生活の一端をうかがわせる重要な遺跡である。

第3章 集落跡の調査

第1節 調査の概要

本遺跡で検出された遺構の内、竪穴住居跡、段状遺構、掘立柱建物跡、土壙、溝状遺構、道路状遺構、土壙状遺構、ピット群を「集落跡」として本章で扱う。これらの遺構は西斜面及び尾根頂部に存在がほぼ限定される。各々の遺構数は、竪穴住居跡12、段状遺構17、掘立柱建物跡5、土壙20、溝状遺構5、道路状遺構3、土壙状遺構1、ピット群2である。竪穴住居跡は主に西斜面の標高16m以下の緩斜面で検出された。斜面下側が全ての竪穴住居跡において流出しており、側壁の残存状況は不良であった。段状遺構は主に西斜面の標高19m以上の急斜面に存在するものが多い。調査時においては竪穴住居跡としたものもあったが、整理時において平面形が不整形で且つ規則的な柱穴の配置に欠け特殊ピットの存在の不確かなものは段状遺構とした。但し、掘立柱建物跡、埋葬施設等が単独で存在し、段状のものが明らかにそれらのためだけに造られている場合は、段状遺構の節では取り扱わない。掘立柱建物跡も西斜面のみで検出された。その形態は斜面を削り取り平坦面を造った後にその平坦面に柱穴を掘り込む、ということまでて一致している。土壙は尾根頂部を中心に検出された。素掘りの穴で埋葬施設でないものを土壙としたのであるが、用途不明のものもあるが、落し穴、貯蔵穴がみられた。溝状遺構は西斜面・尾根頂部と分散して検出された。溝状のものは5本以上検出されたのであるが、竪穴住居跡、段状遺構等の施設の一部としてとらえるものは溝状遺構から除外した。道路状遺構は西斜面と尾根頂部で検出された。形態的には、地面を溝状に掘り込むという点で溝状遺構と似ているのであるが、階段状のものをもつもののみ道路状遺構とした。

以上の遺構は時代的にみると、弥生時代（中期後葉～後期後半）、古墳時代（中期～後期）、奈良時代及びそれ以降に分かれる。時代判定は土器を中心に行なった。

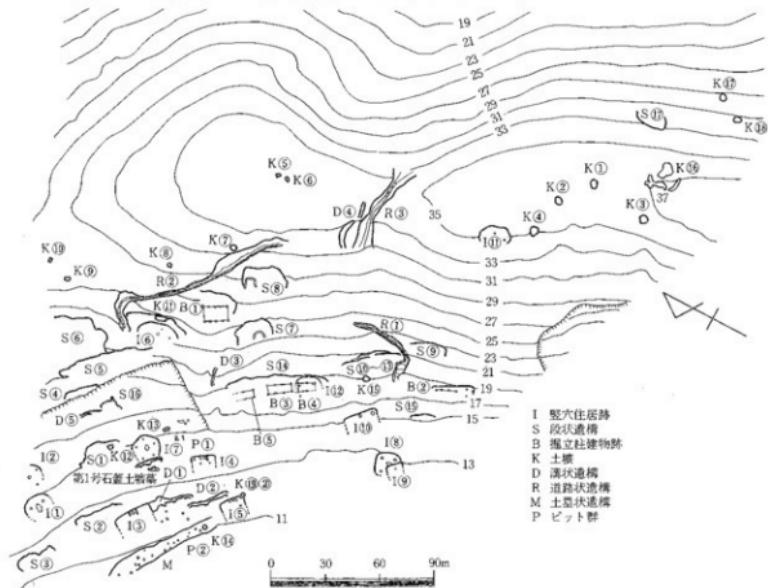
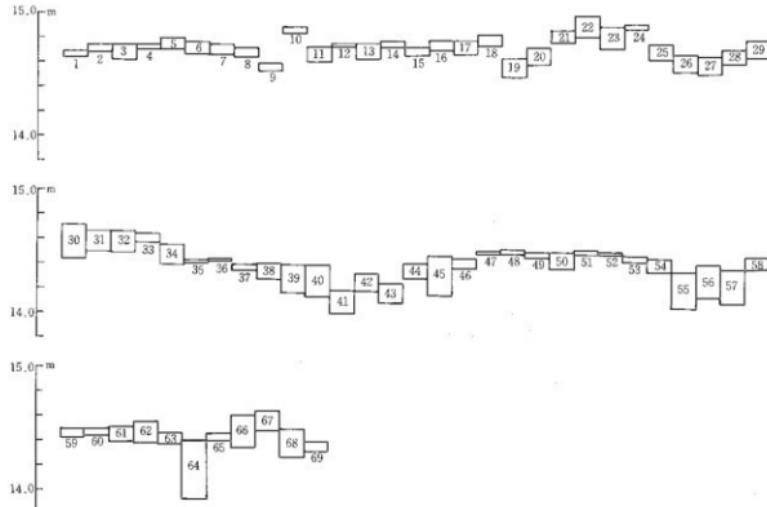


図7 集落跡関係遺構配置図

第2節 穴住居跡

第1号穴住居跡（挿図8～15、図版4・24）

位 置 第1号穴住居跡は西斜面中腹調査区北端のテラス部に立地している。第2号穴住居跡の南西1m、第3号段状遺構の北東6mに位置しており、標高は14.5mである。第1号穴住居跡は南側の穴住居跡（SI 01a）が営まれた後、これを埋めて床面を0.2m高くし、北側に拡張改築（SI 01b）している。SI 01aは推定長径5.2m前後の楕円形の平面プランを呈するものと考えられ、P40とP64を主柱穴とし、4本柱の住居跡と推定される。P55は特殊ピットで径60cmの不整円形を呈し、深さ30cmをはかる。他に床面において深さ5～33cmのピットを多数検出しているが、深さ5cm前後のピットのいくつかがSI 01bの柱穴と考えられる以外、性格は不明である。壁際には幅15cm、深さ5cmの側溝があげていて。SI 01bはSI 01a周壁外の北から東側にかけて壁際に幅15cm深さ5cmの側溝が遺存している。復元すれば径6m以上の円形住居になると思われるが、特殊ピット等は確定できない。SI 01bの外側には北側0.7mに高さ0.25m前後の段がつくられており、SI 01bの後背斜面に展開することからSI 01bに伴う遺構と考えられる。出土遺物は土器石器類が豊富に出土しており、SI 01aの床面では北隅で小型甕Po 1が縦割りにされ伏せた状況で検出された他、北東壁側溝上で磨製石剣が出土した。長さ17.5cm、最大幅3.4cmをはかる断面菱形の鉄劍型磨製石剣で青味を帯びた暗灰色粘板岩を材質とする完形品である。他に埋土中、床面から壺・甕・高坏・蓋・算盤玉形土鍤・土器転用鋸鍼車・サヌカイト質安山岩のチップ・径3～4cm前後の河原石・磨石が出土している。SI 01b埋土中では擦り跡施溝のある板状石・扁平片刃石斧・弥生土器片が出土している。これらの遺物から第1号穴住居は弥生時代中期後葉のものと考えられる。



挿図8 第1号穴住居跡ピット深度図



图9-1号第1号竖井住后踏实测图

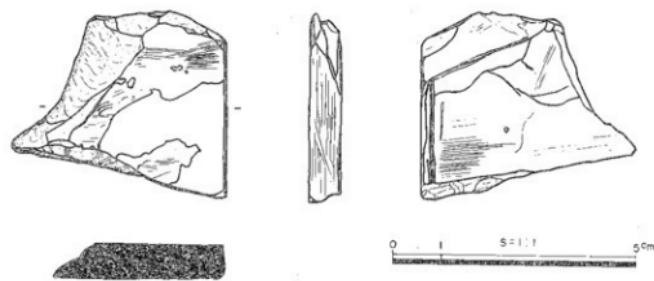


插图10 第1号竖穴住居跡出土石製品実測図

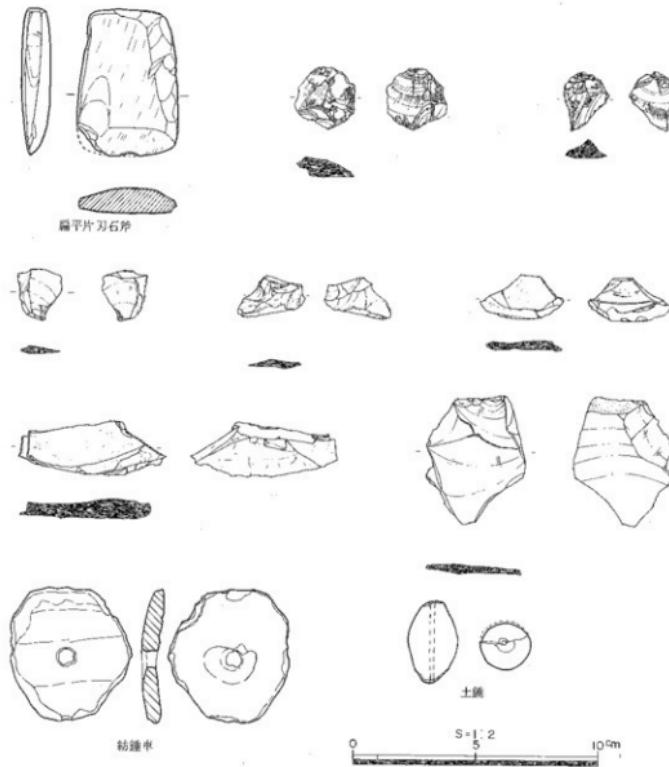


插图11 第1号竖穴住居跡出土扁平片 刃石斧他実測図

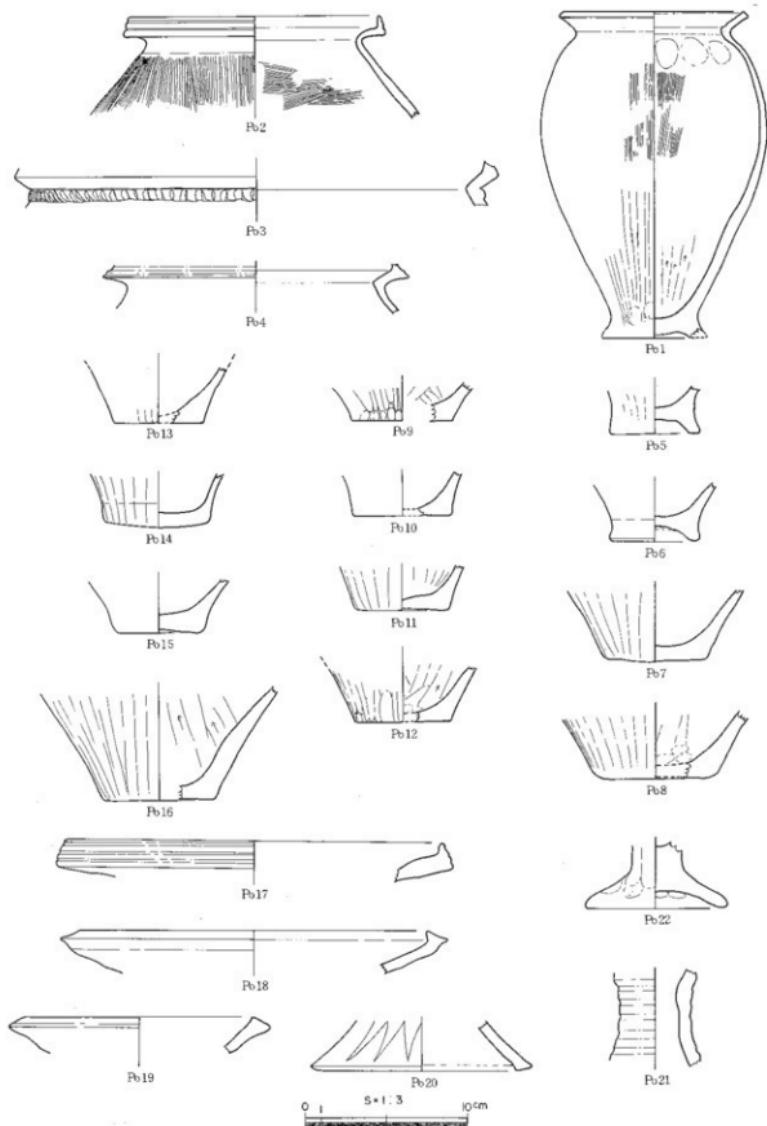
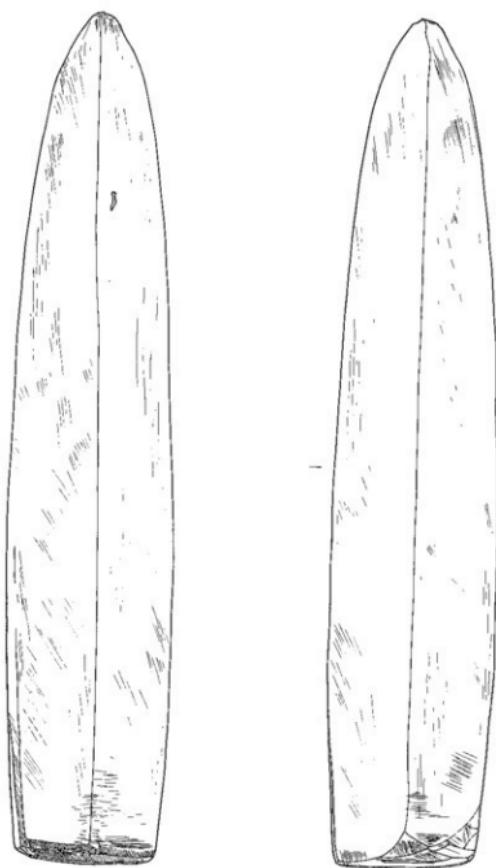


插图12 第1号竖穴住居跡出土土器实测图



0 1 S=1:1 5cm

插圖13 第1號整穴住居跡出土磨製石劍實測圖

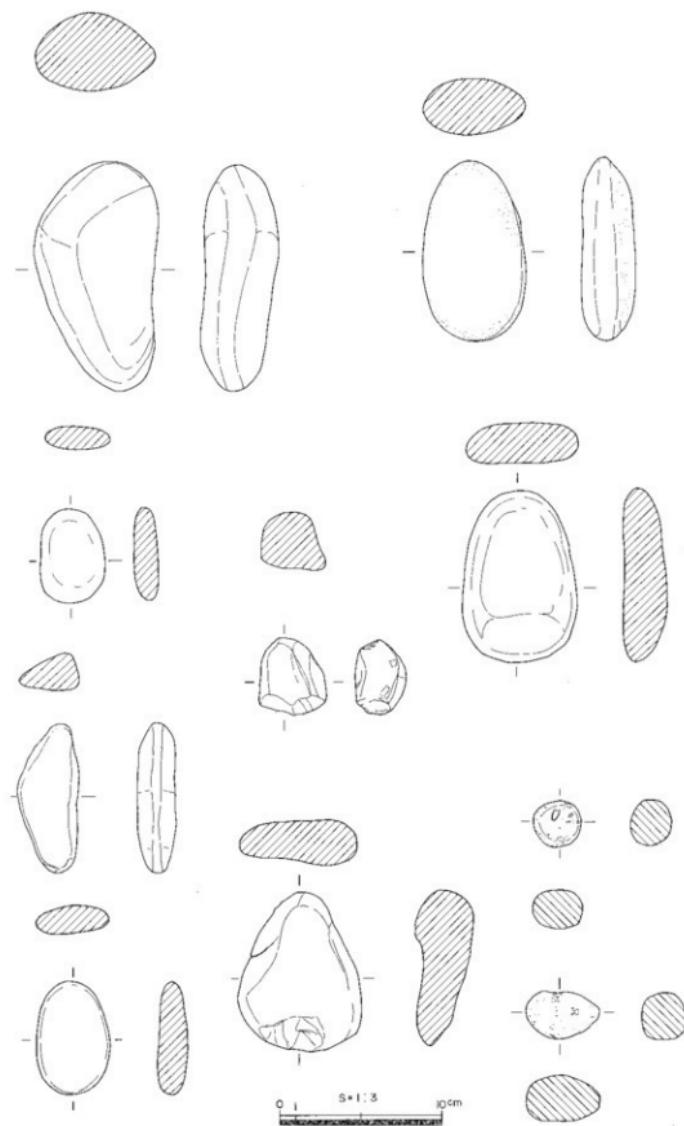


插圖14 第1号竪穴住居跡出土石実測圖

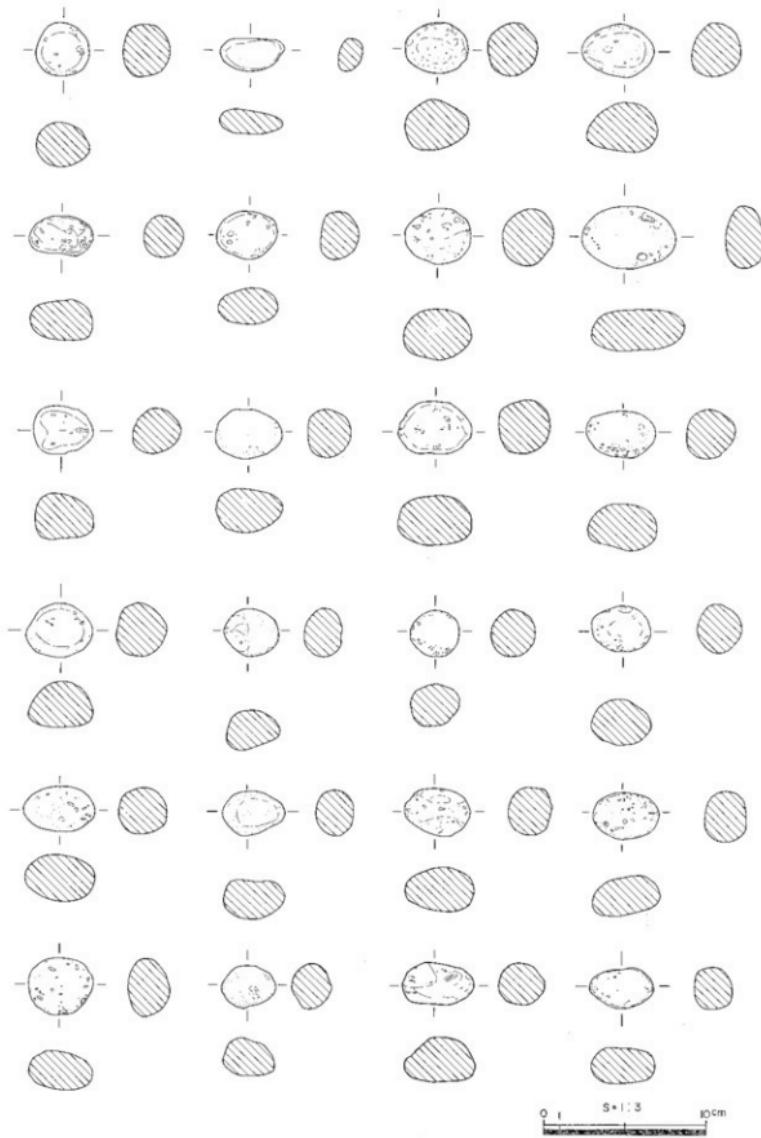
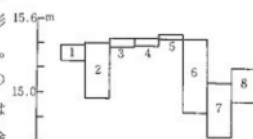


插图15 第1号竖穴住居跡出土丸石実測図

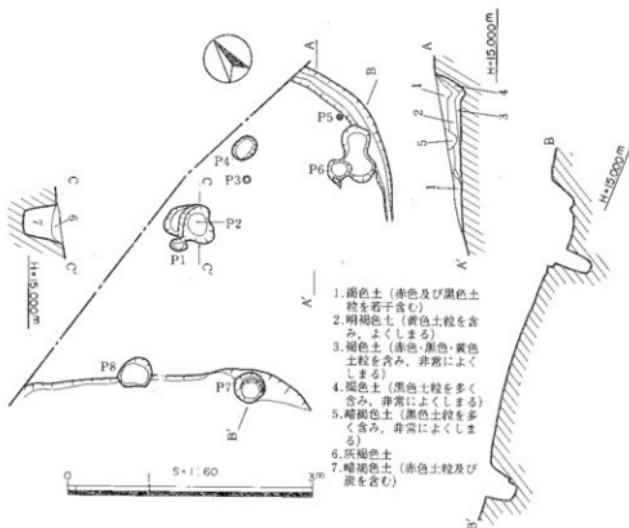
第2号竪穴住居跡（掲図16～18、図版5）

位 置 西斜面南端の下部緩斜面、標高16m付近に位置し、第1号竪穴住居跡と切り合い関係にある。斜面下側の床面が流出し、北側部が調査区外まで延びているため全貌は明らかではないが、平面形は円形を呈するものと思われる。最大残存壁高は0.34mをはかる。床面の大きさは残存部分より推定するに、径4.4m程度であったものと思われる。側溝は南東部壁際で検出された。幅約15cm、深さは最深部で4cmをはかり、断面U字型を呈する。数個のビットを検出したが、主柱穴となり得るものは、壁に寄りすぎた感もあるが、P6(31×22-60)・P7(37×37-38)の2個と考えた。柱穴間距離は2.9mをはかる。P6・P7の位置、竪穴の平面形より4本の主柱穴をもつ建物であったと思われる。特殊ビットは床面中央部と思しき位置でP2(60×45-47)を検出した。平面形はいびつな円形を呈し、北西側のみ2段掘りとなっている。埋土下層で炭及び焼土を検出した。遺物は全く出土しなかった。第2号竪穴住居跡は、平面形より弥生時代中期のものであると思われる。



掲図16 第2号竪穴住居跡ビット深度図

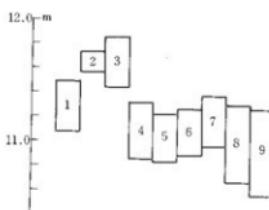
遺 物 時 期 遺物は全く出土しなかった。第2号竪穴住居跡は、平面形より弥生時代中期のものであると思われる。



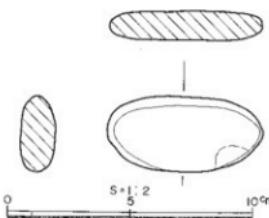
掲図17 第2号竪穴住居跡実測図

第3号竪穴住居跡（挿図19～21、図版5・25）

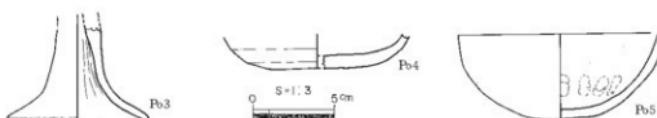
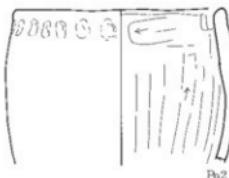
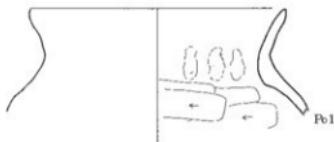
位 置 西斜面北側の下部緩斜面、標高12m付近に位置し、第5号竪穴住居跡の北北西約13m、第4号竪穴住居跡の西北西約11mにある。竪穴南東側は第1号溝状遺構を掘り込む。斜面下側部が流出しているため、明確ではないが、平面形は方形であったものと思われる。残存最大壁高は0.26mである。床面上で住居の側溝と思われる溝が3本検出された。（竪穴壁際よりI・II・IIIとする）このことより本住居は2回以上の建替え拡張があったものと思われる。側溝Iは北東一南西長2.1m残存、北西一南東長6.34m、幅約20cm、深さは最深部で14cmをかる。側溝IIは北東一南西長1.3m残存、北西一南東長5.3m残存、幅約20cm、深さは最深部で7cmをかる。側溝IIIは北東一南西長0.45m残存、北西一南東長4.6m残存、幅約20cm、深さは最深部で6cmをかる。側溝Iを有する住居に伴う特殊ピットはP4（60×46-46）と思われる。同様に側溝IIにはP7（51×46-41）、側溝IIIにはP6（52×41-37）が伴うと思われる。それぞれ溝際より10~20cm離れて位置する、遺構の肩部及び床面でP1（32×29-41）、P2（29×28-16）、P3（45×39-41）、P8（35×29-62）、P9（35×32-70）を検出した。深度よりP8・P9がいずれかの住居の主柱穴とも考えられるが、相対する柱穴は検出されなかった。出土遺物内の、図化できたものは壺Po1・壺Po4、5・鉢Po2・高壺の脚部Po3・磨石である。これらの内Po4は特殊ピット（P4）内で出土した。出土した遺物より第3号竪穴住居跡は古墳時代中期のものであると思われる。



挿図18 第3号竪穴住居跡ピット深度図



挿図19 第3号竪穴住居跡出土石実測図



挿図20 第3号竪穴住居跡出土土器実測図

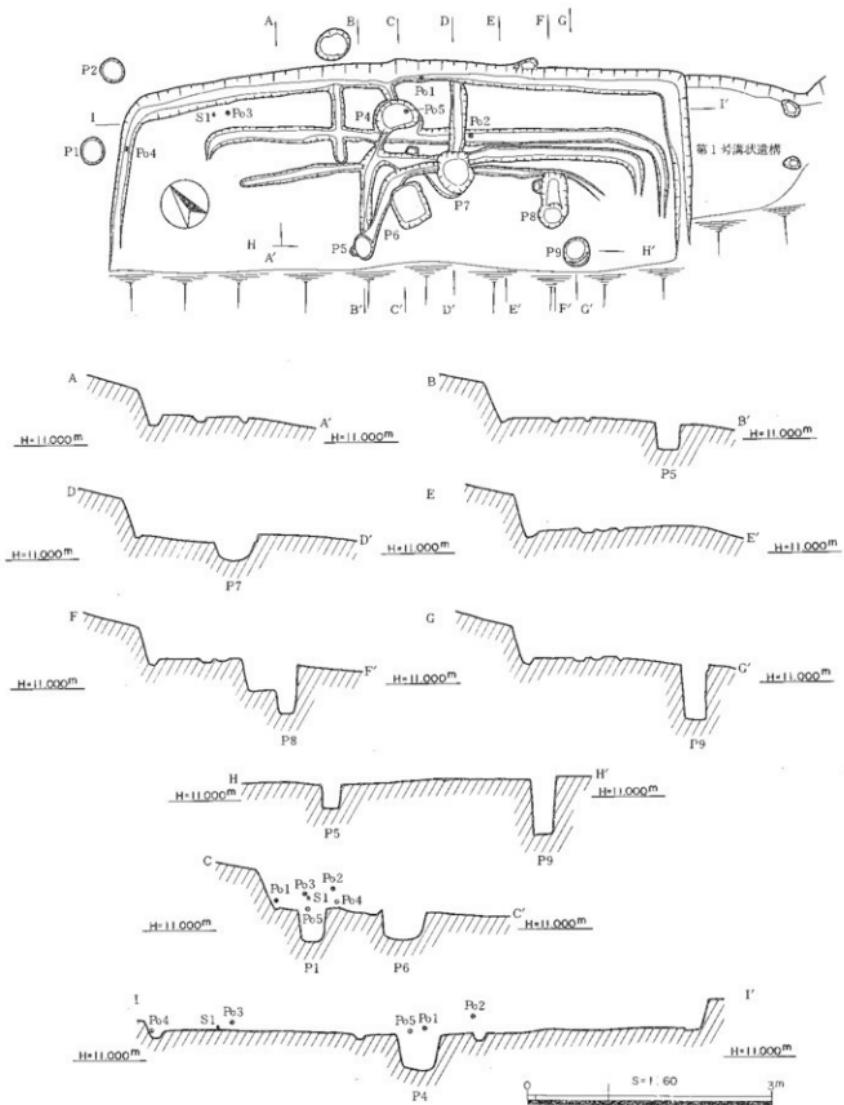


图21 第3号竖穴住居跡実測図

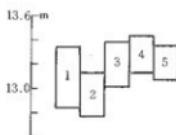
第4号竪穴住居跡（挿図22～25、図版5・25）

位 置 西斜面の下部緩斜面、標高14m付近に位置し、第3号竪穴住居跡の東南東約13m、第5号竪穴住居跡の北東約8mにある。斜面上側を掘り込み床面を造成しているため、斜面下側の床面が流出しており全貌は明らかではないが、平面形は方形であったものと思われる。

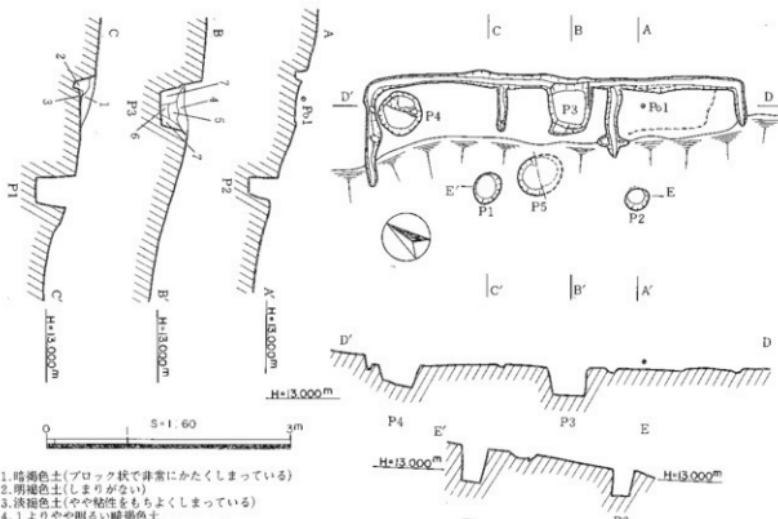
形 態 床面の大きさは南北長4.3m、東西長は1.1m以上である。最大残存壁高は0.19mをはかる。側溝は壁際で1本検出された。幅約14cm、深さは最深部で8cmをはかり、断面U字型を呈する。主柱穴はP1(37×33-47)、P2(27×25-36)の2個を検出した。柱穴間距離は1.85mをはかる。検出した柱穴の位置・竪穴の平面形より、4本柱の建物であった可能性が高い。特殊ピットを、東壁際の中央より、やや南側に位置した位置で検出した。平面形はややいびつな方形で、長軸67cm、短軸53cm、深さは床面より33cmをはかる。特殊ピットの両脇で溝を検出した。深さは最深部で7cmをはかる。土器器片が特殊ピット内で出土したが、図化は不可能であった。出土遺物のうち図化できたものは、甕Po1・磨石2個である。Po1は床面上で半面を欠いて横たわる様に出土した。出土遺物より第4号竪穴住居は古墳時代中期のものであると思われる。

遺 物

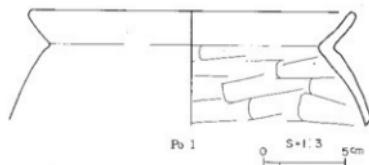
時 期



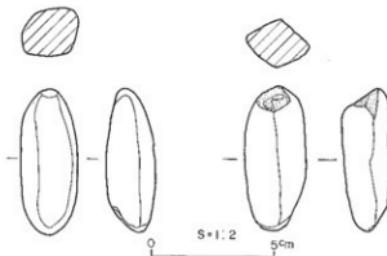
挿図22 第4号竪穴住居跡ピット深度図



挿図23 第4号竪穴住居跡実測図



挿図24 第4号竪穴住居跡出土土器実測図



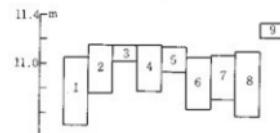
挿図25 第4号竪穴住居跡出土磨石実測図

第5号竪穴住居跡（挿図26～28、図版6・25）

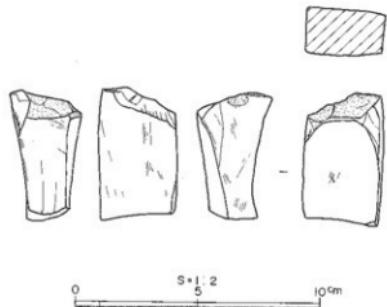
位 置 西斜面北側最下部、標高13m付近に位置し、第5号竪穴住居跡の南西約8m、第3号竪穴住居跡の南南東約13mにある。第4号竪穴住居跡と同様斜面下側の床面が流出しており全貌は明らかではないが、平面形は方形であったものと思われる。壁高は最大で0.16mを残す。床面の大きさは、北西—南東4.7m、北東—南西長7m以上である。側溝は壁際で1本検出された。幅約15cm、深さは最深部で6cmをはかり、断面U字型を呈する。床面で検出したピットの内主柱穴になり得るものは、P1(40×40-56)のみである。P1の平面的な位置より2本柱の建物であったものと思われる。又、東側壁際の中央部に特殊ピットP2(72×54-39)が検出された。平面形は円形であるが、西側部に深さ5cm程度の不整形な掘り込みと深さ2cm程度の溝がつく。又、特殊ピットの両脇に1本ずつ、2~5cm程度の深さをもつ溝が検出された。P1の肩より北側に1.3mの地点で28×28cm程度の

遺 物 拡がりをもつ焼土塊が検出された。多数の土師器片の出土をみたが、風化損傷が著しく図化できるものではなく、小型の砾石のみが図化可能であった。出土遺物よりの時期判定はできないのであるが、竪穴の平面形及び特殊ピットの位置を指標とすれば、第4号竪穴住居跡と同時期（古墳時代中期）のものと思われる。

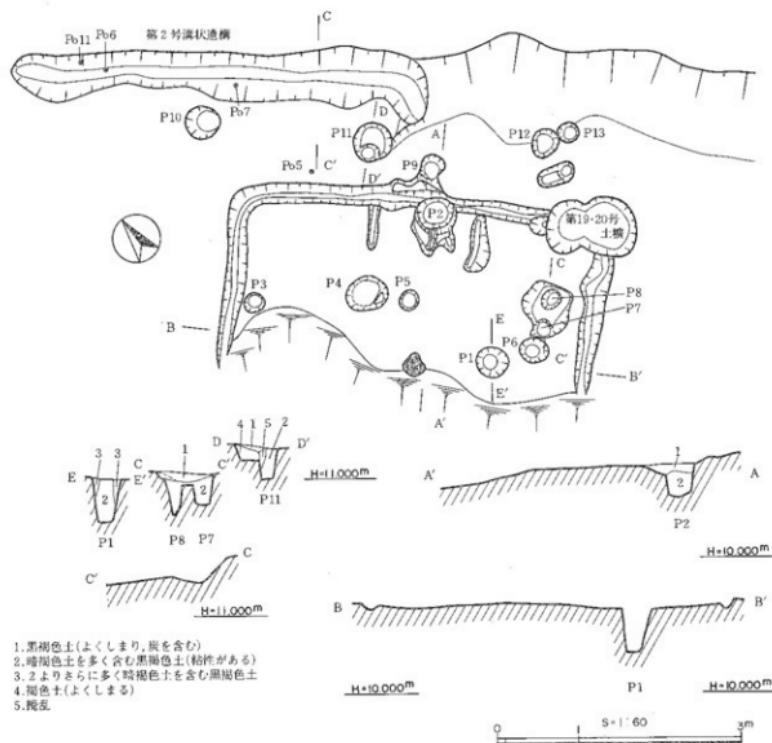
時 期



挿図26 第5号竪穴住居跡ピット深度図



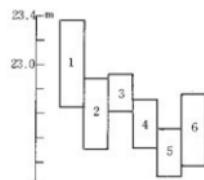
挿図27 第5号竪穴住居跡出土砥石実測図



插図28 第5号竪穴住居跡及び第2号溝状遺構実測図

第6号竪穴住居跡（插図29～35、図版6・25）

位 置 西斜面北側上部の急斜面、標高24m付近に位置し、第7号段状遺構約10m北、第8号段状遺構約13m北西にある。急斜面を2段に掘り込み床面を造成している。上段・下段共にいびつな層状を呈し、上段が下段を開いて込む様に造られている。上段・下段は埋土の状況により同時期に造られたものであると思われる。急斜面において、生活空間を大きく確保するために、本来の竪穴住居部である下段に付属するかたちで上段部が造成されたものと思われる。上段の規模は、残存最大壁高1.22m・南北長11.6m・東西幅0.57～2.9mである。下段は本来円形を呈していたものと思われ、その規模は、最大残存壁高0.46m・南北径7.2m・東西径は1.3mを残すのみである。側溝は下段で検出された。東側部は壁際に、他の部分は壁から離れたかたちで検出された。北側の側溝が折れ曲がっているが、南側も



插図29 第6号竪穴住居跡ピット深度図

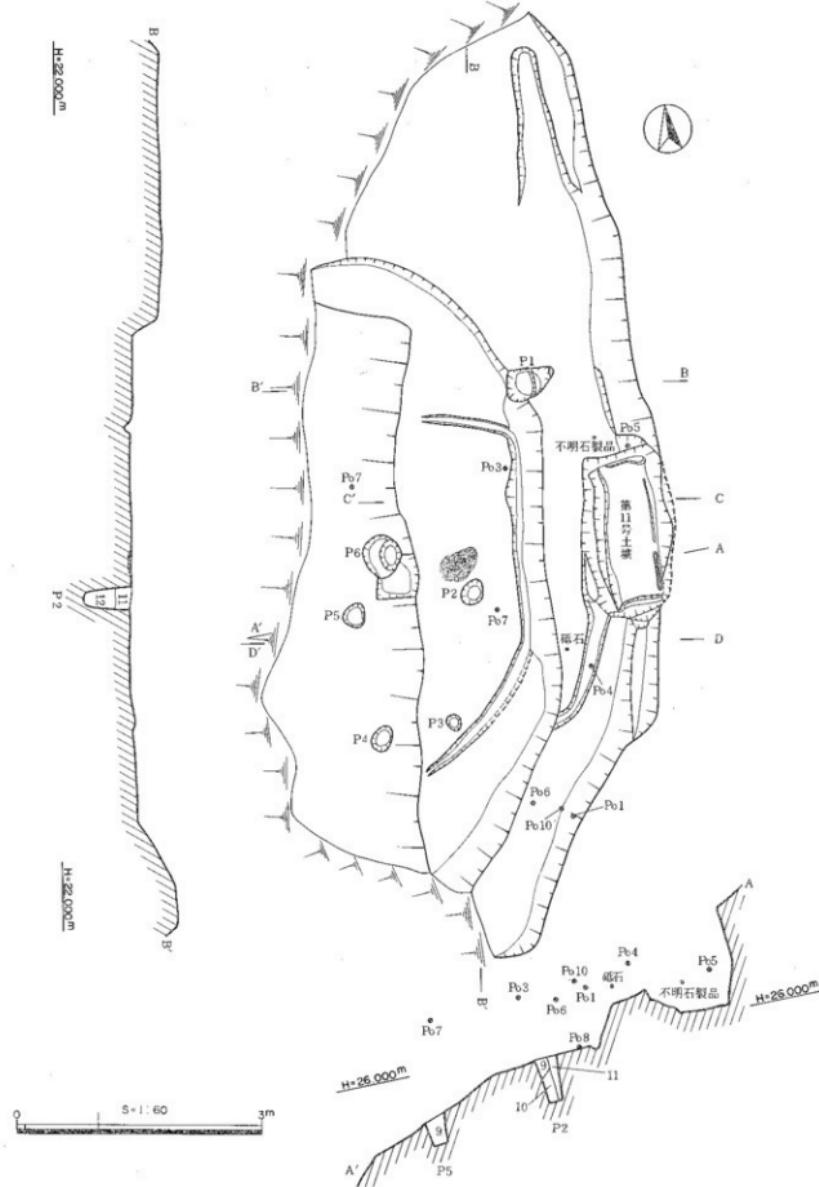
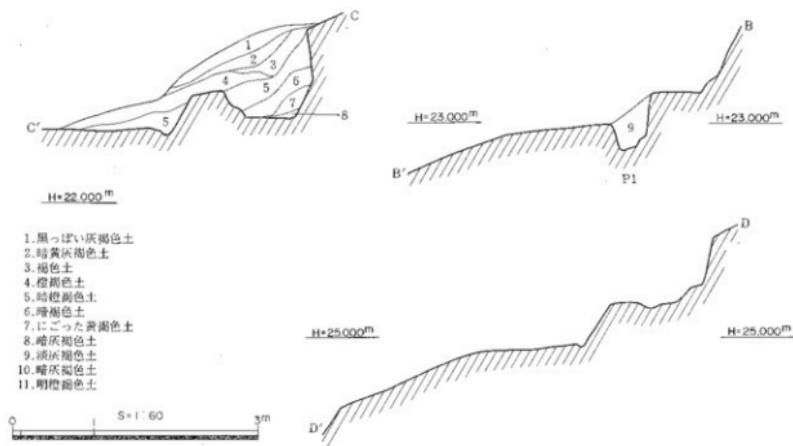


图30 第6号竖穴住居跡実測図

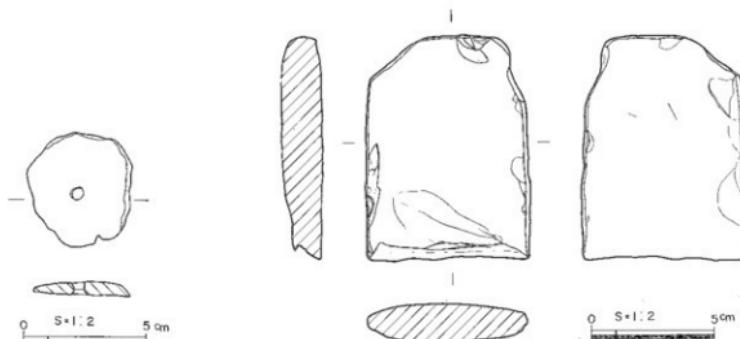


插図31 第6号竪穴住居跡断面図

それの如き曲線を描いてより北側にのびていたものと思われる。幅約14cm、深さは最深部で5cmをはかり、断面U字型を呈する。斜面下側の床面が流出しているため、主柱穴と思われるものはP2(34×26-57)とP4(33×22-40)の2本分のみが検出されただけである。柱穴間距離2.15mをはかる平面的な位置より、本住居は4本柱の建物であったかと思われる。特殊ピットは床面中央部と思しき位置で検出した。南東部が後世の掘り込みにより搅乱をうけているのであるが、平面形はいびつな楕円形を呈し、2段掘り、長軸53cm・短軸46cm・深さ59cmをはかる。上段中央の壁際で長方形の土壤を検出した(第11号土壤)。埋土の状況より、本竪穴住居使用時には開口していたものと思われ、埋葬施設ではないと考える。土壤内床面上で甕の口縁が出土した。貯蔵用の土壤であったと思われる。下段床面上P2のそばで焼土を検出した。5.3×35cmの抜がりをもつ。出土遺物の内図化できたものは甕Po1

遺 物
時 期

～Po5・広口甕Po7・把手付甕Po6・砥石・不明石製品などである。出土遺物より第6号竪穴住居は弥生時代中期後葉のものと思われる。



插図32 第6号竪穴住居跡出土
土防壁草率測図

插図33 第6号竪穴住居跡出土不明石製品実測図

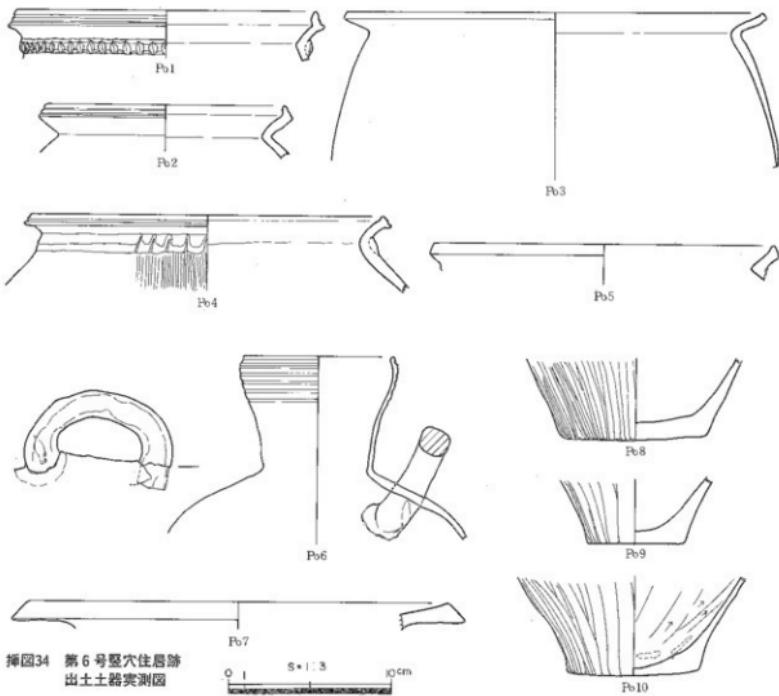


插圖34 第6号堅穴住居出土土器實測圖

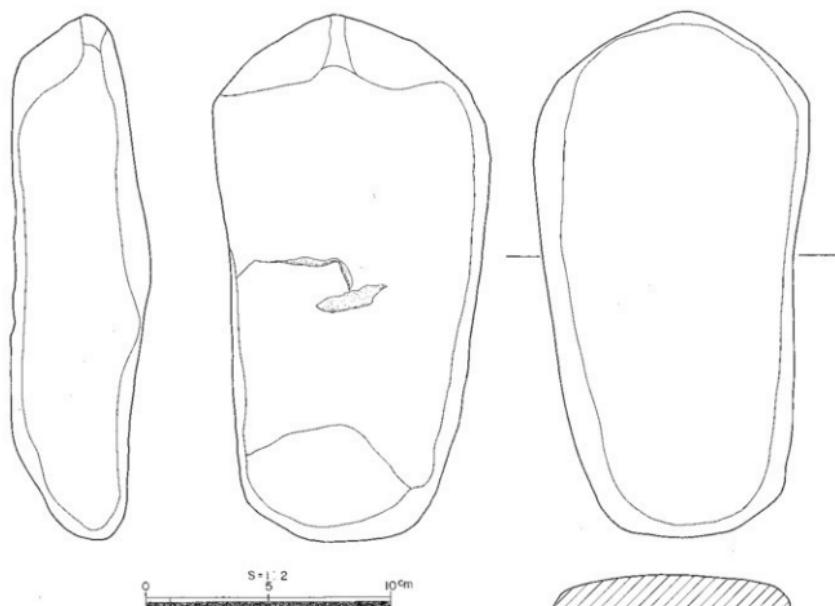
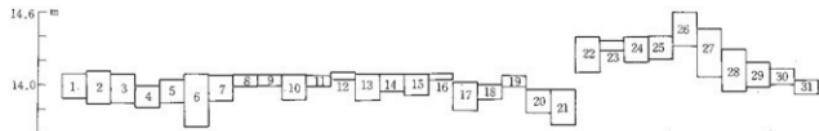


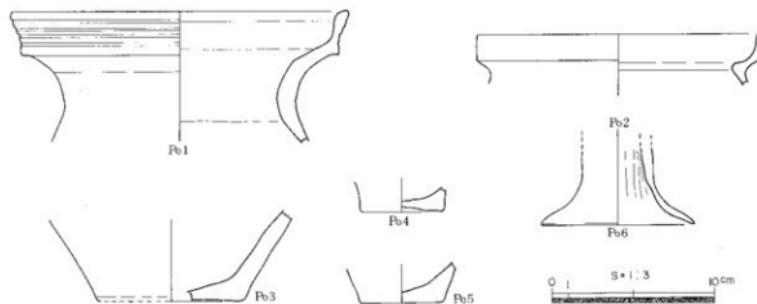
插圖35 第6号堅穴住居出土石器實測圖

第7号竪穴住居跡（挿図36～39、図版7・26）

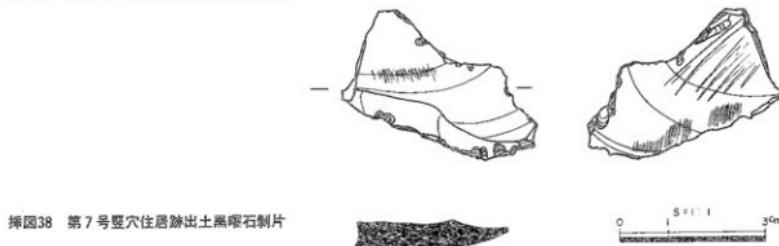
位 置 西斜面北側下部の緩斜面、標高15m付近に位置し、第8号竪穴住居跡の北北西約40mにある。斜面下側が流出しており全貌は明らかではないが、平面形は隅丸五角形を呈していたものと思われる。残存最大壁高は0.46mをはかる。床面は、南北径が5.5m、東西径が4m以上の規模をもっていたと考えられる。側溝は、壁際で検出された。幅約16cm、深さは最深部で7cmをはかり、断面U字型を呈する。床面上で十数個のピットを検出したが、主柱穴としては、P1(40×37-20)、P2(35×35-28)、P3(38×35-24)、P4(35×25-18)、P5(27×25-20)の5本が考えられる。P4・P5以外は2段掘りであった。柱穴間距離はP1より1.85m・2.30m・2.15m・2.05m・2.50mであった。本住居は5本柱の建物であったと思われる。特殊ピットは床面中央部で検出された。平面形はややいびつな方形をなす。埋土はよくしまっており、第4層より多量の焼土・炭が検出された。長軸85cm、短軸70cm、深さは44cmをはかる。出土遺物の内固化できたものは壺Po1・壺Po2・底部Po3～Po5・高環筒脚部Po6・黒曜石の剥片である。出土遺物より第7号竪穴住居は弥生時代後期後半のものであると思われる。



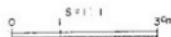
挿図36 第7号竪穴住居跡ピット深度図

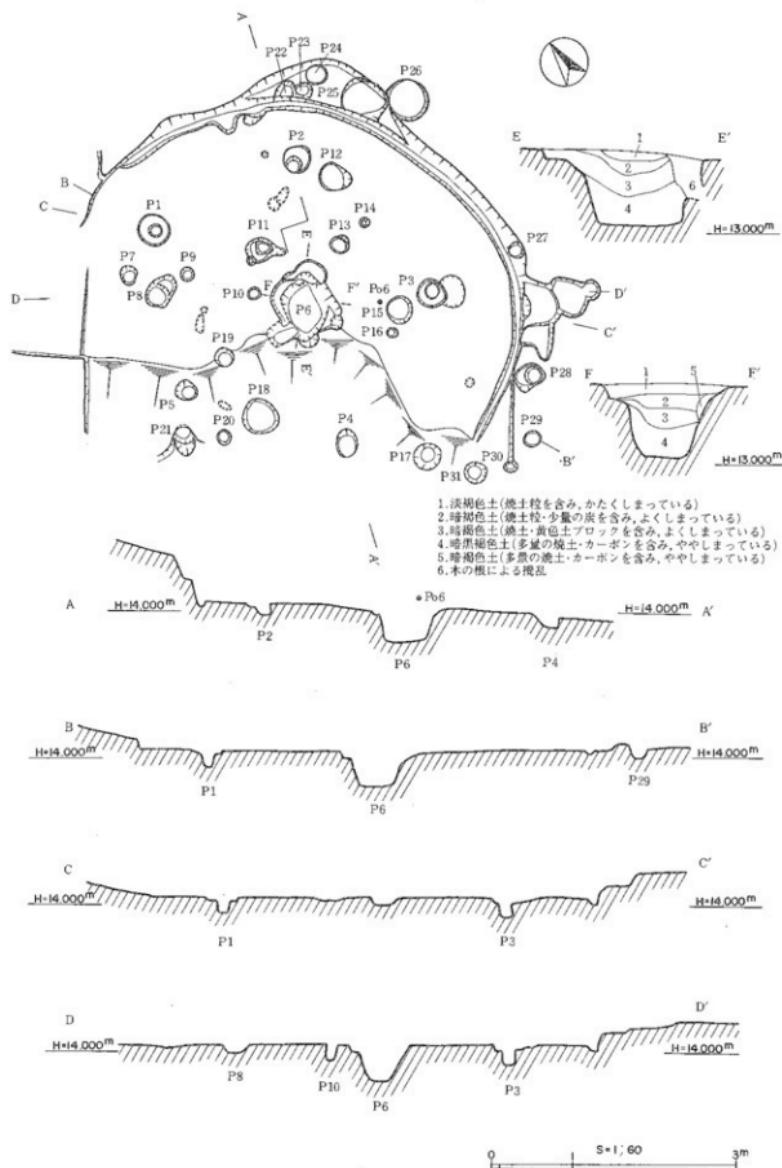


挿図37 第7号竪穴住居跡出土土器実測図



挿図38 第7号竪穴住居跡出土黒曜石片

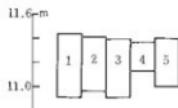




挿図39 第7号竪穴住居跡実測図

第8号竪穴住居跡（挿図40～42・45、図版7・26）

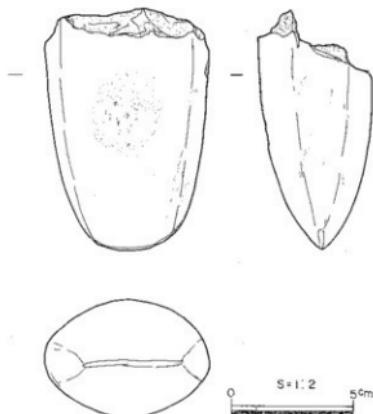
位 置 西斜面中央最下部、標高13m付近に位置し、第7号竪穴住居跡の南南東約39mにある。斜面下側が流出しているが、平面形は隅丸方形であったものと思われる。最大残存壁高0.64m、床面の大きさは南北径4.3mをはかる。竪穴の斜面上側90cm程度の所に27cm程度の高さをもつ段が造られている。本住居に伴う段であると思われる。側溝は壁際で検出された。幅約12cm、深さは最深部で4cmをはかり、断面U字型を呈する。主柱穴はP1（55×55-53）、P2（63×58-46）、P3（55×55-48）の3本が検出された。全て2段掘りがなされている。柱穴間距離はP1-P2が2.50m、P2-P3間が2.55mである。本住居の西側部が池の堤防に入り込むため3本分だけの検出に止まつたが4本柱の建物であったものと思われる。特殊ピットは、床面中央部で検出された。平面形はいびつな長方形で、2段掘り（2段目は円形）がなされている。西側が第9号竪穴住居によって切られているため、東西軸長は明らかではないが、南北軸は64cm、深さは29cmをはかる。特殊ピットの北側部よりP3に向って幅約20cm、深さ4cmの溝が床面に掘り込まれている。特殊ピットのそばで2個の焼土域を検出した。それぞれ、45×30cm、50×35cmの不整形な塗がりをもつ。出土遺物の内同化できたものは、甕Po1・高环Po2・石斧である。出土遺物より第8号竪穴住居は弥生時代後期後半のものであると思われる。



挿図40 第8号竪穴住居跡ピット深度図



挿図41 第8号竪穴住居跡出土土器実測図



挿図42 第8号竪穴住居跡出土石斧実測図

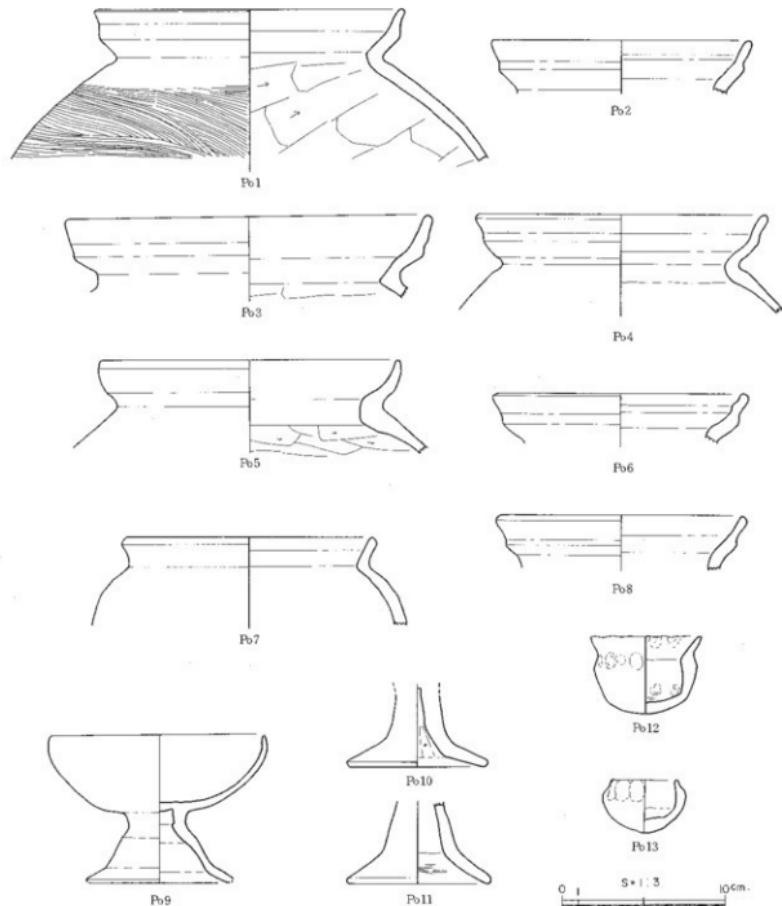
第9号竪穴住居跡（挿図43~45、図版7・26）

位 置 第8号竪穴住居の埋土を掘り込んで造られている。土層断面より、掘り込みの深さは0.92mあったものと思われる。西側方向に池の堤防があり、掘り進めなかったため全貌は明らかにならなかったが平面形は方形ないし長方形をなしていたものと思われる。床面の大きさは、北西一南東長2.6m、北東一南西長は1.4mまではかることができた。側溝は壁際で検出された。幅約16cm、深さは最深部で6cmをはかり、断面U字型を呈する。柱穴としてP1（45×40×19）を検出した。2本柱の住居と考えられる。特殊ピットは検出されなかった。

遺 物 本住居の床面上に4~7cmの厚さで炭を多量に含む黒灰色の土が堆積していた。このことにより、
時 期 本住居は焼失した可能性が高い。出土遺物の内同化できたものは壺Po1~Po8・高杯Po9~Po11・手すくね土器Po12~13である。出土遺物より第9号竪穴住居は古墳時代中期のものであると思われる。



挿図43 第9号竪穴住居跡ピット深度図



挿図44 第9号竪穴住居跡出土土器実測図

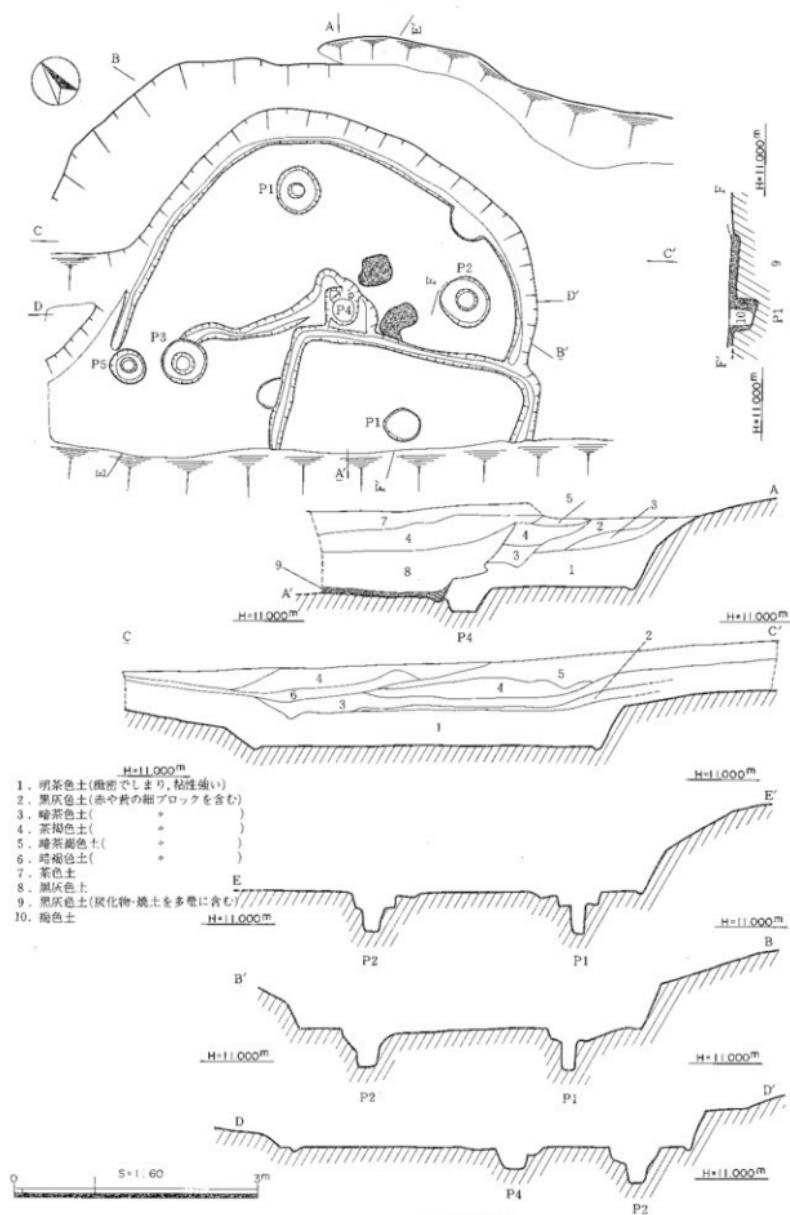


図45 第8・9号堅穴住居跡実測図

第10号竪穴住居跡（挿図46～48、図版8・27）

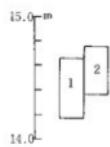
位 置 西斜面中央下部の急斜面、標高15～16m付近に位置し、第9号竪穴住居跡の北西約10mにある。急斜面での立地であることから、斜面下側部の流出が著しい。そのため全貌は明らかではないが、平面形は方形ないしは長方形であったものと思われる。残存最大壁高0.58m、床面の大きさは北西—南東長は5.4m、北東—南西長で残存2.2mをはかる。側溝は壁際で検出された。幅約10cm、深さは最深部で16cmをはかり、断面U字型を呈する。遺構は残存状況が悪いため、柱穴を特定できなかった。特殊ピットは壁際中央部で検出された。平面形は、いびつな隅丸長方形をなし、長軸56cm、短軸39cm、深さ49cmをはかる。特殊ビット内埋土下層において炭を検出した。出土遺物の内図化できたものは环Po1

形 態

遺 物

時 期

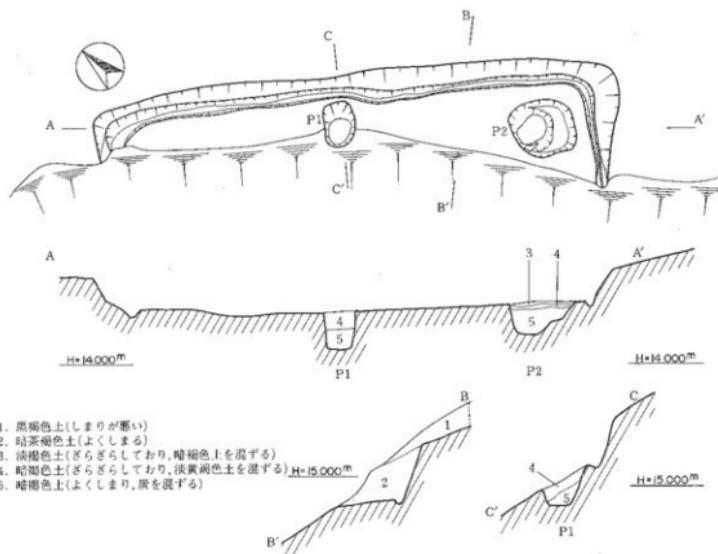
・高环の环部Po2である。出土遺物より、第10号竪穴住居は古墳時代中期のものと思われる。



挿図46 第10号竪穴住居跡 ピット深度図



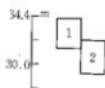
挿図47 第10号竪穴住居跡出土土器実測図



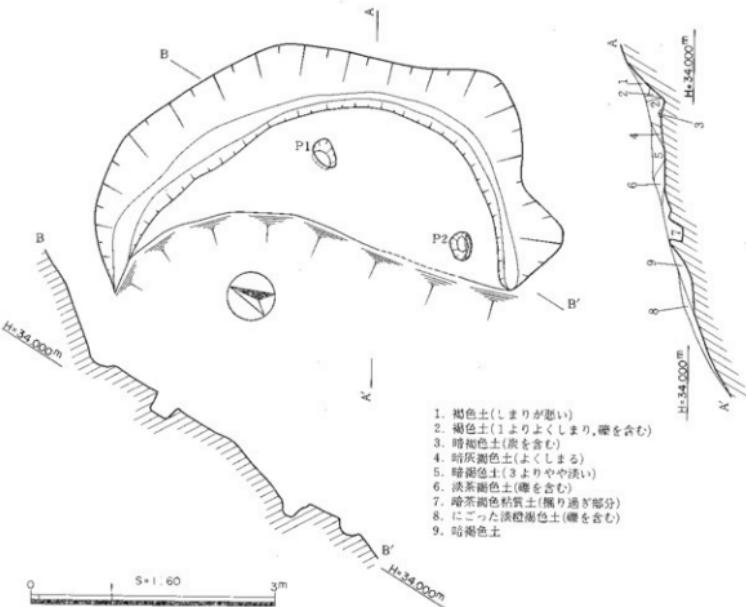
挿図48 第10号竪穴住居跡実測図

第11号竪穴住居跡（掲図49・50、図版8）

位 置 西斜面南側、尾根頂部より斜面がはじまるあたり、標高35m付近に位置する。東宗像遺跡で検出された竪穴住居跡のなかで一番高い所に立地している。すぐ上に東宗像7号墳、すぐ下には東宗像西1号横穴が存在する。急斜面を掘り込んでいるため、斜面下側が流出し全貌は明らかではないが、平面形は円形であったものと思われる。床面の大きさは、南北径4.5m、東西径残存1.56mをはかる。壁高は最大0.55mを残す。側溝は壁際で検出された。幅約13cm、深さは最深部で11cmをはかり、断面U字型を呈する。柱穴はP1(38×25-24)とP2(36×25-28)が検出された。柱間距離は2.05mである。床面が流出しているため推測の域を出ないが、4本分の柱穴が存在していたと考えられる。特殊ピットは検出されなかった。時期は不明である。



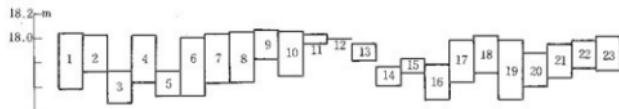
掲図49 第11号竪穴住居跡ピット深度図



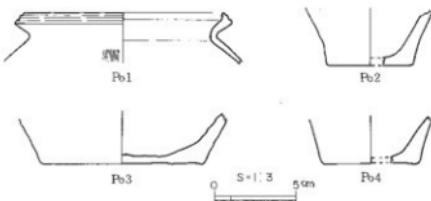
掲図50 第11号竪穴住居跡実測図

第12号竪穴住居跡（挿図51～54、図版8・27）

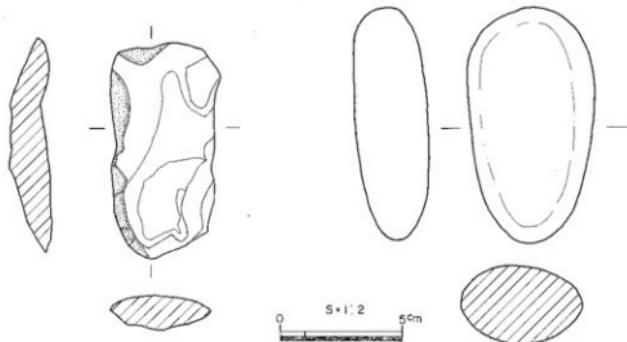
位 置 西斜面中央、斜面の中程、標高18m付近に位置する。第4号掘立柱建物検出面の下層で検出した。
形 態 第14号段状造構の平坦面をさらに掘り込むかたちで竪穴住居を造っている。側壁の残存状況は悪いが、残存部より類推するに、平面形は円形であったものと思われる。残存最大壁高は0.32mをはかる。側溝は検出されなかった。地山層を床面としているため、見落したとは思われない。床面上で検出されたピットの内P1（25×25-44）、P2（45×45-28）、P3（35×27-21）が主柱穴になると考えられる。柱穴間距離はP1-P2間が2.85m、P1-P3間が2.95mである。主柱穴としてこの3本が検出されたが、P1、P2、P3の平面的な位置と斜面下側の床面流出を考慮に入れるに、第12号竪穴住居は4本柱の建物であったものと思われる。特殊ピットP17は床面中央部と思わしき位置で検出された。平面形はいびつな円形2段掘りを呈し、(74×64-34)の規模をもつ。出土遺物の内同化できたものは、壁Po1・底部Po2～Po4・磨石・不明石製品である。出土遺物より、第12号竪穴住居は弥生時代中期後葉のものと思われる。



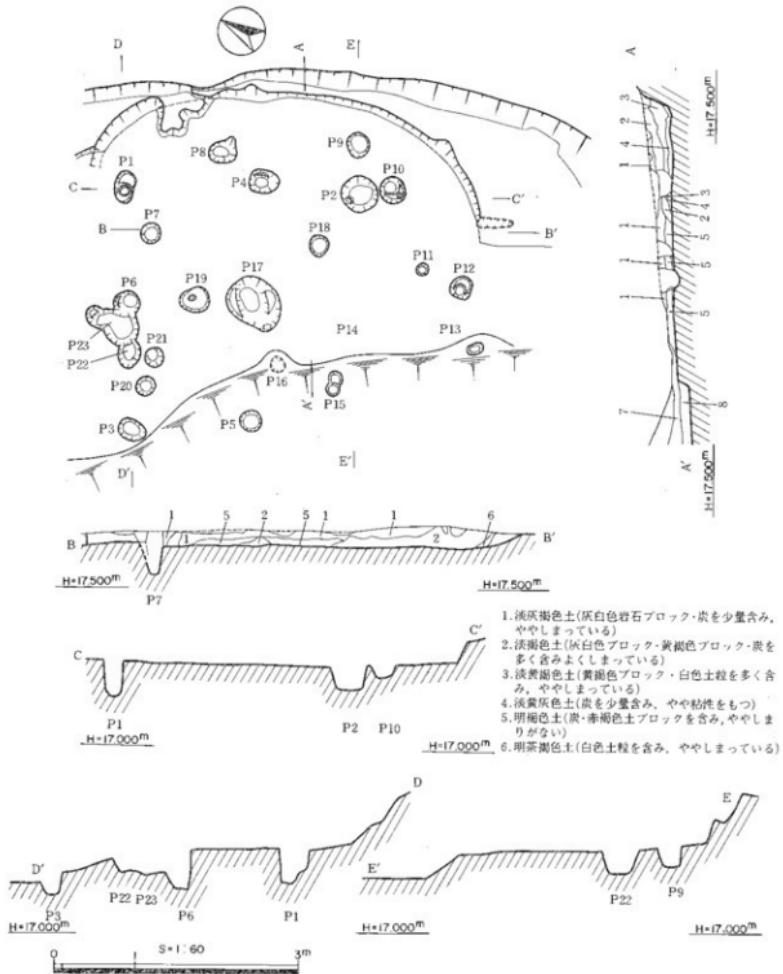
挿図51 第12号竪穴住居跡ピット深度図



挿図52 第12号竪穴住居跡出土土器実測図



挿図53 第12号竪穴住居跡出土不明石及び磨石実測図



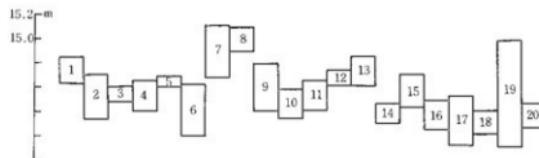
插図54 第12号竖穴住居跡実測図

第3節 段状遺構

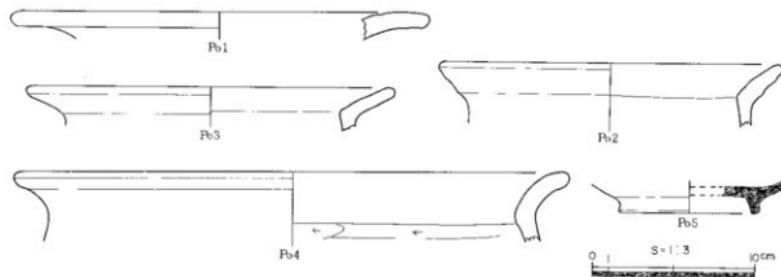
第1号段状遺構（挿図55～57、図版9・27）

位 置 形 態 遺 物 時 期

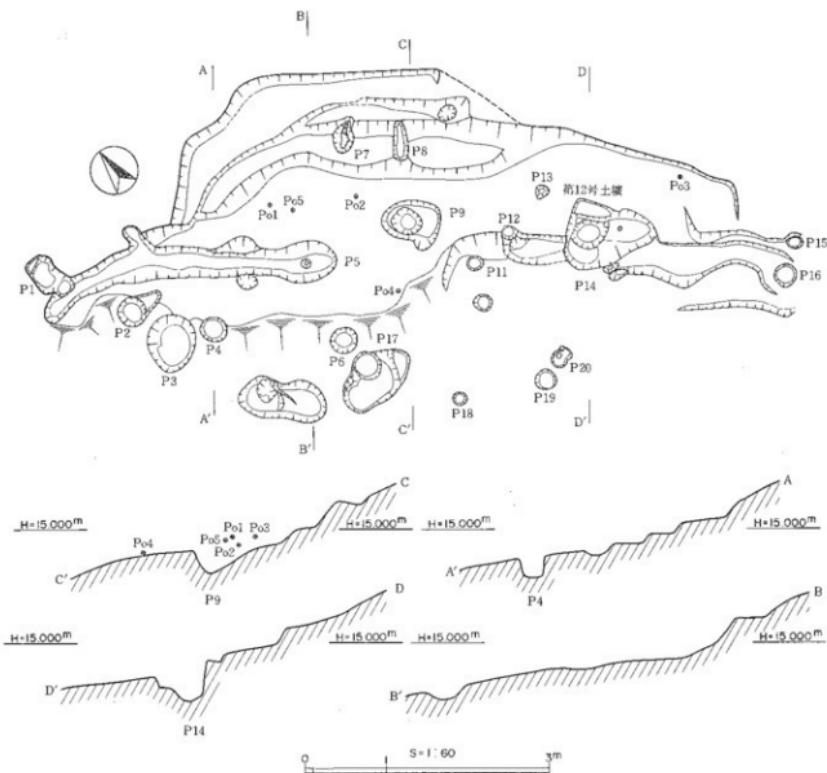
西斜面南側、下部緩斜面、標高15m付近に位置し、第2号段状遺構の北東約9m、第3号段状遺構の東約11mにある。緩斜面の上側を掘り込んで平坦面を造成している。小面積の平坦面も数を入れるなら、全体で4段を数えることができる。平面的にみると各段が切り合い関係にある様にも見えるが土層的には確認できなかった。この4段の平坦面は、同遺構内のものとして扱うことができる。平坦面の規模は北西—南東長8.3m、北東—南西幅残存3.0m、掘り込み壁高は最大0.58mを残す。遺構内より計20個のピットと、2本の溝を検出した。北西側の溝は、幅約50cm、深さは最深部で12cm、長さ3.75m、南東側の溝は幅約55cm、深さは最深部で60cm、長さ2.50mをはかる。それぞれ断面U字型を呈する。この2本の溝は、平坦面に造られた住居の側溝とも考えられるが、斜面下側の流出により遺構存続状況が良くないため、推測の域を出ない。しかし、溝が排水の役目を果し、何がしかの居住施設であったものと考えられる。出土遺物の内図化できたものは甕Po1～Po4、須恵器环Po5である。出土遺物より第1号段状遺構は奈良時代のものと思われる。



挿図55 第1号段状遺構ピット深度図



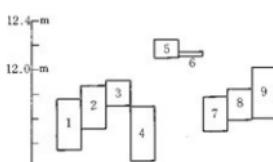
挿図56 第1号段状遺構出土土器実測図



挿図57 第1号段状遺構実測図

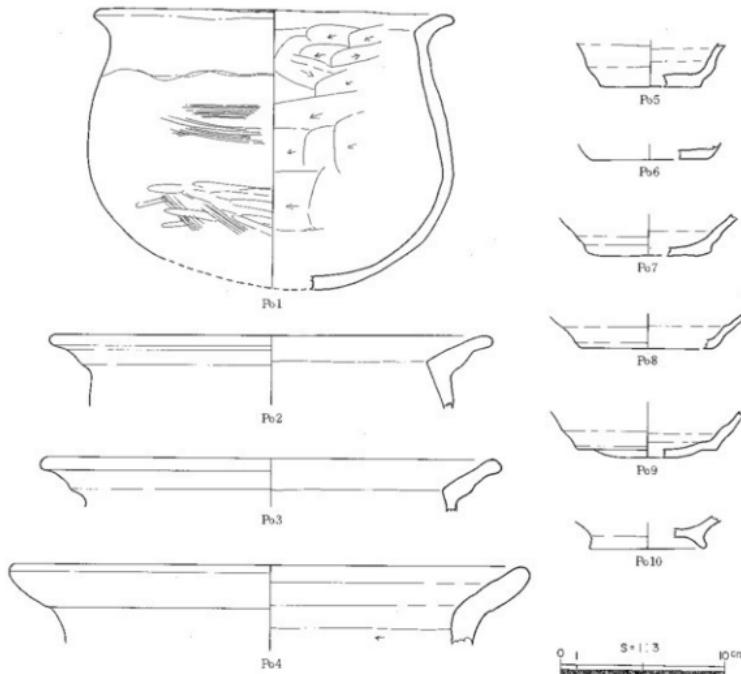
第2号段状遺構（挿図58～60、図版9・27）

位 置 西斜面北側の下部緩斜面、標高12m付近に位置し、第1号段状遺構の北東約9m、第3号段状遺構の東南東約6.5mにある。ほぼ等高線の走向に沿って斜面上側を掘り込み平坦面を造成している。残存する掘り込み壁高は最大0.34mをかる。平坦面の大きさは、北西—南東長9.6m、北東—南西幅残存1.5mをかる。遺構内において、ピット9個、溝2本が検出された。北西側の溝は、幅27～60cm、最深部の深さ16cm、残存長2.6mをかる。9個のピ

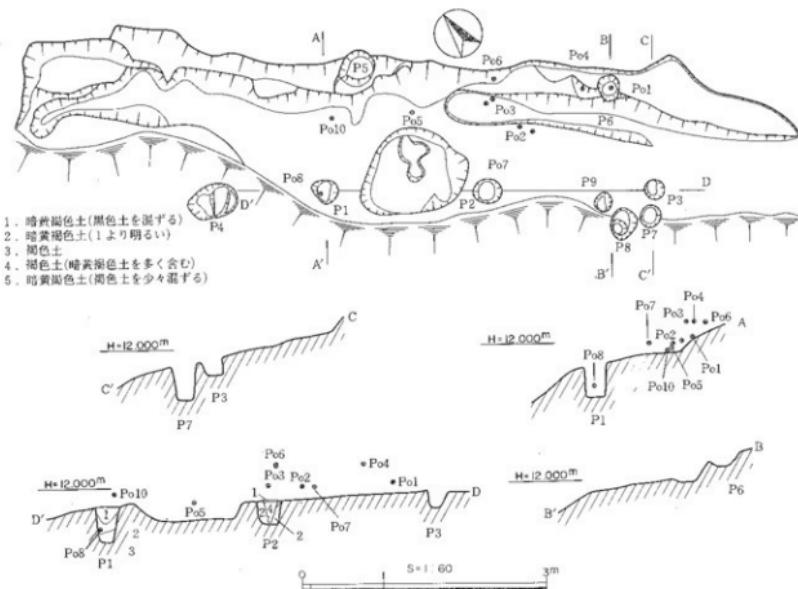


挿図58 第2号段状遺構ピット深度図

ットの内P 1 (32×28-41)、P 2 (34×30-35)、P 3 (15×15-21) の3個が約2mの距離をとつて並ぶのであるが、ピットの深度が不揃いなうえ相対するピットの存在が確認できなかったことから、掘立柱建物の存在を考えることはできないと思われる。しかし、溝が排水の役目を果し、何がしかの居住施設があったものと思われる。出土遺物の内固化できたものは、壺Po 1～Po 4 (Po 1はほぼ完形)・环Po 5～Po 10である。この内Po 1は、P 6に口縁部を下にして伏せる様に置かれていた。出土遺物より第2号段状構は奈良時代のものと思われる。



挿図59 第2号段状構出土土器実測図

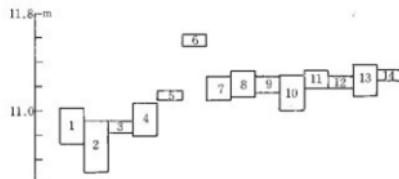


挿図60 第2号段状遺構実測図

第3号段状遺構（挿図61・62、図版10・27）

位 置 西斜面の北端、下部緩斜面、標高11m付近に位置し、第2号段状遺構の西北西約6.5m、第1号段状遺構の西約11mにある。等高線の走向にはば沿うかたちで斜面上側を掘り込み平坦面を造成している。北西側の壁が鉤状に曲がる。残存最大掘り込み壁高は0.92mである。平坦面の大きさは、北西—南東長6.8m、北東—南西長残存2.0mをはかる。遺構内においてピット14個、溝1本を検出した。

形 態 ピットの配列に規則性はみられない。溝は幅約20cm、最深部の深さ9cm、長さ3.5cmをはかる。その他、北西側掘り込み壁に3つの穴が穿たれている。遺構残存状況が不良なため推測の域を出ないが、溝を排水施設にもつらかの居住施設があったものと思われる。また、土層断面（挿図62・スクリーントーン）より、本遺構の埋土を掘り込むかたちの溝が存在したことを確認することができる。埋土上層より分銅形土製品が出土した。出土遺物の内回復できたものは、甕Po1～Po2、須恵器の甕Po3である。出土遺物より第3号段状遺構は奈良時代のものであると思われる。



挿図61 第3号段状遺構ピット深度図

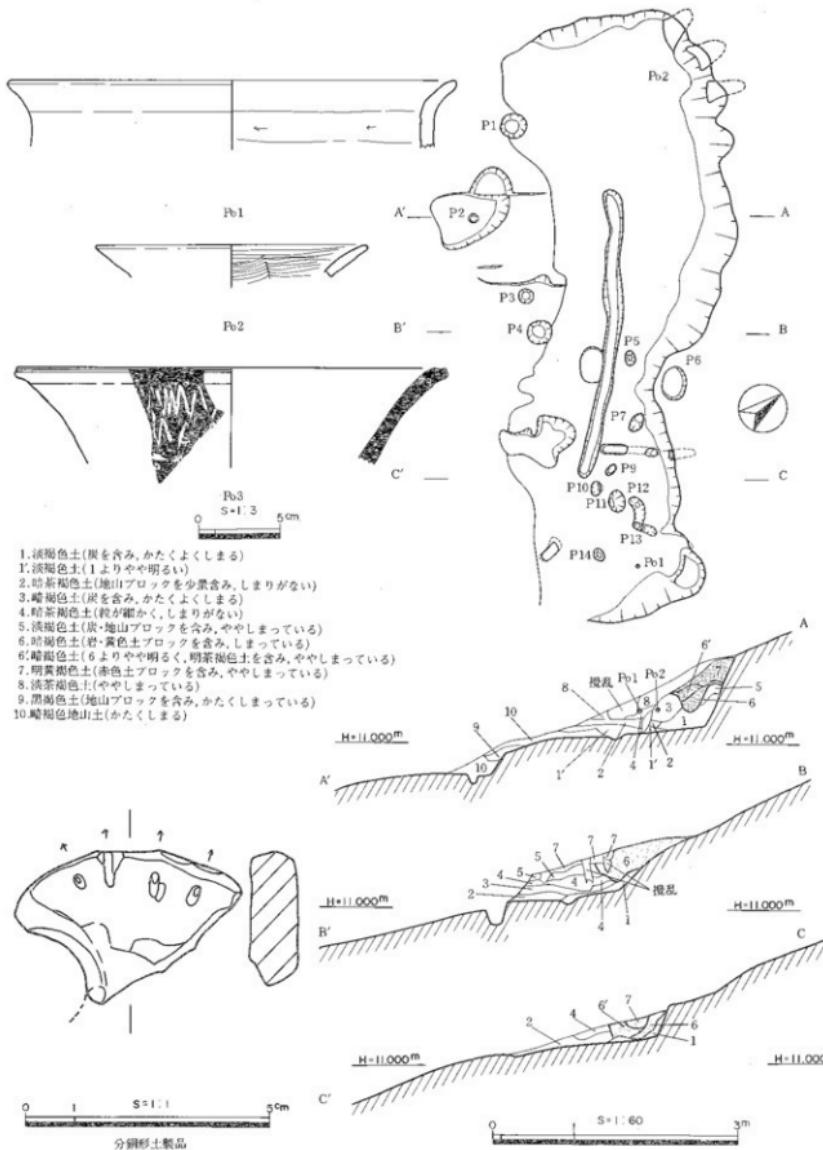
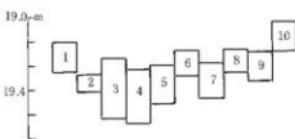


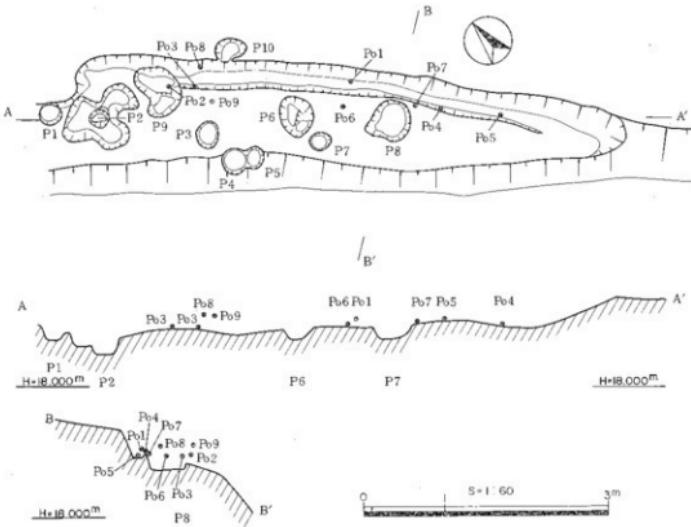
図62 第3号段状遺構実測図及び同出土土器実測図

第4号段状遺構（挿図63～65・71～73、図版11・28）

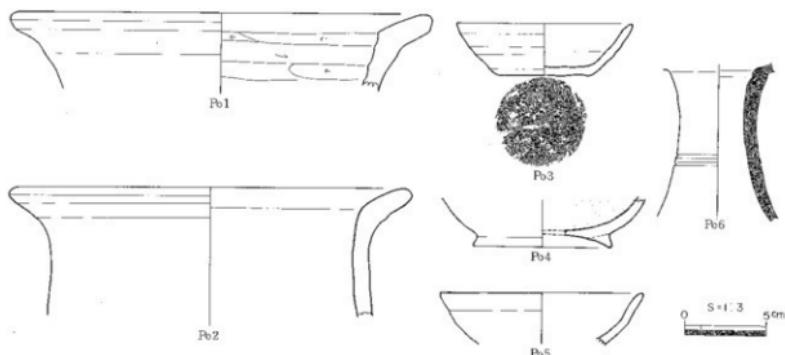
位 置 西斜面南端、斜面の中ほど、標高19m付近に位置し、第1号段状遺構の北東約12mにある。平面的にみると、第5号段状遺構の床面を掘り込んでいる。ほぼ等高線の走向に沿う様にして斜面上側を掘り込み、平担面を造成している。斜面下側部分が削り取られており、遺構の残存状況は極めて悪い。掘り込み壁高は最大0.34mを残す。平担面の大きさは、北西一南東長6.9m、北東一南西幅残存1.5mをはかる。遺構内において、10個のピットと實際を走る溝が1本検出された。ピットの配列に規則性はみられない。溝は幅約23cm、最深部の深さ6cmの規模をもつ。本遺構は、壁際に溝を有し、床面にピットをもつことから竪穴住居跡とも考えられるが、残存不良のためそれとは断じ得ず、段状遺構とした。出土遺物の内図化できたものは甕Po1～Po2・壺Po3～Po5・須恵器の高环筒部Po6時 期 である。出土遺物より第4号段状遺構は奈良時代のものであると思われる。



挿図63 第4号段状遺構ピット深度図



挿図64 第4号段状遺構実測図



第4号段状遺構出土土器実測図

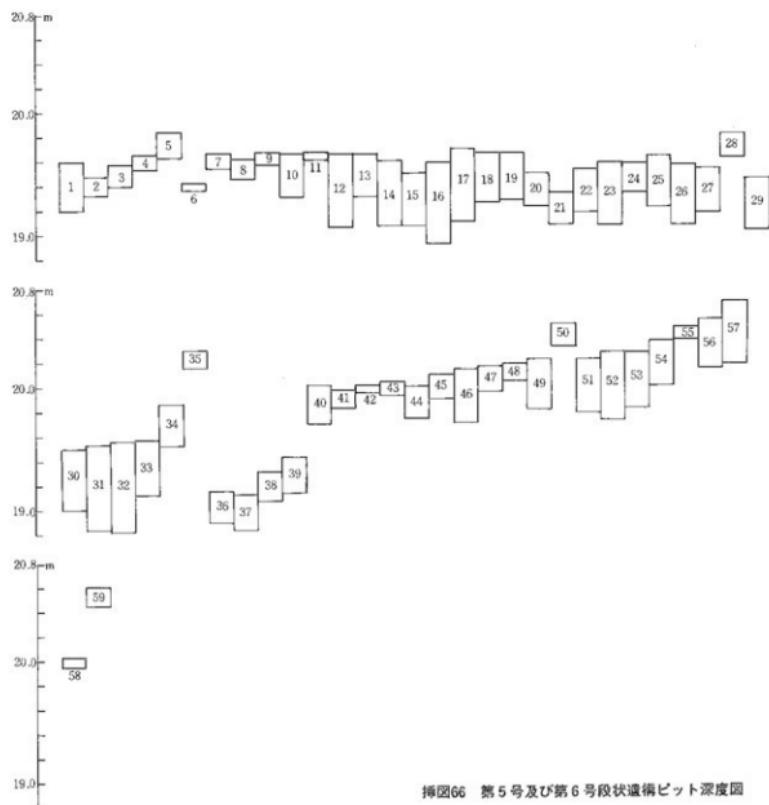
第5号段状遺構（挿図66・67・71～73、図版11・28）

位 置 西斜面北端斜面上部の緩斜面に位置する。調査前の地形においても、テラス状を呈していた。標高21m付近で、第1号段状遺構の約8m東にある。第4号段状遺構が本遺構の床面を掘り込んでいる。

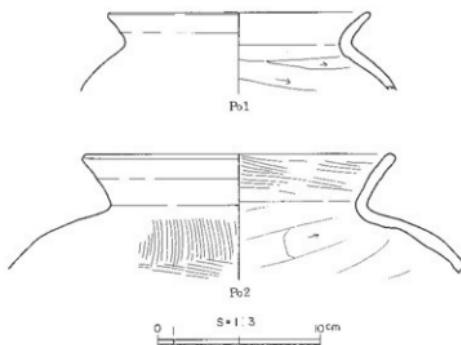
形 態 第6号段状遺構を切って掘り込み、平坦面を造成している。斜面下側は、後世に削り取られている。掘り込み壁高は最大0.76mを残す。平坦面の大きさは、北西—南東長9.0m、北東—南西幅残存2.5mをはかる。床面上で多数のピットと1本の溝を検出した。ピットの内、{P14(24×24-53)、P15(20×22-43)、P16(24×20-66)} {P17(39×35-59)、P18(48×42-40)、P19(32×30-38)} {P22(28×28-35)、P23(24×22-52)、P24(32×30-24)} {P29(36×26-43)、P30(40×38-50)、P31(54×…-70)} のそれぞれ3個ずつが、ほぼ掘り込み壁に平行するかたちで一直線にならぶ。斜面下側の削られた部分に住居の存在を想定するなら、土留めのための柵列の存在も考えられるのであるが、現状では推測の域を出ない。本遺構では土師器片、須恵器片が多数出土したが、風化破損が著しく、図化できたものは土師器の壺の口縁2点 (Po1・2) にとどまった。床面より10cm以上離れて出土している。床面出土の遺物がないため、本遺構の時期を決定することはできないが、前述の第4号段状遺構が本遺構の平坦面を利用した居住施設であると仮定すれば、本遺構は奈良時代のものであろう。

第6号段状遺構（挿図66・68～73、図版11・28）

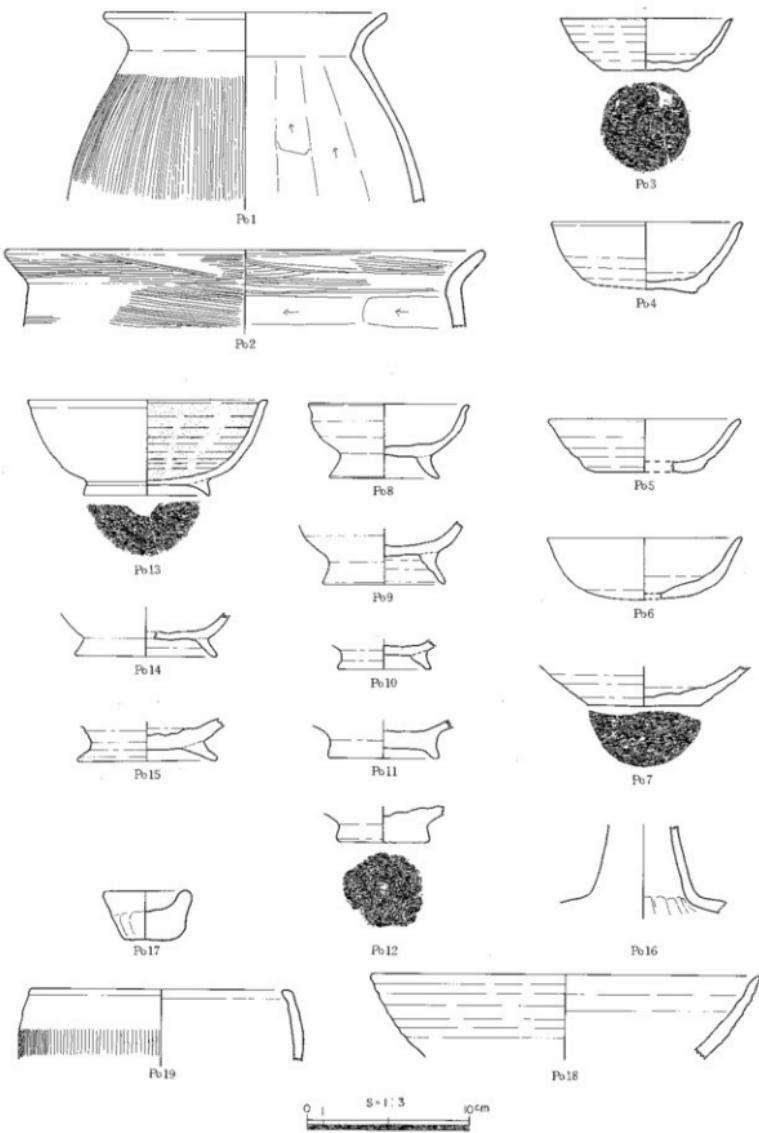
位 置 東宗像2号墳の墳裾近くに位置し、第5号段状遺構と切り合うかたちで存在する。2号墳の墳裾近くを緩やかに掘り込み平坦面を造成している。掘り込み壁高は最大1.35mを残す。北西側が調査区外に入り込み、斜面下側が第5号段状遺構によって切られているため全貌は明らかではないが、平坦面は北西—南東長9.5m以上、北東—南西幅6.5m以上の規模をもつものと思われる。床面上でピット十数個と弧状を呈する溝1本を検出したが、性格は不明である。本遺構より、土師器、須恵器、埴輪片が多数出土した。埴輪片は東宗像2号墳よりの転落遺物であると思われる。出土遺物より本遺構は奈良時代を跨るものと思われる。



插図66 第5号及び第6号段状遺構ピット深度図



插図67 第5号段状遺構出土器実測図



擗圖68 第6号段状遺構出土土器実測図①

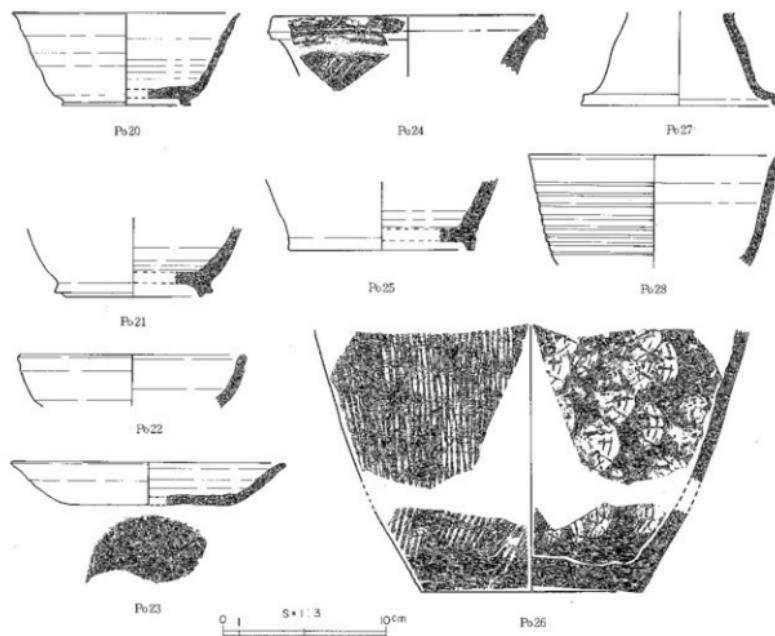


插图69 第6号段状窑出土土器实测图 ②

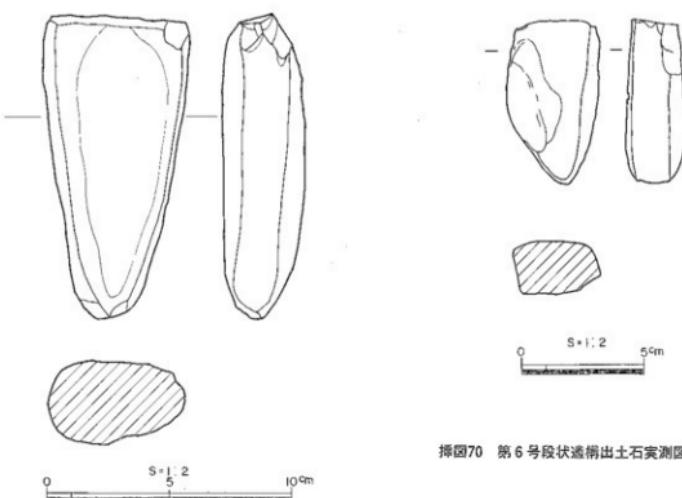


插图70 第6号段状窑出土石实测图

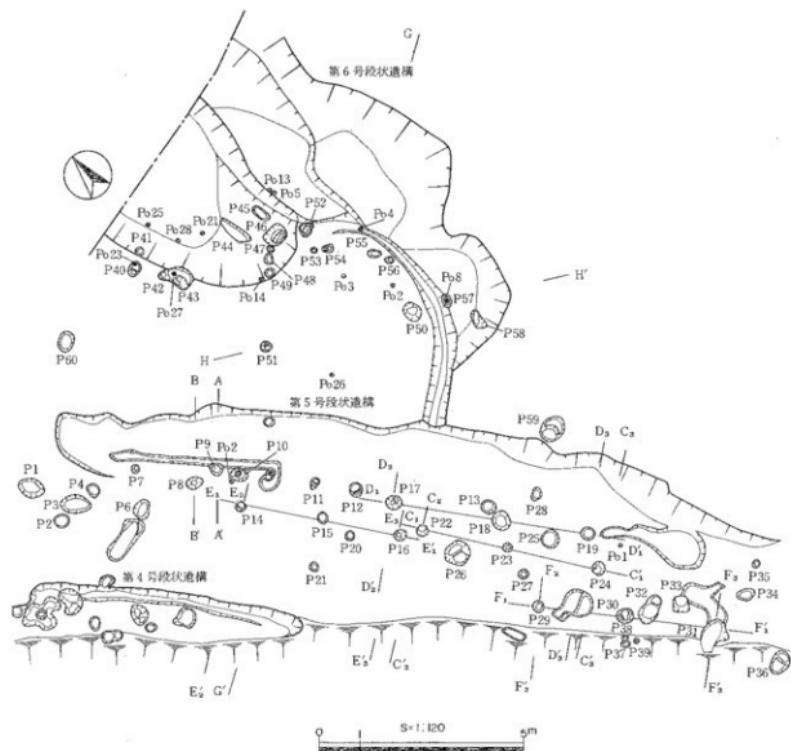


插图71 第4·第5·第6号段状造構対比図

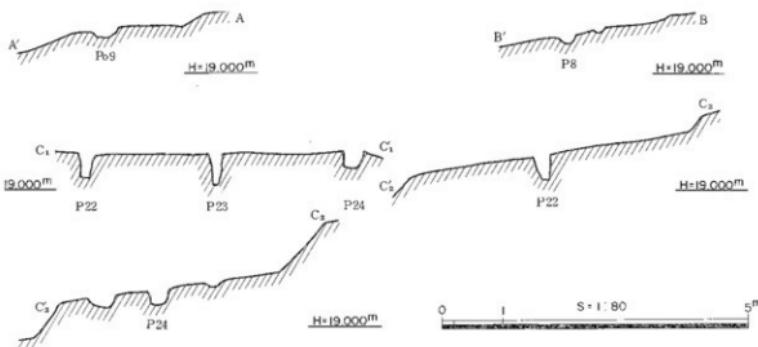


插图72 第4·第5·第6号段状造構断面図①

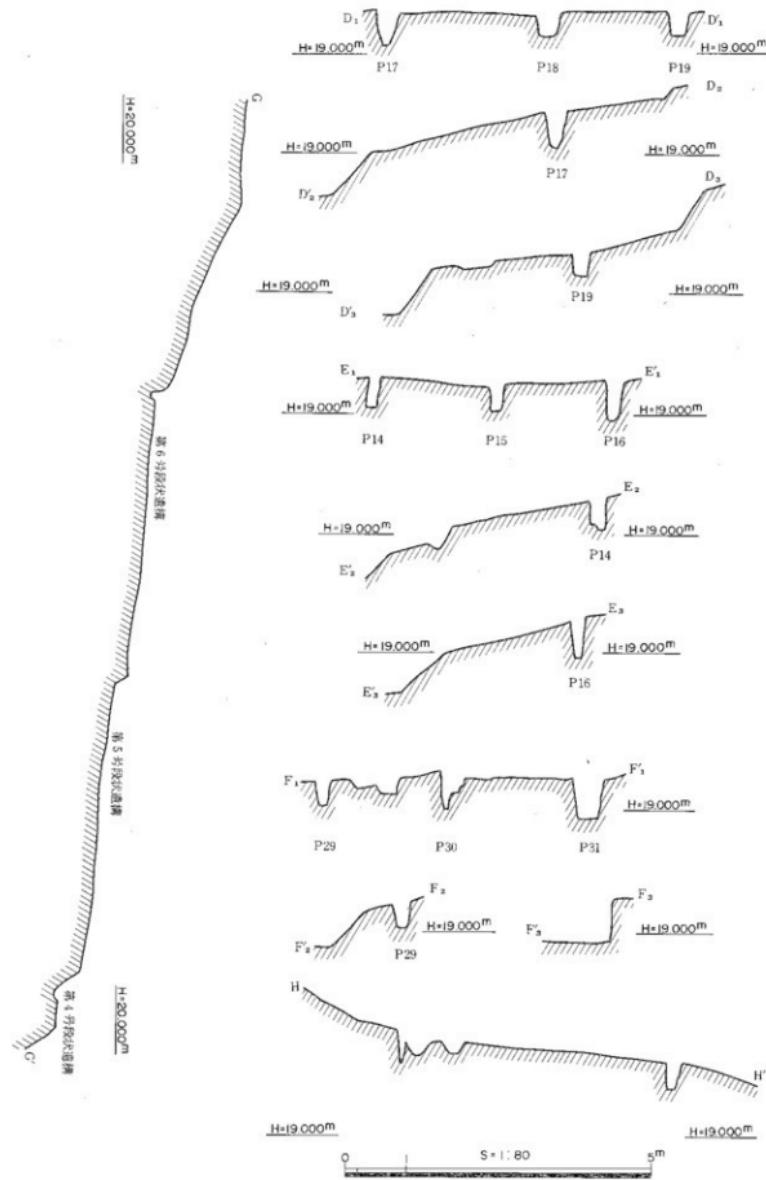
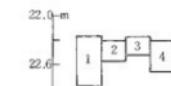


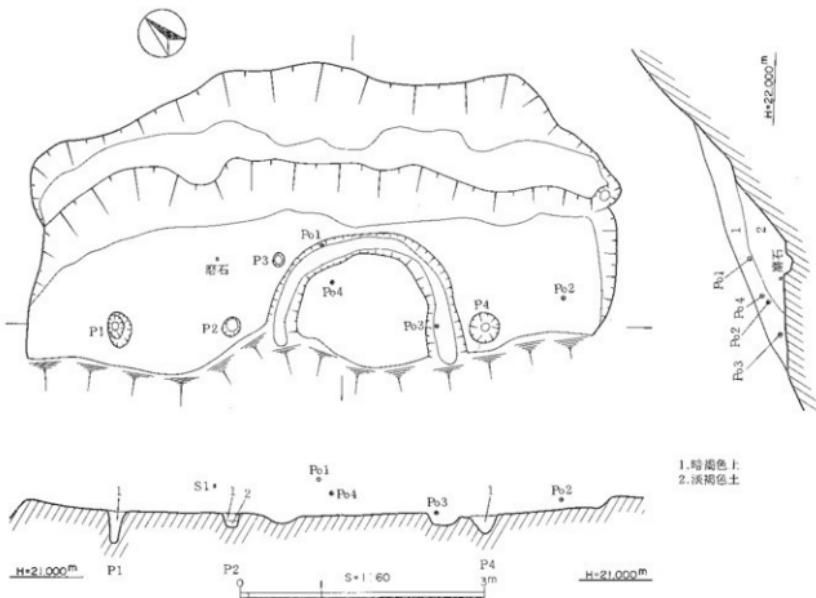
图73 第4·第5·第6号段状构造断面图(2)

第7号段状遺構（挿図74～77、図版12・29）

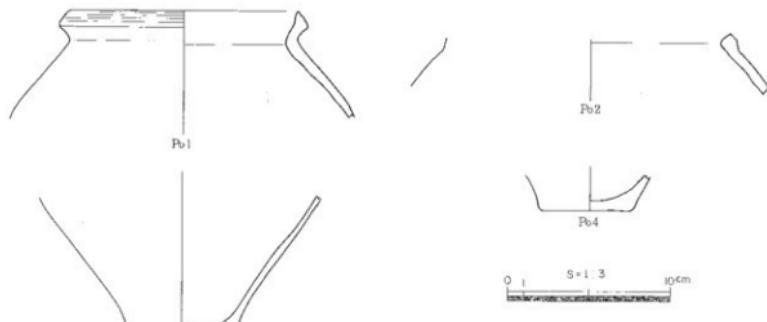
位 置 西斜面中央部の上部急斜面、標高24m付近に位置し、第8号段状遺構の約5m南西、第1号掘立柱建物跡の約3m南、第6号窓穴住居跡の約10m南にある。急斜面上側を2段に掘り込んで平坦面を造成している。斜面下側は流出している。第1段目は、残存する最大掘り込み壁高1.04m、北西—南東長7.3m、北東—南西幅0.64mの規模をもつ。第2段目は、残存する最大掘り込み壁高0.68m、北西—南東長7.0m、北東—南西幅残存1.8mの規模をもつ。第2段目床面上で、ピット4個、溝1本を検出した。溝は床面中央部付近に位置し、平面半円形を呈しており、径1.6m、幅約35cm、最深部の深さは11cmをはかる。ピットの配列をみると、P1・P2・P4が一列に並び、P2・P4が溝の両脇に位置している。ピット間距離はP1より1.45m、3.10mをはかる。しかし、この平坦面の上に如何なる構築物が存在していたかは不明である。出土遺物の内図化できたものは、甕口縁部Po1～Po2・底部Po3～Po4・磨石である。出土遺物より第7号段状遺構は弥生時代中期後葉のものと思われる。



挿図74 第7号段状遺構ピット
深度図



挿図75 第7号段状遺構実測図



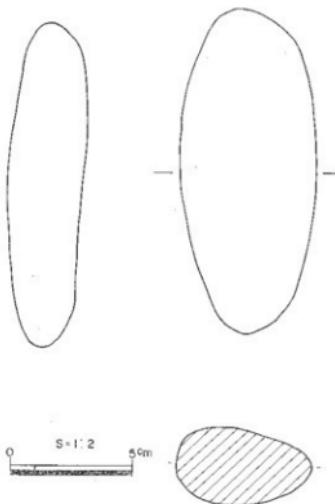
挿図76 第7号段状遺構出土土器実測図

第8号段状遺構（挿図78～80、図版12・29）

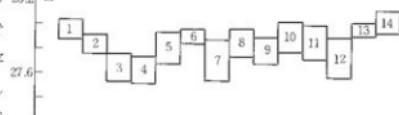
位 置 西斜面中央部の上側急斜面、標高29m付近に位置し、第7号段状遺構の約5m北東、第1号掘立柱建物跡の約3m南東、第6号窓穴住居跡の約15m南東にある。斜面上側を掘り込み平坦面を造成している。残存する掘り込み壁高は最大0.97mをはかる。平坦面の大きさは、北西—南東長7.6m、北東—南北残存幅2.7mである。本遺構北西側は平坦面を約25cmの深さで「コ」の字状に掘り込んでいる。この掘り込みは、北西—南東長1.5mをはかり、北東—南北長が2.8mまで確認でき、壁際で溝（幅約20cm・最深部の深さ24cm）、床面上でP3(50×40-19)、P4(25×21-31)の2個のピットを検出した。「コ」の字状掘り込み外においてもピットを十数個検出したが、P1(25×24-13)、P2(27×25-15)、P9(35×30-19)が2.7m・2.9mの距離をおいて一列に並ぶ以外には規則性はみられない。

遺 物 烧上及び炭が「コ」の字状掘り込みの北西側床面で検出された。出土遺物の内化できたものは、甕Po1～Po2・底部Po3～Po6・ 28.2cm 高环Po7・磨製の石鍤・石斧・黒曜石の石核である。Po1・Po3・Po4・Po5が「コ」の字状掘り込みの北西側肩部より床面に流れ込んだ様相を呈していた。また、磨製の石鍤・石斧・黒曜石の石核は南東側の平坦面で出土した。

時 期 出土遺物より第8号段状遺構は弥生時代中期後葉のものと思われる。



挿図77 第7号段状遺構出土土器実測図



挿図78 第8号段状遺構ピット深度図

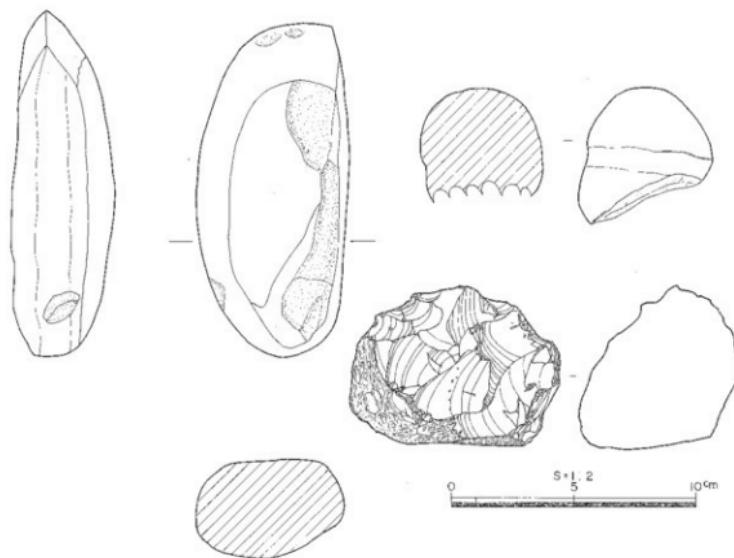
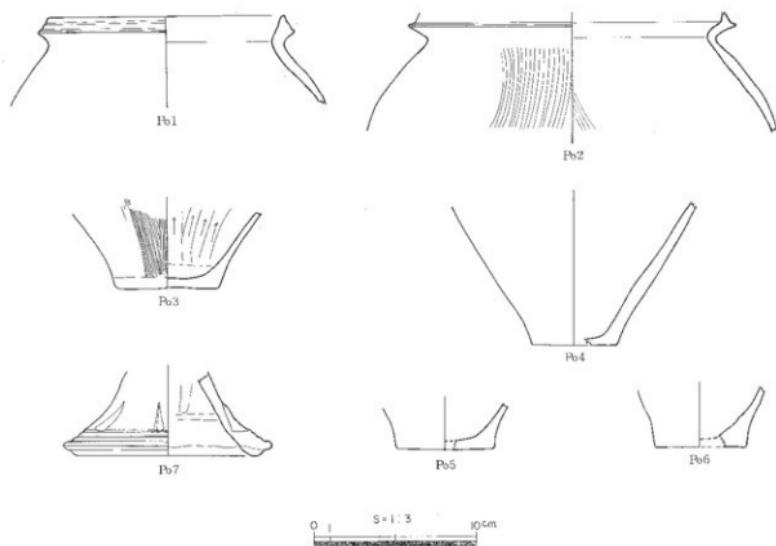


插图79 第8号段状遗物出土实物实测图

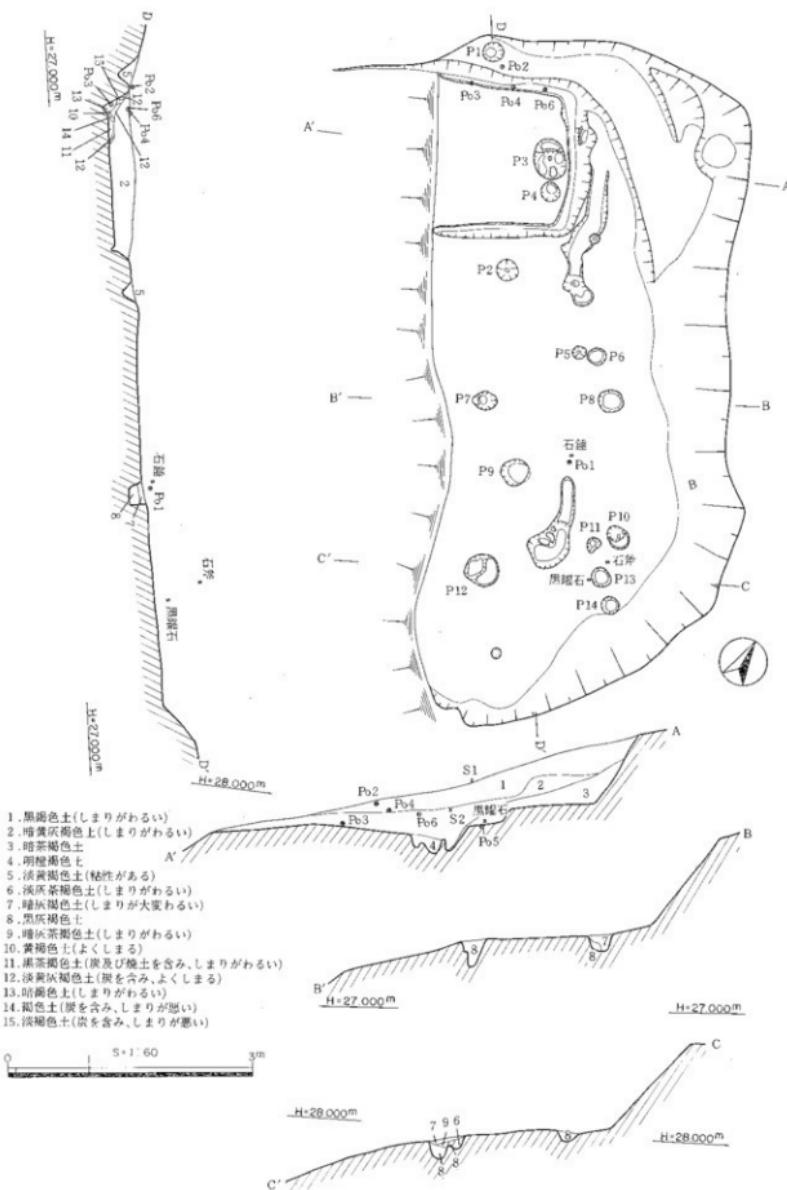


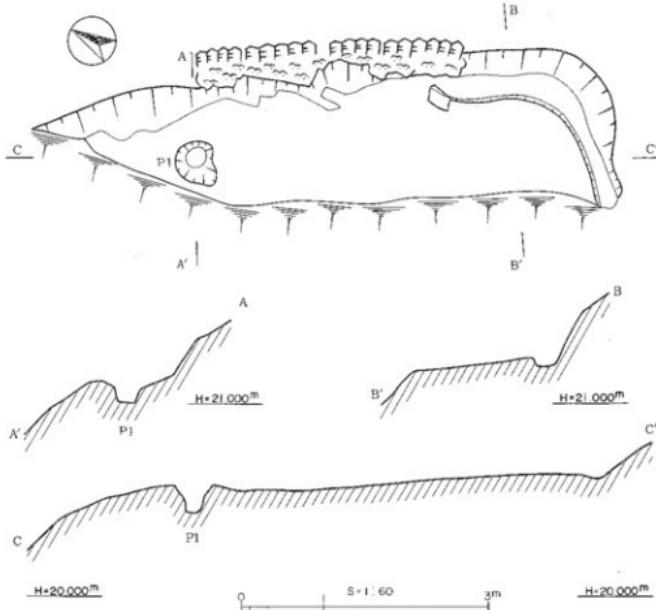
図80 第8号段状遺構実測図

第9号段状遺構（挿図81～83、図版13・29）

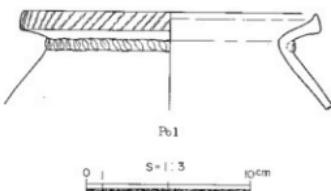
位 置 西斜面南側の斜面中程よりやや下るあたり、標高22m付近に位置する。角礫を多量に含む地山面を掘り込み平坦面を造成している。残存する掘り込み壁高は、最大0.56mをはかる。平坦面の大きさは、南北長5.5m、東西幅残存1.5mである。造成地の地山が角礫を多量に含むため、床面上に角礫が多く出していた。
形 様 床面上において角礫の間に土が入る様なかたちでP1 (60×40-35)と溝1本を壁際で検出したが、人工的なものではないと思われる。出土遺物は、埋土
遺 物 中上層より弥生土器の縁の口縁が1片出土しただけである。第9号段状遺構の時期は不明である。
時 期



挿図81 第9号段状遺構ピット深度図



挿図82 第9号段状遺構実測図



挿図83 第9号段状遺構出土土器実測図

第10～第13号段状遺構（挿図84～86、図版13・29）

位 置 第10～第13号段状遺構は、同一地に時を隔てて造られたものであるため、記述の都合上一括して述べることとする。第10～第13号段状遺構は、西斜面南側・斜面中程の傾斜が緩やかになるあたり、標高20m付近に位置している。北西約5m、標高が1m程度下がったところに第14号段状遺構が存在する。

切り合い 土層断面（挿図85 A-A'断面 C-C'断面）より、第11～13号段状遺構は第10号段状遺構の埋土（土層番号3・4・5）を掘り込んで造られている。第11号段状遺構と第12号段状遺構は切り合い関係を見い出すことはできない（挿図85 A-A'断面）。第12号段状遺構は第13号段状遺構の埋土を掘り込んで造られている（挿図85 B-B'断面）ので、第12号段状遺構は第13号段状遺構が埋った後に造られたと思われる。これらの遺構内の平坦面でピット11個・溝2本・平面鉤状の掘り込み1つを検出した。これらは埋土の色を指標にして3つに分けることができた。すなわち、P1・P2は暗黄灰色粘質土、P3・P4・P5・P6・P7・P10・溝I・溝IIは黒褐色土、P8・P9・鉤状の掘り込みは暗灰色土の3つである。平面的な位置関係を加味して考えると、P1・P2・溝Iは第13号段状遺構に、P3・P4・P5・P6・溝IIは第12号段状遺構に、P7・P10は第11号段状遺構に、P8・P9・鉤状の掘り込みは第10号段状遺構に伴うものと考えられる。

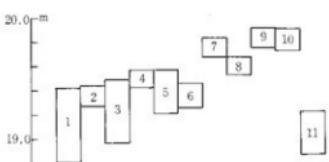
第10号段状 遺構 第10号段状遺構は地山面を掘り込んで造られている。掘り込み壁高は最大で0.78mを残す。床面は北西—南東長6.3m以上、北東—南西幅2.45m以上の規模をもっていたものと思われる。P8(58×42-15)、P9(45×48-16)、鉤状の掘り込みが、この段状遺構に伴うものと考えられる。鉤状の掘り込みは、北西—南東1.1m、北東—南西0.9mを残している。残存する掘り込み壁高は0.29mである。床面でP11(55×30-46)を検出した。また、床面近くで焼土・炭が出土した。

第11号段状 遺構 第11号段状遺構は第10号段状遺構の埋土を掘り込んで造成されたものである。平面的には確認できなかったが、土層断面（挿図85 A-A'断面）より北西側掘り込み壁が鉤状に曲っていたものと思われる。壁高は9cm以上あったと考えられる。北西—南東長は5mまで確認できる。第11号段状遺構には、P7(38×38-15)、P10(33×31-17)が伴う。

第12号段状 遺構 第12号段状遺構は、第10号段状遺構、第13号段状遺構の埋土を掘り込んで造られている。掘り込み壁高は最大0.32mをはかる。北西—南東長は2.1mまで確認できる。第12号段状遺構に伴うものとしてP3(24×24-53)、P4(42×27-15)、P5(20×19-36)、P6(55×37-20)、溝IIがある。溝IIは幅約20cm、深さは最深部で12cm、残存長約2.5mをはかり断面U字型を呈する。この段状遺構は溝IIを側溝とする竪穴住居跡とも考えられるが、柱穴になり得るピットを確認できなかったことから段状遺構とした。

第13号段状 遺構 第13号段状遺構は第10号段状遺構の埋土を掘り込んで造られている。掘り込み壁高は最大0.35mを残す。北西—南東長3mまで確認できる。第13号段状遺構に伴うものとしては、P1(53×45-61)、P2(36×30-17)、溝Iがある。溝Iは幅約25cm、最深部の深さ3cm、残存長3.3mをはかる。断面U字型を呈する。この段状遺構も溝Iを側溝とする竪穴住居跡とも考えられるが、第12号段状遺構と同様の理由で段状遺構とした。

造 物 時 期 各段状遺構掘り下げ中に多くの土器片が出土したが、固化できるものはなかった。P9より磨石の出土をみた。土層の切り合いからみた新旧関係以外は、各遺構の時期は不明である。



挿図84 第10～13号段状遺構ピット深度図

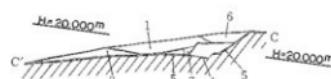
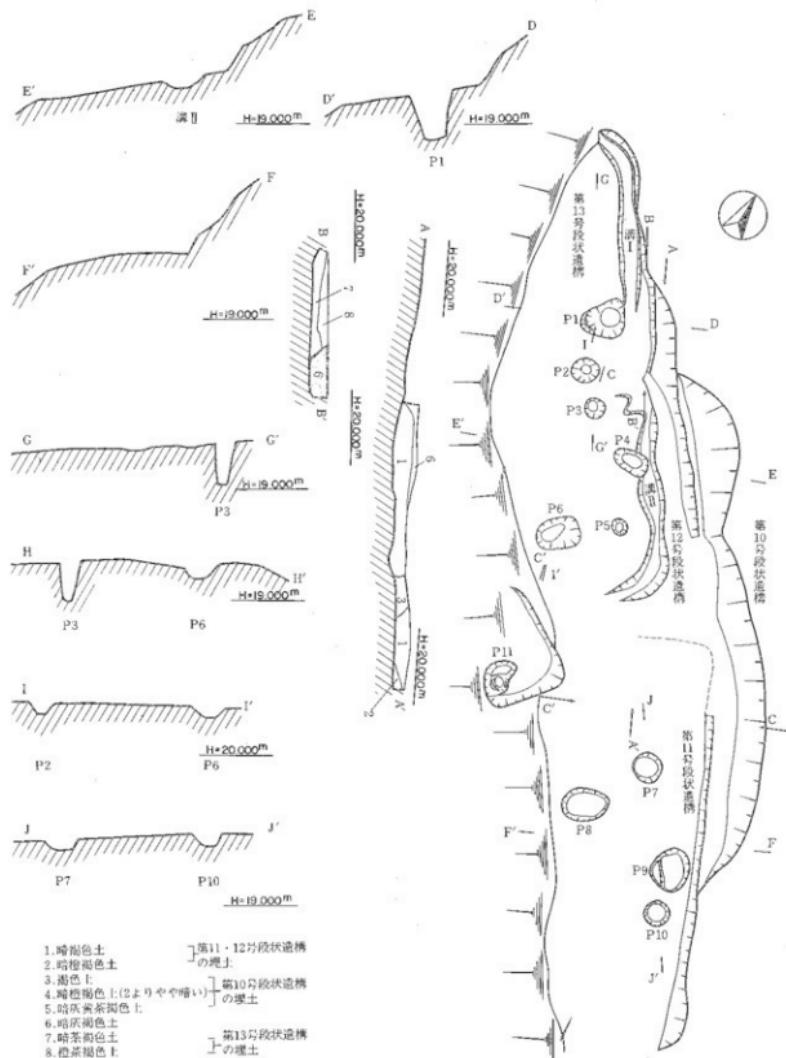
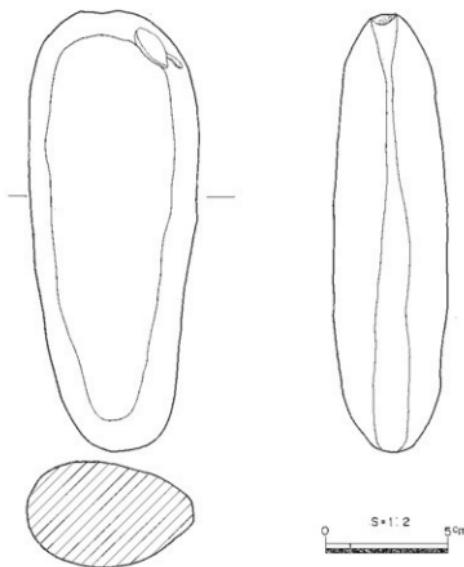


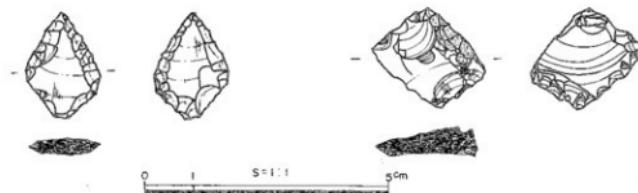
図85 第10～13号段状造構実測図



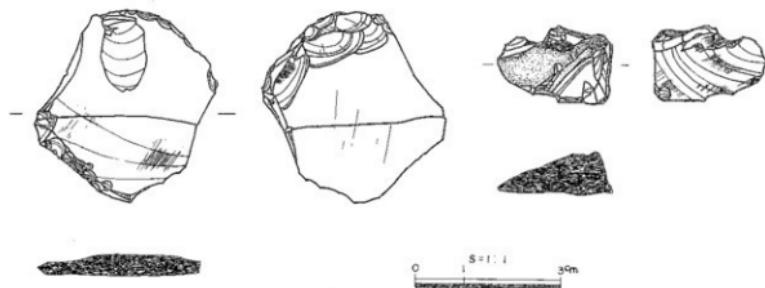
挿図86 第10号段状遺構出土断石実測図

第14号段状遺構（挿図87～92、図版14・29・30）

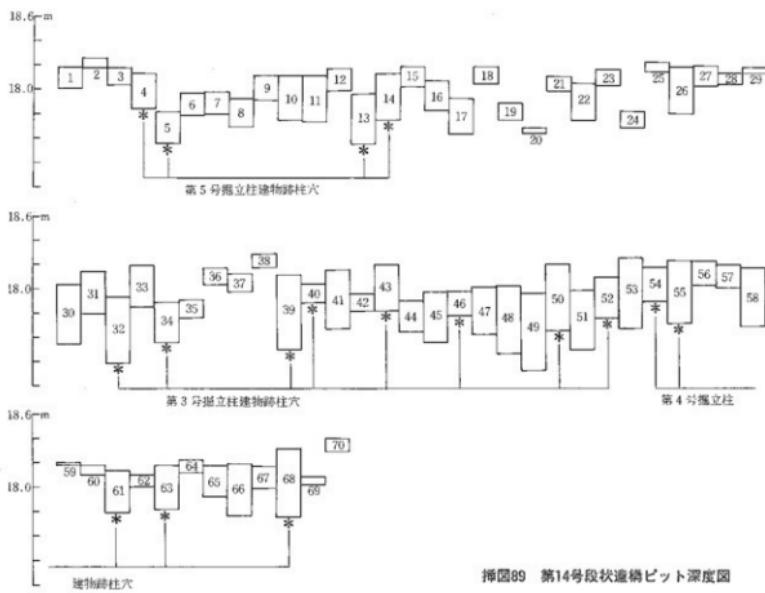
位 置 西斜面中部の斜面の中程、標高18m付近に位置する。本遺構の検出位置は、調査前においてもテラス状の地形を呈していた。斜面上側を掘り込み平坦面を造成している。掘り込み壁高は最大0.7mを残す。平坦面の規模は、南北長約19m、東西幅残存約4.25mである。本遺構平坦面において、溝7本・第3～第5号掘立柱建物跡・第1号木棺墓・第1号土器棺墓・第12号竪穴住居跡が検出された。各遺構の詳細はそれぞれの項で述べることとする。各遺構に伴うと思われる土器が出土した。また、埋土上層中より黒曜石の剝片3点、サヌカイト製石器1点が出土した。本遺構の上側に位置する第8号段状遺構において黒曜石の石核が出土したことから黒曜石の剥片は、第8号段状遺構よりの転落である可能性がある。第14号段状遺構は、弥生時代中期後葉（第12号竪穴住居跡）～古墳時代後期（第1号木棺墓）の間利用されたものと思われる。



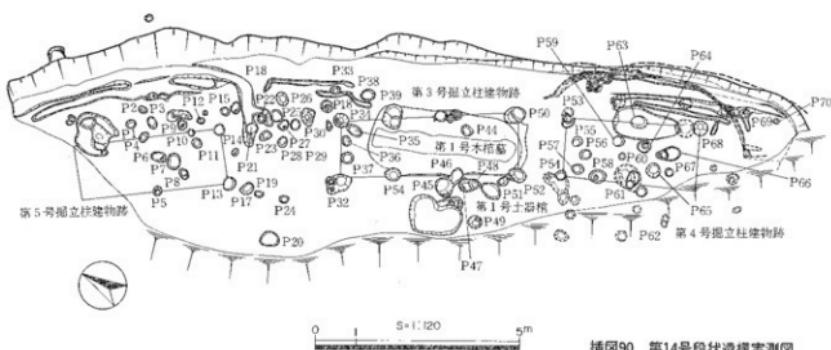
挿図87 第14号段状遺構出土サヌカイト質石器及び黒曜石剝片実測図



插図88 第14号段状造構出土黒曜石片実測図



插図89 第14号段状造構ピット深度図



插図90 第14号段状造構実測図

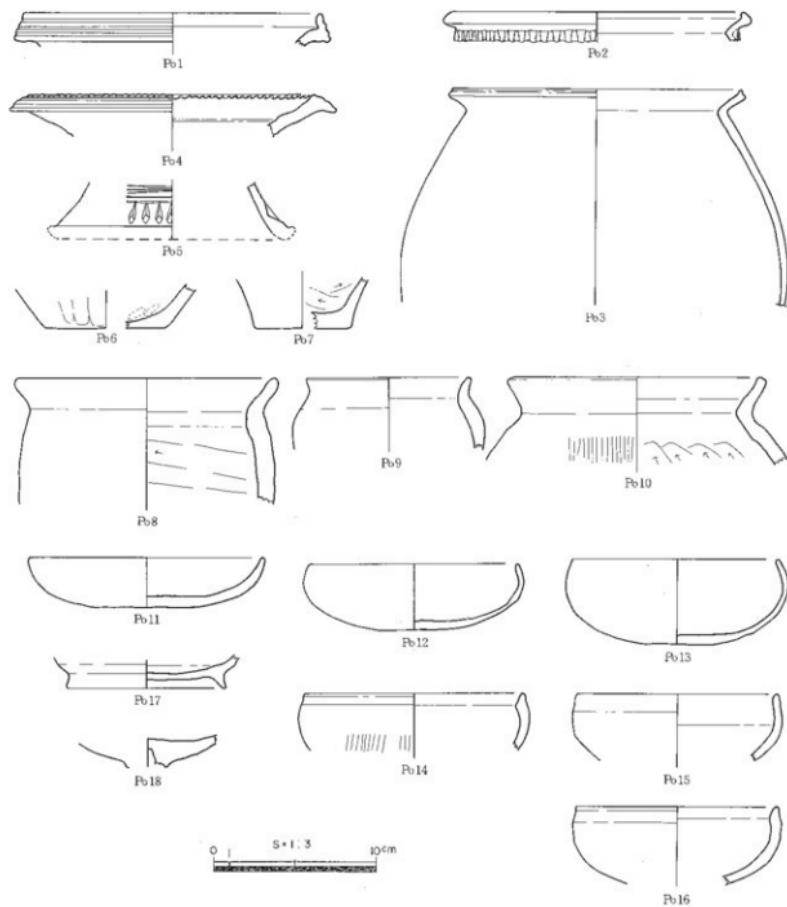
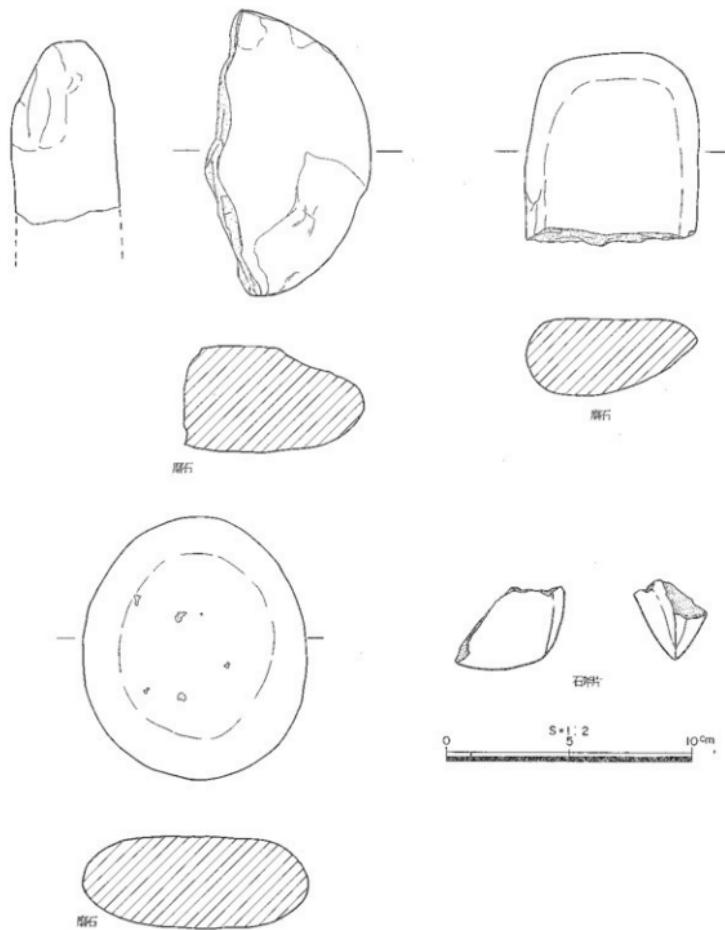


插图91 第14号段状遗構出土土器实测图



挿図32 第14号段状造構出土石斧片及び磨石実測図

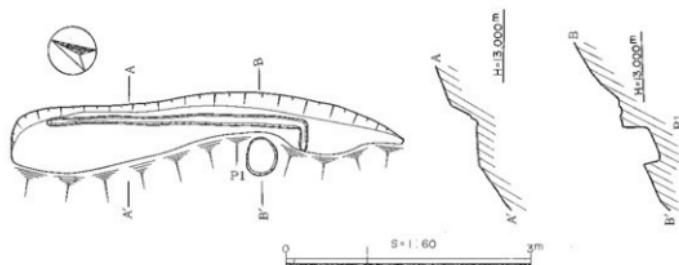
第15号段状造構（挿図93・94、図版14）

位 置 西斜面南側の下部、標高15m付近に位置し、第10号竪穴住居跡の南約6.5mに位置する。急斜面を掘り込んで平坦面を造成しているため、斜面下側が流出しており、造構の残存状況は極めて悪い。掘り込み壁高は最大0.3mを残す。平坦面は、南北長4.8m、東西幅残存0.7mの規模をもつ。壁際より約10cm離れて溝が平面鉤型に掘り込まれている。幅約14cm、最深部の深さ5cmをはかり、断面U字型を呈する。床面南側でP1(46×39-42)を検出した。本段状造構は、壁際の溝を側溝する竪穴住居跡と考えられなくもないが、特殊ピット・柱穴の



挿図93 第15号段状造構ピット深度図

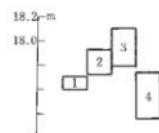
時 期 存在が明確でないことから、段状遺構とした。P 1 内より土師器の壺片の出土をみたが、破損風化が著しく、復元困難は不可能であった。しかし、胎土や破片の一部より第10号竪穴住居跡出土の壺と同様のものであったと思われる。出土遺物より、第15号段状遺構は第10号竪穴住居跡と近似する時期(古墳時代中期)のものであると思われる。



挿図94 第15号段状遺構実測図

第16号段状遺構（挿図95・97）

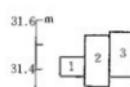
位 置 西斜面南側中腹あたりの緩斜面、標高16m付近に位置し、第4号段状遺構の南西約5mにある。本段状遺構が存在するあたりは後世に大きく削り取られており、遺構の残存状況は極めて悪い。掘り込み壁高は最大で9cmを残すのみである。床面もかなりの傾斜をもつ。
形 態 床面上でピットを4個検出したが、配列に規則性はみられない。土
遺 物 器片が出土したが、図化は不可能であった。時期は不明である。



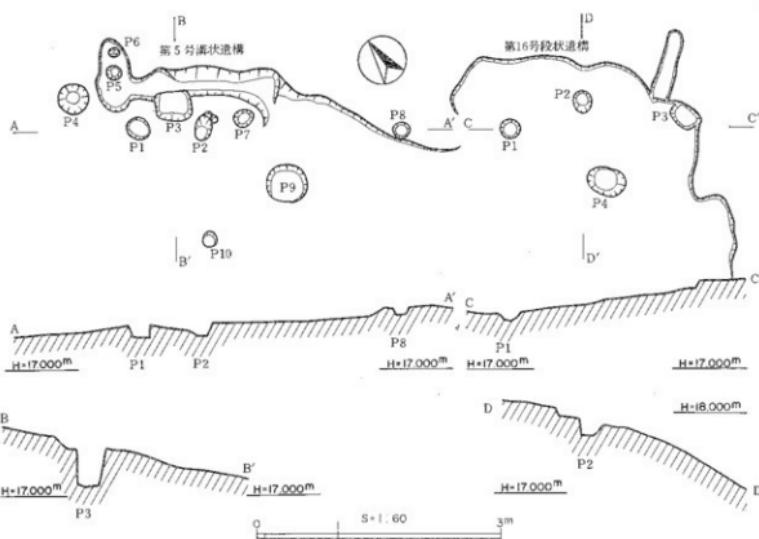
挿図95 第16号段状遺構ピット深度図

第17号段状遺構（挿図96・98・99、図版14・30）

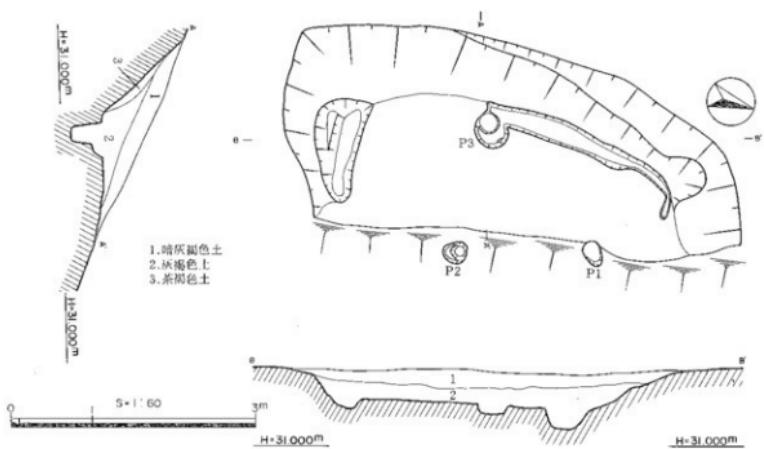
位 置 東斜面南側の上部急斜面、標高32m付近に位置する。東斜面で検出された唯一の段状遺構である。斜面を緩やかに掘り込み平坦面を造成している。斜面下側部は流失しているものと思われる。掘り込み壁は最大1.06mを残す。平坦面の大きさは南北長4.5m、東西幅残存1.6mである。平坦面上でピットをP 1 (32×22-16)、P 2 (29×27-42)、P 3 (25×25-37) の3個、溝を南側壁際で1本、西側壁際で1本検出した。遺物は黒曜石の剝片が出土したのみであった。時期は不明である。



挿図96 第17号段状遺構ピット深度図

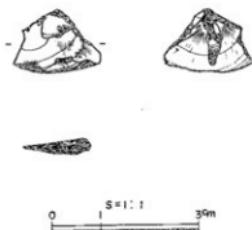


插図97 第16号段状構造及び第5号溝状構造実測図



插図98 第17号段状構造実測図

插図99 第17号段状構造
出土黒曜石剣片実測図

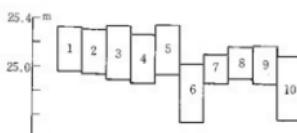


第4節 掘立柱建物跡

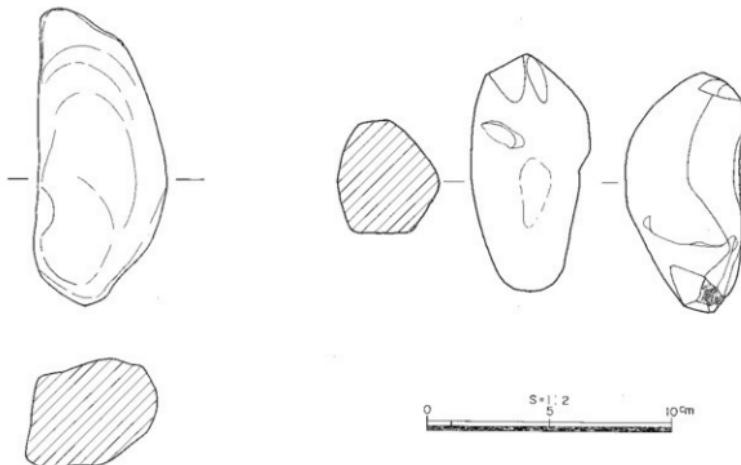
第1号掘立柱建物跡（挿図100～102、図版15）

位 置 西斜面中央上部、標高26m付近に位置し、第6号竪穴住居跡の約4m南東、第7号段状造構の約3m北東、第8号段状造構の約3m北西にある。急斜面を段状に掘り込み平坦面を造り、その平坦面に柱穴を掘り込んでいる。

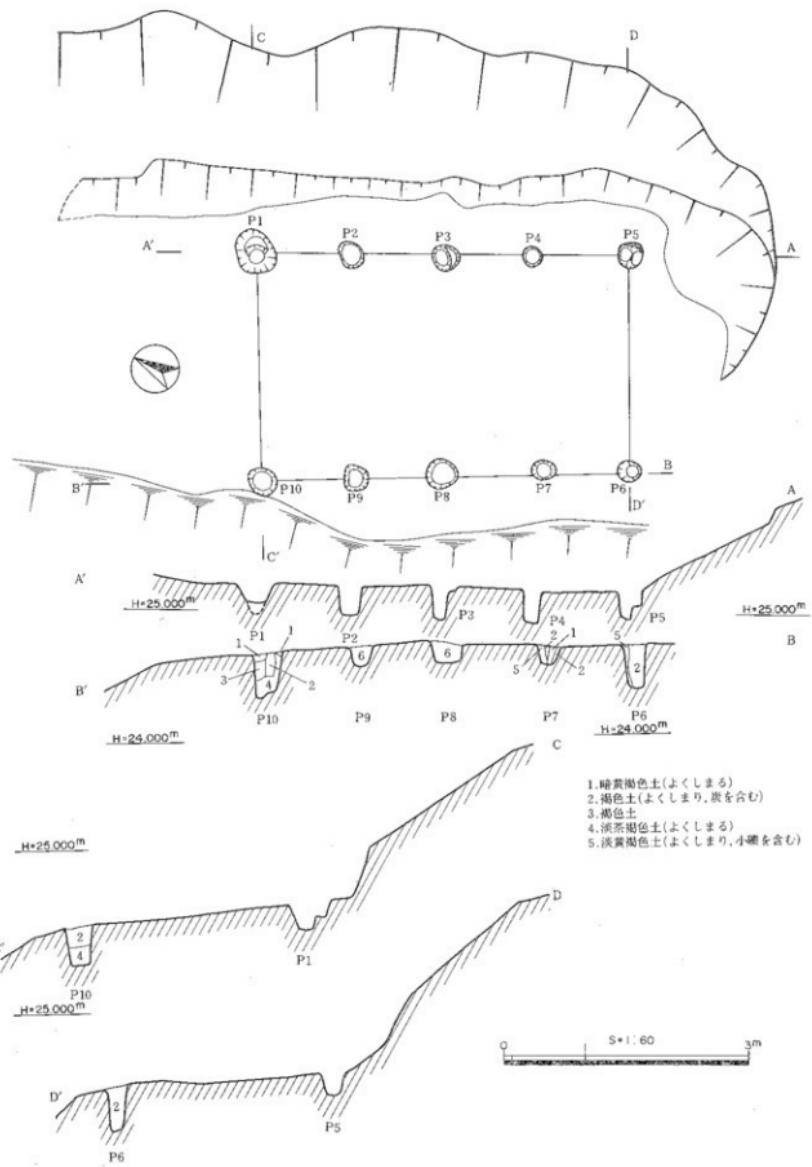
形 態 掘り込み壁は最大1.75m、平坦面の規模は南北長8m、東西幅4.2mまで確認できる。建物の規模は梁間1間・桁行4間、東西妻通長2.8m・南北桁行長4.5mである。主軸は北北西—南南東をとる。柱穴は10本を数え、各柱穴プランはP1 (55×49-39)、P2 (35×28-36)、P3 (33×33-44)、P4 (23×26-40)、P5 (29×31-40)、P6 (30×26-48)、P7 (30×25-24)、P8 (40×38-26)、P9 (30×32-31)、P10 (34×34-52) である。柱穴間距離はP1より1.15m、1.10m、1.10m、1.18m、2.68m、1.05m、1.25m、1.05m、1.15m、2.80mをはかる。平坦面上で弥生土器の底部、柱穴内で土器片と石の出土をみた。出土遺物より第1号掘立建物跡は弥生時代のものと思われる。



挿図100 第1号掘立柱建物跡ピット深度図



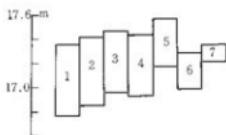
挿図101 第1号掘立柱建物跡ピット内出土石実測図



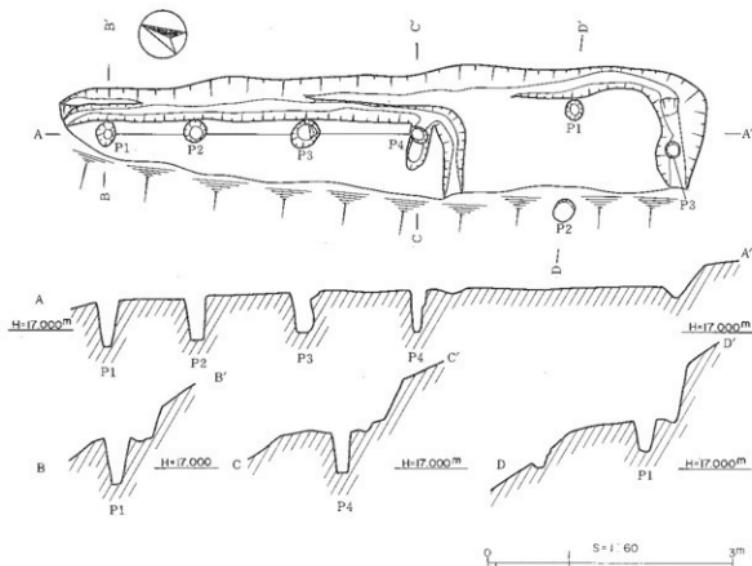
插図102 第1号掘立柱建物跡実測図

第2号掘立柱建物跡（挿図103～105、図版15・30）

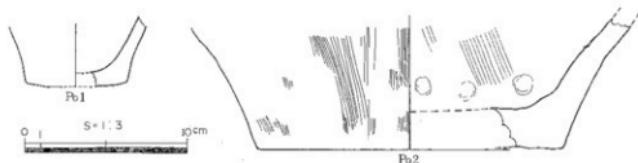
- 位 置** 西斜面南側下部、標高18m付近に位置している。北に約39m離れて第1号掘立柱建物跡が存在する。急斜面を段状に掘り込み平坦面を造成し、その平坦面に柱穴を掘り込んでいる。残存する最大掘り込み壁高は0.66mをはかる。平坦面の大きさは、南北長7.2m、東西幅残存1.3mである。建物の規模は、桁行3間・桁行長3.8mである。梁間・妻通長は斜面下側の流出が著しく不明である。
- 形 態** 主軸は北北西—南南東をとる。柱穴はP1からP4までの4本のみ検出された。柱穴プランはP1(32×24-58)、P2(28×28-52)、P3(36×33-50)、P4(25×19-50)であり、柱穴間距離はP1より1.10m、1.35m、1.35mをはかる。壁際に平面鉤型の溝が2本検出された。これら2本は、それぞれ北西側の溝より、幅約25cm・最深部の深さ9cm・長さ約5.6m、幅約20cm・最深部の深さ14cm・長さ約3mの規模をもつ。北西側の溝は掘立柱建物の柱穴を斜面上側で囲む様に掘り込まれている。斜面を流れ落ちてくる水を排水する役目をもったものであろう。出土遺物の内図化できたものは弥生土器の底部2個であった。この内Po2は平坦面に密着して出土した。出土遺物より第2号掘立柱建物跡は弥生時代のものであると思われる。
- 遺 物**
- 時 期**



挿図103 第2号掘立柱建物跡ピット深度図



挿図104 第2号掘立柱建物跡実測図



挿図105 第2号掘立柱建物跡出土土器実測図

第3号掘立柱建物跡（挿図89・90・106、図版16）

位 置 第14号段状遺構内平坦面中央部に位置する。同段状遺構内南東約1mに第4号掘立柱建物跡、北西約3mに第5号掘立柱建物跡が存在する。第1号木棺墓と切り合っており、土層断面図（挿図233-C-C断面）より第1号木棺墓によって切られていることが分かる。主軸は北西—南東をとり、段状遺構の掘り込み壁とほぼ平行に柱穴が並ぶ。梁間1間・桁行3間、東西妻通長1.55m・南北桁行長4.35mをはかる。柱穴は8本（P34・P39・P43・P50・P52・P46・P40・P32）を数える。各柱穴プランはP34（24×35-33）、P39（61×43-61）、P43（26×28-43）、P50（41×51-56）、P52（41×33-33）、P46（37×30-21）、P40（40×32-16）、P32（40×63-55）である。柱穴間距離は、上に挙げた順でP34より、1.31m、1.52m、1.52m、1.55m、1.50m、1.55m、1.32m、1.55mである。段状遺構平面上で多数の土器等の出土をみたが、それらは第1号木棺墓の供獻用のものと考えられることから、第3号掘立柱建物跡に伴うことが明らかな遺物はないと考える。出土遺物から時期の決定はできないが、第1号木棺墓によって切られていることから古墳時代後期以前のものであることがわかる。

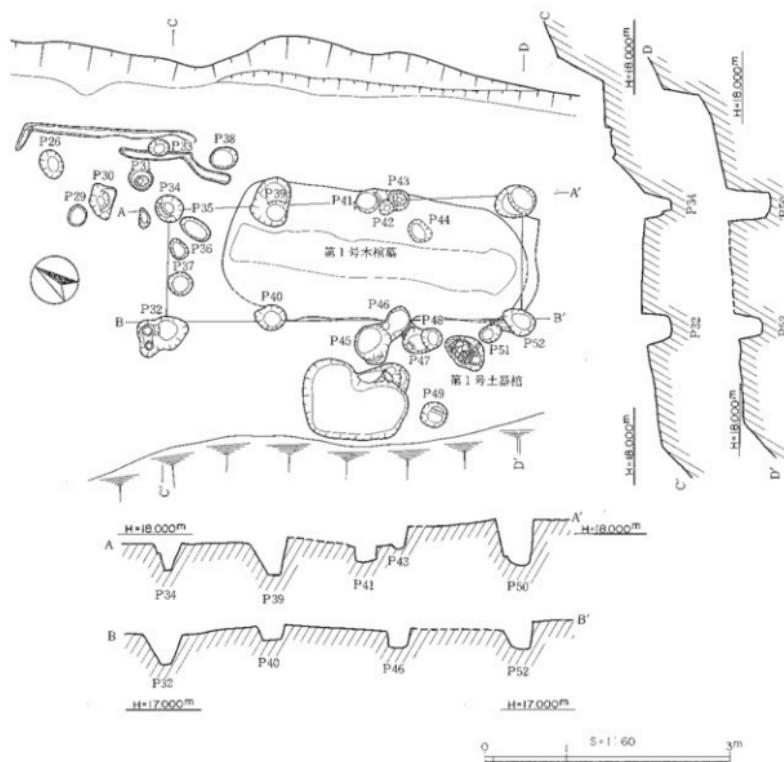
第4号掘立柱建物跡（挿図89・90・107、図版16）

位 置 第14号段状遺構内に第3・第5号掘立柱建物跡とともに存在する。主軸は北北西—南南東をとり、段状遺構の掘り込み壁にはほぼ平行して柱穴が掘り込まれている。柱穴は5本（P53・P63・P68・P61・P54）検出された。平坦面下側が流出しているため、P68に対応する柱穴を検出できなかつたが、梁間1間・桁行2間、東西妻通長1.46m・南北桁行長3.26mの規模をもつ建物であると思われる。各柱穴プランは、P53（35×28-58）、P63（29×41-36）、P68（37×35-56）、P61（45×30-34）、P54（28×25-29）である。柱穴間距離は上に挙げた順でP53より1.74m、1.52m、……、1.65m、1.46mをはかる。東側に、建物を囲む（北側は消失しているか）様に溝が3本掘り込まれている。それぞれ幅は10cm前後、深さも10cm前後である。斜面を流れ落ちてくる水を排水する役目をもっていたものと思われる。第3号掘立柱建物跡と同様に、本遺構に伴う遺物はないと考えた。第4号掘立柱建物跡は、第3号掘立柱建物跡と同一平坦面上に位置し、ほぼ軸方向を同じくすることから、第3号掘立柱建物跡と同時期のものと思われる。

第5号掘立柱建物跡（挿図89・90・108、図版16）

位 置 第14号段状遺構内に第3号・第4号掘立柱建物跡とともに存在する。主軸は北北西—南南東をとり、段状遺構の掘り込み壁にはほぼ平行に柱穴が並ぶ。柱穴は4本（P4・P14・P13・P5）だけ検出す

るにとどまったが、第4号掘立柱建物跡の形態及び平坦面の流出を考慮に入れるに、P4・P5の北側にそれぞれ1本ずつ柱穴が存在していた可能性が高く、梁間1間・桁行2間の建物であったと思われる。桁行長は不明であるが、妻通長1.9mをはかる。各柱穴プランは、P4(28×19-26)、P14(27×25-38)、P13(32×31-41)、P5(24×22-27)である。柱穴間距離は上に挙げた順でP4より1.9m、1.9m、1.75mをはかる。東側に、建物を囲む様に溝が2本掘り込まれている。幅は30cm前後、深さは10cm前後である。斜面を流れ落ちてくる水を排水する役目をもっていたものと思われる。第3号掘立柱建物跡と同様に本遺構に伴う遺物はないと考えた。第4号掘立柱建物跡と同様、第5号掘立柱建物跡は第3号掘立柱建物跡と同時期のものと思われる。



插図106 第3号掘立柱建物跡実測図

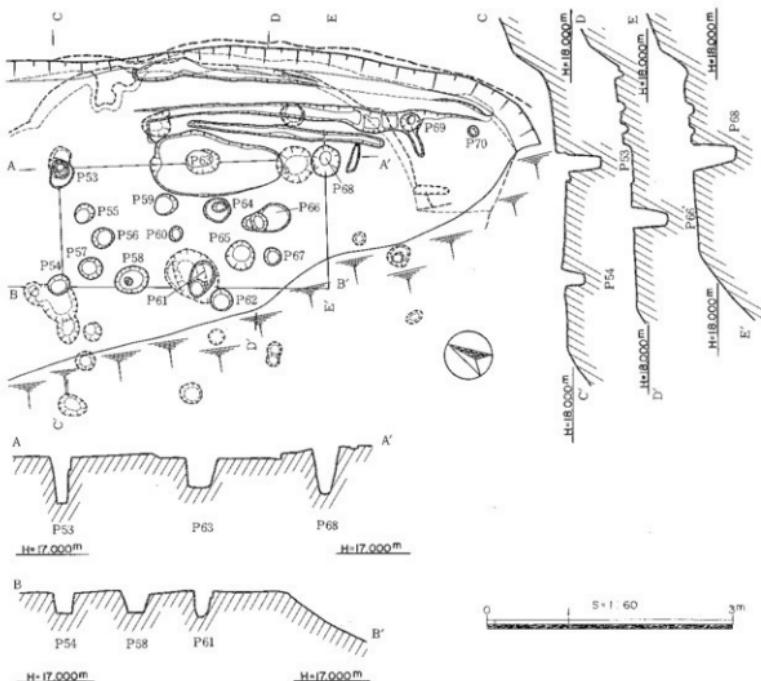
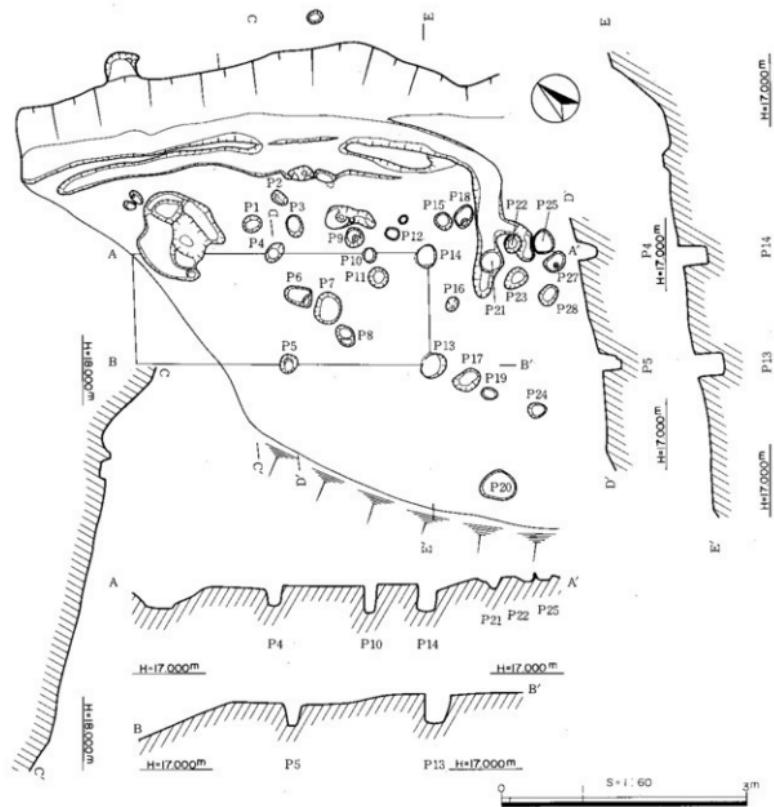


插图107 第4号据立柱建筑物勘探图

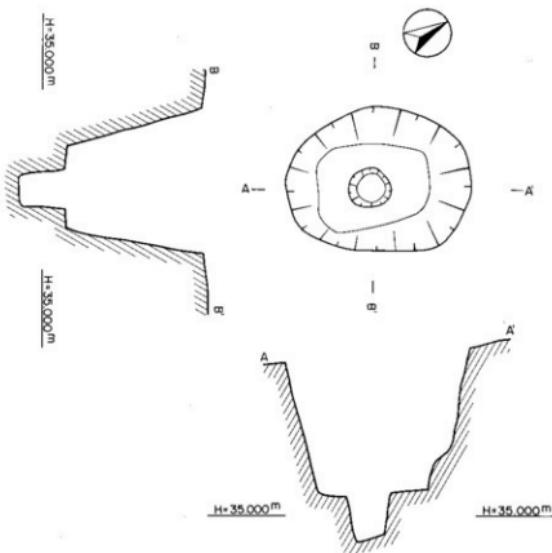


挿図108 第5号権柱建物跡実測図

第5節 土 壤

第1号土壤 (挿図109、図版17)

位 置 形 態 尾根頂部南側、標高37m付近に位置し、第2号土壤の北西約6mにある。東宗像24号墳の墳丘除去後に検出した。平面形は楕円形で、主軸は北東—南西をとる。上縁部の長径は1.5m、短径は1.2m、深さは1.1mをかる。底面はほぼ平らでいびつな長方形を呈し、長軸0.91m、短軸0.68mである。中央部にピット(36×32×38)を検出した。埋土はよくしまり暗灰色土であった。遺物は全く出土しなかった。落し穴ではないかと思われる。時期は不明である。

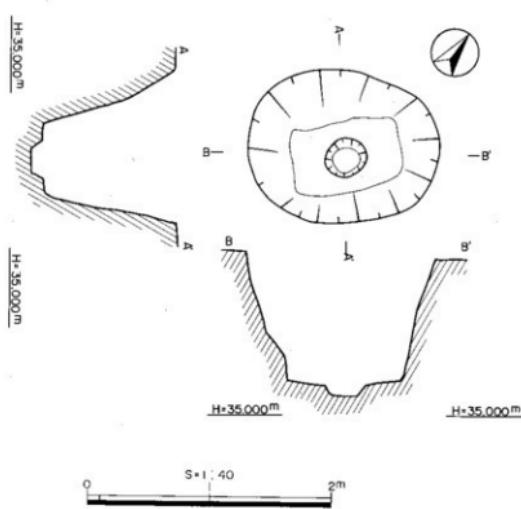


挿図109 第1号土壤実測図



**第2号土壤
(挿図110、図版17)**

位 置 尾根頂部南側に位置し、第1号土壤の南東約6mにある。平面形は楕円形で、主軸は北東—南西をとる。上縁部の長径は1.55m、短径は1.25m、深さは1.08mをはかる。底面はほぼ平らで長方形を呈す。長軸0.90m、短軸0.57mをはかる。

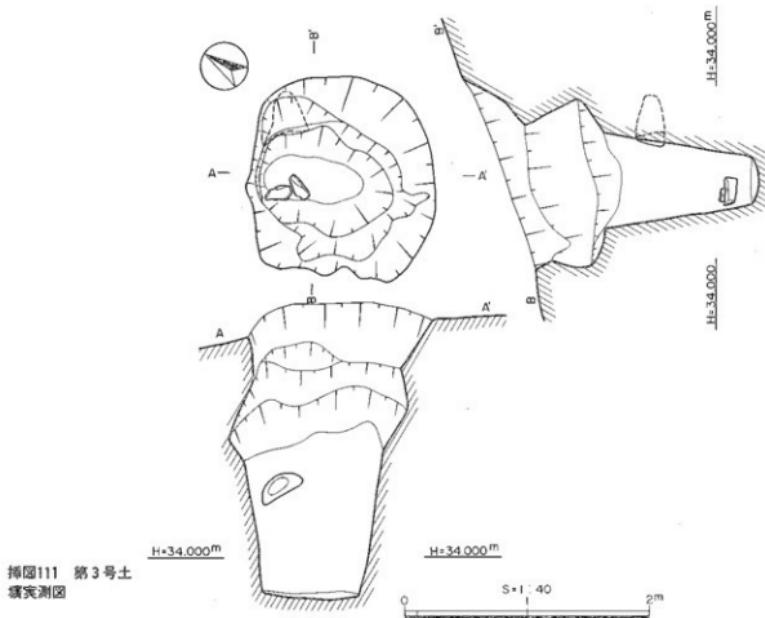


挿図110 第2号土壤実測図

中央部にピット（35×30-12）を検出した。埋土はよくしまり暗灰色土であった。遺物は全く出土しなかった。落し穴かと思われる。時期は不明である。

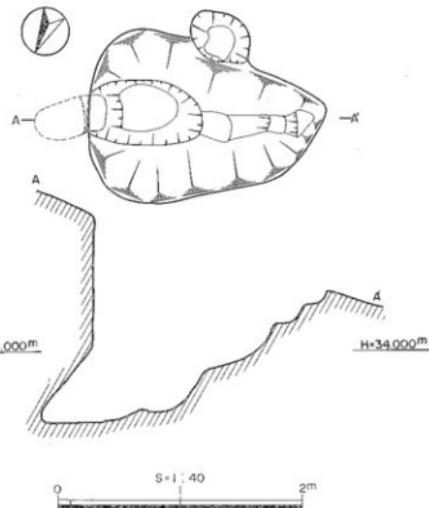
第3号土壤（挿図111、図版17）

位 置 調査区南端尾根頂部より斜面がはじまるあたり、標高36m付近に位置し、第2号土壤の南約10mにある。
形 態 平面形はいびつな円形で、上縁部径は約1.5mである。深さは斜面上側で2.4mをかる。断面形は、上縁部より約90cm下がったあたりが袋状に拡がり、その後底面に向ってすぼまる形をとる。掘り込み壁の中ほどに、穴が横向きに穿たれている。底面は梢円形を呈し、長径0.80m、短径0.35mをはかる。
時 期 埋土は灰色土でよくしまっていた。底面よりやや浮くかたちで、自然石が2つ出土した。時期は不明である。



第4号土壤（挿図112、図版17）

位 置 尾根頂部より斜面がはじまるあたり、標高35m付近に位置し、南西約5mに東宗像西4号横穴、南約3mに東宗像西6号横穴が存在する。斜面を頂部側に向って地下に潜る様に地山を掘り窓めている。
形 態 平面形はいびつな梢円形をなし、上縁部の長径は1.95m、短径は1.3mをはかる。斜面上側の肩より最

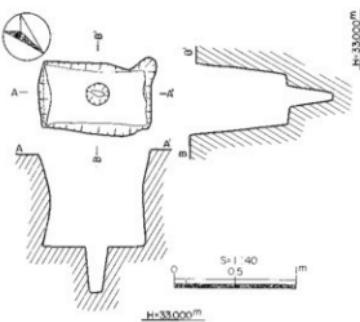


挿図112 第4号土壙実測図

時 期 深部までは1.7mをはかる。斜面上側は急に掘り込まれているのであるが、斜面下側は最深部に向う様に階段状に緩やかに掘り込まれている。遺物は全く出土しなかった。時期は不明である。

第5号土壙（挿図113、図版17）

位 置 尾根頂部中央付近に位置する。東宗像5号
形 態 墳の墳丘を除去後検出した。平面形はいびつな長方形をなし、上縁部の長軸は0.93m、短軸は0.67m、深さは0.64mで、第1・第2土壙に比して小型で浅い。主軸は南北方向をとる。底面は平らでいびつな長方形を呈し、長軸0.65m、短軸0.35mをはかる。中央部やや北よりでピット（18×16-36）を検出した。
埋 土は淡黄褐色土でよくしまっていた。遺物
時 期 は全く出土しなかった。時期は不明である。

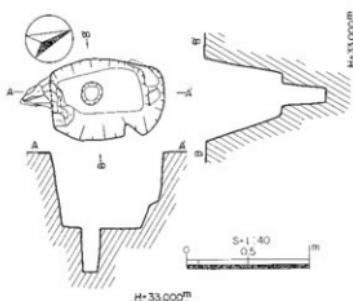


挿図113 第5号土壙実測図

第6号土壤（挿図114、図版17）

位 置 第5号土壤の南約0.7mに位置する。第5号土壤と同様に、墳丘の下で検出された。平面形はいびつな長方形である。主軸は北西—南東をとる。上縁部の長軸は0.92m、短軸は0.59mをはかり、深さは0.8mで、第1・第2号土壤に比して小型で浅い。底面は平らで長方形を呈し、長軸は0.83m、短軸は0.40mである。中央部でピット（18×18-38）を検出した。

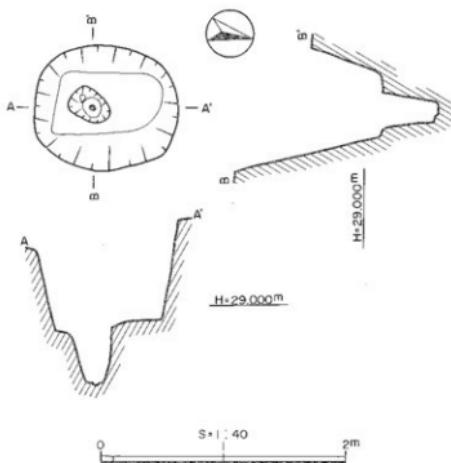
時 期 遺物は全く出土しなかった。時期は不明である。



挿図114 第6号土壤実測図

第7号土壤（挿図115、図版18）

位 置 西斜面尾根頂部近くの急斜面に位置し、第8号土壤の約11m南東にある。平面形は橢円形をなす。主軸は北北西—南南東をとる。上縁部の長径は1.16m、短径は1.00mで、深さは斜面上側で1.18mをはかる。底面は平らでいびつな長方形を呈し、長軸は0.86m、短軸は0.50mである。中央部でピット（35×24-48）を検出した。埋土は暗灰色土でよくしまっていた。遺物は全く出土しなかった。落し穴と思われる。時期は不明である。



挿図115 第7号土壤実測図

第8号土壤（挿図116、図版18）

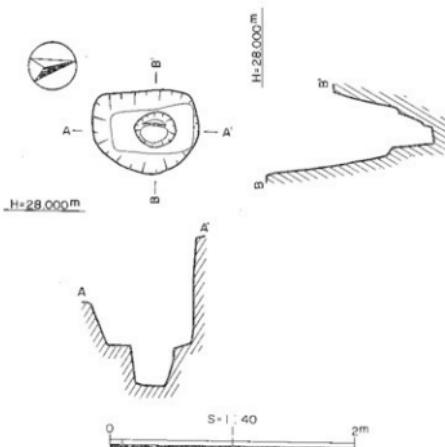
位 置 西斜面の尾根頂部近くの急斜面に位置し、第9号土壤の南南東約18mにある。平面形は東側がやや膨らむ長方形である。主軸は南北方向をとる。上縁部の長軸は0.86m、短軸は0.69mで、深さは斜面

上側で1.00mをはかる。底面は平らで長方形を呈し、長軸は0.68m、短軸は0.36mである。中央部でピット（35×30-33）を検出した。埋土は暗灰色土でよくしまっていた。遺物は全く出土しなかった。

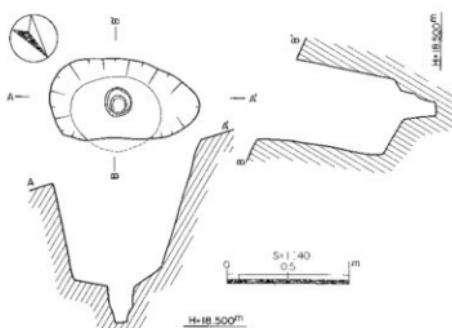
時 期 落し穴と思われる。時期は不明である。

第9号土壙（挿図117、図版18）

位 置 西斜面北側、東宗像2号墳前方部南端の墳丘の下層で検出された。第8形 態 号土壙の北北西約18mに位置する。平面形は横円形をなす。主軸は北北西-南南東をとる。上縁部の長径は1.25m、短径は0.66mで、深さは斜面上側で1.04mをはかる。底面は横円形を呈する。長径は0.74m、短径は0.62mをはかり、中央に向って低くなっている。中央部でピット（24×21-29）を検出した。埋土は暗灰褐色土でよくしまっていた。遺物は全く出土しなかった。落し穴であると思われる。時期は不明である。



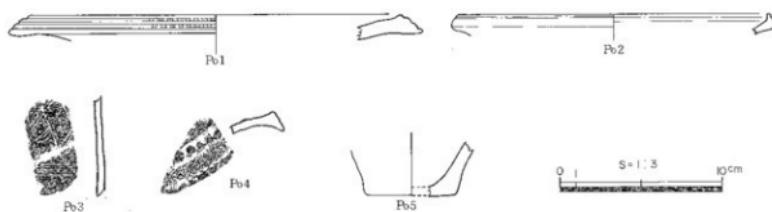
挿図116 第8号土壙実測図



挿図117 第9号土壙実測図

第10号土壙（挿図117・118、図版18）

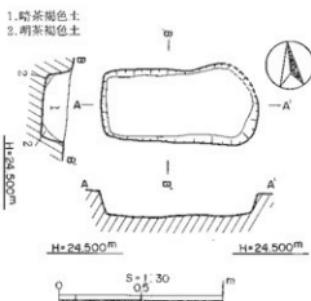
位 置 東宗像2号墳の前方部墳丘下で検出された。平面形は東側がやや膨らむいびつな長方形である。主軸はほぼ南北方向をとる。上縁部の長軸は0.97m、短軸は0.45mをはかる。深さは0.14mである。底面形はいびつな長方形を呈し、長軸は0.89m、短軸は0.48mである。土壙内より弥生土器の口縁Po1が出土し、土壙周辺部からも弥生土器Po2～Po5の出土をみた。出土遺物より第10号土壙は弥生時代中期後葉のものと思われる。



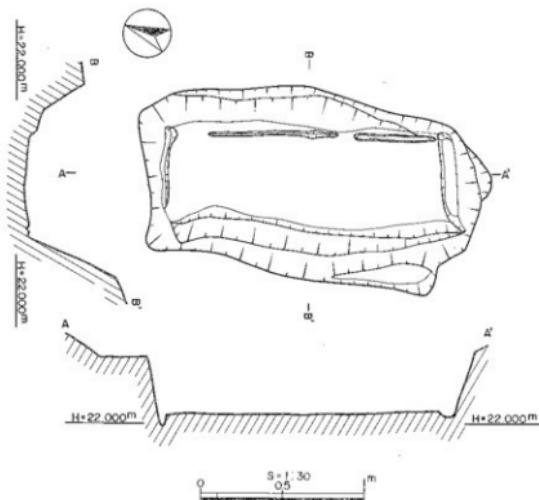
挿図118 第10号土壌内及び付近出土土器実測図

第11号土壤 (挿図30・31・120・121、図版18)

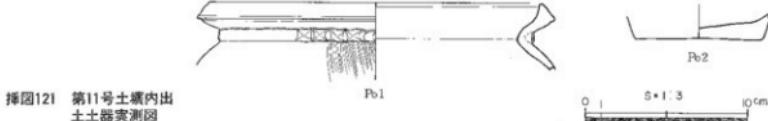
位 置 第6号竪穴住居跡の上段部中央で検出された。
形 態 平面形はいびつな長方形で主軸を北北西—南南東にとる。東側は上段部の掘り込み壁をやや削り込んで、床面には溝をもつ。上縁部の長軸は2.1m、短軸は1.2mをはかる。深さは上段部床面より0.34mである。底面は平らで長方形を呈し、長軸1.8m、短軸0.6mをはかる。床面上で甕Po1・底部Po2が出土した。
時 期 出土遺物より第11号土壤は弥生時代中期後葉のものであると思われる。



挿図119 第11号土壌実測図



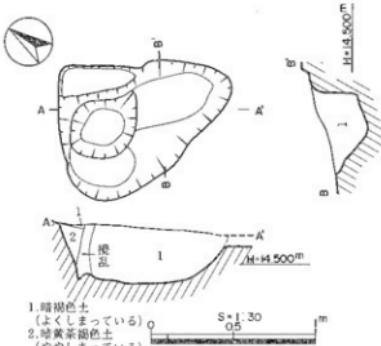
挿図120 第11号土壌実測図



挿図121 第11号土壤内出土土器実測図

第12号土壤 (挿図122、図版18)

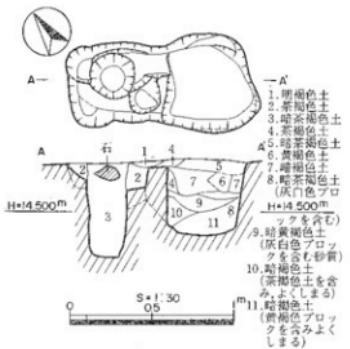
位 置 第2号段状遺構の床面南東部にある。平面形は不整形である。北西一南東長は上縁部で1.1mをかる。埋土中より埴輪片、須恵器片が出土したが固化できなかった。



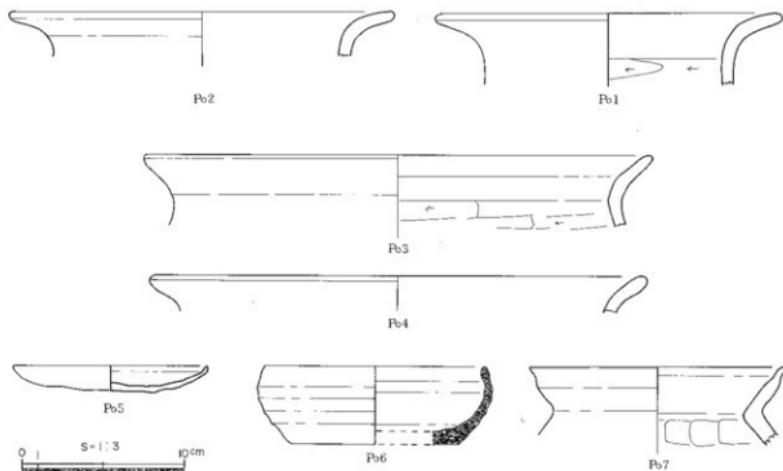
第13号土壤 (挿図123・124、図版19・30)

位 置 西斜面下部の緩斜面、第1号段状遺構の南東約8mに位置する。
形 態 平面形は中がくびれるいびつな長方形である。上縁部の長軸は1.13m、短軸は0.48mをかる。本土壌は浅い北西部（深さ0.12m、後世にピットが掘り込まれている）と深い南東部（深さ0.44m）とに分かれる。南東部埋土上層より土師器片等が出土した。固化できたものは甕Po1～Po4・Po7・皿Po5、須恵器の环のPo6である。出土した遺物は全て埋土上層である。
遺 物 ことから、出土遺物から時期決定はできなかった。

挿図122 第12号土壤実測図



挿図123 第13号土壤実測図



擇図124 第13号土壙出土土器実測図

第14号土壙（擇図125～128、図版19・31）

位 置 第14号土壙は調査区西端中央付近の尾根裾部に位置している。第5号竪穴住居跡の北西3.5m、第3号竪穴住居跡の南10mに位置しており、土壙状遺構の南東端近くに掘り込まれた所謂「袋状貯蔵穴」である。形状は断面フラスコ形で、底面は南東径1.15m、東西径1.20mのほぼ円形を呈し、平坦である。上縁は検出面で、径0.9m前後の不整円形となるが、東側と西側でピット群②のピットが切り合っている。土壙の深さは最も遺存状態の良好な南側で1.05mをはかる。土壙内には廃棄後堆積した流入土が充満しており埋土中から多量の弥生土器片Po 2～7が出土している。他にはやはり埋土中から着柄部を欠損した太形給刃石斧を検出した。底面においては、底面に密着した状態で壺Po 1、高杯Po 8が出土した他、25×22cm、厚さ10cmの大型の角礫が底面付近で土器片を押しつぶす様にしているのが検出された（擇図125、図版31）。出土した土器はPo 1が頸部に3条の断面三角形凸帯をもつ壺の頸部で、4分割され床面中央と北側隅で検出されたを始め、復元不可能な破片となってその他多くが出土している。これらの遺物出土状況から第14号土壙は袋状の地下貯蔵穴として使用され、廃棄時に土器片と石を投げ込まれたものであり、前記の角礫は蓋（おそらく木蓋）の抑えであったと思われる。

形 態

遺 物

時 期 出土遺物から、第14号土壙は弥生時代中期後葉に放棄されたと考えられ、同時期の遺構としては第1号竪穴住居跡や第1号石蓋土壙基があり、これら集落における食糧の貯蔵に用いられたものと推定される。

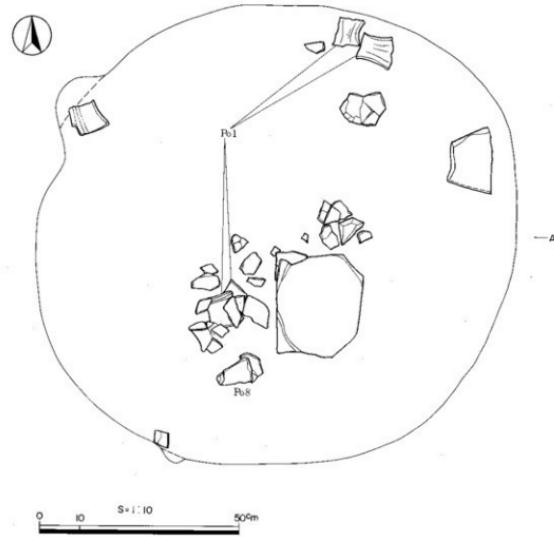


図125 第14号土壙遺物出土状況図

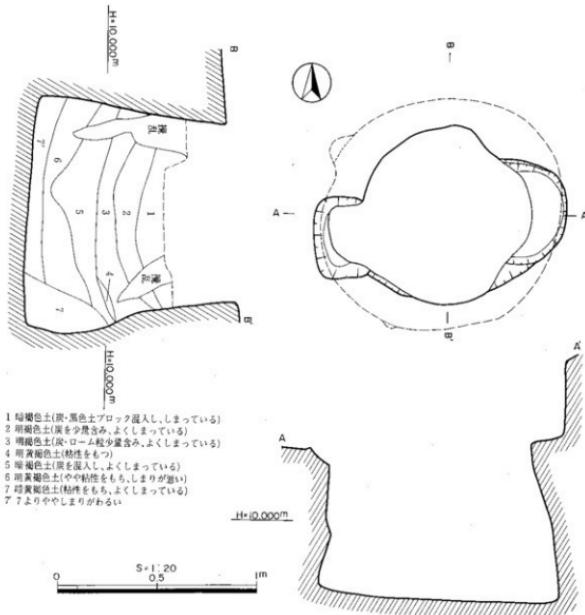
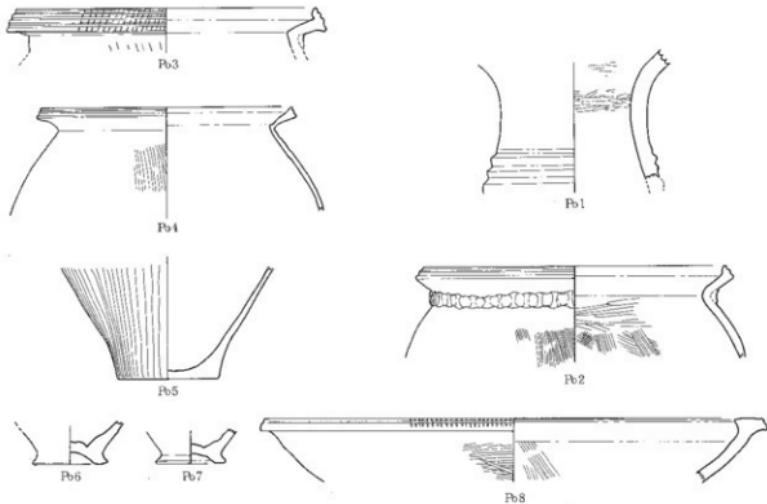
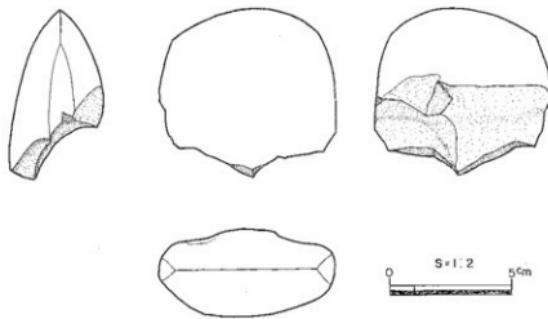


図126 第14号土壙実測図



0 1 S=1:3 10cm

插图127 第14号土窖出土土器实测图

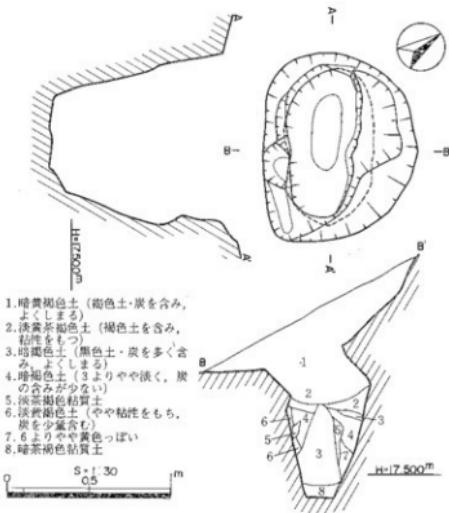


0 1 S=1:2 5cm

插图128 第14号土窖出土石斧实测图

第15号土壤 (掲図129、図版20)

位 置 西斜面中央部の中腹辺り、標高19m付近に位置し、
形 態 第10~13号段状造構の斜面下側すぐにある。平面形は片側が膨らむいびつな楕円形である。上縁部の長径は1.16m、短径は0.95mをはかる。斜面を掘り込んでいたため、斜面上側と下側では上縁部の比高差が0.7mある。上縁部から一度膨らんで底面に至る。斜面上側上縁部からの深さは1.58mをはかる。底面は平らでいびつな楕円形を呈し、長軸0.4m、短軸0.15mをはかる。遺物は全く出土しなかった。時期は不明である。



掲図129 第15号土壤実測図

掲図130 第16号土壤実測図

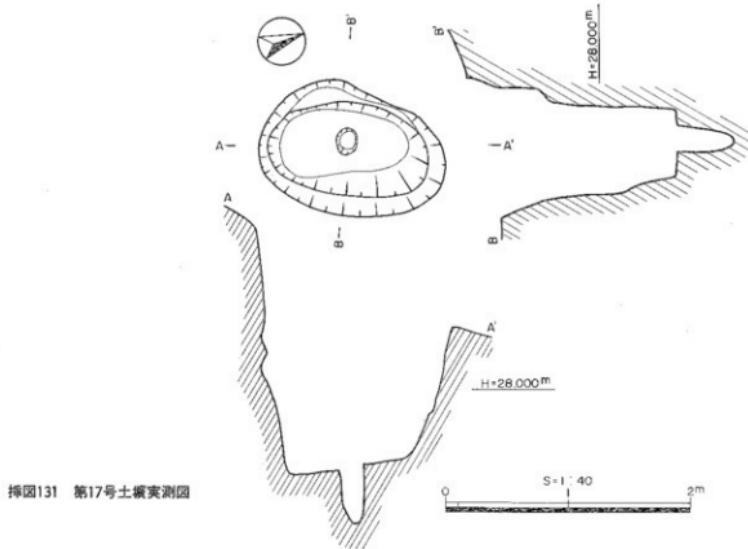


第16号土壤（挿図130、図版20）

位 置 尾根頂部南端に位置する。平面形は円形の土壤にテラスがつく。土壤の斜面上側を取り囲む様に溝が存在する。溝の深さは最深部で0.38mをはかる。土壤上縁部の径は約1.7m、深さは斜面上側上縁部より2.2mをはかる。底面は平らで円形を呈し、径は約0.45mである。底面中央部でピット（24×24—32）を検出した。土層断面（挿図130 A—A'断面・第6層）よりピットに棒状のものが差し込んであった可能性がある。遺物は全く出土しなかった。落し穴であると思われる。時期は不明である。

第17号土壤（挿図131、図版20）

位 置 東斜面の上部南端急斜面、標高30m付近に位置し、第18号土壤の北東約3.5mにある。平面形はいびつな橢円形である。上縁部の長径は1.5m、短径は1.1mをはかる。斜面を掘り込んでいるため、斜面上側と下側では上縁部の比高差が0.78mある。斜面上側上縁部からの深さは2.0mをはかる。底面は平らで長径1.05m、短径0.50mをはかる。底面中央部でピット（17×22—46）を検出した。埋土は、灰褐色でよくしまる。遺物は全く出土しなかった。落し穴であると思われる。時期は不明である。

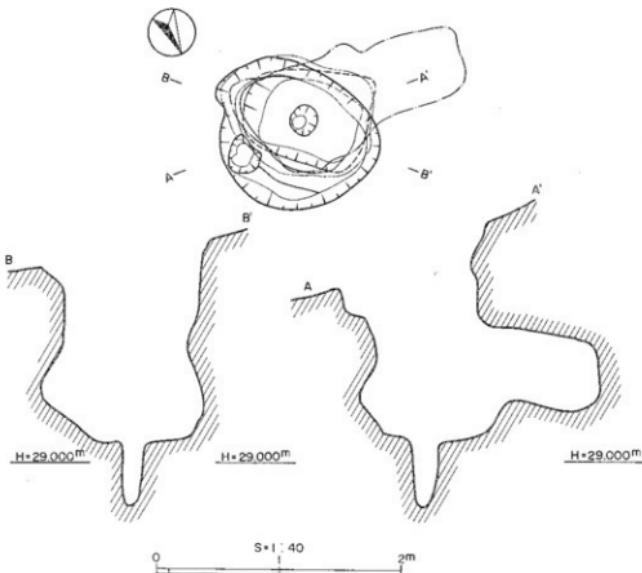


挿図131 第17号土壤実測図

第18号土壤（挿図132、図版20）

位 置 東斜面の上部南端急斜面、標高32m付近に位置し、第17号土壤の南西約3.5mにある。平面形はいびつな円形である。上縁部の径は約1.3mをはかる。斜面を掘り込んでいるため、斜面上側と下側では上縁部の比高差が0.56mある。斜面上側上縁部からの深さは1.8mをはかる。底面はいびつな長方形を呈し、長軸0.80m、短軸0.55mをはかる。底面上でピット（25×22—54）を検出したのに加えて本土土壤では、

西側掘り込み壁に横方向の穴が穿たれていた。埋土は灰褐色でよくしまる。遺物は全く出土しなかつた。落し穴であると思われる。時期は不明である。



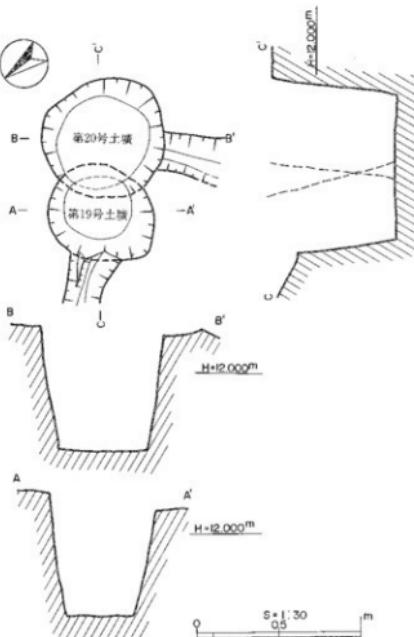
挿図132 第18号土壌実測図

第19号土壤（挿図133、図版20）

位 置 西斜面中央部やや北よりの最下部、第5号竪穴住居跡の東側部を切って掘り込まれている。第20号土壤とも切り合っているため南東側部分が欠けているが、平面形は円形を呈していたものと思われる。
形 態 上縁部北東—南西径は0.65m、深さは0.77mをかる。底面は平らで円形を呈していたものと思われる。
時 期 北東—南西径は0.40mである。埋土中で須恵器片が出土したが図化できるものはなかった。時期は不明である。

第20号土壤（挿図133、図版20）

位 置 第19号土壤と切り合って存在する。平面形は円形を呈していたものと思われる。上縁部北東—南西径は0.75m、深さは0.79mをかる。底面は平らであり円形を呈していたものと思われる。北東—南西径は0.55mである。全体的に第19号土壤より大型である。埋土中で須恵器片が出土したが図化できるものはなかった。時期は不明である。



挿図133 第19・第20号土壤実測図

第6節 溝状遺構及び道路状遺構

第1号溝状遺構（挿図134～136、図版31）

位 置 西斜面南側下部の緩斜面、標高13m付近に位置し、第7号竪穴住居跡の南西約9mにある。北西側を第3号竪穴住居跡によって切られている。等高線の走向にはほぼ沿うかたちで掘り込まれている。長さは約8mを残す。幅は北西側が拡がり、狭い所で0.32m、広い所で1.70mをはかる。深さは最深部で0.25mである。溝内でP 1 (26×18-11)、P 2 (20×14-9)、溝外でP 3 (40×30-35)、溝を掘り込むかたちでP 4 (70×68-33)を検出した。出土遺物の内図化できたものは、壺Po 1・壺Po 2～Po 4・無頸壺Po 5・高環Po 6がある。出土遺物より第1号溝状遺構は弥生時代後半のものであると思われる。

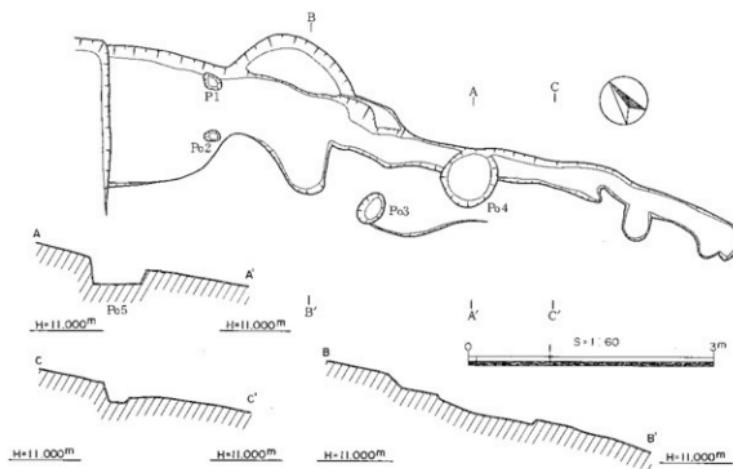


挿図134 第1号溝状遺構ピット深度図

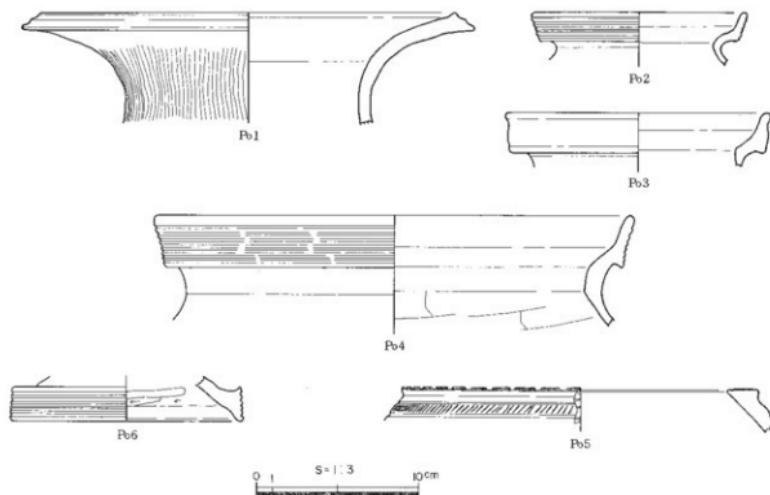
第2号溝状遺構（挿図28・137、図版21・32）

位 置 西斜面南側下部の緩斜面、標高12m付近に位置し、第2号溝状遺構の南南東約15mにある。等高線の走向にはほぼ沿うかたちで掘り込まれており、南東側が斜面下側に向かって曲がる。長さは約5m、幅は0.38m～0.78m、深さは最深部で0.37mをはかる。出土遺物の内図化できたものは壺Po 1～Po 3・

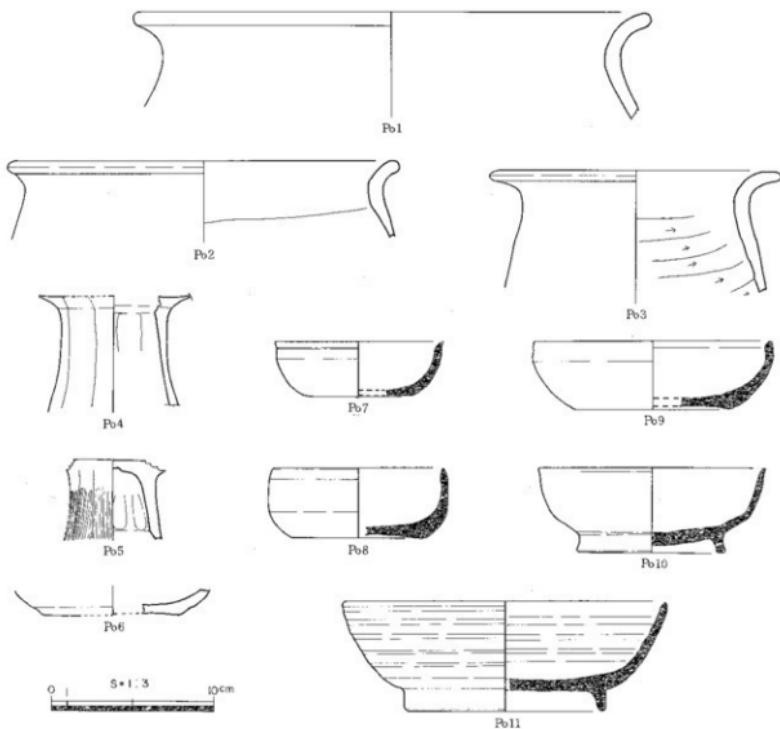
時 期 高環Po4～Po5・坏Po6、須恵器の环Po7～Po11である。出土遺物より第2号溝状遺構は奈良時代のものであると思われる。



挿図135 第1号溝状遺構実測図



挿図136 第1号溝状遺構出土土器実測図

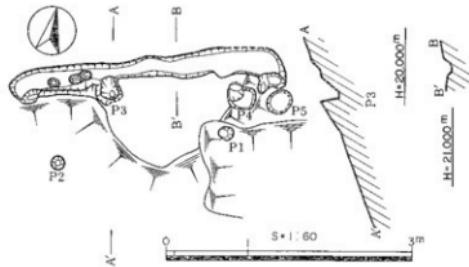


挿図137 第2号溝状遺構出土土器実測図

第3号溝状遺構（挿図138・139、図版21）

位置 西斜面のやや南より
中腹の急斜面、標高20
m付近に位置し、第14
号段状遺構の北3mに
位置する。等高線に直
交するかたちで掘り込
まれている。長さは約
3m、幅は0.17m～0.
32m、深さは最深部で
0.11mをはかる。付近
でピットを5個検出し

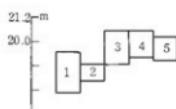
形態



挿図138 第3号溝状遺構実測図

た。ピットの配列をみるとP1(21×18-34)、P2(16×17-14)を主柱穴とする住居とも考えられるが、斜面を掘り込んで床面を造成するという本遺跡の住居の形態と一致しないため、溝状遺構として取り扱った。溝内北部で土器片を検出したが図化できなかった。

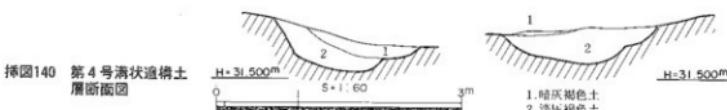
時 期 時期は不明である。



挿図139 第3号溝状遺構ピット深度図

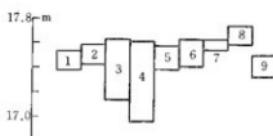
第4号溝状遺構（挿図140・192、図版21）

位 置 東宗像6号墳の南西側、標高31m付近より斜面を這い上がり、東宗像6号墳の北西側墳裾に沿う様形 態 にして周溝内に消える。幅は0.40m～0.95m、深さは最深部で0.20mをはかり、断面はU字型を呈する。
時 期 遺物は出土しなかった。時期は不明である。



第5号溝状遺構（挿図97・141）

位 置 西斜面南側中腹あたりの緩斜面、標高16m付近に位置し、第16号段状遺構の北西側に接するように存在する。
形 態 長さは約2.3mを残す。幅約0.35m、深さは最深部で0.16mをはかる。付近で8個のピットが検出され、南東側には溝につづくかたちで浅い段が存在する。ピット及び段の存在からこの溝は竪穴住居の側溝とも考えられるが、主柱穴の存在が確認できなかった事、消失部分の溝の形態がわからない事から、溝状遺構として取り扱った。土器片が出土したが図化は不可能であった。時期は不明である。



挿図141 第5号溝状遺構ピット深度図

第1号道路状遺構（挿図142、図版22）

位 置 西斜面中央の標高19m付近より標高25m付近まで斜面を這い上がる様に位置する。第11号段状遺構の斜面下側約4mよりはじまり(さらに下側にのびていた可能性もある)、一度約5m斜面を垂直に這い上がった後、北方へ急カーブし、斜面を斜めに横切る様に這い上がり、第2号木棺基のあるテラスの下側約2mあたりに消滅している(さらに上側にのびていた可能性がある)。全長は約18m、幅は0.5m～2mをはかる。斜面上側を0.9m以上掘り込み、道路面を造っている。道路面には階段状のものが存在する。断面はU字型を呈する。第1号道路状遺構で注目されるのは、掘り込み壁面に小規模横穴が

5基（東宗像西10・11・12・13・14号横穴）存在するということである。すなわち第1号道路状造構は、小規模横穴に関係する道路（参道？）であると考えられる。

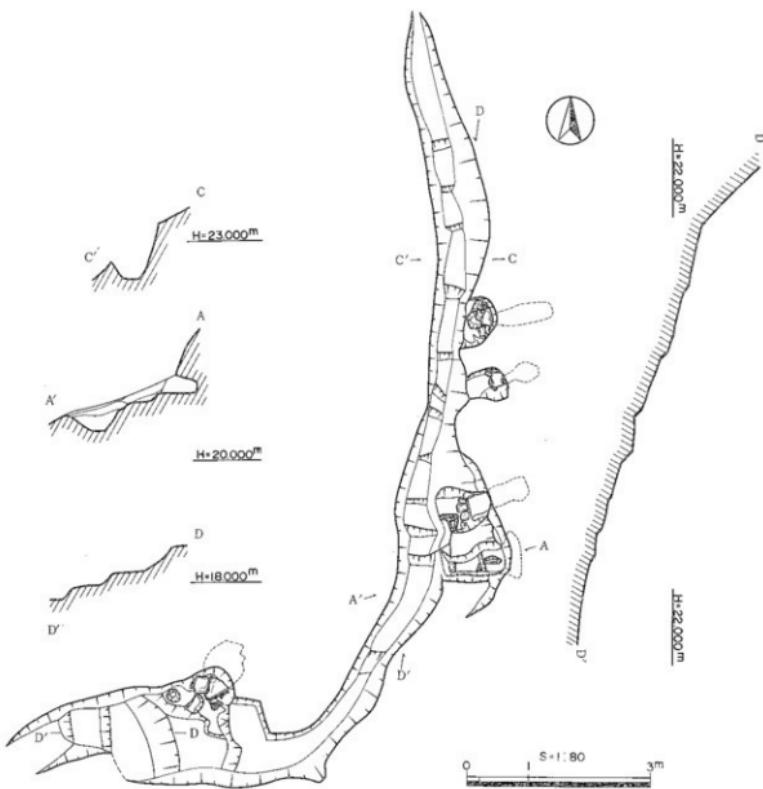
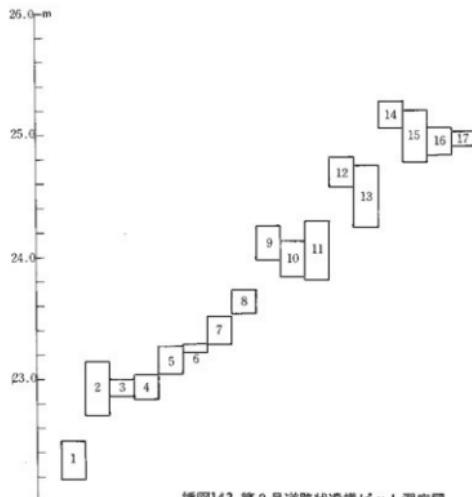


図142 第1号道路状造構実測図

第2号道路状遺構（挿図143・144、図版22）

位 置 西斜面上部の急斜面に位置する。
形 態 第5号段状遺構の北東9m付近よりはじまり(さらに斜面下側に存続していた可能性もある)斜面を約3mまつすぐに這い上がった後南東方向に急カーブする。その後斜面を横断する様にして東宗像5号墳の墳頂下約5mの所に至る。全長は約39m、幅は0.4m~2.7mをはかる。斜面上側を最大で1m以上掘り込む。不規則ではあるが、道路面で階段状のものを検出した。
遺 物 墓輪片が最上部の道路面で出土した。古墳への道である可能性がある。



挿図143 第2号道路状遺構ピット深度図

第3号道路状遺構（挿図145～147、図版22）

位 置 東宗像6号墳の南側尾根を東西に横断する形で位置し、標高は最下部で32m、最上部で34mと高低差2mをはかる。全長は平面で17mであり西側斜面部においては溝状の掘り込みであったが東側斜面部において階段状の段を検出したため、道路状遺構として一括して取り扱う。中央部付近の幅約1.3mをはかるが、東西両斜面とも扇状に幅が拡大して消滅する。約34m付近の遺構最高所において、自然石及び割石を用いた集石が存在した。埋土等に炭化物等の痕跡はみられず、この集石には道標的性格が与えられよう。埋土中より須恵器片Po1が出土しているが、床面よりかなり上層で検出されたため、本遺構に伴う遺物と判断できない。この他に遺物は検出されず、また他の遺構との切り合いも不明のため、本遺構の構築時期は不明である。



第145 第3号道路状遺構集石部実測図

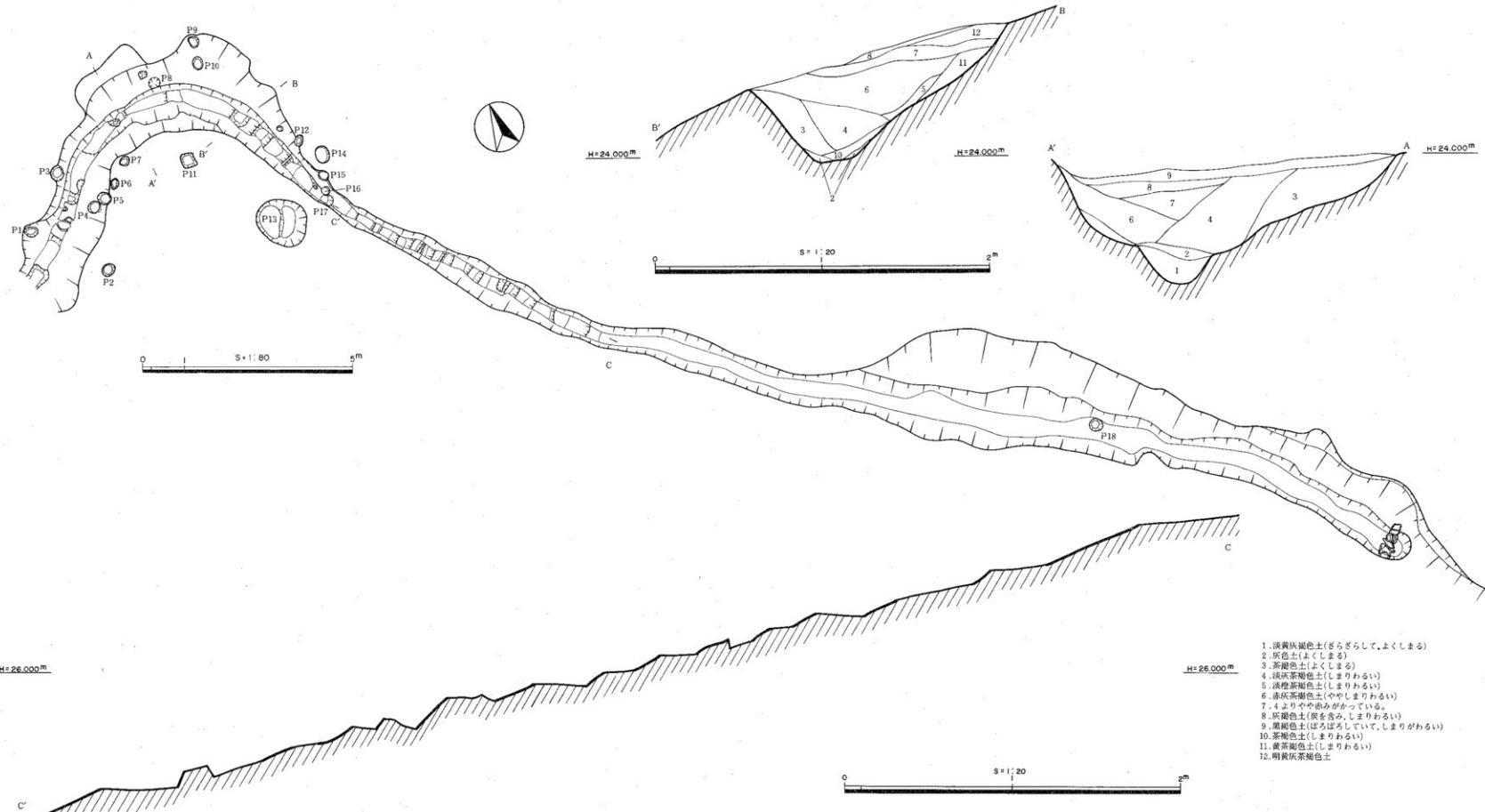


插图144 第2号道路状造構実測図

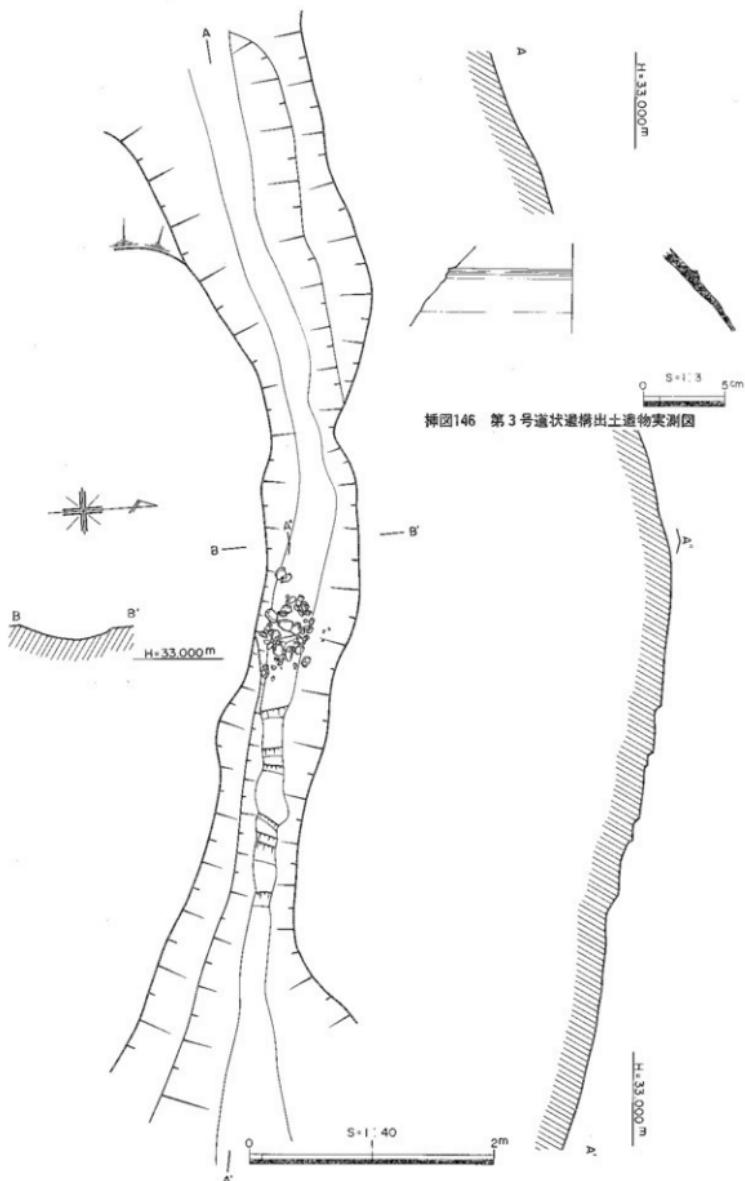
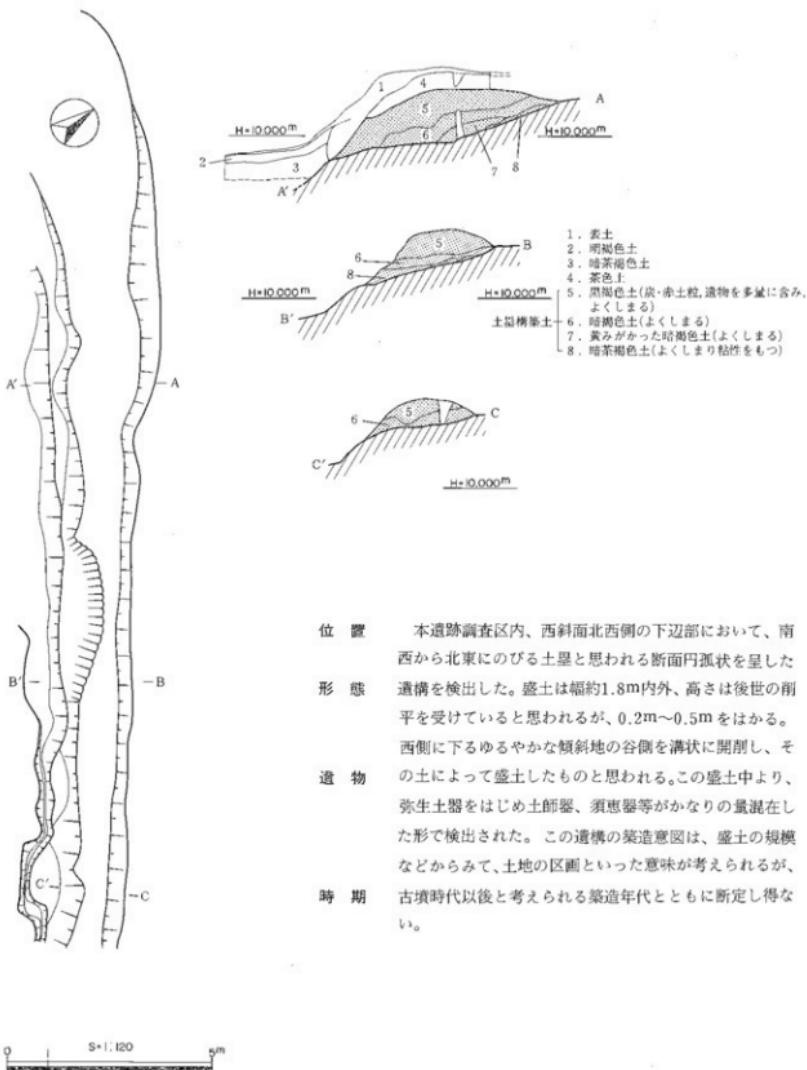


図146 第3号道路状遺構出土遺物実測図

第7節 その他の遺構

土壘状遺構（挿図148～150、図版23・32）



挿図148 土壘状遺構実測図

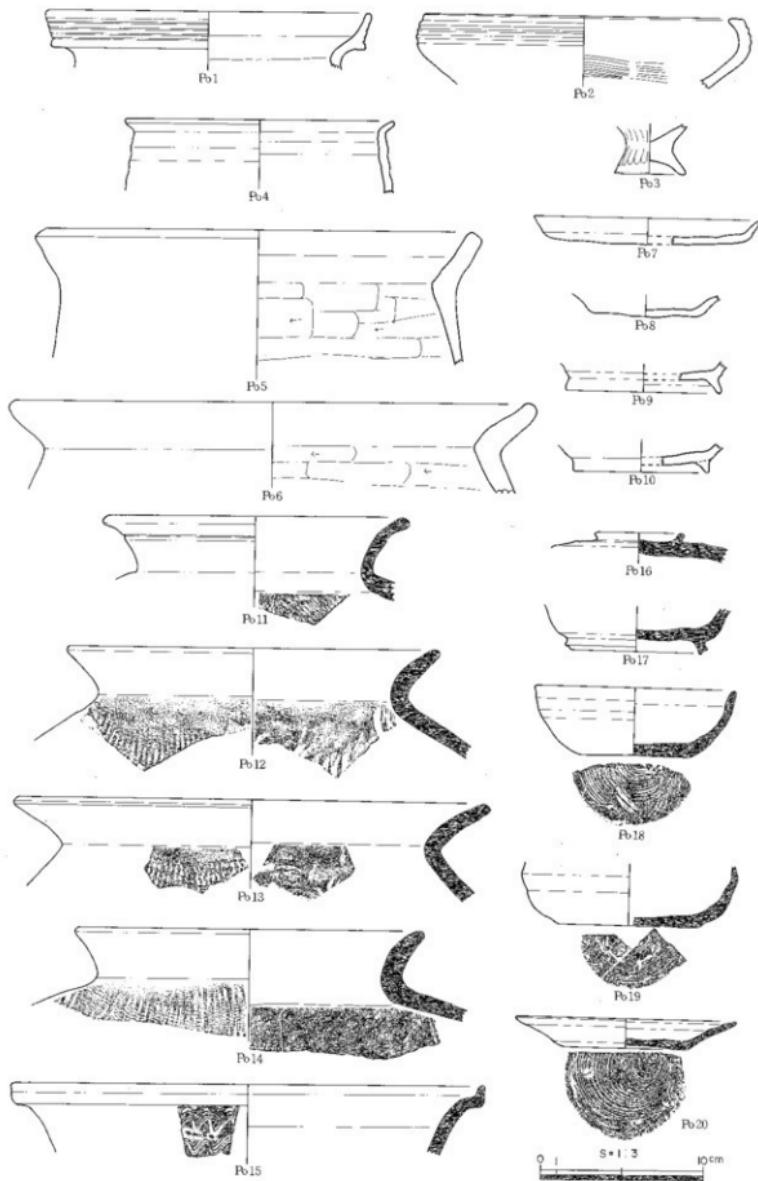
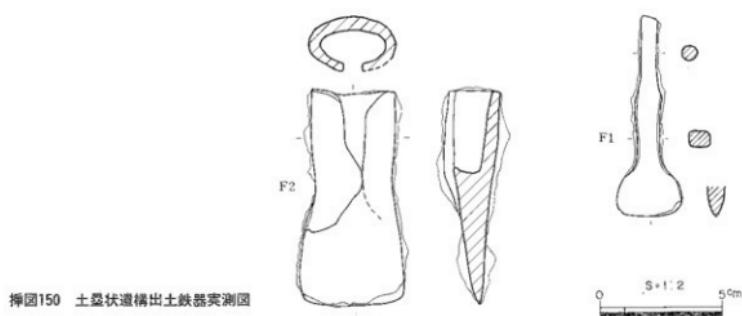


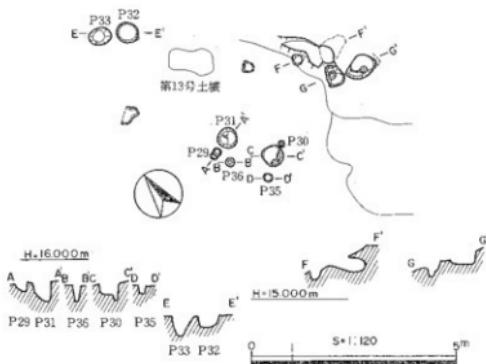
插图149 土层状遗物出土实物实测图



挿図150 土壙状遺構出土銅器実測図

ピット群（挿図151・152、挿表2）

西斜面の北東側、標高10~12m付近の本遺跡調査区内では比較的傾斜のゆるやかな地域において、多数のピットを検出した。3号及び5号竪穴住居跡や、1号・2号溝状遺構が至近距離にあり、これらの遺構に伴う柱穴等の痕跡の可能性があるが確認できなかった。各ピットはほとんどが円形でそれぞれの計数は挿表2に示した。なお一部のピットより少數の遺物を検出したが、いずれも細片で図化し得ない。



挿図151 ピット群①実測図

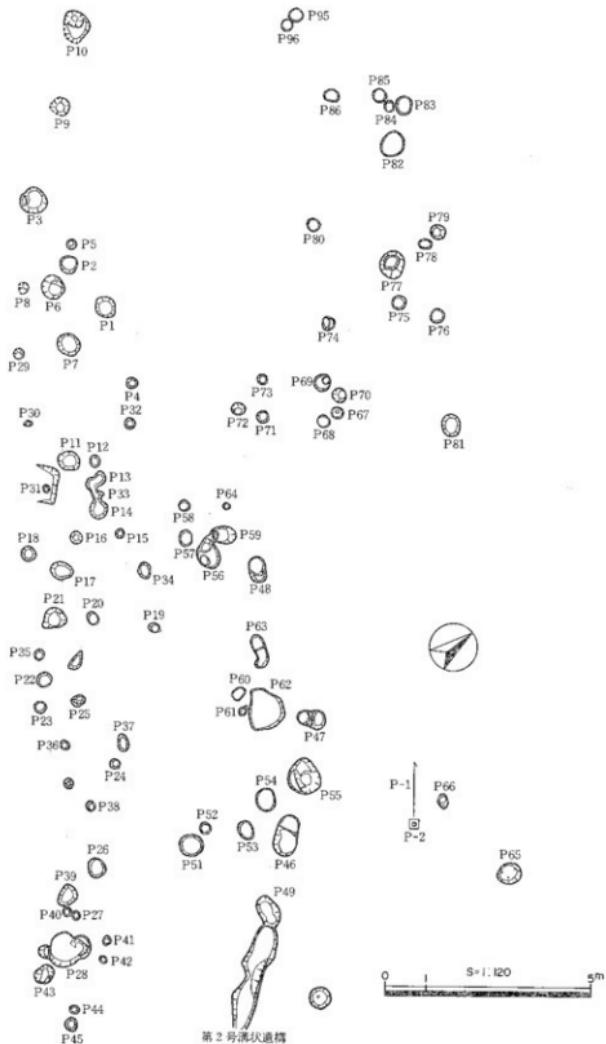


図152 ピット群②実測図

ピット番号	長径	短径	深さ	備考	ピット番号	長径	短径	深さ	備考
P 1	59	49	41		P 48	—	—	—	
P 2	45	45	39		P 49	53	52	38	
P 3	65	64	51		P 50	57	52	21	
P 4	26	25	29		P 51	27	26	10	
P 5	24	22	47		P 52	49	36	16	⊕
P 6	56	55	58		P 53	56	45	16	⊕ ⊕
P 7	57	54	27		P 54	88	78	8	⊕ ⊕
P 8	28	13	32		P 55	80	52	38	
P 9	49	47	36		P 56	41	32	18	
P 10	81	62	26		P 57	26	24	20	
P 11	50	46	50		P 58	64	43	31	
P 12	29	23	14		P 59	34	25	12	
P 13	35	27	23		P 60	21	18	9	
P 14	47	43	33		P 61	101	87	21	⊕
P 15	24	22	21		P 62	82	34	28	
P 16	29	28	32		P 63	17	16	24	
P 17	56	45	52		P 64	59	53	31	⊕
P 18	36	35	33		P 65	36	25	21	
P 19	26	22	31	⊕	P 66	29	27	40	
P 20	32	25	24		P 67	30	28	49	
P 21	60	49	47		P 68	40	39	17	
P 22	49	33	31		P 69	36	33	65	
P 23	30	29	44		P 70	29	28	14	
P 24	25	22	22		P 71	33	28	22	
P 25	34	26	30		P 72	29	29	22	
P 26	50	42	31	⊕ ⊕	P 73	33	30	20	
P 27	24	21	21		P 74	36	32	20	
P 28	23	14	16		P 75	34	31	15	
P 29	20	13	24		P 76	68	58	44	
P 30	17	15	19		P 77	62	48	13	
P 31	—	—	11		P 78	38	37	29	
P 32	—	—	33		P 79	31	30	9	
P 33	42	30	12		P 80	55	44	41	
P 34	39	34	18		P 81	66	54	16	
P 35	23	23	18		P 82	46	40	13	
P 36	45	26	13		P 83	27	23	15	
P 37	26	22	12		P 84	34	33	16	
P 38	55	40	14		P 85	37	29	14	
P 39	25	22	8		P 86	37	34	13	
P 40	23	19	9		P 87	28	28	12	
P 41	19	18	9						
P 42	50	43	35						
P 43	25	20	20						
P 44	29	28	7						
P 45	100	58	35	⊕ ⊕					
P 46	66	47	26	⊕ ⊕					
P 47	64	40	20	⊕					

⊕→弥生土器
⊕→須恵器
⊕→土師器
が出土したことを示す

挿表2. ピット群計数表

第8節 小 結

本節においては、集落跡として取り扱った遺構を時代別に概観することとする。本節で概観する遺構は、前節までの記述に基き、弥生時代（中期後葉・後期後半）、古墳時代（中期・後期）、奈良時代及びそれ以降に時代区分することができる。

1 弥生時代（挿図153）

中期後葉の遺構として判じ得るものは、竪穴住居跡4-1第1・第2・第6・第12号、段状遺構2-1第7・第8号、土壙3-第10・第11・第14号である。後期後半の遺構として判じ得るものは、竪穴住居跡2-1第7・第8号、溝状遺構1-第1号である。その他、第1・第2号掘立柱建物跡も出土遺物より弥生時代の遺構と思われるが、底部のみの出土であるため、いずれの時期のものであるかは言明できない。

中期後葉 まず中期後葉の遺構についてみると、この時期の遺構は西斜面の北半部のみで検出された。竪穴住居跡は4棟検出され、いずれも平面形は円形（第2節で述べた推定の平面形）であり、主柱穴数は4個（第2節で述べた推定の偶数）である。側溝は第12号を例外として他全てにおいて壁際ないしはそれ近くで検出された。特殊ピットは例外なく床面中央部で検出され、平面円形を呈する。竪穴住居間距離（残存部分より推定した原形の竪穴住居間の距離であり、以下竪穴住居間距離において断わらない）は第1-第2号間が0m（切り合）、第1-第6号間が約32m、第1-第12号間が約50m、第6-第12号間が約23mである。全体として東西約30m、南北約60mの範囲での存在が確認できる。竪穴住居間距離からみれば、中期後葉において、第1号ないしは第2号、第6号、第12号の3棟の併存が可能であるといえよう。これらの竪穴住居跡の内注目されるものは、祭祀用具と思われる磨製石剣が出土した第1号と、斜面を2段掘りにし貯蔵用と思われる土壙を有する第6号である。第6号は竪穴住居跡の内で最大の占有面積を有する。調査範囲が当該時期集落全域に及ばないため、この2棟の集落内における位置付について言及し得ない。

段状遺構は2つ検出された。いずれも上部の急斜面地に位置し、約6mの距離をおく。平坦面上にピットや溝が掘り込まれてはいるが、いかなる構築物が存在していたかは不明である。但し、第8号において、石斧（未製品か）、磨製の石錘、黒曜石の石核が出土しており、同遺構の斜面下側（第14号段状遺構埋土中）で黒曜石剣片が出土していることを考え合わせると、この第8号段状遺構は石器製作等に関連する作業を行なう場所としての機能を有していたと考えることもできる。

土壙は3つ検出された。第10号は尾根頂部北端に位置し、平面形は方形を呈する。第11号は第6号竪穴住居跡上段部の施設の一部（貯蔵用）として存在し、平面形は方形を呈する。第14号は西斜面の最下部に位置する所謂フ拉斯コ状の貯蔵穴である。第14号は第1号竪穴住居跡から約28m、第12号竪穴住居跡から約29mの距離を有する。

掘立柱建物跡は前述のごとく時期の断定はできないのであるが、第1号が第6号竪穴住居跡及び第7・第8号段状遺構に囲まれる様に立地していることから、第1号は中期後葉の遺構の可能性が高い。斜面を段状に掘り込み平坦面を造成した後、その平坦面に柱穴を掘り込む（この形態は、第1号だけに限らず、本遺跡における掘立柱建物跡全てに共通するものである）第1号は倉庫的な建物であろうか。

中期後葉期における遺構は、第1号竪穴住居跡を北端として南北に約60m、第8号段状遺構を東端として東西に約50mの範囲に存在する。その中央部的な位置に第1号石蓋土壙墓が存在する。そのあたりは緩やかな斜面であり、他にこの時期の遺構は存在しない。このことから、第1号石蓋土壙墓を中心とした広場的な場所をこの緩斜面地に想定できるのではないかろうか。つまり本遺跡発掘調査区域

内弥生時代中期後葉の集落遺構はこの“広場”をとり囲むように存在することができよう。

後期後半 次に後期後半についてみる。後期後半の遺構は中期後葉のそれに比べて3分の1程に減少し、上部急斜面地での立地が見られなくなる。

堅穴住居跡は2棟にとどまる。平面形は第7号が隅丸五角形、第8号が隅丸方形で、主柱穴数は前者が5個、後者が4個（推定）である。いずれも側溝は壁際で検出され、特殊ピットは床面中央部で検出されている。堅穴住居間の距離は約40mをはかる。

溝状遺構は1つ検出された。他の同時期の遺構と独立して存在する。用途目的は不明である。この時期の段状遺構は1つとして存在しない。

2 古墳時代（挿図154）

中 期 古墳時代の遺構は中期と後期のものがみられる。中期の遺構としては、堅穴住居跡5—第3・第4・第5・第9・第10号、段状遺構1—第15号である。

堅穴住居跡は全て西斜面北側下部に位置し、第10号を除いて緩斜面地に立地する。平面形は方形ないしは長方形と考えられ、主柱穴数は第5号・第9号が2個、第4号が4個と考えられる。側溝は壁際で（第9号除く）検出され、特殊ピットは壁際に円形ないしは方形のものが掘り込まれており（第9号除く）、第10号を除いてその両脇に細い溝が存在する。堅穴住居間距離は第3—第4号間が約10m、第3—第5号間が約12m、第4号—第5号間が約4m、第4—第9号間が約30m、第4—第10号間が約25m、第5—第9号間が約27m、第5—第10号間が約23m、第9—第10号間が約6mである。堅穴住居間距離をみると、第4号と第5号、第9号と第10号の併存は考え難く、第3号、第4号ないしは第5号、第9号ないしは第10号の3棟の併存を考えることができる。これらは標高12mから16mの間に等高線にはば平行に並ぶ。

段状遺構は1つのみである。弥生時代のそれに比べて掘り込みも浅く、規模も小さい。用途目的は不明である。

後 期 後期の遺構として判じ得るものは、古墳への道と考えられる第2号道路状遺構だけである。古墳時代後期以降奈良時代前半まで古墳・横穴が築造され尾根全域が墓域として使用されたこともあってか、その時期の堅穴住居跡等の居住施設（日常生活に使用する施設）は見られなくなる。

3 奈良時代及びそれ以降（挿図155）

この時代の遺構としては、段状遺構6—第1・第2・第3・第4・第5・第6号、土壙1—第12号、溝状遺構1—第2号、土壙状遺構を挙げ得る。

段状遺構は規模の小さいもの（平担面長9m以下）—第1・第2・第3・第4号、規模の大きいもの（平担面長15m以上）—第5・第6号の2種類が存在する。規模の小さいものは平担面上に溝・ピットが存在し、規模的にも住居跡と考えられなくもないが、溝の位置とピットの配列に規則性がみられない、平面形も不整形なことから堅穴住居跡とは断じ得ず、段状遺構とした。しかし奈良時代の住居が弥生・古墳時代のように定形化された堅穴住居跡でないとすれば、これらの段状遺構は奈良時代の住居の形態として把握できる。この際、上屋構造の検討が必要となろう。規模の大きいものの内第5号は平担面上にピット・溝が存在しており、第3節で述べたような擲列の存在を想定できる。

土壙は第12号のみである。第1号段状遺構の平担面に存在し、それに伴うものであると思われるが、用途等は不明である。

溝状遺構は1つ検出された。同時期の遺構から離れて単独で存在する。用途等は不明である。

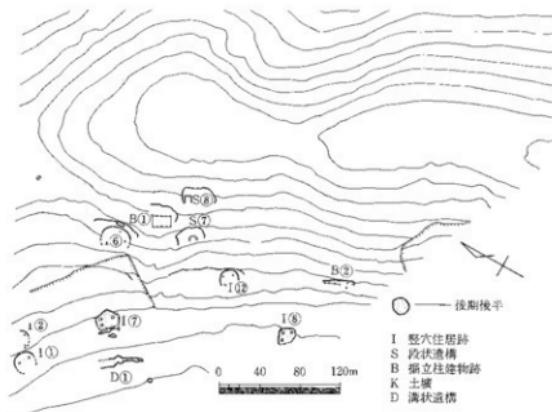
土壙状遺構は西斜面の最下部に位置している。土壙構築盛土中出土の土器からみて奈良時代以降のものであると思われる。用途・築造目的については言明できない。

4 結 語

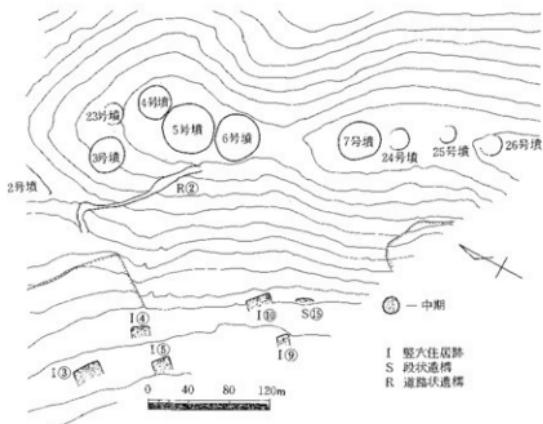
以上時代別に遺構を概観した。調査区域の関係から集落構成等に深く言及し得なかったが、本遺跡の所在するような斜面地が、断続的であるにせよ居住地として使用されていたことは、当該時期の集落立地という観点からみて重要な示唆を与えるものといえよう。

註1 藤田憲司は、竪穴住居の構造的なスペースと火災時の延焼距離を論拠に、竪穴住居間距離が10mを下る場合の併存例はあり得ないのではないかとしている。

藤田憲司「単位集団の居住領域—集落研究の基礎作業として」『考古学研究』第31巻第2号 1984年



挿図153 遺構配図①(弥生時代)



挿図154 遺構配図②(古墳時代)



插図155 遺構配座図③(奈良時代及びそれ以後)

出土遺構	形態	最大長(m)	最大幅(m)	最大厚(m)	挿図No一図版No
第1号堅穴住居	無茎鉄劍型磨製石劍。	175.5	34.3	10.9	13-4
第1号堅穴住居	不明石器。擦り切り施溝を有する。	(32.5)	(44.0)	(6.7)	10-4
第1号堅穴住居	扁平片刃石斧。左側面に着装用の抜、先端磨滅。	60.7	41.8	13.1	11-4
第1号堅穴住居	土製防錆車。斐の側面軋用。片面にヘラケズリ。	55.0	—	6.0	11-4
第1号堅穴住居	算盤玉状の土鍬。剥離のため調整不明。	33.5	21.0	—	11-4
第5号堅穴住居	砥石。5面に磨痕が残る。一面欠損。	52.8	32.2	28.5	27-25
第6号堅穴住居	土器片転用土製防錆車。	46.8	42.2	5.8	32-25
第6号堅穴住居	不明石器。磨製石劍の一部か?。石材は軟質。	(91.9)	67.3	(16.6)	33-25
第6号堅穴住居	砥石。一面に磨痕が残る。石材は軟質。	215.5	111.7	55.1	35-25
第8号堅穴住居	太型蛤刃石斧。基部欠損。先端に使用痕が残る。	(99.1)	66.9	(48.5)	42-26
第12号堅穴住居	刃部の様相を呈す加工痕がみられる。不明石器。	86.5	45.3	16.2	53-27
第3号段状遺構	分離形土製品の一部。文様は外縁の小孔4個のみ。	(31.3)	(45.5)	(9.5)	62-27
第8号段状遺構	有溝石鏡。凹部幅約10mmを有する。	(62.3)	51.9	49.5	79-29
第8号段状遺構	大型蛤刃石斧。一部欠損、磨耗著しい。	136.2	(62.4)	(40.2)	79-29
第8号段状遺構	石核。石材は黒曜石。373g。	84.5	64.2	69.1	79-12
第14号段状遺構	円基石鏡。石材はサヌカイト。0.8g。	21.8	15.3	3.3	92-30
第14号土壙	大型蛤刃石斧。基部欠損。	(69.0)	(72.2)	(36.4)	92-30

()内は現存数値

土器番号 種類 河原番号	出土遺構	層	①口部 ②鋸 ③刃部 ④基部 ⑤側面	形 態	手 法	胎 土	成 形	色 調	備 考
Po 1 12 24	第1号堅穴 住居	表	①(1.0 20.0 3.6, 4.0) ④20.0	付けの出来より裏面部へつづく。内部最大径 は口径より大きくなる。表面は「く」の字 紋にまりがり、そのまま各種して口縁部へ なる。刃部は「く」の字形で、刃部外縁は 丸化が強しく、刃頭の存在は不明である。	内面底深部内方に「く」の字へタマのハクタリ削痕。 内部にハクタリ削痕、周辺に削痕を残す。外 面側面側面へハクタリ削痕、刃部ハクタリ削 痕。	やや粗 やや不規	淡黄褐色		
Po 2 12 24	第1号堅穴 住居	裏	①(5.5)(9.0)	「く」の字状に沿うる張痕に「く」の字口縁 がつく。口縁部外縁に2条の凹部を残す。	内面は口縫跡ヨコナカ済痕、底部以下ハケ ミ底ナカ済痕、底部は隅ヨコナカ済痕、 底部面と底面化が著しく調整不明。	粗	黄褐色		
Po 3 12 24	第1号堅穴 住居	裏		「く」の字状に沿うる張痕に貼付内面を残 す。	内面と底面化が著しく調整不明。	粗	淡黃褐色		
Po 4 12 24	第1号堅穴 住居	裏		「く」の字状に沿うる張痕に「く」の字口縁 がつく。口縁部外縁で2条の凹部を残すで ある。	内面と底面化が著しく調整不明。	やや粗 不規	内面 暗褐色 底面 暗褐色		
Po 5 12 24	第1号堅穴 住居	底部	③ 3.4	台付の底部。	内面はハクタリ削痕、底面は「く」の字口縁 が付く。底部外縁に2条の凹部を残す。	粗	内面 暗褐色 底面 暗褐色		二次加熱により 底部外縁が赤焼 する。
Po 6 12 24	第1号堅穴 住居	底部	③ 5.6	台付の底部。	内面底深部不規、各面側面から底部にかけ ヨコナカ済痕が付く。	粗	内面 淡黃褐色 底面 水色		底面がみられる。
Po 7 12 24	第1号堅穴 住居	底部	③ 6.2	平底。	内面底深部不規、外周側面に「く」の字口縁 が付く(底取付)を残す。	粗	内面 暗褐色 底面 暗褐色		外周底部、裏面 のみならず、内 面底部に底化物 の付着がみられ る。
Po 8 12 24	第1号堅穴 住居	底部	③ 6.8(国)	平底。	内面底深部に底化物が残る。外面はヘラミガ キ調整を施す、削痕を残収する。	粗	明黄褐色		
Po 9 12 24	第1号堅穴 住居	底部	③ 5.9(国)	平底。	内面ハクタリ削痕、底面に辺縁が残る。底 部側面に「く」の字形ハクタリ削痕を施す。	粗	淡黄褐色		底部が黒変する。 Po6と同一母體 か。
Po 10 12 24	第1号堅穴 住居	底部	③ 6.0(国)	平底。	内面と底面も調整不明。	粗	黄褐色		
Po 11 12 24	第1号堅穴 住居	底部	③ 5.7(国)	わずかに中高の平底。	内面側面にハクタリ削痕、底面に不規方 向ハクタリ削痕、外周側面にヘラミガキ調整 (底取付)を施す。	粗	内面 暗褐色 外周 黑色		外周の色は二次 加熱によって黒 染したものか。
Po 12 12 24	第1号堅穴 住居	底部	③ 6.2(国)	平底。	内面ハラミガキ調整が付く。内面側面にヘラ ミガキ調整を施す。	粗	淡黄褐色		底部の少し黒底が みられる。
Po 13 12 24	第1号堅穴 住居	底部	③ 5.6(国)	平底。	内面側面も底面も調整不明。外周下部に観察 内の「く」の字形底痕がみとめられる。	粗	淡黄褐色		底面周辺が黒變 する。

挿表3 集落跡出土遺物観察表①

土器番号 箇所 固有名	出土構 造	基 構	①口 ②肩 ③腹 ④底 ⑤發	形 態	手 法	胎 土	燒 成	色 調	備 考
Po14 12 24	第1号竪穴 住居	底部	④.3	平底。	内面少部分のトロ調整。外周側底面方向 のヘラミガキを調整(既取り)、同下側は加 えて横方向のナヂ調整。	唐 黄	良	内面、 青褐色。 外周 黄褐色。	外周部以上が黒 化する。
Po15 12 24	第1号竪穴 住居	底部	⑤.6.3(Ⅲ)	やや中高の平底。	内面不均方向のナヂ調整。外底は表面不明。	唐	良	赤 褐色	
Po16 12 24	第1号竪穴 住居	底部	⑤.6.3(Ⅳ)	平底。	内面底部へラテツリ調整、底部不均方向の ナヂ調整。外周側底面へラミガキ調整(既取り) 約。	唐 黄	良	黄 褐色	底部に黒度がみ られる。
Po17 12 24	第1号竪穴 住居	西	①23.1(Ⅲ)	くりあけ口縁。外間に3条の凹縫を施す。	外面部に焼型不明。	白	やや不良	暗 褐色	
Po18 12 24	第1号竪穴 住居	环坏	①21.3(Ⅲ)	环部の口縁部。口縁上端部をつまみあげる。	外面部コナデ調整。	唐	良	内面、 青褐色。 外周 淡褐色。	
Po19 12 24	第1号竪穴 住居	环坏	①44.6(Ⅲ)	部の口縁部。肥厚する口縁部。	外面部も裏面も裏面不明。	白	良	淡 褐色	
Po20 12 24	第1号竪穴 住居	环坏	⑤.6.8(Ⅲ)	「ハ」の字状に弱く脚部。外間に裏面を 3线条だけ握る。	内外面アマ調整。	唐	やや不良	淡 褐色	
Po21 12 24	第1号竪穴 住居	环坏		四足。筒を呈する。外間に5条の凹縫を 施す。	内面に指アマの痕が残る。	唐	やや不良	淡 褐色	
Po22 12 24	第1号竪穴 住居	直	①ホ.7(Ⅲ)	筒面に凹みをもつ状図のつまみを有する無 孔の型。	内面中央、外周つまみ筋に福井灰がみられ る。	唐	良	内面、 暗褐色。 外周 淡褐色。	
Po23 12 24	第1号竪穴 住居	直	①35.6(Ⅲ)	「ハ」の字状の口縁部。	内面は「L」脚彌縫から頭部までナヂ調整。頭 部以下はラクスケクリ調整。頭部に焼付灰 を残す。	唐	良	内面、 淡褐色。	外間に黒斑あ り。
Po24 12 24	第1号竪穴 住居	直	①35.6(Ⅲ)	「ハ」の字状の口縁部。	内面は「L」脚彌縫から頭部までナヂ調整。頭 部以下はラクスケクリ調整。頭部に焼付灰 を残す。	唐	良	内面、 淡褐色。	外間に黒斑あ り。
Po25 12 24	第1号竪穴 住居	环	①13.0(Ⅲ) ①41.1(Ⅲ)	厚突った口縁部をもつ。口縁部は丸丸 をもつ。	内面は「L」脚彌縫内へラミガキ調整。下部 は内側に凹みをもつ。口縁部は丸丸をもつ。 厚突した口縁部をもつ。口縁部は丸丸をもつ。 厚突した口縁部をもつ。口縁部は丸丸をもつ。 厚突した口縁部をもつ。口縁部は丸丸をもつ。	白 砂粒	やや粗 砂粒を含む。	内面上部明 るい。外周 暗褐色。	内面上部に褐付 灰。
Po26 2 29 25	第3号竪穴 住居	环	①13.0(Ⅲ) ①41.1(Ⅲ)	厚突った口縁部をもつ。	内面は「L」脚彌縫内へラミガキ調整。下部 は内側に凹みをもつ。口縁部は丸丸をもつ。 厚突した口縁部をもつ。口縁部は丸丸をもつ。	白 砂粒	やや粗 砂粒を含む。	内面上部明 るい。外周 暗褐色。	内面上部に褐付 灰。
Po27 29 25	第3号竪穴 住居	环坏	③8.5(Ⅲ)	右肩の筒彌縫である。部はやや膨らみ、 に凹みし。脚部は彌縫にむけて「ハ」の字 状が大きくなっている。	黒化が弱いいため、内外面とも焼型不明。	白 砂粒	やや粗 砂粒を含む。	青 褐色	
Po28 29 25	第3号竪穴 住居	环	③6.2(Ⅲ)	半らな底部。	内面はナヂ調整。外面は黒化が著しく焼型 不明。	白 砂粒	やや粗 砂粒を含む。	内面、 青褐色。 外周 淡褐色。	
Po29 29 25	第3号竪穴 住居	环	①12.4 ②ホ.2	欠陥をもつ。右肩よりやや内側突出部に、 に凹み。脚部に凹みをもつ。	外周凹型は右肩より左肩にかけてある。内面ナ ヂ調整。底面近くに福井灰が残る。	白 砂粒	砂粒を多量に 含む。	淡 褐色	
Po30 29 25	第3号竪穴 住居	环	①39.4(Ⅲ)	「ハ」の字状の口縁部。	口縁底部は人跡をもつ。右肩より左肩にかけて 凹みがある。	白 砂粒	良	赤茶 褐色	
Po31 29 25	第6号竪穴 住居	直	①18.5(Ⅲ)	「ハ」の字状の口縁部。	口縁外側には「ハ」の字状の凹縫をもつ。右肩 より左肩にかけて凹みがある。	白 砂粒	やや粗 砂粒を含む。	青 褐色	
Po32 29 25	第6号竪穴 住居	直	①34.5(Ⅲ)	「ハ」の字状の口縁部。	口縁外側には「ハ」の字状の凹縫をもつ。右肩 より左肩にかけて凹みがある。	白 砂粒	やや粗 砂粒を含む。	青 褐色	
Po33 29 25	第6号竪穴 住居	直	①34.5(Ⅲ)	「ハ」の字状の口縁部。	口縁外側には「ハ」の字状の凹縫をもつ。右肩 より左肩にかけて凹みがある。	白 砂粒	やや粗 砂粒を含む。	青 褐色	
Po34 29 25	第6号竪穴 住居	直	①21.7(Ⅲ)	口縁上端部が黒化していったが引抜けては ないが、くりかけ気味の口縁をもつものと思 われる。[縁外側部で凹縫よく「ハ」の字状に曲り、 泡は縮く]。頭部は丸丸をもつ。右肩より左肩に かけて凹みがある。	内面口縁部をもつてナヂ調整。頭部以下は内側に 凹みをもつ。頭部は丸丸をもつ。	白 砂粒	良	青 褐色	口縫部外側に塗 付。
Po35 29 25	第6号竪穴 住居	直	①19.3(Ⅲ)	口縁上端部が黒化していったが引抜けては ないが、くりかけ気味の口縁をもつものと思 われる。[縁外側部で凹縫よく「ハ」の字状に曲り、 泡は縮く]。頭部は丸丸をもつ。右肩より左肩に かけて凹みがある。	内面は口縫部をもつてナヂ調整。頭部以下は内側に 凹みをもつ。頭部は丸丸をもつ。	白 砂粒	不良	淡 褐色	口縫部外側に塗 付。
Po36 29 25	第6号竪穴 住居	直	①20.7(Ⅲ)	「ハ」の字状の口縁部。	内面は口縫部をもつてナヂ調整。頭部以下は内側に 凹みをもつ。頭部は丸丸をもつ。	白 砂粒	良	青 褐色	口縫部外側に塗 付。
Po37 29 25	第6号竪穴 住居	直	①26.9(Ⅲ)	「ハ」の字状の口縁部。	内面は口縫部をもつてナヂ調整。頭部以下は内側に 凹みをもつ。頭部は丸丸をもつ。	白 砂粒	良	淡 褐色	口縫部外側に塗 付。
Po38 29 25	第6号竪穴 住居	直	③9.0(Ⅲ)	平底。	内面ナヂ調整か。外周側底面のヘラミガキ 調整。	白	良	内面、 青褐色。 外周 淡褐色。	外周底に黒斑が みられる。
Po39 29 25	第6号竪穴 住居	直	③6.8(Ⅲ)	平底。	内面ナヂ調整。外周側底面のヘラミガキ 調整。	白	良	内面、 青褐色。 外周 淡褐色。	外周底に黒斑が みられる。
Po40 33 25	第6号竪穴 住居	底部	③8.9(Ⅲ)	平底。	内面底部方向(下→上)のヘラミガキ調整。 内面口縫部をもつてナヂ調整。頭部以下ヘラミ ガキ調整。	白	良	青 褐色	外側に黒斑がみ られる。
Po41 33 25	第7号竪穴 住居	底部	①20.7(Ⅲ)	舟反する面部に外側する複合口縁がつく。 口縁上端部はやや厚壁する。口縁外側に4 条の凹縫をもつ。	内面口縫部をもつてナヂ調整。頭部以下ヘラミ ガキ調整。	白 砂粒	やや粗 砂粒を含む。	青 褐色	
Po42 33 25	第7号竪穴 住居	底部	①17.3(Ⅲ)	「ハ」の字状に折れ曲がる底部に直立する 複合口縁がつく。	脚部が著しく内外面とも焼型不明。	白 砂粒	砂粒を多く 含む。	青 褐色	
Po43 33 25	第7号竪穴 住居	底部	③8.7(Ⅲ)	輪わざに中高の平底。	内外面とも黒化が著しく焼型不明。	白 砂粒	砂粒を多く 含む。	不良	

持表4 集落跡出土遺物觀察表②

土器名 調査年 回収年	出土遺構 名	種類	目立 たる特 徴	形 態	手 法	胎 土	焼 成	色 調	備 考
Po 4 37 26	第7号竪穴 住居	底部	④.4.(後)	やや中高の平底。	内外面とも風化が著しく網型不明。	密	不良	明茶色	外底に保付着。
Po 5 37 26	第7号竪穴 住居	底部	④.2.(後)	平底。	内面は風化が著しく網型不明。	粗 砂粒を含む。	不良	内面、胎内 黄色。外面 赤褐色。	内面に保付着 がみられる。
Po 6 37 26	第7号竪穴 住居	高坏	④.3.(後)	開底部、「ハ」の字状に曲ぐ脚部よりほぼ直立する筒型コップ。	内外面無撲打所。周辺内面に较少の痕跡が認められる。	粗 砂粒を含む。	良	明茶褐色	
Po 1 41 26	第8号竪穴 住居	底	④.3.4.(後)	「く」の字形に曲ぐ脚部に直立する筒型コップがつき、「上」の字形で筒部は丸くおさまる。口縁外周に3条の凹線を施す。	内面アテ網型。外面頭部ナメ調査。	密	良	灰茶褐色	
Po 2 41 26	第8号竪穴 住居	高坏	④.7.3.(後)	わざりに外縁を有する筒型コップをしつづけ。口縁外周には3条の凹線を施す。	内面口縁部下方に向てラミガキ調査。外面頭部ナメ調査。	密	良	明茶褐色	口縁外周に黒斑 があらわれる。
Po 1 44 26	第9号竪穴 住居	底	④.18.6.(後)	張った裏面「リ」。この形状に曲ぐ脚部へつながる筒部は丸くおさまる。「上」の字形で筒部は丸くおさまる。	内面打凸部ヨコナメ調査。頭部口には斜め方向のヘタスリ調査。外面口縁部は長いヨコナメによってアセントをつけた。頭部アテノマサリ。	密	やや不良	外周頭部下に保 付着。	
Po 2 44 26	第9号竪穴 住居	底	④.15.7.(後)	外傾する脚なし・筒型コップ。口縁上端部は丸くおさまる。	内面アテ網型。外面は強いヨコナメでアフタントをつける。	密	良	内面、浜明 褐色。外面 明茶褐色。	
Po 3 44 26	第9号竪穴 住居	底	④.22.7.(後)	「く」の字形に曲ぐ脚部に外傾する脚なし・筒型コップ。筒部は丸くおさまる。	内面打凸部ヨコナメ調査。頭部以下は四方に向てラミガキ調査。外面口縁部は長いヨコナメによってアセントをつけた。頭部以下もヨコナメ調査。	密	不良	内面、浜明 褐色。外面 明茶褐色。	
Po 4 44 26	第9号竪穴 住居	底	④.47.6.(後)	「く」の字形に曲ぐ脚部に外傾する脚なし・筒型コップ。筒部は丸くおさまる。	内面打凸部ヨコナメ調査。頭部以下は四方に向てラミガキ調査。外面口縁部は長いヨコナメによってアセントをつけた。頭部以下もヨコナメ調査。	密	不良	灰褐色	
Po 5 44 26	第9号竪穴 住居	底	④.47.5.(後)	「く」の字形に曲ぐ脚部にやや内傾しない筒型コップ。筒部は丸くおさまる。	内面打凸部ヨコナメ調査。頭部以下は四方に向てラミガキ調査。外面口縁部は長いヨコナメによってアセントをつけた。頭部以下もヨコナメ調査。	密	やや不良	内面、浜明 褐色。外面 明茶褐色。	
Po 6 44 26	第9号竪穴 住居	底	④.34.9.(後)	外傾する脚なし・筒型コップ。口縁上端部は丸くおさまる。	内面ヨコナメ調査。外面は長いヨコナメでアセントをつける。	密	良	内面、浜明 褐色。外面 明茶褐色。	
Po 7 44 26	第9号竪穴 住居	底	④.35.0.(後)	丸底をもつ裏面「リ」。この字形に曲ぐ脚部へつながる筒部は丸くおさまる。筒部は外傾する脚なし・筒型コップ。	内面ヨコナメ調査。	密	不良	暗茶褐色	
Po 8 44 26	第9号竪穴 住居	底	④.47.7.(後)	外傾する脚なし・筒型コップ。口縁上端部は外傾を丸くおさまる。内側に削り目をもつ。	内面ヨコナメ調査。外面は強いヨコナメでアセントをつける。	密	不良	深褐色	
Po 9 44 26	第9号竪穴 住居	高坏	④.3.1.(後)	外傾と筒の結合部より脚部に向って「ハ」の字形に曲ぐ脚部に外傾する筒型コップ。	内面は外傾とも脚部が著しく調査不明。	密	良	黄灰色	頭部内面に丹 が残る。
Po 10 44 26	第9号竪穴 住居	高坏	④.6.(後)	筒部をもつ裏面「リ」。筒部は丸くおさまる。筒部は外傾する脚なし・筒型コップ。	内面打凸部ヨコナメ調査。頭部以下は四方に向てラミガキ調査。内面頭部に研ぎ目がみられる。	密	良	黄灰色	頭部内面に丹 が残る。
Po 11 44 26	第9号竪穴 住居	高坏	④.8.8	口縁部、筒部をもつ裏面「リ」。筒部は丸くおさまる。	内面頭部と筒部のため調査不明。	密	不良	暗茶褐色	
Po 12 44 26	第9号竪穴 住居	子千古ね 土器	④.6.8. ④.8.	丸底の底面をもつ。口縫部は颈部より外傾する。	指折り脚部ヒレアリ。口縫部及び裏面内面に研ぎ目がある。外傾とも不整方向のナメ調査。	やや粗 砂粒を含む。	良	内面、灰 褐色。外面 明茶褐色。	
Po 13 44 26	第9号竪穴 住居	子千古ね 土器	④.0.4. ④.3.3	丸底の底部から内側しながら筒部頭部に向う。	内面打凸部ナメ調査。口縫部外側に研ぎ目が残る。	密	良	外面部半明茶 褐色。内面 灰褐色。内 面、灰褐色。	
Po 14 47 27	第10号竪穴 住居	坏	④.22.4. ④.2.5	丸底をもつ裏面より内側しながら筒部頭部に向う。口縫部は内側しない。筒部頭部は脱け口となる。	内面打凸部ヨコナメ調査。	密	良	浅茶褐色	外縫口部頭部に保 付着。
Po 15 47 27	第16号竪穴 住居	坏	④.6.8	筒型と圓筒部の接合部。	外側に横方向のナメ調査。	密	良	内面、褐 褐色。外面 明茶褐色。	
Po 16 52 27	第15号竪穴 住居	底	④.32.2	「く」の字形に曲ぐ脚部に外傾する筒型コップ。	内面打凸部・頭部ともナメ調査。外面筒部や下ハメ調査。	密	やや不良	深褐色	外縫口部頭部に保 付着。
Po 17 52 27	第12号竪穴 住居	底	④.5.3.(後)	平底。	内面ナメ調査。外側は剥離のため調査不明。	密	良	深褐色	内面に保付着。
Po 18 52 27	第12号竪穴 住居	底	④.9.8	平底。	内面頭部免調査。	密	不良	黄茶褐色	
Po 19 52 27	第12号竪穴 住居	底	④.5.8	平底。	内面頭部免調査。	密	良	黄茶褐色	
Po 20 56 27	第1号段状 遺構	底	④.35.8	外反する厚ぼったい口縫。底部は丸い。	内面ヨコナメ調査。	密	良	明茶褐色	
Po 21 56 27	第1号段状 遺構	底	④.21.2.(後)	頭部が「く」の字形に曲ぐ厚ぼったい筒型コップ。底部は丸い。	内外面ナメ調査。	やや粗 砂粒を含む。	良	内面、淡茶 褐色。外面 米褐色。	
Po 22 56 27	第1号段状 遺構	底	④.22.6.(後)	頭部が「く」の字形に曲ぐ厚ぼったい筒型コップ。底部は丸い。	内面打凸部ヨコナメ調査、頭部以下ヘタスリ調査。外面ヨコナメ調査。	密	良	深褐色	
Po 23 56 27	第1号段状 遺構	底	④.34.3.(後)	頭部が「く」の字形に弯曲する厚ぼったい筒型コップ。底部は丸い。	内面頭部以下横方向のヘタスリ調査。外側はナメ調査。	やや粗 砂粒を含む。	良	内面、灰 褐色。外面 明茶褐色。	
Po 24 56 27	第1号段状 遺構	高坏	④.9.6.(後)	高台が付く瓶底。高台はやට方々にふんばら。	底面に向てあつ切り痕がみられる。	密	良	内面、淡灰 褐色。外面 黄灰色。	

挿表5 集落跡出土遺物観察表③

上標名号 山河断面 回収番号	出土遺物	種類	(①) 1 ②縁部 ③縁部 ④縁部 ⑤縁部	形態	手 法	胎 土	焼 成	色 調	備 考
Po 1 58 27	第2号段状 遺構	甕	②1.1 ②1.7(復) ④2.2	丸底の底部をもつ。胴部は底部に近いところに最大径がある。肩部は低く、口目の大きさより腹が大きい。底部は「く」の字形である。口縁部はへたりつて口縫合部はほつた。	内面口縫合部ナメ調整、頭部以下横方向へのラケツリ調査。外面口縫合部ナメ調整、頭部以下横方向へのラケツリ調査。下部をナメ調整した部分へヘラで引き寄せ。	密 黄	内面 陶黄 灰化。外面 暗青褐色。	内面灰部と外側 頭部に付着。	
Po 2 58 27	第2号段状 遺構	甕	③31.7(復)	「く」の字形に骨壺する頭部に厚ぼったい縁部にはつづく。底部は丸い。	内面頭部ナメ調整、頭部以下横方向へのラケツリ調査。外面ナメ調整、頭部や下部をヘラで工具による浅い凹みがめぐらす。	やや粗 砂粒を含む。	良	内面 灰黄 灰化。外面 暗青褐色。	
Po 3 58 27	第2号段状 遺構	甕	③37.1(復)	「く」の字形に骨壺する頭部に厚ぼったい縁部にはつづく。底部は丸い。	内面頭部ナメ調整、頭部以下横方向へのラケツリ調査。外面ナメ調整、頭部や下部をヘラで工具による浅い凹みがめぐらす。	やや粗 砂粒を含む。	良	内面 灰黄 灰化。外面 暗青褐色。	
Po 4 59 27	第2号段状 遺構	甕	③47.6(復)	「く」の字形に骨壺する頭部に厚ぼったい縁部にはつづく。底部は丸い。	内面頭部までナメ調整、頭部以下ラケツリ調査の後ナメ調整。外面ナメ調整。	やや粗 砂粒を含む。	良	内面 暗褐色 外面 黄褐色。	軟質の土器。
Po 5 59 27	第2号段状 遺構	甕	④6.1	平底の底部。	内面頭部ナメ調整。外面部に凹凸が切り落がめられる。	密	良	明茶褐色	軟質の土器。
Po 6 59 27	第2号段状 遺構	甕	④7.2(復)	耳の底部であろう。	調整不明。	密	やや不良	青灰褐色	軟質の土器。
Po 7 59 27	第2号段状 遺構	甕	④7.2(復)	耳の底部であろう。	内面ナメ調整。	密	やや不良	淡黄褐色	軟質の土器。
Po 8 59 27	第2号段状 遺構	甕	④7.9(復)	平底の底部。底部より外方に大きく開いてたちあがる。浅い耳であろう。	内面ナメ調整。	密	良	明茶褐色	軟質の土器。
Po 9 59 27	第2号段状 遺構	甕	④8.5(復)	「く」の字形の底部。底部より外方に開いてたちあがる。	内面ナメ調整。	密	良	明茶褐色	軟質の土器。
Po 10 59 27	第2号段状 遺構	甕	④9.1	高台の付く底部。高台は外方へふんばる。底部は丸い。	内面ナメ調整。	密	良	青 楊色	軟質の土器。
Po 11 63 27	第3号段状 遺構	甕	④17.2(復)	複数の「く」の字形に骨壺する頭部に厚ぼったい単縁部にはつづく。底部は丸い。	内面頭部までコロコロ調整、頭部以下横方向のヘラケツリ調査。	密	良	淡褐色	表面斑点に付ける。
Po 12 63 27	第3号段状 遺構	甕	④16.7(復)	大きく外張る口縁。底部は丸い。	内面ナメ調整、外面ナメ調整。	密	良	内面 暗褐色 外面 暗褐色。	表面斑点や下部付ける。
Po 13 63 27	第3号段状 遺構	甕	④16.3(復)	外張する口縁。口縁部外張に波状、底部に2つの凹線を有す。	内外面回転ナメ調整。	密	良	青 灰色	軟質の土器。
Po 14 63 28	第4号段状 遺構	甕	④9.6(復)	複数の「く」の字形に骨壺する頭部に厚ぼったい単縁部にはつづく。底部は丸い。	内面頭部までタケ緑調整、頭部以下横方向のヘラケツリ調査、外面コロコロ調整。	やや粗 砂粒を含む。	良	内面 暗褐色 外面 暗褐色。	表面斑点に付ける。
Po 15 63 28	第4号段状 遺構	甕	④12.8(復)	はぼ立ちする頭部から丸く、「く」の字形に骨壺する頭部に厚ぼったい単縁部にはつづく。底部は丸い。	内面ナメ調整。	やや粗 砂粒を含む。	良	内面 暗褐色 外面 暗褐色。	表面斑点や下部付ける。
Po 16 63 28	第4号段状 遺構	甕	④10.8(復)	平底の底部より外張しながらはぼぼ筋的に1枚脚部に生る。	内面ナメ調整、外面部に回転系切り抜がめられる。	密	やや不良	明茶褐色	軟質の土器。
Po 17 65 28	第4号段状 遺構	甕	④38.6	各方面にふんばる輪郭高台の付く底部より、内壁気泡にて外張してたちあがる。	内面ナメ調整。外面部に下板の痕がめられる。	密	良	内面 暗褐色 外面 暗褐色。	シナフロト土器。
Po 18 65 28	第4号段状 遺構	甕	④12.4(復)	頭部を丸くおさめる口縁部よりややくらみをもつて底部下する。	剥離のため調整不明。	やや粗 砂粒を含む。	不良	内面 暗褐色 外面 明褐色。	表面斑点や下部付ける。
Po 19 65 28	第4号段状 遺構	底盤	複数の凹線。底部はひざや下に2条の凹線を有す。	内外面回転ナメ調整。	密	良	淡青褐色	軟質の土器。	
Po 20 67 28	第5号段状 遺構	甕	④36.0(復)	複数の凹線の底盤(口径より大きい)に「く」の字形に骨壺する頭部を有する頭部が丸く、外側に残る單縁部がつづく。底部は丸い。	内面頭部までナメ調整、頭部以下横方向のヘラケツリ調査。外側は剥離のため調整不明。	密	良	青 灰褐色	表面に一部黒斑がみられる。
Po 21 67 28	第5号段状 遺構	甕	④18.4(復)	よく剥離の異常(口縁より大きい)に「く」の字形に骨壺する頭部を有する頭部が丸く、その上に外側に残る單縁部がつづく。底部は丸い。	内面頭部で横方向のヘラケツリ調査、頭部以下横方向のヘラケツリ調査。外側剥離部をタケ緑で内側へ向かうヘラケツリ調査。外側剥離部をコロコロ調整。頭部や下板の凹線のヘラケツリ調査。	密	良	淡褐色	表面に一部黒斑がみられる。
Po 22 68 28	第6号段状 遺構	甕	④17.3(復)	やや深く「く」の字形に骨壺する頭部に厚ぼったい「頭部」がつづく。底部は丸い。	内面頭部をコロコロ調整、頭部以下横方向のヘラケツリ調査。外側剥離部に凹板がめぐらす。	やや粗 砂粒を含む。	良	淡褐色	表面に一部黒斑がみられる。
Po 23 68 28	第6号段状 遺構	甕	④29.3(復)	やや浅く「く」の字形に骨壺する頭部に厚ぼったい「頭部」がつづく。底部は丸い。	内面頭部で横方向のヘラケツリ調査、頭部以下横方向のヘラケツリ調査。外側剥離部をタケ緑で内側へ向かうヘラケツリ調査。外側剥離部をコロコロ調整。	やや粗 砂粒を含む。	良	内面 淡明 褐色。外面 暗褐色。	表面斑点や下部付ける。
Po 24 68 28	第6号段状 遺構	甕	④10.6(復) ④23.2 ④35.4	平らな底盤よりわずかに内側気泡にて外張しながら口縁部に生る。「1脚部」は丸くおさめる。	内面頭部をコロコロ調整。外側剥離部に凹板がめぐらす。	やや粗 砂粒を含む。	良	淡褐色	表面斑点や下部付ける。
Po 25 68 28	第6号段状 遺構	甕	④11.3(復)	平らな底盤より大きさ外張して口縁部に生る。「1脚部」は丸くおさめる。	内面頭部をコロコロ調整。外側剥離部に凹板がめぐらす。	やや粗 砂粒を含む。	良	淡褐色	表面斑点や下部付ける。
Po 26 68 28	第6号段状 遺構	甕	④11.6(復) ④20.3(復) ④36.7(復)	平らな底盤より大きさ外張して口縁部に生る。「1脚部」は丸くおさめる。	内面頭部をコロコロ調整。	密	良	淡褐色	表面斑点や下部付ける。

掲表 6 集落跡出土遺物観察表④

上標番号 標示番号 図版番号	出土状況 遺構	着 標	①口は 内面に凹 外側に凸	形 股	手 法	粉 土	施 成	色 調	備 考
Po 6 68 28	第 6 号段状 遺構	环	③11.9(裏) ③5.9(腹)	丸窓をもつ両脇より内側表面に外側しなが ら1縫隙部に平ら。1縫隙部はよくおさめ る。	内外面コヨナテ調査。内側底部に凹紙を切 り紙がみられる。	密	やや不良	明褐色	
Po 7 68 28	第 6 号段状 遺構	环	③6.9(裏)	平らな底面より大きく外側してたちあがら ない底面。	内外面コヨナテ調査。外側底部に凹紙を切 り紙がみられる。	密	やや不良	明褐色	
Po 8 68 28	第 6 号段状 遺構	环	③9.9 ③4.6 ③6.7	外方へふんばる底面の高台(縫隙部はい) の付く底面。	内外面コヨナテ調査。内側底部はテテ調査。 内外面コヨナテ調査。底面部はテテ調査。	密 見	明褐色 灰褐色	板質の土壁。	
Po 9 68 28	第 6 号段状 遺構	环	③7.3(裏)	外方へふんばる底面の高台(縫隙部はい) の付く底面。	内外面コヨナテ調査。底面部はテテ調査。	密	見	明褐色	軟質の土壁。
Po 10 68 28	第 6 号段状 遺構	环	③5.7(裏)	外方へふんばる底面の高台(縫隙部はい) の付く底面。	内外面コヨナテ調査。	密	見	明褐色	軟質の土壁。
Po 11 68 28	第 6 号段状 遺構	环	③6.7(裏)	外方へふんばる底面の高台(縫隙部はい) の付く底面。	内外面コヨナテ調査。	やや粗 砂粒を含む。	見	明褐色	軟質の土壁。
Po 12 68 28	第 6 号段状 遺構	环	③5.2	短い円錐形の台が底面。	内外面部に回転切り底がみられる。	密	やや不良	淡褐色	
Po 13 68 28	第 6 号段状 遺構	环	③14.6(裏) ③6.8 ③7.6(腹)	外方へふんばる貼付底面(裏面はやうとが る)付く底面より内側表面に外側しなが ら縫隙部に平ら。1縫隙部はやうとがる。	内外面コヨナテ調査。外側底部に凹紙を切 り紙がみられる。	密	内面 底面 灰色 淡褐色	ウチグロ土牆。	
Po 14 68 28	第 6 号段状 遺構	环	③6.5(裏)	広く外方へふんばる貼付底面(縫隙部はい) の付く底面。	内外面コヨナテ調査。	やや粗 砂粒を含む。	見	淡褐色	
Po 15 68 28	第 6 号段状 遺構	环	③8.6(裏)	広く外方へふんばる底面(縫隙部はい) をもつ底面。	内外面コヨナテ調査。外側底部に凹紙を切 り紙がみられる。	見	明褐色		
Po 16 68 28	第 6 号段状 遺構	海环		無底面。やうとがる縫隙部に底面から 大きくなれる。の付く前く縫隙部へつづく。	内外面部が凹面で、脚部上側に被り紙がみ られる。外側テテ調査。	密	見	明褐色	
Po 17 68 28	第 6 号段状 土基	下づくね 土基	③6.0 ③2.0 ③2.8	分厚い、平らな底面より短かくまみあ る。	内外面部に回転底がみられる。内面ナテ調 査。	密	やや不良	灰褐色	
Po 18 68 28	第 6 号段状 遺構	环	③13.9(裏)	深い跡であると思われる。	内外面コヨナテ調査。	密	やや不良	淡褐色	
Po 19 68 28	第 6 号段状 遺構	环?	③26.0(裏)	口はより狭く縫隙部より、上面に丸みをもつ て縫隙部に付特異的に至る。	内面ナテ調査。外面上部ナテ調査。縫隙 部下方のナテメ鉄鉬。	密	見	淡褐色	
Po 20 69 28	第 6 号段状 底盤部	底盤部	③34.0(裏) ③3.8 ③7.8(腹)	短く底面する高台(縫隙に段をもつ)が付 く底部よりほんぱくすに外側しながり口 縫隙部ある。口縫隙部はやうとがる。	内外面回転ナテ調査。外側底面に凹紙を切 り紙がみられる。	密	見	内面 底面 淡褐色 灰褐色 外側 底面 灰褐色	
Po 21 69 28	第 6 号段状 底盤部	底盤部	③8.0(裏)	短く外方へふんばる高台(縫隙部はくぼみを もつ底面)。	内外面回転ナテ調査。	密	見	淡灰色	
Po 22 69 28	第 6 号段状 底盤部	③13.8(裏)	内面底面に外側しながら口縫隙部に平ら。 口縫隙部はくぼみをきめる。	内外面回転ナテ調査。	密	見	淡灰色		
Po 23 69 28	第 6 号段状 底盤部	底盤部	③15.9(裏) ③2.3 ③8.8(腹)	小さな底面より大きく外方に開きながら1縫 隙部に坐ら。口縫隙部はくぼみをきめる。	内外面回転ナテ調査。外側底部に回転余切 り紙がみられる。	密	不良	淡灰色	
Po 24 69 28	第 6 号段状 底盤部	底盤部	③16.6(裏)	外反する1縫隙部。縫隙部底面する。外側 底部に1度の底面。外側中ほどあたりに底 状を有する。	内外面回転ナテ調査。	密	見	内面 底面 淡褐色 灰褐色 外側 底面 灰褐色	内外面に灰褐色か 付する。
Po 25 69 28	第 6 号段状 底盤部	底盤部	③11.4(裏)	外方へふんばる高台(縫隙部は平坦面 をつくる)が付く底面。	内外面回転ナテ調査。	密	見	淡灰色	
Po 26 69 28	第 6 号段状 底盤部	底盤部	③13.7(裏)	やや中間の底面。	内面に重輪文がみられる。外側は平行ナテ キメがみられ、無底面部は偏いたナテ調査。	密	見	内面 底面 灰色 外側 底面 灰色	
Po 27 69 28	第 6 号段状 底盤部	底盤部 底环	③11.2(裏)	筒脚部、脚部より脚廻りに内側に開きな がら下部する。脚廻部は外方に折り曲げる。	内外面回転ナテ調査。	密	見	内面 底面 淡褐色 灰褐色 外側 底面 灰褐色	
Po 28 69 28	第 6 号段状 底盤部	环?	③15.4(裏)	8 番の凹痕を施す。	内外面回転ナテ調査。	密	見	淡青灰色	
Po 1 76 29	第 7 号段状 遺構	壁	③14.6(裏)	口はより深く裏面に「こ」。の字状に前れぬ がる頭部のつづく。口縫隙部は平らで底部を わすかにこりあげ、よくおさめる。1縫隙 部外側に凹輪の存在を不確徳ながら脚部で 見る。	脚部が著しく調整不明。	やや粗 砂粒を含む。	やや不良	淡褐色	外側背面に進行 する。
Po 2 76 29	第 7 号段状 遺構	壁	③6.2(裏)	平底。	風化が著しく調査不明。	密	不良	青灰色	
Po 3 76 29	第 7 号段状 遺構	底部	③6.9(裏)	風化が著しく調査不明。	密	やや不良	青灰色		
Po 4 76 29	第 7 号段状 遺構	底部	③5.9(裏)	平底。	風化が著しく調査不明。	密	やや不良	青灰色	

插表 7 集落跡出土遺物観察表(5)

土器番号 構成部 固有記号	出土遺物	器種	口部 器外 側面 の風景 (縦横大)	形 状	手 法	胎 土	焼 成	色 調	備 考
Po 1 79 29	第1号段状 追拂	浅	①14.4(Ⅲ)	口元より奥の西面に「く」の字状に折れ唇 がある部分がつづく。口縁部は厚壁する。口 縁部外側に凹部がある。	内外面とも風化が著しく調査不明。	密	やや不良	内面 外表面 褐色	外表面間に擦り すき。
Po 2 79 29	第2号段状 追拂	深		口元より奥の西面に「く」の字状に折れ唇 がある部分がつづく。口縁部は厚壁する。口 縁部外側に凹部がある。	内面に暗褐色・頭部とモナテ調整、肩部・ハケ メ調整。外腹脛部底面方向のハケメ調整。	密	良	内面 頭部 外腹 底面 褐色	
Po 3 79 29	第3号段状 追拂	深	⑩6.4	平底。	内面に暗褐色部が底面方向(下→上)のヘラケズリ 調整。底部ナガ調整。外側部底面上に前方 向のハケメ調整。底部下部コトナ調整。	密	良	淡茶 褐色	
Po 4 79 29	第4号段状 追拂	浅	⑩5.2	平底。	内外面とも風化が著しく調査不明。	密	良	淡茶 褐色	
Po 5 79 29 29	第5号段状 追拂	深	⑩5.8	平底。	内外面とも風化が著しく調査不明。	密	やや不良	灰茶 褐色	外表面間に擦り すき。
Po 6 79 29	第6号段状 追拂	深	⑩5.5	平底。	内外面ナガ調整。	密	良	暗褐色	
Po 7 79 29	第7号段状 追拂	高环	⑨11.3(Ⅲ)	おむか内腹脣部に下方へ突き出る下唇に、断続へと 凹部がある。内腹脣に舟形の舟底部の邊を引き、 その下に3年の成長を示す。頭部は厚壁と方唇 を持つ。口縁部は厚壁する。口縁部外側に斜め方 唇を持つ。内腹脣部に舟底部を引き込む。	内面に暗褐色ナガ調整。頭部以下は剥離が著 しい。調査不明。	密	良	淡茶 褐色	
Po 8 79 29	第8号段状 追拂	高环	⑩18.6(Ⅲ)	口縁部に舟底部があり、舟底部の邊を引き込 みる。舟底部の邊を引き込む。その下に斜め方 唇があり舟底部の邊を引き込む。頭部は厚壁と方 唇を持つ。内腹脣部に舟底部を引き込む。	内面に暗褐色ナガ調整。頭部以下は剥離が著 しい。調査不明。	密	良	淡茶 褐色	
Po 9 83 29	第9号段状 追拂	深	⑩18.6(Ⅲ)	口縁部に舟底部があり、舟底部の邊を引き込 みる。舟底部の邊を引き込む。その下に斜め方 唇を持つ。内腹脣部は厚壁と方唇を持つ。	内面に暗褐色ナガ調整。頭部以下は剥離が著 しい。調査不明。	密	良	淡茶 褐色	
Po 10 83 29	第10号段状 追拂	深	⑩18.2(Ⅲ)	口縁部に舟底部があり、舟底部の邊を引き込 みる。舟底部の邊を引き込む。その下に斜め方 唇を持つ。内腹脣部は厚壁と方唇を持つ。	内面に暗褐色ナガ調整。外腹脇部コトナ調整。	密	良	淡茶 褐色	
Po 11 91 30	第11号段状 追拂	深	⑩17.8(Ⅲ)	「く」の字状に折れ唇部があり、頭部に「く」 の字状に折れ唇部がある。頭部は厚壁と方唇 を持つ。内腹脣部は舟底部を引き込む。	内面ナガ調整。	密	良	淡茶 褐色	
Po 12 91 30	第12号段状 追拂	深	⑩17.7(Ⅲ) ⑩23.8(Ⅲ)	「く」の字状に折れ唇部があり、頭部に「く」 の字状に折れ唇部がある。頭部は厚壁と方唇 を持つ。内腹脣部は舟底部を引き込む。	内外面とも剥離が著しく調査不明。	密	良	淡茶 褐色	外表面に擦り すき。
Po 13 91 30	第13号段状 追拂	深	⑩17.5(Ⅲ)	「く」の字状に折れ唇部があり、頭部に「く」 の字状に折れ唇部がある。頭部は厚壁と方唇 を持つ。内腹脣部は舟底部を引き込む。	剥離不明。	密	良	暗褐色	
Po 14 91 30	第14号段状 追拂	高环	⑩16.9(Ⅲ)	「く」の字状に折れ唇部。外腹脇部の返しを施す。	内面ナガ調整。	密	良	淡茶 褐色	
Po 15 91 30	第15号段状 追拂	深	⑩7.3(Ⅲ)	平底。	内面にナガ部。腹/腰残存。外腹脇部收り約 ハラミガロ調整。	密	良	暗褐色	
Po 16 91 30	第16号段状 追拂	深	⑩5.6(Ⅲ)	予武。	内面にナガ部。腰/リニア底面。	やや墨 砂粒を含む。	良	内面 腰部 灰色 外腹 底面 黑色	
Po 17 91 30	第17号段状 追拂	深	⑩16.9(Ⅲ)	唇子のない腹脇部に「く」の字状に折れ唇 部がある。口縁部は舟底部を引き込む。	内面に頭部から腹部にかけてコトナ調 整。頭部以下は斜め方唇のハラミガロ調整。	やや墨 砂粒を含む。	良	明茶 褐色	
Po 18 91 30	第18号段状 追拂	深	⑩6.9(Ⅲ)	「く」の字状に折れ唇部があり、頭部に舟底部 を引き込む。その下に斜め方唇を持つ。	内面に舟底部から腹部にかけてコトナ調 整。頭部以下は斜め方唇のハラミガロ調整。	砂粒を含む。	不良	内面 舟底 部灰色 外腹 底面 黑色	
Po 19 91 30	第19号段状 追拂	深	⑩15.9(Ⅲ)	口元より奥の腹脇部に「く」の字状に折れ唇 部がある。頭部は舟底部を引き込む。内腹脇部は 舟底部を引き込む。	内面に舟底部から腹部にかけてコトナ調 整。頭部以下は斜め方唇のハラミガロ調整。	砂粒を含む。	良	明茶 褐色	
Po 20 91 30	第20号段状 追拂	深	⑩14.3(Ⅲ) ⑩6.2	第二の底部より内腹脇部に舟底部を引き込む。 頭部は舟底部を引き込む。	内面に舟底部から腹部にかけてコトナ調 整。頭部以下は斜め方唇のハラミガロ調整。	砂粒を含む。	不良	明茶 褐色	
Po 21 91 30	第21号段状 追拂	环	⑩12.9(Ⅲ) ⑩4.1	丸をもつて口縁部に舟底部を引き込む。 頭部は舟底部を引き込む。	内面にナガ部。	密	良	明茶 褐色	
Po 22 91 30	第22号段状 追拂	环	⑩12.6(Ⅲ) ⑩5.3	丸をもつて口縁部に舟底部を引き込む。 頭部は舟底部を引き込む。	内面に舟底部から腹部にかけてコトナ調 整。頭部以下は斜め方唇のハラミガロ調整。	砂粒を含む。	良	明茶 褐色	
Po 23 91 30	第23号段状 追拂	环	⑩13.4(Ⅲ)	内面に舟底部から腹部にかけてコトナ調 整。頭部以下は斜め方唇のハラミガロ調整。	内面ナガ調整。	砂粒を含む。	不良	明茶 褐色	
Po 24 91 30	第24号段状 追拂	环	⑩13.4(Ⅲ)	内面に舟底部から腹部にかけてコトナ調 整。頭部以下は斜め方唇のハラミガロ調整。	内面ナガ調整。外腹脇部上部コトナ調整、下部腹 方向のハケメ調整。	密	良	内面 明茶 褐色。外腹 底面 黑色	
Po 25 91 30	第25号段状 追拂	环	⑩12.4(Ⅲ)	内面に舟底部から腹部にかけてコトナ調 整。頭部以下は斜め方唇のハラミガロ調整。	内面ナガ調整。	密	良	内面 明茶 褐色。外腹 底面 黑色	
Po 26 91 30	第26号段状 追拂	环	⑩9.8(Ⅲ)	内面に舟底部から腹部にかけてコトナ調 整。頭部以下は斜め方唇のハラミガロ調整。	内面ナガ調整。	密	良	内面 明茶 褐色。外腹 底面 黑色	
Po 27 91 30	第27号段状 追拂	环	⑩8.7(Ⅲ)	内面に舟底部から腹部にかけてコトナ調 整。頭部以下は斜め方唇のハラミガロ調整。	内面ナガ調整。	密	良	内面 明茶 褐色。外腹 底面 黑色	
Po 28 91 30	第28号段状 追拂	环	⑩14.2(Ⅲ)	环部と底脚部の結合部。	調査不明。	密	良	明茶 褐色	
Po 29 105 30	第2号段状 追拂	底部	⑩6.3	平底。	内外面とも剥離のため調査不明。	密	良	暗褐色	
Po 30 105 30	第3号段状 追拂	底部	⑩8.7	平底。大径で底内が開いた。	内面ハケメ調整。底内を削る。外腹脇はハ ラミガロの後ナガ調整。	密	良	明茶 褐色	

掲表 8 集落跡出土遺物観察表⑥

土壌番号 植生名 園芸番号	出土遺物	器種	①口 ②鉢 ③高 ④低 ⑤底 ⑥腹大法	形 態	手 法	施 土	焼 成	色 調	備 考
Po 1 118	第10号土壌 広口皿			ラッパ状に広がると思われる口縁部。口縁部は削落して下に折れる。外周には内の凹部、上面に円形浮文を施す。	口縁部内面ナテ調査。	密	やや不良	淡褐色	
Po 2 118	第10号土壌 臺	①19.2(腹)		くりあげ口縁。口縁部外側に1条の凹線を施す。	調整不明。	密	やや不良	淡褐色	
Po 3 118	第10号土壌 削部			斜削した文字と5条の凹線を施す。	調整不明。	密	良	淡褐色	一部に運行跡。
Po 4 118	第10号土壌 広口皿	②62.8(腹)		ラッパ状に広がる口縁部。口縁部底は削落する。外周に5条の凹線と刻印を施す。	内面底ナラミガキ調査。	密	良	淡褐色	
Po 5 118	第10号土壌 底部	③6.4(腹)		平底。	内外底とも剥離苦しく調整不明。	やや粗 砂粒を含む。	やや不良	内面 底 淡褐色	
Po 1 121	第11号土壌 裏	④28.3(腹)		やや肥厚するくりあげ口縁の口縁をもつ。口縁部底は削落するが底は残る。底部は丸くおさまる。	内面は削面が著しいため調整不明。外周は底部や下ハケメ調査。	密	良	淡褐色	
Po 2 121	第11号土壌 底部	⑤7.7(腹)		「く」の字状に丸く曲曲する底面には厚ぼったい凹部がある。	調整不明。	密	やや不良	内面 底 淡褐色	外周に運行跡。
Po 3 124	第13号土壌 臺	①21.5		「く」の字状に丸く曲曲する底面には厚ぼったい凹部がある。	内面底部ナラメ調査。底面以下傾方向へのラグメ調査。外周ナラメ調査。	密	良	淡褐色	
Po 4 124 30	第13号土壌 裏	②19.3(腹)		「く」の字状に丸く曲曲する底面には厚ぼったい凹部がある。	内面底部コナメ調査。	密	良	淡褐色	
Po 5 124 30	第13号土壌 底	③21.2(腹)		「く」の字状に丸く曲曲する底面には厚ぼったい凹部がある。	内面底部コナメ調査。底面以下傾方向へのラグメ調査。外周コナメ調査。	密	良	淡褐色	
Po 6 124 30	第13号土壌 裏	④20.6(腹)		厚ぼったい直通口縁。底部はわずかに肥厚し丸くおさまる。	内面底部コナメ調査。底面以下傾方向へのラグメ調査。	密	良	青灰褐色	
Po 7 124 30	第13号土壌 底	⑤11.9		半らな直通口縁。底部は内に折れ気味である。	内面底部コナメ調査。	密	不良	赤みがかった黄褐色	
Po 8 124 30	第13号土壌 底部削环	①43.4(腹) ②4.8 ③10.2(腹)		半らな直通口縁から丸い膨らみながらながらあがり口縫部がある。口縫部は丸くおさまる。	内面底部ナラメ調査。外面底部に底部大切にその上にハケメ調査。	密	良	淡褐色	
Po 9 124 30	第13号土壌 裏	④15.7(腹)		「く」の字状に曲がる底部に削落部は厚く仕上げた跡がある。	内面削部ナラメ調査。底面以下ハケメ調査。外周ナラメ調査。	密	不良	内面 底 外周 淡褐色	
Po 1 127 31	第14号土壌 底	⑤18.6(腹)		口縁と2重の底面に「く」の字状に折れ曲がる削落部がありつづきを肥厚する口縫部がつづく。「く」の字状に2重の底面がある。	内面底部ナラメ調査。底面以下ハケメ調査。底部以下傾方向へのラグメ調査。	密	良	淡褐色	
Po 2 127 31	第14号土壌 裏	⑥13.3(腹)		「く」の字状に折れ曲がる底面に「く」の字状に折れ曲がる削落部がある。	内面底部ナラメ調査。底面以下不明。外周底部ナラメ調査。	密	良	淡褐色	
Po 3 127 31	第14号土壌 裏	⑦18.6(腹)		口縁より裏側に質する「く」の字状に折れ曲がる削落部がありつづきを肥厚する口縫部がつづく。	内面底部ナラメ調査。底面以下不明。外周底部ナラメ調査。	密	良	淡褐色	
Po 4 127 31	第14号土壌 裏	⑧18.6(腹)		口縁より裏側に質する「く」の字状に折れ曲がる削落部がありつづきを肥厚する口縫部がつづく。	内面底部ナラメ調査。底面以下不明。外周底部ナラメ調査。	密	良	淡褐色	外周及び内面底部に運行跡がある。
Po 5 127 31	第14号土壌 底部	⑨6.2(腹)		平底。	内面底部ナラメ調査。	密	良	内面 底 淡褐色	外周及び内面底部に運行跡がある。
Po 6 127 31	第14号土壌 底部	⑩4.7(腹)		古付の底部。	内面は削部のため調整不良。外周ナラメ調査。	密	良	淡褐色	
Po 7 127 31	第14号土壌 底部	⑪4.2(腹)		古付の底部。	内面削部ナラメ調査後ナラメ調査。底部ナラメ調査。	密	良	淡褐色	
Po 8 127 31	第14号土壌 海杯	⑫30.6(腹)		内外に折れ曲ぐ。上面に平底面をつくる緩急部。外周に1条の凹線及び剝離を施す。	口縫部下面ナラメ調査。内面上面ナラメ調査。内面削部ナラメ調査。内面底部ナラメ調査。	密	やや不良	内面 底 淡褐色	外周に質跡がみられる。
Po 9 127 31	第1号溝状 遺構	⑬23.4(腹)		横状の底部からラッパ状にやや外傾する削落部がある。口縫部は丸くおさまる。	内面ナラメ調査。外周底部ハケメ調査。その上部ハケメ調査。	やや粗 砂粒を含む。	良	淡褐色	
Po 10 127 31	第1号溝状 遺構	⑭33.1(腹)		横状の底部からラッパ状にやや外傾する削落部がある。口縫部は丸くおさまる。	内面口縫部コナメ調査。底部以降トドナ調査。外周底部コナメ調査。	密	良	淡褐色	
Po 11 127 31	第1号溝状 遺構	⑮36.0(腹)		「く」の字状に折れ曲がる削落部がある。口縫部は丸くおさまる。	内面底部コナメ調査。	やや粗 砂粒を含む。	良	淡褐色	
Po 12 127 31	第1号溝状 遺構	⑯39.4(腹)		横曲してくびれをもつ削落部がある。口縫部は丸くおさまる。	内面口縫部ナラメ調査。底部以下ハケメリ調査。外周底部コナメ調査。	やや粗 砂粒を含む。	良	淡褐色	
Po 13 127 31	第1号溝状 遺構	⑰31.9(腹)		口縫部は丸くおさまる。削落部に外側をうちる削落部がありつづき。口縫部は丸くおさまる。	内面口縫部コナメ調査。底部以降トドナ調査。外周底部コナメ調査。	密	良	淡褐色	
Po 14 127 31	第1号溝状 遺構	⑱44.0(腹)		複合口縫部の増幅をもつ削落部。削落部を複数につけたものである。	内面横方向(右→左)ハケメリ調査。外周底部コナメ調査。	密	良	淡褐色	

挿表9 集落跡出土遺物観察表⑦

土器番号 標本名	出土地點	種類	④(1) 住 (2) 廉 (3) 頂 底 盆 大底	形 態	手 法	植 土	焼 成	色 調	備 考
Po 1 137 31 溝邊	第2号溝狀遺構	罐	①(2.9)(復)	「く」の字形に背曲する底部に厚ぼったい扁平口縁がついてる。端部は丸くおさまる。	内外面ナテ調整。	やや粗 砂粒を含む。	青 色	口縁延やや下に厚い付着がみられる。	
Po 2 137 31 溝邊	第2号溝狀遺構	罐	①(2.1)(復)	「く」の字形に背曲する底部に厚ぼったい扁平口縁がついてる。端部は丸くおさまる。	内面は剥離のため調査不明。外面ナテ調整。	やや不均 整。	内面 青 色	表面延や外腹基部に付着。	
Po 3 137 31 溝邊	第2号溝狀遺構	罐	①(16.6)(復)	「く」の字形に円窓位ある頭部に厚ぼったい扁平口縁がついてる。端部は丸くおさまる。	内面(1)被覆ガラス底面、既削以下底面(4)(左→右)のヘラケシリ調整。外側ナテ調整。	青 色	青 色	内面に刃が残る。	
Po 4 137 31 溝邊	第2号溝狀遺構	高环		横断面舟形になると思われる中空の底部と上方一気。腰部よりやや内傾しながら底部にはじめてぞり、腰せん状に外縁に蓋す。	内面ナテ調整(指(1)の痕が残る)。外面は面取りを行なう。	青 色	青 色	外縁に刃が残る。	
Po 5 137 31 溝邊	第2号溝狀遺構	底盆	③ 8.2(復)	平底(环の底面)。	内面ナテ調整(指(1)の痕が残る)。外面は面取りを行なう。下部にハメ目を有す。	青 色	青 色	外縁に刃が残る。	
Po 6 137 31 溝邊	第2号溝狀遺構	底盆	③ 8.2(復)	平底(环の底面)。	内面ナテ調整(指(1)の痕が残る)。外面は面取りを行なう。下部にハメ目を有す。	青 色	青 色	外縁に刃が残る。	
Po 7 137 31 溝邊	第2号溝狀遺構	底盆	①(16.2)(復) ② 3.3 ③ 6.5(復)	ねかげに中空の平らな底部と内腹しながら外縫で接して腰部位に至る。口縫周部は底面で隠す。	内面不規則なナテ調査、外側回転ナテ削制。	青 色	青 色	内面不規則なナテ調査、外側回転ナテ削制。	
Po 8 137 31 溝邊	第2号溝狀遺構	集落窓	①(19.4)(復) ② 4.3 ③ 7.9(復)	中空の平らな底部より一度内腹位に外傾した後、ほぼまっすぐに腰部位まである。口縫周部は丸くおさまる。	内面不規則なナテ調査、外側回転ナテ削制。外側面部に面取り切痕がみられる。	青 色	青 色	内面不規則なナテ調査、外側回転ナテ削制。	
Po 9 137 32 溝邊	第2号溝狀遺構	底盆	①(4.4)(復) ② 3.1 ③ 5.5(復)	中空の平らな底部より内腹ながら外傾し口縫周部に至る。口縫周部は丸くおさまる。	内面不規則なナテ調査。	青 色	青 色	内面不規則なナテ調査。	
Po 10 137 32 溝邊	第2号溝狀遺構	底盆	①(15.8)(復) ② 2.2 ③ 9.0(復)	やや下方にふんばる腰位(腰部地帯は平たん)。腰部より一度やや外傾した後、直角した後腰と再び外傾しながら口縫周部に至る。口縫周部は丸くおさまる。	内面不規則なナテ調査、外側回転ナテ削制。	青 色	青 色	内面不規則なナテ調査、外側回転ナテ削制。	
Po 11 137 32 溝邊	第2号溝狀遺構	底盆	①(15.6)(復) ② 6.6 ③ 11.9	わやや下方にふんばる腰位(腰部地帯は平たん)。腰部より一度やや外傾した後腰と再び外傾しながら口縫周部に至る。口縫周部は丸くおさまる。	内面不規則なナテ調査。	青 色	青 色	内面不規則なナテ調査。	
Po 12 149 32 土臺状遺構	土臺状遺構	參	①(19.6)(復)	底合部に4条の凹溝をめぐらす底部の丸い口縫。	底部以下内腹側方のヘラケシリ調整。その位に内腹側方のナテ調査。	青 色	青 色	内腹側方のナテ調査。	
Po 13 149 32 土臺状遺構	土臺状遺構	高环	①(19.6)(復)	内腹する(1)斜面、腰部近くで純い腰をつくり内腹側を削る。腰部は丸い。底部は外腹側に丸い。	底部以下内腹側方のハメ目が残る。その位に内腹側方のナテ調査。	青 色	青 色	内腹側方のナテ調査。	
Po 14 149 32 土臺状遺構	土臺状遺構	高环	① 4.4(復)	内腹は下外方にふんばる腰位丸い。	外腹側面から(2)ミタ後内腹側方のナテ調査、内面ナテ調査。	青 色	青 色	外腹側面から(2)ミタ後内腹側方のナテ調査、内面ナテ調査。	
Po 15 149 32 土臺状遺構	土臺状遺構	參	①(16.4)(復)	「く」の字形に背曲する底部に無い單耳(1)耳が付く。(1)の耳部は丸くおさまる。耳は張らない。	内面ナテア調査。	青 色	青 色	内面ナテア調査。	
Po 16 149 32 土臺状遺構	土臺状遺構	參	①(26.2)(復)	やや外方に開く口縫位。端部近くで腰をなし、端部は丸ほら。	底部以下内腹側方のナテ調査。その位はナテ調査。	青 色	青 色	内面ナテア調査。	
Po 17 149 32 土臺状遺構	土臺状遺構	參	①(32.0)(復)	外方に開く口縫位。端部近くで純い腰をなす。	底部以下内腹側方のナテ調査。その位はナテ調査。	青 色	青 色	内面ナテア調査。	
Po 18 149 32 土臺状遺構	土臺状遺構	參	①(14.0)(復) ② 2.2 ③ 12.3(復)	上外方に開く口縫位。端部は丸い。底部は平たい。	腰方向のナテ調査。腰部外腹側面に凹溝がある。	青 色	青 色	腰方向のナテ調査。	
Po 19 149 32 土臺状遺構	土臺状遺構	環	① 6.2(復)	平底。	腰方向のナテ調査。底部外腹側面に凹溝がある。	青 色	青 色	腰方向のナテ調査。	
Po 20 149 32 土臺状遺構	土臺状遺構	參	① 9.4(復)	やや外方にふんげる腰位の丸い向高を付つ。	ナテ調査。	青 色	青 色	腰方向のナテ調査。	
Po 21 149 32 土臺状遺構	土臺状遺構	环	① 8.4(復)	埋頭のやや丸い-貼付背谷を付つ。	ナテ調査。	青 色	青 色	腰方向のナテ調査。	
Po 22 149 32 土臺状遺構	土臺状遺構	环	①(18.3)(復)	あぐだみに外方に開く口縫位。端部近くで純い腰をなす。口縫位中段や上方に1条の沈線がある。	内面ナテア調査。	青 色	青 色	内面ナテア調査。	
Po 23 149 32 土臺状遺構	土臺状遺構	环	①(22.5)(復)	大きさ・外方に開く口縫位。端部は丸い。	頭部以下外腹平行平タキタ。内面内腹側タキタ。その他の内腹ナテ調査。	青 色	青 色	頭部以下外腹平行平タキタ。内面内腹側タキタ。その他の内腹ナテ調査。	
Po 24 149 32 土臺状遺構	土臺状遺構	环	①(28.6)(復)	「く」の字形の頭部から、大きく外方に開く口縫位。端部は丸い-腰を作つ。	頭部以下外腹平行平タキタ。内面内腹側タキタ後不規則なナテ削す。その後は四輪ナテ削制。	青 色	青 色	頭部以下外腹平行平タキタ。内面内腹側タキタ後不規則なナテ削す。その後は四輪ナテ削制。	
Po 25 149 32 土臺状遺構	土臺状遺構	环	①(21.0)(復)	やや小形腰位に大きく外方に開く口縫位。端部は丸い。	頭部以下外腹平行平タキタ。内面内腹側タキタ後不規則なナテ削す。その後は四輪ナテ削制。	青 色	青 色	頭部以下外腹平行平タキタ。内面内腹側タキタ後不規則なナテ削す。その後は四輪ナテ削制。	
Po 26 149 32 土臺状遺構	土臺状遺構	环	①(28.8)(復)	受取部や上外方に腰を作。直面して腰をなす。受取上位に2条の沈線を残す。	頭部ナテ調査。	青 色	青 色	頭部ナテ調査。	
Po 27 149 32 土臺状遺構	土臺状遺構	环	①(8.9)(復)	やや簡単な環状つまみをもつ天井环。	外腹ヘラケシリ直の腰の残る内腹ナテ調査。	青 色	青 色	外腹ヘラケシリ直の腰の残る内腹ナテ調査。	
Po 28 149 32 土臺状遺構	土臺状遺構	参	①(11.8)(復) ② 4.2(復) ③ 6.8(復)	中央の背気位に外方に開く-全体及び口縫位。底部は丸いやや弧形位に平たい。	底部腰位内腹側を切り取る。内面内腹側ナテ調査。	青 色	青 色	底部腰位内腹側を切り取る。内面内腹側ナテ調査。	
Po 29 149 32 土臺状遺構	土臺状遺構	参	① 8.6(復)	内腹して外方に開く-全体及び口縫位。底部は平たい。	底部腰位内腹側を切り取る。内面内腹側ナテ調査。	青 色	青 色	底部腰位内腹側を切り取る。内面内腹側ナテ調査。	
Po 30 149 32 土臺状遺構	土臺状遺構	参	①(13.4)(復) ② 1.8(復) ③ 7.7(復)	大きさ・外方に開く口縫位。端部は丸い。底部は中高弧形に平たい。	底部腰位内腹側を切り取る。内面内腹側ナテ調査。	青 色	青 色	底部腰位内腹側を切り取る。内面内腹側ナテ調査。	

表10 集落跡出土遺物観察表⑧

第4章 古墳の調査

第1節 調査の概要

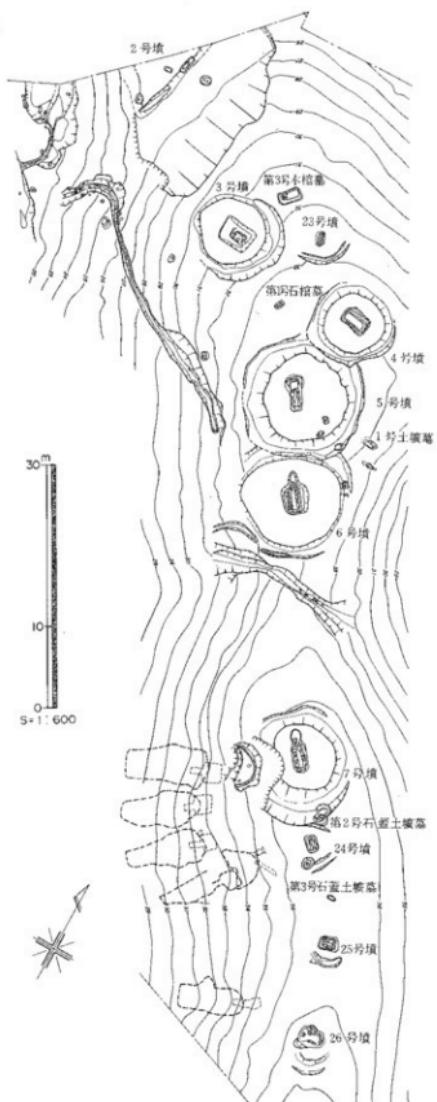


図156 東宗像古墳群(調査区)遺構配置図

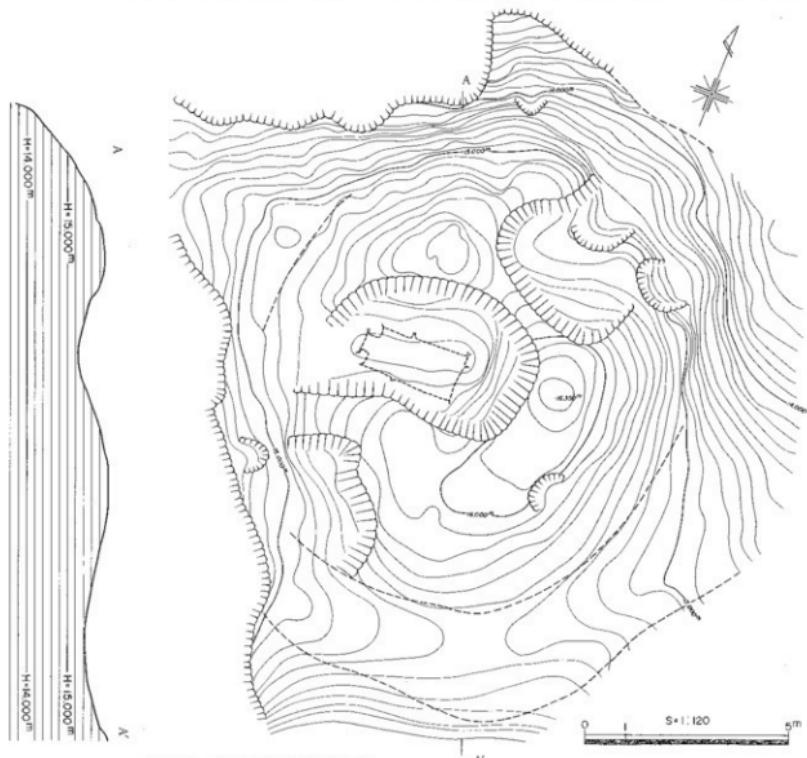
東宗像古墳群は糸子市南郊の高山山塊に展開する宗像古墳群、東宗像古墳群、長砂古墳群、観音寺古墳群、日原古墳群の内の一つである。分布調査によると前方後円墳2基を含む総数22基からなる古墳群として把握されているが、今回調査を行なったのは東宗像9号墳の位置する標高64.2mの地点から北西へのびる舌状尾根上に点在する古墳群である。この北尾根に展開する古墳群を仮に東宗像古墳群A支群とし、南側の尾根に展開する残りの古墳群をB支群とする。発掘調査は道路幅相当の範囲であり、前方部端を部分的に調査した2号墳(前方後円墳)を含め、3・4・5・6・7号墳を発掘調査し、調査中墳丘を流失した古墳を4基検出したため、これを北から23・24・25・26号墳と命名した。さらに東宗像2号墳は、一部前方部の消失により永久に全体像を把握できなくなるため、墳丘全体の測量調査を行ない、古墳群全体としても同様な理由により、調査区から外れるA支群の1・8・9号墳の墳丘測量を行なった。調査の結果、全長37mの前方後円墳である2号墳を除き、すべて径5m~14m前後の円墳であった。埋葬施設は6・7号墳が堅穴式横口式石室であり、5号墳では特異な組合せ横口式石室が確認された。この三基の埋葬施設は九州地方において隆盛する同種石室に類似し、同地方との直接的な交流が想定される。他の古墳は4号墳が唯一木棺直葬であり、3・23・24・25号墳は箱式石棺を主体部としていた。26号墳は横乱が著しかったが石材の残りからみて堅穴式の小石室であった可能性が強い。古墳周溝内の副次埋葬としては2号墳墳裾・周溝で土壙墓2基を検出した。これに加えて、尾根頂部及び斜面部で古墳以外の単独の埋葬施設として、石蓋土塚墓3基、木棺墓3基、箱式石棺墓1基、土器棺墓1基、土壙墓1基を検出したため、本章で併せて報告する。

第2節 古墳

1、東宗像1号墳（挿図157、図版33）

位 置 東宗像1号墳は東宗像古墳群A支群の展開する北尾根の先端部近くで、標高15.0m、水田比高差9.0mをはかる位置に築造されており、2号墳の北側15mに位置する。墳丘は北・西側が土取りによって削られているが、ほぼ旧状を残していると考えられ、東西径10.4m、南北径12.0m、高さ0.6mをはかる円墳で、南東側の尾根の高い位置に幅2.2mの周溝を弧状に巡らしている。現在は埋め戻されているが、主体部は昭和27年佐々木古代文化研究室により発掘調査されており、天井石を失った両袖の横穴式石室が確認されている。石室は内法で玄室長230cm、奥壁幅117cm、玄門幅103cmをはかり、残存する壁高は奥壁で88cmである。各壁は大型の石を下位に据えて、塊石を上に積みあげている。玄門は柱状の石を両袖に立てており、板石一枚で閉塞されているが玄室前面は調査されていない。玄門は柱状の石を両袖に立てており、板石一枚で閉塞されているが玄室前面は調査されていない。

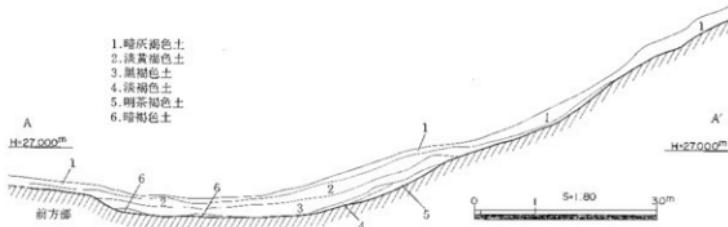
出土遺物 室内からは須恵器蓋坏7・小壺2・管玉1・小玉27・銀環1・鉄鎌10・刀子1・直刀4・銅2が検出されている。散逸した遺物もあり、すべての遺物を実見できなかったが、石室構造と合わせて、1号墳は2号墳以下の古墳に後出する古墳として捉えられ、築造年代は6世紀後半に降るものと考えられる。



挿図157 東宗像1号墳墳丘対測図

2. 東宗像 2号墳（付図3、挿図158～164、図版35・36・67）

- 位 置** 東宗像 2号墳は北北西にのびていた尾根が標高 25 m付近から西へ屈曲してのびるところに位置しており、主軸を N-81°W にとる前方後円墳である。調査開始当初はその立地と墳丘の形状から前方後円墳かどうか疑わしく思っていたが、測量調査時に、松クイ虫の被害を受けて折り重なっていた樹木を取り除いたところ、墳丘保存の良好な前方後円墳が姿を現わした。2号墳はやせた尾根幅を一杯に使っており、前方部前面は傾斜面に掘割りを設け（挿図158）、尾根を切断加工して前方部を形成している。掘割りは最大幅 12 m にもおよび、高い側では高さ 3 m にわたって加工しているが、前方部側では 0.9 m にすぎない。この前方部掘割りが浅かったためにくびれ部からのびてくる見かけの前方部側面の裾線と前方部端の裾線が 1 m 以上の高低差をもち、連続しなくなっている（挿図159）。尾根側傾斜面の加工により、横からの視覚を意識して墳丘を高くみせようとしたものと考えられる。一方、後円部は尾根の傾斜からみてかなりな盛土を施していると思われる。このように、東宗像 2号墳は自然地形を巧みに利用して、作業の省力化と視覚的効果を意図して築造されている。墳丘測量の結果、全長 37.0 m、後円部径 21.5 m、前方部長 17.0 m、くびれ部幅 10.0 m、前方部端幅 23.0 m、掘割り幅 14.0 m、後円部高 3.4 m、側面の裾からみた前方部高は 3.5 m で、前方部が大きく開く新規の前方後円墳である（付図3）。標高は、後円部頂部が 25.6 m で水田比高差 19.5 m 程である。前方部は後円部より高く、標高 26.5 m をはかる。後円部は二段築成で頂部には径 10.0 m の平坦面があり、平坦面中央よりやや南に長さ 1.5 m、幅 0.5 m の盗掘坑が開いている。埋葬施設には届いていないようであり、埋め戻しを行なった。また、前方部頂部にも大きな盗掘痕跡がある。
- 発掘調査** 今回は、調査区に当たった前方部南隅の発掘調査を行なった。墳丘の築成については先述したが、前方部南側面の見かけの墳裾に当たる部分で幅 4.0 m、深さ 0.5 m あまりの溝状の遺構を検出しておらず、埋土中から多量の埴輪と時代の下る須恵器・土師器を検出している。このあたりは第6号段状遺構等と重複しており、2号墳に伴うものかどうか判別できなかった。前方部南隅部付近には、落し穴状の第9号土壙（挿図117）、その 4 m 北側には弥生時代の第10号土壙（挿図129）があり、周辺から弥生土器片も出土している。両者とも 2号墳の築造に先行する遺構であろう。後円部にあると考えられる中心主体部については全く不明であるが、調査区内の掘割り内から 2基の埋葬施設を検出した。
- 第1埋葬** 両者とも素掘りの土壙墓である。第1号埋葬（挿図160、図版36）は掘割り底面中央付近にあり、長径 125 cm、短径 100 cm、深さ 20 cm の楕円形の掘り方に主軸を東西にとる長さ 65 cm、幅 20 cm、深さ 22 cm の長方形掘り込みをもつ二段掘りの土壙墓である。蓋石等はみられなかったが、平面形は第2号石蓋土壙墓（挿図229、図版62）に酷似しており、蓋石のかわりに二段目の掘り込みを木蓋のようなもので覆っていたと考えられる。第2号埋葬（挿図161、図版36）は第1埋葬の西 2 m の墳裾にあり、前方部端と平行に掘られた土壙墓である。長さ 217 cm、幅 65 cm、深さ 16 cm の長方形掘り方内に、長



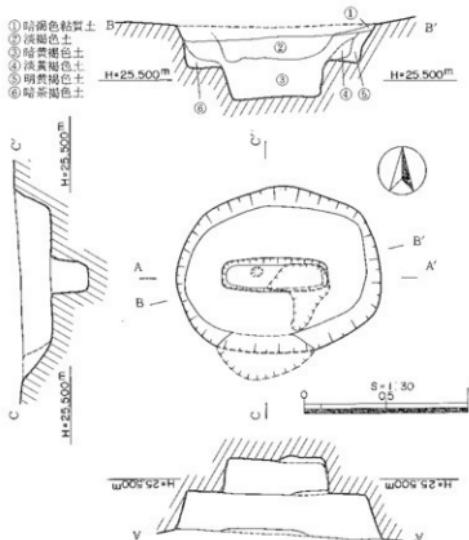
挿図158 東宗像 2号墳掘割り土層断面図



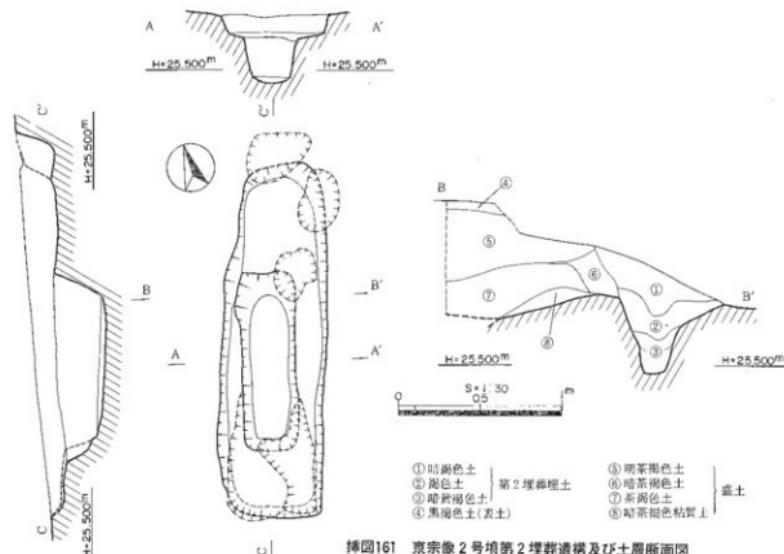
插図159 東京像 2号墳前方部(調査区)造構及び遺物出土位置図

さ 110 cm、幅 33 cm、深さ 30 cm の掘り込みをもち、二段掘りとなっている。2号墳盛土を切って前方出土遺物 部縁線と平行に宮まれていることからみて、2号墳に伴う副次的な埋葬施設であろう。2基とも出土

遺物は全くみられなかった。2号墳の調査において掘削り及び墳縁から多数の遺物を検出したが原位置を保つと考えられる遺物はみられなかった。鉄斧 F 1 (挿図 162、図版 67) は前方部端の中段で検出されたが埋葬施設等に伴うものではない。須恵器蓋坏 Po 1・2、腰Po 3・4、腰Po 5～Po 13、土師器蓋 Po 67 (挿図 162、図版 67) は掘削り・埴丘斜面・墳裾から検出された。佐々木謙氏によればくびれ部付近より大甕が 1 個体出土したことがあり、これらの須恵器・土師器も 2号墳に伴う遺物と考えられる。土師器坏 Po 68～70 は後世のもので、2号墳に伴う遺物ではない。この他に調査区全域から円筒埴輪片が多数検出された。原位置を保つ個体はみられなかったが、出土量からみて埴丘を回続するように円筒埴輪が樹立されていたと思われる。円筒埴輪は朝顔形円筒埴輪 Po 14～17 (挿図 163、図版 67) と普通円筒埴輪がある。朝顔形円筒埴輪

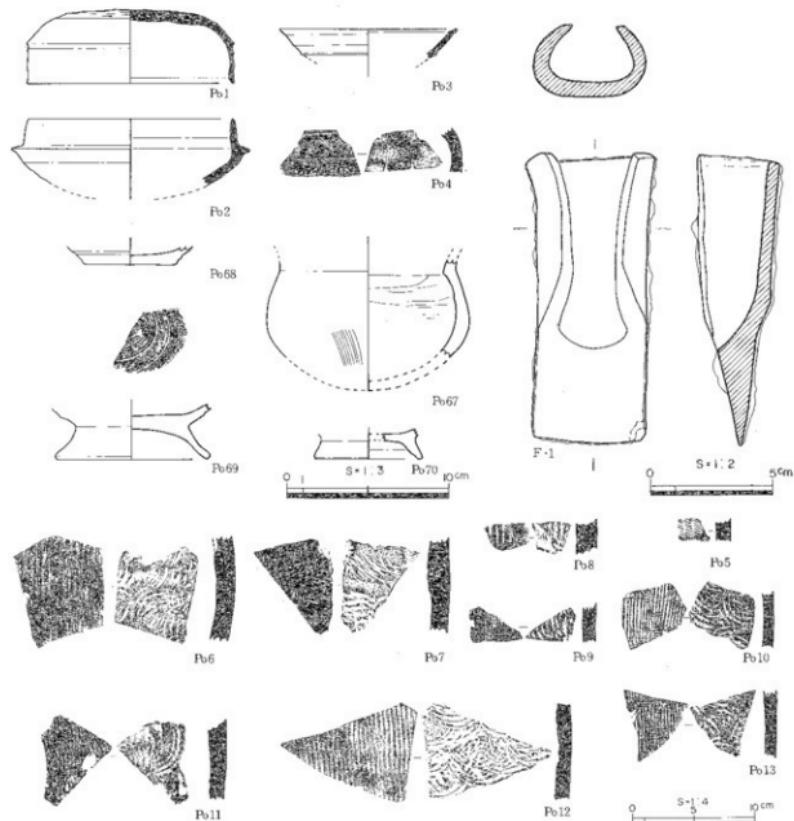


挿図160 東宗像 2号墳第1埋葬構造及び土層断面図



挿図161 東宗像 2号墳第2埋葬構造及び土層断面図

は頭部に凸帯をもち外反しながら花部が開くタイプである。普通円筒埴輪（以下「円筒埴輪」と呼ぶ）は全体を知り得る個体はなく破片ばかりであるが、口縁Po 18~30、底部Po 31~45（挿図163）、胸部Po 46~66（挿図164）を図化した。口縁は僅かに外傾し、外面ナナメハケ、内面ナナメハケあるいはヨコハケ調整を施す。端部はPo 29を除きヨコナデし、平坦面をつくる。底部はPo 41を除き、押圧及びハケメによる底部再調整を施している。Po 41は朝顔形円筒埴輪の底部である可能性が強い。胸部は外面1次調整ナナメハケを施しており、2次調整ヨコハケを施す個体（Po 53・60）もみられる。内面は上半がナナメハケであるが、口縁付近ではヨコハケに近くなる。下半はユビナデを施す。凸帯は高く突出するもの（Po 50）、低平なもの（Po 61）、幅の広いもの（Po 57）がみられる。焼成は埴輪がほとんどであるが須恵質の個体も少量混在している。2号墳は主体部が未調査のため、これらの遺物から築造時期を推定すると、須恵器壺蓋Po 1はあまり大型化せず、稜も鋭く、口縁内面の段も残るのに対して、壺身Po 2はたちあがりは高いが端部を丸くおさめており、やや新しい様相をもつ。これに和泉陶邑古窯址群の田辺編年をあてると、MT 15~TK 10型式に併行するものと考えられ、6世紀前葉～中葉の実年代が与えられ、2号墳の築造時期はこの前後と考えられる。



挿図162 東宗像2号墳出土遺物実測図(1) 瓢箪器・土師器・鉄器

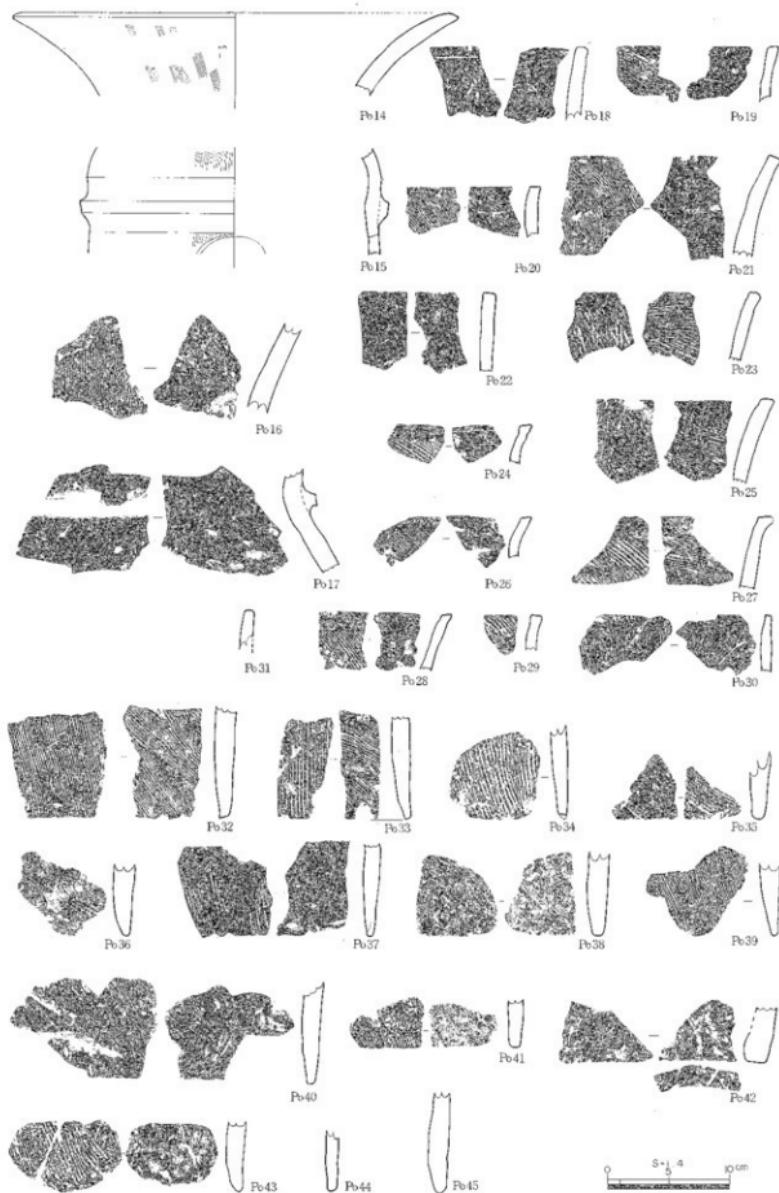
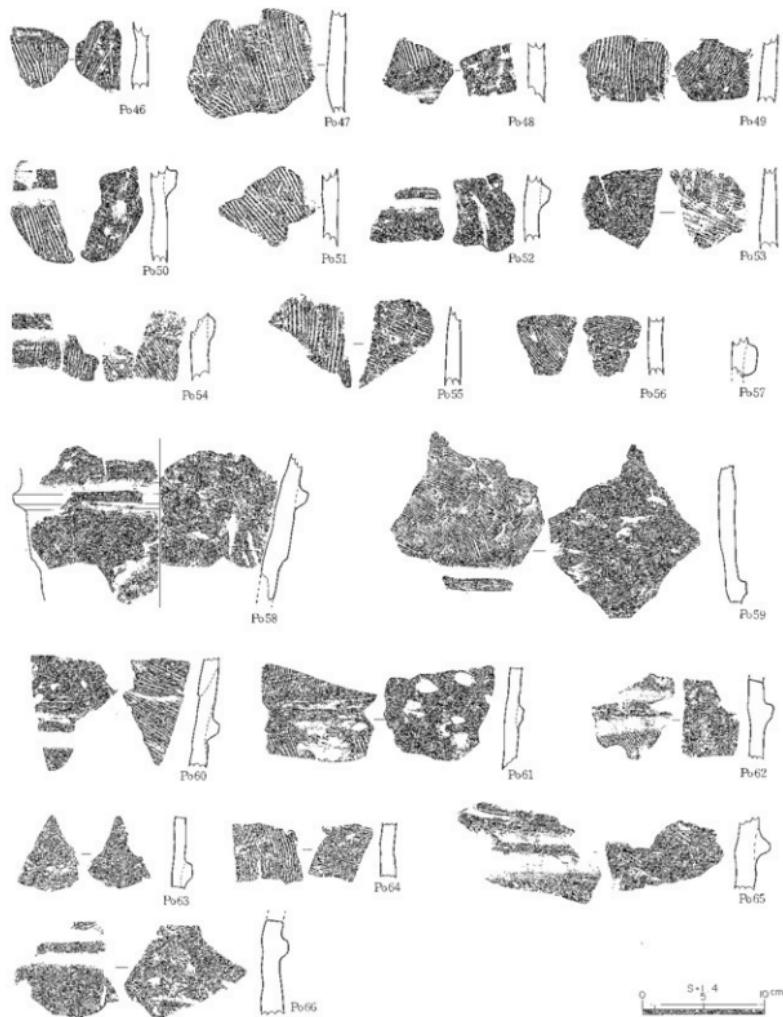


插圖163 東宗像2號墳出土遺物實測圖 (2) 塔輪



插図164 東宗像2号墳出土遺物実測図 (3) 磁輪

3. 東宗像 3 号墳（挿図 165～169、図版 37・38・68）

位 置 東宗像 3 号墳は東宗像古墳群 A 支群に属し、北へのびる尾根上に位置する。2 号墳の前方部掘割り南端に接しており、尾根が 2 号墳の位置する北西へ曲がり急に降っていくその突端に立地するため、古墳の西側はかなり急な傾斜面となる。標高は 30～32 m で、水田比高差 25 m 前後である。東側に接する 23 号墳とは尾根線主軸に直交して 2 基が並んだ位置を占める。北東 1 m には 1 号木棺墓、南東 4 m には 1 号石棺墓がある。墳形は東西径 9.6 m、南北径 8.6 m の円墳であるが、東半分に最大幅 2.4 m、深さ 0.7 m の深い周溝を巡らせている。墳丘西側は傾斜のためか溝が残存しておらず、周溝は三日月状を呈するが、もともと西側には周溝を掘削しなかったのかもしれない。周溝を含めると径約 12 m の円墳となる（挿図 165）。高さは最下端からはかると 1.6 m をはかる。墳丘の築成は周溝を掘削し、地山の低い西側に若干の盛土をして旧地表の傾斜を整地した後、黒褐色の旧表土（挿図 166、スクリーントーン）を切り込んで主体部墓壙を設けている。その後、傾斜の低い西側に最高 75 cm の盛土をして墳丘を形成している（挿図 166）。主体部は墳丘中央に掘られた長さ 400 cm、幅 290 cm、深さ東側 90 cm、西側 15 cm のやいびつな大型長方形墓壙の中に、やや東に寄せて長さ 150 cm、幅 125 cm、深さ 10 cm 前後の二段目の掘り方を設け、さらにその東辺と南辺に寄せて、最終的に長さ 150 cm、幅 120 cm、深さ 16 cm 前後の掘り方を掘っている。盃掘が墓壙底にまで及んでおり、埋葬施設の形態が判然としないが、最終掘り方の各辺壁際に溝状の掘り込みがあり、北辺でこの溝に埋め立てた板石が残存していたことから主軸を N-77°-W にとる長さ 130 cm、幅 90 cm 前後の規模で組み合せ箱式石棺が構築されていたと推定される（挿図 167）。残存する立石の上端が一段目の掘り方の底面とほぼ一致することから、この面で石棺が設置され、被葬者の埋葬が行なわれたと考えられる。埋葬が終ると蓋石を被せ、墓壙出土遺物 が埋められたのであろう。主体部からの出土遺物は、墓壙掘り方堆土中から刀子 F 1（挿図 168、図版



挿図165 東宗像 3 号墳墳丘測量図

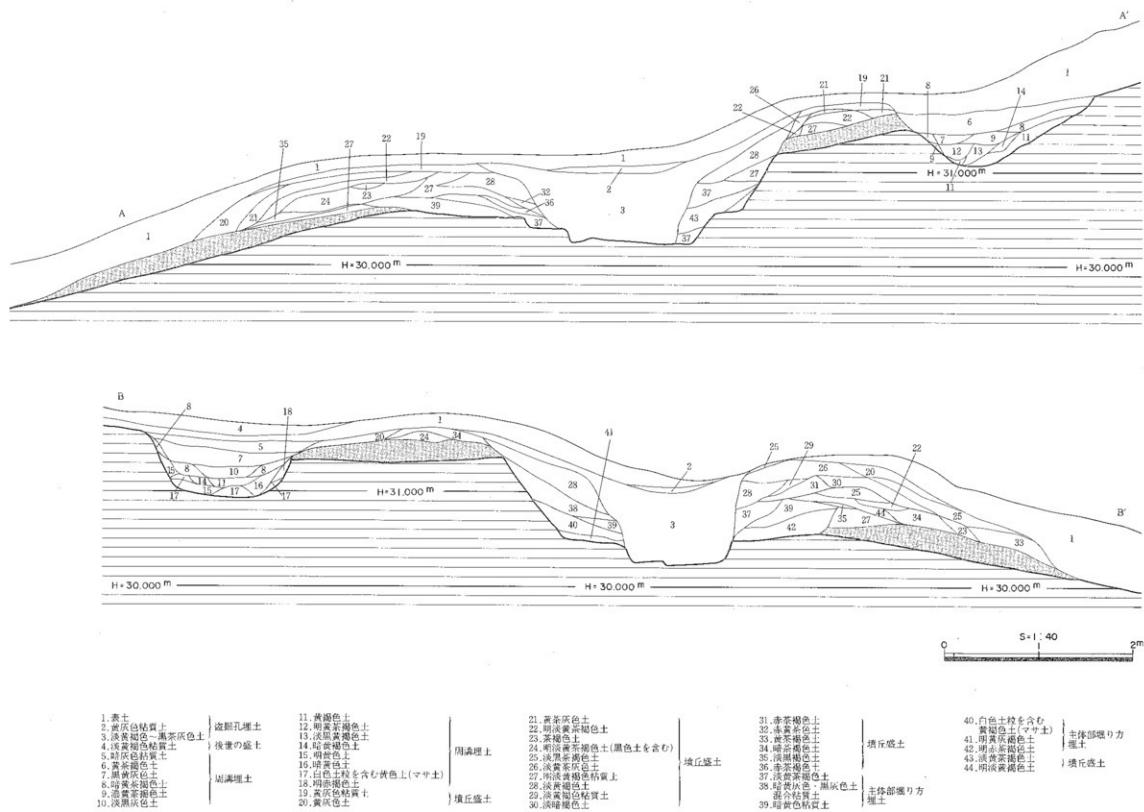
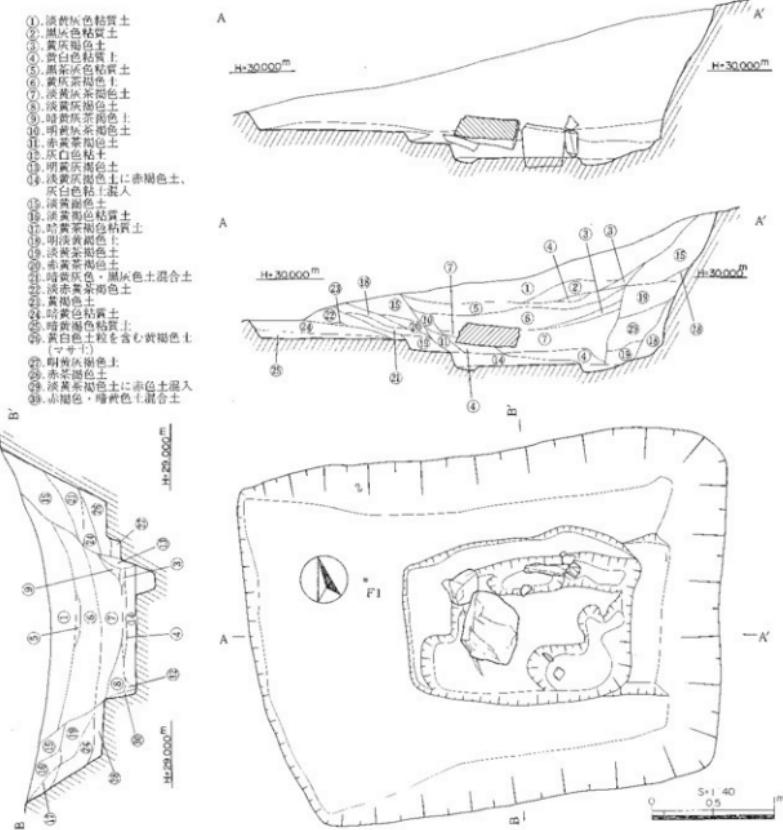


図166 東宗像3号墳 墓丘土層断面図



插図167 東宗像3号墳主体部実測図

68)が検出されたのみである。F 1は鉄製刀子残片であり、刃部残存長2.8cmで、残存長1.4cmの茎が続く、関部には鉢形の鉄製金具がはめてある。他に周溝内から須恵器・埴輪が出土している(挿図169、図版68)。須恵器碗Po 1は口径8.8cm、器高6.8cmの小型の壺であるが全面に自然釉のかかった整美な個体であり、外面には体部に波状文を施している。底部外面にはヘラ状工具による格子状の乱雑な刻みが入っているが、どのような意図によるものか不明である。壺身Po 3は立ちあがりが高く、器高6.5cmにも及ぶ。壺蓋Po 2は外面の稜も退化しており、Po 1・3とは時期差のある個体である。この他に腰削部片Po 4が出土している。埴輪は出土量が少く、埴丘を継続するように樹立されていたとは考えられない。出土した埴輪片はすべて普通円筒埴輪であり、口縁Po 5～7、胴部片Po 8～14を図化した。口縁は内外面ともナナメハケで調整され、端部はヨコナデを施し平担面をつくっている。胴部は外面1次調整タテ・ナナメハケの後、2次調整ヨコハケを施

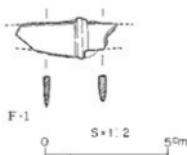


插图168 东宗像3号墳出土遗物実測図(1)鐵器

時 期

す個体Po 8・11がみられる。内面はナメハケで調整され、下半はナデ仕上げされる。凸帯は断面梯形で退化していない。焼成は赤褐色を呈する埴質の個体と、暗灰褐色を呈する須恵質の個体がみられる。検出された埴輪片は復原すれば3個体分に相当すると思われる。東宗像3号墳の築造時期は周溝出土の須恵器Po 3が、立ちあがりが高く、坏部が深く古い様相を残すが、口縁端部を丸くおさめており陶邑編年MT 15～T K10型式にほぼ併行すると考えられることから、6世紀前半と思われる。

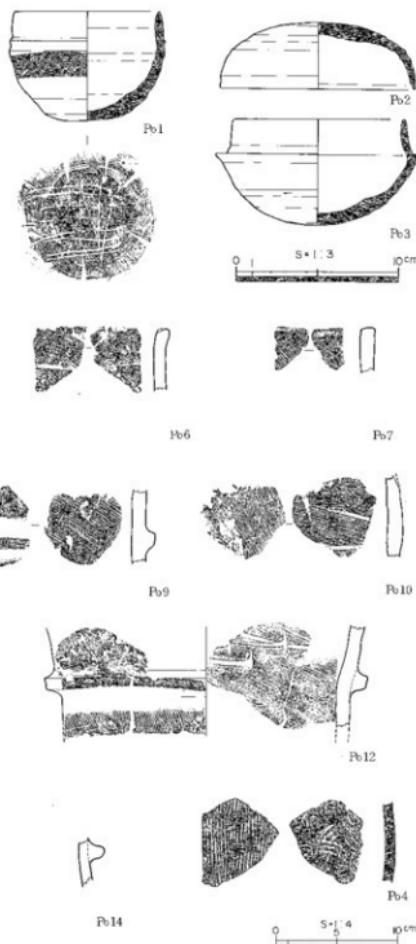


図169 東宗像3号墳出土物実測図(2) 須恵器・埴輪

4. 東宗像 4 号墳（挿図 170～173、図版 39・69）

- 位 置 東宗像 4 号墳は北尾根に展開する東宗像古墳群 A 支群に属しており、2 号墳（前方後円墳）から 8 m 程南側の尾根がやや幅を広げ、平坦面を形成する標高 35 m 付近の北端に位置する。水田比高差は 29 m 前後である。23 号墳の南東 3 m、1 号石棺墓の東 4 m にあたり、南側で 5 号墳と周溝を切り合っている。墳丘の保存状態は良く、径 6～6.5 m の円墳で、高さは周溝底からはかると 1～1.1 m となる。
- 墳 丘 周 溝 墓 構 成 主体部 盜掘坑 出土遺物 時 期
- 周溝は傾斜面に面する北側で検出されなかった以外は幅 1.2 m、深さ 0.7 m の V 字状の鋭い断面の溝が墳丘を巡っており、周溝を含めると径が約 10 m の円墳となる。墳丘の築成は旧地表（旧表土層ースクリーントーン）を墳丘基盤面とし、その上に盛土を施すが現状では 30 cm の厚さしかみとめられない（挿図 173）。4 号墳の主体部は墳丘中央の地山層を三段に掘り込んだ墓壙に木棺を埋めた木棺直葬と考えられる。墓壙の規模は一段目の西側短辺が残存しないが、現状で長さ 340 cm、幅 210 cm の長方形であり、一段目の深さは旧地表からの残存高 5 cm をはかる。二段目は長さ 325 cm、幅 170 cm で、深さ 18 cm、三段目は東側短辺に小さなテラスを有するが、長さ 290 cm、幅 100 cm をはかり深さ 30 cm である。この墓壙底面には厚さ 8 cm の灰緑色粘土が敷きつめられており、これを粘土床として組合せ箱式木棺を埋えたものと考えられる。小口板・側板等の掘り込みはみられなかった。蓋掘は床面上直上 10 cm で止まっており、床面は櫻乱をうけていたが、副葬品等の遺物は全く検出されなかった。但し、盗掘坑埋土中から須恵器甕 Po 3（挿図 172、図版 69）が破碎された状態で出土しており、主体部直上付近に、須恵器甕が埋め置かれたか、バラバラにして放置されたと考えられる。周溝内からは須恵器甕蓋 Po 1・2（挿図 172、図版 69）が出土している。Po 1 は器高が高く口縁内面に段をもつが、外面の棱は甘くなっている全体として綺麗に欠ける器形である。焼成もやや軟質で、大きく焼き歪んでいる。Po 2 は小型化した器形であり、口縁外間に刻みのような痕跡がみとめられる。Po 1 と Po 2 は大きく時期差がみとめられ、Po 2 は 4 号墳に直接伴う遺物ではないと思われる。他に 5 号墳と切り合う南側周溝から折り重なるように多量の円筒埴輪が出土しているが、周溝・墳丘の他の場所から埴輪が全く出土していないことから、4 号墳は埴輪をもたず、5 号墳に伴う円筒埴輪が転落してきたものと思われる。4 号墳の築造時期は、本墳に伴うと考えられる須恵器 Po 1・3 からみて、陶邑編年 T K 10 型式併行と考えられ、切り合い関係においても 5 号墳より後出するところから 6 世紀中葉頃の築造と考えられる。



挿図170 東宗像 4 号墳調査風景

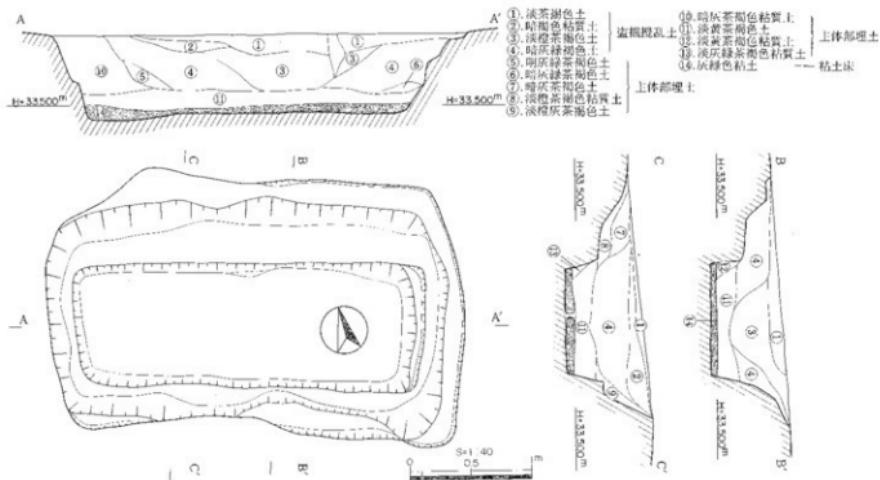


插图171 東宗像4号墳主体部実測図

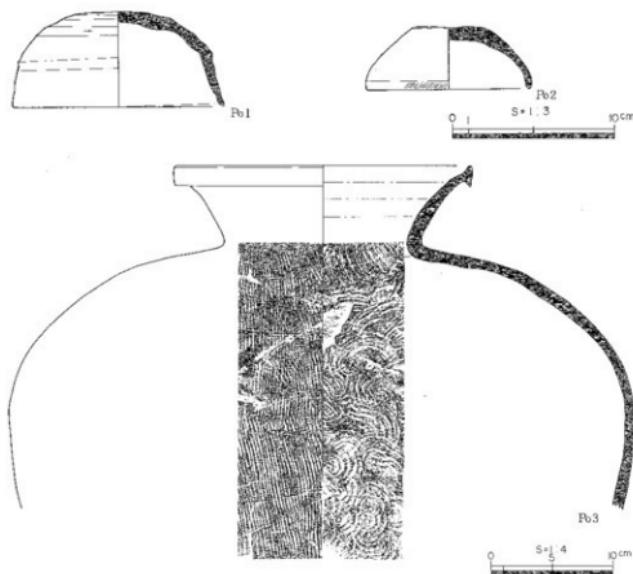
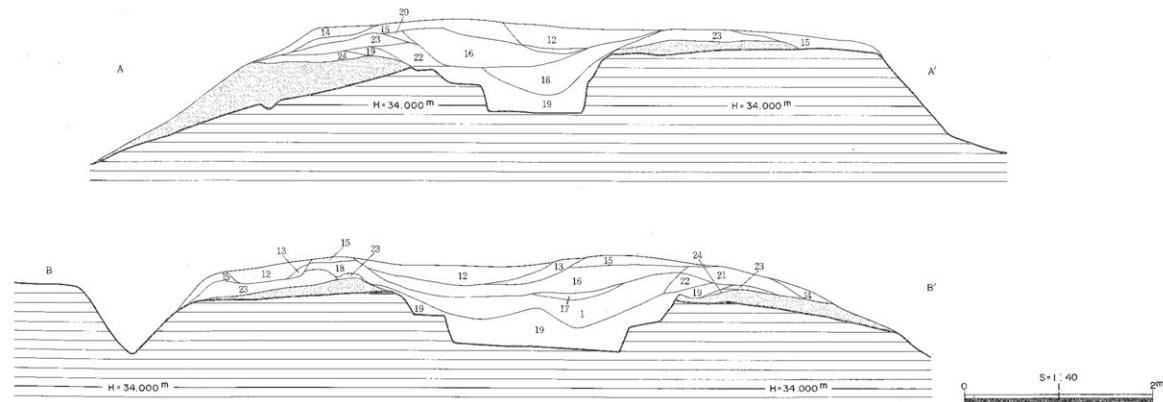
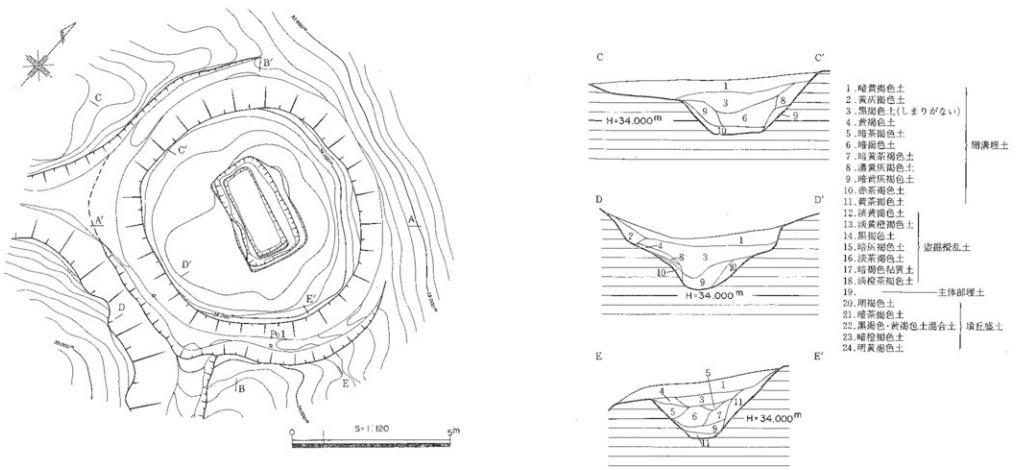


插图172 東宗像4号墳出土遺物実測図・須意器

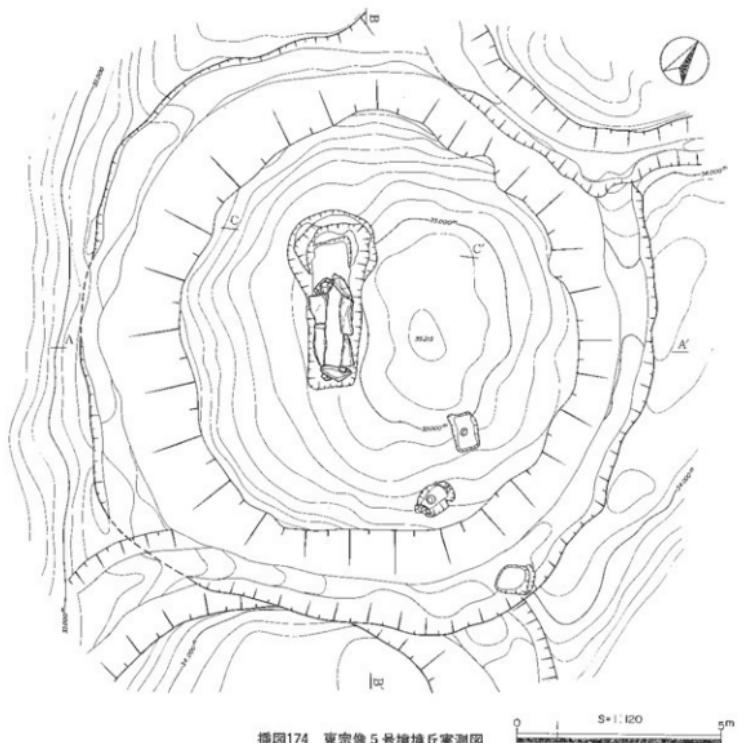


挿図173 東宗像4号墳堆丘実測図及び土層断面図

5. 東宗像 5号墳（擲図 174～191、図版 40～45・70～73）

位 置 東宗像 5号墳は東宗像古墳群A支群に属している。北へのびる尾根が標高 35 m付近でやや幅を広げる平坦面に立地しており、尾根縁を一杯に利用して築かれている。水田比高差は 29 m前後をはかる。

墳 丘 1号石棺墓（擲図 241、図版 65）の南東 4 mに位置しており、北側で 4号墳（擲図 170、図版 39）と、南側で 6号墳（擲図 192、図版 46）と周溝を切り合っている。墳丘の遺存状態は良好で、径 12.5 m の円墳となる。南北の周溝底からの高さは 1.6 m前後となるが、西側は斜面のために墳裾線が低く、高さは 2.2 mをはかる。周溝は傾斜の急な南西側で部分的にしか検出できなかった以外は幅 1.5 m、深さ 0.4～0.5 m前後の断面 U字状の溝が墳丘を巡っており、周溝を含めると径が 15 mの円墳となる（擲図 174）。旧地形の地山は東側が高く、西側がやや低くなつて墳丘中央で段をなしており、この低い側に旧表土（暗褐色土—擲図 177 第 17 層）を切り込んで主体部掘り方が穿たれている。また東側には、地山を掘り込んだ底面ピットをもつ第 5号土壙（擲図 113、図版 17）、第 6号土壙（擲図 114、図版 17）があり、5号墳築造に先行する遺構と思われる。地山に掘り込まれた掘り方内の主体部石棺は粘土目張りを施された後、黄褐色・赤褐色系土（第 14・34・35・36 層）と黒褐色土（第 11 層）を互層に積み上げた 60～70 cmの盛土に覆われている。これは主体部を被覆するための盛土であつて、その上に墳丘形成のための盛土を 30～50 cm施しており、5号墳の盛土は厚いところで 100 cm、薄いところでも 80



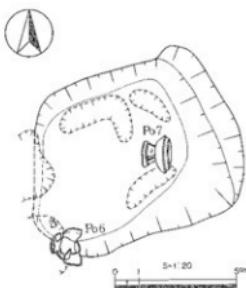
擲図174 東宗像 5号墳墳丘実測図

主体部 cmをはかる。主体部は埴丘中心より西へずれて設けられており検出した当初は東側にも埋葬施設があるのではないかと精査に努めたが、東半分は地山が非常に堅く岩盤の露出したところもあるため、掘り方の掘り易い西側によせたものと判断した。掘り方は長さ 435 cm、幅 130 cm、深さ 65 cmの長方形を呈し、南側短辺に寄せて組まれた横口構造をもつ特異な組合せ箱式石棺を納めていた(摺図 178、図版 42)。石棺は内法で長さ 210 cm、南側幅 43 cm、北側幅 35 cm、高さ 35~40 cmをはかり、南側の幅が広く、床面の高さも 5~6 cm高くなっている。石棺の構築は、掘り方の床面の南端に浅い掘り込みを設けて小口石を埋め立て、両側面は長さ 80 cm~100 cm、厚さ 30~45 cmの大型の石を石室の腰石状に横長にして 2 石据えている。西側石をみると横口部側の石を先に据え、それにかけるように南側の石を据えているようである。横口部は北側小口石を立てず、左右側壁に続けて西側 40 cm、東側 70 cmの大きさの石を合掌式に組み合せている。西側の石が小さく、蓋石との間に隙間があくため、塊石をのせて塞いでいる。蓋石は 4 枚あり、南側 2 石に大型、

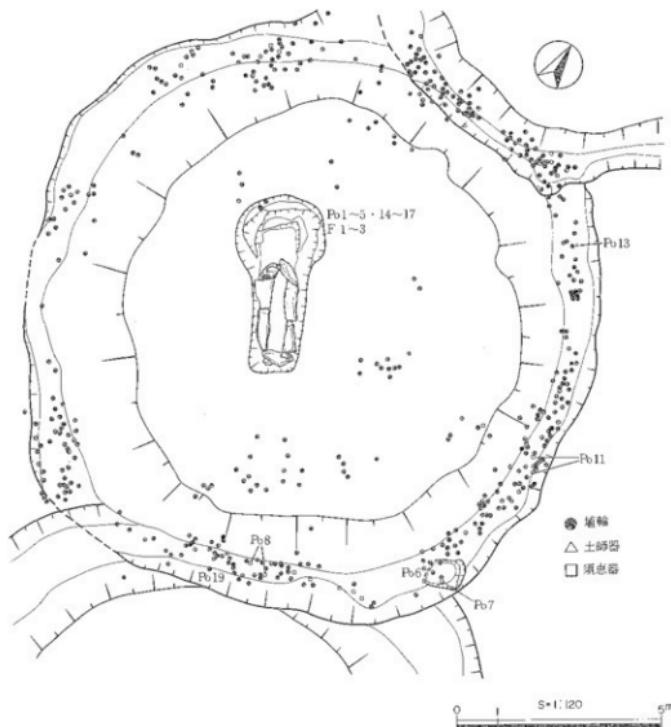
石 棺

横口部

蓋 石

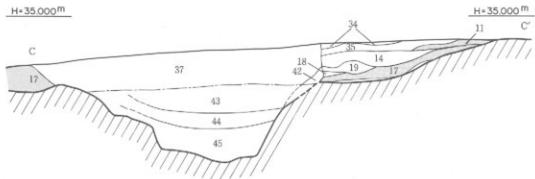


摺図175 東宗像 5号墳周溝遺物
出土状況図



摺図176 東宗像 5号墳埴丘及び周溝遺物出土位置図

H+35.000m



1. 茶 土
2. 明茶褐色土(黄褐色ブロックを含む)
3. 茶褐色土(茶褐色ブロックを含む)
4. 淡茶褐色土(茶褐色ブロックを含む)
5. 淡茶褐色土(黄褐色ブロックを含む)
6. 淡茶褐色粘土
7. 淡茶褐色土(淡茶褐色土混入)
8. 淡茶褐色土(淡茶褐色ブロックを含む)
9. 黑褐色土
10. 淡黑褐色土
11. 黑褐色土
12. 淡褐色土(黄褐色土混入)
13. 明褐色土上(黄褐色ブロックを含む)
14. 明褐色土(灰白色ブロックを含む)

15. 淡褐色土
16. 淡褐色土(黄褐色ブロック・黑色土混入)
17. 淡褐色土
18. 淡褐色土(黄褐色・灰白色ブロック混入)
19. 黑褐色土
20. 淡褐褐色土(淡褐色土)
21. 灰褐色土
22. 黄褐色粘土
23. 黄褐色粘土(しまっている)
24. 淡褐褐色粘土
25. 淡茶褐色土
26. 淡褐色土(しまっている)
27. 淡褐色土(灰白色ブロックを含む、しまっている)
28. 明褐色土(黄褐色ブロックを含む、しまっている)
29. 明褐色土(淡褐色ブロックを含む)
30. 淡茶褐色土
31. 淡褐褐色土(黄褐色ブロックを含む)
32. 明褐色土
33. 淡褐色土
34. 淡褐褐色土(黒色土を含む)
35. 淡褐褐色土(赤褐色ブロックを含む)
36. 明褐色土
37. 明褐色土(黄白色ブロック混入)
38. 淡褐色土
39. 淡茶褐色土
40. 淡褐褐色土
41. 明褐色土
42. 淡褐褐色土(黄白色ブロックを含む)
43. 淡褐色土(赤褐色・黄灰色ブロック混入)
44. 淡茶褐色土(黄褐色ブロック混入)
45. 明茶褐色土(淡褐色ブロック混入)

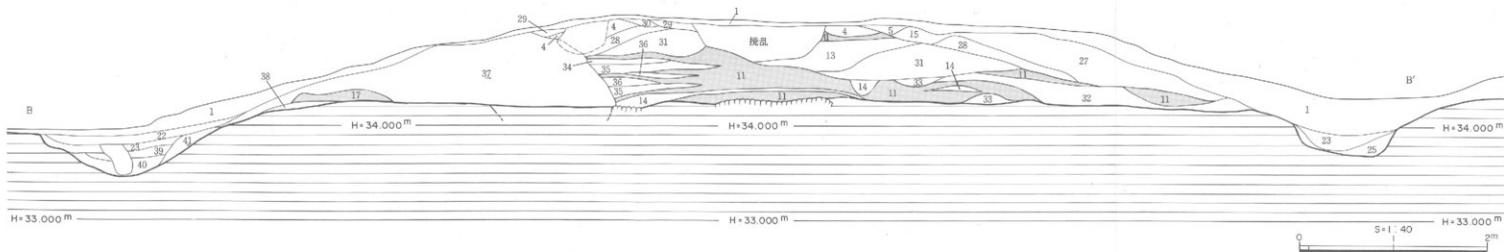
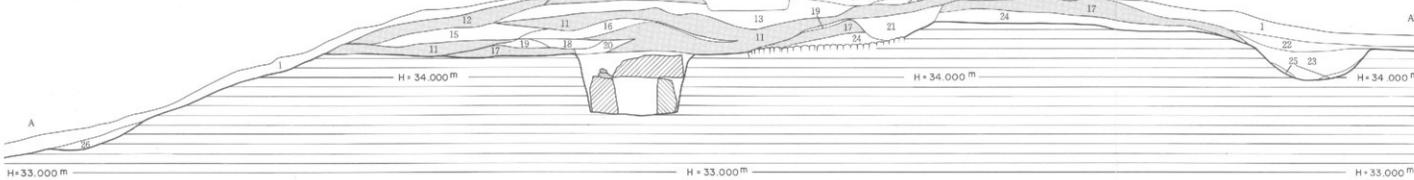
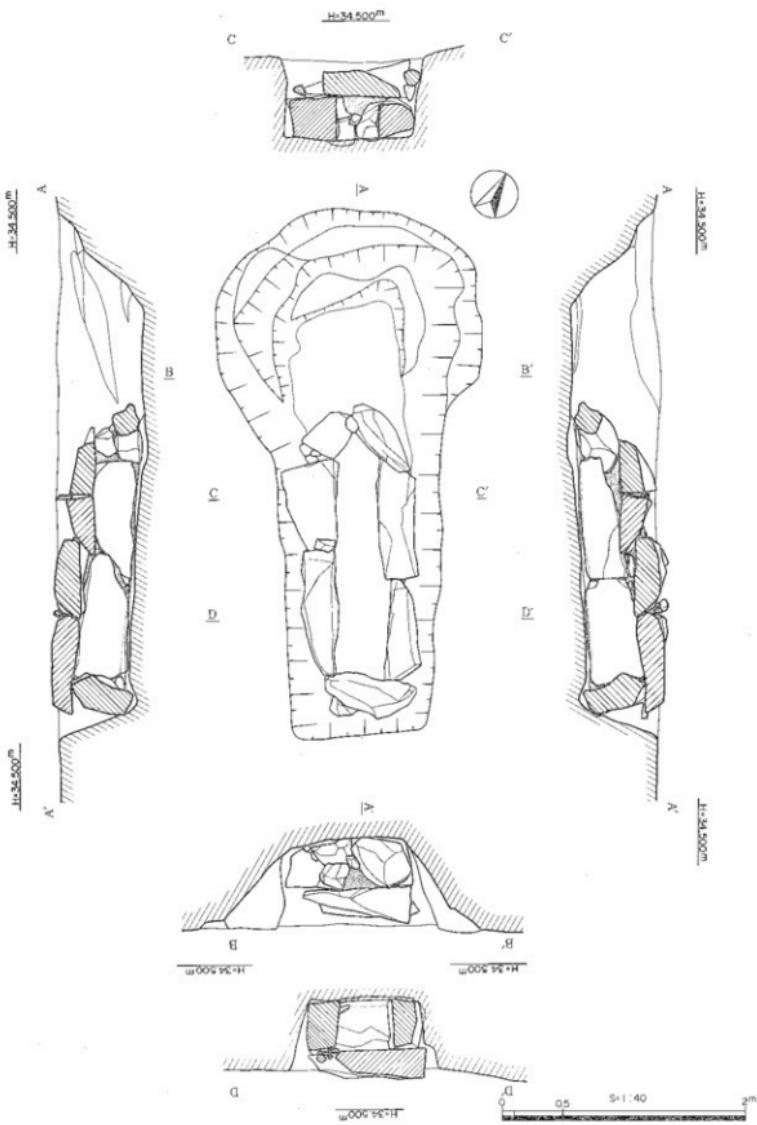
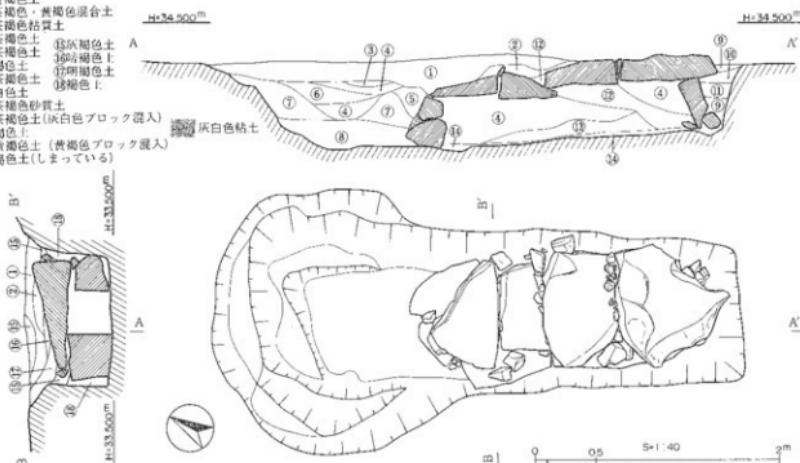


図177 東宗像5号墳 墓丘土層断面図



擡図178 東宗像 5号墳主体部実測図

- ①暗茶褐色土
- ②暗黄褐色土
- ③暗茶褐色・黄褐色混合土
- ④暗茶褐色粘土質
- ⑤暗茶褐色土
- ⑥暗茶褐色土
- ⑦茶褐色土
- ⑧暗茶褐色土
- ⑨A白色土
- ⑩暗茶褐色砂質土
- ⑪暗茶褐色土(白色ブロック混入)
- ⑫暗褐色土
- ⑬暗黃褐色土(黄褐色ブロック混入)
- ⑭黄褐色土(しまっている)

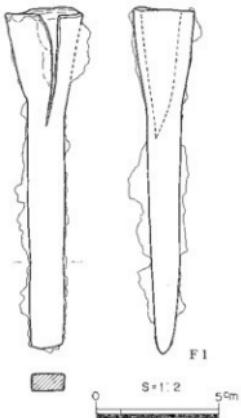


挿図179 東宗像5号墳主体部検出状況及び土層断面図

北側2石に小型の石を用い、北側から二番目の蓋石に三番目の蓋石がのるように重ねられている。問題は一番北側の蓋石であり、この石は追葬時には閉塞施設として機能したものと考えられる(図版44)。

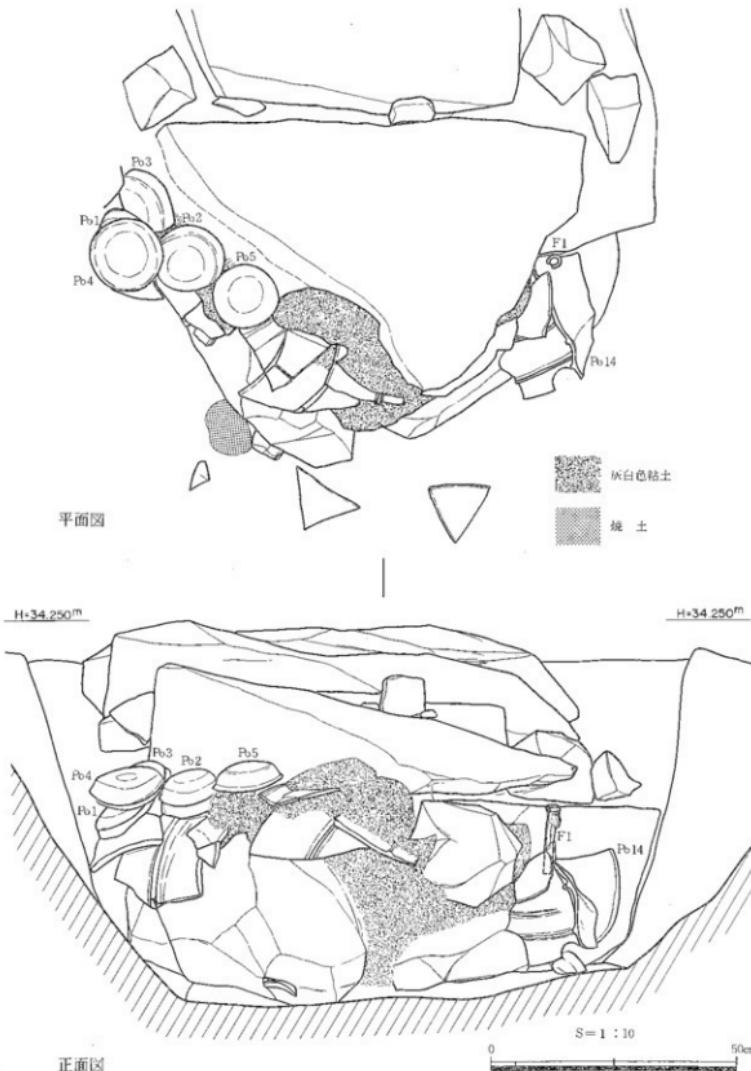
閉塞状況 閉塞は蓋石と横口部閉塞石の隙間に円筒埴輪を割った破片を詰め、さらに灰白色粘土で丁寧に目張りを行っていた。閉塞部東側には埴輪片、粘土の上に須恵器壺环5個体Po1~5(図版185、図版69)が貼り付けるように置かれ。西側の側石と横口部閉塞石、蓋石の間には刺し込んだよう「石突」状の鉄製品F1(図版180、図版70)が立ったままの状態で検出された。これらは最終追葬時の閉塞状況を留めているものと考えられる(図版181、図版43)。この横口部前面には底面で80×90cmほどの前庭部とでも呼ぶべき空間がある。この空間は長さ435cmの掘り方に長さ250cm程の石棺を南に寄せて据えることにより生じた空間で、主体部の構築当初から計画的に設けられたものである。これは埋葬あるいは墓前祭のための空間と考えられ、掘り方北側短辺には階段状の段が二段のみ削り残されており、前部の掘り方自体も追葬時に掘り広げられ幅210cm程になっている。埋葬空間としての棺内は追葬を行う程の余裕はないよう思われたが、墳丘土層断面の観察によると墳丘築成後に前庭部に向けて再び掘り込まれているのが確認できる(図版177、図版41)。

前庭部土層断面及び閉塞状況をみると、最低1回の追葬が認められ。その際には横口部最下段の石は動かさず、上段の塊石と蓋石の北側1石を取り除いて追葬されている。さらに石棺石材を除去し、掘り方を最終的に完掘したところ横口部内側に浅い掘り込みが検出された(図版184)。これは南側小口石を埋め立てた掘り込みと同様なものと考えられ、当初はここに南側のように小口石が立てられ、現在のような横口構造はもたない箱式石棺であった可能性がある。その場合第1回の追葬時(最終追葬以前)に小口部を現状のような横口部に作りかえたことが推定され、これが正しければ、最低2回の

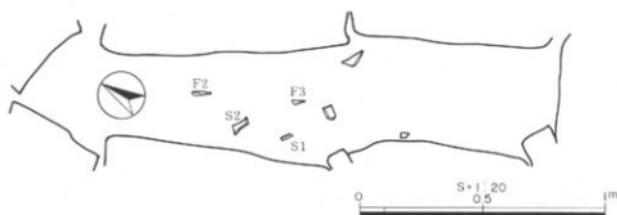


挿図180 東宗像5号墳主体部横口部出土遺物実測図 鉄器

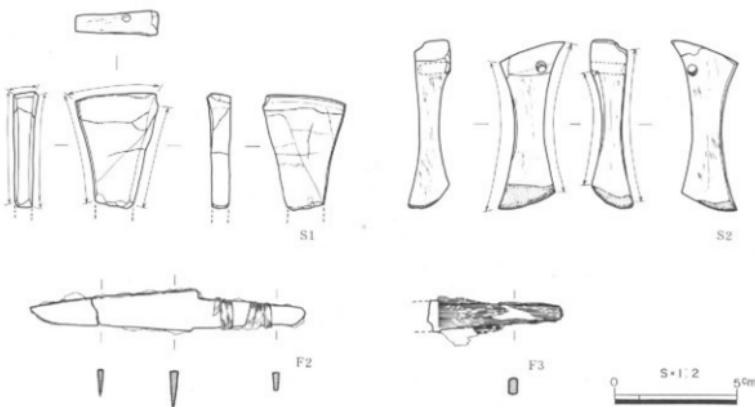
追葬が行なわれたことになる。埋葬空間との関係からみて、2回の追葬が可能であったかどうか疑問人骨が残るが、現段階では可能性として指摘しておきたい。棺内には人骨は遺存していないかったが、棺内土の遷移時に歯牙を数本検出した。鑑定によれば性別は不明であるが壮年期の被葬者が埋葬されている出土物たようである。他に棺内では床面中央部付近で刀子F2・F3、磁石S1・S2を検出した(挿図182)。



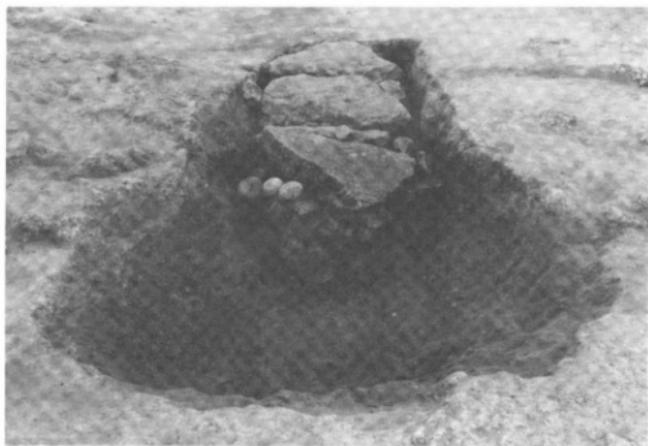
挿図181 東宗像5号墳主体部横口部閉塞状況図



挿図182 東宗像5号墳主体部館内遺物出土状況図

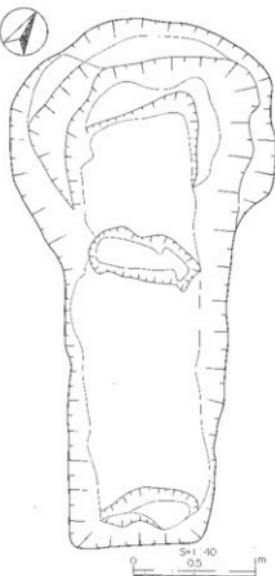


挿図183 東宗像5号墳主体部(館内)遺物実測図 磚石・鉄器



挿図184 東宗像5号墳主体部閉塞状況

- 鉄 器** 183、図版 45・70)。鉄製刀子 F 2 は全長 11.3 cm、刃部長 6.6 cm をばかり、両側で闊幅 1.7 cm である。茎部には木皮状のものと巻いている。F 3 は両側の茎部で、闊幅 1.3 cm をばかり。
- 磁 石** 基には木質が残存していた。磁石 S 1 は扁平な板状を呈し、S 2 は各面が内側する柱状の磁石で、一方の端に紐通し穴を穿孔している。閉塞部で検出した F 1 は長さ 14.0 cm をばかり、先端は、鋭くはないが、断面長方形で袋部には木質が残っており、木製の柄をつけた盤と思われる。須恵器蓋環は扁平で口径の大きい Po 1 と Po 4 がセットであり、Po 1 は外面の縁と口縁内面の段が凸線となっている。Po 2 と Po 5 はやや口径が小さく器形が丸いセットで、Po 2 は口縁内面に段を有するが外面の縁は丸く、Po 5 の口縁端部も丸くおさめられている。Po 3 は口縁端部にアクセントをもつが段が凹面をなす、外面の縁も丸い。これらの須恵器は陶色編年 TK 10 型式に併行する段階と考えられる。周溝出土の須恵器は有蓋高环 Po 6 と Po 7 が南東局溝底の長さ 90cm、幅 70cm、深さ 15cm の掘り込みから検出された(挿図 175)。2 個とも三方に長方形透しをもつ脚部のつく高环で、环部はたちあがりが内側し端部内面に段をもち、受部は斜め上方にのびている。全体として古い様相の須恵器であるが、底部外面のヘラケズリの範囲が狭くケズリの単位も幅広い。環 Po 8 はやや肩の張る胸部から外傾して上外方へ開く口頭部が続く。端部内面には段をもち、口縁部と頭部外面には波状文を施している。これらの須恵器は陶色編年 MT 15 型式併行と考えられ、先述した主体部閉塞部出土の蓋環より 1 段階古い様相を示している。Po 1～5 の蓋環は最終追葬時に置かれたものと考えられることから Po 6～8 は埴丘築造時期を示すものと思われ、5 号墳は 6 世紀前葉に築造されて 6 世紀中葉まで追葬が行なわれたと考えられる。环 Po 9 は 5 号墳に伴うものと考えられるが、环 Po 10～12 は奈良時代まで降るとと思われる。土師器甕 Po 13 は屈曲して外反する口縁で、端部は丸くおさめている。埴輪は閉塞部及び埴丘・周溝から多量の円筒埴輪が出土した(挿図 176、図版 40・43)。主体部の閉塞に用いられた埴輪は朝顔形円筒埴輪 Po 14(挿図 189、図版 71)と普通円筒埴輪(以下「円筒埴輪」と呼称する) Po 15・16・17(挿図 189、図版 71)の 4 個体である。これらは最終追葬における閉塞行為に伴う遺物であり、先述した須恵器の時期差の解釈によると、古墳築造後漸くして墓壙内に持ち込まれたことになる。しかし、4 個体が全て下部の 1/4 を欠損することから、古墳



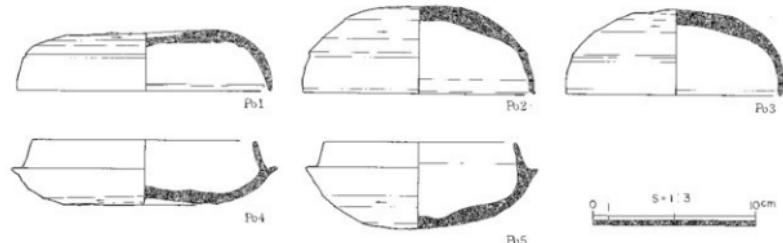
挿図185 東宗像 5号墳主体部横口部
実測図

時 期

土師器

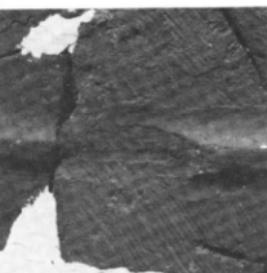
埴 輪

は奈良時代まで降るとと思われる。土師器甕 Po 13 は屈曲して外反する口縁で、端部は丸くおさめている。埴輪は閉塞部及び埴丘・周溝から多量の円筒埴輪が出土した(挿図 176、図版 40・43)。主体部の閉塞に用いられた埴輪は朝顔形円筒埴輪 Po 14(挿図 189、図版 71)と普通円筒埴輪(以下「円筒埴輪」と呼称する) Po 15・16・17(挿図 189、図版 71)の 4 個体である。これらは最終追葬における閉塞行為に伴う遺物であり、先述した須恵器の時期差の解釈によると、古墳築造後漸くして墓壙内に持ち込まれたことになる。しかし、4 個体が全て下部の 1/4 を欠損することから、古墳



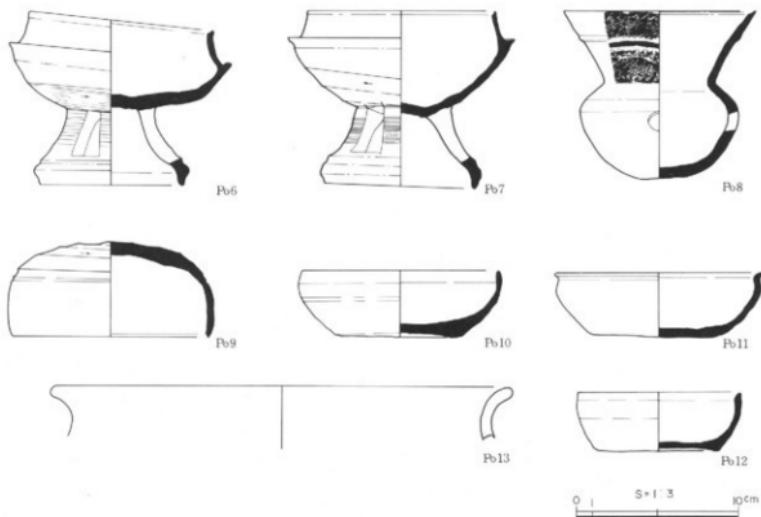
挿図186 東宗像 5号墳出土土器実測図(1) 主体部横口部・須恵器

に埋め立てられていた状態から上半部のみを持ち去って転用したものと思われ、必ずしも追葬時期に製作された埴輪とは断言できない。その場合5号墳墳丘では埋め立てた埴輪の基部が検出されておらず、周溝・墳丘から朝顔形円筒埴輪が発見されなかつことからみて、この4個体は他の古墳の円筒埴輪を転用したものと考えられる。円筒埴輪Po 15~17は第2段円形透しを2孔もつ2条凸帯3段の器形で、Po 16·17は第2次調整ヨコハケを有している。ヨコハケは工具が器壁から離れず、何回か止めながらハケメを施す所謂「B種ヨコハケ」である。Po 14·15は第2次調整ヨコハケを省略している。これら主体部出土の埴輪は各要素において墳丘・周溝出土の埴輪と著しい差異は認められない。5号墳墳丘築造に伴うと考えられる円筒埴輪は周溝及び墳丘から普遍的に検出された。円筒埴輪は全体の器形がわかる個体（挿図189、図版71）でみると、2条凸帯3段で上方が八の字状に開く器形であり、第2段に円形透し孔を2ヶ所穿つ。外面調整は第1次調整ナメハケの後凸帯設定位置に沈線を施し、凸帯を貼り付けて強くヨコにナデて密着させている（挿図187）。第2段にヨコハケを施す個体Po 31~39もみられる。内面はナメハケを施した後第1段裏面付近にヨコハケを施している。底部は指あるいは工具による押圧によって下方へひきのばされ、端部の器壁が薄くなる。Po 45は倒立させて第1段内外面にナメハケを施しており、端部は平坦になっている。焼成は明～暗赤橙色を呈する埴質が主流であるが、淡黄褐色～暗褐色を呈する須恵質の個体もみられる。埴質の個体にも黒斑はみられず、窯焼成されたものと思われ、両者に製作手法上における明確な差異は認められない。ヘラ記号△は認められない。ヘラ記号はいずれも第3段外面にあり、「○」に類する記号がPo 17·19（挿図189、図版73）、「×」がPo 15（図版73）、「V」字状がPo 25·30（挿図190、図版73）にみられる。

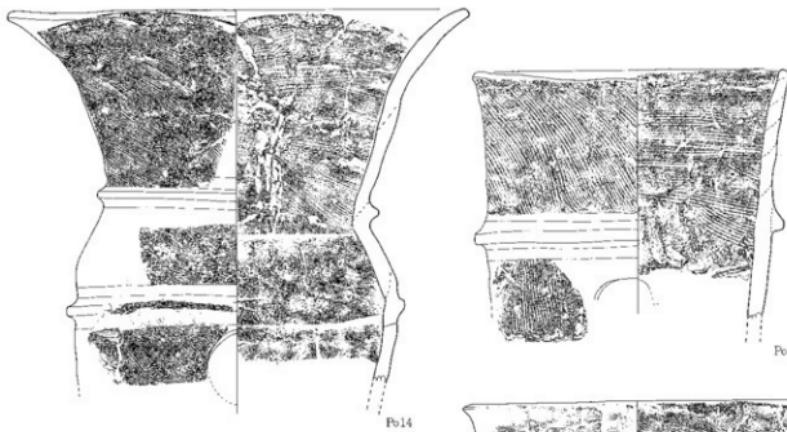


挿図187 同筒埴輪凸帯設定手法

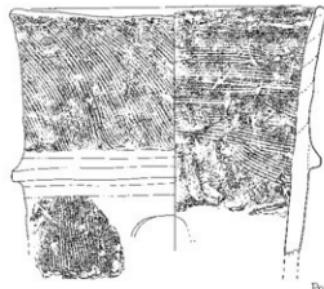
ヘラ記号



挿図188 東宗像5号墳出土土器実測図(2) 周構・須恵器・土師器



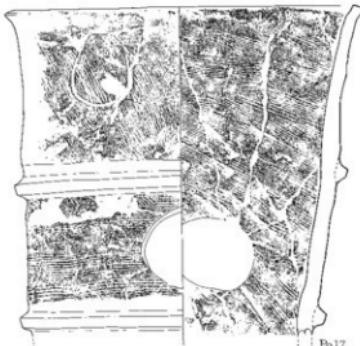
Po14



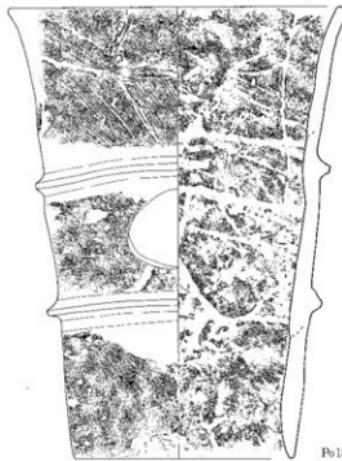
Po15



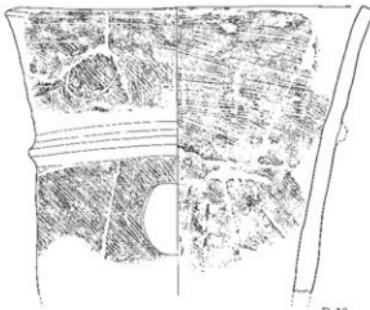
Po16



Po17



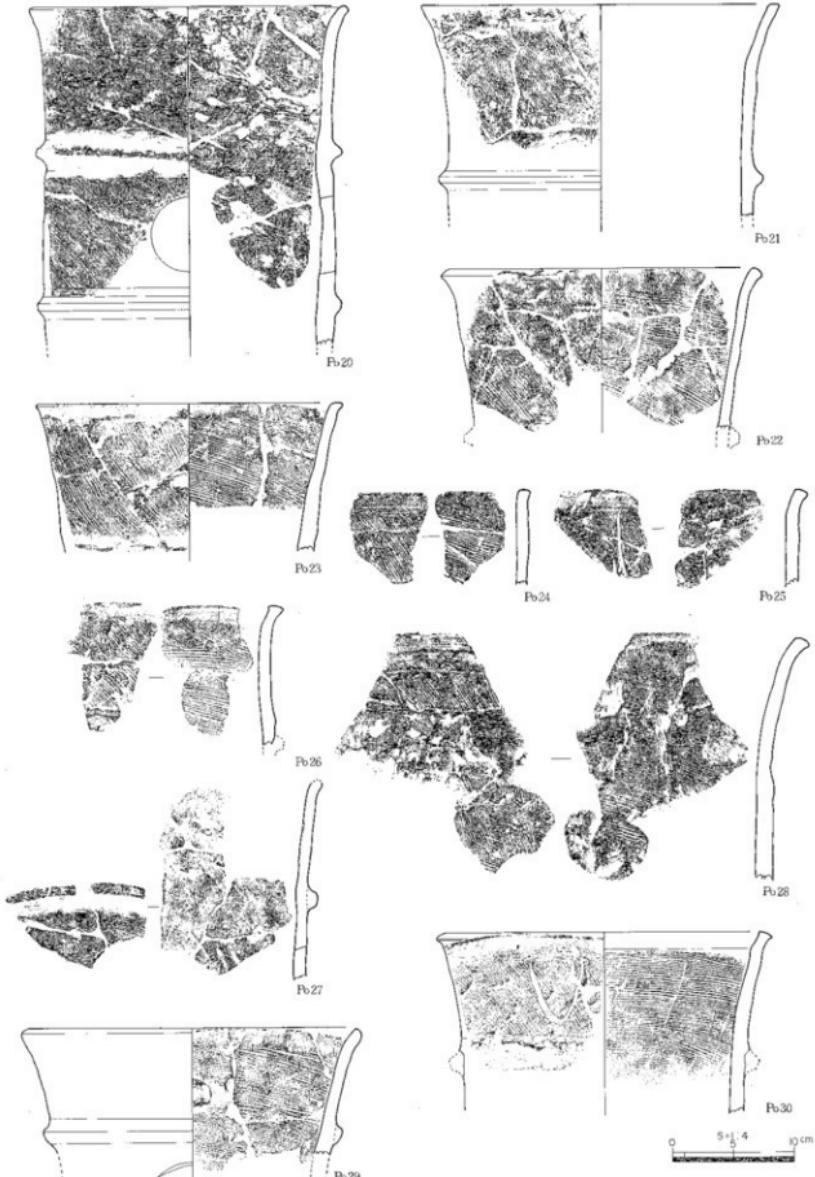
Po18



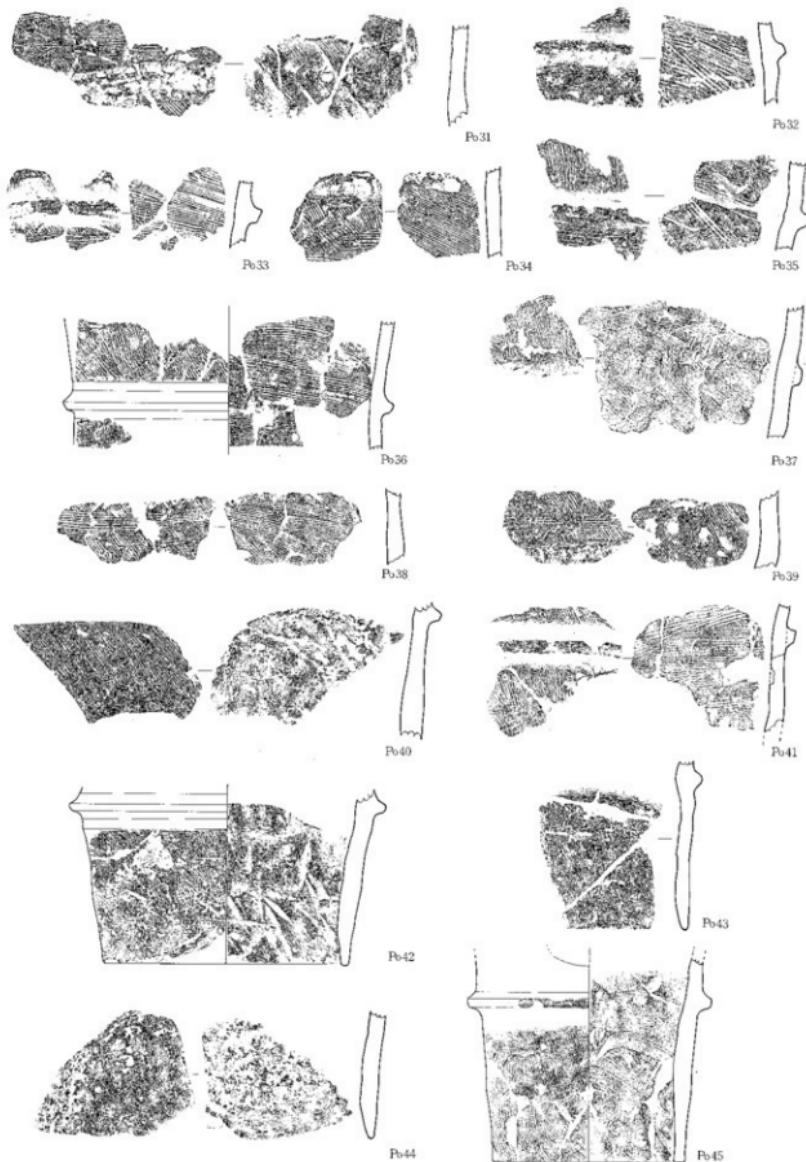
Po19

0 5+4 10 cm

挿図189 東京像 5号埴出土土器実測図(3) 植輪 (Po14~17は主体部横口部、Po18,19は周溝内出土)



插図190 東京像 5号墳出土土器実測図(4) 壁輪

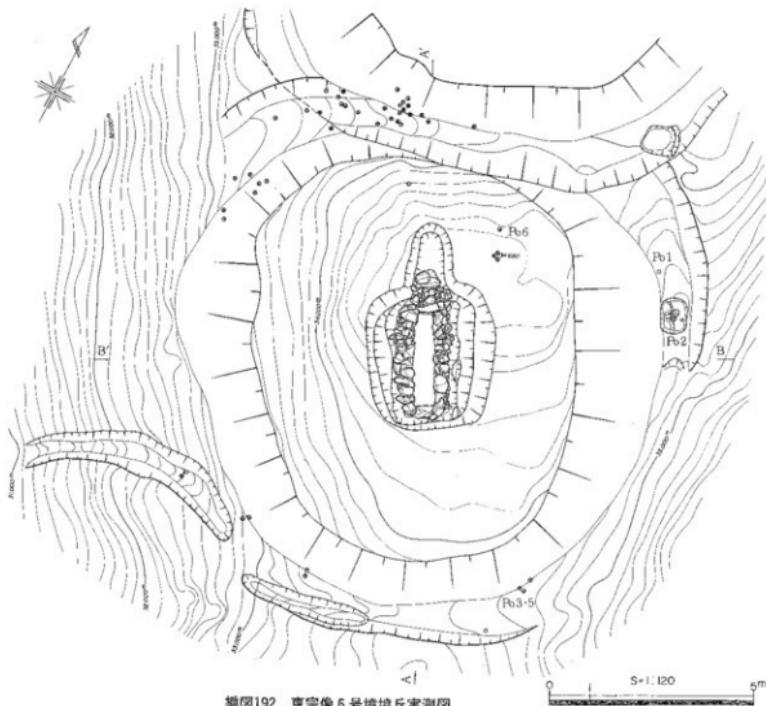


插図191 東宋像 5号墳出土土器実測図(5) 墓棺



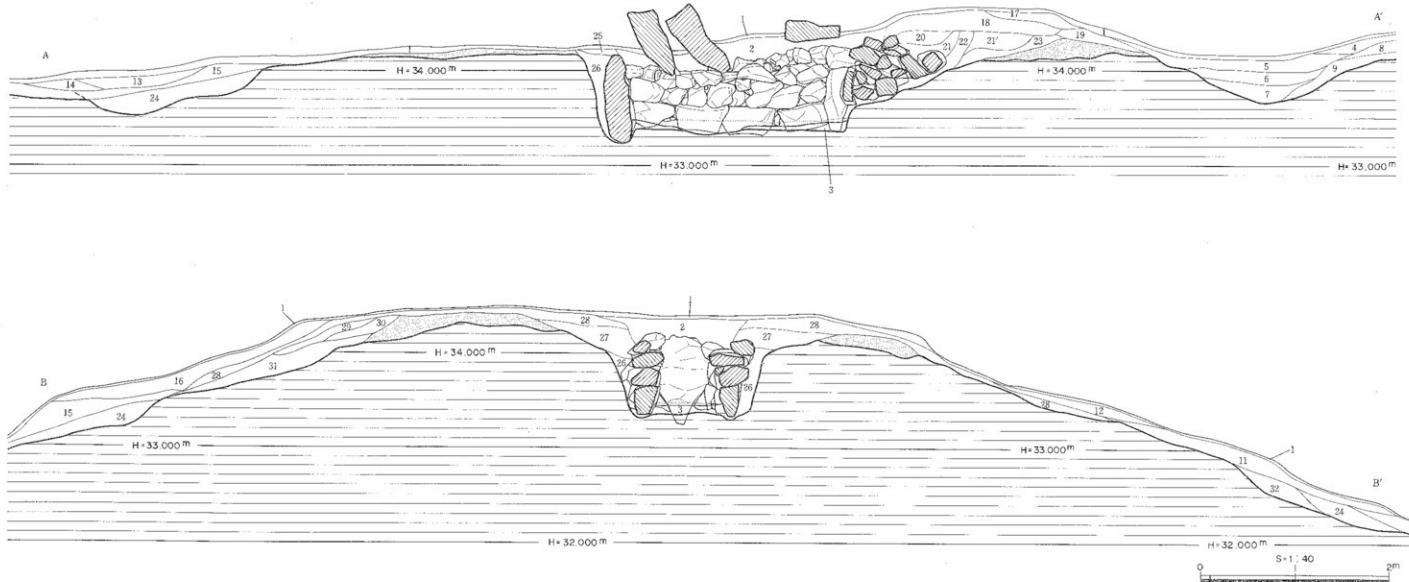
6. 東宗像 6 号墳（挿図 192～200、図版 46～51・74）

位 置 東宗像 6 号墳は東宗像古墳群 A 支群の展開する北尾根稜線上に位置しており、尾根が標高 34 m 付近でつくる平坦面を幅一杯に使って築造されている。水田比高差は 28 m 前後をはかる。南東 18 m に 7 号墳（挿図 199、図版 52）があり、北西では 5 号墳（挿図 174、図版 40）と周溝を切り合っている。6 号墳の南側は尾根がやや鞍部になっており、西から東へ尾根を越える第 3 号道路状造構（挿図 147、図版 21）が走り、頂部付近には集石造構（挿図 145、図版 22）が築かれている。また、南西～南東にかけての墳體線に S 字状の第 4 号溝状造構（挿図 192）が検出されている。主体部は盜掘をうけ、天井石が露出した状態で、墳丘は盛土をほとんど失っており、遺存状態は芳しくなかった。墳形は径 12 m の円墳であり、南側の周溝底からの高さは 1 m が遺存している。6 号墳は 5 号墳が位置する尾根頂部平坦面がやや幅を狭めているところに立地しており、西～南側にかけてと東側では傾斜が急で周溝を検出できなかつたが、墳丘土層断面では、周溝状落ち込みや、墳體部平担面を確認できた（挿図 193）。検出された周溝は幅 1.3～2 m で深さ 0.3 m 前後の断面 U 字状の周溝で、この周溝を含めると径 15 m の円墳となる（挿図 192）。墳丘の築成は旧表土（挿図 193、黒褐色土ースクリーントーン）を切り込んで主体部掘り方が穿たれており、主体部石室構築後に墳丘盛土を施されたと考えられる。現状では盛土がほとんど流失しており、尾根幅が狭隘なため厚く盛土を施して墳丘を形成した東・西側を除けば、墓道付近で盛土の厚さ 25 cm をはかるのみである（挿図 193）。

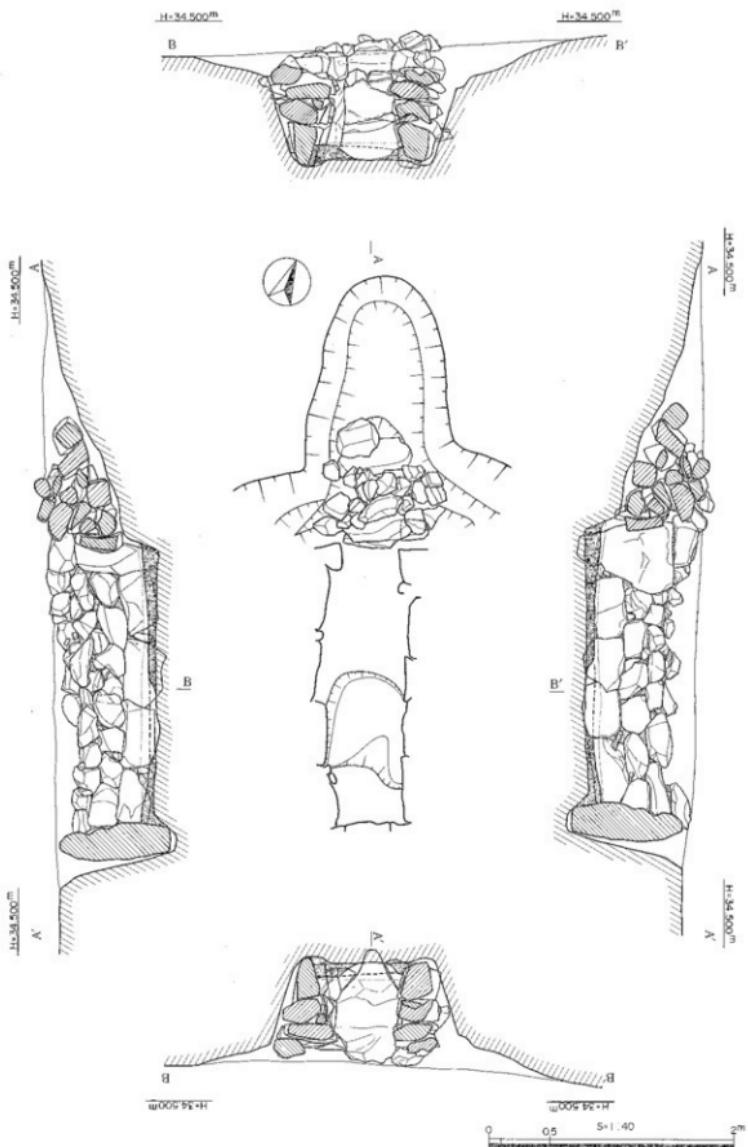


挿図192 東宗像 6 号墳丘実測図

1. 茶土	13. 深茶褐色土	24. 深黒褐色土 I.
2. 淡紅(赤褐色)灰土	14. 淡褐色土	25. 砂赤褐色土
3. 深茶褐色土	15. 茶褐色土(しまっている)	26. 淡赤褐色土
4. 淡茶褐色土	16. 山茶褐色土(地山ブロックを含む)	27. 淡褐色土
5. 茶褐色土	17. 茶褐色土(しまっている)	28. 深茶褐色土(しまっている)
6. 淡褐色土(化成物混入)	18. 淡茶褐色土	29. 淡褐色土 I.
7. 淡褐色土	19. 淡茶褐色土(しまっている)	30. 淡褐色土
8. 淡茶褐色土	20. 淡茶褐色土	31. 深茶褐色土
9. 淡茶褐色土	21. 淡褐色土	32. 深茶褐色土
10. 褐色土	22. 山茶褐色土	スクリーン・トーン
11. 深茶褐色土	23. 深茶褐色土	黒褐色土(印表上)
12. 深茶褐色土	25. 深茶褐色土	



掲図193 東宗像 6号填墳丘土層断面図



挿図194 東寺像 6号塔主体部実測図

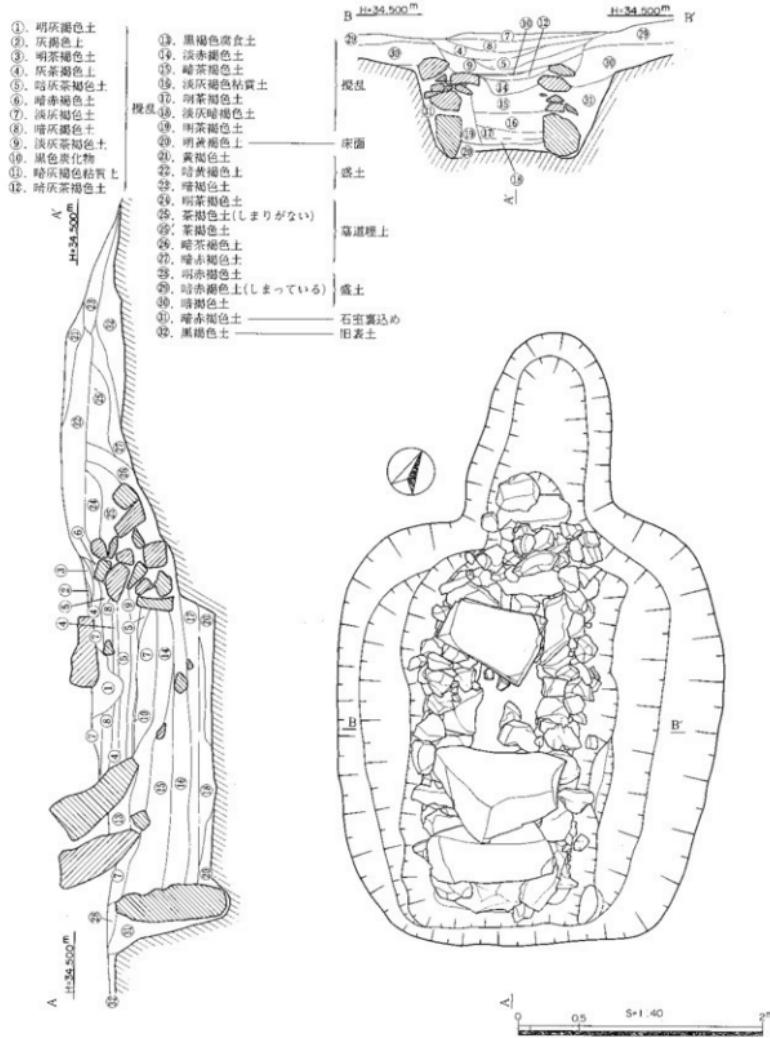


図195 東宗像6号墳主体部検出状況及び土層断面図

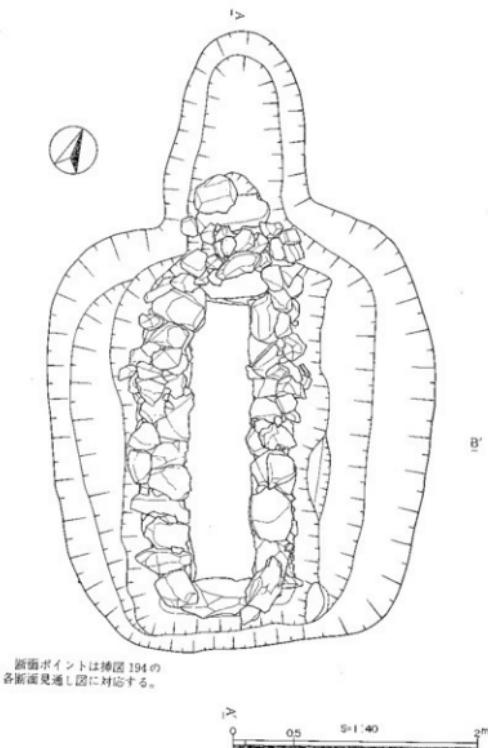
主体部 墳丘中央部に穿たれた
規 構 長さ 350 cm、幅 170 cm
 の長方形掘り方内に構
 築された主体部は、北
 部九州に特徴的に分布
 する「竪穴系横口式石
 室」に類する横穴式石
 室である。玄室規模は
 内法で奥壁から袖石前
 端までの長さが 230 cm、
 奥壁側幅 54 cm、横口部
 幅（袖石間）46 cm、横
 口部における床面から
 の側壁残存高は 80 cm
 であり、袖石にかかる
 天井石が動かされては
 いるがほぼ原位置に近
 いとすれば、石室の高
 さは 80 cm 前後で大差
 はないものと思われる。

平面プラン 平面プランは狭長な長
 方形を呈し、西側袖石
 がやや内側へ突出はす
 るが両袖のプランとし
 て大過ないと思われる。

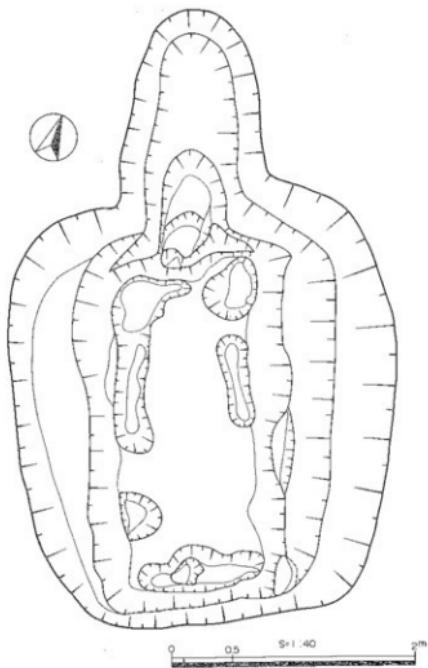
横口部 竪穴系横口式石室に特
 徴的な小口部の横口構
 造は、両側壁端に柱石

を立てて両袖とした横口部に、地山を斜めに掘り込んだ墓道が連接するタイプである。墓道は長さ 160 cm、入口部幅 70 cm、玄室側幅 120 cm で途中に段差をもしながら 70 cm の高低差を石室横口部に向かって斜めに下っている。北部九州におけるこのタイプの石室をみると墓道から横口部をくぐり玄室内に入るには、横口部に造り付けられている石積の段を下るようになっている。6 号墳石室も段を下るよ

閉 塞 うな構造とはなっているが、この段が石積ではなく、地山を掘り残して床面までの高さ 15 cm の段が造り付けられているのが注目される（図版 49）。この横口部は袖石にはめ込んだ板状の石によって閉塞され、さらに外側には大小の塊石が積み上げられる。この石積の様相をみるといくつかの段階があり、第 1 段階は閉塞石と墓道底面との間に大小の角礫を詰め込んでいる（図版 50—3）。第 2 段階はやや大型の塊石を横位に 1 段積みあげる。この積み上げ面は閉塞板石の上端部、袖石上端とも一致しており、追葬面を示すことも考えられる（図版 50—2）。第 3 段階はこの上に乱雑に小型の塊石を積み上げている（図版 50—1）。竪穴系横口式石室では、追葬に際しては閉塞石の上部だけを除去して搬入する例が多くみられ、6 号墳石室閉塞部でも、閉塞石第 2 段階で石積の様子が変わるのが確認できる。恐らくは追葬の痕跡を示すものと思われる。6 号墳石室は天井石が動かされ、玄室内部は擾乱を受けていたが、石室の遺存状態そのものは良好で竪穴系横口式石室の構造を知るうえで貴重な資料である。石



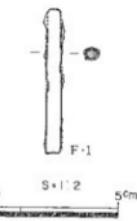
図版196 東宗像 6号墳主体部平面図



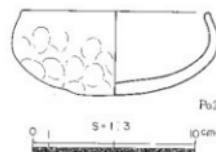
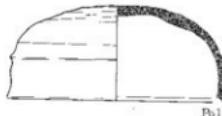
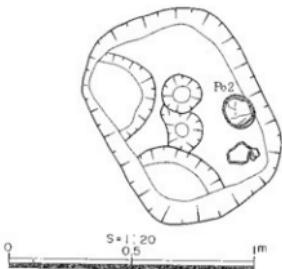
挿図197 東宗像6号墳主体部掘り方実測図

室の構築は長方形掘り方底面の奥壁際に、深さ20cmの掘り込みを設け、奥壁の一枚石を埋め立てている。この奥壁の石は逆三角形の尖頭部を下にして、両脇には支えとなる石が埋め込まれている(図版49)。この奥壁構造は7号墳石室とも共通する。この奥壁に続いて横位に立てた腰石が東西両側壁に4石ずつ積み上げられるが、高さの高い石は少し掘り込み底面に埋め込まれ、上面の高さを揃えている。柱状の両袖石はやや深く埋め立てられている。こうして石室の基礎ができた後、側壁を積み上げているが、横目地が通り、縱目地が互い違いとなって明瞭でないレンガ積みの手法が用いられている。個々の石積は腰石上1段目は控えの長い石を小口積みにして、二段目からは塊石を積みあげている。二段目で、側壁上端は、袖石上端、奥壁側部上端と高さをそろえた石室構築工程の1段階を示している。この上には袖石上も含めて1段の塊石を積み天井石をうけているようである。側壁は下端幅74cm、残存する腰石上2段目の両側壁の幅50cmで、やや内傾してはいるが持ち送りはそれほどきつくはない。天井石は当初は4石であったと考えられ、現状では大きく原位置を動かされた3石が遺存する。奥壁側の2石はかなり大型の石材であるのに対し、袖石上の1石はやや小型の石で、この点、5号墳石棺の蓋石のあり方にも類似している。奥壁石は上端も三角形状を呈しているため、コーナーの1石は側壁と奥壁にまたがるようにおかれ、天井石の重さを支えたようである。玄室内底面は、明黄褐色土が厚さ6~13cmほど敷きめられて床面を形成していたが、

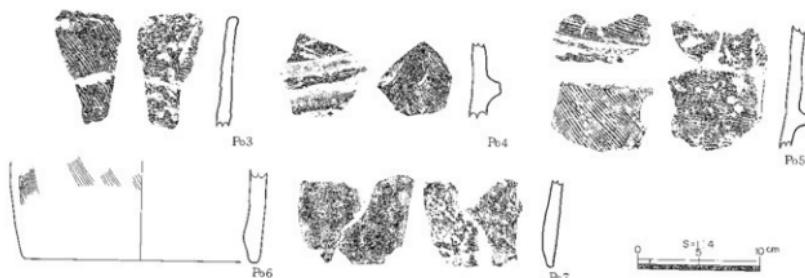
出土遺物 中央付近が擾乱をうけている。徹底した盗掘にあったためと思われるが、玄室内からは混入遺物と思われる石鏡の他は全く遺物は出土しなかった。わずかに墓道理土中から鐵鎌茎部かと思われる棒状鉄製品が出土したのみである。墳丘では、石室墓道東1mの地点で立てられていた円筒埴輪の基部Po 6(挿図200、図版74)が発見されているが、周溝内からの埴輪出土の絶対量が少いため、墳丘を廻繞したものではなく、石室前面に数本が立てられたものと推定される。周溝からは少量の円筒埴輪片Po 3~5・7(挿図200)の他は北東周溝で内面を上にして検出された須恵器环蓋Po 1(挿図199・200、図版74)、Po 1の出土地点から南東60cmのところにある長さ88cm、幅67cm、深さ10cmの隅丸長方形の掘り込み中から土師器壺Po 2(挿図199、200、図版74)が出土している。須恵器环蓋Po 1はやや大型化しており、体部外面の棱は鋭く全体として古い様相を残すが、天井部へラケツリが3%にしか施されず、時 期 ケツリの単位もやや広いことから陶器編年におけるMT 15型式に併行するものと考えた。土師器壺Po 2は当該期の土師器編年観が確立されておらず、



挿図198 東宗像6号墳出土鐵器実測図



挿図199 京宗像6号墳周辺遺物出土状況図



挿図200 京宗像6号墳出土土器実測図 須恵器・土師器・埴輪

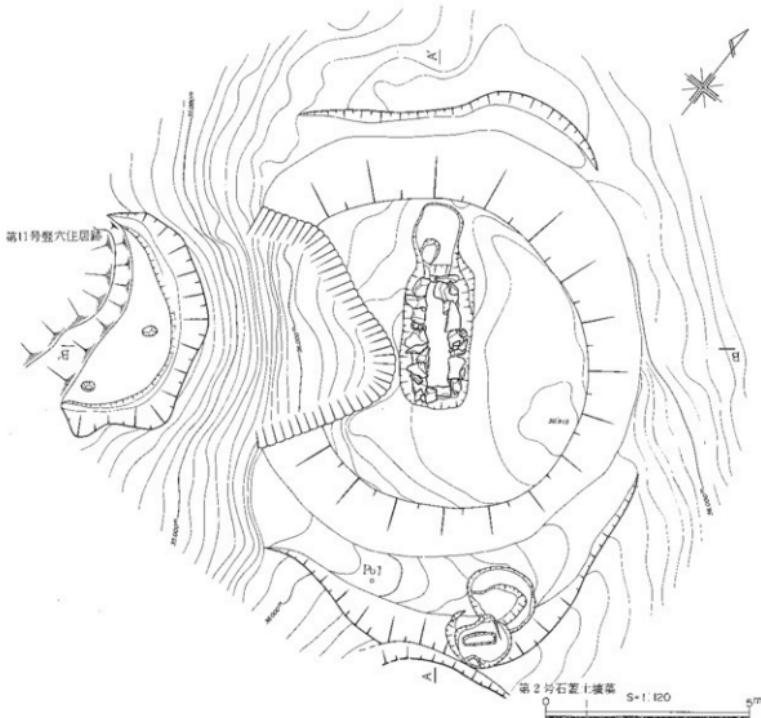
まとめ

判断に苦しむがPo1と同時期の所産と考えて大過ないと思われ、これらの遺物から6号墳は6世紀前葉に築造されたものと考えられる。6号墳は、出土した須恵器から6世紀前葉の築造とした7号墳と同種の竪穴系横口式石室を埋葬施設とするが、石室の構築においては側壁石積の横目地が通るなど新しい要素がみられる。これは石室構築に新しい技術が導入されたことを示唆しており、竪穴系横口式石室が北部九州から伝えられて後、宗像の地に一定期間定着して新たな変容をみせつたことが理解できる。この6号墳の竪穴系横口式石室を在地の箱式石棺の中で解釈した結果生まれたのが5号墳の横口式箱式石棺と考えられる。こうした竪穴系横口式石室に類する石室・石棺の変遷の中で6号墳石室は最も整備された形態といえる。

7. 東宗像7号墳（挿図201～204、図版52～54・74）

位 置 東宗像7号墳は東宗像古墳群A支群の展開する北尾根後線が標高36m付近で平坦面をなして、再び下降していくその突端に立地している。標高は墳頂部で36.915mであり水田比高差は31mをはかる。

墳 丘 6号墳の南東18.5mに位置しており、南側で24号墳（挿図217、図版57）と接し、西側斜面では第11号脛穴住居跡（挿図50、図版8）と重複している。また南東周溝内に、第2号石蓋土壙墓（挿図229、図版62）があるが、7号墳に伴う遺構かどうかは、明らかにし得なかった。墳丘は、頂部がかなり削平をうけ、石室の石材が散乱している状況であり、良好な遺存状態とはいえないが、径10.5mの円墳となる。北側周溝底からの高さは1.1mとなり、東側は墳頂線が低く、最高点で1.4mをはかる。周溝は墳丘を尾根幅一杯に使って築造しているため、東・西側の両斜面側で明確に検出できなかつたが、墳丘土層断面で幅1m、深さ0.15mの溝を確認できた（挿図202）。北西と南東においては比較的良好な状態で幅1m、深さ0.3mの周溝を検出した。特に南東側周溝は、幅が最高2.5mにおよぶ大きな周溝が掘られており、7号墳は周溝を含めると径が13.5mの円墳となる（挿図201）。尾根頂部平坦面の旧地形は、東から西側へ緩く傾斜しており、西側に盛土を施して、墳丘基盤を水平に整え、地山まで穿たれた掘り方に埋葬施設を構築した後、さらに盛土を施し墳丘を形成したものと推定される。現



挿図201 東宗像7号墳墳丘実測図

1. 表土
 2. 黄灰褐色土
 3. 黄茶褐色粘土
 4. 深黄茶褐色粘土
 5. 明茶褐色土
 6. 深茶褐色土
 7. 暗褐色土(黑色土を含む)
 8. 暗灰色土
 9. 暗黄褐色土(黑灰色土を含む)
 10. 黄茶褐色土(赤褐色ブロックを含む)
 11. 黄茶褐色土(赤褐色ブロックを含む)
 12. 灰色土
 13. 淡黄褐色土
 14. 明茶褐色土
 15. 深褐色土
 墓塙埋土
 墓塙
 墓塙或土

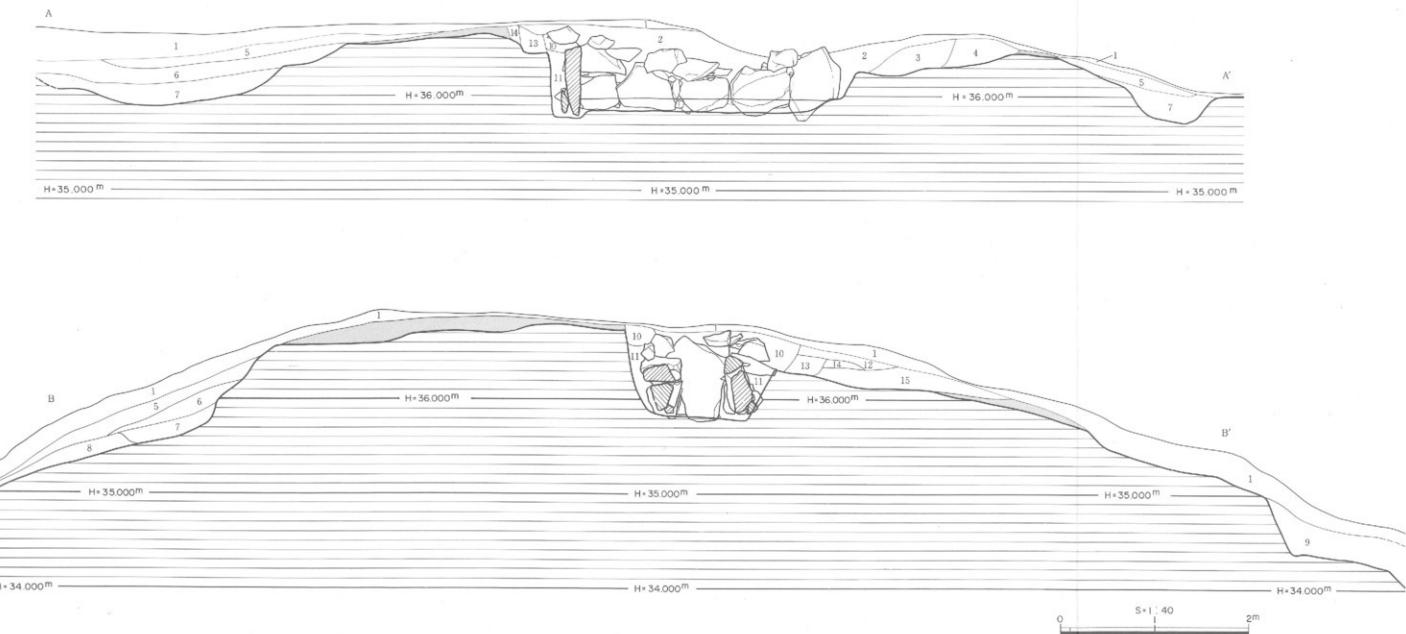


插图202 東宗像7号墳丘土層断面図

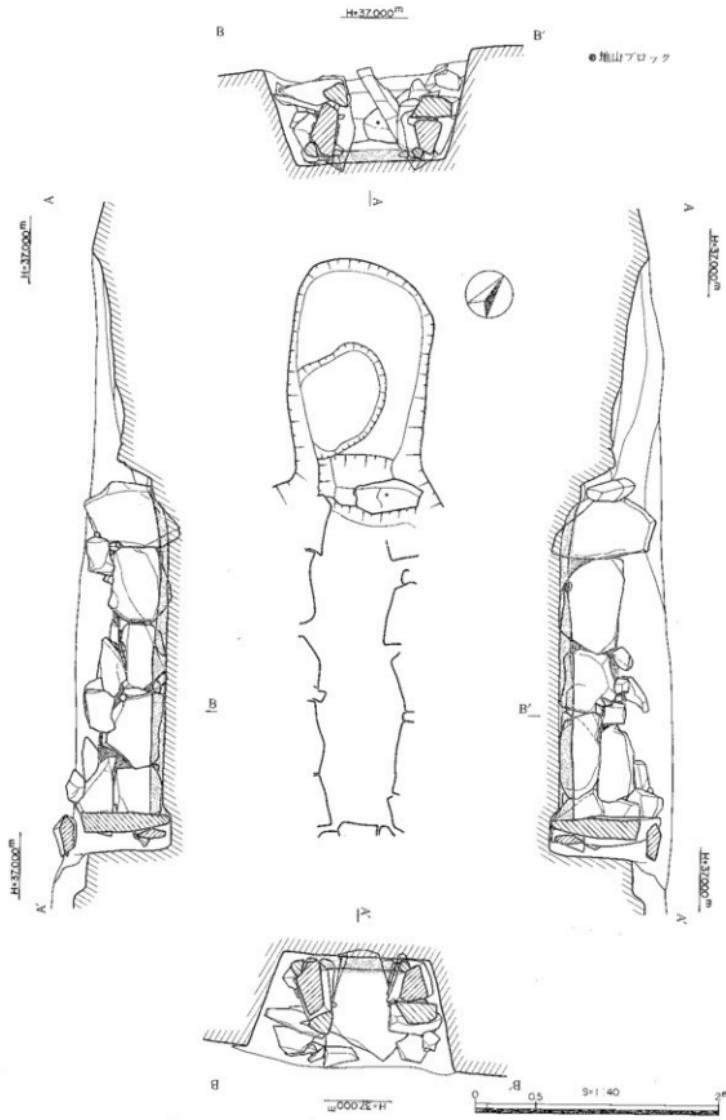
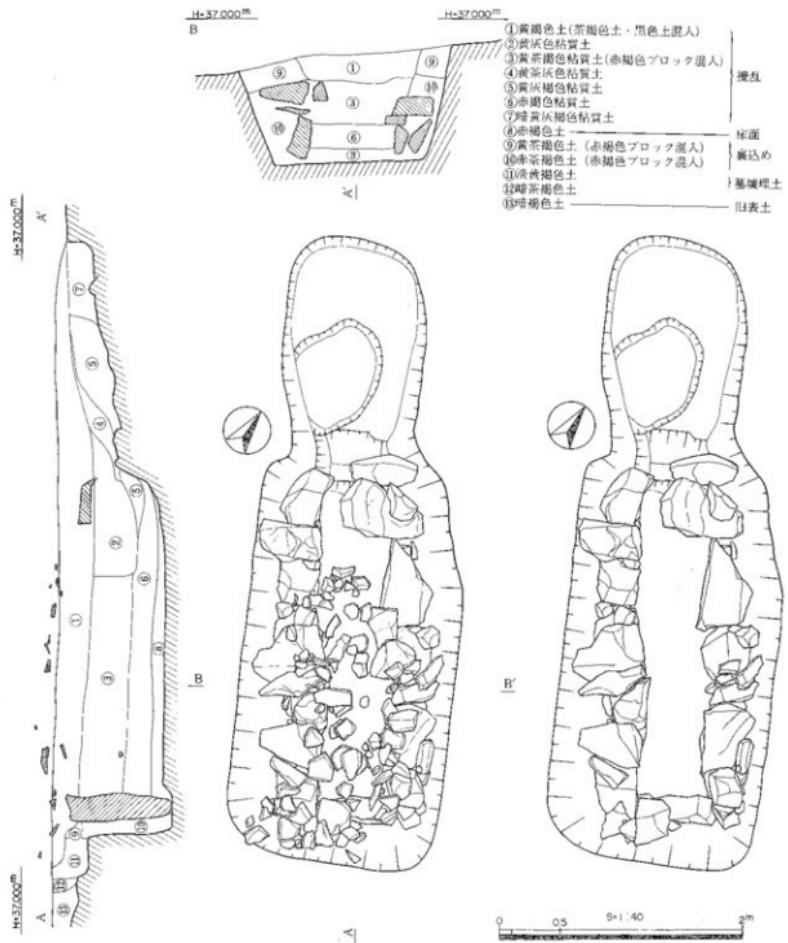
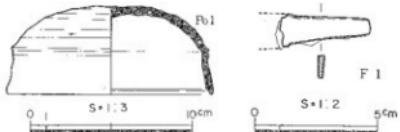


図203 東大寺像 7号塔主体部実測図



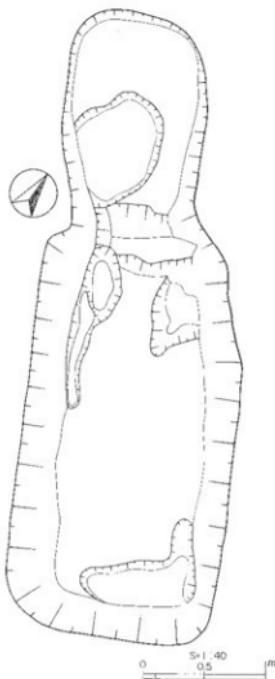
插図204 東宗像7号墳主体部検出状況及び土層断面図

状では、旧表土層（插図202、スクリーントーン）の深さまで削平されており、西側で厚さ30cm前後の盛土を確認したのみである（插図202）。旧表土を切り込んで掘られた主体部掘り方は、長さ330cm、幅173cmの長方形を呈し、深さは検出面から94cmをはかる。北側短辺には長さ190cm、幅120cmの墓道が掘り込まれ、掘り方に接続している。主体部埋葬施設は、所謂「竪穴系横口式石室」であり、6号墳石室と同じタイプであった（插図203）。玄室規模は内法で長さ250cm、奥壁際幅が50cm、中央部60cmをはかる。6号墳石室と比較しても、玄室高80cmは一致しており、この上に天井石がのせられた平面プランものと思われる。石室平面プランは狭長な長方形であるが、腰石面が非常に不揃いな両袖式石室であ



插図205 東宗像7号墳出土遺物実測図 須恵器・鉄器

- 横口部** 横口部は、両側壁端に柱石を立てて袖石とし、地山を掘り込んだ墓道が連接している。横口部の段は6号墳同様地山を掘り残して造り付けられており、床面からの高さ28cmをはかるが、地山ブロックを削り取らず、そのまま使用している(插図204)。横口部において板石、塊石等の閉塞施設は全く検出されなかった。墓道も擾乱を受けており、その際取り除かれたものと思われる。7号墳石室は著しく破壊されているが、石室下半が辛うじて遺存しており、同タイプの6号墳石室と比較することができる。7号墳石室の構築は、長方形掘り方底面の奥壁際に深さ8cmの掘り込みを穿ち、奥壁の一枚石を埋め立てて両脇に支え石を埋め込んでいる。側壁は奥壁をはさみ込むように横位にして立てた腰石が右側に4個複数されているが、6号墳石室腰石に比べてやや大きい石を用いており腰石上端の高さは揃っていない。両袖石は掘り方底面に10cm程埋め立てられていたが、調査時には東側袖石が大きく内側へ倒れ込んでいた。こうしてできた基礎の上に挖えの長いやや大ぶりの塊石を積み上げており、大きさもまちまちで横目地が通らず、石積みがやや雑な印象を受ける。奥壁際では腰石上に2石を積んだところで奥壁一枚石の高さに達しており、この上に天井石をのせたと考えられる。天井石らしい石は周辺からは全く検出されず、運び去られたものと思われる。
- 構築** 石室は著しく破壊されているが、石室下半が辛うじて遺存しており、同タイプの6号墳石室と比較することができる。7号墳石室の構築は、長方形掘り方底面の奥壁際に深さ8cmの掘り込みを穿ち、奥壁の一枚石を埋め立てて両脇に支え石を埋め込んでいる。側壁は奥壁をはさみ込むように横位にして立てた腰石が右側に4個複数されているが、6号墳石室腰石に比べてやや大きい石を用いており腰石上端の高さは揃っていない。両袖石は掘り方底面に10cm程埋め立てられていたが、調査時には東側袖石が大きく内側へ倒れ込んでいた。こうしてできた基礎の上に挖えの長いやや大ぶりの塊石を積み上げており、大きさもまちまちで横目地が通らず、石積みがやや雑な印象を受ける。奥壁際では腰石上に2石を積んだところで奥壁一枚石の高さに達しており、この上に天井石をのせたと考えられる。天井石らしい石は周辺からは全く検出されず、運び去られたものと思われる。
- 出土遺物** 床面はつき固められた赤褐色土で築成されていたが、擾乱は床面に及んでおり、玄室内から遺物は全く出土しなかった。埴輪・葺石等の外表施設も全くみられなかった。7号墳の調査における出土遺物は、刀子F1と須恵器壺蓋Po1(插図205、図版74)のみである。F1は主体部石室壁裏込め土中から出土した鉄製刀子茎部残片で、茎部長さ3.2cmの窮屈となると思われる。Po1は周溝南東埋土中から出土したもので、稜は断面三角形で鋭く、口縁内面にも傾する段をもち、天井部は%をヘラケズリする。7号墳は、周溝出土のPo1が陶邑編年MT 15型併行と考えられることから6世紀前葉の築造と考えられる。6号墳と7号墳の石室を比較すると6号墳石室の方が石積みも整然としており、新しい石室構築手法も採用されていることから、後出する石室と考えられる。東宗像古墳群の中で7号墳石室に先行する「堅穴系横口式石室」が存在するか否かは明らかでないが、横口部の段の処理などにおいて祖型たる北部九州の堅穴系横口式石室により近い形態をもつ石室が存在する可能性は高いと考えられる。
- 時期**



插図206 東宗像7号墳主体部掘り方実測図

8、東宗像 8号墳（挿図207、図版33）

位 置 東宗像 8号墳は東宗像古墳群A支群の展開する北尾根最高部に占地し、標高は墳頂部で65.8mで水田比高差は60m余りになる。墳丘は東側を道によって大きく削られており、現状では橢円形を呈している。北側がなだらかに降っており墳幅線が把みにくいが、復元径12m、高さ1m前後の円墳と考えられる。墳頂部やや西よりに盗掘坑が開いており、石材が散乱していることから、埋葬施設は石棺あるいは石室と考えられる。西側斜面には天井石か蓋石と思われる大きな石が転落している。

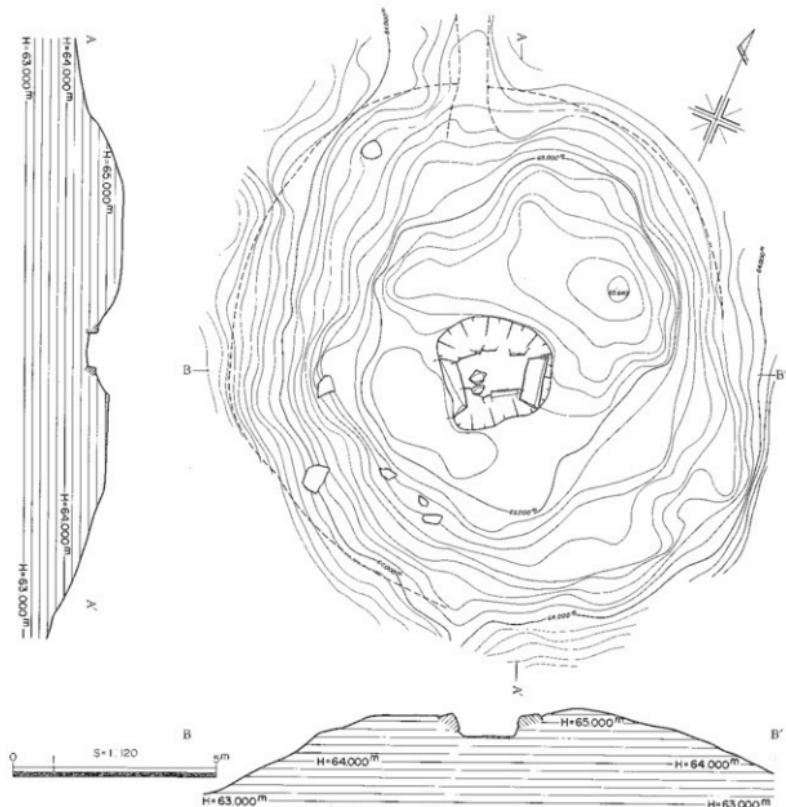


挿図207 東宗像 8号墳墳丘実測図

9、東宗像 9号墳（挿図208、図版34）

位 置

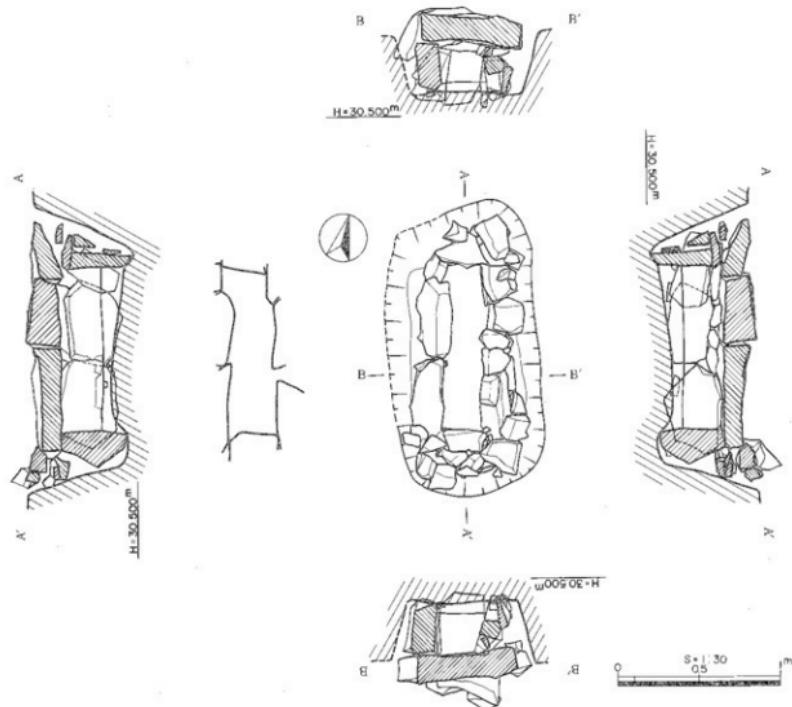
東宗像 9号墳は東宗像古墳群のA支群に属し、北尾根の最高地点に立地する8号墳の南11mに位置している。墳頂部の標高は65.64mで、水田比高差59.5m余りをはかる。9号墳より南は大きな尾根の鞍部となっており、9号墳はA支群の南端にあって地形的に尾根の違うB支群とは分離される。墳丘の遺存状態は良好で、推定径13m前後の円墳と思われる。高さは北側で1.2m、墳裾線の下がる西側で1.8mをはかる。頂部中央に盗掘坑があり、天井石を取り除かれた石室が露出し墳丘には石材が散乱している状態で、南側裾部には天井石らしい大石が転落している。露出部分でみると石室はN=60°～Eに主軸をとる割石積の石室であり、側壁上端で幅70～80cmをはかる狭長なプランと考えられる。石室の全容は明らかでないが、割石積で狭長なプランをとることから6号墳石室と同様な「堅穴系横口式石室」に類する石室である可能性が強い。埴輪・葺石等の外表施設は確認できず、出土遺物も全く知られていない。



挿図208 東宗像 9号墳 墳丘実測図

10. 東宗像23号墳（挿図209～213、図版55・56・74）

位 置 東宗像23号墳は、北へのびる尾根において標高35m付近の平坦面から北西に緩やかに下る緩斜面に立地している。狭い尾根上に23号墳と西に接する3号墳が並んだようになっている。北西に3号木棺墓、西に3号墳と接しており、1号箱式石棺墓の北6m、4号墳の北西3mに位置している。標高は墳頂部で31.40mとなり、水田比高差25.4mをはかる。墳丘は傾斜のため、封土をほとんど流失しているが、さらに墳丘中央から西側にかけて、高圧鉄塔建設時のアンカーの跡とみられる4.8×2.8mの長方形で深さ1m以上の堅坑が掘られているため、墳丘の遺存状態は極めて悪い。墳丘製作は旧地表（挿図210、旧表土・黒褐色土層ースクリートーン）を墳丘基盤面としているが、現状ではその上に10cm程の盛土しか残存していない。周溝は、傾斜の高い南東側に幅0.8m、深さ0.3mの周溝が弧状に検出されており、北側は土層観察では幅0.8m、深さ0.1mの溝がみえるが平面的には追求し得なかった。この北側と南側の周溝からみて、23号墳は径4.7m前後で低い墳丘をもち、周溝を含めると径6.5mになる円墳であったと考えられる（挿図210）。主体部も前述した堅坑により西側の掘り方を失っているが、長さ180cm、幅90cm、深さ50cmの隅丸長方形の掘り方に納めた箱式石棺である。幸いにも石棺自体は、破壊されておらず、石棺は両小口に板石を立てそれをはさみ込むように、両側石、各々3枚の板石を立てている。これらの板石は掘り方底面壁際に浅い掘り込みをつくり、それに埋め立てている。



挿図209 東宗像23号墳主体部実測図

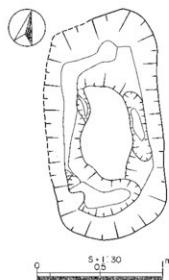
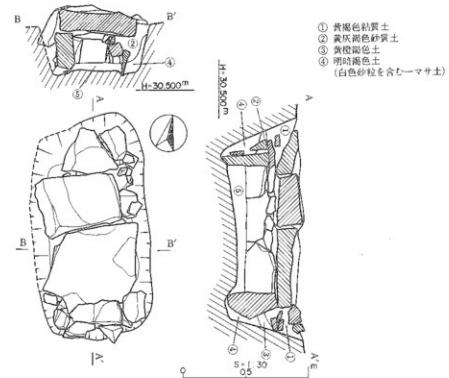


図211 東京像23号墳主体部検出状況
及び土層断面図

図212 東京像23号墳主体部検出状況
及び土層断面図

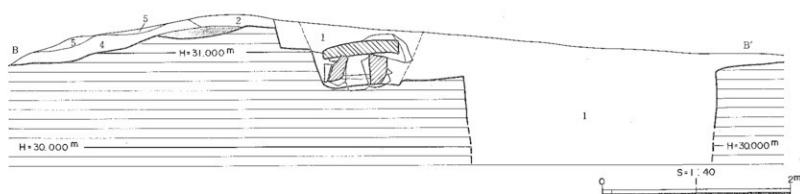
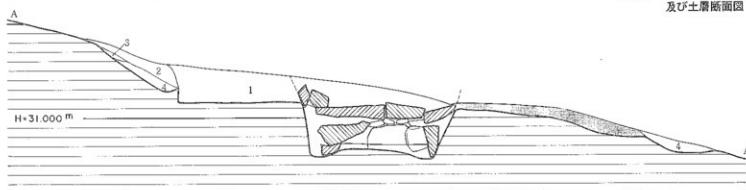
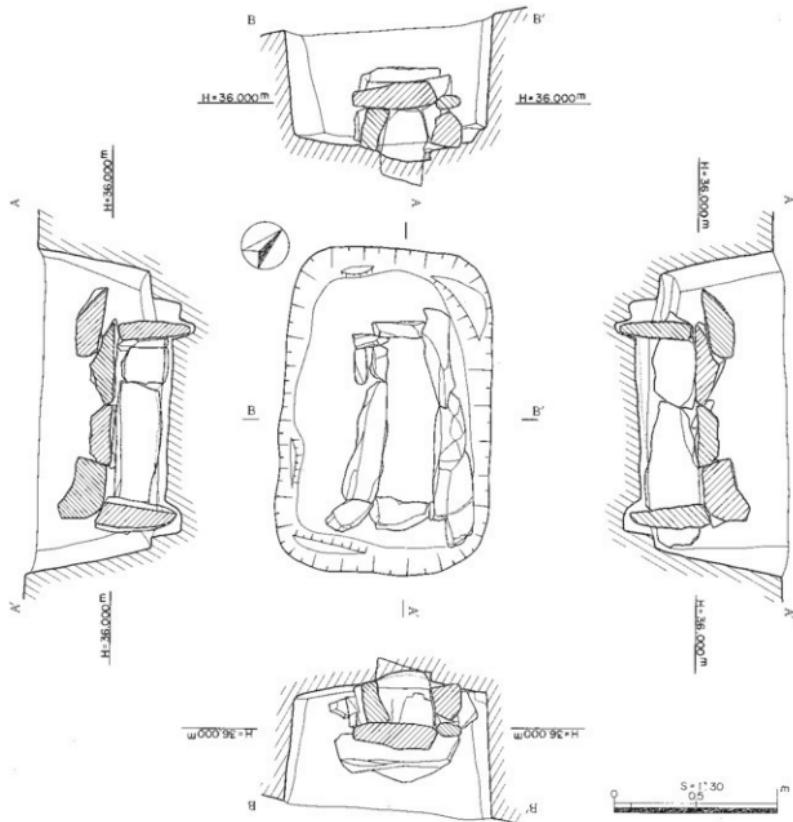


図210 東京像23号墳検出状況及び土層断面図

1. 明黄褐色土 _____ 植生地
2. 暗黄褐色土
3. 暗黄褐色土
4. 明黄褐色土(暗黄褐色土を含む)
5. 黄灰褐色土

特徴的なのは、これらの基石の上端が石材の大小により揃わないと
め、北側小口石と東側壁北側 2 石上に割石を小口積みして、上端の
高さを揃え、この上に 3 枚の蓋石をのせている。さらに両小口石裏
側には、裏込状に割石・塊石がつめられている。石棺の規模は内法
で、長さ 100cm、北側幅 28cm、南側幅 30cm である。深さは、地山面か
ら 30cm をはかるが掘り方底面に淡黄褐色土を入れてつき固め床面と
しており、床面から蓋石までの高さは 25cm をはかる小規模な石棺で
ある（挿図 209）。遺物は、棺内外からは何も検出されなかった。周溝から、須恵器环蓋 Po 1（挿図 213、
図版 74）が検出されており、陶邑田辺編年 MT 15 型式に併行すると考えられることから、23 号墳の築
造は 6 世紀前葉と考えられる。

11. 東宗像 24 号墳（挿図 214～217、図版 57・58）



挿図 214 東宗像 24 号墳主体部実測図

位 置 東宗像24号墳は、東宗像古墳群A支群が展開する北にのびる尾根が、標高36mの高さで幅の狭い平坦面をつくり、北側で再び下っていく突端に位置する7号墳（挿図201、図版52）のすぐ南に接しており、25号墳（挿図218、図版59）の北西8m、第2号石蓋土壙墓（挿図229、図版62）の北西3mに位置する。標高は最も高いところで36.59mであり、水田比高差30.5m程度である。墳丘の盛土は全く検出されず、北側と南東側で周溝の一部を検出したのみである。墳丘は後世の削平により失われたとも考えられるが、当初からあまり高い墳丘は有していないかったと考えられる。南東で検出した周溝は、幅1m、深さは0.1mである。北側は7号墳の周溝と重複しているが、切り合い関係等は認めなかった。

周 溝 主体部この周溝の位置からみて、24号墳は周溝を含めて径6.5mの円墳であったと考えられる。主体部は墳丘中央の地山に穿たれた長さ200cm、幅130cm、深さは70cmの隅丸方形の墓壙内に据えられた主軸をN—47°—Wにとる箱式石棺である。石棺は墓壙底面に、さらに長さ150cm、幅40～55cm、深さ15cmの掘り方を掘り、その両短辺を10cm掘り込んで縦長の小口石を埋め立てている。この小口石をさむように、東・西各々二枚の板状の厚い側石が二段掘の掘り方の縁に据えられており、隙間のあく南隅と西隅は外から石を楔状にはめこんでいる。天井石は3枚であるが天井石上に3枚の大型の石を含めて、多数の塊石が天井石を覆うようにして積み重ねられていた。石棺周囲の土層をみると、小口石、側石を立てた後に裏側に埋め込んだ⑦・⑧層の上に明褐色の粘質土層（⑥層）があり明瞭に区別できた。この⑥層の高さは側石上端にあたり、棺身を構築し終えた段階であり、遺体を埋葬し、蓋石をかぶせて掘り方を埋める間の間層と考えられる。石棺は内法で長さ100cm、北西側幅23cm、南東側幅35cmで南東側の幅が広く、南東側が埋葬頭位と考えられる。高さは二段目掘り方底面から天井石下端までが35cmであるが、棺内に流入していた土を掘り下げた時、地山面から7～8cm上で黄褐色のややしまった層をみとめている。これを床面と考えれば高さは30cm位であるが、それでは二段目の掘り方を掘った理由が明確にならない。24号墳主体部は小規模な箱式石棺でありながら、深い墓壙の底面に据えられており、丁寧に埋葬されていた点が注目される。遺物は棺内外・墳丘周辺も含めて一点も検出されなかつた。

規 模

12、東宗像25号墳（挿図218～221、図版59）

位 置 東宗像25号墳は東宗像古墳群A支群の展開する北尾根稜線が標高36m付近で平坦になるあたりに立地する3基の古墳の南端に位置する。24号墳（挿図215、図版57）の南東8m、26号墳（挿図223、図版60）の北7mに位置しており、北4.5mには第3号石蓋土壙墓（挿図230、図版63）がある。標高は最も高いところで36.57mであり、水田比高差は30m前後をはかる。墳丘は24・26号墳同様に全く盛土が検出されず、南側に弧状に残存した周溝の一部を検出した。周溝は検出面で幅1.2～0.9m、深さ0.1m足らずをはかる。墳頂線が明確にならないため周溝から復原すると、26号墳は周溝を含めて径5.5m程の円墳であったと思われるが、築造当初からあまり厚い盛土は有さない低墳丘の小規模古墳であったと推定される（挿図218）。主体部は墳丘中央に穿たれた長さ225cm、西側幅140cm、東側幅165cmの隅丸梯形の墓壙に据えられた組合せ箱式石棺である（挿図219）。この25号墳と26号墳の主体部は、他の古墳の主体部が主軸を尾根線にほぼ平行させていたのに対して尾根線に直交しており、25号墳の箱式石棺は主軸をN—75°—Eにとっている。墓壙は上縁から30cm下ったところで幅10cm程の段をもち、これが東辺を除いて造り付けられている。この段からさらに10cm（南辺は35cm）下がったところが墓壙底面である。この底面の四辺に添って掘り込みを設けており（挿図220）、まず小口石を立てて、それを挟み込むように側石が組まれている。これら的小口石は墓壙底面の掘り込みに埋め立てられているが、側石は設計の変更によるものか掘り込みに埋め立てられていない。側石は南・北壁とも2石の大型石材を横位に立てて用いており、石棺の側石というより石室の腰石に据えるような用い方である。

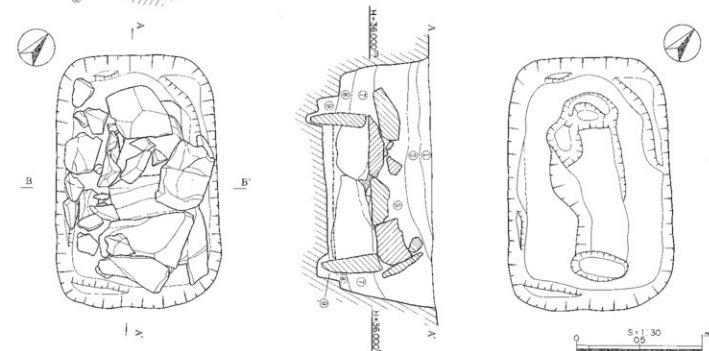
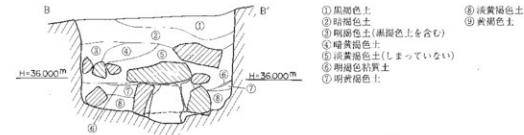
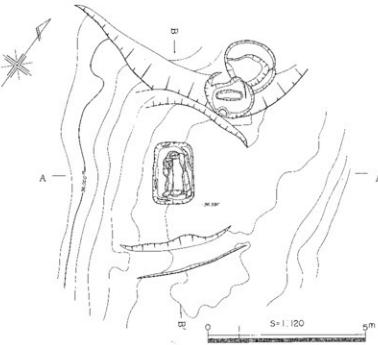


図216 東宗像24号墳主体部検出状況及び土層断面図

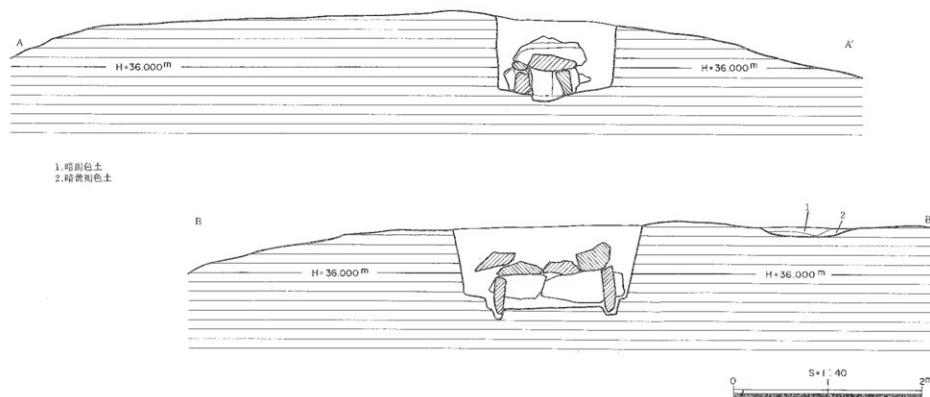
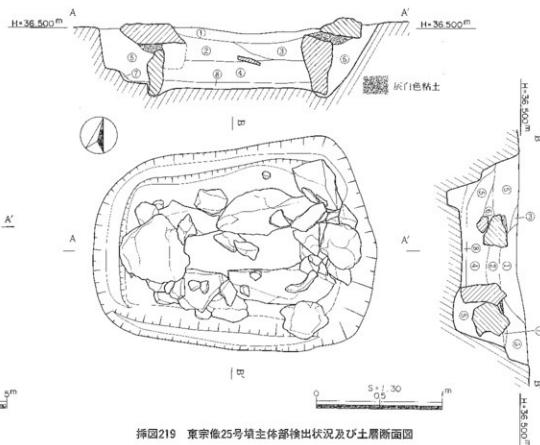
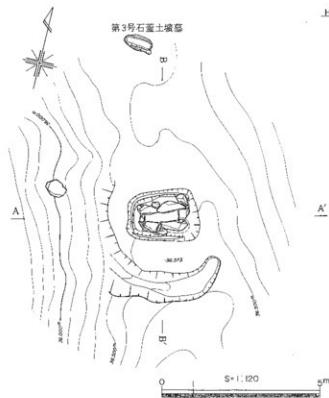
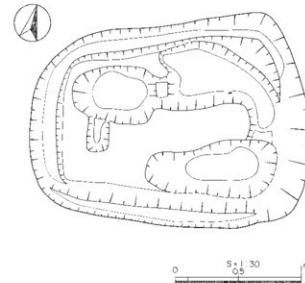


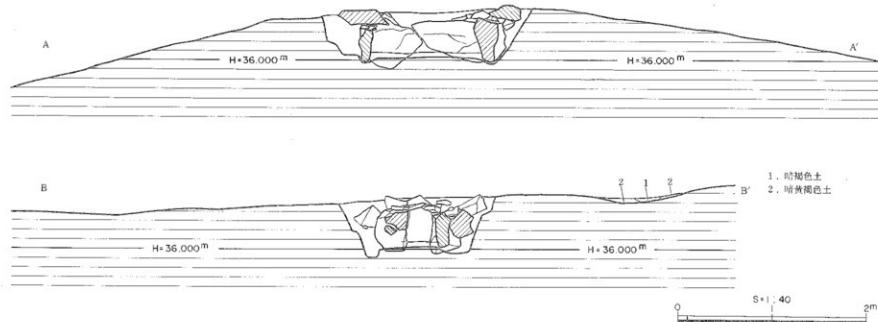
図215 東宗像24号墳填丘実測図及び土層断面図



插図219 東宗像25号墳主体部検出状況及び土層断面図

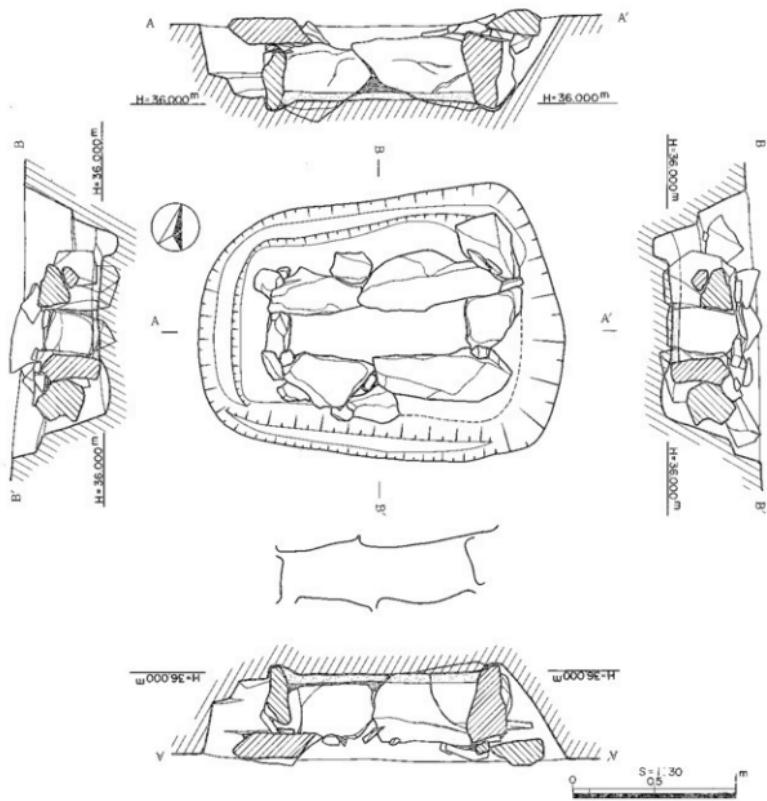


插図220 東宗像25号墳主体部掘り方実測図



插図218 東宗像25号墳墳丘実測図及び土層断面図

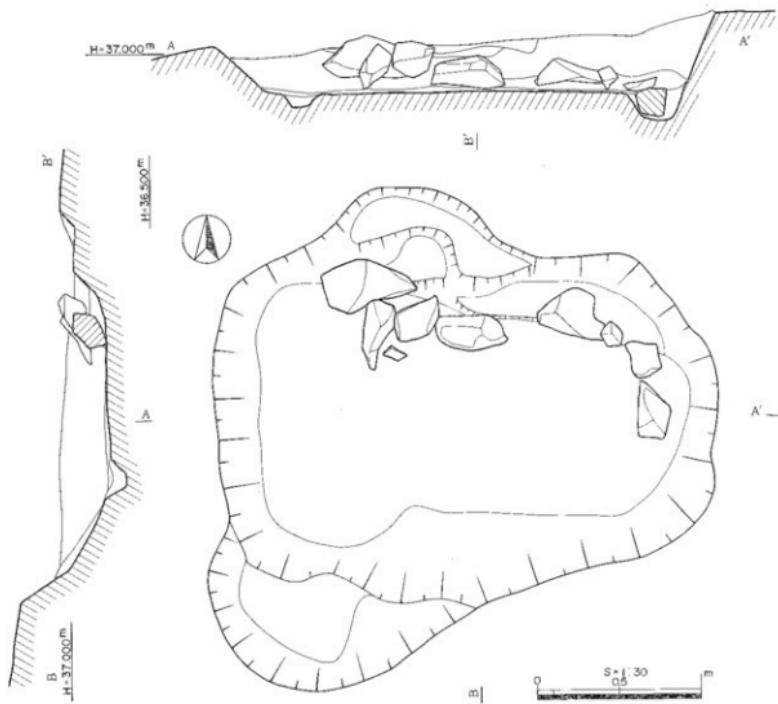
側石・小口石の隙間には楔状に小石が詰め込んであり、南側壁の裏側には側石を支えるような塊石が、掘り方との間に差し込まれている。蓋石は盜掘により取り除かれており、西側の1石しか残されていないが、小口石との間に板石が置かれており、東側小口石上にも数個の石が積まれている。石棺内は擾乱を受けているが、両小口辺は小口石と小口石上の割石、さらに蓋石の間に目張りの灰白色粘土が充填されていて(挿図219、スクリーントーン)、これらの石積みが原位置を保っていることがわかる。板状の割石は蓋石をうける側石との高さを調整するためのものと考えられ、23号墳主体部石棺でも確認されている。石棺の内法は長さが115cm、幅が西側で28cm、東側で33cmをはかる。深さは西側において蓋石と墓壇地山底面との間は35cmあるが、土層観察では石棺内底面に厚さ5cmの黄灰色土(挿図219、⑥層)が敷きつめられており、これを床面と考えると深さは30cm前後となる。遺物は棺内外及び墳丘、周溝内からも全く検出されなかった。



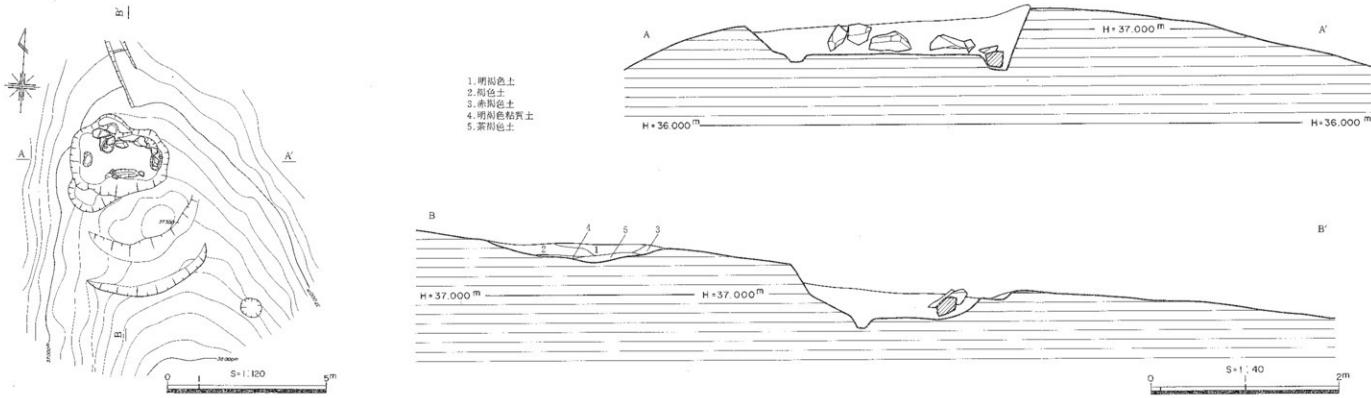
挿図221 東宗像25号墳主体部実測図

13、東宗像26号墳（挿図222～225、図版60）

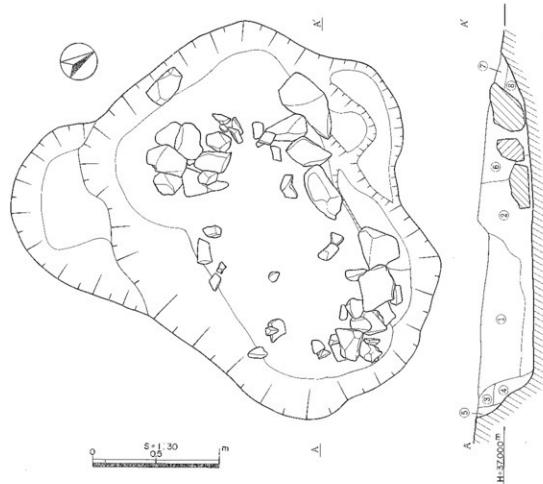
位 置 東宗像26号墳は東宗像古墳群A支群が展開する北尾根稜線が標高36m付近で平坦になる直前の緩斜面に立地しており、25号墳（挿図218、図版59）の南7mに位置している。標高は37mで、水田比高差31m前後である。ここから尾根は8号墳（挿図207、図版33）の位置する標高65.80mの北尾根最高地点まで急な斜面が続く。途中1ヶ所に古墳らしい高まりが存在するが、位置的にみてA支群の中でも8・9号墳を除く北のグループの南端、最高地点に位置している。墳丘は24・25号墳同様全く盛土がみとめられず、僅かに南側で弧状にめぐる周溝の一部が検出された。周溝は検出面で幅1.8m、深さ0.2mしか残存していない。北側で明確な埴縁線が認めないが、26号墳は周溝を含めて径約8.5mの円墳であったと考えられる（挿図223）。主体部は、地山に穿たれた長さ310cm、幅190cm、深さ50cmの主軸をほぼ東西にとする墓壙内に構築された小石室（石棺）であったと考えられる（挿図222）。墓壙底面には両小口部辺に掘り込みがある他、南側にも掘り込みがみられた（挿図225）。東側の掘り込みには四角い石がすっぽりと埋め込まれており、この上に壁体が築かれたものとも考えられる。残存する石材の大きさ、出土状況からみて、箱式石棺ではなく、塊石積みの竪穴式小石室に類する石室が築かれていたと想定される。遺物は主体部及び墳丘、周溝から全く検出されなかった。



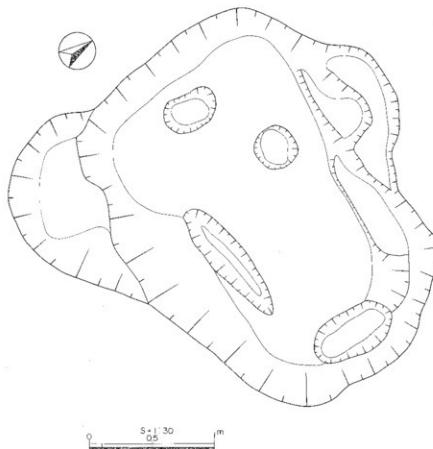
挿図222 東宗像26号墳主体部実測図



插図223 東宗像26号墳実測図及び土層断面図



插図224 東宗像26号墳主体部検出状況及び土層断面図



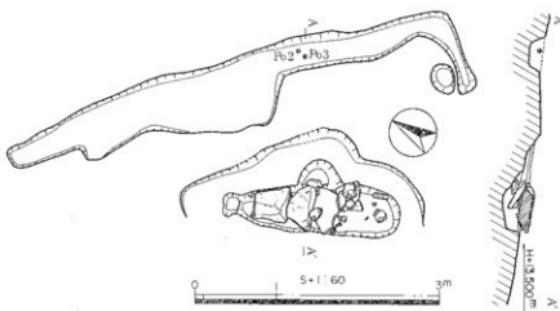
插図225 東宗像26号墳主体部掘り方実測図

第3節 古墳以外の埋葬施設

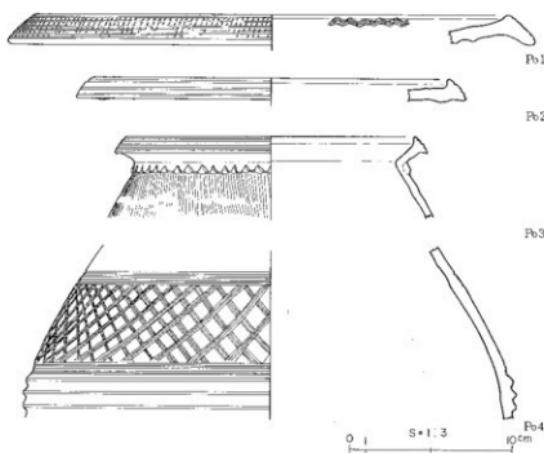
1. 第1号石蓋土壙墓（挿図226～228、図版61・75）

位 置

本遺跡調査区西斜面北西側の各時代の遺構が存在するゆるやかな傾斜地に位置する。第7号竪穴住居跡の西側にあり、北側に第1号竪穴住居跡（挿図9、図版4）がある。第7号竪穴住居跡（挿図39、図版7）側に、挿図226にあるように同時期に掘穿されたと思われる幅45cm内外の平面逆L字状の溝が存在する。土壙は、ゆるやかな斜面山側を削り出してつくり出した平坦面を掘りこんでいる。南北方向に主軸をもち、その平面形は長楕円形で、長径217cm、短径63cm、深さ25cm内外をはかり、断面形U字状を呈する。内部において、木棺痕跡等はみられない。この土壙の上縁に4個の1辺50cm大の割石出土遺物等を配し隙間に板状の割石を詰め蓋をしている。土壙内部からは、弥生土器の細片が数点検出されている他は、遺物は検出されていない。しかし削り出した平坦面よりPo1を検出しており、また山側の溝状の遺構よりPo2・3を検出していることから、この石蓋土壙墓および溝状の遺構は弥生時代中期後葉に築造されたものとみてよからう（挿図227、図版75）。しかし、この溝状の遺構が同時期の石蓋土壙墓を含んで墓域を画すといった意図、あるいは石蓋土壙墓に伴う施設であるか否かは、主軸方向が石蓋土壙墓と異なることからも明確でない。



挿図226 第1号石蓋土壙墓遺構配置図



挿図227 第1号石蓋土壙墓出土物実測図・弥生土器

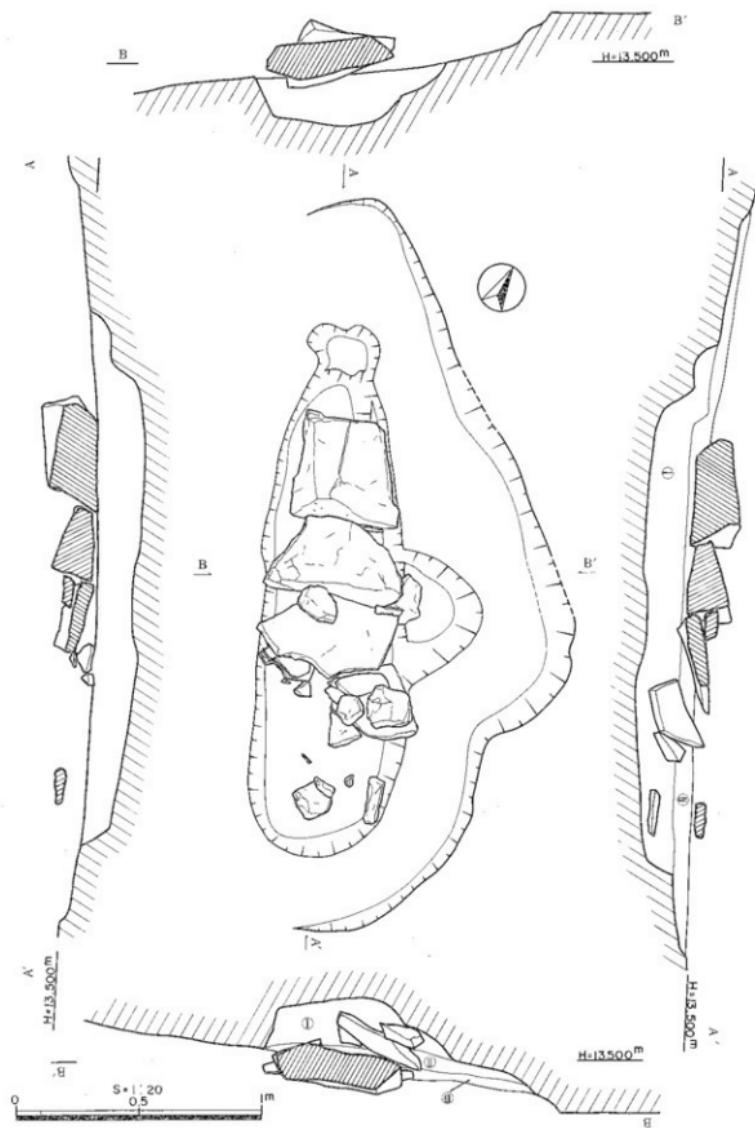
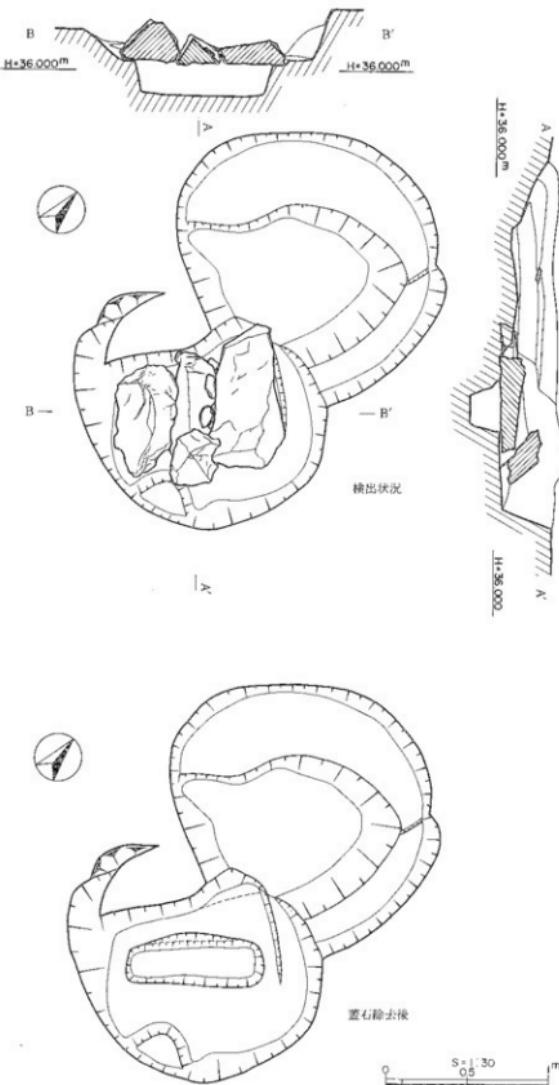


插图228 第1号石盖土壤基实测图

2. 第2号石蓋土壙墓（挿図229、図版62）

第2号石蓋土壙墓は北尾根棱線の標高36m付近に立地する東宗像7号墳（挿図201）の南東周溝外

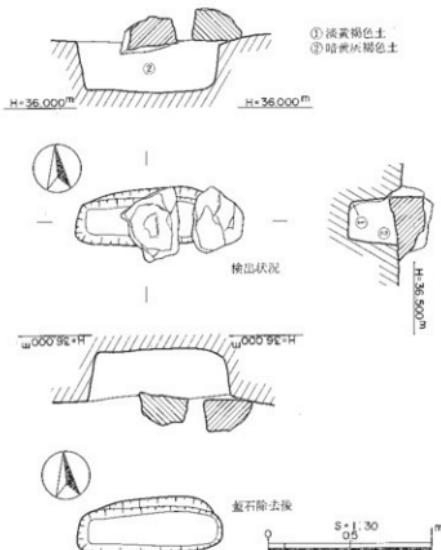


挿図229 第2号石蓋土壙墓実測図

側肩部で検出された。この地点は7号墳と24号墳が切り合っており、24号墳の墳裾にもあたる（図版57）。東11mには第11号竪穴住居跡（挿図50、図版8）、南東9mには第3号石蓋土壙墓（挿図230、図版63）が位置している。本土壙墓は長径150cm、短径115cm、深さ30cmの長楕円形掘り方底面のやや西側に寄せて、主軸をN-47°Eにとる長さ85cm、北側幅30cm、南側幅24cm、深さ20cmの長方形土壙を設けている。この土壙上縁に架けて3枚の蓋石が置かれており、北側の蓋石は厚さ15cm前後の板状の石であるが、残る2石は断面三角形の三角柱状の石で、中央の蓋石を置いた後、両側の石をのせている。隙間に板状の割石を詰め、粘土を充填して密閉しており、北側には蓋石にもたせかけて人頭大の塊石が置かれていた。また、土壙墓北側に径170cm前後の不整円形の不明二段落ち込みが検出された。本土壙墓は全く遺物が出土せず、時期が確定できないが、土壙の形態規模が2号墳前方部掘削第1埋葬（挿図160、図版36）と酷似することから古墳時代後期の遺構と考えられる。

3. 第3号石蓋土壙墓（挿図230、図版63）

位 置 第3号石蓋土壙墓は尾根接線の平坦部に立地している。東宗像24号墳（挿図215、図版57）、の南東3m、25号墳（挿図218、図版59）の北3.5mに位置しており、北西9mには第2号石蓋土壙墓（挿図229、図版62）がある。本土壙墓は地山に長さ90cm、幅30~35cm、深さ30cmの長方形土壙を穿ち、土壙上縁に架けて幅40cm、厚さ20cm前後の四角い石を蓋石としてのせている。現存する2石のうち西側の蓋石は原位置をずれ、少し土壙内に落ち込んでいる。遺物は全く出土しなかったが、土壙の規模は2号墳前方部掘割り第1埋葬（土壙墓・挿図160、図版36）や第2号石蓋土壙墓とほとんど同じであり、本土壙墓も古墳時代後期の遺構と考えられる。



挿図230 第3号石蓋土壙墓実測図

4. 第1号木棺墓（挿図231~235、図版63・75・76）

位 置 第1号木棺墓は西側斜面中腹の調査区中央部に位置する第14号段状遺構（挿図90、図版14）の中にある。第14号段状遺構は調査前の地表観察でも容易に確認できた幅19mにも及ぶ大きなテラスであり、弥生時代中期～古墳時代後期の遺構が複合していた。第1号木棺墓はその中央付近に位置し、第3号

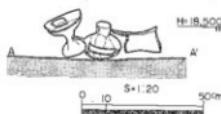
掘立柱建物跡（挿図106、図版16）を切って造られている。第12号竪穴住居跡（挿図54、図版8）の北、第1号土器棺墓（挿図244、図版66）の東に接しており、標高は18mで水田比高差12m前後をはかる。第1号木棺墓は長さ370cm、北側幅153cm、南側幅137cmの主軸をN



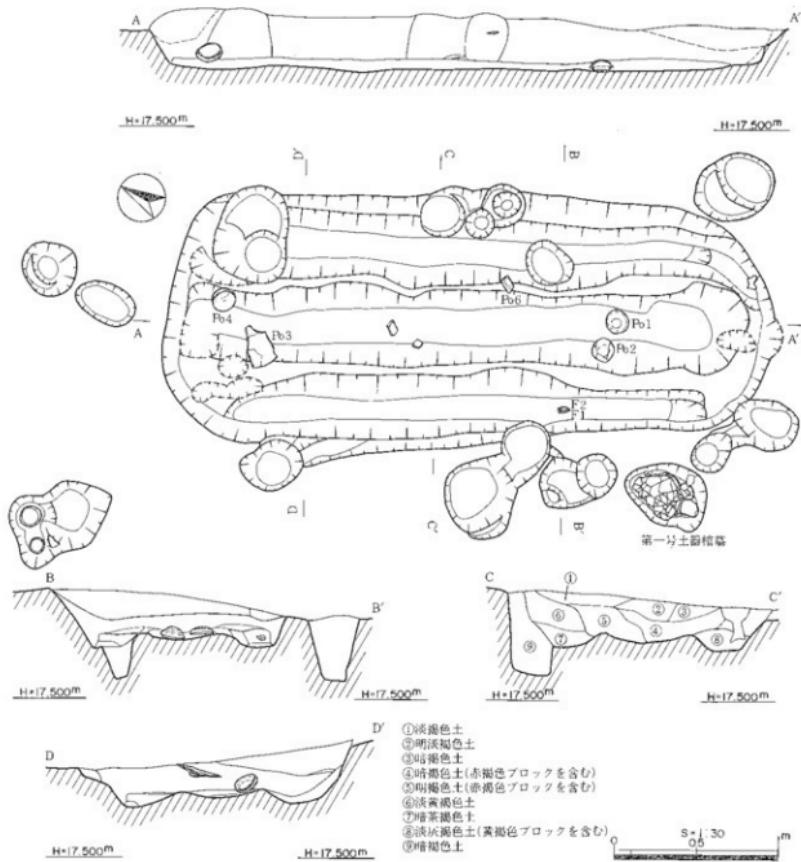
挿図231 第1号木棺墓遺物出土位置図

規 模 —25°—Wにとる長楕円形に近い隅丸梯形の墓壙の中に東西両長辺に沿って長さ295cm、幅20~40cmの溝状の掘り込みを設けることにより、墓壙中央部に長さ340cm、幅45cmの棺床を造り付けている。棺床は地山を削り残して造られており、断面U字状を呈する。確認面からの深さは棺床中央部で26cm、両側の溝底面で33cmをはかる。このように狭長で、

出土遺物 断面U字状を呈する棺床からみて、長さ3m前後の削竹形木棺が直葬されていたものと考えられる。棺内の出土遺物は南端から50cmのところに棺床面に密着して、須恵器环身Po1と土師器環?Po2(挿図234、図版63・75)が伏せた状態で出土しており、やや位置がずれて不揃いであるが土器枕として置かれていたものと思われる。南側が頭位とすれば左先にあたる北端付近には土師器塊Po4が置かれており、13cm上層からは壺Po3(挿図234、図版75)が横にねかせた状態で上半を失



挿図232 第1号木棺墓遺物出土状況図



挿図233 第1号木棺墓実測図

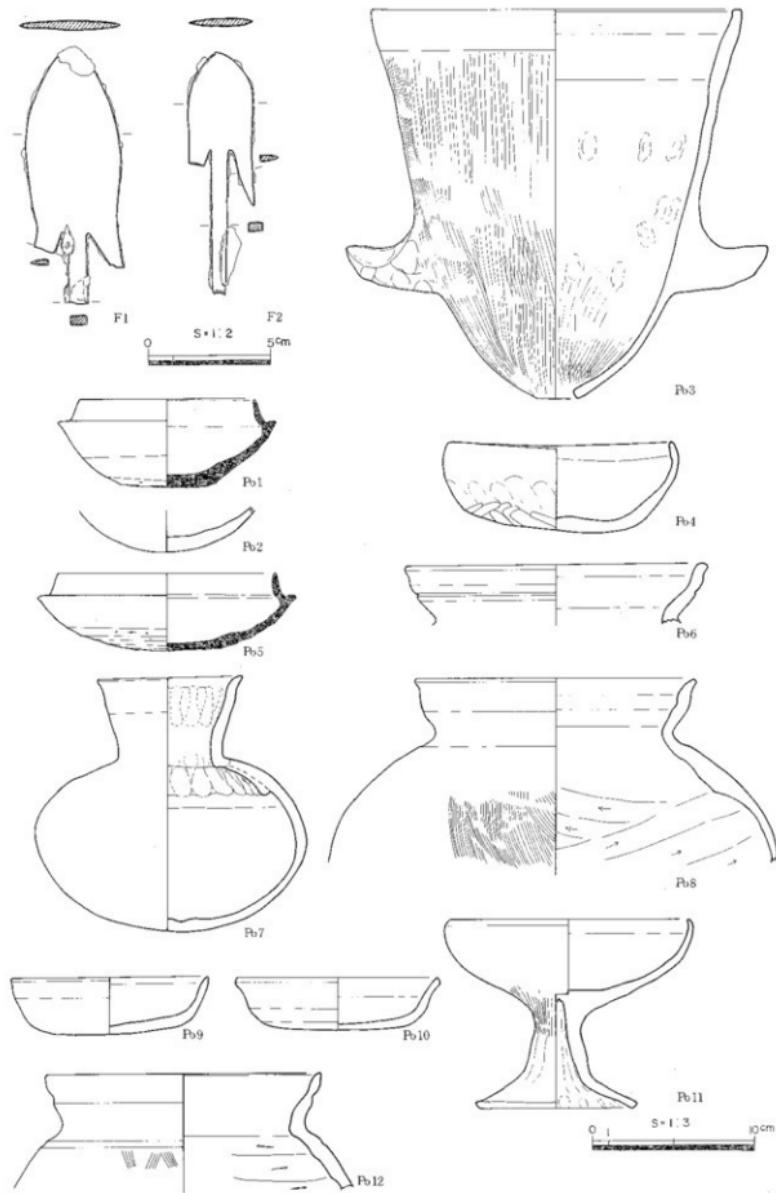


图234 第1号木棺墓出土物実測図(1) 須恵器・土師器・鉄器

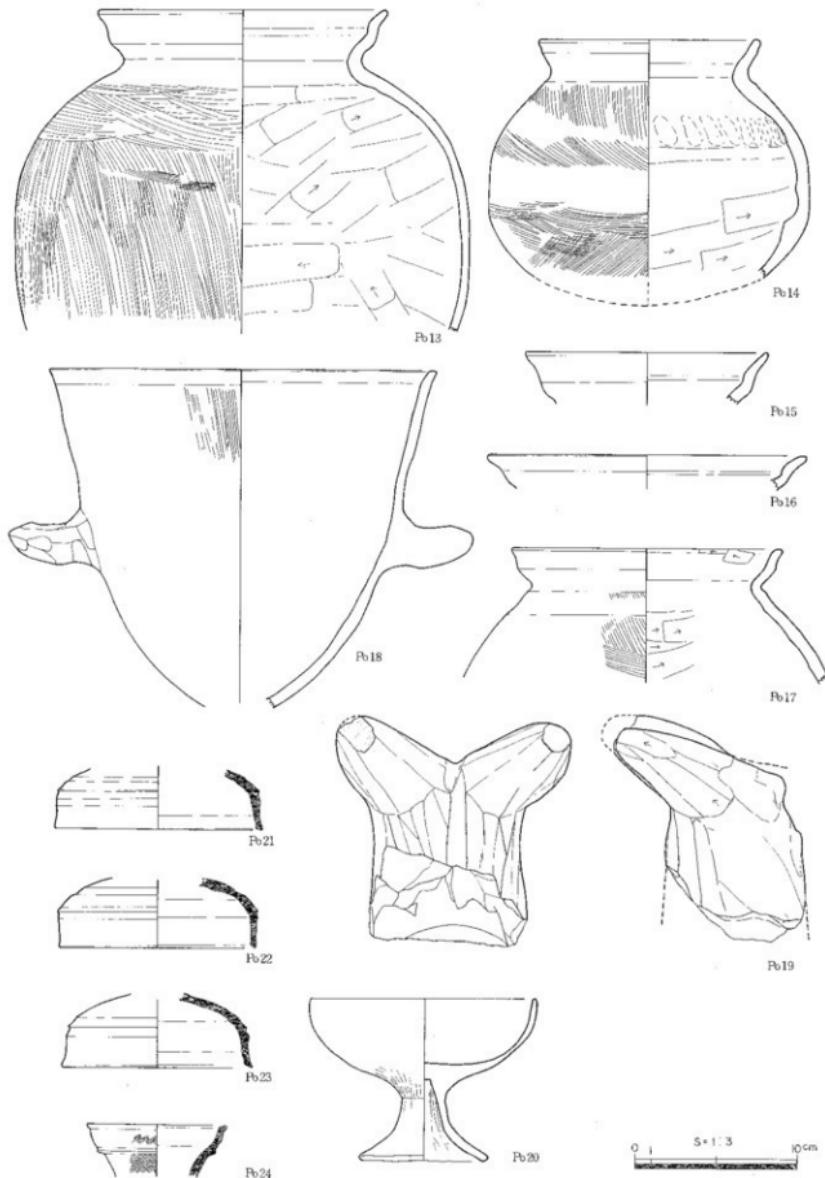
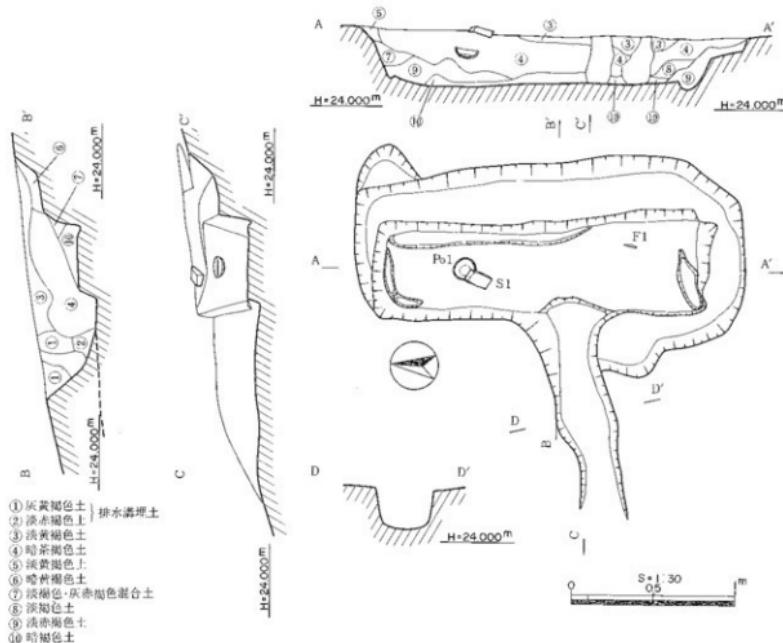


图235 第1号木棺墓出土遗物实测图(2) 铜器·土器

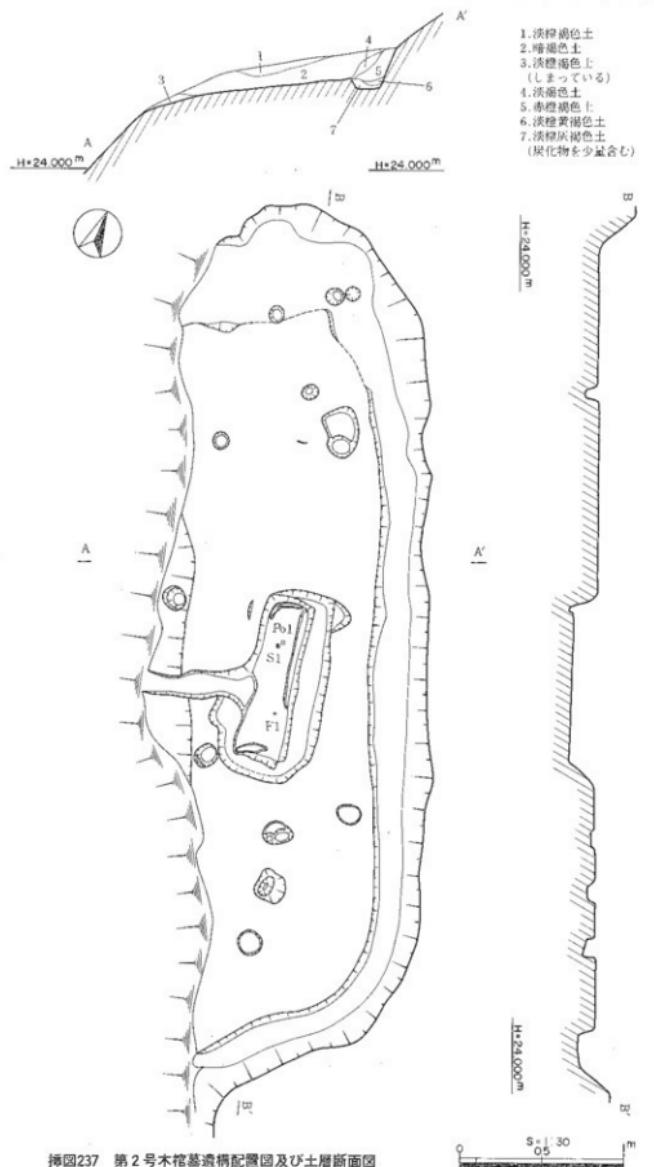
っているのが検出された。墓壙内では西側溝底面の南より鉄鑓F1・2(挿図234、図版75)が先端部を南に向け、F2の上にF1を重ねた状態で出土している。2本とも逆刺をもつ平根式の鉄鑓であり、F1は刃部残存長9.2cmの大型の鐵である。他に埋土中から土器壺口縁Po6(挿図234、図版75)が出土している。第1号木棺墓では墓壙周辺において多量の土器類がまとった状態で検出されている。出土遺物は墓壙東側の第14号段状造構の壁近くに集中しており、特に第1号木棺墓中央部東70cmの位置では東端に土器壺高坏Po11が置かれ、壺部には丹塗りの壺Po10が重ねられていた。Po11の西に接して、直口壺Po7が据えられ、さらに甕Po8が倒立して口縁を下にした状態で置かれており、削平により肩部下半を失っていた。高坏Po11の南には丹塗りの壺Po9が内面を上にして置かれていた(挿図232・234)。この土器群の南側1mでは甕Po12、甕Po18(挿図235)が、北側1~2mの範囲では甕Po13・14・15・16、土製支脚Po19(挿図235)が出土しており、第1号木棺墓埋土上層からも須恵器壺身Po5(挿図234)、壺蓋Po21・22・23、甕?口縁Po24、土器壺高坏Po20(挿図235、図版76)が検出されている。これら墓壙外出土の土器群は質・量とともに東宋像跡の同期の造構に伴う遺物としては群を抜いており、高坏や直口壺、丹塗りの壺などの完形品が集中して置かれた状態で出土していることから、この土器群は、第1号木棺墓に対する供獻土器と考えるのが妥当と思われる。その場合概が2個体もみられたことは墓前炊爨の可能性を指摘できる。第1号木棺墓の時期はPo1が陶色編年TK10~TK43型式に併行すると考えられることから6世紀中葉~後葉に属するものと考えられる。

5. 第2号木棺墓(挿図236~238、図版64・77)



挿図236 第2号木棺墓実測図

位 置 第2号木棺墓は北尾根中腹、標高24.5m付近の調査区中央よりやや南側の急斜面に立地しており、水田比高差は18m前後をはかる。第1号道路状遺構(挿図142、図版22)の東2m、第8号段状遺構(挿



挿図237 第2号木棺墓遺構配置図及び土層断面図

図80、図版12)

の南12m、西1

号横穴(挿図26

6、図版84)の北

西14mに位置し

ている。埋葬施

設の木棺は二段

掘りの墓壙内に

埋置されたと考

えられ、長さ24

0cm、幅140cm、

深さ15~20cmの

掘り方底面に長

さ206cm、北側幅

60cm、南側幅66

cm、深さ30cmの

二段目掘り方が

設けられている。

墓壙底面には南

・北小口部と東

側部に幅6~13

cm、深さ2~5

cmの溝状の掘り

込みがみとめら

れ、木棺の小口

板・側板を埋め

立てたものと考え

られる。墓壙

西側には、底面

から8cm段落ち

して幅25~40cm、

深さ25cm程の溝

が、西側斜面に

向ってのびてお

り、排水溝と考え

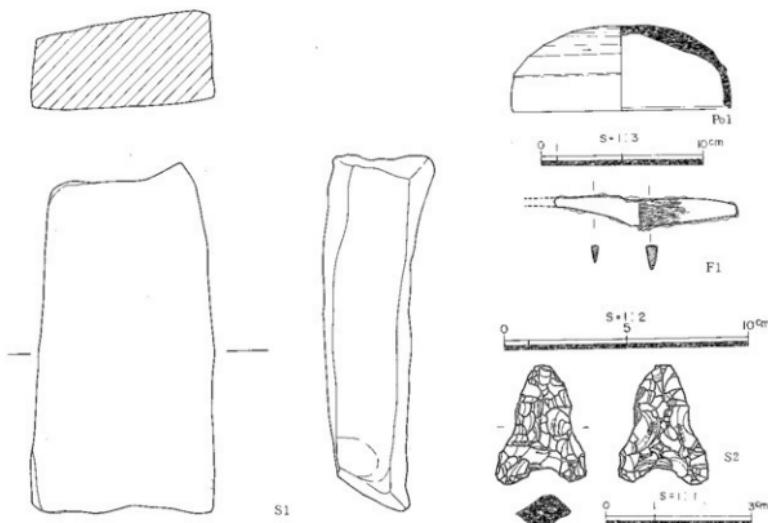
られる。棺内

からは床面中央

よりやや南側の

東壁より切先

を失った鉄製刀



挿図238 第2号木棺墓出土遺物実測図 須恵器・鉄器・砾石

出土遺物 子F1(挿図238、図版77)が出土している。埋土中からは、北側須恵器壺蓋Po1(挿図238、図版77)が内面を上にして出土しており、その10cm上層からは砾石S1(挿図238、図版77)が検出された。

他に、表土中より、転落遺物とみられる黒曜石の石錐S2(凹基無茎型・2.05g)が出土している。

時 期 第2号木棺墓は斜面を削って作った平担面に築造されており、段状構造の中に木棺墓が設けられた形となっている。この段は、壁際に幅40cm、深さ20cmの溝を巡らせており、木棺墓との組合せは特異な例といえる。第2号木棺墓の時期はPo1が陶色編年MT15~TK10型式に併行すると考えられることから6世紀前半の築造と思われる。

6・第3号木棺墓(挿図239・240、図版65・77)

位 置 第3号木棺墓は北へのびる尾根稜線が東宗像4~6号墳付近で平担面をつくり、再び下降しはじめる緩傾斜面に立地している。3号墳の北1m、23号墳の北西4mに位置しており、標高は31.5mで水

規 模 田比高差25m前後をはかる。木棺を埋置するための墓壙は二段掘りであり、長さ260cm、幅145cm、深さ25cmの掘り込み底面に、やや北西に寄せて長さ20cm、北側幅70cm、南側幅60cm、深さ9cmの二段目の掘り方を持っている。二段目の掘り方底部には南小口部から東側にかけて、幅10cm、深さ8cmの溝状掘り込みが「L」形に掘られている。棺内では棺中央部よりやや南小口よりの位置に立ったままの

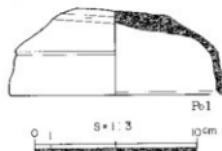
出土遺物 位置の塊石と、須恵器壺蓋Po1(挿図239、図版77)が伏せた状態で検出されている。当初はこの塊石

を石材と考え、箱式石棺が破壊されたものと考えていたが、墓壙

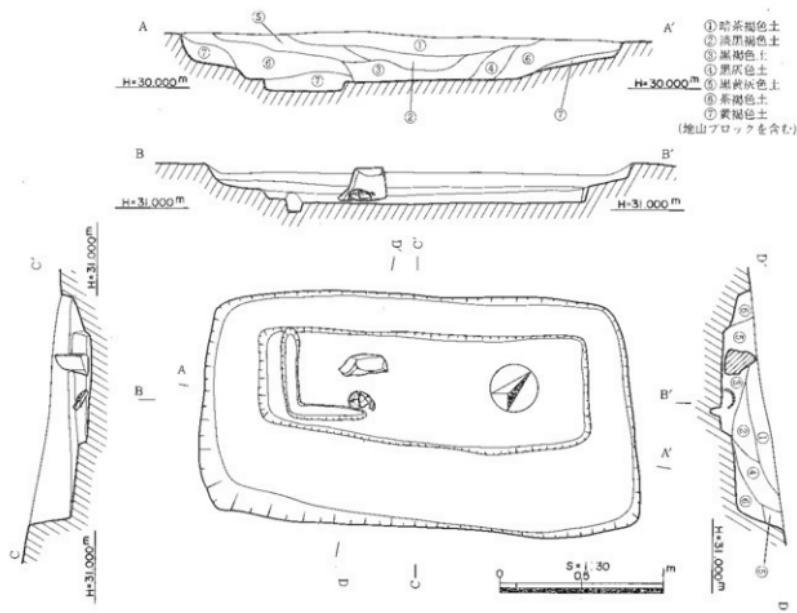
の状況からみて長さ150cm、幅40cm前後の組合せ箱式木棺であったと

推定される。第3号木棺墓は、周溝、墳丘等の施設が周囲から全く

時 期 検出されておらず、単独の埋葬施設である。時期はPo1が陶色編年TK10~TK43型式に併行することから、6世紀後半の遺構と考えられる。

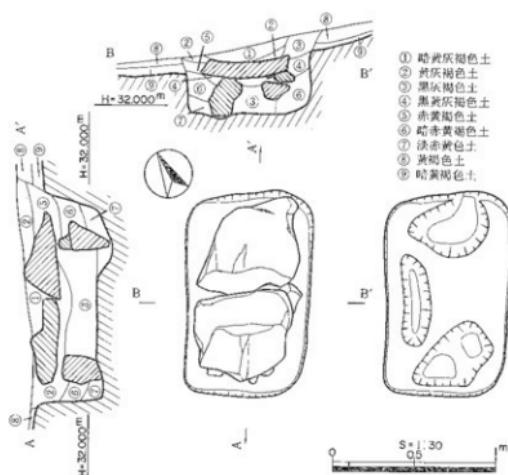


挿図239 第3号木棺墓出土遺物
実測図 須恵器



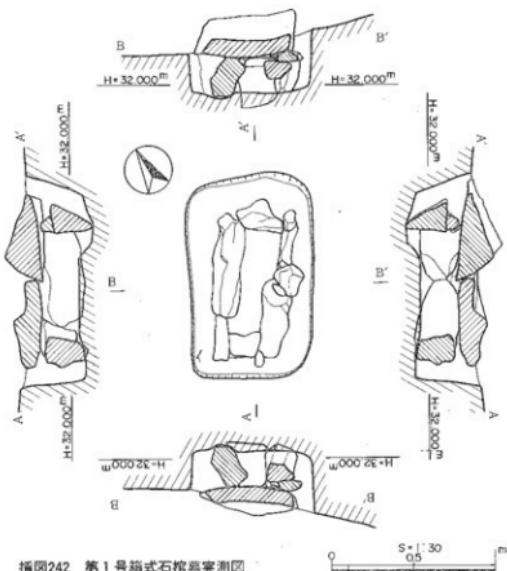
挿図240 第3号木棺墓実測図

7、第1号箱式石棺墓（挿図241・242、図版65）



挿図241 第1号箱式石棺墓検出状況及び土層断面図

第1号箱式石棺墓は東宗像古墳群A支群が展開する北尾根の頂部に立地している。23号墳の南6m、4号墳の西4m、5号墳の北西4m、3号墳の南東4mの標高32.5m付近に位置しており、水田比高差は26m前後をはかる。この地点はまわりを古墳に囲まれた平垣面であり、当然古墳が築造されるべき位置であるが、周溝・墳丘等は全く検出されなかった。石棺は長さ125cm、幅77cm、深さ38cmの長方形の掘り方内に据えられており、主軸をN-30°-Eにとる。掘り方底面の両小口部掘り込みに小口石を埋め立て、小口石を挟み込むように東・西両側壁2枚ずつの板石を用いて構築されている。石組み

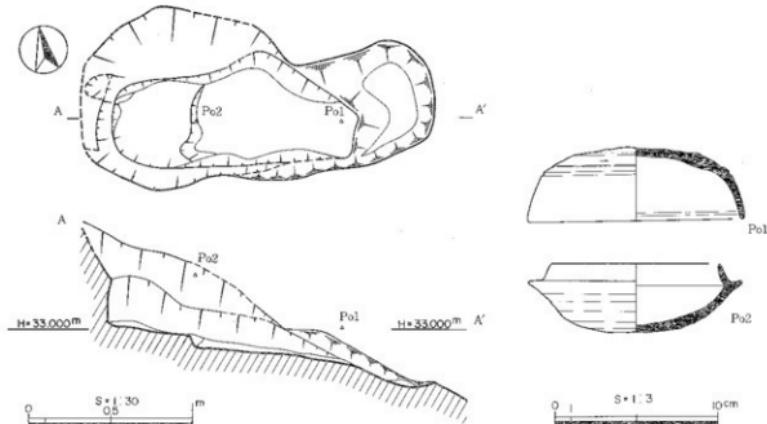


挿図242 第1号箱式石棺墓実測図

の隙間に楔状の石を差し込み、北側小口と東側石にはさらに塊石を置き、高さを調整して蓋石を受けている。蓋石は2石が用いられており、北側の石の端に南側の石がのるように置かれている。石棺の規模は内法で長さ65cm、幅は北側で22cm、南側で19cmとなり、高さは23cm前後をはかる小規模な石棺である。棺内には黒灰褐色土が流入しており、人骨・遺物は全く検出されなかった。第1号箱式石棺墓は小規模な石棺でありながら、古墳の副次埋葬施設ではなく、3・4・5・23号墳に囲まれた平坦面を占有する単独の埋葬施設と考えられる。これらの位置関係からして第1号箱式石棺墓は周辺の古墳群と同時期の遺構であると思われる。

8、第1号土壙墓（挿図243、図版66・77）

位 置 第1号土壙墓は尾根東側の頂部縁辺部に立地しており、5号墳の西1.5m、東1号横穴の北2mに位置している。主軸をN-80°-Wにとる二段掘りの墓壙をもつと考えられるが、傾斜面低位の東側に著しい擾乱をうけており、全体の形が明瞭でない。残存する西側ではかると、残存長170cm、幅110cm、西



挿図243 第1号土壙墓及び出土遺物実測図 須恵器

規 模 端での深さ55cmの隅丸長方形の掘り込みの中に残存長100cm、幅65cm、深さ7cmの二段目の掘り込みが確認できる。木棺墓の可能性もあるが、やや平面形がいびつであることから土壙墓とした。出土遺物は底面から浮いた墓壙埋土中で須恵器蓋坏Po 1・2（挿図243、図版77）を検出した。2個とも内側を上にむけた状態で出土した。Po 1は外面の天井部と体部の境に沈線を施し、棱を意識しており、口縁

出土遺物

時 期 内面にも沈線がみられる。Po 2はPo 1より新しい段階の环身とみられ、流入と考えると、Po 1は陶邑編年TK10型式に併行する段階と捉えることができ、第1号土壙墓の時期は6世紀中葉頃と考えられる。

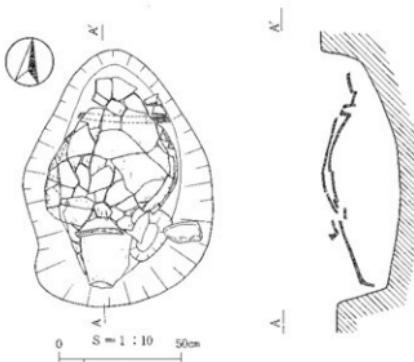
9、第1号土器棺墓 (挿図244、245、図版66・77)

位 置 第1号土器棺墓は、西側斜面中腹の調査区中央部に位置する第14号段状造構（挿図90、図版14）の中にある。第12号堅穴住居跡（挿図54、図版8）の西、第3号掘立柱建物跡（挿図106、図版16）、第1号木棺墓（挿図233、図版63）の南西に接している。墓壙は長径53cm、短径39cmの長椭円形を呈し、深さは16cmをはかり丸底となって

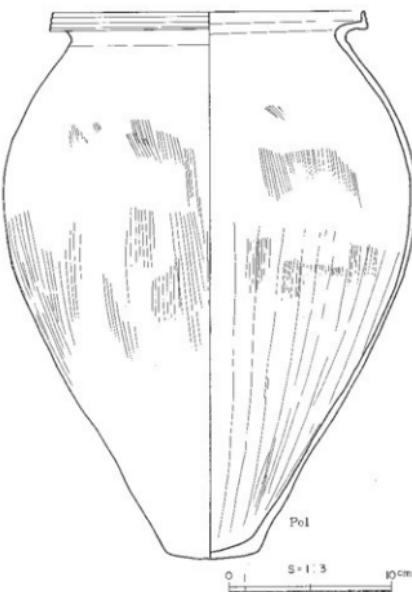
規 模

形 態 この墓壙に弥生土器蓋Po 1（挿図245、図版77）を縦に真二つに割り、かぶせるように伏せた後、残った半分の上半の向きを変えて口縁を南にしてかぶせている。北側の口縁は破片で塞いでおり、これらの状況から埋葬施設と考えた。正確には土壙内に納めた遺体を土器片でおおったものと推定され、土器棺と呼ぶべきではないかもしれない。

時 期 弥生土器蓋Po 1は弥生時代中期後葉に属す個体で、隣接する第12号堅穴住居跡と時期が一致する。両者には直接的なつながりが想定されるが、その場合、墓と住居の距離的関係が問題となろう。



挿図244 第1号土器棺墓実測図

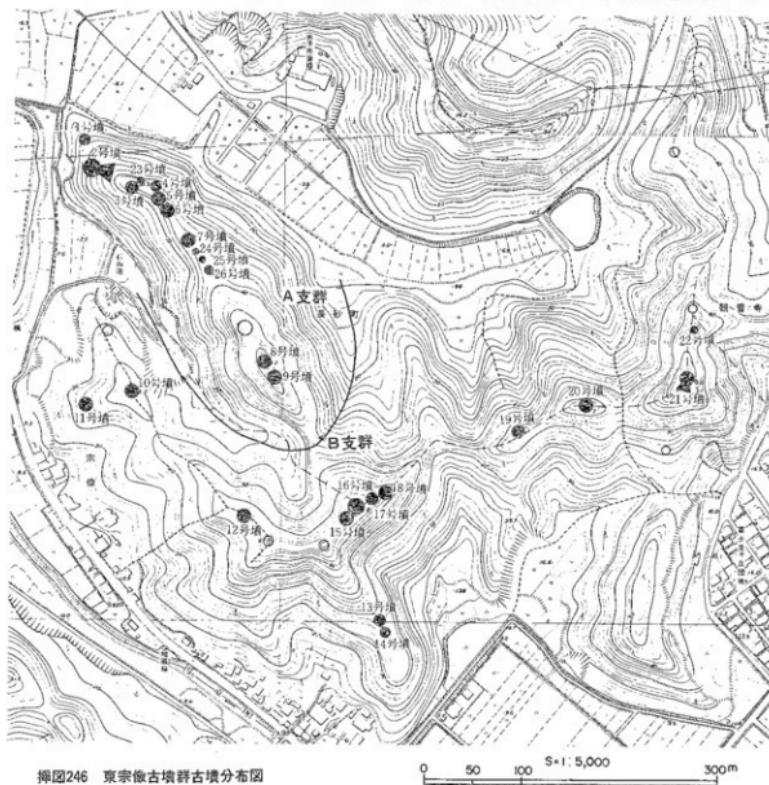


挿図245 第1号土器棺墓弥生土器実測図

第4節 小結

東宗像古墳群は、平野を臨む丘陵尾根上に展開する後期古墳群である。今回の調査で、分布調査によって確認されていた22基に加えて、墳丘を失った古墳を4基発見した。元来、低平な墳丘しかもたない小規模な古墳は表面観察、とりわけ雑木が繁茂したままの状態では見逃され易く、本古墳群も総数は30基を遙かに越えるであろうことが推定される。今次の調査は部分的な調査であったため、古墳群の全体像を解明するには程遠いが、東宗像古墳群をめぐる問題点を以下に概述しておくこととする。

整穴系 本古墳群の調査で最も注目されたのは、6、7号墳の主体部であった所謂「竪穴系横口式石室」で横口式石室ある。竪穴系横口式石室は、横穴式石室の受容、形成における先進地域である北部九州に特徴的に分布する石室形態であり、1966～69年の福岡市老司古墳の調査を契機に初期の横穴式石室として石室構造や宮造者層の研究が進められている。その研究成果は先達の論考に詳しいので一々取り上げるのは避けるが、竪穴系横口式石室は先行する竪穴系の埋葬施設の小口部に横口構造を設けたもので、横穴式石室の導入に際して在地墓制がみせた対応の所産と捉えるのがほぼ定説となっている。この意味においては竪穴系埋葬施設と横穴式石室の中間にあって過度的様相を示す存在であるともいえるが、特殊な存在ではなく、5世紀後半～6世紀前半の北部九州の横穴式石室の中に圧倒的な数を占めており、



插図246 東宗像古墳群古墳分布図

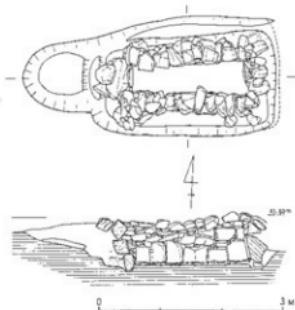
S=1:5,000
0 50 100 300m

初期横穴式石室の1つの石室形態として把握すべきであろう。(挿図247)。

東宗像 遺存状態の比較的良好な東宗像6号墳
6号墳 石室の特徴をあげると

- (1) 玄室は最大幅54cmに対し、長さ230cmと著しく狭長な石室プランであり、玄室高も80cmと低い。
- (2) 周壁の構築は奥壁には1枚石を立てるが、両側壁はやや大型の石を横長に積みて腰石とした上に三段の割石を積みあげる。
- (3) 両側壁横口部には柱石を立ており両袖構造となる。
- (4) 横口部の墓道と玄室床面には高さ15cmの地山を削り残した段が設けられている。
- (5) 石室前面に前庭、羨道をもたず、地山を削り込んだ墓道が斜め上方にのびている。
- (6) 石室は地山を削り込んだ310×200-85cmの掘り方内に据えられている。

これらの特徴は横口部の段が石を用いず、地山削り残しである点(4)を除けば北部九州における堅穴系横口式石室の特徴と一致している。横口部の段は初期横穴式石室に特徴的にみられるもので、石材を用いて築くのが普通である。東宗像6号墳石室は石の段を省略し、直接墓道を横口部に接続しており、堅穴系横口式石室が当地に伝播してから加えられたオリジナリティであろう。ところで、堅穴系横口式石室の類例は近年西日本各地で増加しつつあり、山陰においても鳥取県東伯郡大栄町上種東3号墳の調査以来、堅穴系横口式石室の調査や資料の掘り起しが行なわれている。挿表11は鳥取県内での堅穴系横口式石室の調査例であるが、他にもその可能性をもつ石室はいくつかある。これらの堅穴系横口式石室の系譜は、調査者により載るあるいは九州地方に求められているが、西日本各地の堅穴系横口式石室を集めた柳沢一男氏は、北部九州における同石室の構造と营造年代の観点から「西日本の諸地域に分布する堅穴系横口式石室は、九州のこの種石室との系譜をみとめうるものと、現時点ではその関係を連続しないタイプがある。」としている。東伯耆の由良川・加勢蛇川流域にみられ



挿図247 北部九州の堅穴系横口式石室・福岡県宗像市谷各A-3号墳石室実測図

番号	古墳名	所在地	墳形・埋覆	石室(玄室)				出土遺物	時期	備考
				規格	横	縦	形態			
1	東宗像6号墳	米子市宗像	円 12.6m 残存高 1.0m	230 ~54	46 +α	80 +α	肉袖。腰石上に塊石 積み。腰石閉塞。	(墓道)不明 (埴丘・周溝)須 恵器、土師器、 刀形埴輪	6C初頭~前 葉	
2	東宗像7号墳	米子市宗像	円 10.5m 残存高 1.1m	250	50	80 +α	肉袖。腰石上に塊石 積み。	(墓道)刀子片 (周溝)須恵器	6C初頭~前 葉	
3	上種東3号墳	東伯郡大栄町上種	円 12.6m 残存高 2.7m	355	115	160	無袖。腰石上に塊石 積み。腰石閉塞。	(第1次床)鐵 鏡、刀子、土器、 勾玉、管玉、小 玉、須恵器 (第2次床)鹿角 表刀子、須恵器	6C中~後 葉	6体以上埋 葬
4	上種西15号墳	東伯郡大栄町上種	円 10.6m —	260	100	—	無袖。腰石上に塊石 積み。	(石室内)鐵刀、 鐵鏡、須恵器 (周溝)須恵器	6C後半	圓溝にブリ ッジ状掘り 残し 石組遺構
5	大法3号墳 (三塚ノ谷古 墳)	東伯郡東伯町大法	円 14.0m 残存高 2.1m	230 ~90	60 +α	140	肉袖を意識する。腰 石上に塊石(河原石) 積み。	(石室内)鐵劍、 鐵刀、刀子、鐵、 鏡、管玉、須 恵器、土師器 (埴丘)須恵器	6C末	前庭側壁 石組遺構
6	三保6号墳	東伯郡東伯町三保	円10m前後 —	200 ~94	80 —	—	無袖。腰石上に塊石 (割石)積み。	(石室内)須恵器	6C中葉~後 半	1部未調査

挿表11 鳥取県内の堅穴系横口式石室調査例一覧表

る堅穴系横口式石室についても、九州で同石室の造営が終了した後の6世紀中葉～末頃の墓造であり、九州では類例の少い無袖型プランを呈することから九州の同石室との直接的な系譜には疑問を示している。もちろん、東伯耆の初期横穴式石室が断続的な九州との関係の中で造営されたことは疑いないところであるが、堅穴系横口式石室に関しては、その後の追加資料を加えても九州の同種石室との時間的・構造的ヒアタスは解消されていない。東宗像6・7号墳石室と上種東3号墳石室を比較すると、いはれも狭長な石室プランではあるが、上種東3号墳石室は玄室幅が広く、高さも高く、埋葬空間の

増大において、より横穴式石室に近い様相をみせる。ところが、構造的には東宗像6・7号墳が両袖式なのに対して無袖式の石室プランを探り、横口部の段の構造も異なるなど兩者に直接的な系譜関係は認められない。現段階では東宗像6・7号墳の堅穴系横口式石室は前述したヒアタスを埋める存在とはいはず、両者は別の系譜を考えねばならないと思われる。

西伯耆において、東宗像6・7号墳は堅穴系横口式石室の調査初例となったが、宗像、東宗像古墳群において類似する石室が數例みられ、東伯耆の由良川、加勢蛇川流域同様に米子市南郊の高山山塊は、堅穴系横口式石室が集中する地域である。また日野川を5km潤った岸本町吉定には石室平面が長さ5.8m、幅2.8mをはかる長方形で、割石を小口積みする玄室に、短い羨道が片袖につく細見神社古墳の横穴式石室があり、細見神社古墳は出土遺物が知られていないが、石室構造からみて、東宗像6・7号墳に先行する5世紀代の造営と考えられる。西伯耆では、かつて土生田純之氏が指揮したように、山陰で最も早く横穴式石室が採用されたようであり、そこには

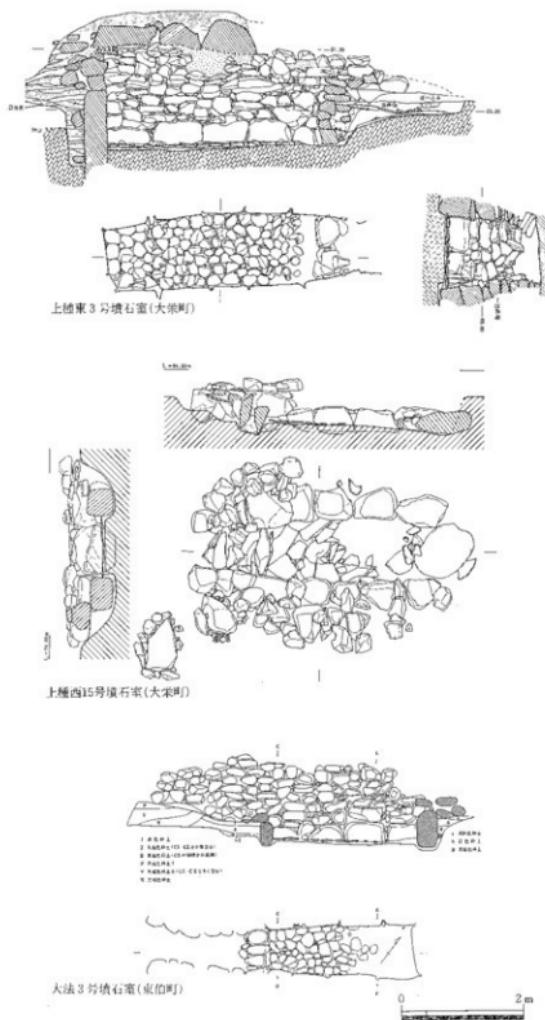


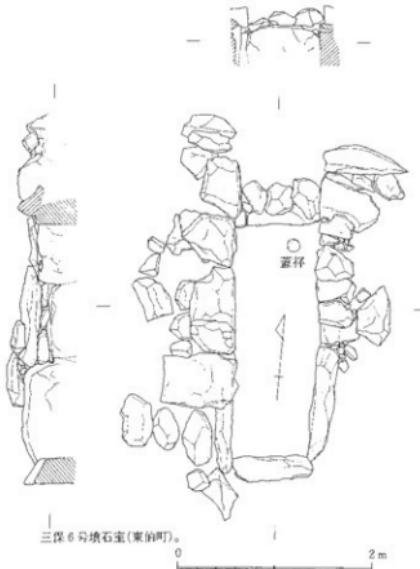
図248 島根県内堅穴系横口式石室実測図(1)

東宗像6・7号墳の竪穴系横口式石室にみられる北部九州との直接的な交流がみられるのである。

横口式箱式石棺 東宗像古墳群において6・7号墳の次に築造されるのが、5号墳の横口構造をもつ箱式石棺である。箱式石棺は死者の遺体を直接納めるものであり、通常的には単次の埋葬用に用いられる施設であるが、実際には箱式石棺であっても2体以上の埋葬——追葬が行なわれた例も少なくない。¹⁰ しかしながら、これらは追葬時に蓋石をはぐて遺体を納めたもので、特に埋葬・追葬のための入口施設を設けていない。入口施設をもつ石棺としては所謂「横口式家形石棺」があり、山陰地方では、横口式家形石棺と共にその系譜に連なると思われる「石棺式石室」が発達している。これらに対して、5号墳石棺は在地の伝統的な葬法として普通的な箱式石棺の小口に開閉

施設を設けたものであって、横口式家形石棺とは全く系譜を異にするものである。しいて類例を求めるならば、佐賀県唐津市迫頭古墳群にみられる横口構造をもつ箱式石棺、土壙がある。迫頭古墳群は弥生時代前期の支石墓群と重複して築かれている5～6世紀の古墳群であり、5基の竪穴系横口式石室墳を中心に、箱式石棺、土壙墓群で構成されている。この中の横口構造をもつ箱式石棺墓（9号）、土壙墓（3、5号）について報告者は「横穴式石室構造という新來の石室構造に在来の墓制の伝統が色濃く残存しているものであり、おそらく横穴式石室構造及びそれに伴う葬送観念を受容する際の当地方の地域的な変異を示すものであろう。また、さらには本古墳群の形成が在来の集団によってなされたことも明瞭に示すものである。」¹¹ としている。東宗像5号墳石棺を迫頭9号墳等と比較すると、小口に横口施設をもつ以外構造上の類似点はみられないが、在来の墓制である箱式石棺に横口をつけるという新しいアイデアを加味したという点では全く同じ発想の所産であろうと思われる。迫頭古墳群では、横口構造をもつ土壙墓である3号墳が古墳群中で最も古く位置づけられるようであるが、東宗像5号墳石棺は、6・7号墳の竪穴系横口式石室の影響をうけて、25号墳にみられるような箱式石棺に横口がついた構造をとるものであり、北部九州との直接的な交流を想定できた6・7号墳石室が、西伯耆の地において独自の変容をみせたものである。これは、6・7号墳を築造した九州との直接交渉を持ち得た営造者から、より在地化した5号墳営造者への世代交替を具現すると考えられる。

このように、竪穴系横口式石室と横口式箱式石棺から、北部九州との直接的な交流と営造者の在地化を想定したが、これらの埋葬施設をもつ古墳が古墳群の中で占める位置を検討しておきたい。東宗像古墳群をA・B2支群に分けた場合、A支群は全長38mの前方後円墳である2号墳を盟主墳とするが、内部主体が明らかでないため、検討の対象から外さざを得ない。2号墳以外の円墳群は、地表観察において明らかにそれとわかる墳丘をもつ径10m以上のクラス（1・3・5・6・7・8・9号墳）と発掘調査によって初めて存在が確認される程度の墳丘しかもたない径10m以下のクラス（4・



插図249 鳥取県内竪穴系横口式石室実測図(2)

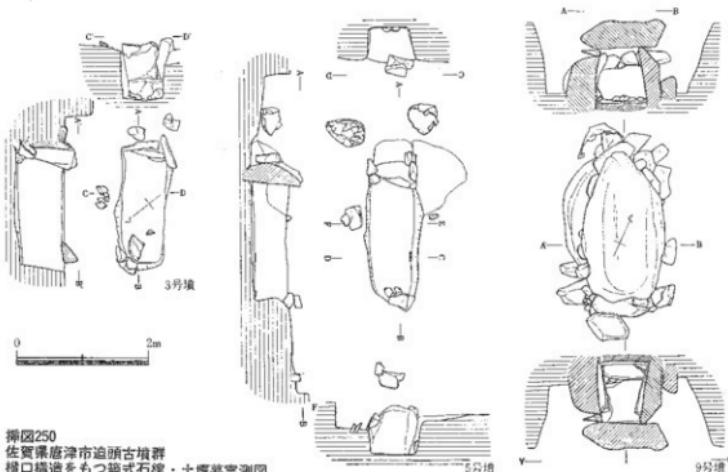


図250
佐賀県唐津市追頭古墳群
横口構造をもつ箱式石棺・土壙墓実測図

23・24・25・26号墳)に分けることができる。若干の誤差はあるが内部埋葬施設も前者は横穴式石室を採用するのに対して、後者が箱式石棺、木棺を用いる差異は歴然としている。盗掘により副葬遺物等が明らかではないため、確かなことはいえないが、2号墳被葬者と区別される円墳被葬者層内部も当然のことながら単純な階層ではなかったことが想定できる。

東宗像古墳群A支群は6世紀代を通して築造された後期群集墳の一様相をみせてくれたが、北部九州との交流、群集墳内での階層差の存在と、抽出される問題は数多い。今後は周辺古墳群との関わりが追求されねばならないし、竪穴系横口式石室については、類例の蓄積と、先行あるいは後続する墓制を含めての詳細な検討が必要と思われる。

註1 森貞次郎他「老司古墳調査概報」福岡市教育委員会 1969年

註2 竪穴系横口式石室の概念規定については、本文に示したような解釈が、ほぼ共通認識となっているが、構造を細く分析すると研究者間に差異が認められるのも事実である。

註3 柳沢一男「竪穴系横口式石室再考」「森貞次郎博士古稀記念古文化論集」 1982年

註4 上生田純之他「上種東古墳群第3号墳発掘調査報告」大栄町教育委員会 1980年

註5 挿表11の竪穴系横口式石室に関する文献

1、2、東宗像6・7号墳 本報

3、上種3・4号墳 診文

4、上種西15号墳 馬渕義則・根岸智津子「上種西古墳群発掘調査報告」大栄町教育委員会 1984年

5、大法2号墳 斎藤勝也「大法3号墳(二塚ノ谷古墳)発掘調査報告書」東伯町教育委員会 1980年

6、三保6号墳 植野浩三他「三保遺跡発掘調査報告書」東伯町教育委員会 1981年

註6 柳沢氏は西日本系の竪穴系横口式石室を、aタイプ—九州の竪穴系横口式石室と直置的な系縁関係を辿りうる石室。bタイプ—九州のこの種の石室を矩形としつつも、横口部を設けるというアイデアのみを採用し、在地形の石室に取り入れたもの。cタイプ—6世紀中葉以降の築造になる地方型ともいるべき石室型式。の3つに分類しており、東伯春の竪穴系横口式石室をcタイプに属するものとしている。註3文献。

註7 土生田氏は、「吉田市大宮古墳、東郷町片平4号墳に上種東3号墳を加えて検討した結果、「東伯春地方における初期横穴式石室はいずれも中・北部九州にその源流を求めることができた」としている。

註8 すでに消滅してしまったが、米子市奥谷・中山古墳(宗像42号墳)は竪穴系横口式石室であったと思われる。佐々木謙「米子市奥谷・中山古墳」1955年。後に宗像5号墳・東宗像9号墳石室も竪穴系横口式石室あるいはその系譜をひく石室と考えられる。

註9 土生田論文に同じ。

註10 米子市百碌原55号墳の箱式石棺では4体が埋葬されていたといわれ、箱式石棺における複数埋葬の類例が多い。

註11 小田富士雄「横穴式石室の導入とその源流」『東アジア世界における日本古代史講座4』 1980年

註12 間嶋敬、松永幸男「追頭古墳群」「未叢田」府津市周辺遺跡調査委員会 1982年

插表12 東宗像遺跡古墳出土須磨器・土師器觀察(1)

插表12 東宮像遺跡古墳出土須恵器・土師器觀察表(2)

土器番号 網印番号 調査番号	出土遺蹟	種類	形 態	手 法	加 工	製 成	色 調	備 考
Po 14 163 67	玄蕃塗 2号墳	磨削形 円筒埴輪	①35.3 口縁は外反して大きく窪く。底部は平坦になる。	外削タメハ。	素	良	淡黄褐色 に淡青色斑。	
Po 15 23 2号墳	磨削形 円筒埴輪	②34.9 0.7	直立する円筒形が内縁を瘤に内側する両面へ続く。△底面削除形。	外削タメハ後、凸凹貼り付けヨコナギ。 内削ナナメ。	素 砂粒を含む。	良	赤褐色 斑点。	
Po 16 2号墳	磨削形 円筒埴輪		外縫する花形。	外削タメハ。	素	良	赤褐色 斑点。	
Po 17 2号墳	磨削形 円筒埴輪	③ 1.1	内縫する瘤部の羽根との間に合併を行し、内縫は斜めで、△底面削除形。	外削タメハ後、凸凹貼り付けヨコナギ。 内削ナナメ。	素 砂粒を含む。	良	暗黄褐色 斑片。	
Po 18 2号墳	円筒埴輪		外縫する口縁。瘤部に凹面をもつ。	外削タメハ後、凸凹貼り付けヨコナギ。 内削ナナメ。	素 砂粒を含む。	良	淡黄褐色 斑片。	
Po 19 玄蕃塗 2号墳	円筒埴輪		外縫する口縁。瘤部に平田面をもつ。	外削タメハ後、凸凹貼り付けヨコナギ。	素 砂粒を含む。	良	内青 赤褐色 斑片。	
Po 20 玄蕃塗 2号墳	円筒埴輪		外縫する口縁。瘤部に凹面をもつ。	内削ナナメハ後、口縫部ヨコナギ。	素 砂粒を含む。	良	内青 赤褐色 斑片。	
Po 21 玄蕃塗 2号墳	円筒埴輪	④ 22.6(回)	中央反対する1回。瘤部に内縫をもつ。	外削ナナメハ後、内削ヨコカバ彫籠部ヨコナギ。	素 砂粒を含む。	良	暗褐色 斑片。	
Po 22 玄蕃塗 2号墳	円筒埴輪		直立する口縁。瘤部に平田面をもつ。	外削タメハ。	素 砂粒を含む。	良	内青 赤褐色 斑片。	
Po 23 玄蕃塗 2号墳	円筒埴輪	⑤ 24.0(回)	外縫する口縁。瘤部に内縫をもつ。	外削タメハ。△内削ナナメハ後ヨコカバ彫籠部ヨコナギ。	素 砂粒を含む。	やや不良	赤褐色 斑片。	
Po 24 玄蕃塗 2号墳	円筒埴輪		外反する口縁。瘤部に平田面をもつ。	外削ナナメハ後、内削ヨコカバ彫籠部ヨコナギ。	素 砂粒を含む。	良	内青 赤褐色 斑片。	
Po 25 玄蕃塗 3号墳	円筒埴輪	⑥ 24.3(回)	外反する口縁。瘤部に平田面をもつ。	内削ヨコハケ後に内削ナナメハ後口縫部ヨコナギ。	素 砂粒を含む。	良	内青 赤褐色 斑片。	
Po 26 玄蕃塗 3号墳	円筒埴輪		外反する口縁。瘤部に凹面をもつ。	内削ヨコハケに近いナナメハ後、外削ナナメハ後ヨコカバ彫籠部ヨコナギ。	素 砂粒を含む。	良	赤褐色斑塊 斑片。	
Po 27 玄蕃塗 2号墳	円筒埴輪		外縫する口縁。瘤部に内縫をもつ。瘤部に凹面をもつ。	外削ナナメハ後、内削ヨコハケに近いナナメハ後ヨコカバ彫籠部ヨコナギ。	素 砂粒を含む。	良	赤褐色 斑片。	
Po 28 玄蕃塗 2号墳	円筒埴輪		外縫する口縁。瘤部に凹面をもつ。	外削ナナメハ後ヨコカバ彫籠部ヨコナギ。	素 砂粒を含む。	良	内青 赤褐色 斑片。	
Po 29 玄蕃塗 2号墳	円筒埴輪		外縫する口縁。瘤部に凹面をもつ。	外削ナナメハ後、口縫部ヨコナギ。	素 砂粒を含む。	良	赤褐色 斑片。	
Po 30 玄蕃塗 2号墳	円筒埴輪		直立する口縁。瘤部に内縫をもつ。	外削ナナメハ後、内削ヨコハケ後ヨコカバ彫籠部ヨコナギ。	素 砂粒を含む。	良	内青 赤褐色 斑片。	
Po 31 玄蕃塗 2号墳	円筒埴輪		底部に凹面をもつ。	山崎面ヨコナギ。	素	良	暗褐色 斑片。	
Po 32 黒須塗 2号墳	円筒埴輪	⑦ 16.3(回)	底部が丸くなり、瘤部に外縫する平田面をもつ。	底部がヨリヨリの後外削ナナメハ（内削側）。	素 砂粒を含む。	良	内青 赤褐色 斑片。	
Po 33 黒須塗 2号墳	円筒埴輪		底部が丸くなり、瘤部に外縫する平田面をもつ。	底部がヨリヨリの後外削ナナメハ（内削側）。	素 砂粒を含む。	良	赤褐色斑塊 斑片。	
Po 34 黒須塗 2号墳	円筒埴輪		底部は丸くなる。	底部外削ナナメハ（内削側）。	素 砂粒を含む。	良	赤褐色 斑片。	
Po 35 黒須塗 2号墳	円筒埴輪		底部は丸くなる。	底部外削ナナメハ（内削側）。	素 砂粒を含む。	良	赤褐色 斑片。	
Po 36 黒須塗 2号墳	円筒埴輪		底部は丸くなり、瘤部は丸くなる。	底部外削ナナメハ（内削側）。	素 砂粒を含む。	良	赤褐色 斑片。	
Po 37 黒須塗 2号墳	円筒埴輪	⑧ 17.7(回)	底部は丸くなり、瘤部は丸くなる。	底部外削ナナメハ、内削ヨコサギエ（内削側）。	素 砂粒を含む。	良	赤褐色 斑片。	
Po 38 黒須塗 2号墳	円筒埴輪	⑨ 26.0(回)	底部は丸くなり、瘤部は丸くなる。	底部外削ナナメハ（内削側）。	素 砂粒を含む。	良	赤褐色 斑片。	
Po 39 黒須塗 2号墳	円筒埴輪		底部は丸くなり、瘤部は丸くなる。	底部外削ナナメハ（内削側）。	素 砂粒を含む。	良	赤褐色 斑片。	
Po 40 黒須塗 2号墳	円筒埴輪	⑩ 18.0(回)	底部は丸くなり、瘤部は丸くなる。	底部外削ナナメハ（内削側）。	素 砂粒を含む。	良	明褐色 斑片。	
Po 41 黒須塗 2号墳	円筒埴輪		底部は丸なり、瘤部は平田面をつくる。	底部外削ナナメハ。	素 砂粒を含む。	やや不良	赤褐色 斑片。	
Po 42 黒須塗 2号墳	円筒埴輪	⑪ 19.5(回)	底部は丸なり、瘤部は平田面をつくる。	底部内外削ハリが残る。	素 砂粒を含む。	良	明褐色 斑片。	
Po 43 黒須塗 2号墳	円筒埴輪		底部は丸くなり、瘤部は丸り気味。	底部外削ナナメハ。内削オサナギ・ナギ。	素 砂粒を含む。	良	内青 赤褐色 斑片。	
Po 44 黒須塗 2号墳	円筒埴輪		底部は丸くなり、瘤部は丸り気味。	底部外削ナナメハ。	素 砂粒を含む。	良	青褐色 斑片。	
Po 45 黒須塗 2号墳	円筒埴輪	⑫ 21.3(回)	底部は丸くなり、瘤部は丸くなる。	底部外削ナナメハ。	素 砂粒を含む。	不良	褐赤褐色 斑片。	
Po 46 161 67 87	黒須塗 2号墳		瘤部。	外削ナナメハ後凸凹貼り付けヨコナギ。内削ナナメハ・ナギ。	素 砂粒を含む。	良	内青 赤褐色 斑片。	
Po 47 黒須塗 2号墳	円筒埴輪		瘤部。	外削ナナメハ。	素	やや不良	赤褐色 斑片。	
Po 48 黒須塗 2号墳	円筒埴輪		瘤部。	外削ナナメハ後凸凹貼り付けヨコナギ。内削ヨコナギ。	素 砂粒を含む。	良	明褐色 斑片。	
Po 49 黒須塗 2号墳	円筒埴輪		瘤部。	外削ナナメハ。内削ナナメハ。	素 砂粒を含む。	良	赤褐色 斑片。	
Po 50 黒須塗 2号墳	円筒埴輪	⑬ 1.0	瘤部。	外削ナナメハ後凸凹貼り付けヨコナギ。内削ハリ・ナギ。	素	良	内青 赤褐色 斑片。	
Po 51 黒須塗 2号墳	円筒埴輪		瘤部。	外削ナナメハ。	素 砂粒を含む。	やや不良	赤褐色 斑片。	
Po 52 黒須塗 2号墳	円筒埴輪	⑭ 0.7	瘤部。	外削ナナメハ後凸凹貼り付けヨコナギ。内削ナナメハ。	素	良	明褐色 斑片。	
Po 53 黒須塗 2号墳	円筒埴輪		瘤部。	外削ナナメハ。内削ナナメハ。	素 砂粒を含む。	良	暗褐色 斑片。	
Po 54 黒須塗 2号墳	円筒埴輪	⑮ 0.6	瘤部。	外削ナナメハ後凸凹貼り付けヨコナギ。内削ナナメハ。	素 砂粒を含む。	良	明褐色 斑片。	
Po 55 黒須塗 2号墳	円筒埴輪		瘤部。	外削ナナメハ。内削ナナメハ。	素 砂粒を含む。	やや不良	赤褐色 斑片。	

插表13 東京跡遺跡古墳出土土壤輪觀察表①

插表13 東宋像遺跡古墳出土埴輪觀察表②

出土遺構 等回復品 回復品番号	出土遺構	種 種	口 部 後 面 切 削 部 部 位 及 び 其 の 形 態	感	手 法	輪 七	成 成	色 調	備 考
Po-34 東宗像 5号墳	円周輪轍		輪断面。		外周ナメハケ後凸面貼り付けヨコナギ。 2次ヨコハケ。内面ナメケ。	密	良	明赤褐色 鏡片。	
Po-35 東宗像 5号墳	円周輪轍	⑤ 0.9	輪断面。凸面断面面形。		外周ナメハケ後凸面貼り付けヨコナギ。2 次ヨコハケ。内面ナメケ。	密	良	明赤褐色 鏡片。	
Po-36 東宗像 5号墳	円周輪轍	④ 26.0(底) ⑤ 0.9	外側して上方方にひかる鋸部。円周断面凸 面。	外周ナメハケ後凸面貼り付けヨコナギ。	密	良	淡褐色 瓦存。須磨質。		
Po-37 東宗像 5号墳	円周輪轍	③ 0.7	輪断面。円周断面圓盤平な谷部。	外周ナメハケ後凸面貼り付けヨコナギ。	密	良	淡褐色 瓦存。須磨質。		
Po-38 東宗像 5号墳	円周輪轍		輪断面。	外周ナメハケ後2次ヨコハケ。内面ナメ ケ。	密	良	和褐色 鏡片。須磨質。		
Po-39 東宗像 5号墳	円周輪轍		輪断面。	外周ナメハケ後凸面貼り付けヨコナギ。 2次ヨコハケ。内面ナメケ。	密	良	暗褐色 鏡片。須磨質。		
Po-40 東宗像 5号墳	円周輪轍	⑤ 1.1	輪断面。凸面断面面形。	外周ナメハケ後凸面貼り付けヨコナギ。	密	良	明赤褐色 鏡片。		
Po-41 東宗像 5号墳	円周輪轍	⑤ 0.8	輪断面。凸面断面面形。円形透し孔。	外周ナメハケ後凸面貼り付けヨコナギ。 内面ヨコハケ。	密	良	暗赤褐色 ～暗褐色 鏡片。須磨質。		
Po-42 東宗像 5号墳	円周輪轍	③ 20.0 ⑤ 1.1	断面は薄くなり、断面部に十坦面をもつ。凸 面断面面形。	外周ナメハケ後凸面貼り付けヨコナギ。 内面ヨコハケ。内面ナメケ。	密	良	暗赤褐色 鏡片。瓦存。		
Po-43 東宗像 5号墳	円周輪轍	⑤ 0.7	断面は薄くなり、端部は丸くおさめる。凸 面断面面形。	外周ナメハケ後凸面貼り付けヨコナギ。 内面ヨコハケ。内面ナメケ。	密	良	明赤褐色 鏡片。		
Po-44 東宗像 5号墳	円周輪轍		端部は薄くなり、端部は丸くおさめる。	外周ナメハケ後凸面貼り付けヨコナギ。 内面ヨコハケ。	密	良	暗赤褐色 鏡片。		
Po-45 東宗像 5号墳	円周輪轍	③ 15.6 ⑤ 0.8	断面は薄くなり、端部は平面面をもつ。凸 面断面面形。	凸面貼り付けヨコナギ。底面内外面ササエ 後ヨコハケナメハケ(内側部)。	密	良	淡褐色 ～暗褐色 鏡片。瓦存。須磨質。		
Po-46 東宗像 5号墳	円周輪轍		はげは立てる口縁。端部はやや丸くなる。	外周ナメハケ、凸面貼り付けヨコナギ。 内面ヨコハケナメハケ(内側部)。	密	良	明赤褐色 鏡片。		
Po-47 東宗像 6号墳	円周輪轍	⑤ 1.1	輪断面。凸周断面M字形。	外周ナメハケ後凸面貼り付けヨコナギ。	密	良	明赤褐色 鏡片。		
Po-48 東宗像 6号墳	円周輪轍	② 0.3	輪断面。凸周断面面形。	外周ナメハケ後凸面貼り付けヨコナギ。 内面ヨコハケ。	密	良	明赤褐色 鏡片。		
Po-49 東宗像 6号墳	円周輪轍	③ 19.9	断面はやや薄くなる。断面部に半坦面をもつ。 外周ハメアリが残る。底部内外面オサエ(内 側部)。	外周ハメアリが残る。底部内外面オサエ(内 側部)。	密	良	淡赤褐色 ～淡褐色 須磨光面。		
Po-50 東宗像 6号墳	円周輪轍								

挿表13 東宗像跡古墳出土埴輪觀察表③

遺物番号	出土遺構	種類	最大長	最大幅	最大厚	形態の特徴			
F 1	東宗像 2号墳	鉄 砍	12.0cm	4.4 cm	1.5 cm 刃部 3.4 cm	刃部は幅4.4cmで鋭く断面三角形を呈す。袋部は折り返しが結合しておらず、背部には段がつく。内面に水質が錆着する。			
F 1	東宗像 3号墳	刀 子	残存長 3.7cm	1.5 cm	0.25cm	切先と茎尻を欠損する。片闇で跨状の金具がつく。			
F 1	東宗像 5号墳	鎧	14.0cm	1.5 cm	1.3 cm 袋部 3.2 cm	断面長方形の棒状で、先端は鋭い。袋部は幅が広がり内面に木質が錆着する。			
F 2	東宗像 5号墳	刀 子	11.3cm	1.7 cm	0.35cm	刃部長6.6cm。両闇で茎尻が溝切であり、木皮質が巻かれている。			
F 3	東宗像 5号墳	刀 子	残存長 5.5cm	1.3 cm	0.4 cm 茎部	刀身を欠損する。両闇で茎部に木質が残存する。			
S 1	東宗像 5号墳	砥 石	残存長 4.8cm	3.4 cm	1.0 cm	扁平板状、片端を欠損する。4面を使用。			
S 1	東宗像 5号墳	砥 石	6.9cm	2.7 cm	1.6 cm	断面四角柱状で4面を使用。片端隅に紐通し孔を有する。砂岩質。			
F 1	東宗像 6号墳	梯狀鐵器	残存長 5.8cm	0.6 cm	0.4 cm	断面階形梯狀鐵製品。鎧の茎部か?			
F 1	東宗像 7号墳	刀 子	残存長 3.7cm	3.75cm	0.3 cm	片闇で茎部のみ残存。			
F 1	東宗像 第1号木棺墓	鉄 簾	10.6cm	3.9 cm	0.4 cm	平根式。刃先はやや丸く、外へ反る逆刺をもつが端部を欠損する。茎部を一部欠損する。大型。			
F 2	東宗像 第1号木棺墓	鉄 簾	10.0cm	2.7 cm	0.35cm	平根式。刃先はやや丸く、外へ反る逆刺をもつが片方を欠損する。長い刃がつく。			
F 1	東宗像 第2号木棺墓	刀 子	7.5cm	1.1 cm	0.45cm	切先を欠損する。背片闇だが刃部の反り著しい。茎部に木質残存。			
S 1	東宗像 第2号木棺墓	砥 石	14.5cm	7.6 cm	3.7 cm	断面長方形で大型。4面使用。砂岩質。			

挿表14 東宗像跡古墳及び古墳以外の埋葬施設出土鉄器・砥石觀察表

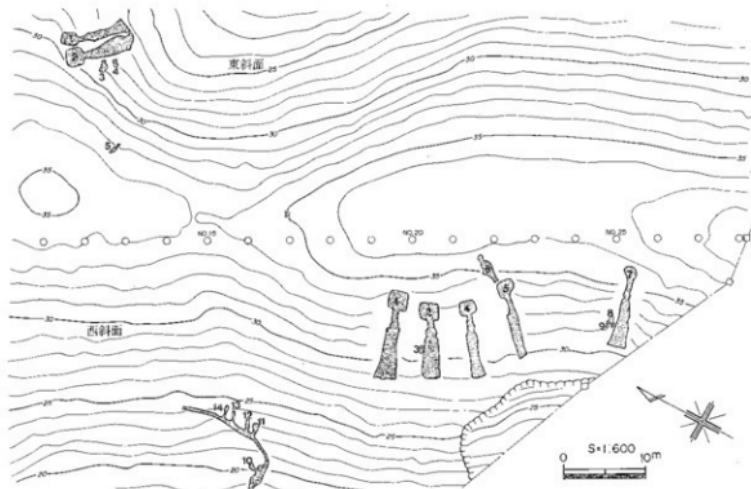
第5章 横穴の調査

第1節 調査の概要（挿図251・252）

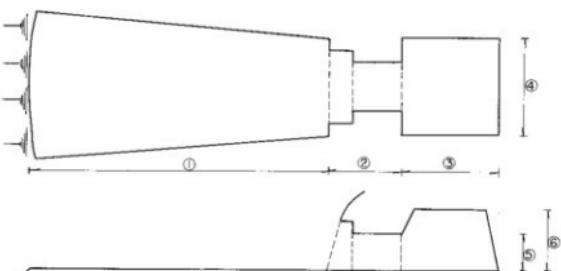
本遺跡東西両斜面において、総計19基の横穴を検出した。調査は米子市教育委員会が行なった試掘第9トレンチを参考に、同トレンチの標高を中心として、調査区全域を最終的に地表面まで掘り下げるという方法で行なった。また、できる限り、前庭縦断面の土層実測を行ない追跡等の痕跡観察に努めたが、横穴の上下に打った測量基本杭が前庭中央に設定し得なかったものもあり、正確に全横穴の前庭土層観察をなすに至らなかった。なお、かかる“横穴”という用語については、本横穴群に特徴的な所謂小横穴の性格が不明なため、あえて“横穴墓”とせず、“横穴”として一括し報告した。各横穴出土人骨の取り上げは、鳥取大学医学部井上貴央先生にお願いした。調査した横穴は挿図251のような位置関係にある。

なお、横穴各部の名称については様々な記述例があるが、本報告書では挿図252の通りとした。

①前庭長 ②羨道長 ③玄室長 ④玄室幅 ⑤羨道高 ⑥玄室高



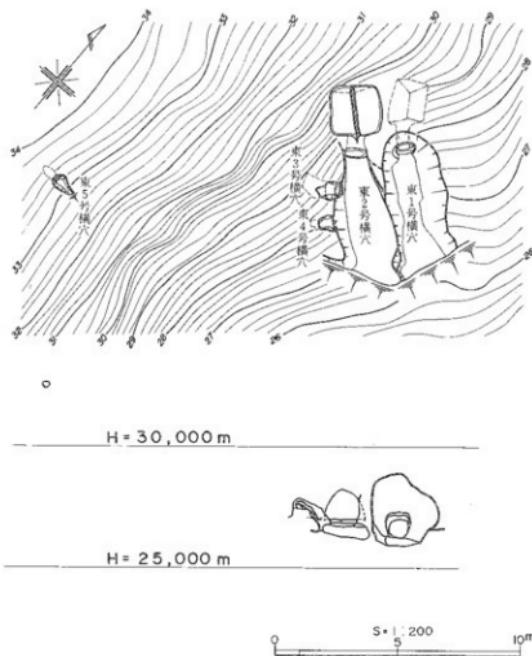
挿図251 東宗像遺跡横穴配置図



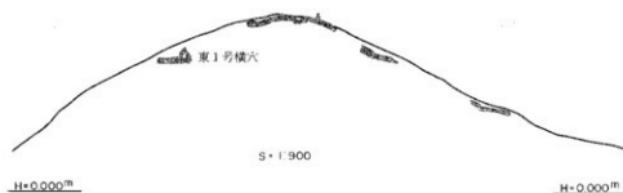
挿図252 横穴各部の名称

第2節 東斜面の横穴群（挿図253・254、図版80）

東斜面では、本遺跡調査区のほぼ中央で標高26m付近の4基（東1号横穴～東4号横穴）と33m付近の1基（東5号横穴）の計5基を調査した。東1号横穴から東4号横穴までは1支群と考えられる。東斜面の他地域では、横穴は築造されていないが、これは、地山の岩質によるものであろう。以下各横穴の調査について述べる。

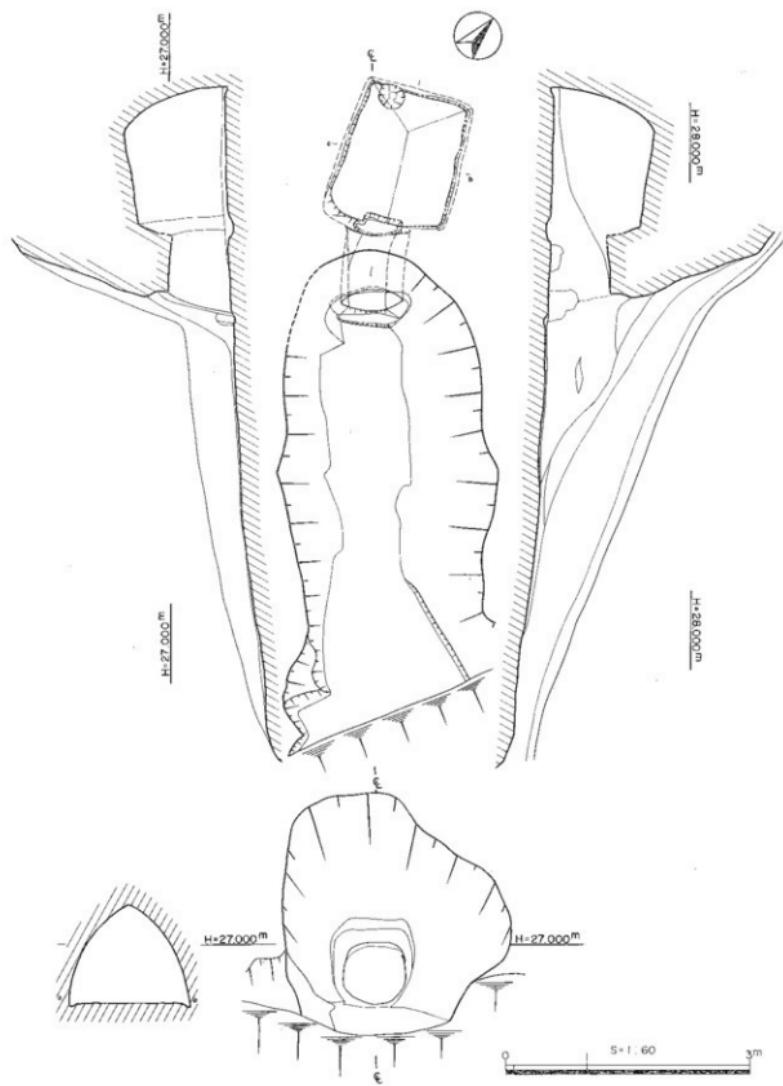


挿図253 東斜面の横穴群

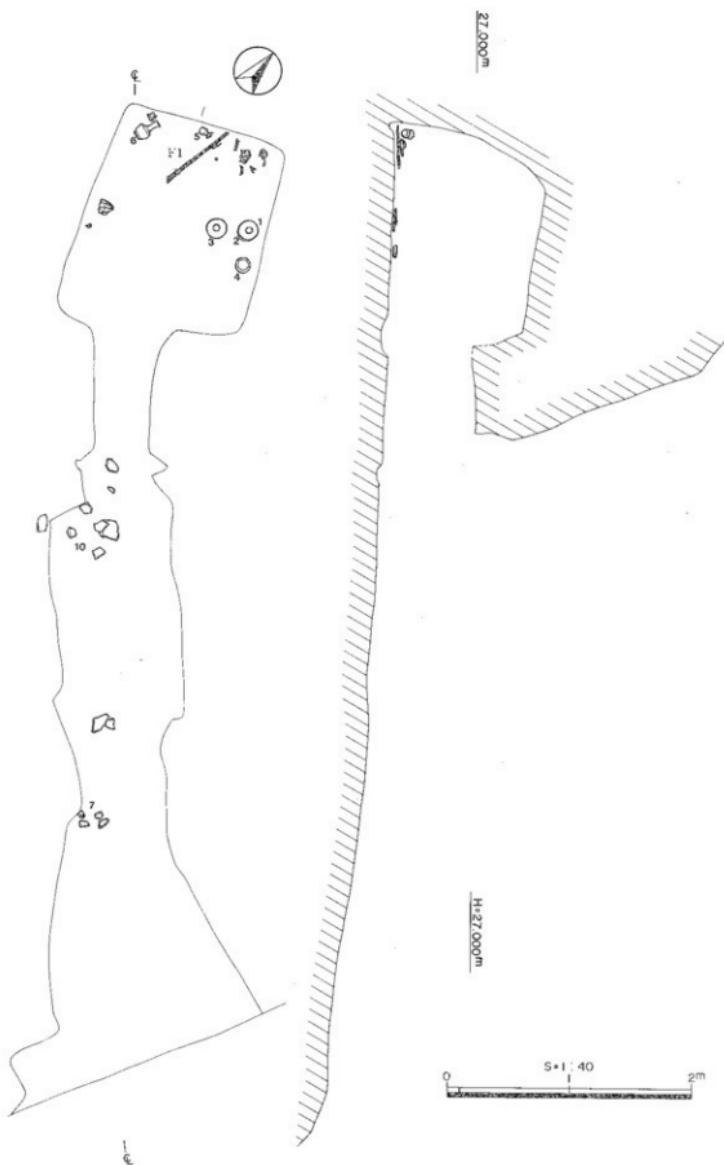


挿図254 東宗像遺跡地形横断面図

1. 東1号横穴（挿図255・256・257、図版78・79・101）



挿図255 東1号横穴実測図



擇圖256 東1号横穴遺物出土狀況図

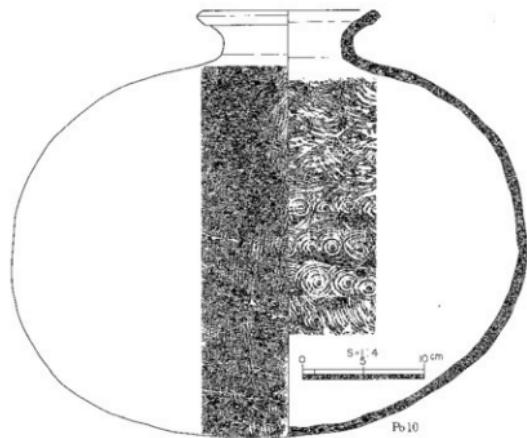
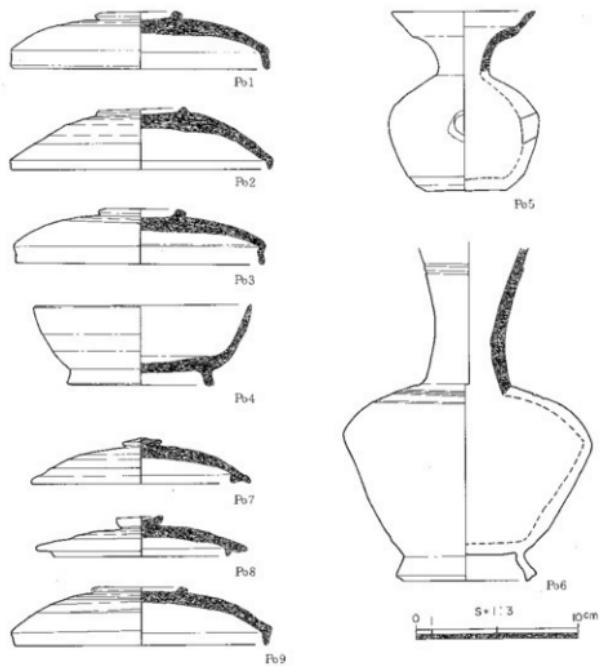
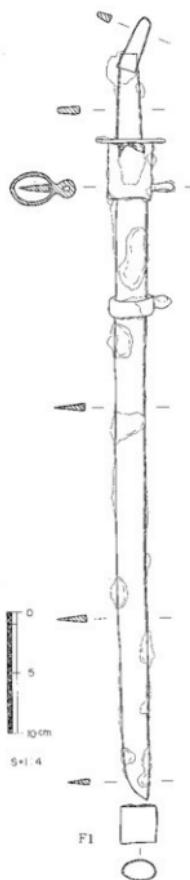


插图257 京1号墓出土遗物实测图



位 置 東 2 号横穴の北東、2.5mに位置し、南西側前庭を一部東 2 号横穴によって切られる。主軸を北西—南東におき南東方向に開口している。全長 785cm をはかる。開口部レベルは 26.3m である。

玄 室 玄室の平面形は、長方形を呈する。四注式系三角形断面妻入の天井形態をとる。床面は若干羨道側に傾く。奥壁及び左右の壁に、幅 2 ~ 3 cm の構築時の削痕を残す。その規模は奥行は 185cm、幅 149cm、天井の高さ中央部で 117cm をはかる。四壁の際に幅 8 cm、深さ 5 cm 内外の排水溝を有し、玄門部下にさらに一段、幅 25cm、深さ 6 cm 程の横溝を掘穿している。

羨 道 羨道は二重構造で、断面形はほぼ円形に近い。長さ 134cm をはかる。羨門部下に幅 18cm 内外、深さ 5 cm 程の横溝を有する。

前 庭 前庭の平面形は各側が若干広がる長方形に近い不整合形を呈する。北東側の壁及び羨道を穿つ奥壁は羨道側で標高 28.8m より前庭床面へ 263cm 削りだして形成されている。前庭規模は長さ 466cm、幅は羨道側で 101cm、谷側で 215cm をはかる。

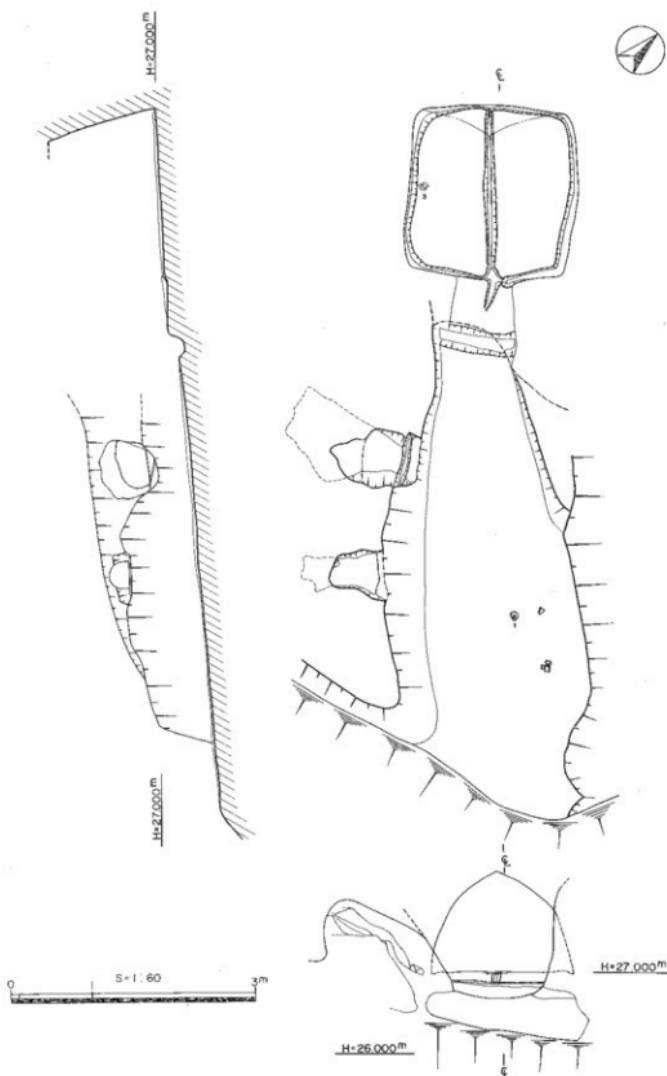
閉 塞 本横穴は閉塞用として羨門部下に横溝を有するが、石材等は検出されなかった。断定はできぬが、おそらくは羨門部に閉塞板をたてかけ、土による閉塞を行なったものであろう。前庭の埋土土層では特に不自然な盗掘等の痕跡はみられない。時間をおかぬ追葬、あるいは同時埋葬が行なわれたものと思われる。

遺 物 出 土 状 況 玄室内奥側を中心として、性別不明の人骨片が検出された。その人骨片は若年者と成人のものである。人骨の他玄室からは、須恵器・鉄製品が検出された。玄室奥側で長頸壺 Po 6、腺 Po 5、鐵刀 F 1 が出土し、玄室中央部からは蓋坏の蓋 3 個 Po 1・2・3 と身 1 個 Po 4 がいずれも口縁部を下にした状態で出土した。このうちの蓋 2 個 Po 1・2 は意識的に重ねられていた。この他、前庭羨門部よりから横版 Po 10 が破片で検出された。この破片は南西側に隣接する東 2 号横穴前庭にも散在していた。他に前庭より蓋坏の蓋 Po 7・8 等が破片で出土した。

土器番号	出土経路	事 種	①(1) 壁 ②(2) 頂 ③(3) 底 ④(4) 最大径	形 性	手 法	胎 土	成 成	色 調	備 考
Po 1	東 1 号横穴	蓋環の裏	⑦15.6 ② 3.6	天井頂部にとても簡単な壁状つまみをもつ。1脚脚部近くで段をなし、下方に長い縫合線がある。口縫部は丸い。	天井部外面は壁状つまみとその内部を除いて陶胎へタケリ調製。底は回転ナナ調製。	窓 砂粒を含む。	良	淡 水 白	ロクロ回転右回り。鑑は焼き痕跡が残る。つまみはハリツケ。
Po 2	東 1 号横穴	蓋環の裏	⑦15.9 ② 3.9	天井頂部に複数小壁状つまみをもつ。口縫部附近で段をなし、下方に短く縫合線がある。口縫部は丸い。	天井部外面は壁状つまみとその内部を除いて陶胎へタケリ調製。天井部内面は仕上げナナ調製。底は回転ナナ調製。	窓 砂粒を含む。	良	淡 水 白	ロクロ回転右回り。窓は焼き痕跡が残る。つまみはハリツケ。
Po 3	東 1 号横穴	蓋環の裏	⑦45.2 ② 3.4	天井頂部にとても簡単な壁状つまみをもつ。口縫部附近で段をなし、下方に長い縫合線がある。口縫部は丸い。	天井部外面は壁状つまみとその内部を除いて陶胎へタケリ調製。天井部内面は仕上げナナ調製。	窓 砂粒を含む。	良	赤 灰 黄	赤みがかった淡灰黄色。
Po 4	東 1 号横穴	蓋環の裏	⑦13.3 ② 5.0 ③ 8.3	天井頂部にとても簡単な壁状つまみをもつ。口縫部附近で段をなし、下方に長い縫合線がある。口縫部は丸い。	天井部外面は壁状つまみとその内部を除いて陶胎へタケリ調製。天井部内面は仕上げナナ調製。底は回転ナナ調製。	窓 砂粒を含む。	良	赤 灰 黄	赤みがかった淡灰黄色。
Po 5	東 1 号横穴	脚	⑦ 8.8 ②11.1 ③ 4.9 ④ 9.2	口縫部はやや外側気味に上外方にのびる。口縫部は丸い。窓はやや外方にふんばり、水平面近く屈する。	口縫部はやや外側気味に上外方にのびる。口縫部は丸い。窓はやや外方にふんばり、水平面近く屈する。	窓 砂粒を含む。	良	赤 灰 黄	ロクロ回転右回り。
Po 6	東 1 号横穴	長脚窓	⑦ 7.5 ④55.3	口縫部はやや外側気味に上外方にのびる。口縫部は丸い。窓はやや外方にふんばり、水平面近く屈する。	口縫部はやや外側気味に上外方にのびる。口縫部は丸い。窓はやや外方にふんばり、水平面近く屈する。	窓 砂粒を含む。	良	赤 灰 黄	ロクロ回転右回り。
Po 7	東 1 号横穴	蓋環の裏	⑦13.3 ② 2.9	天井頂部に複数のつまみを有す。口縫部に窓がありをもつ。かえりは口縫部から下方に突出しない。	天井部外面は半球形のつまみをもつて回転ヘタケリ調製。底は回転ナナ調製。	窓 砂粒を含む。	やや良	赤	ロクロ回転右回り。
Po 8	東 1 号横穴	蓋環の裏	⑦13.0 - 39.6 ② 2.5	天井頂部に中央部の凹込みをもつ。口縫部内面にかえりをもつ。かえりは口縫部から下方に突出する。	天井部外面は凹込みをもつて回転ヘタケリ調製。口縫部内面仕上げナナ調製。底は回転ナナ調製。	窓	良	淡 水 白	ロクロ回転右回り。つまみはハリツケ。
Po 9	東 1 号横穴	蓋環の裏	⑦15.4 ② 3.6	天井頂部にとても簡単な壁状つまみをもつ。1脚脚部附近で段をなし、下方や中腹附近に縫合線がある。口縫部は丸い。	天井部外面は壁状つまみとその内部を除いて陶胎へタケリ調製。天井部内面仕上げナナ調製。底は回転ナナ調製。	窓 砂粒を含む。	良	淡 水 白	ロクロ回転右回り。つまみはハリツケ。
Po 10	東 1 号及び 2 号横穴前 庭	模倣	⑦44.2 ②55.2 ④42.1	大きく外脛し、上外方にのびる口縫部は複数で段をなし、さらに外方にのび縫合線が複数ある。最大径は脚部中央のやや下にある。	口縫部前面は複数のつまみをもつて回転ヘタケリ調製。脚部以下外側平行窓。内面同心円タキ。	やや窓 砂粒を含む。	良	淡 青 灰 白	

表15 東 1 号横穴出土遺物観察表

2. 東2号横穴（挿図258・259、図版80・101）



挿図258 東2号横穴実測図

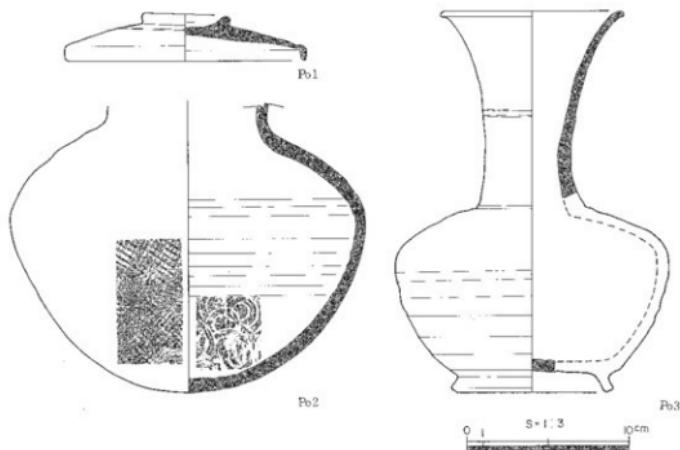


図259 東2号横穴出土遺物実測図

位 置 東1号横穴の南西、2.5mに位置する。主軸を北西—南東におき、南東方向に開口している。羨道及び玄室の天井部が完全に崩落し、調査中にも玄室南西壁が崩れるなど調査は難行した。全長865cmをはかる。開口部レベルは26.9mである。

玄 室 玄室の平面形は長方形を尾する。崩落をまぬがれた奥壁から判断すると、四注式系三角形断面を有する天井形態をとる。床面は若干羨道側に傾く。その規模は奥行215cm、幅207cm、天井の高さは奥壁で125cmをはかる。四壁の際及び玄室中央部に、幅10cm内外、深さ4cm程度の排水溝を有する。この排水溝は羨道中央付近で消滅している。

羨 道 羨道は壁及び天井がすべて崩落しているため、入口形態及び断面形とも不明である。長さ92cmをはかる。羨門部下に幅約30cmの横溝があり、前庭との間に高低差15cm程度の段を設けている。

前 庭 前庭の平面形は谷側が広がる台形を呈する。長さ558cm、幅は羨道側で85cm、谷側で205cmをはかる。前庭南西側の壁に、東3・東4号横穴が穿たれている。

閉 離 本横穴からは羨門部下の横溝の他は、閉塞用の石材等は検出されなかった。木材あるいは土を使用した閉塞が行なわれたものと思われる。

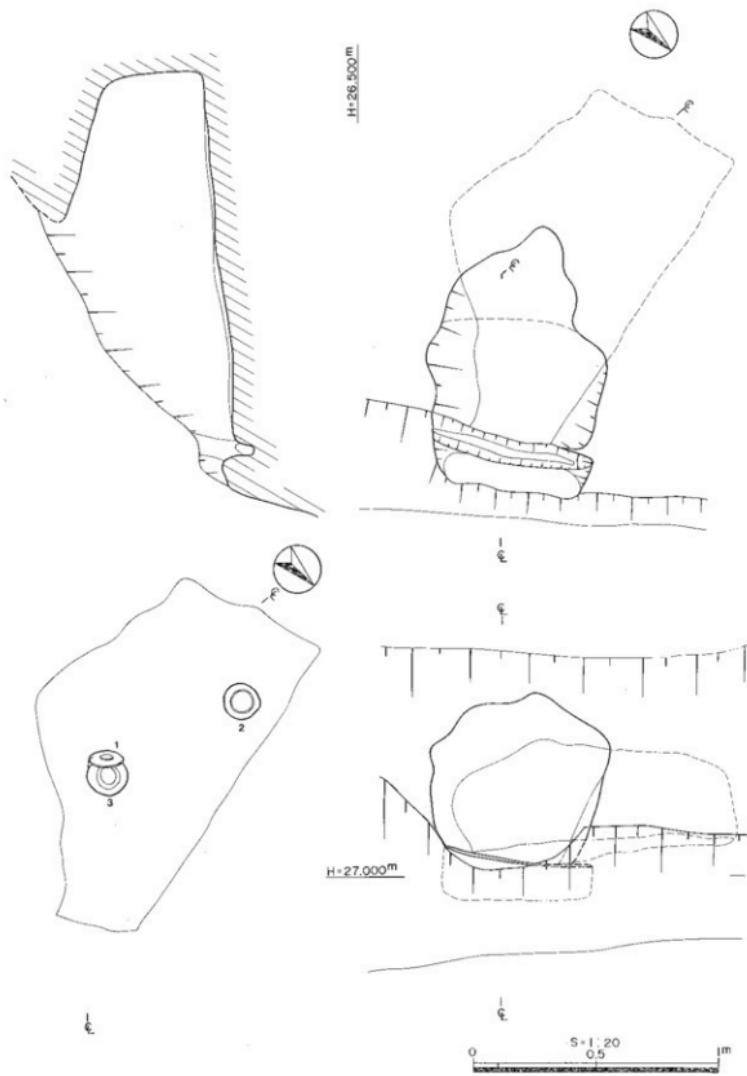
遺物出土状況 遺物は、玄室の天井及び壁が崩落した際に、土砂による二次的移動を大きく受けたものとみられる。

玄室南西壁際で長頸壺Po3を床面よりかなり上で検出した。この他の玄室、羨道から遺物は出土せず、前庭で蓋壺の蓋Po1と須恵器細片がわずかに検出されたのみである。

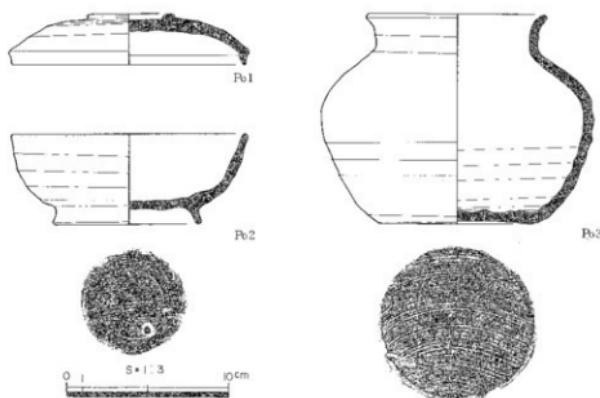
土器番号	出土遺構	若 年	①上 ②側 ③底 ④縫合部	形 番	手 法	胎 土	施 成	色 調	備 考
Po 1	東2号横穴	蓋壺の蓋	④34.6 ③ 3.0	天井頂部に斬ぎた状つまみをもつ。口溝 縫合部で段をなし。下方に縫合部。 口縫合部に丸い。	凹凸ナテ調型。	やや密 砂粒を含む。	良	淡灰・色 白	口縫合部に凹 凸ナテ調型 の跡がある。 蓋壺の蓋。
Po 2	東2号横穴	蓋	④7.8	口縫合部以上彫刻。縫合部中位がよくはる。終 大抵は縫合部中位にある。底面はない。	縫合外縫口以下平行テタキ。縫合内縫部 まで凹凸ナテ調型。中位縫合部ハクツリ 砂粒を含む。	やや密 砂粒を含む。	良	淡灰・色 白	縫合外縫口以下 平行テタキ。
Po 3	東2号横穴	長颈壺	①10.8 ②27.0 ③ 9.1 ④16.8	1.口縫合部は削除して長い、とれ方へのびる。 口縫合部で段をなし。内部へ縫合部を残す。 口縫合部は2.2系の縫合部を有す。縫合部はや や平らにはりつけられ、縫合部は2.2系の縫合 部は外方にふりほり。縫合部を残す。	縫合部平以下高石部まで斜面ヘラツリ調 型。2.は口縫合部を削除。	密	良	暗灰・色 白	ロフロ同範同向 一張灰物付 器。

表15 東2号横穴出土遺物観察表

3. 東3号横穴（挿図260・261、図版81・101）



挿図260 東3号横穴実測図



挿図261 東3号横穴出土遺物実測図

位 置 東2号横穴の前庭南側壁面に掘穿された小規模な横穴である。同じく南西側壁面に掘穿された東4号横穴より東2号横穴の玄室側に位置する。主軸を西南西—東北東におき、東北東方向に開口している。開口部レベルは東2号横穴前庭床面より約45cm高い27.1mで全長167cmをはかる。

玄 室 玄室と羨道の境界が明瞭でないため、一括し玄室として取り扱う。平面形は不整五角形、横断面形はほぼ長方形を呈し、丸天井系方形断面の天井形態をとる。床面は前庭側に若干傾く。その規模は奥行147cm、幅と高さは、いずれも中央部で64cm、61cmをはかる。玄門部下に幅10cm内外、深さ8cmの横溝を有する。

前 庭 前庭は、東2号横穴前庭との関連もあり、極端に長さの短いもので長方形を呈する。長さ10cmをはかる。

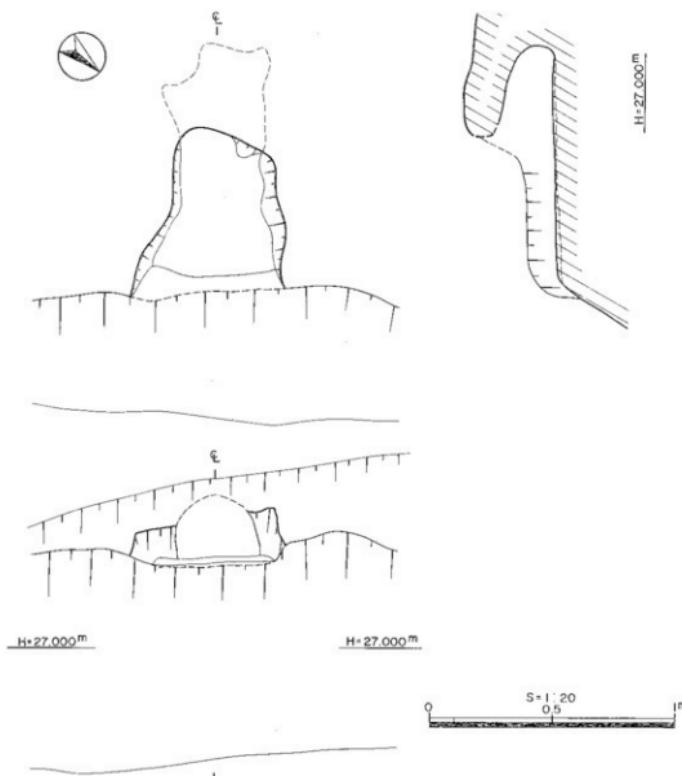
閉 塞 入口部下に横溝がある他は、石材等の検出はなかった。閉塞板を使用した閉塞の可能性を考えられる。

遺物出土 状況 玄室内床面より、玄門部付近で短頭壺Po3の上に蓋壺の蓋Po1が被さる状態で出土した他、奥側で蓋壺の身Po2を検出している。

土器番号	出土遺構	器種	①口 ②肩 ③腹 ④底 ⑤縁	形 態	手 法	附 上	施 成	色 調	備 考
Po 1	東3号横穴 蓋壺の蓋	①4.3 ②3.1	天井頂部に非常に無数の縫合つまみをもつ。天井部内張は、堅軟つまみとその内側を強いて凹凸へクサクリ調整。他の凹凸ナメ調整。	やや密 砂粒を含む。	真	淡 灰 色	ロクロ加熱有り。 つまみはハリツケ。		
Po 2	東3号横穴 蓋壺の身	①14.4 ②5.6 ③8.6	上方方にのびる口縫部をもつ。口縫端部は丸い。高台はやや外方にふんばり、底部は強く内側へ偏曲する。口縫部は丸い。	凹凸ナメ調整。 砂粒を含む。	真	淡 灰 色	ロクロ加熱有り。 ハリツケ。		
Po 3	東3号横穴 短頭壺	①10.8 ②12.9 ③9.4	外縁は口縫部は短く、縫部はやや丸い。 嵌入部は脚部中央位にある。底は平たい。	脚部下平外縫部凹輪へラケヅリ調整。 底部は静止あたり底が残る。は頭部ナメ調整。	やや密 砂粒を含む。	真	墨褐色に近 い灰色	ロクロ加熱有り。	

挿表17 東3号横穴出土遺物観察表

4. 東4号横穴（挿図262、図版81）



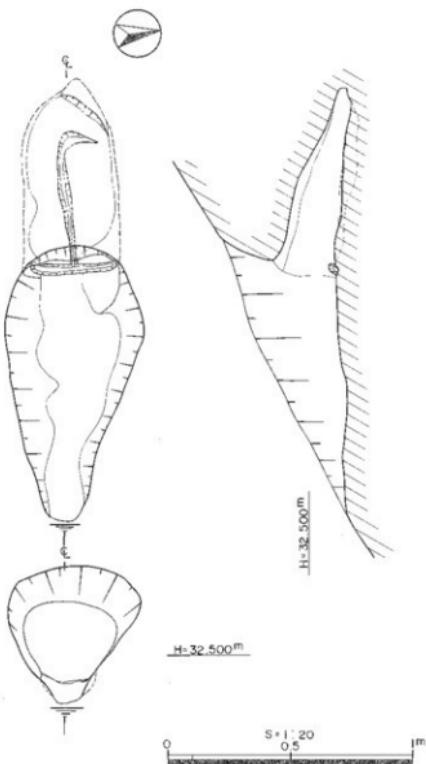
挿図262 東4号横穴実測図

位 置 東2号横穴の前庭南西側壁面谷側に掘穿された小規模な横穴である。主軸を南西—北東におき、北東方向に開口している。開口部レベルは、東2号横穴前庭床面より81cm高い27.4mである。全長102cmをはかる本遺跡横穴群中最小の横穴である。

玄 室 玄室と羨道の境界が明瞭でないため、一括し玄室として取り扱う。平面形は前庭側に広がる不整台形を呈する。入口部が大きく崩落しているが天井は所謂蒲鉾形に似た丸天井系方形断面の形態をとる。床面はほぼ水平でその規模は奥行95cm、幅と高さは、いずれも中央部で35cm、25cmをはかる。

前 庭 前庭は、東2号横穴前庭との関連もあり、極端に長さの短いもので台形を呈する。長さ7cmをはかる。閉塞状況は不明で、遺物は検出されなかった。

5. 東 5 号横穴 (挿図263、図版82)



挿図263 東 5 号横穴実測図

位 置 東 2 号横穴の南西約12mに一基のみ単独で存在する小規模な横穴である。主軸を西→東におき、東方向に向開口している。開口部レベルは32.4m、全長182cmをはかる。

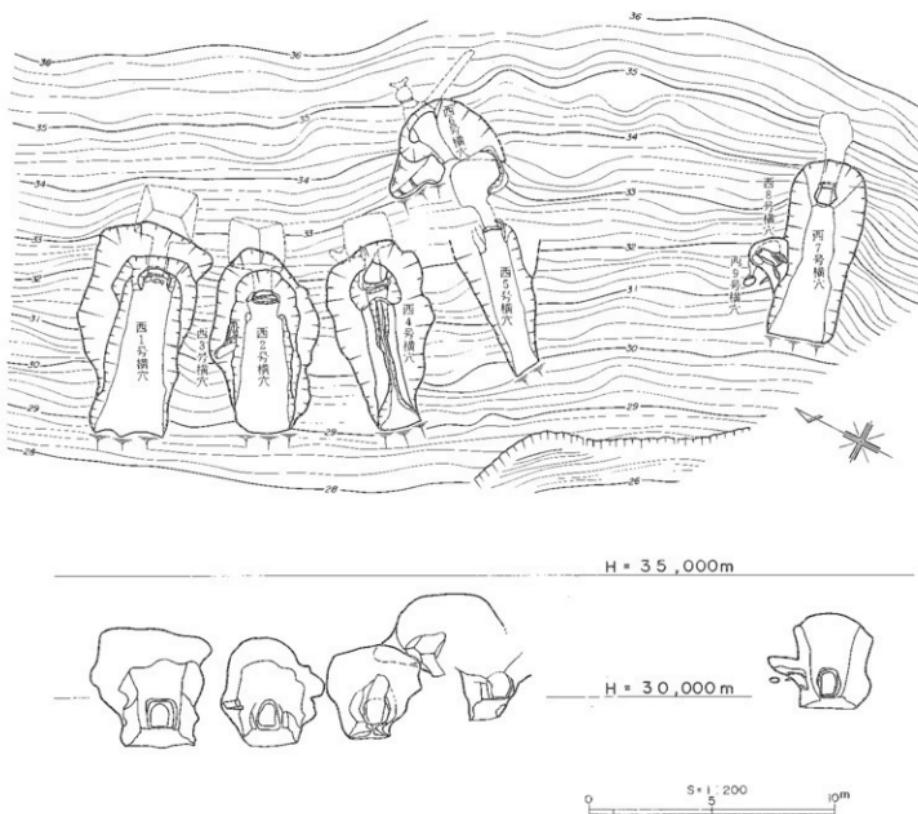
玄 室 玄室と羨道の境界が明瞭でないため、一括し玄室として取り扱う。平面形は長方形で、丸天井系方形断面の天井形態をとる。床面は成形が荒く平坦でない。その規模は、奥行80cm、幅と高さは中央部で各々35cm、23cmをはかる。玄室中央部に釣り針状の形態を持った幅5cm、深さ2cm内外の排水溝を有し、幅4cm、深さ3cm程の玄門部下の横溝で消滅している。

前 庭 前庭の平面形は細長い不整形で、約50cm地山を掘り込んで形成されている。長さ102cmをはかる。

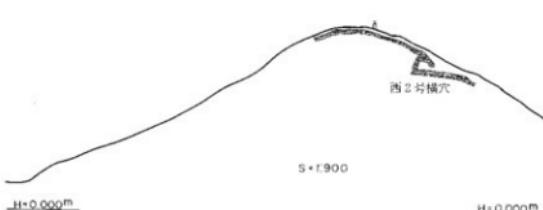
閉 塞 閉塞施設として、玄門部下に横溝を有する他は、石材等の検出を見なかった。閉塞板を使用した閉塞の可能性が高い。遺物は検出されなかった。

第3節 西斜面南側の横穴群（挿図264・265、図版83）

西斜面では、本遺跡調査区の南側、標高29m付近で9基（西1号横穴～西9号横穴）を調査した。しかし調査区が道路建設予定幅内のみに限られていたため、群全体を完掘するに至らなかった。調査区の南側にはまだ相当数の横穴が存在するものと思われる。以下各横穴の調査について述べる。



挿図264 西斜面南側の横穴群



挿図265
京奈像遺跡地形横断面図

1. 西 1 号横穴（挿図266・267・268・269、図版84・85・102）

位 置 西 2 号横穴の北西 4 m に位置する。主軸を東北東一西南西におき、西南西方向に開口する。発掘調査した本遺跡の横穴群中、西 2 号横穴と並んで最も整美に形成された横穴である。全長 1047 cm をはかる。開口部レベルは 28.8 m である。

玄 室 玄室床面の平面形は長方形を呈する。横断面形は台形で、四注式系三角形断面平入の天井形態とする。一部壁面が剥落した箇所があったが、掘穿時の削痕等はみられず、細部まで非常に丁寧に作られている。玄室規模は奥行 215 cm、幅 240 cm、高さは中央部で 176 cm をはかる。床面はほぼ水平で四壁の際に幅 10 cm 内外、深さ 3 cm 程の排水溝が巡る。この排水溝を利用して、玄門部に段を設け、前庭・羨道からみて玄室を浮き上がらせている。玄室内南側に、須恵器の大甕 1 個体を破碎し、その破片を敷いた屍床が遺存していた。

羨 道 羨道は二重構造で、断面形はつり鐘形を呈する。羨門部下に高低差 12 cm 程の段を設け、前庭から羨道を浮き上げさせている。その段の前庭側から人頭大の割石 3 個が横一列に並んで検出された。羨道長 208 cm をはかる。

前 庭 前庭床面の平面形は、谷側に広がる台形を呈する。左右の壁及び羨道を穿つ奥壁は、羨道側で標高 32.9 m より前庭床面へ約 420 cm 削り出して形成されている。前庭規模は、長さ 624 cm、羨道側幅 158 cm、谷側幅 277 cm をはかる。

閉 塞 本横穴は、調査地区内で検出した他の規模の大きな横穴とは異なり、羨門部下の横溝は検出されず前述の如く人頭大の割石 3 個が羨門部下に一列に並べられて出土した。しかし、この 3 個の割石のみで羨門部を塞ぐことは量的に無理で、おそらくは羨門部下の段に閉塞板をたてかけ、その抱え積み（おさえ）としてこの割石を使用したと考えられる。また、同時に土による閉塞を行なったものであろう。

前庭埋土の土層をみると、かなり複雑な様相を呈するが、II 層が I 層を掘り込んでおり、追葬が行なわれたことを示す。またその上層の乱れは、盗掘痕跡とみられる。

**遺物出土
状況** 玄室内より 2 体分の人骨を検出した。1 体は成年男子、もう 1 体は若年女子？のものである。人骨はいずれも玄室南側の壁面近くで須恵器屍床の上に遺存していたが、埋葬順位等については不明である。この他、玄室内より須恵器・鉄製品の出土を見た。鉄製品は、玄室北側の須恵器屍床のきれめより鉄刀 2 振り F 1・2、鉄錆 6 本 F 3・4・5・6・7・8 が出土した他、刀子 2 本 F 9・10 が検出された。須恵器屍床は、須恵器の大甕 Po 15 を破碎し、玄室内南側に敷き並べたものである。この破片は大部分が表を出して敷かれており、一部で二重・三重に重なっていた。これは、玄室内遺物の二次的移動の可能性を示す。なお、羨道幅と復元した大甕の幅を比すると、若干羨道幅の方が広いが、この大甕を玄室内において破碎したものか否かは判断できない。須恵器屍床に利用された大甕の他に、玄室内より蓋環の蓋 2 個 Po 3・4、身 4 個 Po 1・2・5・6 が出土した。これらは、身 1 個 Po 1 を除いていずれも口縁部を下にした状態で須恵器屍床の上から出土した。このうち何個かは土器枕として利用されたものと思われる。

前庭からは、前庭羨門部側から直口蓋 Po 7 が、床面よりかなり浮いた状態で出土した他、谷側において蓋環の身 5 個 Po 8・9・10・11・13、蓋 1 個 Po 12 を検出した。

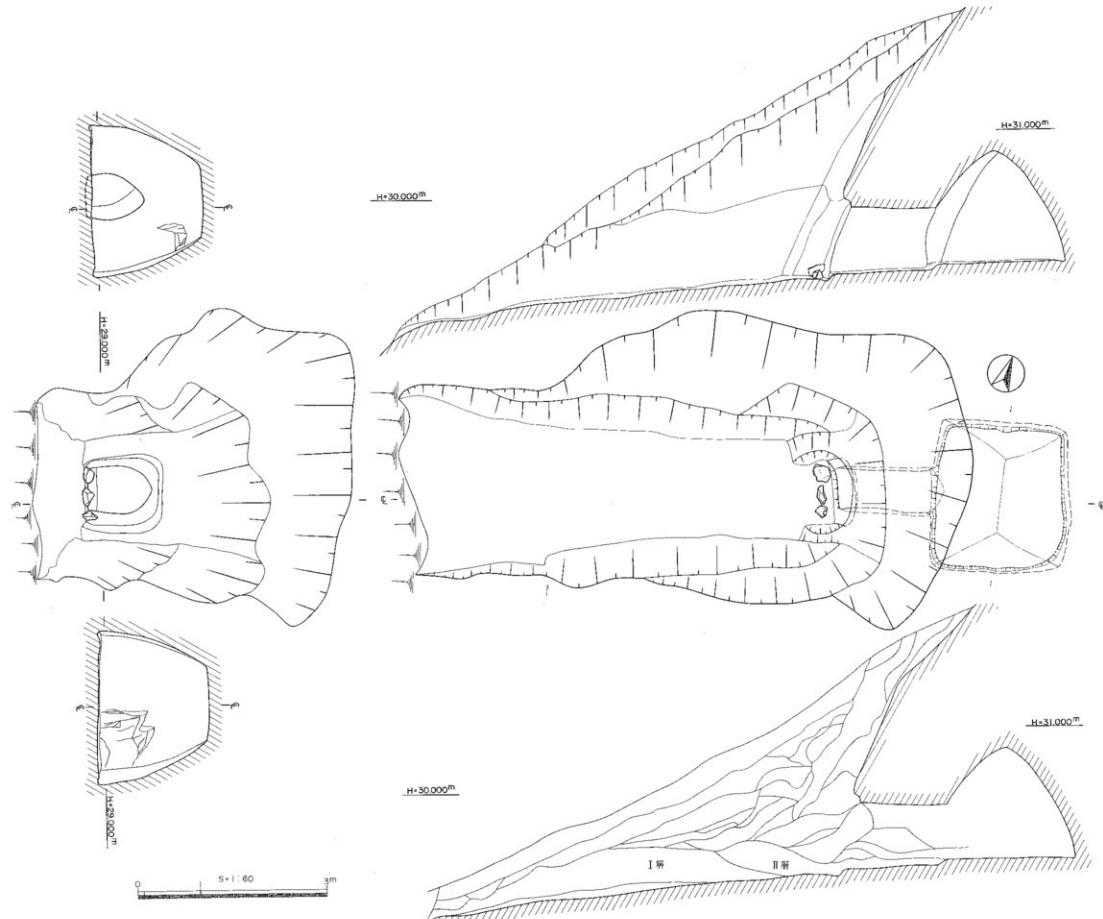


插图266 西1号横穴素描图

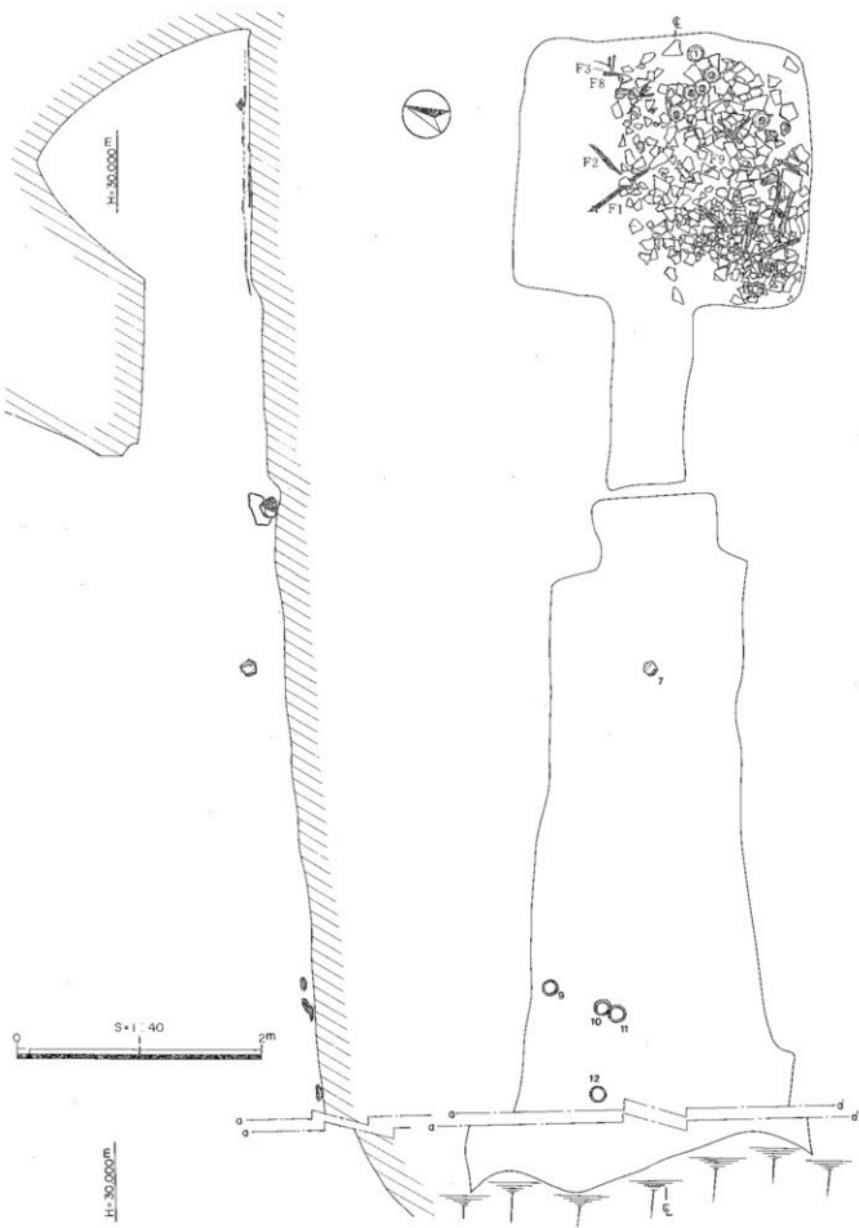


图267 西1号横穴遗物出土状况图

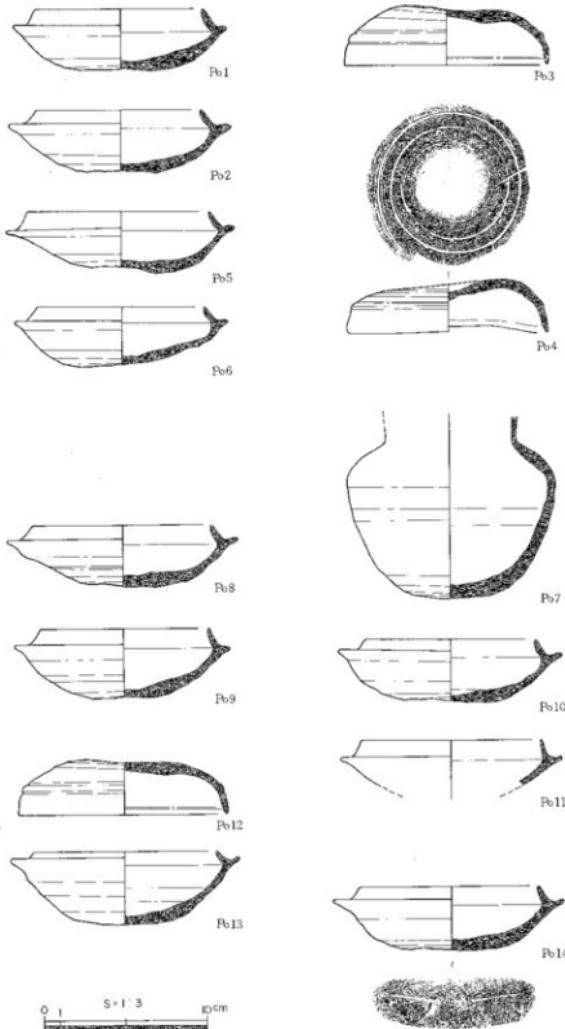
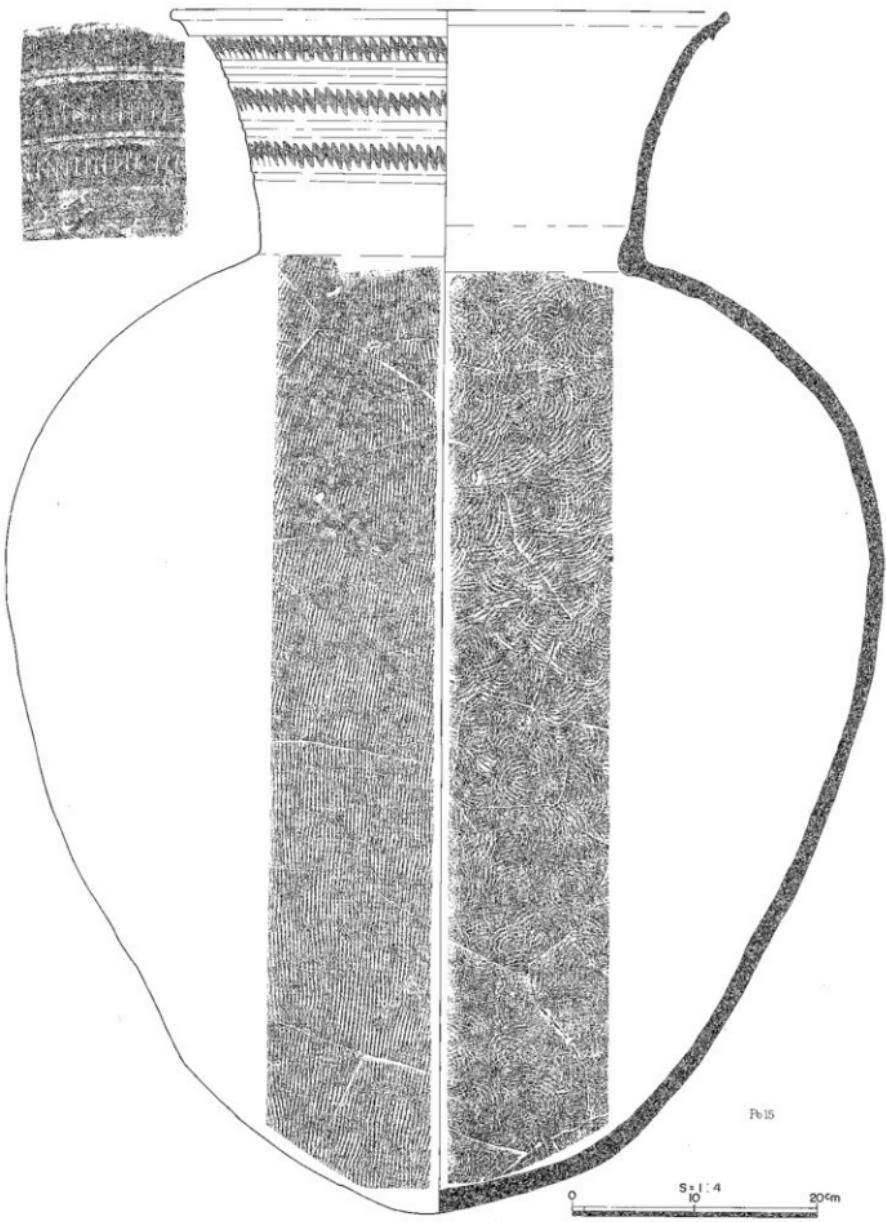


图268 西1号墓出土造物实测图

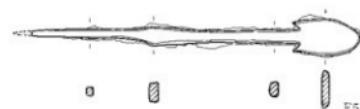




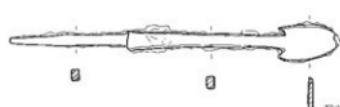
F3



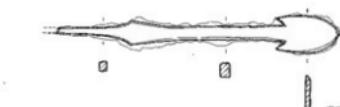
F4



F5



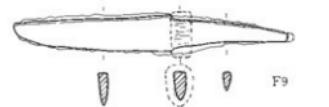
F6



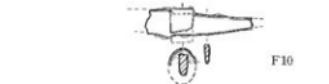
F7



F8

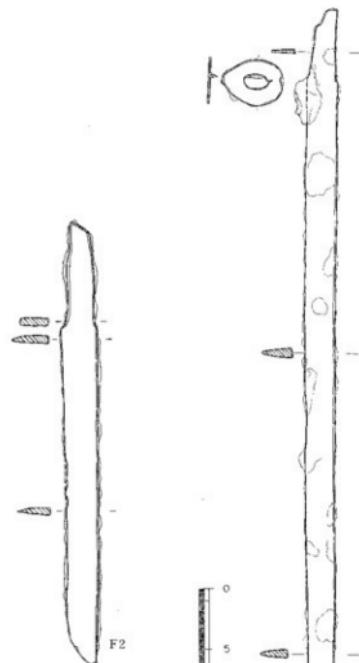


F9

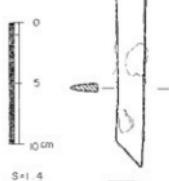


F10

0 S=1:2 5 10cm



F2



F1

插图269 西1号横穴出土遗物实测图

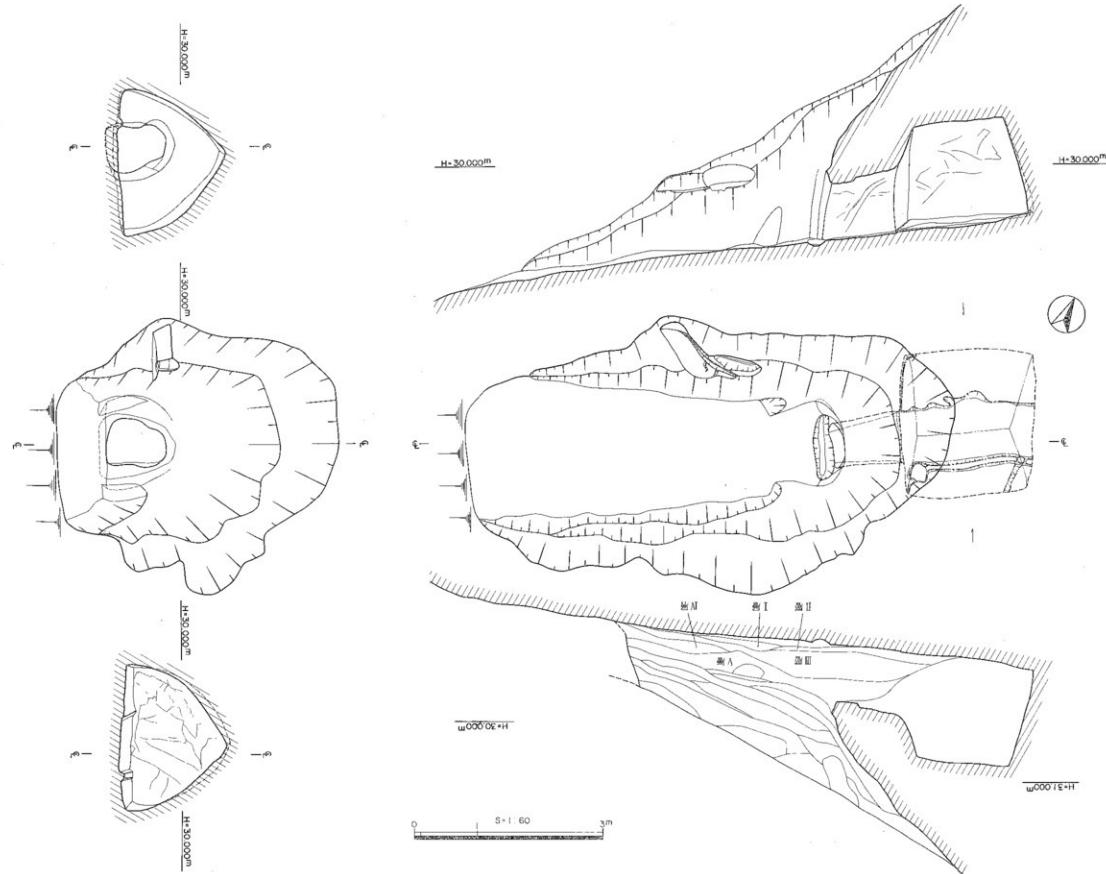


图270 西2号横穴实测图

土器番号	出土遺構	基 程	①X 住 ②Y 高 ③Z 厚 ④H 大人頭	形 態	手 法	胎 土	燒 成	色 斑	備 考
Po 1	西1号横穴	蓋環の身	①12.8~10.2 ②3.7 1.1	たちあがりは直線的に内傾する。たちあがり部端部および受壓先端は丸くおきめる。受壓はだれら。底盤は後へいくびで、すたい。	胎部外側面ハケタリ調整。他の胎部内側面ハケタリ調整。	吉 微砂粒を含む。	良	灰 一層 灰釉付着。	クロコ回転右回り。
Po 2	西1号横穴	蓋環の身	①13.2~10.1 ②3.8~1.6	たちあがりは直線的に内傾する。たちあがり部端部および受壓先端は丸くおきめる。底盤は後へいくびで、すたい。	胎部外側面ハケタリ調整。胎部内側面ハケタリ調整。他の胎部内側面ハケタリ調整。	吉 微砂粒を含む。	良	灰 灰 灰	クロコ回転右回り。
Po 3	西1号横穴	蓋环の身	①12.4 ②3.5	1)縫合部は右脇気筒に下る。1)縫合部と左脇気筒の端部を削り、長い棒を作ら。右脇気筒は丸くおきめる。1)縫合部を削る。2)縫合部は左脇気筒に下る。	天部外側面ハケタリ調整。胎部内側面ハケタリ調整。天部内側面ハケタリ調整。	やや粗 砂粒を含む。	良	暗 灰 灰	クロコ回転右回り。
Po 4	西1号横穴	蓋环の身	①12.1 ②2.9	口縫合はやや外方に開いてる。口縫合部と左脇気筒の端部を削り、長い棒を作ら。右脇気筒は丸くおきめる。1)縫合部を削る。2)縫合部は左脇気筒に下る。	天部外側面ハケタリ調整。胎部内側面ハケタリ調整。天部内側面ハケタリ調整。	やや粗 砂粒を含む。	良	暗 灰 灰	クロコ回転右回り。天井部ハラ夏可有。
Po 5	西1号横穴	蓋环の身	①13.6~11.1 ②3.8 0.9	たちあがりは直線的に内傾する。たちあがり部端部および受壓先端は丸くおきめる。受壓はだれら。底盤ははいびでつてある。	胎部外側面ハケタリ調整。他の胎部内側面ハケタリ調整。	吉 微砂粒を含む。	良	灰 灰 灰	クロコ回転右回り。
Po 6	西1号横穴	蓋环の身	①12.8~10.2 ②3.8~0.9	たちあがりは直線的に内傾する。たちあがり部端部および受壓先端は丸くおきめる。底盤ははいびでつてある。	天部外側面ハケタリ調整。胎部内側面ハケタリ調整。他の胎部内側面ハケタリ調整。	やや粗 3~4mmの砂粒を含む。	良	灰 灰 灰	クロコ回転右回り。
Po 7	西1号横穴	口唇部	①12.8	口縫合はまっすぐ上方方にひびる。口縫合部丸削。底盤は吉がはる。底盤はやや丸い。底盤は丸いひびでつてある。	胎部外側面ハケタリ調整。他の胎部内側面ハケタリ調整。底盤内側面ハケタリ調整。	吉 微砂粒を含む。	良	暗 灰 灰	クロコ回転右回り。
Po 8	西1号横穴	蓋环の身	①13.9~10.9 ②3.8~0.9	たちあがりは直線的に内傾する。たちあがり部端部および受壓先端は丸くおきめる。底盤ははいびでつてすたい。	胎部外側面ハケタリ調整。他の胎部内側面ハケタリ調整。	吉 微砂粒を含む。	良	外 面 内 面 灰 灰	クロコ回転右回り。
Po 9	西1号横穴	蓋环の身	①13.1~10.3 ②4.3~1.0	たちあがりはやや直線的に内傾する。たちあがり部端部はやや弧形。受壓はだれら。底盤は丸いひびでつてある。	天部外側面ハケタリ調整。他の胎部内側面ハケタリ調整。	吉 微砂粒を含む。	灰	灰 灰 灰	クロコ回転右回り。
Po10	西1号横穴	蓋环の身	①13.4~10.4 ②3.8~1.9	たちあがりは直線的に内傾する。たちあがり部端部および受壓先端は丸くおきめる。底盤ははいびでつてすたい。	胎部外側面ハケタリ調整。他の胎部内側面ハケタリ調整。	吉 微砂粒を含む。	良	暗 灰 灰	クロコ回転右回り。
Po11	西1号横穴	蓋环の身	①13.3~11.0 ②3.7 ~ 1.1	たちあがりは、やや直線的に内傾する。たちあがり部端部および受壓先端は丸くおきめる。底盤は丸いひびでつてある。	残存部内側面ハケタリ調整。	密	灰 白	白	クロコ回転右回り。
Po12	西1号横穴	蓋环の身	①12.7 ②3.4	口縫合部は右脇気筒に下る。口縫合部と左脇気筒の端部を削り、長い棒を作ら。右脇気筒は丸くおきめる。底盤は丸いひびでつてある。	天部外側面ハケタリ調整。胎部内側面ハケタリ調整。底盤内側面ハケタリ調整。	やや粗 砂粒を含む。	良	暗 灰 灰	クロコ回転右回り。
Po13	西1号横穴	蓋环の身	①13.9~11.1 ②4.5~0.6	たちあがりは直線的に内傾する。たちあがり部端部および受壓先端は丸くおきめる。底盤は丸いひびでつてある。	胎部外側面ハケタリ調整。底盤内側面ハケタリ調整。	密	やや不 規 則	外 面 内 面 灰 灰	クロコ回転右回り。
Po14	西1号横穴	蓋环の身	①14.0~11.0 ②3.9~1.0	たちあがりは直線的に内傾する。たちあがり部端部および受壓先端は丸くおきめる。底盤は丸いひびでつてある。	胎部外側面ハケタリ調整。底盤内側面ハケタリ調整。	やや粗 3~4mmの砂粒を含む。	良	暗 灰 灰	クロコ回転右回り。底部外側面へテグ付有。
Po15	西1号横穴	裏	①45.1 ②88.8 ③71.8	大型の底。右脇端部は外側。左脇端部は内側。底盤は丸いひびでつてある。底盤は丸いひびでつてある。底盤は丸いひびでつてある。底盤は丸いひびでつてある。	頭部以上回転ナカ調整。以下外側平行タグナ。内側同心円タグナ。	密	青 灰 灰	青 灰 灰	() 内は現存数値

擇表18 西1号横穴出土土遺物観察表

No	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	形 態
F 1	59.7	2.5	0.9	平造り鉄刀。鍔切先で角棒、斜角片開闊抉尻中細の形態をとる。
	5.0	3.9	0.2	倒崩形を呈する鉈。
F 2	36.4	3.1	0.6	鉈刀。“ふくらかれる”切先を持つ。角棒。不均等両開中細の形態をとる。茎尻不明。
F 3	14.2	1.5	0.3	鉈鐵。有茎闊抉三角形式。刃部の断面形態は鈍化が著しく不明。
F 4	14.4	1.6	0.3	鉈鐵。有茎闊抉三角形式。刃部の断面形態は鈍化が著しく不明。
F 5	(13.4)	1.6	0.4	鉈鐵。有茎闊抉三角形式。茎部一部欠損。
F 6	(13.4)	1.5	0.3	鉈鐵。有茎闊抉三角形式。先端部欠損。
F 7	(11.6)	1.6	0.4	鉈鐵。有茎闊抉三角形式。茎部一部欠損。
F 8	(8.6)	(0.6)	0.3	鉈鐵の茎部。
F 9	(11.3)	1.5	0.5	刀子。両開角棒。鍔を欠損するが同部に木質が残る。
F 10	(4.3)	(1.1)	?	刀子。両開?。鍔一部欠損。残存部内に木質が残る。

2. 西2号横穴（挿図270・271・272・273・274・275、図版87・88・89・103・104）

- 位置** 西1号横穴と西4号横穴の間に位置する。主軸を北東—南西におき、南北方向に開口する。西1号横穴と並んで整美な横穴である。開口部レベルは28.8m、全長904cmをかる。
- 玄室** 玄室床面の平面形は長方形を呈する。四注式系三角形断面妻入の天井形態をとる丁寧な作りの横穴である。玄室規模は奥行214cm、幅235cm、高さは中央部で158cmをかる。床面は羨道側に傾く。玄室奥側に向い左側に高さ4cm程の檜台、右側に有縁屍床を有する。これは縁の幅約7cm、高さ8cmで造り付けとなっている。玄門部に約4cmの段を設け、玄室を浮き上がらせている。
- 羨道** 羨道は二重構造で、玄室側天井が一部剥落しているが、残存部からみて断面形はつり鐘形である。羨門部下に幅30cm内外、深さ8cm程度の横溝を掘り込む。羨道長205cmをかる。
- 前庭** 前庭床面の平面形は、谷側に若干広がる台形を呈する。左右の壁及び羨道を穿つ奥壁は、羨道側で標高32.3mより前庭床面へ345cm割り出して形成されている。前庭規模は、長さ485cm、羨道側、谷側の幅はそれぞれ153cm、227cmをかる。
- 閉塞** 本横穴は、閉塞用施設として羨門部下に横溝を有する他、羨門部近くの前庭北側壁際で人頭大の割石4個を検出した。この割石はいずれも前庭床面から50~60cm程浮いた状況で出土しており、羨門部下から壁際への二次移動を受けたものと思われる。この二次移動を受けた際に前庭より石材が排除された可能性がないとはいえぬが、この4個の割石のみでは羨門を塞ぐことはできず、おそらくは前記した西1号横穴と同様の閉塞方法、すなわち閉塞板を羨門部の蓋とし、出土した割石をその埃え積み（おさえ）として土とともに使用する閉塞が行なわれたものであろう。
- 前庭埋土層をみると、床面に近い土層でかなり複雑な様相を呈する。すなわち1~V層において羨道側に向う切り合いがあり、数次にわたる追葬あるいは盗掘がかなり早い段階で行なわれたものと考えられる。
- 遺物出土** 本横穴からは、調査した本遺跡横穴群中最多の遺物が出土した。まず玄室からはほぼ全域で遺存状況の良好なものを含む人骨を多数検出した。人骨は10才代から熟年までの計7体分を数える。しかし、この人骨は全て再葬、改葬の可能性を含む二次的移動を受けており埋葬順位等については不明である。この他玄室からは須恵器・土小玉・石・鉄製品が出土している。鉄製品は玄門部側から刀子3本F1・2・3及び鉄針F4を検出した。また、玄室中央部の人骨下より長径3cmほどの小長円形の自然石2個S2・3を検出した。
- 玄室北側壁際から土製の小玉計183個J1~183を検出した。装身具として利用されたものと思われる。須恵器は玄室奥側から、脚部を意識的に欠いた高环2個Po1・2と、蓋環の蓋1個Po3、身3個Po4・5・6が、いずれも口縁部を下にした状態で出土した。高环は2個体間の距離がかなりあるが、蓋環とともに土器枕として利用された可能性がある。玄門部よりからは、蓋環の身3個Po7・8・9が同じく口縁部を下にした状態で出土している。
- 羨道からは玄門部との境界に長頸壺Po10、罐Po11、高环2個Po12・13が密集した状態で、中央部から平瓶Po15と蓋環の蓋Po14が検出された。
- 前庭からも多数の遺物が出土した。羨門部側の遺物は石・須恵器ともかなり大幅な二次移動を受けている。前述したように閉塞施設に伴うとみられる割石が4個あり、北側壁際の石の上には須恵器の蓋環Po16・18・24・26がのせられた状態で、その他磁石S1や提瓶Po36などを含む遺物もかなり床面から浮いた状況で出土した。この他、前庭中央及び谷側で罐Po22や高环Po34・35が出土している。



插271 西2号横穴造物出土状况图

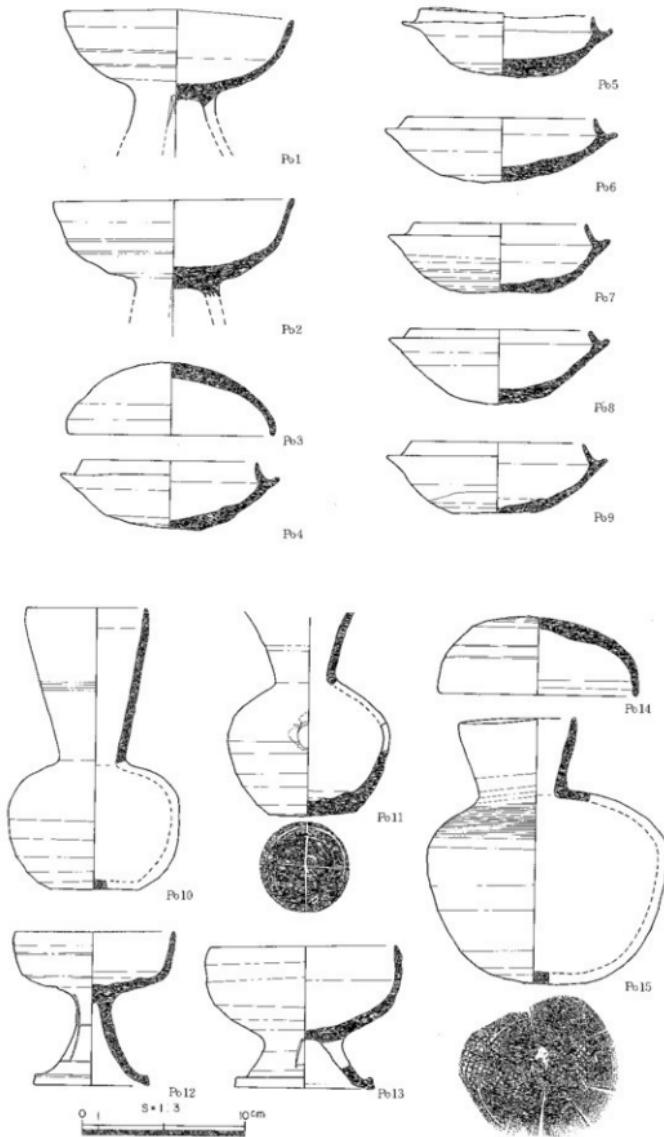


插图272 西2号横穴出土遗物实测图①

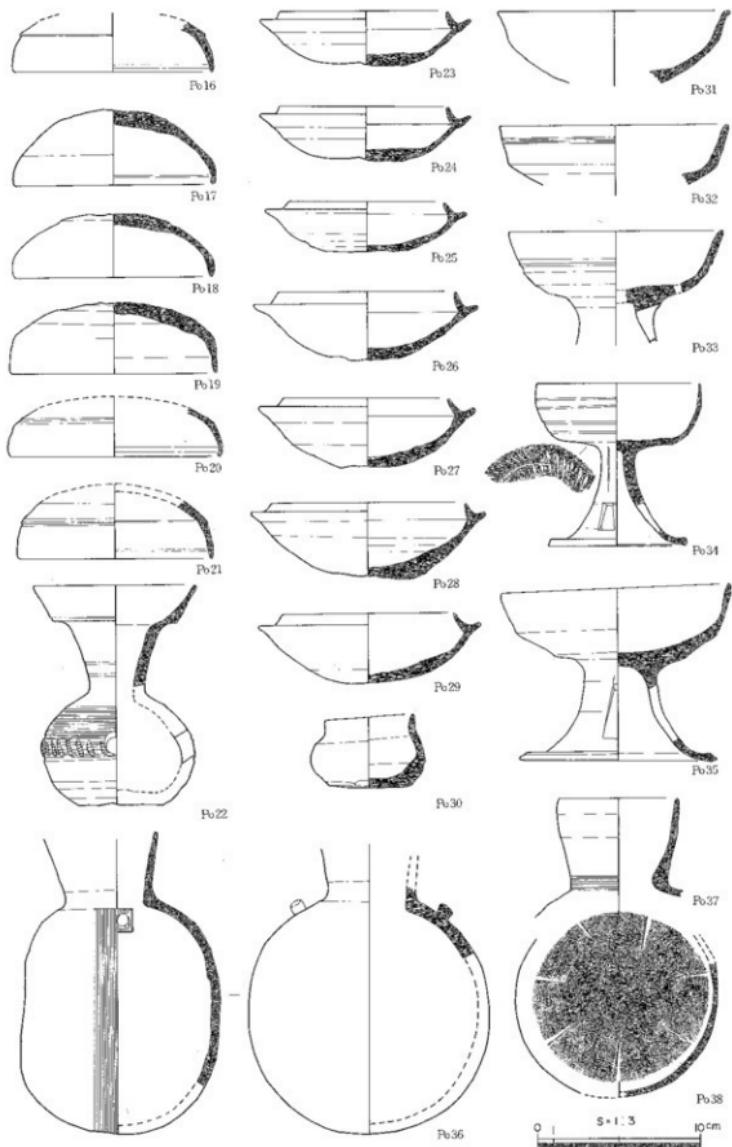
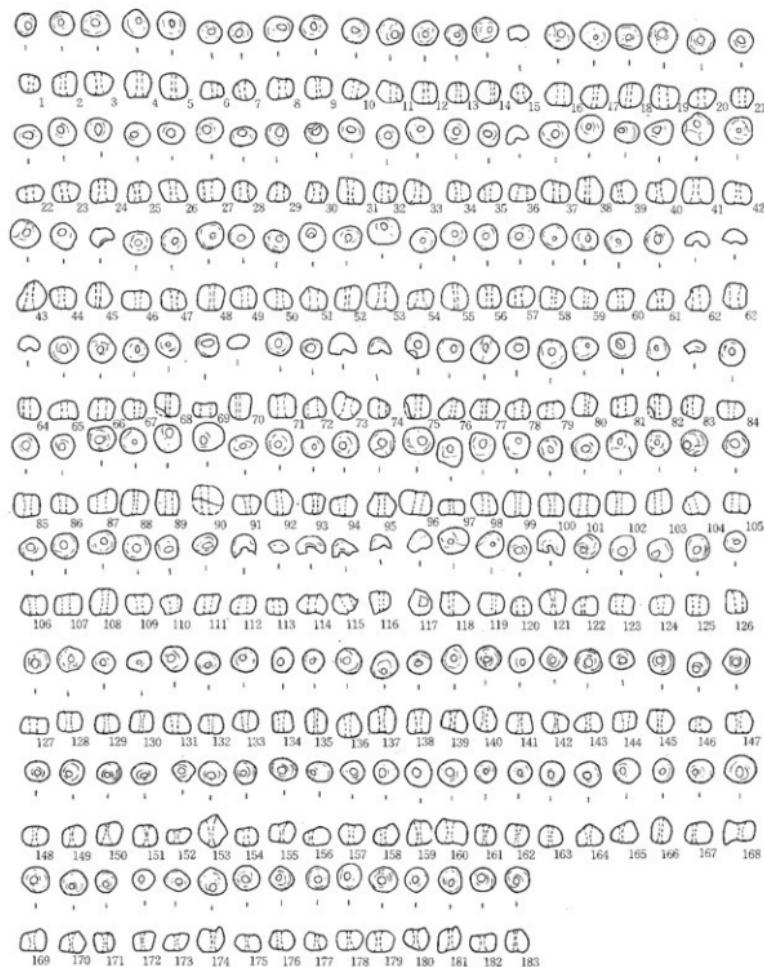
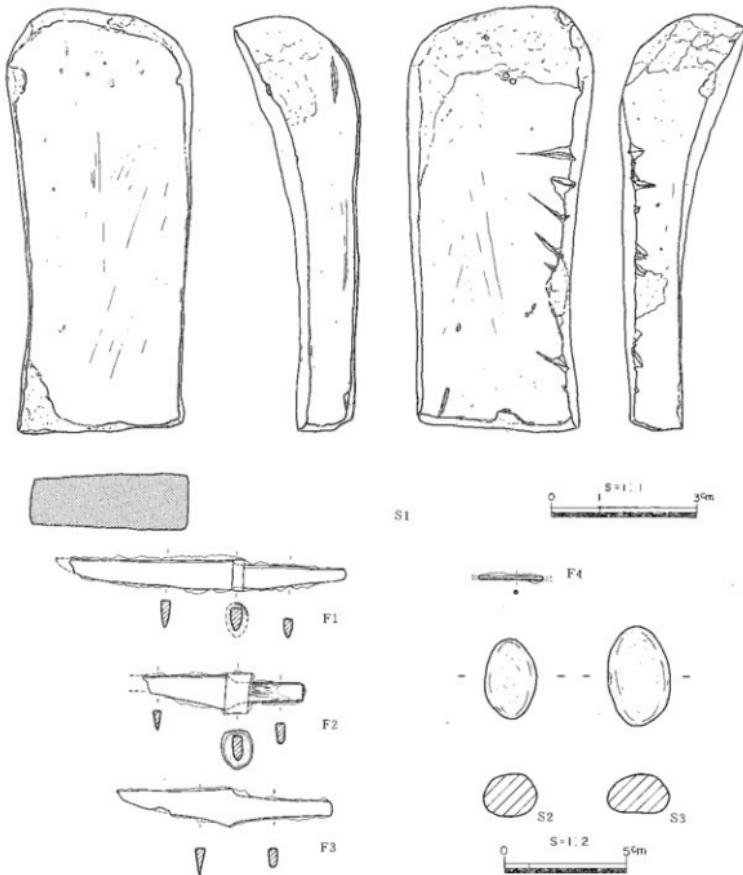


插图273 西2号横穴出土遗物实测图②



S=1:1
3cm

插图274 西2号横穴出土小玉宾测圆



插図275 西2号横穴出土遺物実測図

土器番号	出土遺構	器種	①口 ②茎 ③腹 ④底 ⑤蓋 ⑥柄	形 態	手 法	釉 土	焼 成	色 調	備 考
Po 1	西2号横穴	高杯	①14.6	脚部以下欠損。口部口縫部はやや内側突出し、上外方にのみ凹部はなく、おさめる。口縫部は内側に凹む。脚部2方向に透け孔を有する。脚部2方向に透け孔を有する。	環部底面内側仕上げナメ調査。他の回転ナメ調査。	密 微砂粒を含む。	良	淡灰白色	
Po 2	西2号横穴	高杯	①14.6	脚部以下欠損。外側口縫部は上方にのみ凹部はなく、おさめる。口縫部底面に2条の凹溝を有する。脚部2方向に透け孔を有する。	环部底面内側仕上げナメ調査。他の回転ナメ調査。	良	灰 色		
Po 3	西2号横穴	蓋杯の裏	①12.5 ②4.4	口縫部はやや内側突出する。口縫部は丸い。天井部は丸い。	天井部左へ切り欠切。同内面仕上げナメ調査。他の回転ナメ調査。	密 微砂粒を含む。	良	淡灰白色	
Po 4	西2号横穴	蓋杯の身	①43.7-10.6 ②4.2-1.1	たちあがりはやや外反張形で内傾する。たちあがりはやや内傾する。底部はいびつや平たい。	底部外表面へ切り欠切。同内面仕上げナメ調査。他の回転ナメ調査。	良	淡灰白色	ロクロ回転右回り。	
Po 5	西2号横穴	蓋杯の身	①32.8-10.6 ②3.8-1.0	たちあがりはやや内傾する。たちあがりはやや内傾する。底部は丸くおさめる。受部はだれる。側面跡のひび割れあり。底部はやや平たい。	底部外表面回転へナメ調査。同内面仕上げナメ調査。他の回転ナメ調査。	密 微砂粒を含む。	良	淡灰白色	ロクロ回転右回り。

表19 西2号横穴出土遺物観察表①

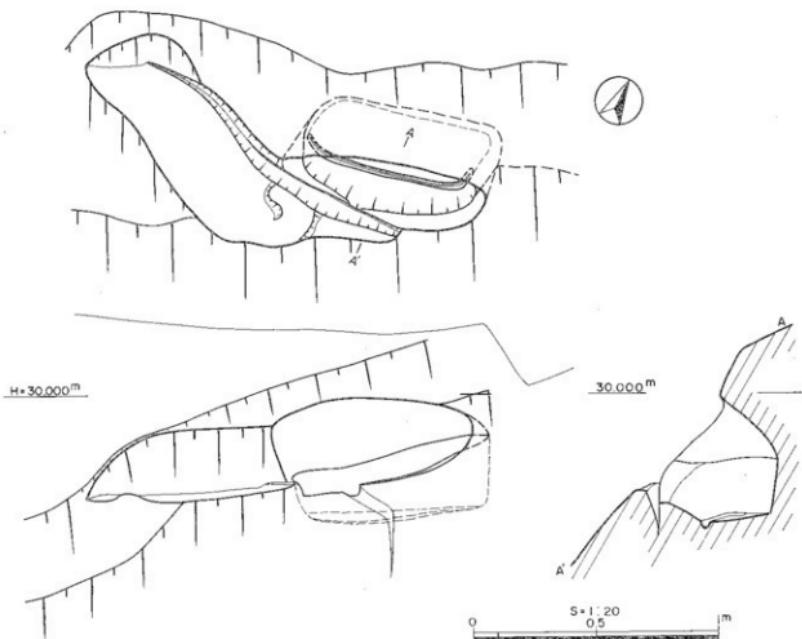
插圖20 兩件橫穴出土遺物觀察表(2)

No	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	形 態
F 1	(11.3)	1.3	(0.7)	刀子。両開?角棟。先端部及び縁一部欠損。縫部に木質が残る。
F 2	(6.6)	1.7	1.3	刀子。刃部一部欠損。両開?角棟。茎部及び縁内部に木質が残る。
F 3	8.9	1.6	0.4	刀子。両開角様。
F 4	(2.7)	0.2	0.2	鉛針か?
S 1	8.5	3.9	2.2	砥石。四面を使用。
S 2	3.3	2.1	1.7	自然丸石。
S 3	4.1	2.6	1.6	自然丸石。
				()内は現存数値

番号	直径	厚み	孔径	番号	直径	厚み	孔径	番号	直径	厚み	孔径
1	4	4	1.5	73	6	5.5	2	145	5.5	4.5	1.5
2	5	5	1	74	4.5	4	1.5	146	4.5	3.5	1.5
3	6	4.5	2	75	5	5	1.5	147	5.5	5	2
4	6	5	1	76	5	4.5	1.5	148	5	4	1.5
5	6	5	1	77	5.5	4	1	149	5	4.5	1
6	5	3.5	2	78	5	4.5	2	150	5.5	5	1.5
7	5	4	2	79	5.5	3.5	1.5	151	5	4.5	2
8	6	4.5	2	80	5	4.5	1	152	4.5	3	1.5
9	5.5	4.5	1	81	5	4.5	2	153	6	7	2.5
10	5.5	4	2	82	4.5	5	1	154	4.5	4	1.5
11	5.5	4.5	1.5	83	4.5	5	—	155	5	4.5	2
12	5.5	5	1.5	84	5	4	1.5	156	5	3.5	1.5
13	5	4	1	85	5.5	5	2	157	5	4	1.5
14	5	5	1	86	5	4	1	158	5	4.5	1.5
15	4	4	1.5	87	5.5	5	2	159	5	5	1.5
16	6	5	2	88	5.5	5	1	160	6	5	2
17	6	5	1	89	5	5	2	161	4	4	1
18	5	5	1	90	6.5	—	1.5	162	4.5	4.5	1
19	6	5	2	91	6	4	1	163	5	4	1
20	6	4	1.5	92	5.5	5	1	164	5	4.5	2
21	5	4	1.5	93	4.5	4	1	165	5.5	4.5	1
22	6	3.5	2	94	5	4	1.5	166	4.5	5	1
23	6	4.5	1.5	95	5.5	5	2	167	5.5	4.5	1
24	5.5	5	1.5	96	6.5	5	2	168	6.5	5	2
25	5	4	1.5	97	5.5	3	1	169	5.5	4.5	2
26	5	4	1.5	98	5.5	4.5	1.5	170	5.5	4.5	1
27	5.5	4.5	2	99	5.5	5	1	171	4.5	3.5	1.5
28	5	4	2	100	5	5	1.5	172	4.5	4	1
29	5	5	2	101	6	4.5	2	173	5	3.5	1.5
30	4	4	2	102	6	4.5	1	174	6	5	1.5
31	5.5	5.5	2	103	5	5	1.5	175	5.5	4	1.5
32	5	4	2	104	5	5	2	176	5	4	1.5
33	5.5	5	1.5	105	5	4	2	177	5	3.5	1.5
34	5	4	1.5	106	5.5	4	2	178	5	4.5	1.5
35	5	4	1.5	107	5	4.5	1.5	179	6	4.5	1.5
36	5	3.5	1.5	108	5.5	5	1.5	180	4.5	4.5	1.5
37	6	4.5	1.5	109	5	4	1.5	181	5	4.5	1.5
38	5.5	5.5	1	110	4.5	4	2	182	5	4	2
39	5	4.5	1.5	111	5	4	2	183	5	5	1
40	5.5	4.5	1.5	112	5	4	2				
41	6.5	5	1	113	4	3.5	1				
42	6	5	1	114	6	4	2				
43	6.5	5.5	2	115	5.5	4	2				
44	5.5	4.5	1.5	116	4	4	1				
45	5	5	—	117	5	5	—				
46	6	4	1.5	118	6	5	1				
47	5.5	4	1.5	119	5.5	4.5	1				
48	6	5	1	120	4.5	3.5	1.5				
49	5.5	4.5	1.5	121	6	5	—				
50	5.5	4	1	122	5	4	1				
51	5.5	5	2	123	5	4	2				
52	5.5	5	1.5	124	5	4	1.5				
53	6.5	6	1.5	125	4.5	4	1.5				
54	5	4	1	126	4.5	4.5	1.5				
55	5.5	5	1	127	5.5	3.5	2				
56	5	4.5	1.5	128	6	4	2				
57	5.5	5.5	1.5	129	5	4	1.5				
58	5.5	4.5	1	130	5	4	2				
59	5.5	4.5	1	131	5.5	4	2				
60	5.5	4	1.5	132	5	4	1				
61	6	4	1.5	133	5	4	1.5				
62	5.5	5	2	134	4.5	4	1				
63	5	5	2	135	4.5	5	1				
64	4.5	4	1.5	136	5.5	5	1.5				
65	6	4	1.5	137	5.5	5.5	1.5				
66	5.5	4.5	1.5	138	5	5	2				
67	5	4	1	139	5	5	1				
68	5	4.5	1	140	5	5	2				
69	4.5	3	2.5	141	5	4	1				
70	5	5	—	142	5.5	5	1.5				
71	5	5	2	143	5.5	4	2				
72	4	4	2	144	5	4	2				

掲表21 西2号横穴出土小五計数表

3. 西3号横穴（挿図276、図版86）



挿図276 西3号横穴実測図

位 置 西2号横穴の前庭北西側壁面に掘穿された小規模な横穴である。玄室の天井部が一部崩落している。主軸を北一南におき、南方向に開口している。開口部レベルは、西2号横穴前庭床面より約90cm高い29.5mで、全長58cmをはかる。

玄 室 玄室と羨道の境界が明瞭でないため、一括し玄室として取り扱う。玄室床面の平面形は長方形である。西2号横穴前庭壁面に対して直角に掘り込んでいるため、少しいびつな丸天井系方形断面の天井形態をとる。玄室前端に幅及び深さが3cm程度の細い溝を有する。これは玄室を区画し、また、閉塞時にも使用されたものと考えられる。玄室規模は奥行28cm、幅78cm、中央部の高さ39cmをはかる。

前 庭 前庭は先述したように、玄室側に掘り込まれた形であり、かつ後の地割れとも相まって平坦面をなしていない。長さ30cmをはかる。

閉 塞 玄室前端の溝に閉塞板をさし込み閉塞を行なった可能性があるが詳細は不明である。遺物は検出されなかった。

4. 西 4 号横穴 (插图277·278·279·280、图版90·91·105)

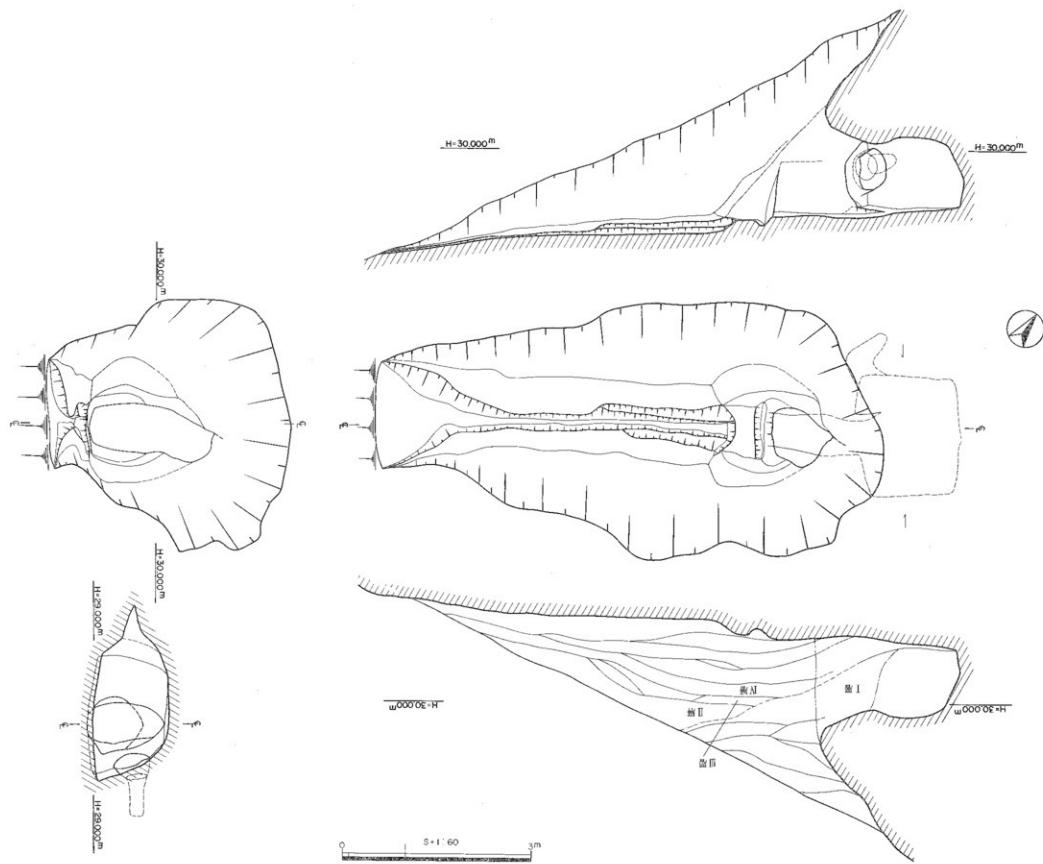


插图277 西 4 号横穴实测图

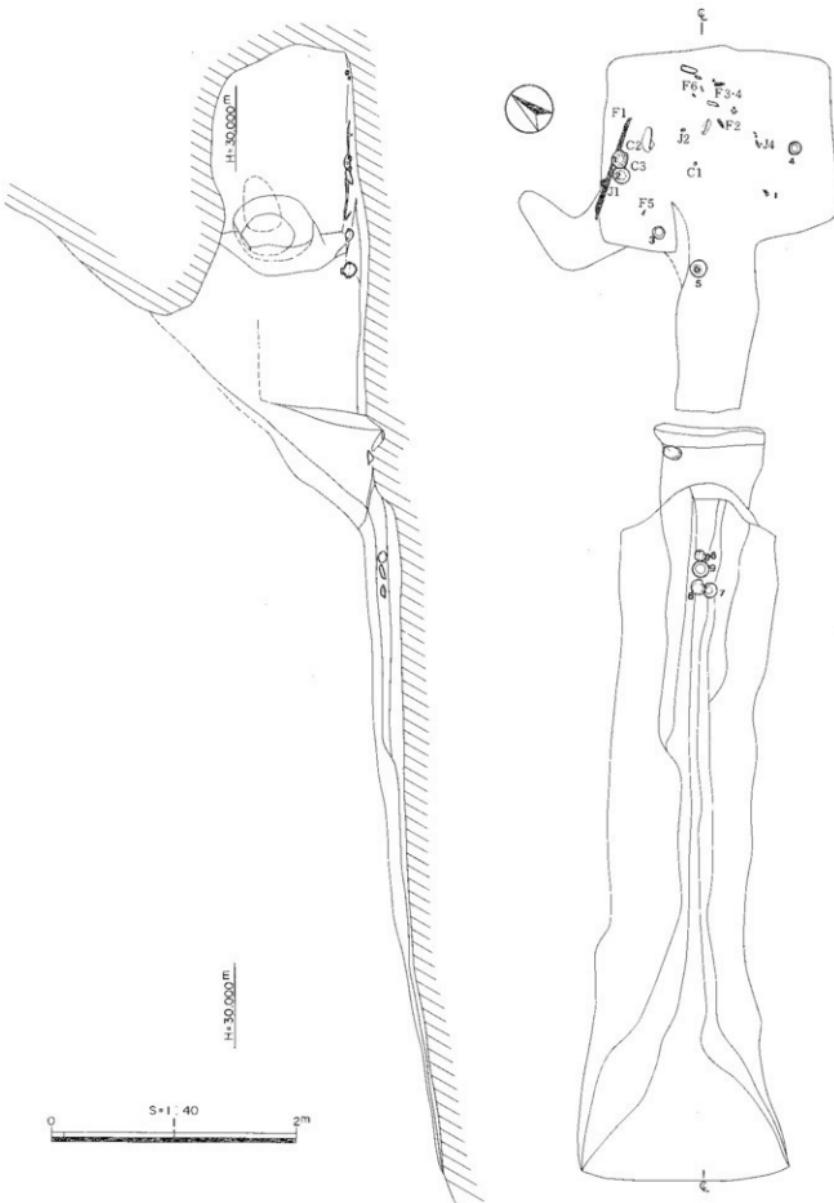
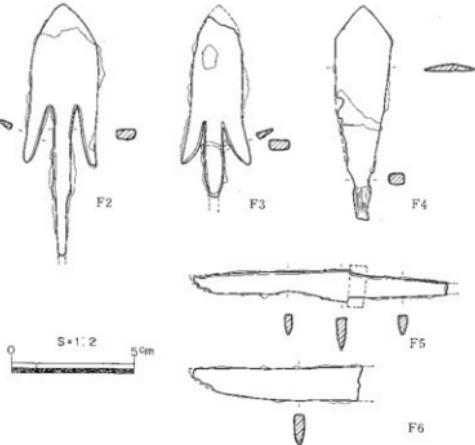


插图278 西4号横穴遗物出土状况图

- 位 置** 西2号横穴の南東、西5号横穴との間に位置する。主軸を北東—南西におき、南北方向に開口している。羨道入口側の天井が崩落している。全長930cmをはかる。開口部レベルは28.9mである。
- 玄 室** 玄室の平面形は、長方形を呈する。横断面形は台形で、丸天井系方形断面の天井形態をとる。床面は若干羨道側に傾く。その規模は奥行162cm、幅188cm、天井の高さ中央部で117cmをはかる。玄室内南東側が剥落している。西側に人工的な「く」の字状の穴が掘穿されているが、遺物等も検出されず用途も不明である。
- 羨 道** 羨道は二重構造で、断面形は天井の崩落のため断定はできないが、つり鐘形を呈した可能性が高い。長さ234cmをはかる。羨門部下に幅15cm内外、深さ10cm程の横溝を有する。
- 前 庭** 前庭の平面形は谷側が若干広がる長方形に近い台形を呈する。左右の壁及び羨道を穿つ奥壁は、羨道側で標高32.1mより前庭床面へ315cm削り出して形成されている。長さ534cm、幅は羨道側で126cm、谷側で170cmをはかる。前庭中央部を全域にわたって一部二段掘りの排水構を有す。先端部が羨道の一部にのびる形で掘られ、前庭谷側の左右の壁と起点を同じくする形で消滅する。二段掘り部分で幅50cm内外、中央部で幅27cmをはかる。羨道側ではかなり深く掘り込まれており、深さ19cmをはかり前庭谷側へ若干傾く。本遺跡横穴群中、ただ一つ前庭に排水溝を持つものである。
- 閉 塞** 本横穴は、閉塞用施設として、羨門部下に横溝を有するが、その他石材等は検出されなかつた。おそらくは羨門部に閉塞板をたてかけ、土の“おさえ”による閉塞を行なったと思われる。前庭埋土層は不自然な状態を示す。すなわちI層（暗褐色土）が、II、III、IV層を切る形で羨道側に入り込む。羨道の天井崩落により埋土に乱れがあり、断定はできぬがこのことは追跡ないしは盗掘の可能性をものがたるものといえる。
- 遺物出土
状況** 玄室内より、人骨片・須恵器・鉄製品・耳環・玉類が検出された。遺物は、その多くに土砂の流入による二次的な動きが見られる。北西側壁に沿うように鉄刀F1が切先を玄室奥側に向けて置かれていた。この上に、蓋環の身2個Po1・2が口縁部を下に置かれ、耳環2個C2・3がその下に存したことから、この蓋環の身は枕として使用されたものと思われる。その他の遺物は風化の著しい骨片が玄室奥側に散在していたのをはじめ、鉄鎌F2・3・4、刀子F5・6といった鉄製品、勾玉J1・2・3、切子玉J4・5、小型の蓋環のセットPo3・4が玄室内より検出された。
- 羨道では玄門部側により
平瓶Po5がおかれていた。
前庭からは、羨道よりの排水溝内から蓋環の身Po9、蓋Po7・8、疊Po6が検出された。蓋環はいずれも口縁部を下にした形で置かれていた。また、前庭の埋土掘り下げ中に、須恵器片及び耳環C1・4、切子玉J6を検出した。



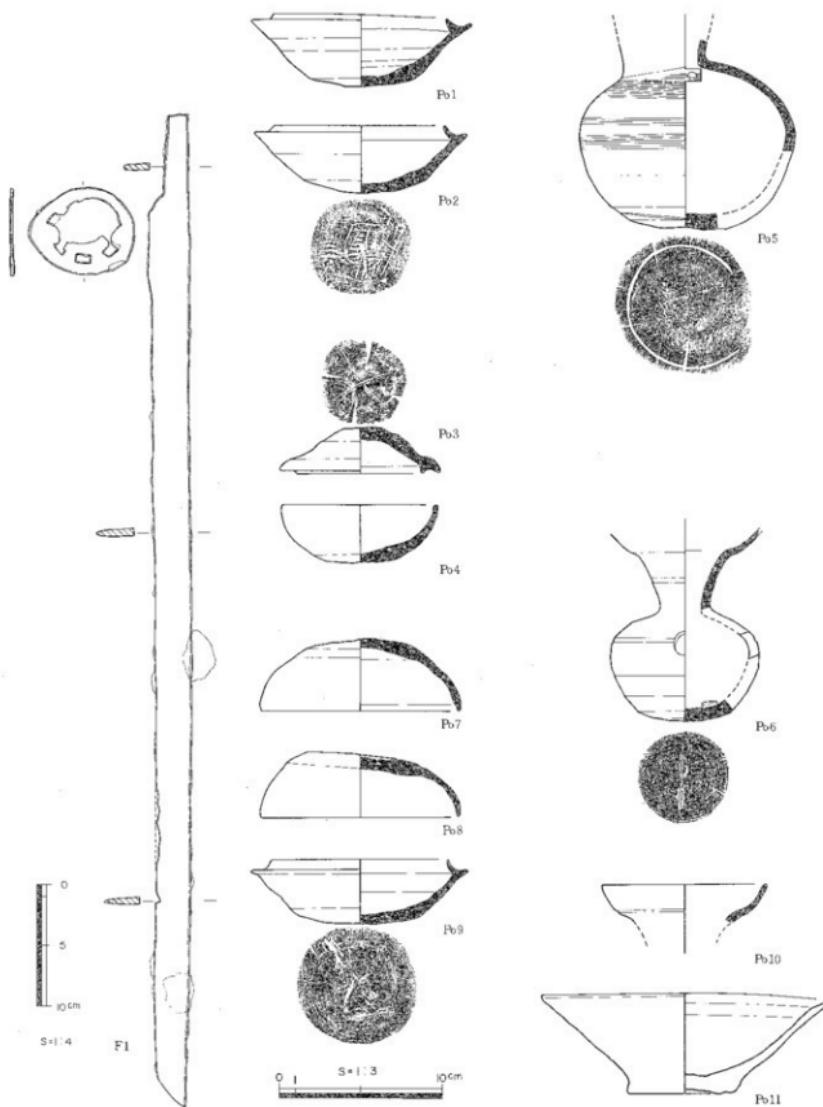


插图279 西4号横穴出土遗物实测图

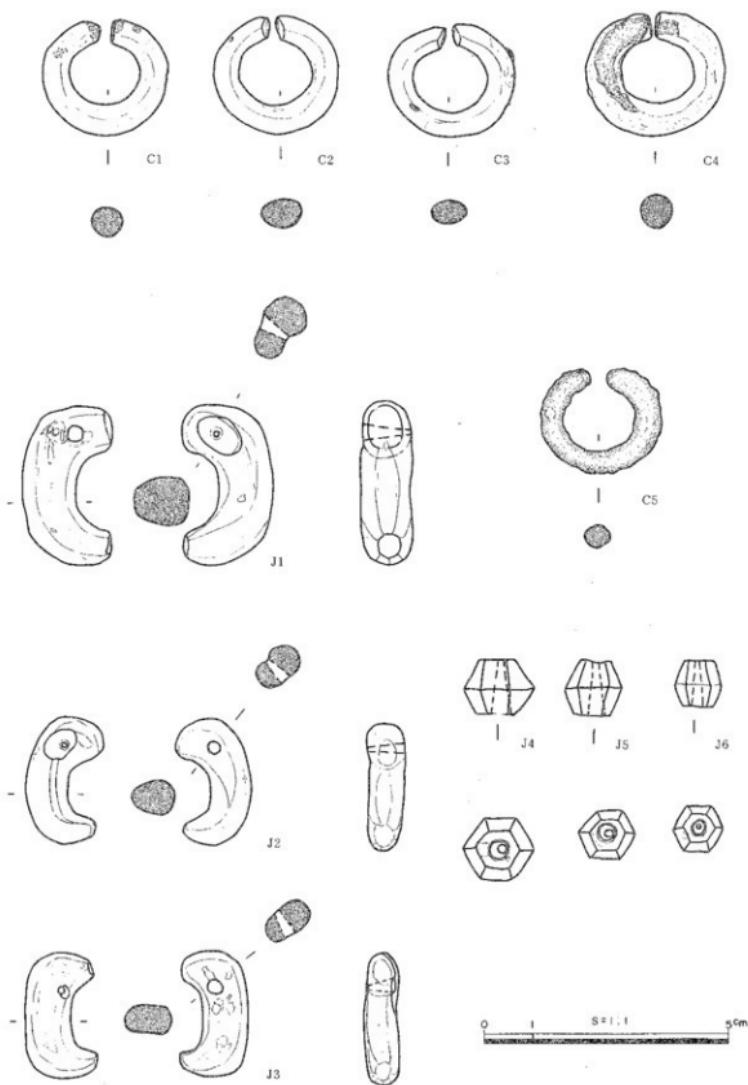


插图280 西4号横穴出土遗物实测图

土器番号	出土遺物	資 標	口 口 は な ら く な ま り ん だ ん 大 人 形	形 狀	手 法	胎 土	燒 成	色 調	備 考
Po 1	西4号横穴	蓋環の付	Q13.1 - 10.5 ④ 4.5 - 0.3	たちあがりはやや外反気味に内傾する。たるあがりは頭部及び底部丸角は、たくおさめる。底端はやや平たい。	底部外周部へラ切り未調製。その他の四軒ナギ開窓。	密	灰	灰	
Po 2	西4号横穴	蓋環の舟	Q12.9 - 10.4 ④ 4.1 - 0.6	たちあがりはやや外反気味に内傾する。たるあがりは頭部及び底部丸角は、たくおさめる。底端はやや平たい。	底部外周部へラ切り未調製。底部内面舟仕上けナギ開窓。他の四軒ナギ開窓。兩方に指輪孔あり。	密	灰	灰	ロクロ回転右回り。底端外周へラ記付あり。
Po 3	西4号横穴	蓋環の蓋	① 2.9			密	灰	灰	
Po 4	西4号横穴	蓋環の蓋	① 9.4 ② 3.6	口縁部は外縁部より下る。口縁部は外反気味に下る。舟形内面に丸角をもつが、かたまり感はより強めである。天井部は不規則。天井部は丸い。	天井部外周部へラ切り未調製。天井部内面舟仕上げナギ開窓。他の四軒ナギ開窓。	密 微砂粒を含む。	灰	灰	
Po 5	西4号横穴	手版	④ 13.2	口縁部を内側に折るが、口縁部は側面と互に繋がる。側面は口縁部中心にある。底端はやや平たい。舟形上面中心に小円形の船止めを2箇所附している。	口縫部回転ナギ調製。底部上半部カキメ開窓。側面下半部より底端内面ハラケナギ開窓。底部内面舟仕上げナギ開窓。	密 微砂粒を含む。	灰	灰	ロクロ回転右回り。底端外周へラ記付あり。
Po 6	西4号横穴	縛	④ 9.1	口縁部を内側に折るが、口縁部は側面と互に繋がる。側面は口縁部中心にある。底端はやや平たい。舟形上面中心に小円形の船止めを2箇所附している。	側面内面舟仕上げナギ開窓。底部内面舟仕上げナギ開窓。他の四軒ナギ開窓。	密 微砂粒を含む。	灰 灰 灰	灰 灰 灰	底包、一部 底端が付着。
Po 7	西4号横穴	蓋環の舟	② 4.5	口縁部はやや内側に折り下る。口縁部は丸いが、二段二段に内面に有する。天井部は丸い。	天井部外周部へラ切り未調製。天井部内面舟仕上げナギ開窓。他の四軒ナギ開窓。	密 微砂粒を含む。	灰	灰	
Po 8	西4号横穴	蓋環の蓋	② 12.6 ④ 4.1	口縁部はやや内側に折り下る。口縁部は丸い。口縫部と天井部との境界はい。天井部はい。	天井部外周部へラ切り未調製。他の四軒ナギ開窓。	密 微砂粒を含む。	灰	灰	
Po 9	西4号横穴	蓋環の舟	② 13.2 - 10.8 ④ 4.9 - 0.6	たちあがりはやや外反気味に内傾する。たるあがりは頭部及び底部丸角は、たくおさめる。底端は平たい。	底部外周部へラ切り未調製。底部内面舟仕上げナギ開窓。他の四軒ナギ開窓。兩方に指輪孔あり。	密	灰	灰	
Po 10	西4号横穴	縛	④ 10.9	口縫部から残存。口縫部は内面気味にラッパ状に開き、口縫部と縛部との境界に浅い凹部を入れ段を設ける。	底端内面舟仕上げナギ開窓。	密	灰	暗灰	
Po 11	西4号横穴	皿 (土器)	Q47.5 ⑥ 6.2 ⑤ 5.4	口縫部は外方に大きいくびれる。縛部は丸い。底端は平たい。	回転ナギ調製。	密	灰	淡赤紫褐色	

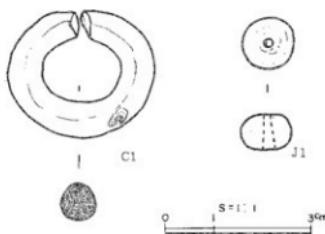
No	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	形 狀
F 1	81.9	3.0	0.6	鉄刀。やや“ふくらかれる”切先を持つ。角様。二段闊一文字尻申細の形態をとる。
	8.7	7.2	0.4	側卵形で長方形の透孔6箇所を持つ鉈。
F 2 (10.3)	3.1	0.5		鉄鎌。有茎彎抜三角形式。逆刺がやや外彎する。茎部一部欠損。刃部の断面形態は鋸化が著しく不明。
F 3 (7.4)	2.9	0.5		鉄鎌。有茎彎抜三角形式。逆刺が外彎する。先端部及び茎部一部欠損。刃部の断面形態は鋸化が著しく不明。
F 4 (8.7)	2.3	0.5		鉄鎌。主頭彎箭形式。茎部一部欠損。茎部に木質が残る。
F 5 (10.4)	1.3	0.4		刀子。両頭角様。先端部及び茎部一部欠損。
F 6 (6.8)	(1.4)	0.4		刀子。角様。関節部以下欠損。
C 1	2.4	2.5	0.6	耳環。劍環を銀薄板で包んだもの。断面は円形を呈する。9.8g。
C 2	2.4	2.6	0.7	耳環。銅環を銀薄板で包んだもの。断面は長円形を呈する。12.5g。
C 3	2.3	2.6	0.7	耳環。銅環を銀薄板で包んだもの。断面は長円形を呈する。11.2g。
C 4	2.5	2.9	0.7	耳環。銅環を銀薄板で包んだもの。断面は円形を呈する。13.8g。
C 5 (2.1)	2.5	0.4		耳環。断面は円形を呈する。6.2g。 ()は現存数値

No	名称	長さ(mm)	幅(mm)	断面(mm)	孔径(mm)	材質	色 調	備 考
J 1	勾 玉	32.8	10.9	9.8	3.3 - 1.0	瑪瑙	赤茶色	完形 一方向穿孔
J 2	勾 玉	26.1	7.4	6.9	1.9 - 0.7	瑪瑙	淡茶色	完形 一方向穿孔
J 3	勾 玉	25.5	9.2	5.8	2.3 - 1.1	瑪瑙	淡茶色	一方向穿孔
J 4	切子玉	10.9	14.2	—	3.0 - 1.3	水晶	白色透明	完形 一方向穿孔
J 5	切子玉	11.3	11.6	—	3.7 - 1.4	水晶	白色透明	完形 一方向穿孔
J 6	切子玉	9.2	9.3	—	2.7 - 0.8	水晶	白色透明	完形 一方向穿孔

摺表22 西4号横穴出土遺物観察表

5. 西5号横穴（挿図281・282・283・284・285・286、図版92・93・94・106・107）

- 位置** 西4号横穴の南東5mに位置する。主軸を北東一南西におき、南北方向に開口していたと思われるが、西6号横穴との土層関連からみると、掘りこまれた地山土質がかなり脆弱なため、築造されて間もない時期に玄室、羨道の天井部及び壁部が崩落したとみられる。全長922cmをはかる。開口部レベルは、29.9mである。
- 玄室** 玄室の平面形は、不整形形を呈する。断面形、天井形態とも不明である。玄室長188cm、中央部の幅220cmをはかる。玄室南東側壁沿のみに幅20cm内外、深さ2cm内外の溝が巡るが、玄室床面の土質が脆弱なため、床面そのものが平坦でなく、深さもごく浅いため排水溝と断定できない。床面は若干羨道方向へ傾く。
- 羨道** 羨道は二重構造で、断面形は、崩落しなかった羨門部の形態よりみて、つり鐘形とみられる。羨門部下に段を有し、前庭側が約6cm低くなっている。羨道長195cmをはかる。
- 前庭** 前庭の平面形は、長さ539cm、幅120cmの長方形を呈する。羨道、前庭とも谷側へ若干傾く。
- 閉塞** 本西5号横穴は、後記する西6号横穴と極めて近い位置関係を持ち、主軸方向もほぼ同一である。発掘当初は~つの横穴と考えられたことから、西5号・6号横穴を一括して土層観察を行なった。土層は本5号横穴の羨道及び玄室の天井、壁が著しく崩落していたこともあいまって、かなり複雑な様相を呈する。閉塞用の施設及びそのための石材等は検出されなかったが、羨門部下の段に閉塞板を配し、その“おさえ”として土を用いた閉塞を行なったものと思われる。前庭土層においては、I層（淡褐色土層）とII、III層との関連より追葬が行なわれた可能性を示す。羨道及び玄室が崩落した後、奥側に西6号横穴の前庭を形成しようとしたために、IV層（暗褐色土）が掘り込まれている。
- 遺物出土状況** 玄室内より歯牙の破片および須恵器、鉄製品、耳環、小玉など遺物が検出された。遺物は、玄室の天井及び壁が崩落した際に、土砂による二次的移動をその大半が受けたものとみられ一部床面より浮いた状態で出土した。玄室奥側で三組の蓋坏Po1・2・3・4・6・7、南側すみで蓋坏の身3個Po9・10・11が、いずれも口縁部を下にした状態で検出された。これらの蓋坏は、そのいくつかが土器枕に使用された可能性が高く、追葬を想起させる。この他に玄室中央部で直口壺Po12、小型甕Po5、甕Po13、平瓶Po8が、玄門部付近で平瓶2個Po22・23が出土している。鉄製品は、玄室東側に、切先を奥側に向けた鉄刀F1及びその金具があり、そして周囲に刀子3点F2・3・4が散在していた。耳環C1は1個のみ玄室奥側より、その他埋土中より小玉J1が検出された。
- 羨道から遺物の検出はなかったが、前庭床面より、二組の蓋坏Po14・15・16・17と4個の高坏Po18・19・20・21が検出されている。



挿図281 西5号横穴出土遺物実測図

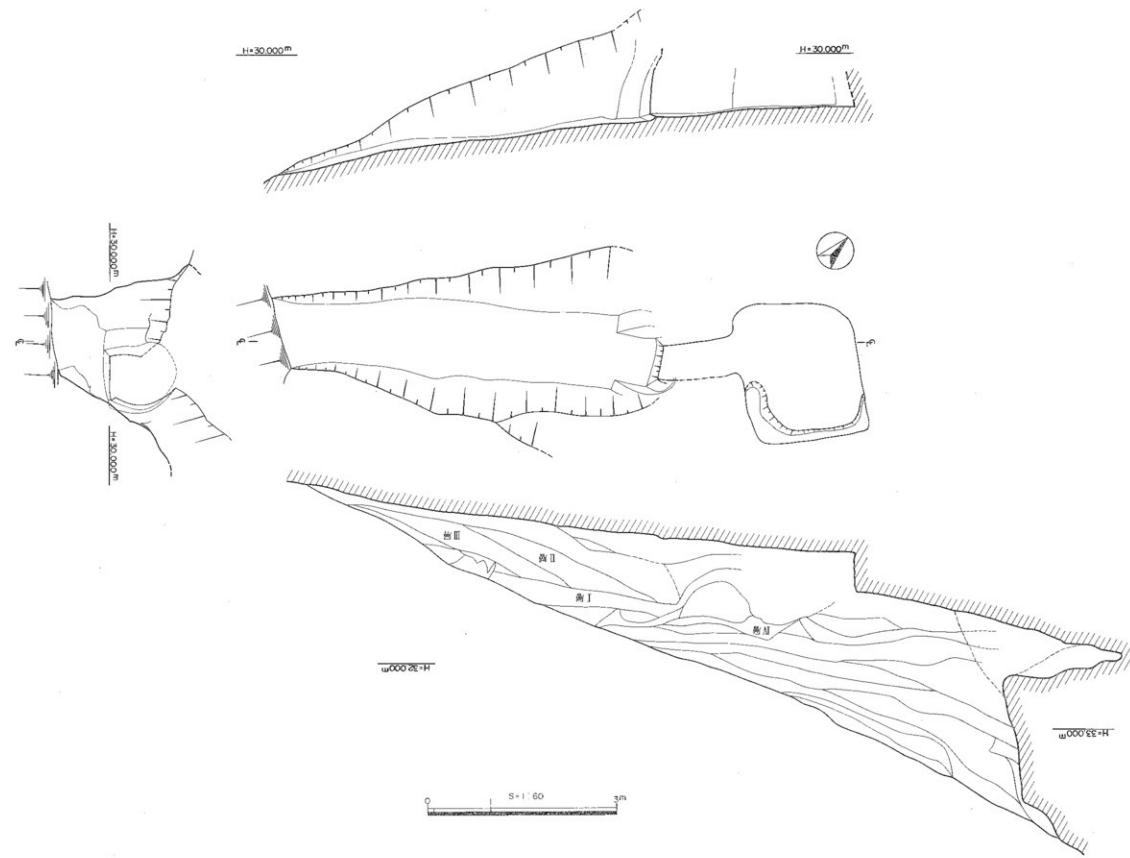


插图282 西5号横穴实测图

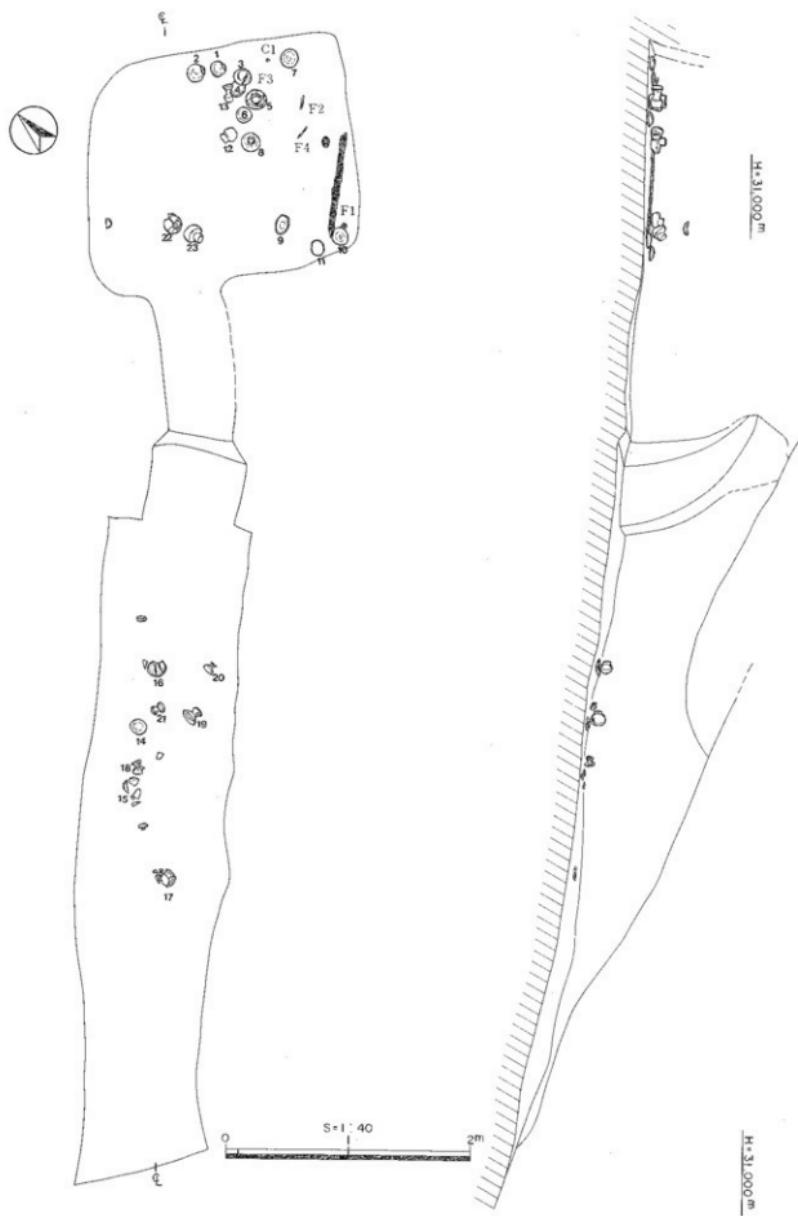


插图283 西5号横穴遗物出土状况图

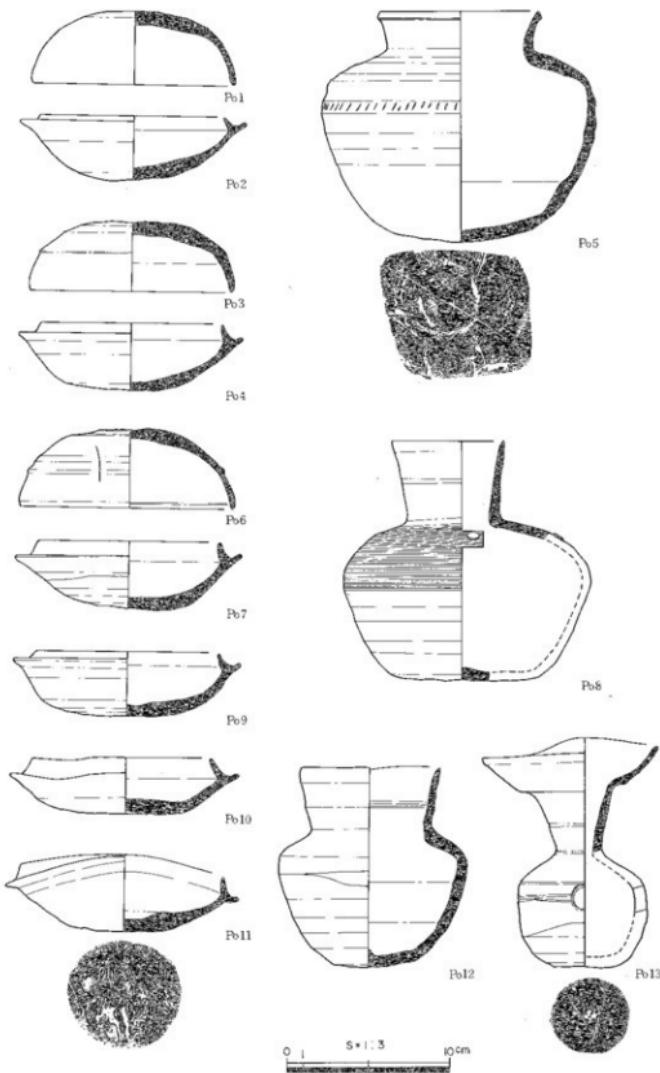
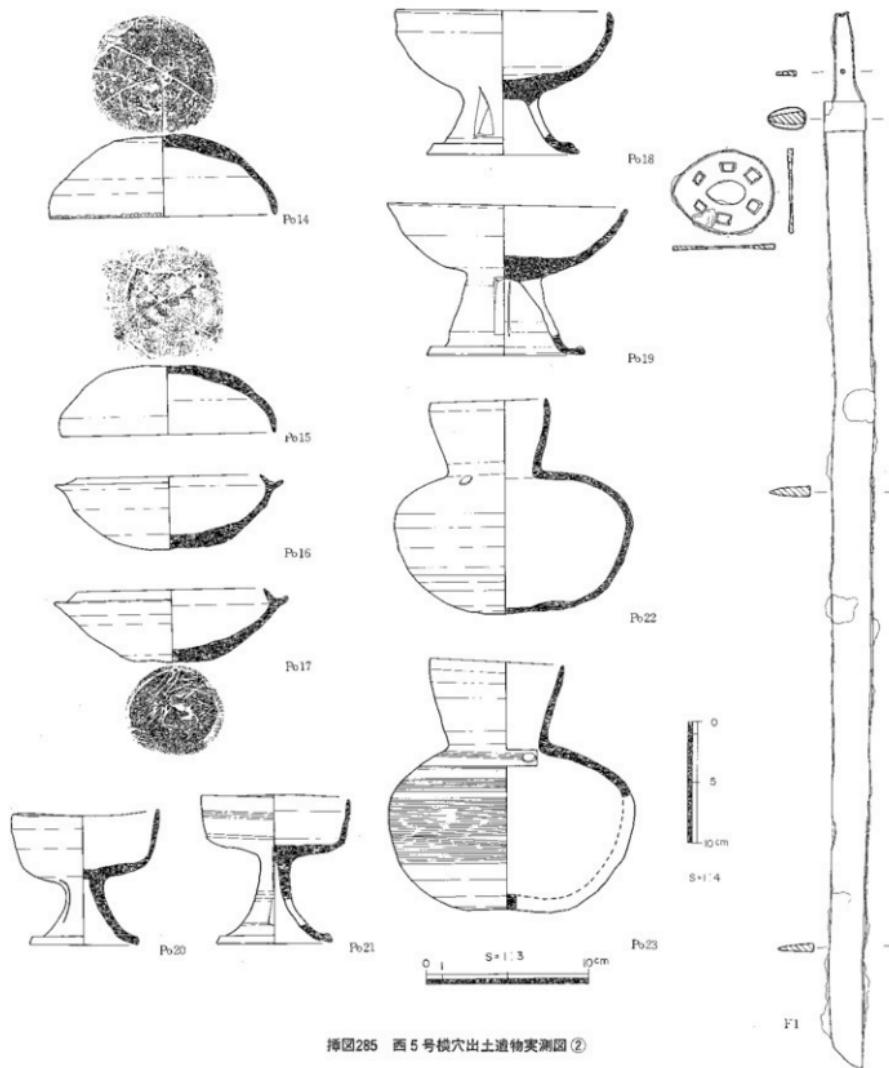


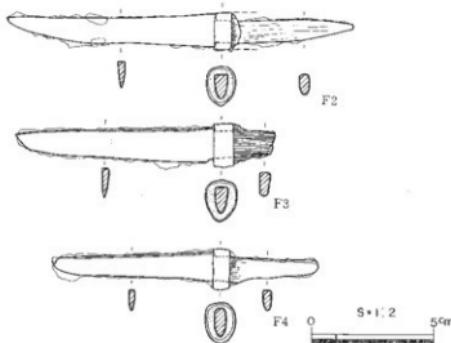
插图284 西5号横穴出土遗物实测图



插図285 西5号横穴出土遺物実測図②

No	名 称	長さ(cm)	幅(cm)	断面(cm)	孔径(cm)	材質	色 調	備 考
J 1	小 玉	7.0	10.3	—	2.2-1.8	水晶	白色透明	完形 一方向穿孔

插表23 西5号横穴出土遺物観察表①



挿図286 西5号横穴出土遺物実測図

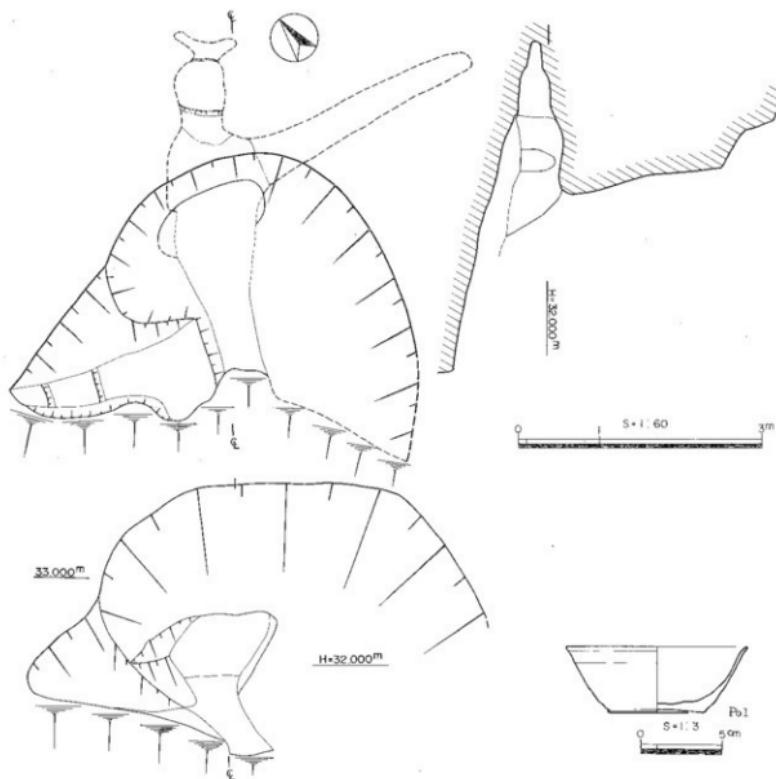
No	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	形態
F 1	87.5	3.2	0.8	鉄刀。"ふくらつく"切先を持つ。刃側二段両側中綱の形態をとる。茎尻不明。縄部に木質が残る。角桿。
	8.3	6.9	0.5	倒卵形で長方形の透孔6箇所を持つ鐸。
F 2	14.2	1.6	1.2	刀子。両闊？角桿。縄内部及び茎部に木質が残る。
F 3	(10.6)	1.7	1.3	刀子。両闊？角桿。縄内部及び茎部残存部に木質が残る。
F 4	(10.8)	1.7	1.3	刀子。両闊？角桿。縄周辺に木質が残る。先端部欠損。
C 1	2.6	3.0	0.7	耳環。脚環を銀薄板で包んだもの。断面は円形を呈する。16.9 g。 ()内は現存数値

挿表24 西5号横穴出土遺物観察表②

土器番号	出土遺構	種 型	①口 高 ②身 高 ③底 高	形 異 型	手 法	胎 土	焼 成	色 調	備 考
Po.1	西5号横穴	蓋杯の蓋	①12.4 ②4.5	口縁部は内側気味に下る。口縁部は丸い。 入井部は丸くない。	大井部外周面へラクリエ調査。大井部内面 内井部は上げナメ調査。他の回転ナメ調査。	密	灰	灰 色	ロクロ回転右回 り。
Po.2	西5号横穴	蓋杯の蓋	①13.7-11.2 ②4.0-0.6	たちあがははやや深く、蓋縁部に内傾する。 たちあがはは縁部より受け先端部は丸くおむ める。底部はやや平たい。	底部外周面へラクリエ調査。内面部は上げ ナメ調査。他の回転ナメ調査。	密	灰	灰 色	
Po.3	西5号横穴	蓋杯の蓋	①12.3 ②4.2	口縁部は若干内側気味に下る。口縁部は丸い。 入井部は若干平たい。	天井部外周面へラクリエ調査。大井部内面 内井部は上げナメ調査。他の回転ナメ調査。	密	灰 致鉛を含む。	外面 灰 内面 灰 白	
Po.4	西5号横穴	蓋杯の身	①13.5-11.0 ②4.2-0.9	たちあがははやや外側気味に内傾する。 たちあがはは縁部より受け先端部は丸くおむ める。底部はやや平たい。	蓋部外周面へラクリエ調査。口縁部へラケ ズリ調査。底部外周面は上げナメ調査。他の 回転ナメ調査。	密	灰	灰 色	ロクロ回転右回 り。
Po.5	西5号横穴	盖頭豆	①9.8 ②14.2 ③16.9	口縁部は丸く、底部はやや外側にび びとある。蓋部は圓錐形で、底部は円柱形で、 底部はやや平たい。	底部内面は上げナメ調査。他の回転ナメ調 査。	やや粗 砂粒を含む。	淡 灰	灰 色	ロクロ回転右回 り。 底部外側に ベラ記号あり。
Po.6	西5号横穴	蓋杯の蓋	①12.9 ②4.8	口縁部は若干内側気味に下る。口縁部は丸 い。 蓋部は丸く、底部は円柱形で、底部はやや平 たい。	大井部外周面へラクリエ調査。大井部内面 内井部は上げナメ調査。他の回転ナメ調 査。	密	灰	灰 色	ロクロ回転右回 り。
Po.7	西5号横穴	蓋杯の身	①13.8-11.9 ②4.3-1.6	たちあがはは若干外側気味に内傾する。 たちあがはは縁部および受け先端部は丸くおむ める。底部はやや平たい。	底部外周面へラクリエ調査。底部内面 内井部は上げナメ調査。他の回転ナメ調 査。	密	灰	灰 色	ロクロ回転右回 り。
Po.8	西5号横穴	平底	①6.8 ②14.7 ③13.2	口縁部は丸く、底部はやや外側気味に びびとある。蓋部は丸く、底部はやや平 たい。	蓋部下部外周面および底部外周面はラケ ズリ調査。底部は半外カキメ調査。他の 回転ナメ調査。	密	灰 白色 致鉛を含む。	灰 白 色	ロクロ回転右回 り。
Po.9	西5号横穴	蓋杯の身	①13.8-11.3 ②4.0-0.8	たちあがははやや外側気味に内傾する。 たちあがはは縁部および受け先端部は丸くおむ める。底部はやや平たい。	蓋部外周面へラクリエ調査。口縁部はラケ ズリ調査。底部内面は上げナメ調査。他の 回転ナメ調査。	密	灰 致鉛を含む。	淡 灰	ロクロ回転右回 り。
Po.10	西5号横穴	蓋杯の身	①13.9-10.9 ②3.5-1.3	蓋部がひつてある。たなあがはは圓錐形 に内傾する。たなあがはは縁部および受 け先端部は丸くおむめる。底部はやや平 たい。	蓋部外周面へラクリエ調査。内面部は上 げナメ調査。他の回転ナメ調査。	密	灰 致鉛を含む。	灰 白 色	ロクロ回転右回 り。
Po.11	西5号横穴	蓋杯の身	①14.5-12.5 ②4.7-1.2	蓋部がひつてある。たなあがははやや外 側気味に内傾する。たなあがはは縁部 および受け先端部は丸くおむめる。底部はや や平たい。	底部外周面へラクリエ調査。内面部は上 げナメ調査。他の回転ナメ調査。	密	灰 致鉛を多く 含む。	淡 灰	
Po.12	西5号横穴	蓋口盃	①8.5 ②12.3 ③11.5	口縁部は丸く、底部はやや外側気味に びびとある。蓋部はやや平たい。	蓋部底面は下部回転へラクリエ調査。他の 回転ナメ調査。	密	灰	灰 色	ロクロ回転右回 り。
Po.13	西5号横穴	縫	①10.7 ②14.0 ③7.5	口縁部はいくつで、蓋部は内側気味に下る。 蓋部は丸く、底部は丸く、底部が側面部 にある。底部はやや平たい。	蓋部下部より底部外周面はラケズリ調 査。他の回転ナメ調査。	密	灰	灰 色	ロクロ回転右回 り。 底部外側に ベラ記号あり。
Po.14	西5号横穴	蓋杯の蓋	①13.8 ②4.9	口縁部は丸く、底部はやや外側気味に下る。 口縁部は丸い。	底部外周面へラクリエ調査。底部内面は上 げナメ調査。口縁部はラケズリ調査。他の 回転ナメ調査。	密	灰 致鉛を含む。	灰 灰 色	ロクロ回転右回 り。 底部外側 ベラ記号あり。
Po.15	西5号横穴	蓋杯の蓋	①13.1 ②4.2	口縁部はやや内側気味に下る。口縁部は 丸い。底部は丸くやや丸い。	大井部外周面へラクリエ調査。大井部内面 内井部は上げナメ調査。他の回転ナメ調 査。	密	灰 致鉛を含む。	灰 白 色	ロクロ回転右回 り。 底部外側 ベラ記号あり。
Po.16	西5号横穴	蓋杯の身	①13.8-11.2 ②4.5-0.5	たちあがはは直線的に内傾する。たちあが はは縁部および受け先端部は丸くおむめる。底 部はやや平たい。	底部外周面へラクリエ調査。内面部は上 げナメ調査。他の回転ナメ調査。	密	やや不 良	淡 灰	
Po.17	西5号横穴	蓋杯の身	①14.2-11.4 ②4.5-0.7	たちあがはは直線的に内傾する。たちあが はは縁部および受け先端部は丸くおむめる。底 部はやや平たい。	底部外周面へラクリエ調査。底部内面は上 げナメ調査。他の回転ナメ調査。	密	やや不 良	外 面 白 色 内 面 灰 色	
Po.18	西5号横穴	高杯	①13.6 ②8.9 ③9.2	口縁部は丸く、底部はやや外側気味に びびとある。蓋部は丸く、底部は丸く、底部 が側面部にある。底部はやや平たい。	底部底部内面は上げナメ調査。他の回転 ナメ調査。	密	灰 致鉛 砂粒を含む。	灰	
Po.19	西5号横穴	高杯	①14.8 ②9.2 ③9.5	口縁部は丸く、底部はやや外側気味に びびとある。蓋部は丸く、底部は丸く、底部 が側面部にある。底部はやや平たい。	底部底部内面は上げナメ調査。他の回転 ナメ調査。	密	灰	灰 色	
Po.20	西5号横穴	高杯	①8.9 ②8.9 ③6.7	口縁部は丸く、底部はやや外側気味に びびとある。蓋部は丸く、底部は丸く、底部 が側面部にある。底部はやや平たい。	底部底部内面は上げナメ調査。他の回転 ナメ調査。	密	灰	淡 灰	
Po.21	西5号横穴	高杯	①9.9 ②9.8 ③7.8	口縁部は丸く、底部はやや外側気味に びびとある。蓋部は丸く、底部は丸く、底部 が側面部にある。底部はやや平たい。	底部底部内面は上げナメ調査。他の回転 ナメ調査。	密	灰	灰 色	ロクロ回転右回 り。 底部底部外 側にベラ記号あり。
Po.22	西5号横穴	平底	①8.1 ②13.2 ③15.1	口縁部は丸く、底部はやや外側気味に びびとある。蓋部は丸く、底部は丸く、底部 が側面部にある。底部はやや平たい。	底部底部内面は上げナメ調査。他の回転 ナメ調査。	密	淡 灰	淡 灰	ロクロ回転右回 り。
Po.23	西5号横穴	平底	①7.6 ②15.2 ③15.1	口縁部は丸く、底部はやや外側気味に びびとある。蓋部は丸く、底部は丸く、底部 が側面部にある。底部はやや平たい。	底部底部内面は上げナメ調査。他の回転 ナメ調査。	密	灰 致鉛 砂粒を含 む。	灰 色	ロクロ回転右回 り。

擇表25 西5号横穴出土遺物観察表③

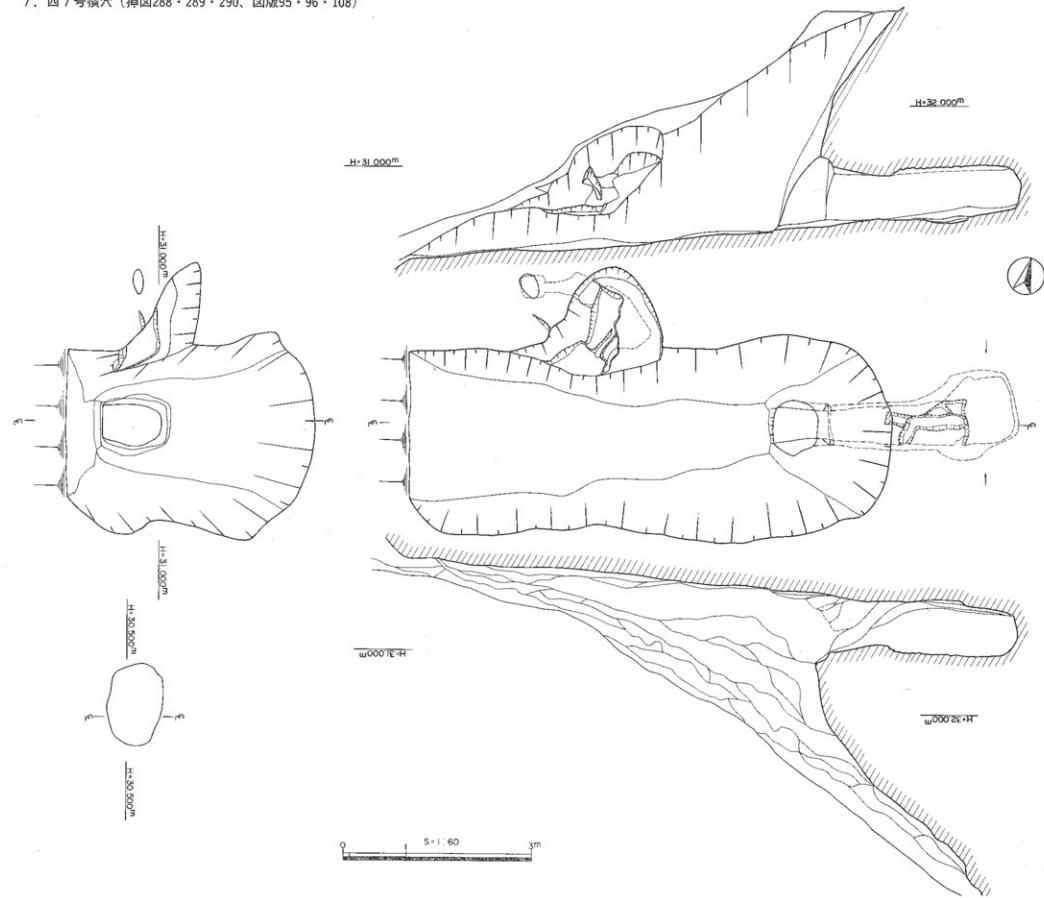
6. 西 6 号横穴（挿図287、図版94・107）



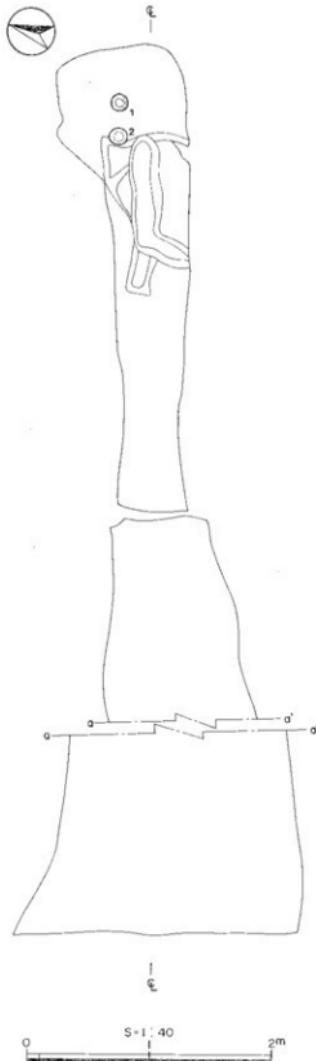
挿図287 西6号横穴実測図・出土遺物実測図

- 位 置** 西5号横穴の北北東側に接する位置にある。主軸を北北東—南南西におき、南南西方向に開口しているが、横穴の作りは非常に雑で、玄室・羨道・前庭いずれも床面を平坦にするに至っていない。使用されていない可能性が極めて高い。西5号横穴調査の関係で全長は推定で5m前後であろう。開口部レベルは、31.3mである。
- 玄室及び羨道** 一応の荒い掘穿は行なっているが、形を成すに至っていない。これは、地山の土質にもよるものとみられ、人工的でない縦横の穴が地山内に多くみられた。構築途中で放棄されたものらしく、規模等は不明である。
- 前 庭** 前庭の平面形は先細りの台形を呈する。奥壁は標高33.2m付近から約300cm削り出して形成されている。西5号横穴調査時に前庭の一部とみられる箇所を削除したため、残存長約1.7mをはかる。
- 閉塞及び遺物** 本横穴は前記したように、構築中に放棄されたものらしく、人工的な閉塞の痕跡は土層等にも認められない。前庭埋土中より土師器の壺Pb1が検出されたが、本横穴に伴う遺物か否か不明である。

7. 西7号横穴 (拵図288・289・290、図版95・96・108)



拵図288 西7号横穴実測図



挿図289 西7号横穴遺物出土状況図

位 置 西5号横穴の南東13.5mにあり、発掘調査した西斜面横穴のうち南端に位置する。主軸を東北東—西南西におき、西南西方向に開口している。玄室及び羨道の壁部に掘穿時の幅3cm位の崩痕が残り、あまり丁寧なつくりの横穴とはいえない。全長971cmをはかる。開口部レベルは30.1mである。

玄 室 玄室の平面形は、不整長円形を呈する。丸天井系半球形の天井形態をとる。床面は若干羨道側に傾く。その規模は、奥行78cm、幅105cm、天井の高さ中央部で75cmをはかる。また、玄室と羨道の境に段を設けており、玄室部が約7cm高くなっている。

羨 道 羨道は、二重構造で断面形は、つり鐘形を呈する。調査を行なった本遺跡の横穴群の中で最も長さの長いもので308cmをはかり、玄室側にやや広がる長方形に近い平面形を持つ。玄室側に、長さ130cm、幅23cm、深さ6cm内外の縦溝を有するが、排水機能を持つかは疑問である。

前 庭 前庭の平面形は、台形を呈する。左右の壁、及び羨道を穿つ奥壁は、羨道側で標高約33.5mより前庭床面へ353cm削り出して整美に形成されている。前庭は、長さ580cm、幅は羨道側で80cm、前端側で234cmをはかる。

閉 塞 本横穴からは、閉塞用とみられる羨道門部の横溝等の施設や石材などは検出されなかった。前庭及び羨道の土層観察から、閉塞板及び土による閉塞が行なわれた可能性が考えられる。

**遺物出土
状況** 玄室中央より、須恵器蓋環の身2個Po1・2が口縁部を床面に伏せて置かれていた。この2個は、約20cm離されて置かれており、枕として利用したか否かは不明である。その他の遺物は、前庭において、西8号横穴に伴う須恵器・土器類の他は検出されていない。

土器番号	出土遺物	形 種	寸 法	手 法	胎 上	燒成	色 形	備考
		①口 ②羨道 ③奥壁 ④最高水位	形 態					
Po 1	西7号横穴 蓋环の身	①3.3-16.8 ②4.1 0.8 ③6.8 ④33.5	たちあがりは内傾する ねじれがある。奥壁側 に凹部がある。 底部はやや丸い。	底部外縁にへら切り 底部内縫に凹部がある。 底部は内傾する。 底部はやや丸い。	素 面 削 除 施 設	青 白	良	灰 色
Po 2	西7号横穴 蓋环の身	①13.9-11.7 ②4.4-0.6 ③6.8 ④33.5	たちあがりは直立気味 にやや内傾する。 ねじれがある。 奥壁側に凹部がある。 底部は丸い。	底部外縁に灰袖が付 着しているため剖面 不明。 底部は内傾する。	素 面 削 除 施 設	良	灰 色 一頭灰 袖付石	

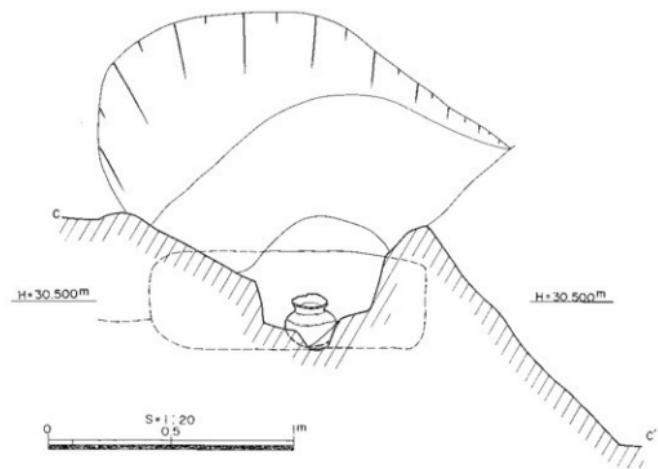
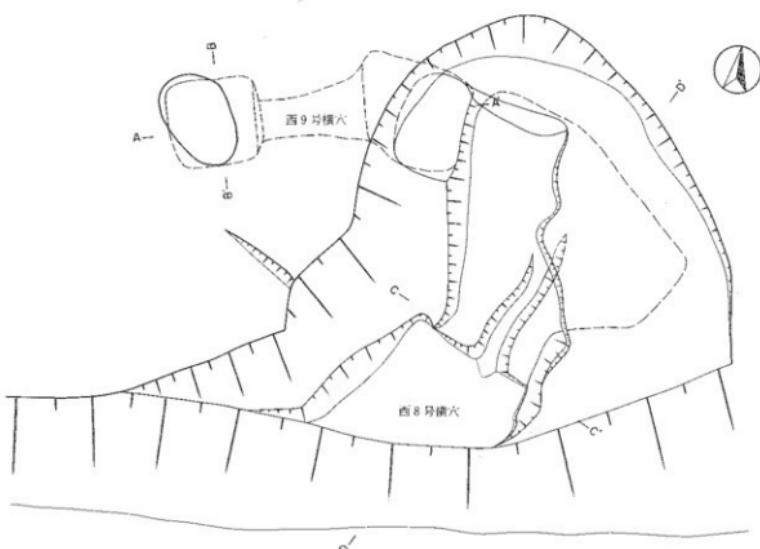
挿図26 西7号横穴出土遺物観察表



挿図290 西7号横穴出土遺物実測図



8. 西8号横穴（挿図291・292・293、図版95・96・108）



挿図291 西8号・9号横穴実測図①

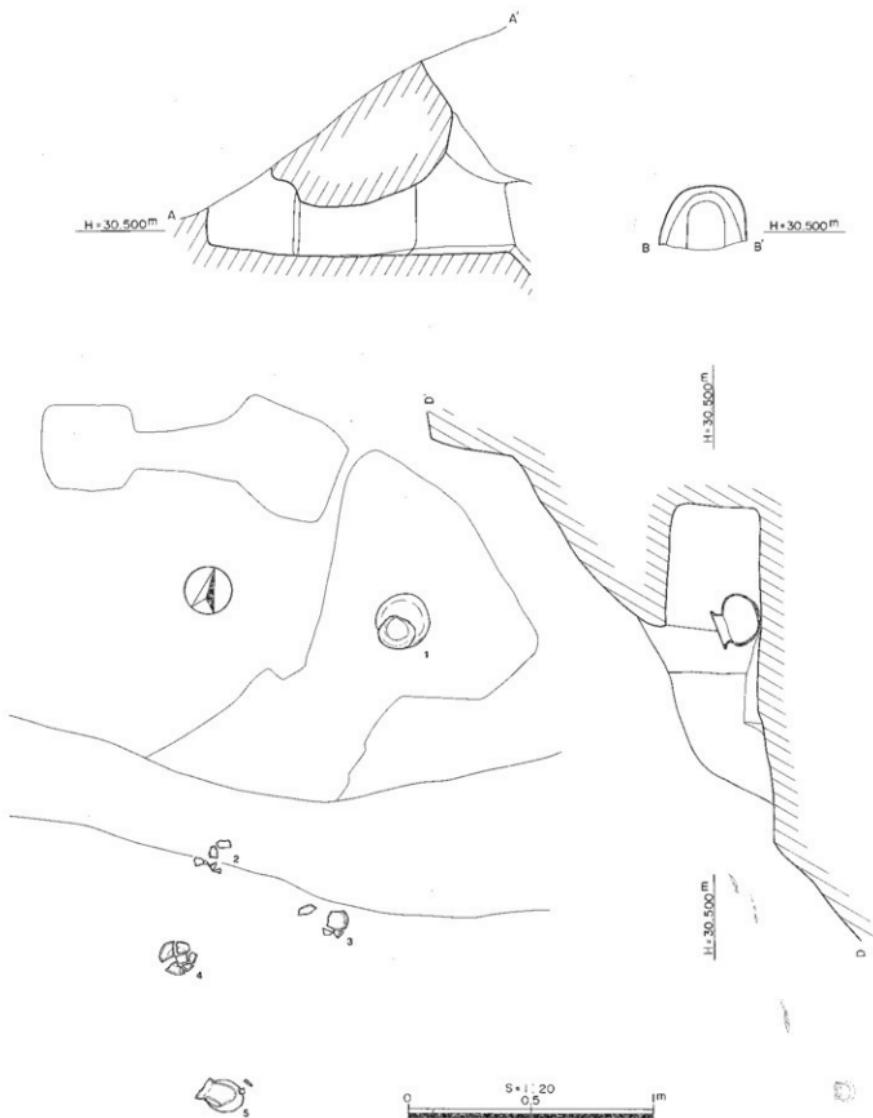
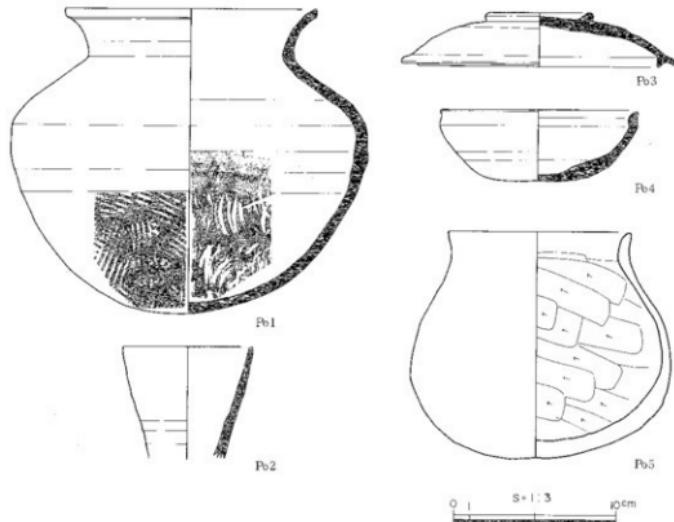


图292 西8号·9号横穴实测图②



插図293 西8号横穴出土遺物実測図

位 置 西7号横穴の前庭北側壁面に掘穿された小規模な横穴である。玄室西側を西9号横穴と接している。

羨道及び玄室の天井一部が崩落している。主軸を北東—南西におき、南北方向に開口している。開口部レベルは西7号横穴前庭より約40cm高い30.4mで、全長138cmをはかる。

玄 室 玄室の平面形は不整台形を呈する。丸天井系方形断面の天井形態をとり、床面は水平に近い。規模は、奥行51cm、幅105cm、天井の高さ37cmをはかる。

羨 道 羨道は単純構造で、断面形は天井崩落のため不明である。床面が、前庭側から玄室側へ傾斜する。中央部に幅12cm内外で、深さが玄室床面に水平となるような排水溝を有する。長さ38cmをはかる。

前 庭 前庭は、西7号横穴前庭と接し、その高低差は約40cmである。平面形は台形である。主軸方向で長さ42cmをはかる。

閉 塞 本横穴からは、羨道と前庭の境に8cm内外の段が設けられている他は、石材等は検出されていない。閉塞板を使用した閉塞が行なわれたものかと思われる。

遺物出土 玄室中央部や羨道より、須恵器の小型甕Po1がやや傾いた状態で出土している。玄室天井部の状況 崩落による傾きと考えられる。また、西7号横穴前庭より、本横穴に伴うと思われる遺物Po2・3・4・5が検出された。出土位置、レベルからみて、本横穴前庭に置かれたものが、土砂の流れ等により二次的な移動を受けたものと思われる。

土器番号	出土遺構	器種	①口 径 ②底 高 さ ③底 直径	形 態	手 法	拍 上	焼 成	色 調	備 考
Po 1	西8号横穴	小型甕	①35.4 ②8.8 ③22.0	口縁部は外反し、底部は平底をつくる。腹部がはり、肩部は中位にくる。底部は丸い。	口縁部内外面切欠カナ削観。腹部外部カナメ剥離。内部削離アラ剥離。中央部内面外側凹部アラ剥離。肩部アラ及び底部外側平行タリ。内面削離アラタリ。	やや粗 砂粒を含む。	良	黄灰白色	
Po 2	西8号横穴	手瓶	①7.7	瓶状形に開口部狭部。瓶底は丸い。以下火 鉢。	瓶底部切欠観。	粗 砂粒を含む。	良	暗灰色	
Po 3	西8号横穴	盖環の蓋	①16.8—14.7 ②3.4	大井田型は扁平な環状のつまみをもつ。口 縁部は外反し地盤に下る。口縁部前面にえ りをもう。かんじは口縁部よりも下位に 突出する。	口縁部アラ削離。	やや粗 砂粒を含む。	良	淡灰色	
Po 4	西8号横穴	盖環の身	①11.8 ②4.4	口縁部は外反しにのび。口縁部 前面にえりをもう。底部は丸くおさめ る。底部はやや平たい。	底部内面仕上げアラ削離。底は火鉢アラ 削離。	やや粗 砂粒を含む。	良	灰 灰灰白	
Po 5	西8号横穴	蓋(土鍋 蓋)	①11.1 ②13.9 ③15.9	山根型はやや丸とする。口縁部は丸い。 底部は丸くおさめる。	口縁部アラ削離。内面口縁部ヨコナアラ 削離。以下ヘラケアリ削離。	やや粗 砂粒。	良	赤褐色 茶褐色	

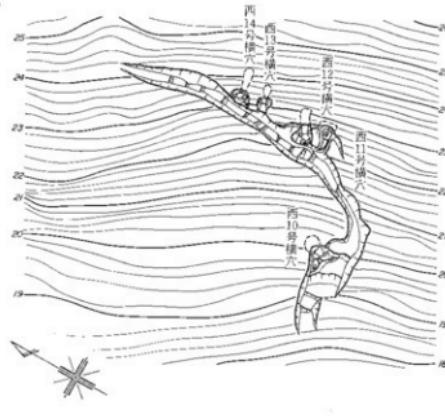
插表27 西8号横穴出土遺物実測図

9. 西9号横穴（挿図291・292、図版96）

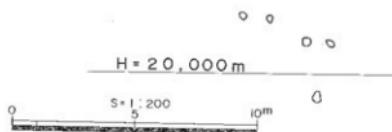
- 位 置** 西7号横穴の北西、西8号横穴の玄室と接する小規模な横穴である。主軸を東一西におき西方向に開口する。開口部レベルは30.6mである。全長122cmをはかる。西8号横穴玄室西側と、縦に掘られた長径40cmほどの長円形の前庭入口よりの2ヶ所から掘穿されたものと思われる。
- 玄 室** 玄室の平面形は不整形を呈する。天井形は西8号横穴と玄室と接するため不明であり、奥行、幅とも42cm内外をはかる。
- 羨 道** 羨道は単純構造で、断面形はつり鐘形を呈し、長さ43cmをはかる。
- 前 庭** 前庭の平面形は方形で長さ37cmをはかる。前記したように前庭は、長方形に縦に掘られたあと床面を水平に近く方形に整形されている。
- 閉 塞** 閉塞方法は不明である。遺物は検出されなかった。

第4節 西斜面1号道路状遺構に伴う横穴群（挿図294）

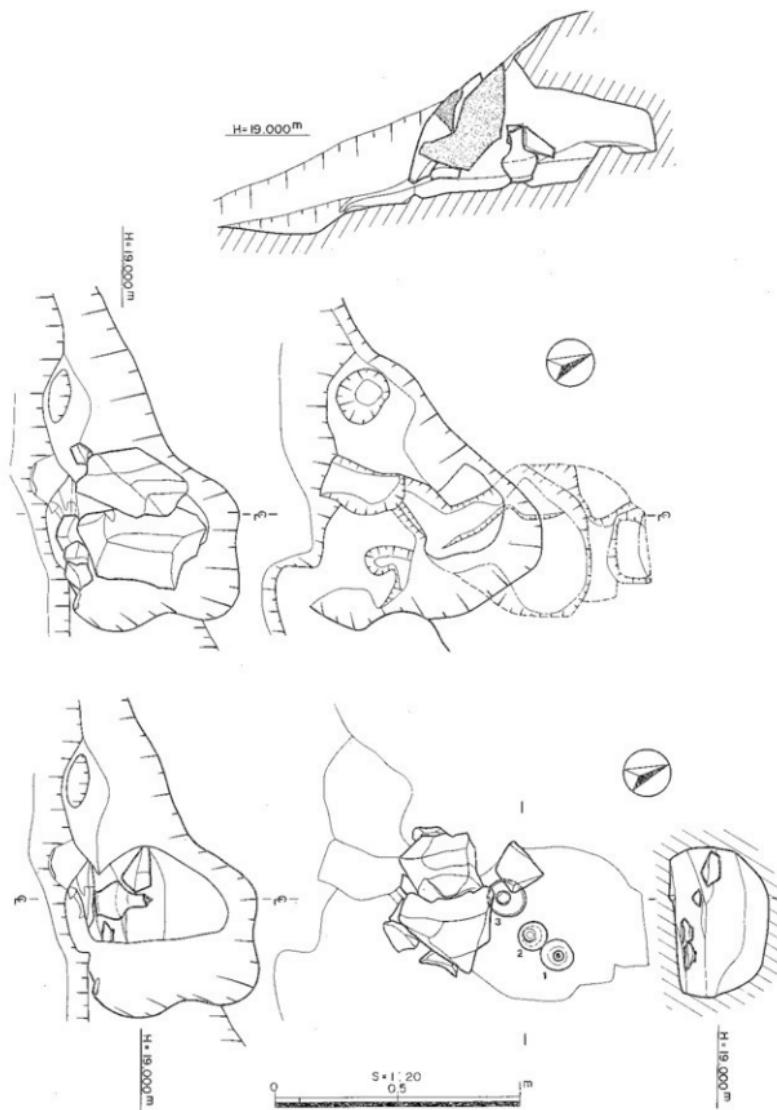
標高20~23m付近で、第1号道路状遺構（挿図142、以下1号道路状遺構とする）に伴う5基の小規模な横穴（西10号横穴～西14号横穴）を調査した。道路状遺構は、最大幅145cm、最小幅60cm、深さ40cm内外の溝に階段状の段を配したもので、「J」字状に長さ13.3mをはかる。最下部標高18.5mより、最高部24.2mで消滅するまでの高低差が5.7mあり、北側壁に1基（西10号横穴）、東側壁山側に4基（西11号横穴～西14号横穴）の小規模横穴が存在した。1号道路状遺構と各横穴は、ほとんど同時期に形成されたものと考えられる。1号道路状遺構の性格は後述のこととし、各横穴の調査について述べる。



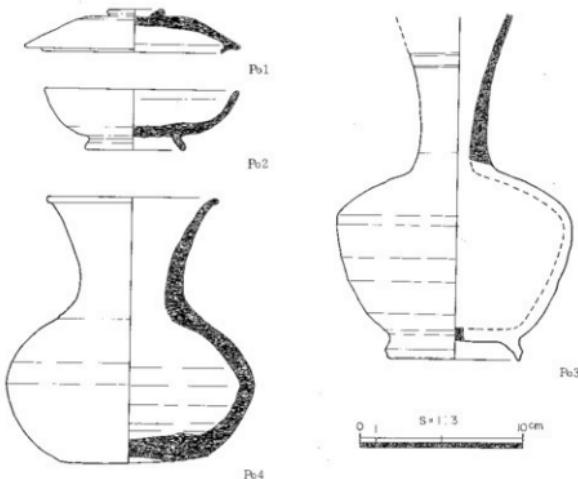
挿図294
西斜面1号道路状遺構に
伴う横穴群



1. 西10号横穴 (挿図295・296、図版97・108)



挿図295 西10号横穴実測図



插図296 西10号横穴出土遺物実測図

位 置 西11号横穴の南西5m、1号道路状遺構北壁に掘穿された小規模な横穴である。主軸を北東—南西におき南西方向に開口している。全長136cmをはかる。開口部レベルは18.8mと発掘調査をした本遺跡の横穴群中、最も低位置にある。

玄 室 玄室と狭道の境界が明瞭でないため、一括し玄室として取り扱う。玄室床面の平面形は楕円形であり、丸天井系方形断面の天井形態をとる。玄室奥側に小型のテラス状の段を設け、床面は全体として前庭側に傾く。玄室規模は、奥行91cm、幅と高さはそれぞれ中央部で63cm、37cmをはかる。

前 庭 前庭床面の平面形は、1号道路状遺構側に広がる不整台形を呈し、長さ45cmをはかる。中央部から1号道路状遺構側に幅20cm、深さ7cm程の排水溝がある。この他にも前庭各部に掘り込みがみられ、前庭床面は平坦面をなすに至っていない。

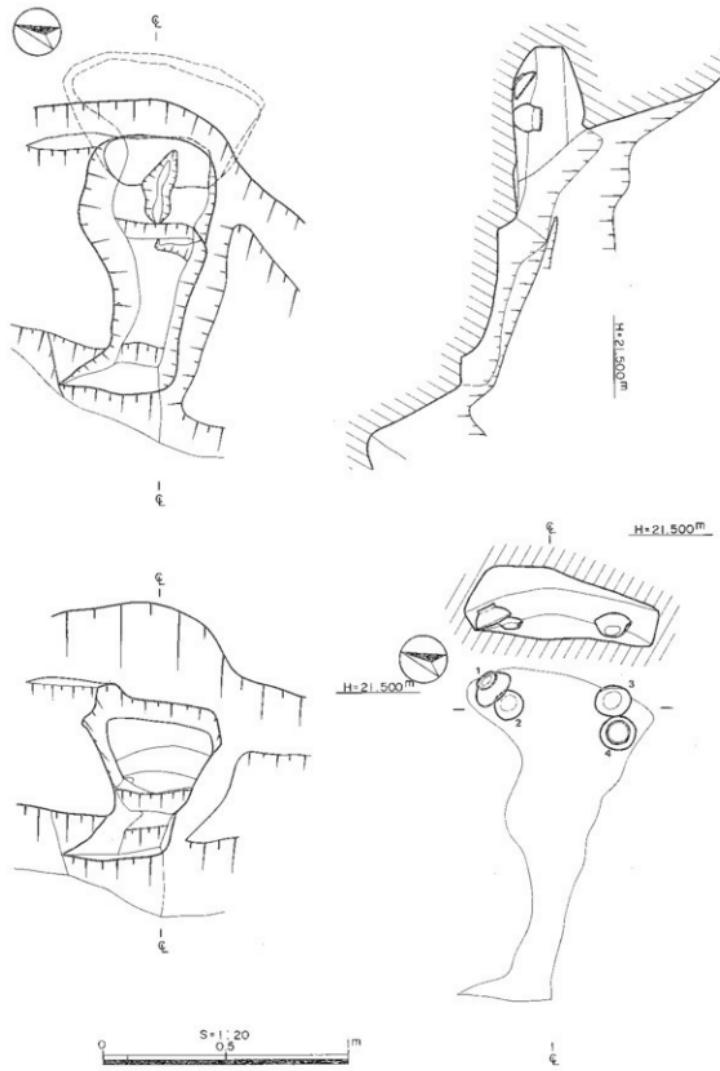
閉 塞 閉塞は玄門部に板状の割石2個をたてかけ、周囲の隙間に拳大の割石を詰めて行なっている。調査時点では玄室内全体に土砂が流入堆積し、閉塞用の石材も一部が玄室内に転落していた。

**遺物出土
状況** 玄室内西側に長頸壺Po3が置かれ、中央部に蓋環セットPo1・2がいずれも口縁部を下にした状況で検出された。また前庭埋土掘り下げ中に長頸壺Po4が出土している。

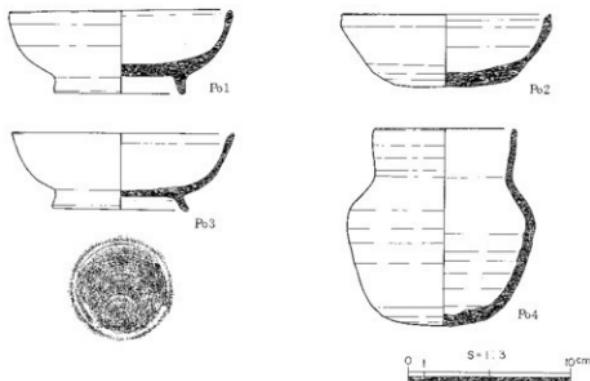
土器番号	出土遺構	器種	①(年) ②(器 種) ③(病 害性) ④(破 損度)	形 態 然	手 法	動 土	焼 成	色 調	備 考
Po 1	西10号横穴	蓋环の蓋	①11.1—16.9 ②2.7	大方底面に複数の凹みをもつ。口 縁部はやや直線的に下る。口縁部内側にか なりをつづき、かえりは口縁部より下 方に突出する。	大井戸外側面に凹輪へラッセリ痕の残る回転 ナメ陶器。大井戸内面に上けナメ陶器。他 は凹輪ナメ陶器。	密	良	外側 灰 内面 灰	ロクロ回転右回 り。
Po 2	西10号横穴	蓋环の身	①11.9 ②3.8 ③5.9	1面底面はやや内凹性にして上方にのびる。 底面は丸い。高台は内凹性にして外方にふん ばり、底面は丸い。	底面内面に上けナメ陶器。他は回転ナメ 陶器。	密	良	灰 色	
Po 3	西10号横穴	長頸壺	③8.0 ④14.4	口部側面に鋸歯状の外縁気孔に向 かう方にはやや中凹性にして上方にのびる。底 面は丸い。高台は内凹性にして外方にふん ばり、底面は丸い。	底面と向台外側に凹輪へラッセリ痕の残る 回転ナメ陶器。他は回転ナメ陶器。	密	良	外側 灰 内面 灰	ロクロ回転右回 り。
Po 4	西10号横穴	長頸壺	①10.5 ②16.3 ③15.3	やや大きい頸部より大きめの外縁して上方に のびる口部をもつ。胴部は中位かはり、 やや扁平である。底面は平たん。	底面内面に上けナメ陶器。他は前歴の不 規な胸部下以下に接着して回転ナメ陶器。	密	良	灰 色 一部 灰付青	ロクロ回転右回 り。

挿表28 西10号横穴出土遺物観察表

2. 西11号横穴 (挿図297・298、図版98・109)



挿図297 西11号横穴実測図



持図298 西11号横穴出土物実測図

位 置 1号道路状遺構東壁山側に掘穿された西12号横穴の南側に隣接する小規模な横穴である。主軸を東西におき、西方向に開口している。全長140cmをはかる。開口部レベルは21.1mである。

玄 室 玄室と羨道の境界が明瞭でないため、一括し玄室として取り扱う。玄室床面の平面形は不整台形で、丸天井系半球形の天井形態をとる。床面はほぼ水平である。玄室規模は奥行55cm、幅と高さはいずれも中央部で76cm、29cmをはかる。玄門部中央に前庭へのびる幅10cm内外、深さ2cm程の排水溝を有する。

前 庭 前庭床面の平面形は、1号道路状遺構側に細くなる不整台形を呈する。長さ85cmをはかる。玄室内より続く排水溝が消滅する玄門部寄りの一部横溝状の段、及び道路状遺構側の段の2つの段を有し、縦断面は階段状に見える。

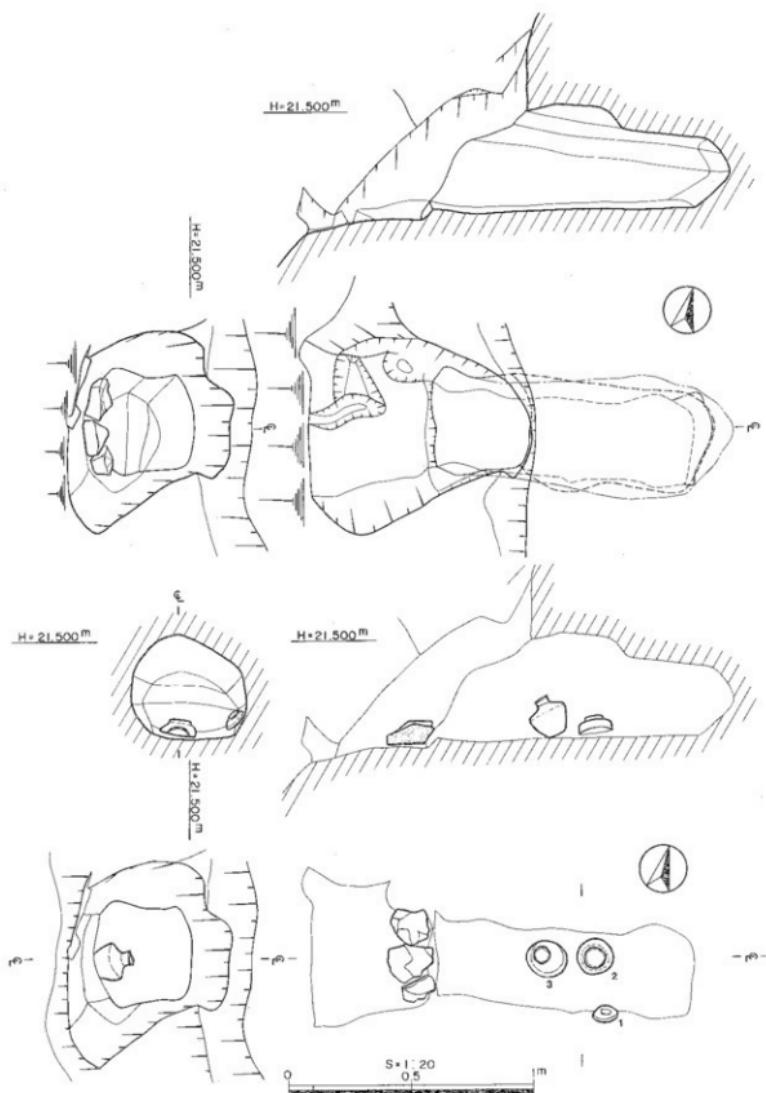
閉 塞 本横穴は、1号道路状遺構に伴う小横穴群中、ただ一つ石材の使用がみられず、数次にわたって使用した可能性が高い。おそらくは、閉塞時に前庭玄門部側の一部横溝状の段を利用して、閉塞板と土による閉塞が行なわれたものと考えられる。

遺物出土 玄室北側奥壁より、蓋環の身2個Po1・3が、いずれも口縁部を下に向けて検出された。また玄室南側より、直口壺Po4と蓋環の身Po2が、直口壺の口縁から蓋環の身がずり落ちた状態で出土している。

土器番号	出土遺物	器 様	形 番	手 法	所 上	焼 成	色 製	備 考	
Po 1 西11号横穴	蓋環の身	①口 高 ②脚 ③底 ④側 ⑤蓋 ⑥側 ⑦底 ⑧側 ⑨大径	⑩.1 ⑫.5 ⑬.7.4	口縁部は内窓気味に上外方にのり、脚部は丸い。蓋台は外方にふんばり、脚部はやや水平に造り直す。	底部内面仕上げナメ調整。他の回転ナメ調整。	背 面砂粒を含む。	真	灰 色	
Po 2 西11号横穴	蓋環の身	⑪.2.8 ⑫.4.5	口縁部は内窓気味に上外方にのり、脚部は丸い。蓋台は外方にふんばり、脚部はやや水平に造り直す。	底部外周回転ヘラケツリ調整。内面仕上げナメ調整。他の回転ナメ調整。	密	真	青みかかった灰色	ロクロ回転右捻り。	
Po 3 西11号横穴	蓋環の身	⑬.3.5 ⑭.4.7 ⑮.8.1	口縁部は内窓気味に上外方にのり、脚部は丸い。蓋台は外方にふんばり、脚部はやや水平に造り直す。	底部内面仕上げナメ調整。他の回転ナメ調整。	やや粗 砂粒を含む。	真	淡 灰 色		
Po 4 西11号横穴	直口壺	⑯.8.6 ⑰.12.1 ⑱.11.6	口縁部は蓋内側気味にやや上方にのり、脚部は丸い。蓋台は外方にふんばり、脚部はやや水平に造り直す。	底部外周回転ヘラケツリ調整。内面仕上げナメ調整。他の回転ナメ調整。	密 粗砂粒を含む。	真	灰 色	ロクロ回転右捻り。	

持表29 西11号横穴出土物朝奈表

3. 西12号横穴（挿図299・300、図版98・109）



挿図299 西12号横穴実測図

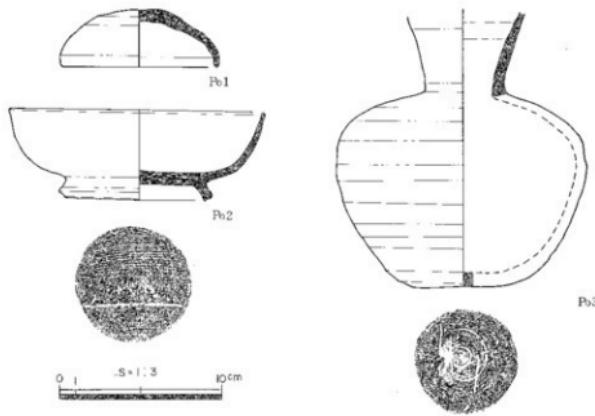


図300 西12号横穴出土遺物実測図

位 置 1号道路状遺構東壁山側に掘穿された、西13号横穴の南、西11号横穴の北側に隣接する小規模な横穴である。主軸を東北東—西南西におき、西南西方向に開口している。全長174cmをはかる。開口部レベルは、21.1mである。

玄 室 玄室と羨道の境界が明瞭でないため、一括し玄室として取り扱う。玄室床面平面形は長方形、丸天井系方形断面の天井形態をとる。床面は前庭方向に若干傾く。玄室規模は奥行122cm、幅と高さはいずれも中央部で46cm、42cmをはかる。玄門部下に高低差5cmの段を有する。

前 庭 前庭床面の平面形は、1号道路状遺構側に若干広がる不整台形を呈する。その規模は長さ52cm、玄門部側の幅36cm、1号道路状遺構側の幅64cmをはかる。前庭中央部より1号道路状遺構にかけてと、前庭北側壁面にかけて、幅10cm内外、深さ8cm程の排水溝を有する。

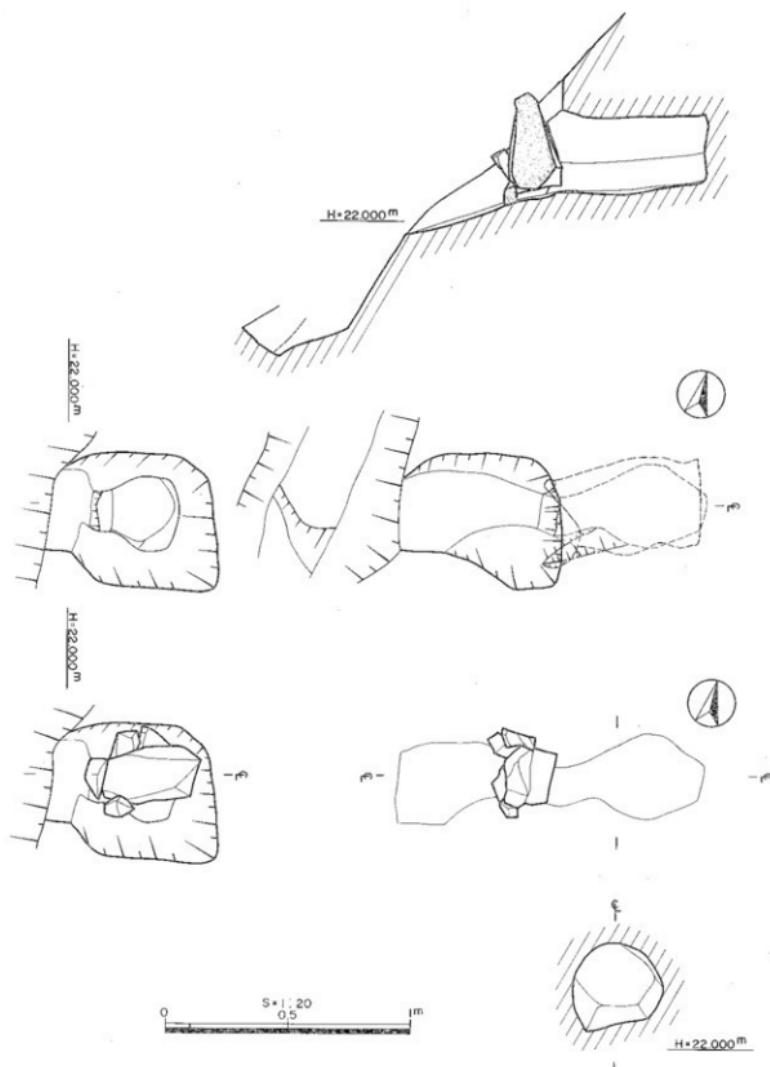
閉 塞 玄門部下の段より、石材3個を検出した。これらはいずれも人頭大の割石で、閉塞板の控え積みとして閉塞に使用されたものと考えられる。

遺物出土 状況 玄室中央部に口縁部の欠けた長頸壺Po3が、その奥より蓋壺の身Po2が、口縁部を下にして検出された。また、玄室南東側より壁面にたてかけるようにして、口縁部を下にした小型の蓋壺の蓋Po1が出土している。

土器番号	出土遺物	種 様	①口 ②部 ③底 ④縁 ⑤施 ⑥模 様 大き 度	形 態	手 法	胎 土	焼 成	色 調	備 考
Po 1	西12号横穴	蓋壺の蓋	①9.3 ②3.6	口縁部は内側して下り、瓶部は尖る。天井部はやや丸い。	天井部内外面分仕上げテナ刺繍、分縫部へタケズリ巻の残る四輪ナメ調窓。他は同板ナメ調窓。	密	真	淡灰 色	
Po 2	西12号横穴	蓋壺の身	③15.6 ④8.6	口縁部はやや内側気味に下外方にのびる。底足部は尖る。高台は外方にふんばり、端部で内側に屈曲する。	側面ナメ調窓。	密 黄砂粒を含む	真	灰 色	
Po 3	西12号横穴	長頸壺	④15.4	口縫部欠け、瓶颈部は起伏状の口縫部をもつ。剥離部はやや丸く、番大溝は脚部中位よりやや上にくる。底足部は平たい。	脚部下半外側及び上部外側に凹凸へタケズリ調窓。他は同板ナメ調窓。	やや粗 砂粒を含む	真	淡灰 色	

表300 西12号横穴出土遺物観察表

4. 西13号横穴（挿図301、図版99）



挿図301 西13号横穴実測図

位 置 1号道路状遺構東壁山側に掘穿された、西12号横穴の北、西14号横穴の南側に隣接する小規模な横穴である。主軸を東一西におき、西方向に開口している。全長125cmをはかる。開口部レベルは、22.1mである。

玄 室 玄室と羨道の境界が明瞭でないため、一括し玄室として取り扱う。玄室床面の平面形は、中ぶくらみの不整長方形であり、丸天井系方形断面の天井形態をとる。床面は前庭方向に若干傾く。玄室規模は奥行64cm、幅と高さはそれぞれ中央部で37cm、31cmをはかる。玄門部下に高低差2cm内外の小さな段を有する。

前 庭 前庭床面の平面形は、1号道路状遺構側に広がる不整合形を呈し、長さ61cmをはかる。

閉塞及び遺物 閉塞は玄門部に長さ40cm程の板状割石をたてかけ、周囲の隙間に拳大の割石を詰めて行なっている。調査時点では、玄室内全体に土砂が流入堆積していた。遺物は出土しなかった。

5. 西14号横穴（挿図302・303、図版100・109）

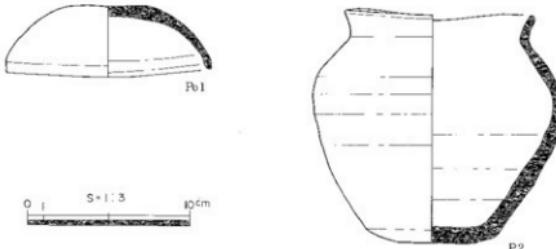
位 置 1号道路状遺構東壁山側に掘穿された、西13号横穴の北側に隣接する小規模な横穴である。主軸は東一西におき、西方向に開口している。全長147cmをはかり、開口部レベルは22.2mである。

玄 室 玄室と羨道の境界が明瞭でないため、一括し玄室として取り扱う。玄室床面の平面形は、中央がややふくらむ不整長方形であり、丸天井系方形断面の天井形態をとる。床面は前庭側に傾く。玄室規模は奥行107cm、幅と高さはそれぞれ中央部で51cm、26cmをはかる。玄門部下の高低差15cmほどの段で消滅する長さ20cm、深さ4cmほどの排水溝を有す。

前 庭 前庭床面の平面形は、1号道路状遺構側に広がる不整合形を呈し、長さ40cmをはかる。玄門部下から前庭中央にわたり、二段掘りのピット状掘り込みを有す。

閉 塞 閉塞は玄門部に板状の割石をたてかけ、周囲の隙間に様々な大きさの割石を詰めて行なっている。この時、前庭の地山を二段掘りピット状に掘り込み、石材を土砂で固定したものとみられる。調査時点では、玄室内全体に土砂が流入堆積していた。

遺物出土状況 玄室中央に近いところに短頭壺Po 2がおかれ、その奥側に蓋環の蓋Po 1が破片の状態で出土している。



挿図302 西14号横穴出土遺物実測図

上種番号	出土位置	種 標	①口 径 ②身 高 ③肩 後 傾 ④縦 長 度	形 格	手 法	施 土	細 成	色 調	備 考
Po 1	西14号横穴 蓋環の蓋	①12.4 ②4.4	口縁部はやや内側斜めになり、端部近くでやや外反する。口縁部は丸い。天井部はやや平坦だ。	天井部外側面へて切り欠調整、内側方に仕上げて削除。他は削除ナシ削除。	やや粗 砂粒を含む。	良	灰 灰 色		
Po 2	西14号横穴 短頭壺	①11.6 ②14.9 ③15.3	口縁部は堅くいつつで、外側へて上方方にのびる。壺底はやや丸い。最大径は壺底中央にある。底部はやや平たい。	底部外側面削除不規。他は削除ナシ削除。	密 度砂粒を含む。	良	灰 色、一部 灰釉付着。	リクロ回転有 り。	

挿表31 西14号横穴出土遺物観察表

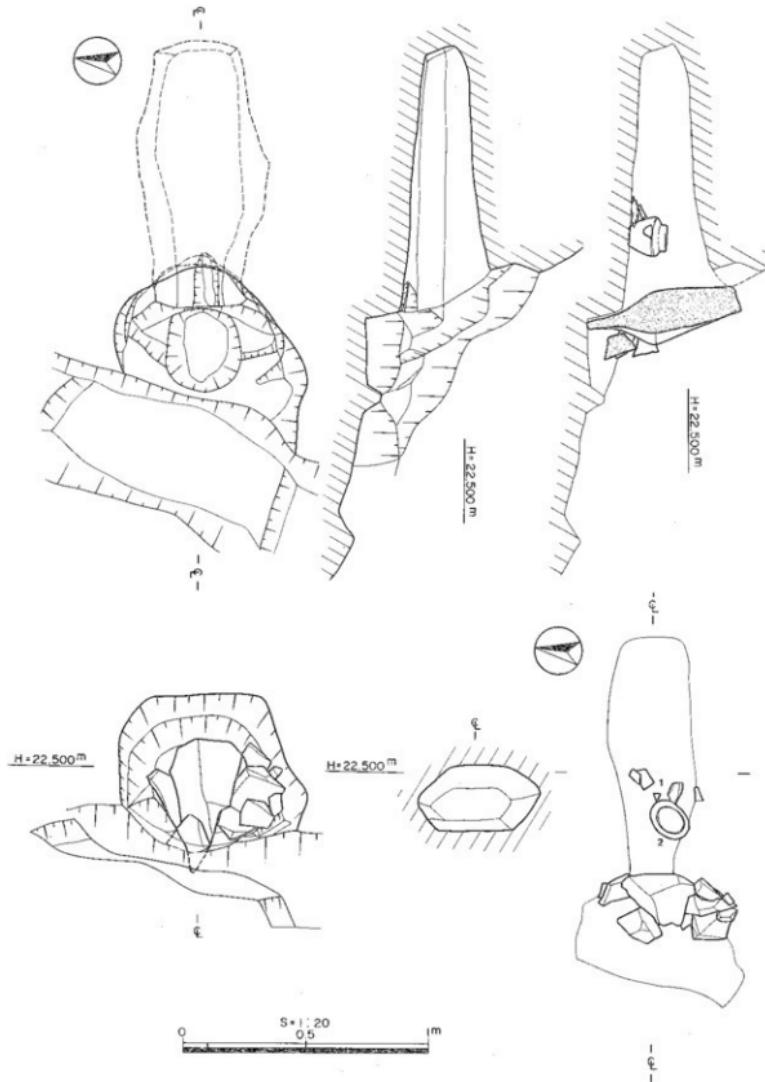


插图303 西14号横穴实测图

第5節 小 結

前節までに東宗像遺跡の横穴群について記述したが、最後にこの横穴群について若干のまとめを行ない小結とする。

1 構成

本遺跡調査区域内で検出した横穴は総計19基であり、そのうち5基が遺跡東斜面に、残り14基が西斜面に遺存していた。西斜面南側の横穴群については発掘調査を行なった区域外の斜面にも凹みが存在し、横穴群が南側にも広がっているだろうことは第3節で述べたとおりである。このように発掘調査によって本遺跡の横穴全体を把握したとはいえぬが、調査を行なった19基は大きく地理的に分けて3群で構成されている。第1群は東斜面の東1号横穴～東4号横穴である。この群は、遺体埋葬用＝墓として機能したことが確実な大型の横穴（横穴墓）2基と、所謂小横穴2基で構成されている。第2群は、西1号横穴～西9号横穴までのもので、この群は大型の横穴墓6基（うち未使用1基）と所謂小横穴3基で構成される。この第2群は、さらに小群（グループ）に分けられる可能性を持つ。第3群は、本遺跡横穴群中最も特筆すべき一群である。西斜面1号道路状構造に伴う西10号横穴～西14号横穴はすべて所謂小横穴で構成されている。これら3群の時期的な差異は後述するが、大まかに、第2群→第1群→第3群という先後関係が考えられる。

2 構造

19基の各横穴の構造をまとめて、挿表32を作成した。これをもとに若干の説明を加えたい。
玄室天井 横穴の天井形態については、これまでの報文・研究論文等の中で様々に呼称されてきたが、本横穴群中からは“四注式系三角形断面平入”。“同妻入”。“丸天井系半球形”。“丸天井系方形断面”。とされる天井形態の横穴が検出された。天井と壁との界線をもたぬ四注式系三角形断面の天井形態をもつ横穴は計4例で、このうち妻入のものが東1・東2・西2号横穴の3例、平入のものが西1号横穴の1例であった。次に丸天井系の天井形態をもつものは計12例で、このうち半球形のものは西7・西11号横穴の2例にみられ、不明なもの3例を除く9例は方形断面形の天井形態をとる。

本横穴群の天井形態においては、“四注式系整正家形”とされるものを除く天井形態をもつ横穴が混在して検出されており、11例を数える所謂小横穴には四注式系の天井形態をもつ例がないということを除くと、調査例が少ないこともあり特徴的なものは見い出せなかった。

羨道形態 本横穴群中、明確に羨道と玄室の区別がつくものは計10例である。このためこれまで羨道形態として捉えられてきた羨門付近の構造を羨道構造として論を進める用語の点で矛盾がおきるため、入口形態という用語でこれを示し、羨道形態では、断面形の形態を中心にその構造をみた。本横穴群中においては羨道断面形は不明3例を除くと円形とつり鐘形に分かれる。

円形は、東1号横穴のみにみられ、他の西1・西2・西4・西5・西7・西9号横穴においては、長円形の一方を平坦にしたつり鐘形の断面形を呈する。

入口形態 ここでいう入口とは、横穴の閉塞を行なった箇所である。これは、これまで羨道形態として捉えられてきたもので、本報告書でもその構造から、“二重”と“単純”。の2構造に分けた。

本横穴群中でみられる二重構造は、他の横穴群に見られる複雑的な印象を与えられるような例ではなく、主として閉塞用の穿り込みをつけたものである。本横穴群中東1・西1・西2・西4・西5・西7号横穴がこれに属する。

単純構造は、上記の閉塞用の穿り込みを持たぬもので、東3・東4・東5・西3・西8・西9・西10・西11・西12・西13・西14号横穴がこれに入る。

入口形態が不明な東2号・未使用的西6号を除けば、本横穴群中の大型の横穴群は二重構造、所謂小横穴は単純構造の入口形態を持っており、本横穴群に限って言うならば、二重構造は大型の横穴（横

横穴名	全長	前庭長	奥道長	普通断面形	玄室長	玄室幅	玄室高	玄室平断面	玄室天井断面	入口形態	排水溝	屍床	備考
東1号横穴	785	466	134	円形	185	149	117	長方形	四式系 △角形断面妻人	一重構造	玄室 壁 周 囲		
東2号横穴	865	558	92	不明	215	207	125	長方形	四式系 △角形断面妻人	不明	玄室壁周囲と中央部	横造及び女室の大井戸附落	
東3号横穴	167	10	-	-	157	64	61	小底五角形	丸天井系方形断面	單純構造	な	し	東2号横穴に伴う小規模横穴
東4号横穴	102	7	-	-	95	35	25	不整台形	丸天井系方形断面	單純構造	な	し	東2号横穴に伴う小規模横穴
東5号横穴	182	102	-	-	80	35	23	長円形	丸天井系方形断面	單純構造	玄室 中央 部		小規模横穴
西1号横穴	1047	624	208	つり鐘形	215	249	176	長方形	四式系 △角形断面下入	二重構造	玄室 壁 周 围	須恵器陪床	
西2号横穴	994	485	205	つり鐘形	214	235	158	長方形	四式系 △角形断面妻人	二重構造	な	し	陪合・有縫屍床
西3号横穴	58	30	-	-	28	78	39	長方形	丸天井系方形断面	單純構造	玄室 前 端 ?		西2号横穴に伴う小規模横穴
西4号横穴	930	534	234	つり鐘形?	162	188	117	長方形	丸天井系方形断面	二重構造	前庭中央部全壇		
西5号横穴	922	539	195	つり鐘形?	188	220	不明	不整方形	不明	二重構造	玄室東側壁沿い?		
西6号横穴	300?	170?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	横墓中放置
西7号横穴	971	585	308	つり鐘形	78	105	75	不整長円形	丸天井系半鼓形	一重構造	汎道 中央 部		
西8号横穴	138	42	38	不明	51	195	37	不整台形	丸天井系方形断面	單純構造	須道 中央 部		東7号横穴に伴う小規模横穴
西9号横穴	122	37	43	つり鐘形	42	42	不明	不整方形	不明	單純構造	な	し	東7号横穴に伴う小規模横穴
西10号横穴	136	45	-	-	91	63	37	不整圓形	丸天井系方形断面	單純構造	前庭 一 部		
西11号横穴	140	85	-	-	55	76	29	不整台形	丸天井系半球形	單純構造	玄門 中央 部		1号道路状況
西12号横穴	174	52	-	-	122	46	42	長方形	丸天井系方形断面	單純構造	前庭 中央 部		横に伴う小規模
西13号横穴	125	61	-	-	64	37	31	不整長方形	丸天井系方形断面	單純構造	な	し	
西14号横穴	147	40	-	-	107	51	26	不整長方形	丸天井系方形断面	單純構造	玄門 中央 部		横穴

表32 横穴構造一覧表(単位:cm)

穴墓)に通有のものといえる。

排水溝 横穴床面の溝が排水用のみに掘り込まれているのではないことは、これまでにも指摘されている。²²³ 本横穴群中にもいわゆる排水溝を持つものは多い。玄室内部を区画するためのもの、排水のためのもの、その両者の性格を持つものがあると思われ、その性格は横穴ごとに異なっているがここでは排水溝として一括して報告した。また、排水溝の位置も、玄室に限らず羨道、前庭にもあり、バターン化するには至らなかったが、横穴の縦断面との関連からこれをみる場合、排水溝を有する場合には、前傾の度合いが低く、有さぬ場合には、前傾の度合いが高いといふことが本横穴群においては看取できる。横穴構築時における排水の意識を物語るものといえよう。

屍床 本横穴群中玄室内に屍床を有する横穴は、西1号横穴の須恵器屍床及び西2号横穴の棺台・有縫屍床の二例である。しかし、玄室を区画するという観点からすれば、東2号横穴の排水溝すなわち、玄室四壁及び中央を走る溝も広義の屍床といえるかもしれない。

西1号横穴の須恵器屍床は、大甕を破碎し玄室内に敷きめたものだが、これは、近年発掘調査された米子市陰田遺跡でも10例が確認されており、これとあわせて、従来の島根県東部を中心とした分布に一知見を加えるものといえよう。²²⁴

次に西2号横穴の棺台・有縫屍床であるが、これは、玄室奥壁に向って左側に棺台、右側に有縫屍床を横穴構築時より造り付けたもので、追葬をあらかじめ考慮した横穴構築の一例といふことができる。

閉塞 本横穴群の閉塞状況をみると、石材を使用する閉塞と使用しない閉塞の二つに大別できる。石材を使用した閉塞を行っているのは、西1・西2・西10・西12・西13・西14号横穴の6例である。このうち西10・西13・西14号横穴においては、板状にした割石を閉塞部に1枚ないし2枚たてかけて塞ぎ、その隙間を拳大の割石で埋めており、石材のみを使用した閉塞といふことができる。次に西1・

西2・西12号横穴の3例では、いずれも人頭大の割石3~4個が検出されているが、この割石のみで閉塞を行うことは量的に無理であり、次の石材を使用しない閉塞方法をとる横穴と同様に、閉塞板を用いた閉塞がこの3例でも行われたと推察できる。おそらくは、この3例で検出された割石は、閉塞板の控え積みとしての補助的な役割を持っていたのであろう。

石材を使用しない閉塞方法をとる横穴は、上記の6例を除く13例である。このうち未使用の西6号横穴、閉塞状況の不明な東4・西9号横穴を除く11例は、いずれも閉塞部の下に横溝ないしはそれに類する段が認められる。これは閉塞板を固定させるために掘りこまれた可能性が高い。そしてこの閉塞板の「おさえ」として、前庭埋土下層にみられる土の使用が考えられる。これらの多くの横穴では、羨道にまで土砂の堆積がみられたが、これらは閉塞板の腐朽によって前庭埋土が羨道に流入したものであろう。

以上のような閉塞状況の差異は、時期的あるいは構成的なものとは考えられぬが、横穴使用時において追跡に関するなんらかの意識の差が働いたものだろうか。

3 遺物

本横穴群の調査で相当数の遺物を検出した。検出した遺物は須恵器・土師器・鉄製品・玉類・耳環・石製品であり、横穴の出土位置ごとにその出土数を挿表33に示した。

(なおこの表中の個体数は、別個体と認める物は破片でも「1」と数えた。)

横穴 No.	西						東						北						南																
	環	高	平	罐	器	土師器	他	環	高	平	罐	器	土師器	他	環	高	平	罐	器	土師器	他	環	高	平	罐	器	他								
	环	身	环	身	环	身	环	身	环	身	环	身	环	身	环	身	环	身	环	身	环	身	环	身	环	身	环								
東1号横穴	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-							
東2号横穴	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-							
東3号横穴	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-						
東4号横穴	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							
東5号横穴	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-							
西1号横穴	1	5	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	4	-	-	-	1	-	-	-	-	-	2	6	6	-					
西2号横穴	7	10	5	2	1	-	-	小 环 1	1	-	1	-	2	1	-	1	1	-	-	1	6	2	-	-	-	-	10	-	3	-	鉄針1 丸石2				
西3号横穴	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
西4号横穴	2	1	1	-	-	2	-	-	环 1	-	-	-	1	-	-	-	-	1	3	-	-	-	-	-	2	3	-	5	1	2	3	-			
西5号横穴	2	2	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	6	-	3	-	1	-	1	1	2	-	-	-	-	-	-			
西6号横穴	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
西7号横穴	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
西8号横穴	1	1	-	-	-	-	-	小 型 1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
西9号横穴	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
西10号横穴	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
西11号横穴	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
西12号横穴	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
西13号横穴	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
西14号横穴	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

挿表33 横穴出土遺物一覧表

挿表33にみられるように、鉄製品や玉類を持つ横穴は概して須恵器の出土数も多い。また本横穴群に特徴的な所謂小横穴からは、須恵器以外の遺物は検出されず、特に東4・東5・西3・西9・西13号横穴から遺物は検出されなかった。

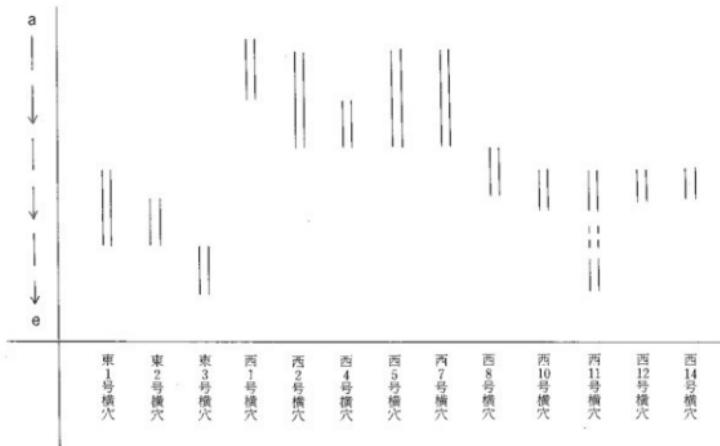
本横穴群中より出土した遺物から、その示す年代についてふれてみたい。古墳時代後期から歴史時代にかけての時期についての須恵器編年作業は、これまで鳥取県西部においてはほとんど行なわれておらず、島根県の編年や陶邑の編年が使用されてきたが、近く刊行される予定の鳥取県米子市^{注5}「陰田遺跡」の報文中に詳細な編年が試みられている。ここではこれらの編年を援用し、本横穴群の構築使用年代についてみてみたいと思う。

本横穴群においても、遺物の出土しなかった横穴を除けば各横穴とも須恵器蓋坏を普遍的に有する。この須恵器蓋坏編年の指標を要約するならば、天井部と口縁部を界する段（痕跡）が新しい段階まで残るといった地域的特色があるにせよ

- a 底部・天井部の回転ヘラケズリ調整の粗雑化、(同部回転ナデ調整の流行)
- b 同部回転ヘラケズリの消失、(同部回転ナデ調整とヘラ切り未調整の併存)
- c 蓋坏の矮小化、蓋と身の関係逆転、
- d 蓋のかえりの消失、
- e 糸切り手法の出現、(糸切り痕の出現と、糸切り手法の開始との関連については、多くの問題を包含するが、ここでは言及し得ない。)

という一連の流れがあり、現時点においてこれは是認されているものとみることができる。そこでこの流れをもとに挿表34を作成した。この表における各横穴の先後関係は、その性格からして構築年代をそのまま示すともいえぬし、また同一横穴から出土する型式差がそのまま横穴の使用された年代幅とするのもなお考慮の余地があることはいうまでもない。

以上援用してきた編年の実年代には、7世紀初頭より9世紀初頭にかけての約200年間があてられており、本横穴群もこの約200年間に構築使用され、横穴によっては追葬が行なわれたものとすることができよう。



挿表34 横穴の先後関係表

5 問題点

前記のように、本節では本横穴群の概要をまとめてみたが、調査及び報告書作成の過程で明らかになった問題点を記し、本章のまとめとしたい。

はじめに、本横穴群で特に大きな問題を提起するものとして、小規模な横穴（所謂小横穴）の問題がある。この小型の横穴についてはこれまで島根県松江市十王免横穴群^{註8}、同孤谷横穴群^{註9}、鳥取県米子市陰田遺跡横穴群等で類例が報告され、その性格については大別すると、1供献用、2埋葬用（乳幼児葬^{註10}・火葬・再葬等）という二つの考え方が示されている。

本横穴群中には、遺体埋葬用に基として機能したことが確実な大型の横穴（横穴墓）に付随した形で存在するもの（東3・東4・西3・西8・西9号横穴）、単独で存在するもの（東5号横穴）の他に、暫定的に“1号道路状遺構に伴う。として報告した5基の所謂小横穴（西10・西11・西12・西13・西14号横穴）が検出された。横穴群のための道か、時期的にみて西斜面から東斜面に通じる道に付随する横穴かは、1号道路状遺構が完存しなかつたために不明であるが、所謂小横穴の新たな存在形態として注目すべきものであるといえよう。いずれの所謂小横穴からも、人骨等の埋葬を裏付ける遺物は検出されなかったが、石による完全な閉塞を行なつたもの（西10・西13・西14号横穴）もあり、本横穴群で検出された所謂小横穴についてもその性格を断じ得なかった。将来的に類例の増加を待って、現時点においては“小型の横穴”。といった認識を出ない所謂小横穴について、その形態的な概念規定が行なわれなければならず、その性格についても出土遺物および横穴玄室内埋土（特に土器内）の科学的分析が必要となろう。

次に、本横穴群の調査のみに限らず、横穴研究の上で大きな問題となるものは、その導入及び被葬者層をめぐる問題である。この問題については、周辺地域の遺跡、中でも後期古墳と関連させて、巨視・微視的に考察しなければならずここでは言及し得ない。しかし、横穴に家族墓的な性格を与えるならば、その葬法・副葬品などからみてその“家族”は当時の社会内における一員（家族）とは考えにくく、古墳の被葬者に連なる、換言すればそれに準ずる性格を与えてはならないまい。

註1 門脇俊彦「山陰地方横穴墓序説—特に四注式系横穴墓の分布と時期について」『古文化叢書』第7集 九州古文化研究会 1980年

註2 島根県教育委員会『島根県埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』 1977年

註3 同 上

註4 筆者も調査に携わった。

註5 山本清「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』 1971年

柳浦俊一「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古』第3号 松江考古学講話会 1980年

松江市教育委員会『出雲国庁跡発掘調査報告』1970年

註6 田迎昭三『陶邑古墳址群I』1966年

中村浩『陶邑』III 大阪府教育委員会 1978年

註7 陰田遺跡の発掘調査団調査員、杉谷愛象氏・佐古和枝氏より御教示を受けた。

註8 島根大学考古学研究会「十王免横穴群発掘調査報告」『吉田考古』 第10号 1968年

註9 註2・3に同じ

註10 註7に同じ

参考文献——本章の記述にあたり、上記の他以下の文献等を参考とさせていただいた。

安来市教育委員会『黒島2号横穴発掘調査報告書』 1983年

北九州市埋蔵文化財調査会『天穂守山塚跡群』 1977年

田中義解『益田市西平原麻塚群の意義について』『ふいーるど・のーと』 №3 1982年

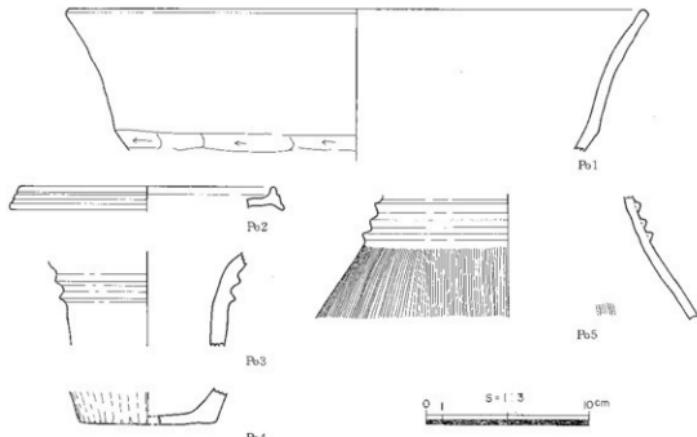
白杵耕「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会 1984年

大村直「弥生時代における鉄鎌の変遷とその評価」『考古学研究』第30巻第3号 1983年

第6章 水田部の試掘調査

調査の方法 水田部（挿図304・305、図版110）は、加茂川東側の米子バイパス橋脚工事部分内に一辺8m四方の試掘グリッドを設定して発掘調査を行なった。これは、同じ加茂川沿い約1km下流の目久美遺跡・池の内遺跡から弥生時代の集落跡や、水田跡、绳文時代の遺物などが検出されているためで、これらの遺跡に近い当所の遺跡分布の確認を行うためのものである。調査は、湧水等による壁部のくずれを防ぐため階段状に現地表下1.6mまで水平に掘り下げて行なった。

調査の結果 約2週間を要した調査は、古代水田址の検出確認を目指したが、度重なる加茂川の氾濫および流路変更のために層位が乱れ、遺構的には明治初期の大水害（明治19年）で埋没したとみられる“しがら”状の杭列を検出したことにとどまった。この杭列は南北方向にうたれ、水田畦か、溝のしがらとみられ、杭の根元から瓦や擂鉢等が出土した。ほぼ同じ面から、須恵器片をはじめ、弥生土器片や绳文土器等が出土した。いずれも端部がローリングによって磨滅しており、二次的な移動を大きく受けている。出土した遺物及びその検出地点を挿図305に示した。



挿図304 水田部出土遺物実測図

土器番号	出土場所	器種	①山 ②腰 ③縁 ④底	形態	手法	胎土	焼成	色調	備考
Po 1	水田部	溝跡 (陶文)	①山(Ⅲ)	やや外輪質底に外方に開くU縁部。	残存部下半外輪底方向のケズリ調整。その他は調査不明。	やや粗 砂粒を含む。	良	暗灰 色	
Po 2	水田部	巻	②腰(Ⅲ)	口縁周部が肥厚し、同部に2条の沈線を施す。	調整不明。	やや粗 砂粒を含む。	良	淡黄 褐色	
Po 3	水田部	縁		やや外覗する頂部。新面に角形の凸溝を2条上半に有す。	調整不明。	やや粗 砂粒を含む。	良	淡黄 褐色	
Po 4	水田部	底盤	③縁(Ⅲ)	手造の底部。	外輪底方向のハラミガキ調整。他の調査不明。	粗	良	暗 褐色	
Po 5	水田部	蓋		「ハ」の字状に開く縁部及び体部。頂部下半に、新面三角形の凸溝3条を有す。	伴面底方向のハラミガキ調整。他の調査不明。	粗	良	暗 褐色	

表35 水田部出土遺物観察表

MK-SII

MK-SI

MK-SII

MK-SI

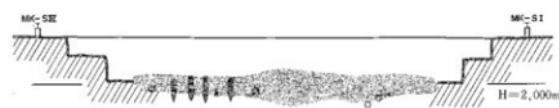
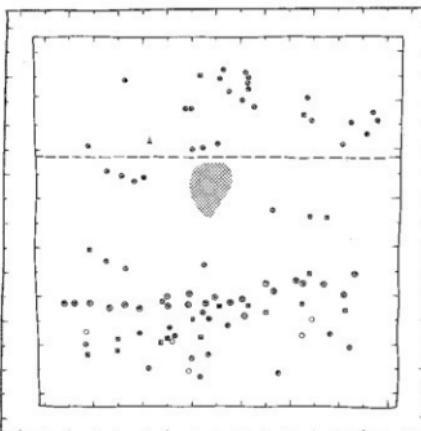
MK-SII

MK-SI

MK-SII

MK-SI

S+1.80



...

MK-SII

MK-SI

H = 2,000m

MK-SII

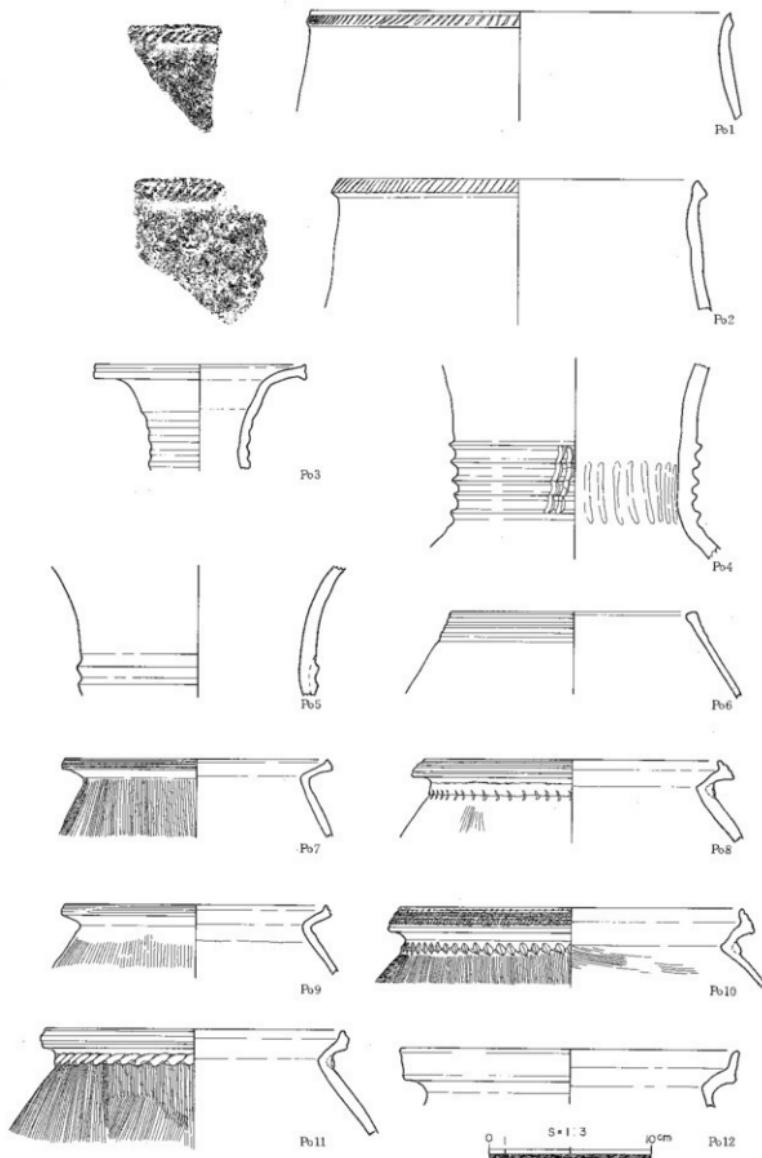
MK-SI

H = 2,000m

3m

擇図305 水田部遺物出土状況及び土層断面図

第7章 遺構外出土の遺物



插図306 遺構外出土遺物実測図

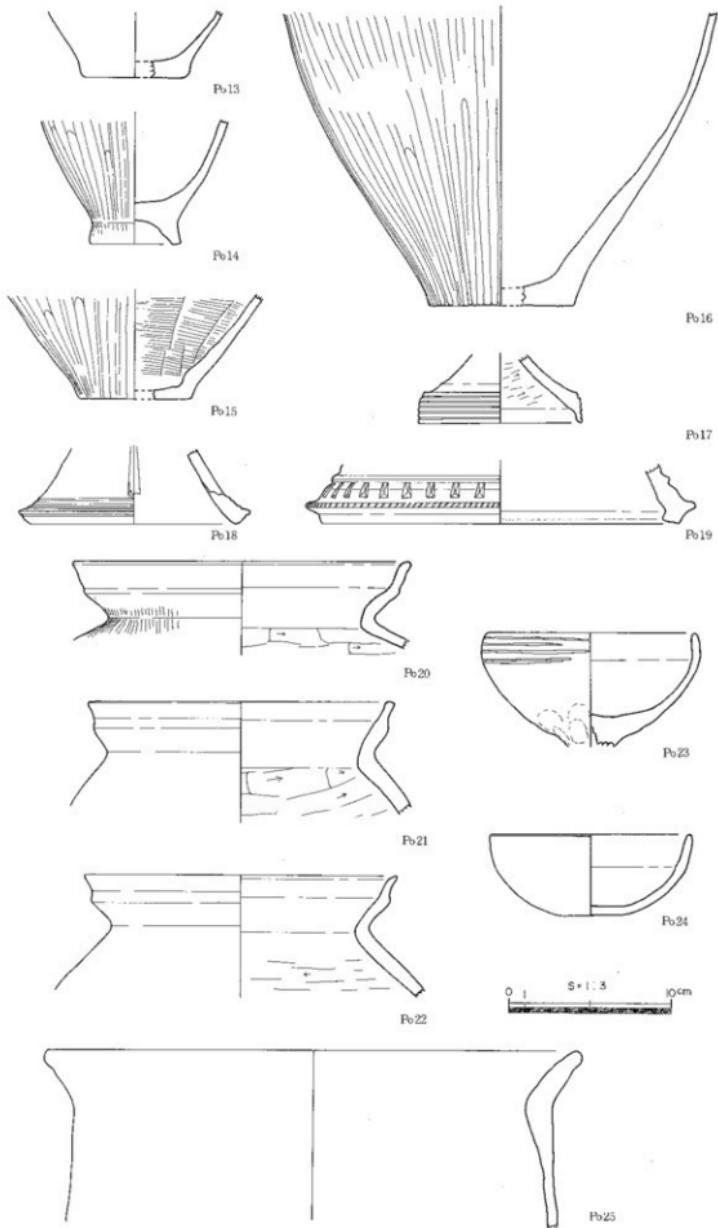
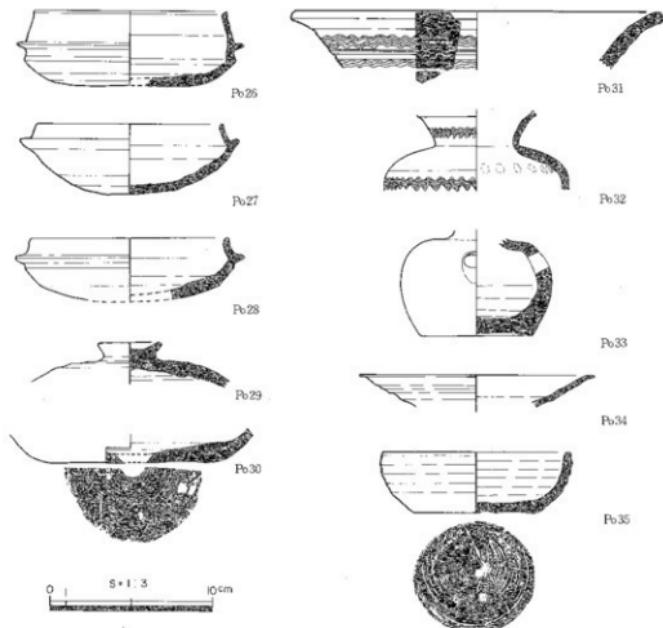


插图307 造柄外出土遗物实测图



挿図308 遺構外出土遺物実測図

調査区域内において、堆積土中に各種遺構に伴わない遺物が相当量出土した。これらの遺物は、縄文土器・弥生土器・土師器・埴輪・須恵器といった土器類の他、石鐵等の石器類、金属器類がみられる。本章では、これらの遺物の中で、図化し得る代表的な例を以下報告したい。

第1節 土器（挿図306・307・308・309、図版111）

- 縄文** いずれも細片である。Po1・2の縄文土器は、相方とも東斜面の標高23m付近で検出された。口縁弥生土器 部に刻目凸帯を持つ、縄文時代晩期の深鉢で、同時期の住居跡等は本遺跡調査区内では検出されなかったが、頂部の落し穴ピットあるいは石鐵との関連を含めて注目される。
- 土師器** 遺構外より出土した土師器（Po19～24）、須恵器（Po25～34）は、古墳・横穴等の遺構と符合し、須恵器 て、古墳時代後期以後の物がその大半を占める。多くは、西斜面の土塁状遺構周辺と、頂部において検出された。
- 埴輪** 西斜面の調査区全域で相当量の埴輪片を検出しておらず、ほとんどが尾根頂部の古墳からの転落と考えられる。Po36・37は朝顔形円筒埴輪であり、頭部凸帯から花部が緩く外反してのびるが、頭部と口縁部の境に凸帯を残している。Po38～45は普通円筒埴輪の口縁で、Po46～48は胸部片である。Po49とPo50は底部再調整の2つのタイプを示し、Po49は底部内面の歪みをヘラで起こすように整形していく、外面ハケメ・内面ヘラケズリを施す。Po50は押圧による再調整を施している。

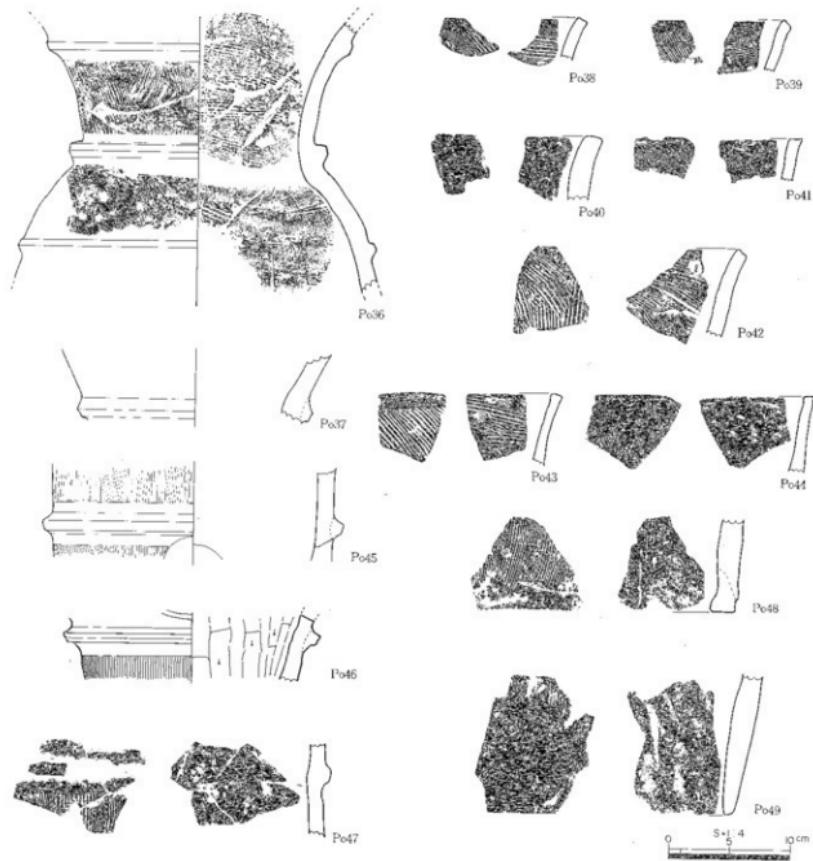


図309 遺構外出土遺物実測図埴輪

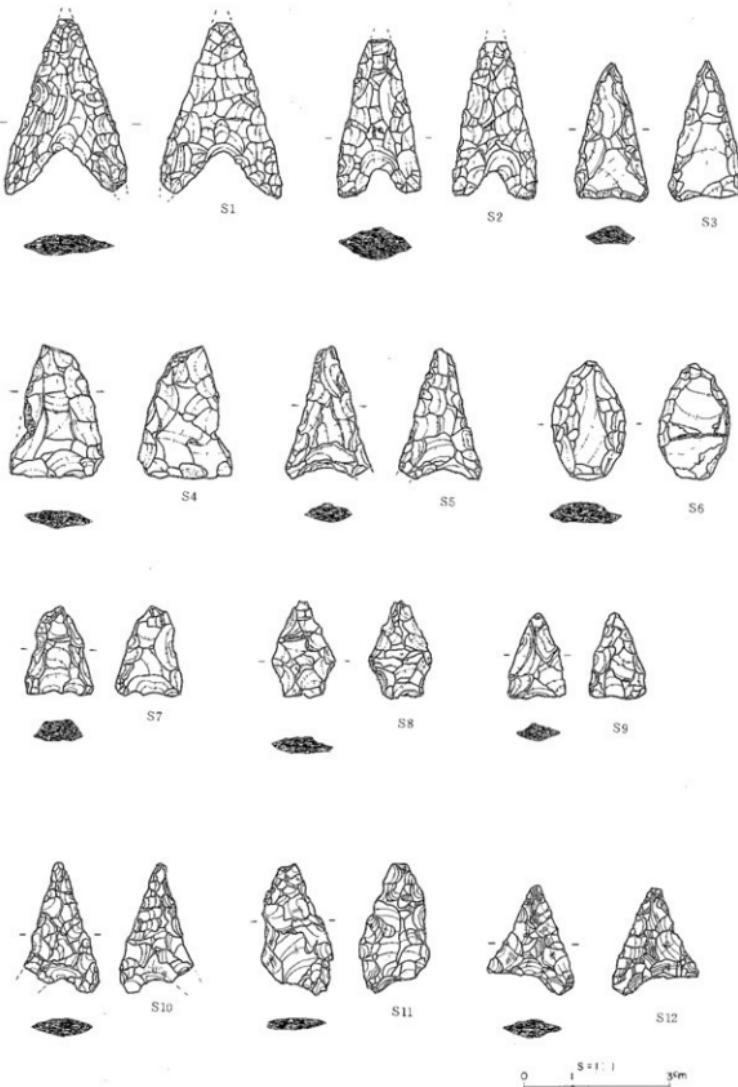
土器番号	出土遺物	器種	主な 特徴 (主な 部品)	形 態	手 法	胎 土	施 成	色 調	備 考
Po36	透焼外 内面埴輪	透彌板 内面埴輪	◎ 1.6(B)	透基部の内面から外反して向外方に開く。口部に凸面をもつ。凸面断面白色。	背面ナメハケの後凸面貼り付けコナ�다。 口部内面コハケ。	密	真	明茶褐色 斑存。	
Po37	透焼外 内面埴輪	透彌板 内面埴輪	◎ 0.8(四)	上方に開く透彌板。内面断面「M」形。		やや粗 砂粒を含む。	不良	淡灰褐色 斑存。	
Po38	透焼外 内面埴輪			巾かたに反する凸縫。端部に凹面をもつ。	内外面ナメハケの後内面コハケ。 「1様 断面ナメハケ」。	密 砂粒を含む。	真	茶褐色 斑片。	
Po39	透焼外 内面埴輪			外側する口縫。端部に平底面をもつ。	内外面ナメハケの後内面コハケ。 口縫内面断面コナ�다。	密 砂粒を含む。	真	明茶褐色 斑片。	
Po40	透焼外 内面埴輪			外反する口縫。端部に平底面をもつ。	内外面ナメハケの後内面コハケ。 「1様 断面ナメハケ」。	密 砂粒を含む。	真	茶褐色 斑片。	
Po41	透焼外 内面埴輪			外縫する口縫。端部に凹面をもつ。	内外面ナメハケの後内面コハケ。 「1様 断面ナメハケ」。	やや粗 砂粒を含む。	やや不良	茶褐色 斑片。	
Po42	透焼外 内面埴輪			外縫する口縫。端部に凹面をもつ。	内外面ナメハケの後内面コハケ。 「1様 断面ナメハケ」。	密 砂粒を含む。	真	灰灰褐色 斑片、斑遺色。	
Po43	透焼外 内面埴輪			外縫する口縫。端部に凹面をもつ。	内外面ナメハケの後内面コハケ。 「1様 断面ナメハケ」。	密 砂粒を含む。	真	淡茶褐色 斑片。	
Po44	透焼外 内面埴輪			巾かたに反する口縫。端部に平底面をもつ。 内面断面コナ�다。	内外面ナメハケ (内面断面の後) 背面内面 コハケ。	やや粗 砂粒を含む。	やや不良	淡灰褐色 斑片。	
Po45	透焼外 内面埴輪		◎ 23.3(W) 0.9	ほぼ直立する脚部。凸面断面合物。円形透 し孔がある。	背面ナメハケの後凸面貼り付けコナ�다。 内面断面コナ�다。	密 砂粒を含む。	真	淡灰褐色 斑片。	
Po46	透焼外 内面埴輪		◎ 23.0(W) 1.0	外縫する口縫。内面断面「M」形。円形透 し孔がある。	背面ナメハケの後凸面貼り付けコナ�다。 内面断面コナ�다。	密 砂粒を含む。	真	淡 褐色 斑片。	
Po47	透焼外 内面埴輪		◎ 0.6	ほぼ直立する脚部。内面断面圓錐形など形。	背面ナメハケの後凸面貼り付けコナ�다。 内面断面コナ�다。	密 砂粒を含む。	真	茶褐色 斑片。	
Po48	透焼外 内面埴輪	◎ 16.2(W)		底部内面に跡がつく。端部には平底面を もつ。厚手。	背面ナメハケ。 内面ヘケズ。	やや粗 砂粒を含む。	真	茶褐色 斑片。	
Po49	透焼外 内面埴輪	◎ 17.0(W)		底部は落くなり、端部に外縫する平底面を もつ。	背面ナメハケの後、ユビ・塑状工具によ る底部の調整。	やや不良 砂粒を含む。	やや不良	淡灰褐色 斑存。	かまどの 可能性もある。

表36 遺構外出土遺物観察表①

第2節 石器・金属器（挿図310・311・312・313、図版112）

I 石器 遺構外出土の石器類には、打製石器として石鎌等が、磨製石器としては大型始刃石斧、砥石等が認められる。

このうち石鎌（S 1～S 16）は、16点を数え、遺跡全域の表土に近い堆積土中より多く検出された。



挿図310 遺構外出土遺物実測図

石材としては黒曜石 7 点、所謂サヌカイト質のもの 4 点であり、形態は平基無茎 4 点、凹基無茎 11 点（五角形状のものを含む）で、有茎のものは出土していない。石器製作過程で生じた剝片が少数であるが検出されている。大型縫刃石斧・乳棒状石斧・砥石等は、その大半が西斜面の堆積土中より出土した。いずれも完形品でない。本遺跡出土石器の石材は未鑑定でその供給地を同定するに至っていない。

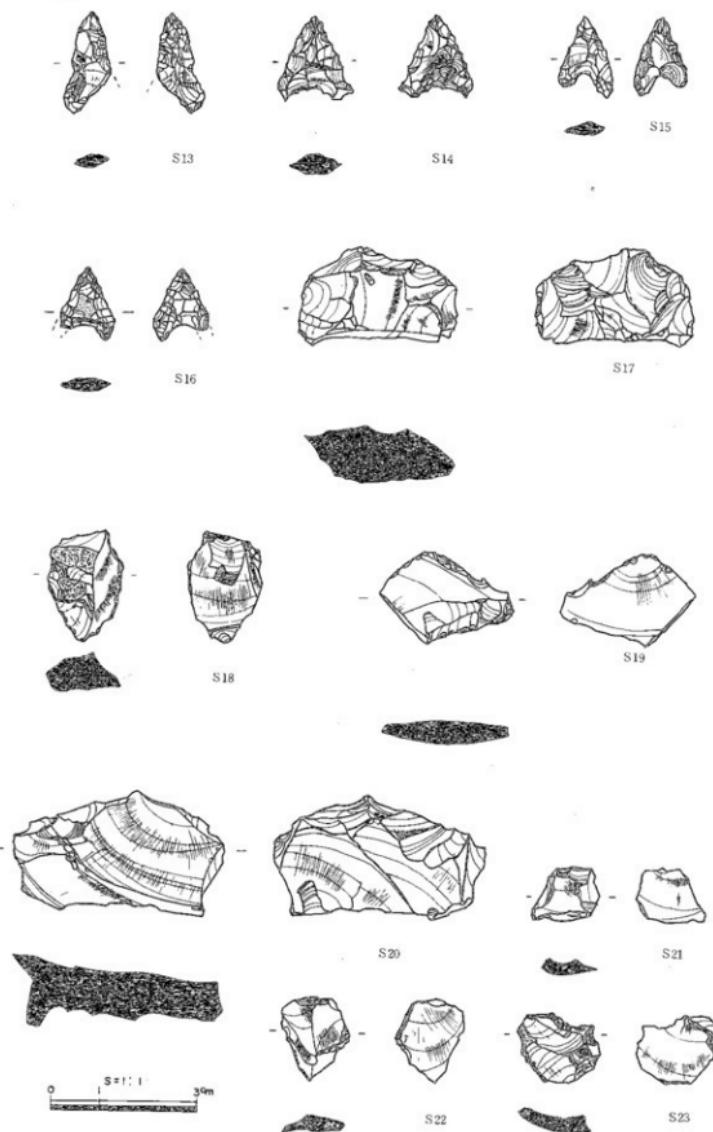


図311 滝洞外出土実物図

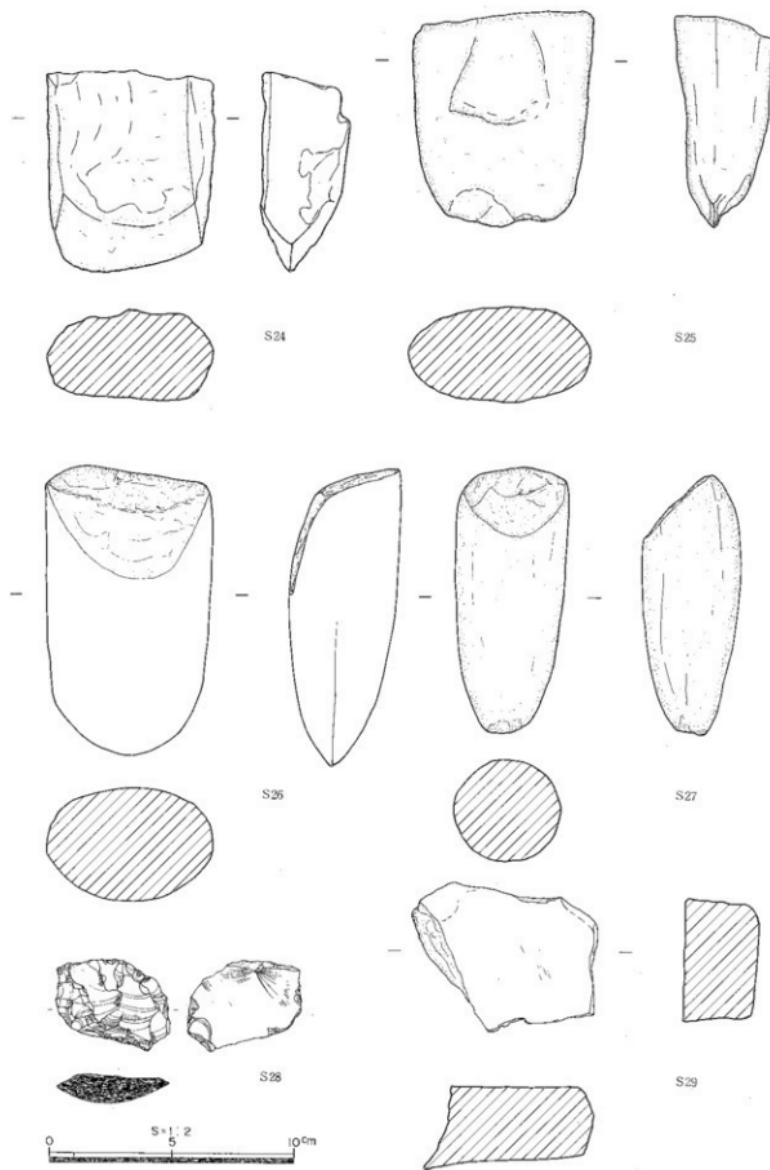
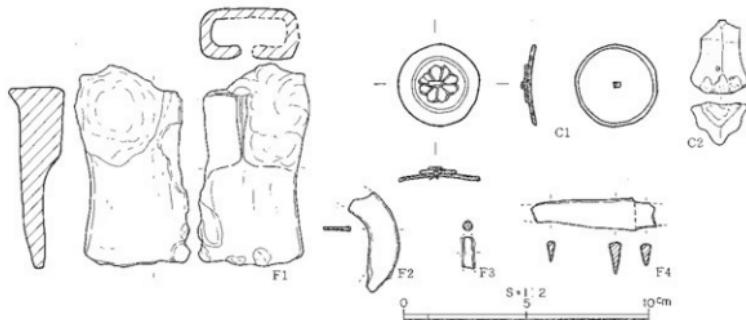


插图312 遗物出土实物实测图

2 金属器 金属器は、西斜面及び頂部を中心に若干量の出土を見た。鉄製品として鉄斧・刀子片・銅片等、銅製品として飾り金具等が検出されている。



插図313 遺構外出土遺物実測図

土器番号	出土遺構	基種	①火 ②器 ③高 ④底 ⑤底 ⑥底	形態	手 法	胎 土	焼成	色 調	備考
Po 1	遺構外	漆鉢	①25.8(里)	口縁部はやや直立気味で、縁部近くに割目が入った凸帯を有する。	内外面調査不詳。	やや粗 砂粒を含む。	やや不良	黄褐色	
Po 2	遺構外	漆鉢	①21.5(里)	口縁部はやや直立気味で、縁部に割目が入った凸帯を有する。	内外面調査不詳。	やや粗 砂粒を含む。	やや不良	黄褐色	
Po 3	遺構外	甕	①21.8(里)	口縁部は大きく外反する。口縁部に1条、底部に4条以上の凹縫めぐらす。	内外面ナガ調査。	やや粗 砂粒を含む。	良	淡黃褐色	
Po 4	遺構外	甕		直立ぎみの頭部。下辺に断面三角形の粘付凸帯をめぐらす。	内外面ナガ調査。内面一部に仰伝窓あり。	密 微砂粒を含む。	良	淡褐色	
Po 5	遺構外	甕		やや外平たる底部。下辺に断面三角形の粘付凸帯2条をめぐらす。	内外面ナガ調査。	密 微砂粒を含む。	やや不良	淡褐色	
Po 6	遺構外	無縁甕	①15.0(里)	「フ」の字状の口縁部を有する。口縁部の内側に4条の凹縫めぐらす。縁部はやや丸い。	外周ヨコナガ調査。内面ナガ調査。	密 微砂粒を含む。	やや不良	暗褐色	
Po 7	遺構外	甕		口縁部がやや肥大し、頭部は「く」の字状に折れ、口縁部部に3条の凹縫めぐらす。縁部は丸い。	外周部以下延方向のハケメ調査。その他ヨコナガ調査。	密 微砂粒を含む。	やや不良	淡褐色	
Po 8	遺構外	甕	①18.0(里)	口縁部がやや肥大し、「く」の字状に折れ、口縁部部に3条の凹縫めぐらす。頭部は丸い。	縁部以下延方向のハケメ調査。その他ヨコナガ調査。	密 微砂粒を含む。	やや不良	淡褐色	
Po 9	遺構外	甕	①16.0(里)	口縁部がやや肥大し、頭部は「く」の字状に折れ、口縁部部に3条の凹縫めぐらす。縁部は丸い。	縁部以下延方向のハケメ調査。その他ナガ調査。	密 微砂粒を含む。	良	淡褐色	
Po 10	遺構外	甕	②21.0(里)	口縁部がやや肥大し、「く」の字状に折れ、口縁部部に3条の凹縫めぐらす。頭部は丸い。	外周部以下延方向のハケメ調査。内面底部以下延方向のハケメ調査後ナガ調査。その他ヨコナガ調査。	密 微砂粒を含む。	良	暗褐色	
Po 11	遺構外	甕	②18.2(里)	口縁部がやや肥大し、「く」の字状に折れ、口縁部部に3条の凹縫めぐらす。頭部は丸い。	縁部以下延方向のハケメ調査。その他ヨコナガ調査。	やや粗 砂粒を含む。	やや不良	淡褐色	
Po 12	遺構外	甕	②21.8(里)	やや外方に開く無底口鉢。	内外面ヨコナガ調査。	密 微砂粒を含む。	不良	淡明黃褐色	
Po 13	遺構外	底部	④ 6.6	平底から体部が外方に開く。	外周部ヘタミガキ調査。内面ナガ調査。	密 微砂粒を含む。	やや不良	暗褐色	
Po 14	遺構外	底部	④ 6.5(里)	中高の底部。体部は外方に開く。	外周部部下延方向のヘタミガキ調査。その他ナガ調査。	密 微砂粒を多く含む。	不良	暗褐色	
Po 15	遺構外	底部	④ 6.8(里)	平底から体部が外方に開く。	外周部部下延方向のヘタミガキ調査。内面体部ハケメ調査。その他ナガ調査。	やや粗 砂粒を含む。	良	外周 淡褐色 内面 淡褐色	
Po 16	遺構外	底部	④ 8.9(里)	平底から体部が外方に開く。	外周部部下延方向のヘタミガキ調査。その他ナガ調査。	密 微砂粒を含む。	良	外周 明茶褐色 内面 淡褐色	
Po 17	遺構外	高环剥落	⑩ 0.0(里)	頭部縁部は直立ぎみに肥大し、同部に5条の洗跡を有する。	頭部内面ヘタケズリ調査。その他ヨコナ ガ調査。	やや粗 砂粒を含む。	良	明茶褐色 赤色塗形(外周)	

插表37 遺構外出土遺物観察表②

小標番号	出土遺物	器種	化文法 ①空 ②有 ③無 ④未定	形 態	手 法	胎 土	成 度	色 調	備 考
Pn18	遺構外	高凸脚部	②.6(回)	「ハ」の字状に開く脚部。足をもつ。 周辺部に3条の凹線をめぐらす。	外面脚部不明。	密 砂粒を含む。	良	灰褐色	
Pn19	遺構外	器底?	③.22.6(回)	「ハ」の字状に開く脚部。3条の凹線をめぐらす。周辺部に近いには3条の凸線をもつ。周辺部は右側部の土被り量が他の部より多くなる。	内外面ナメ調整。	密 砂粒を含む。	良	暗灰褐色	
Pn20	遺構外	底?	③.19.4(回)	器底部は外方に開く。複合部は長い脚が残る。	外面底部以下部分のハケメをナメす。 底部内側横方向へのハケメアリ調整。その他はヨコナメ調整。	やや密 砂粒を含む。	良	灰褐色	
Pn21	遺構外	底?	③.18.8(回)	L字型に外方に開く。複合部は長い脚が残る。 口部は外方に開く。複合部は長い脚が残る。	外面底部以下部分のハケメアリ調整。その他はヨコナメ調整。	密 砂粒を含む。	良	灰褐色	
Pn22	遺構外	底?	③.19.2(回)	L字型に外方に開く。複合部は長い脚が残る。 口部は外方に開く。複合部は長い脚が残る。 口部底部はカット。	底部内側横方向へのハケメアリ調整。その他はヨコナメ調整。	やや密 砂粒を含む。	良	灰褐色	
Pn23	遺構外	高凸	②.4.6(回)	U字型に内側に建する環部。	外面口縁部直角方向へのミダギアリ調整。その他は底部脚部不明。	密 砂粒を含む。	やや不良	灰褐色	
Pn24	遺構外	底?	③.17.4(回) ④.5.0(回)	平底状の体部を持つ。	外面口コナメ調整。	やや密 砂粒を含む。	良	灰褐色	
Pn25	遺構外	底?	③.12.1(回)	立ちきみの体部と外方に開く口縁部。端部は丸みがある。	内外面脚部不明。	密 砂粒を含む。	良	暗褐色	
Pn26	遺構外	盖环の身	③.11.8(回)	なわらかりは内側して上方へのがる。 環部内側に凹部があり、その上に3条の凹線がある。 環部外側に3条の凸線がある。	底部外側内側板へハケメアリ調整。他は内外面脚部ナメ調整。	密 砂粒を含む。	良	灰褐色	
Pn27	遺構外	盖环の身	③.11.5(回) ④.4.4	たちあがりは内側する。たちあがりは環部及び受部は丸くおさめる。	底部外側内側板へハケメアリ調整。他の他はヨコナメアリ調整。	密 砂粒を含む。	良	淡灰黄褐色	ロタリ回転利用。
Pn28	遺構外	高环の身	③.14.1(回)	たちあがりはやや外反ぎみに内側する。たちあがりは環部及び受部は丸くおさめる。	底部外側内側板へハケメアリ調整。	密 砂粒を含む。	良	灰褐色	
Pn29	遺構外	底?		火井頭部に中央部の凹みつまみをもつ。	天井部外側残存部分内側へハケメアリ調整。 その他の内側アリ調整。	密 砂粒を含む。	良	淡青灰色	
Pn30	遺構外	底部?	④.9.7(回)	平底の底部。	底部周縁部切り痕が残る。その他の脚部不明。	密 砂粒を含む。	良	暗褐色	
Pn31	遺構外	底?	③.22.3(回)	大きく外反する口縁部。断面はやや丸い。 口縁部は、縁部の間に1条の凸線をめぐらし、その下に3条の凹線をもつ。	外面口縫トナメ調整。	密 砂粒を含む。	良	青灰色	
Pn32	遺構外	底?		口縁部は、縁部の間に1条の凸線をもつ。底部は口縫部の間に3条の凹線をもつ。	内側面脚部ナメ調整。脚部内面一面に付加。	密 砂粒を含む。	良	深青褐色、 外側に灰褐色 付着。	
Pn33	遺構外	底?	④.9.2	脚部は丸く底面は中心にくぼむ。底部は中止部でなく、割離部上半に円柱を認められる。	内側面脚部ナメ調整。脚部内面一面に付加。	密 砂粒を含む。	良	灰白色	
Pn34	遺構外	底?	③.14.5(回) ③.16.0(回) ③.3.8 ③.7.5	大きさ向外方に開く口縁部。断面は丸い。 内部底面に直立する1脚部。端部は丸い。 底部は下に凹。	内側面脚部ナメ調整。その他の内側アリ調整。	密 砂粒を含む。	良	暗青灰色	
Pn35	遺構外	底?		内側底面に直立する1脚部。端部は丸い。 底部は下に凹。	底部外側脚部あり直立脚が残る。その他はヨコナメアリ調整。	密 砂粒を含む。	良	淡青灰色	

No	形 態	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	石 材	備 考
S 1	凹基無茎石鏡	(36.1)	25.2	3.9	サスカイト	先端部欠損。1.9%。
S 2	凹基無冬石鏡	(32.0)	17.4	6.4	サスカイト	先端部欠損。2.4%。
S 3	平基無茎石鏡	28.5	15.1	3.6	サスカイト	1.5%。
S 4	平基無茎石鏡	(27.2)	19.5	3.7	サスカイト	先端部欠損。1.3%。
S 5	凹基無茎石鏡	(27.1)	(17.6)	3.8	サスカイト	先端及び下端部欠損。1.2%。
S 6	凹基石鏡	24.6	15.4	4.0	サスカイト	0.8%。
S 7	平基無茎石鏡	18.0	13.9	4.1	サスカイト	0.9%。
S 8	凹基無茎石鏡	(20.4)	13.1	3.0	サスカイト	先端部欠損。0.8%。
S 9	平基無茎石鏡	17.7	12.1	2.3	サスカイト	0.6%。
S 10	凹基無茎石鏡	26.9	(15.3)	3.3	黒曜石	下端部欠損。1.1%。
S 11	凹基無茎石鏡	(26.8)	(14.9)	2.1	黒曜石	先端及び下端部欠損。1.0%。
S 12	凹基無茎石鏡	(22.7)	(17.9)	3.5	黒曜石	先端及び下端部欠損。0.9%。
S 13	凹基無茎石鏡	20.9	(7.5)	3.1	黒曜石	下端部欠損。0.4%。
S 14	凹基無茎石鏡	17.3	15.8	4.1	黒曜石	0.6%。
S 15	凹基無茎石鏡	16.9	(15.2)	2.9	黒曜石	下端部欠損。0.4%。
S 16	凹基無茎石鏡	15.2	(11.2)	2.5	黒曜石	下端部欠損。0.3%。
S 17	剥片	32.5	18.7	11.9	黒曜石	
S 18	剥片	23.0	15.7	7.6	黒曜石	
S 19	剥片	27.9	19.0	4.8	黒曜石	
S 20	剥片	43.3	23.9	14.6	黒曜石	
S 21	剥片	17.3	13.2	3.0	黒曜石	
S 22	剥片	12.2	12.1	2.2	黒曜石	
S 23	剥片	15.6	14.1	3.9	黒曜石	
S 24	大型始刃石斧	(81.9)	68.4	(36.1)		基部欠損。
S 25	大型始刃石斧	(87.3)	73.1	40.2		基部欠損。
S 26	大型始刃石斧	(115.5)	67.3	46.4		基部欠損。
S 27	乳拂状石斧	109.0	45.5	42.0		
S 28	剥片	45.4	34.1	11.3	黒曜石	
S 29	砾石?	(77.7)	(58.1)	31.4		-一部生存。 ()内は現存数値

No	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	形 態
F 1	7.2	4.3	2.3	鉄斧。長方形に近いがややいびつである。盤は角の丸い長方形を呈する。
F 2	(4.2)	(1.2)	0.2	鉄(破片)。倒卵形を呈する。
F 3	(1.3)	(0.5)	0.5	鐵の一部か?。
F 4	(4.9)	(1.3)	0.6	刀子。両開形態を呈する。
C 1	3.3	3.3	0.6	円形の突起金具。11.0g。
C 2	(3.0)	(2.3)	1.6	獸足形の脚か。32.45g。

插表38 遺構外出土遺物観察表③

第8章 まとめ

意義

東宗像遺跡の発掘調査は、一般国道9号米子バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査。として、1万m²余の調査面積を2年度にわたって行ない、その結果縄文時代晩期から弥生・古墳時代及びそれ以後に至る各時代の資料を多数得ることができた。特に丘陵斜面部における住居跡や横穴の検出は、斜面部分調査の重要性を示唆し、「福市」「青木」など遺跡の密集する米子市南郊地域の遺跡立地等を考察する上でも意義深いものといえよう。

検出遺構としては、竪穴住居跡12(重複を含む)、掘立柱建物跡5、段状遺構17、溝状遺構5、道路状遺構3、土壙20、土壙状遺構1、ピット群の他に、古墳10基、横穴19基、古墳・横穴以外の埋葬施設(石室・土壙墓等)9基を数える。

集落

集落跡は主に西側の斜面で、弥生時代から奈良時代以降までの遺構が検出された。竪穴住居跡は全て斜面を抉り取る様にして造成しているのであるが、この内注目されるのは磨製石器等を出土し遺物の量が他に優る第1号竪穴住居跡、斜面を2段造成する第6号竪穴住居跡である。段状遺構は本遺跡においては、竪穴住居跡の数を抜き、弥生時代中期後葉と奈良時代に集中する。本文において段状遺構の性格、用途等に言及できなかったが、弥生時代中期後葉のものにおいては、同時期の竪穴住居跡が併存することから日常生活を営む所謂住いではなかったものと思われる(第8号段状遺構は作業場とした)。掘立柱建物跡は5棟検出されたのであるが、全て斜面を削り平坦面を造成した後に柱穴を掘り込むという形態をとる。斜面地における掘立柱建物の傾向であろうか。その他貯蔵穴等が検出され斜面地における集落の一形態が示された遺跡であると思われる。

古墳

東宗像古墳群A支群とした13基の調査を行い、10基について発掘調査を実施した。A支群は全長37mの前方後円墳である2号墳を盟主墳とし、これと径5~15mの円墳群で構成される6世紀代の後期群集墳である。埋葬施設は木棺直葬の4号墳を除いて箱式石棺と横穴式石室であるが、6・7号墳の横穴式石室は竪穴系石室の小口部に横口施設と墓道を設けた所謂「竪穴系横口式石室」であり、5号墳では竪穴系横口式石室の影響を受けたと考えられる「横口式箱式石棺」が発見された。これらは北部九州との石室構築技術における交流を再認識させるとともに、山陰における横穴式石室の受容を考える場合の好資料となると思われる。発掘調査した10基中、4基は新発見の古墳である。これらは径5~8m前後の小円墳であり、ほとんど墳丘らしい墳丘をもたず、埋葬施設も箱式石棺が多い。古墳群の中での前方後円墳と円墳の差異に加えて、円墳群の中でも規模と埋葬施設の異なる2群を抽出できるならば、それが階層差と捉えることができるのか否かを明らかにすることが今後の課題といえよう。

横穴

東西両斜面において、計19基の横穴を検出し調査を行なった。調査された横穴は、その規模をはじめとして、天井形態、副葬品といった様々な点でバラエティに富み、構築された年代も約200年の長さにわたる。また19基のうち11基は所謂小横穴であり、中でも階段状の段がついた1号道路状遺構に伴う5基の小横穴(西10・西11・西12・西13・西14号横穴)は、小横穴の新たな存在形態として特筆に値する。こうした存在をも含め、所謂小横穴の概念規定とともに、その性格付けが今後の問題点といえよう。

おわりに

以上の如く、資料的成果をあげた東宗像遺跡の調査ではあったが、その調査範囲は道路建設予定幅のみであり、また発掘担当調査員の力量不足に加えて、限定された短い時間内での報告書作成ということで、資料整理に不充分の箇所も多い。このようなことから、この地における当該時期の社会・文化といった様相は語るべくもなく、周辺地域はもちろん、他地方をも含めた巨視的な観点でこれを語

る必要があり、東宗像遺跡の歴史的意義もこの中に浮かび上がろう。

酷暑の中、北風が吹きすさぶ雪の中、我々調査員の下で黙々と、時にはにこやかに発掘作業に従事された地元のおじさん・おばさん・アルバイト学生諸君に謝意を表し、この東宗像遺跡の調査が、山陰地方古代史の解明に役立つことを期待して結語したい。

註1　土生田純之「伯耆における横穴式石室の受容」『古文化談叢』7号　九州古文化研究会　1980年